新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

矢　野　遺　跡

遺　構　編（第１分冊）

2010 年 3 月

島根県出雲県土整備事務所
出　雲　市　教　育　委　員　会

上　矢野遺跡全景E区からA区を望むH20年度調査時（西から）
下　矢野遺跡全景A区からE区を望むH20年度調査時（東から）

上　矢野遺跡全景北から市街を望むH20年度調査時
下　自然河道H18年度調査時（南から）

上　自然河道足跡（北東）
下　自然河道土層断面（東西ライン）

Ⅰ・Ⅱ層出土弥生前期土器

上　Ⅴ層出土弥生前期大型・超大型壺
下　Ⅱ層出土弥生終末～古墳初頭超大型壺

弥生石製品

弥生～古墳前期木製品

古代の赤彩土師器

序

出雲市教育委員会では，島根県出雲県土整備事務所から委託を受け，平成13年度から平成20年度の８年間，新内藤川床上浸水対策特別緊急事業により河川改修工事予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。そして，その調査の記録を，本書にまとめて刊行することになりました。

矢野遺跡は縄文時代から近世に及ぶ集落遺跡として，断片的ではありますが古くから出雲平野の拠点集落として知られていました。そして，それを裏付けるように，このたびの発掘調査では膨大な量の建物跡などの遺構や各時代の遺物を確認しました。これらの資料により，矢野遺跡に住まいした先人たちの，原始から今日までの生活の痕跡が明らかになりました。それと同時に，この出雲地域の歴史を解明していく上で，貴重な資料を得ることができました。

こうした調査成果が，この地域の埋蔵文化財に対する理解と関心を高め，また歴史学習の助けとなれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査及び本書の作成にあたりご理解とご協力を賜りました地元の皆様，島根県出雲県土整備事務所をはじめ，関係各方面の方々に対し心からお礼申し上げます。

平成22年３月

出雲市教育委員会

教育長　中　尾　一　彦

例　言

1．本書は，島根県出雲県土整備事務所（平成13～18年度は島根県出雲土木建築事務所）の委託を受け，出雲市が平成13～21年度に実施した矢野遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，下記の期間において実施した。

平成13年（2001）７月６日～平成20年（2008）11月27日

3．発掘調査を実施した地番は，次のとおりである。

島根県出雲市矢野町７１６番地ほか

4．調査は次のとおり実施した。

平成13年度（13区）…（報告書Ｅ区）

調査主体　出雲市教育委員会

＜事務局＞　板倉　優（出雲市文化企画部芸術文化振興課長）

川上　稔（　同　文化財室長）

片倉愛美（　同　主事）

＜現地調査，図面・遺物整理＞

調査期間　平成13年（2001）７月６日～12月５日

調査準備及び整理期間　平成13年（2001）４月１日～平成14年（2002）３月31日

調査面積　1,860㎡

調査員　片倉愛美（出雲市文化企画部芸術文化振興課主事）

調査補助員　佐藤三鈴（　同　臨時職員）

宮崎　綾（　同　）

伊藤晶子（　同　）

平成14年度（14－１・２区）…（報告書Ｂ区）

調査主体　出雲市教育委員会

＜事務局＞　板倉　優（出雲市文化企画部芸術文化振興課長）

川上　稔（　同　文化財室長）

戸崎愛美（　同　主事）

＜現地調査，図面・遺物整理＞

調査期間　平成14年（2002）５月29日～平成15年（2003）２月25日

整理期間　平成14年（2002）４月１日～平成15年（2003）３月31日

調査面積　1,740㎡

調査指導　椿　真治（島根県教育庁文化財課文化財保護主事）

調査員　戸崎愛美（出雲市文化企画部芸術文化振興課文化財室主事）

園山　薫（　同　嘱託員）

調査補助員　高橋亜紀（　同　臨時職員）

滝尻幸平（　　同　　）

平成15年度（15－１～３区）…（報告書Ｄ・Ｅ区）

調査主体　出雲市教育委員会

＜事務局＞　板倉　優（出雲市文化企画部芸術文化振興課長）

川上　稔（　　同　　文化財室長）

戸崎愛美（　　同　　主事）

＜現地調査，図面・遺物整理＞

調査期間　平成15年（2003）７月３日～平成16年（2004）３月17日

整理期間　平成15年（2003）４月１日～平成16年（2004）３月31日

調査面積　2,580㎡

調査指導　原田敏照（島根県教育庁文化財課文化財保護主事）

池淵俊一（　　同　　）

中村唯史（島根県立三瓶自然館指導員）

西田良平（鳥取大学工学部教授）

調査員　戸崎愛美（出雲市文化企画部芸術文化振興課文化財室主事）

園山　薫（　　同　　嘱託員）

調査補助員　高橋亜紀（　　同　　臨時職員）

櫻井康行（　　同　　）

平成16年度（16－１・２区）…（報告書Ｃ・Ｅ区）

調査主体　出雲市教育委員会

＜事務局＞　板倉　優（出雲市文化企画部芸術文化振興課長）

川上　稔（　　同　　文化財室長）

戸崎愛美（　　同　　副主任主事）

＜現地調査，図面・遺物整理＞

調査期間　平成16年（2004）６月９日～平成17年（2005）２月25日

整理期間　平成16年（2004）４月１日～平成17年（2005）３月31日

調査面積　3,300㎡

調査指導　丹羽野裕（島根県教育庁文化財課主幹）

東森　晋（　　同　　文化財保護主事）

中川　寧（島根県埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）

深田　浩（島根県古代文化センター主任研究員）

中村唯史（島根県立三瓶自然館指導員）

調査員　戸崎愛美（出雲市文化企画部芸術文化振興課文化財室副主任主事）

園山　薫（　　同　　嘱託員）

調査補助員　佐藤睦子（　　同　　臨時職員）

櫻井康行（　　同　　）

＊平成17年（2005）３月22日に新設合併（出雲市）

平成17年度（16－２区，17－１～３区，18－１区）…（報告書Ａ～Ｄ区）

調査主体　出雲市教育委員会

＜事務局＞　神門　勉（出雲市文化観光部文化財課長）

川上　稔（　　同　　主査）

高橋智也（　　同　　副主任）

＊平成17年６月より文化企画部から文化観光部に名称変更

＜現地調査，図面・遺物整理＞

調査期間　　平成17年（2005）４月12日～平成18年（2006）３月30日

整理期間　　平成17年（2005）４月１日～平成18年（2006）３月31日

調査面積　　5,160㎡

調査指導　　原田敏照（島根県教育庁文化財課文化財保護主事）

東森　晋（　　同　　）

田中義昭（島根考古学会会長）

井上貴央（鳥取大学医学部教授）

山田康弘（島根大学法文学部助教授）

調査員　　高橋智也（出雲市文化観光部文化財課副主任）

園山　薫（　　同　　嘱託員）

調査補助員　佐藤睦子（　　同　　臨時職員）

櫻井康行（　　同　　）

平成18年度（17－３区，18－１～６区）…（報告書Ｂ・Ｄ区）

＊17－３区・18－１区は前年度より継続

調査主体　出雲市教育委員会

＜事務局＞　石飛幸治（出雲市文化観光部文化財課長）

川上　稔（　　同　　主査）

花谷　浩（　　同　　学芸調整官）

高橋智也（　　同　　主事）

＜現地調査，図面・遺物整理＞

調査期間　　平成18年（2006）４月７日～平成19年（2007）２月28日

整理期間　　平成18年（2006）４月１日～平成19年（2007）３月31日

調査面積　　3,260㎡

調査指導　　勝部智明（島根県教育庁文化財課文化財保護主事）

田中義昭（島根考古学会会長）

山田康弘（島根大学法文学部助教授）

調査員　　高橋智也（出雲市文化観光部文化財課主事）
園山　薫（　　同　　嘱託員）
調査補助員　佐藤睦子（　　同　　臨時職員）
錦田充子（　　同　　）

平成19年度（19－１区）…（報告書Ｂ区）

調査主体　出雲市教育委員会

＜事務局＞　花谷　浩（出雲市文化観光部次長　兼　同部文化財課学芸調整官）
石飛幸治（出雲市文化観光部文化財課長）
川上　稔（　　同　　主査）
景山真二（　　同　　係長）
遠藤正樹（　　同　　主事）

＜現地調査＞

調査期間　　平成19年（2007）６月11日～平成20年（2008）１月31日
調査面積　　1,800㎡
調査指導　　東森　晋（島根県教育庁文化財課文化財保護主事）
田中義昭（島根考古学会会長）
中村唯史（島根県立三瓶自然館指導員）
調査員　　遠藤正樹（出雲市文化観光部文化財課主事）
調査補助員　成相幸子（　　同　　臨時職員）

＜図面・遺物整理＞

整理期間　　平成19年（2007）４月１日～平成20年（2008）３月31日
調査指導　　東森　晋（島根県教育庁文化財課文化財保護主事）
中川　寧（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター文化財保護主任）
稲田陽介（　　同　　臨時職員）
田中義昭（島根考古学会会長）
中村唯史（島根県立三瓶自然館指導員）
調査員　　園山　薫（出雲市文化観光部文化財課嘱託員）
調査補助員　佐藤睦子（　　同　　臨時職員）
藤田大輔（　　同　　）

平成20年度（20－１・２区）…（報告書Ａ・Ｄ区）

調査主体　出雲市教育委員会

＜事務局＞　花谷　浩（出雲市文化企画部次長　兼　文化財課学芸調整官　兼　出雲弥生の森博物館創設準備室長）
石飛幸治（出雲市文化企画部文化財課長）
景山真二（　　同　　係長）

遠藤正樹（　　同　　主事）

＜現地調査＞

調査期間　平成20年（2008）５月１日～11月27日

調査面積　860㎡

調査指導　林　健亮（島根県教育庁文化財課主幹）

池淵俊一（　　同　　企画員）

調査員　遠藤正樹（出雲市文化企画部文化財課主事）

調査補助員　坂根健悦（　　同　　臨時職員）

＜図面・遺物整理＞

調査期間　平成20年（2008）４月１日～平成21年（2009）３月31日

調査指導　守岡正司（島根県教育庁文化財課専門研究員）

米田克彦（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター文化財保護主任）

石丸恵利子（大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　総合地球環境学研究所　プロジェクト研究員）

下條信行（愛媛大学法文学部名誉教授）

竹広文明（広島大学文学部准教授）

調査員　坂本豊治（出雲市文化企画部文化財課主事）

遠藤正樹（　　同　　）

園山　薫（　　同　　嘱託員）

阿部智子（　　同　　）

調査補助員　佐藤睦子（　　同　　臨時職員）

片寄雪美（　　同　　）

山口智子（　　同　　）

藤田大輔（　　同　　）

坂根健悦（　　同　　）

平成21年度

調査主体　出雲市教育委員会

＜事務局＞　花谷　浩（出雲市文化企画部次長　兼　文化財課学芸調整官　兼　出雲弥生の森博物館創設準備室長）

石飛幸治（出雲市文化企画部文化財課長）

景山真二（　　同　　係長）

遠藤正樹（　　同　　主事）

＜報告書作成・図面・遺物整理＞

調査期間　平成21年（2009）４月１日～平成22年（2010）３月31日

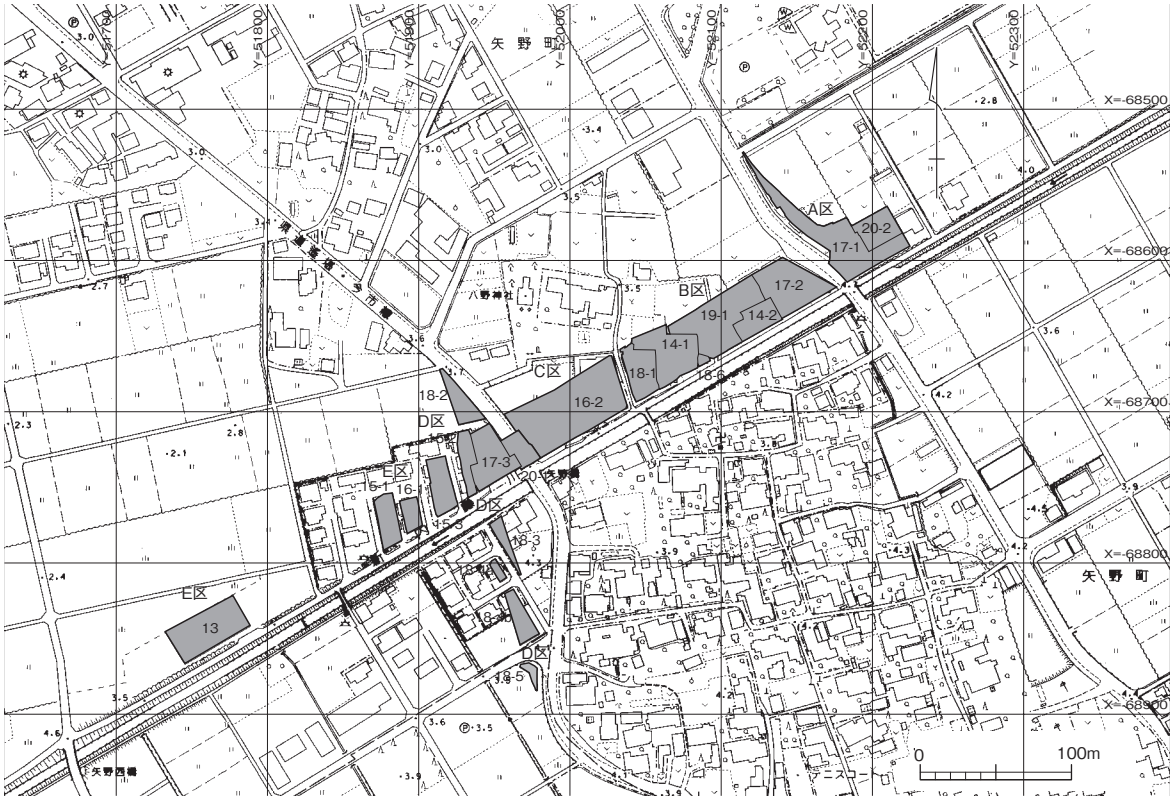
調査指導　田崎博之（愛媛大学法文学部教授）

	米田克彦（岡山県教育庁文化財課主任）	
調査員	坂本豊治（出雲市文化企画部文化財課主事）	
	原　俊二（	同　主任）
	園山　薫（	同　嘱託員）
	阿部智子（	同　）
調査補助員	佐藤睦子（	同　臨時職員）
	片寄雪美（	同　）
	勝部真紀（	同　）
	和田みゆき（	同　）
	山口智子（	同　）

5．調査協力

島根県埋蔵文化財調査センター，島根県立古代出雲歴史博物館，島根県古代文化センター，松江市教育委員会，鹿島歴史民俗資料館，雲南市教育委員会，山口市教育委員会，津和野町教育委員会，青島　啓，阿部賢治，内田律雄，扇崎　由，大賀克彦，勝部智明，川原和人，北島大輔，小林謙一，是田　敦，坂本　稔，澤田正明，柴崎晶子，高橋智也，寺井　誠，永嶋正春，仁木　聡，濵田竜彦，原田　幹，廣江耕史，深澤芳樹，西尾克己，錦田充子，増田浩太，松本岩雄，宮田佳樹，三吉秀充，守岡正司，藁科哲男

6．本書に記載する調査区は，調査時の調査区を下記のとおり整理している。



矢野遺跡調査区図

A区･･･（17－１区，20－２区）

B区･･･（14－１・２区，17－２区，18－１・６区，19－１区）

C区･･･（16－２区）

D区･･･（15－２・３区，17－３区，18－２～５区，20－１区）

E区･･･（13区，15－１区，16－１区）

7．本書で使用した遺構略号は，次のとおりである。

ＳＢ－建物跡，ＳＡ－柱穴列，ＳＫ－土坑，ＳＥ－井戸，ＳＤ－溝，ＳＸ－墓･足跡･大型土坑･その他，Ｐ－ピット，ＳＲ－自然流路

8．本書で，示した方位は真北を示す。座標は世界測地系第３座標系に基づくものである。標高は海抜高を示す。

9．本書掲載の図の中で，調査区全体図については，図面上側に8,000分の１の略図を付した。略図中のアミカケは報告する遺構の調査区（Ａ～Ｅ区）を示し，掲載部分を枠で示した。また，本書は遺構を時期毎に報告し，該当時期の遺構をアミカケで表示した。

10. 時期区分は，縄文時代晩期，弥生時代前期，弥生時代中期，弥生時代終末期～古墳時代前期，古墳時代中期～終末期（５世紀～７世紀頃），古代（８～12世紀頃），中世（13～15世紀頃），中世末～近世前半（16世紀～17世紀頃），近世以降（18世紀以降）としている。遺物の時期決定については以下の文献を参考にした。

参考文献

出雲市教育委員会2009『築山遺跡Ⅲ』県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№２

大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集

坂本豊治2008「出雲平野における凹線文導入期の土器とその背景」『地域・文化の考古学』下條信行先生退任記念論文集

島根県教育委員会1999『古志本郷遺跡Ⅰ　斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』

島根県教育委員会2006『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）　国道431号線道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』

島根県教育委員会2008『九景川遺跡』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

乗岡実2000「中近世の備前焼擂鉢の編年案」『第２回中近世備前焼研究会』

濵田竜彦2005「山陰地方における縄文時代晩期土器について」『縄文時代晩期の山陰地方』

兵庫埋蔵銭調査会1996『日本出土銭総覧』1996年版

松本岩雄1992「７出雲・隠岐地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』

松山智弘1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』第８集

松山智弘2000「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌』第17集

横田賢次郎，森田勉1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４

11. 大量の遺物の器種認定は以下の方々に依頼しご指導を賜った。

打製石器（竹広文明，稲田陽介），獣骨遺存体（石丸恵利子），玉製品（米田克彦），陶磁器（阿部賢治，西尾克己，守岡正司）

なお，遺物番号の表示は，第160図１となるが，略して「160－１」と示す。

12. 本書掲載の遺物実測図については，以下のものが作成した。

伊藤，遠藤，片寄，勝部，坂根，櫻井，佐藤美，佐藤睦，園山，高橋亜，高橋智，滝尻，戸崎，成相，錦田，藤田，宮崎，山口，和田，阿部賢治，石倉ひろみ，糸賀伸文，稲田陽介，井上喜代女，岩谷雅美，児玉達也，澤田正明，田中裕貴，田中義昭，福原恭子，藤原　舞，米田美江子，渡邊真二が作成したほか，一部については株式会社トーワエンジニアリング，フジテクノ有限会社に作成を委託した。

13. 遺物整理及び報告書作成にあたっては，以下のものが協力した。

阿部賢治，阿部優紀，荒木恵理子，飯國陽子，石倉ひろみ，石橋陽子，板倉セツ子，糸賀伸文，稲田陽介，井上喜代女，岩崎晶美，岩崎和子，岩谷雅美，鵜口令子，遠藤恭子，落部実加，加藤怜美，川谷真弓，岸　玉恵，澤田正明，須山智佳子，妹尾順子，田中裕貴，田中義昭，田部美幸，中島和恵，永田節子，吹野初子，福原恭子，藤原　舞，細野陽子，南奈保子，矢田愛子，渡邊真二

14. 遺物の写真撮影は坂本豊治（出雲市文化財課主事）が主に行い，一部は杉本和樹（西大寺フォト）に委託した。

15. 樹種鑑定は株式会社吉田生物研究所，文化財調査コンサルタント株式会社に，石材鑑定は中村唯史（島根県立三瓶自然館）に依頼した。

木製品は高級アルコール法で保存処理を行った。

16. 本遺跡の出土遺物及び実測図，写真は出雲市教育委員会で保管している。

17. 本書の編集は花谷浩（文化企画部次長）の指導のもと坂本が行った。なお，報告書の作成は縄文時代晩期～古墳時代までを坂本と阿部智子が，古代から近世までを園山と原が主に担当した。

目　次

第１章　遺跡の位置と環境 ……（曽田）…… 1
　第１節　遺跡の地理的環境 …… 1
　第２節　遺跡の歴史的環境 …… 2
第２章　過去の調査 ……（遠藤）…… 7
第３章　調査に至る経緯と経過 ……（遠藤）…… 11
　第１節　調査に至る経緯 …… 11
　第２節　調査の経過 …… 11
第４章　調査の概要と基本層序 ……（園山）…… 13
　第１節　グリッドの設定 …… 13
　第２節　調査の概要 …… 13
　第３節　基本層序と自然河道の層序 …… 20
第５章　遺構の詳細 …… 23
　第１節　縄文時代晩期の遺構 ……（阿部）…… 23
　第２節　弥生時代前期の遺構 ……（〃）…… 25
　第３節　弥生時代中期の遺構 ……（〃）…… 41
　第４節　弥生時代終末～古墳時代前期の遺構 ……（〃）…… 44
　第５節　古墳時代中期～終末期の遺構 ……（〃）…… 57
　第６節　古代の遺構 ……（園山）…… 76
　第７節　中世の遺構 ……（〃）…… 123
　第８節　中世末～近世前半の遺構 ……（〃）…… 153
　第９節　近世以降の遺構 ……（〃）…… 175
　第10節　時期不明の遺構 ……（〃）…… 185
第６章　遺構出土遺物 …… 189
　第１節　縄文時代晩期の遺構出土遺物 ……（坂本）…… 189
　第２節　弥生時代前期の遺構出土遺物 ……（〃）…… 189
　第３節　弥生時代中期の遺構出土遺物 ……（〃）…… 233
　第４節　弥生時代終末～古墳時代前期の遺構出土遺物 ……（〃）…… 236
　第５節　古墳時代中期～終末期の遺構出土遺物 ……（〃）…… 254
　第６節　古代の遺構出土遺物 ……（原）…… 267
　第７節　中世の遺構出土遺物 ……（〃）…… 278
　第８節　中世末～近世前半の遺構出土遺物 ……（〃）…… 287
　第９節　近世以降の遺構出土遺物 ……（〃）…… 290

挿　図　目　次

第１図　矢野遺跡の位置 …… 1
第２図　矢野遺跡周辺の集落遺跡 …… 2
第３図　矢野遺跡の位置と周辺の遺跡１ …… 4
第４図　矢野遺跡の位置と周辺の遺跡２ …… 5
第５図　矢野遺跡周辺図　平成21年度版 …… 8
第６図　矢野遺跡周辺図　平成13年度版 ……11
第７図　矢野遺跡調査区配置図 ……14
第８図　A区全体図 ……15
第９図　B区全体図西半分 ……16
第10図　C区全体図 ……16
第11図　B区全体図東半分 ……17
第12図　D区全体図北半分 ……18
第13図　D区全体図南半分 ……19
第14図　E区全体図 ……20
第15図　基本層序　A～E区　東西１ ……20
第16図　基本層序　A～E区　東西２ ……21
第17図　基本層序　D区自然河道　南北 ……22
第18図　縄文晩期　B区遺構図 ……24
第19図　弥生前期　B区土坑実測図１ ……25
第20図　弥生前期　B区土坑実測図２ ……26
第21図　弥生前期　B区土坑実測図３ ……28
第22図　弥生前期　B区遺構図１ ……30
第23図　弥生前期　B区遺構図２ ……31
第24図　弥生前期　C区遺構図１ ……32
第25図　弥生前期　C区遺構図２ ……33
第26図　弥生前期　C区土坑実測図１ ……34
第27図　弥生前期　C区土坑実測図２ ……35
第28図　弥生前期　D区・E区遺構図 ……37
第29図　弥生前期　E区土坑実測図１ ……38
第30図　弥生前期　E区土坑実測図２ ……39
第31図　弥生中期　C区土坑実測図 ……42
第32図　弥生中期　C区遺構図 ……43
第33図　弥生終末～古墳前期　C区大型土坑実測図 …44
第34図　弥生終末～古墳前期　C区土坑実測図１ ……46
第35図　弥生終末～古墳前期　C区土坑実測図２ ……47
第36図　弥生終末～古墳前期　C区土坑実測図３ ……48
第37図　弥生終末～古墳前期　C区土坑実測図４ ……49
第38図　弥生終末～古墳前期　C区遺構図１ ……50
第39図　弥生終末～古墳前期　C区遺構図２ ……51
第40図　弥生終末～古墳前期　C区大型土坑実測図1 …53
第41図　弥生終末～古墳前期　C区大型土坑実測図2 …54
第42図　弥生終末～古墳前期　D区遺構図 ……55
第43図　弥生終末～古墳前期　D区足跡実測図 ……56
第44図　古墳中期～終末期　A区遺構図 ……57
第45図　古墳中期～終末期　B区建物実測図１ ……58
第46図　古墳中期～終末期　B区建物実測図２ ……59
第47図　古墳中期～終末期　B区遺構図１ ……60
第48図　古墳中期～終末期　B区遺構図２ ……61
第49図　古墳中期～終末期　B区遺構図３ ……62
第50図　古墳中期～終末期　B区遺構図４ ……63
第51図　古墳中期～終末期　B区土坑実測図１ ……64
第52図　古墳中期～終末期　B区土坑実測図２ ……65
第53図　古墳中期～終末期　B区井戸実測図１ ……67
第54図　古墳中期～終末期　B区土坑実測図３ ……69
第55図　古墳中期～終末期　B区土坑実測図４ ……70
第56図　古墳中期～終末期　B区土坑実測図５ ……71
第57図　古墳中期～終末期　B区井戸実測図２ ……72
第58図　古墳中期～終末期　B区遺構図 ……73
第59図　古墳中期～終末期　C区土坑実測図 ……74
第60図　古墳中期～終末期　C区遺構図 ……75
第61図　古代　A区遺構図１ ……78
第62図　古代　A区遺構図２ ……79
第63図　古代　A区遺構図３ ……80
第64図　古代　A区建物実測図１ ……81
第65図　古代　A区建物実測図２ ……82
第66図　古代　A区建物実測図３ ……83
第67図　古代　A区建物実測図４ ……84
第68図　古代　A区土坑実測図１ ……85
第69図　古代　A区土坑実測図２ ……86
第70図　古代　A区井戸実測図 ……87
第71図　古代　A区溝実測図１ ……88
第72図　古代　A区溝実測図２ ……89
第73図　古代　A区溝実測図３ ……90
第74図　古代　A区溝実測図４ ……91
第75図　古代　A区溝実測図５ ……92
第76図　古代　B区遺構図１ ……94
第77図　古代　B区遺構図２ ……95
第78図　古代　B区遺構図３ ……96

第79図　古代　B区遺構図４ ……97
第80図　古代　B区建物実測図１ ……98
第81図　古代　B区建物実測図２ ……99
第82図　古代　B区建物実測図３ …… 100
第83図　古代　B区建物実測図４ …… 101
第84図　古代　B区建物実測図５ …… 102
第85図　古代　B区建物実測図６ …… 103
第86図　古代　B区柱穴列実測図 …… 105
第87図　古代　B区土坑実測図１ …… 107
第88図　古代　B区土坑実測図２ …… 109
第89図　古代　B区土坑実測図３ …… 110
第90図　古代　B区土坑実測図４ …… 111
第91図　古代　B区井戸実測図１ …… 113
第92図　古代　B区井戸実測図２ …… 115
第93図　古代　B区溝実測図 …… 117
第94図　古代　B区方形周溝状遺構実測図 …… 118
第95図　古代　C区遺構図 …… 119
第96図　古代　C区建物実測図 …… 120
第97図　古代　C区土坑実測図 …… 121
第98図　古代　C区井戸実測図 …… 122
第99図　中世　A区遺構図 …… 124
第100図　中世　A区土坑実測図１ …… 125
第101図　中世　A区土坑実測図２ …… 126
第102図　中世　A区溝実測図 …… 127
第103図　中世　B区遺構図１ …… 128
第104図　中世　B区遺構図２ …… 129
第105図　中世　B区遺構図３ …… 130
第106図　中世　B区遺構図４ …… 131
第107図　中世　B区建物実測図１ …… 132
第108図　中世　B区建物実測図２ …… 133
第109図　中世　B区柱穴列実測図 …… 134
第110図　中世　B区土坑実測図１ …… 135
第111図　中世　B区土坑実測図２ …… 137
第112図　中世　B区土坑実測図３ …… 138
第113図　中世　B区井戸実測図 …… 139
第114図　中世　B区溝実測図 …… 140
第115図　中世　B区道路状遺構実測図 …… 141
第116図　中世　B区墓実測図 …… 142
第117図　中世　C区土坑実測図 …… 143
第118図　中世　C区遺構図１ …… 144
第119図　中世　C区遺構図２ …… 145
第120図　中世　C区井戸実測図 …… 146
第121図　中世　C区溝実測図 …… 147
第122図　中世　C区墓実測図 …… 148
第123図　中世　D区土坑実測図 …… 149
第124図　中世　D区遺構図 …… 150
第125図　中世　D区井戸実測図 …… 151
第126図　中世　D区溝実測図 …… 152
第127図　中世　D区足跡遺構実測図 …… 152
第128図　中世末～近世前半　B区遺構図１ …… 153
第129図　中世末～近世前半　B区遺構図２ …… 154
第130図　中世末～近世前半　B区遺構図３ …… 155
第131図　中世末～近世前半　B区建物実測図１ …… 156
第132図　中世末～近世前半　B区建物実測図２ …… 157
第133図　中世末～近世前半　B区建物実測図３ …… 158
第134図　中世末～近世前半　B区建物実測図４ …… 161
第135図　中世末～近世前半　B区建物実測図５ …… 162
第136図　中世末～近世前半　B区建物実測図６ …… 163
第137図　中世末～近世前半　B区建物実測図７ …… 164
第138図　中世末～近世前半　B区建物実測図８ …… 165
第139図　中世末～近世前半　B区建物実測図９ …… 166
第140図　中世末～近世前半　B区柱穴列実測図１ … 167
第141図　中世末～近世前半　B区柱穴列実測図２ … 168
第142図　中世末～近世前半　B区土坑実測図 …… 169
第143図　中世末～近世前半　B区溝実測図 …… 170
第144図　中世末～近世前半　B区墓実測図 …… 171
第145図　中世末～近世前半　D区遺構図 …… 172
第146図　中世末～近世前半　D区土坑実測図 …… 173
第147図　中世末～近世前半　D区井戸実測図 …… 174
第148図　近世以降　B区建物実測図１ …… 175
第149図　近世以降　B区建物実測図２ …… 176
第150図　近世以降　B区柱穴列実測図 …… 177
第151図　近世以降　B区遺構図１ …… 178
第152図　近世以降　B区遺構図２ …… 179
第153図　近世以降　B区井戸実測図 …… 181
第154図　近世以降　B区溝実測図 …… 182
第155図　近世以降　C区遺構図 …… 183
第156図　近世以降　C区遺構実測図 …… 184
第157図　時期不明　D区噴砂実測図 …… 186
第158図　時期不明　E区溝実測図 …… 187
第159図　時期不明　E区自然流路実測図 …… 188
第160図　縄文時代晩期･弥生時代前期 遺構出土遺物 … 197

第161図　弥生時代前期　遺構出土遺物１ …… 198
第162図　弥生時代前期　遺構出土遺物２ …… 199
第163図　弥生時代前期　遺構出土遺物３ …… 200
第164図　弥生時代前期　遺構出土遺物４ …… 201
第165図　弥生時代前期　遺構出土遺物５ …… 202
第166図　弥生時代前期　遺構出土遺物６ …… 203
第167図　弥生時代前期　遺構出土遺物７ …… 204
第168図　弥生時代前期　遺構出土遺物８ …… 205
第169図　弥生時代前期　遺構出土遺物９ …… 206
第170図　弥生時代前期　遺構出土遺物10 …… 207
第171図　弥生時代前期　遺構出土遺物11 …… 208
第172図　弥生時代前期　遺構出土遺物12 …… 209
第173図　弥生時代前期　遺構出土遺物13 …… 210
第174図　弥生時代前期　遺構出土遺物14 …… 211
第175図　弥生時代前期　遺構出土遺物15 …… 212
第176図　弥生時代前期　遺構出土遺物16 …… 213
第177図　弥生時代前期　遺構出土遺物17 …… 214
第178図　弥生時代前期　遺構出土遺物18 …… 215
第179図　弥生時代前期　遺構出土遺物19 …… 216
第180図　弥生時代前期　遺構出土遺物20 …… 217
第181図　弥生時代前期　遺構出土遺物21 …… 218
第182図　弥生時代前期　遺構出土遺物22 …… 219
第183図　弥生時代前期　遺構出土遺物23 …… 220
第184図　弥生時代前期　遺構出土遺物24 …… 221
第185図　弥生時代前期　遺構出土遺物25 …… 222
第186図　弥生時代前期　遺構出土遺物26 …… 223
第187図　弥生時代前期　遺構出土遺物27 …… 224
第188図　弥生時代前期　遺構出土遺物28 …… 225
第189図　弥生時代前期　遺構出土遺物29 …… 226
第190図　弥生時代前期　遺構出土遺物30 …… 227
第191図　弥生時代前期　遺構出土遺物31 …… 228
第192図　弥生時代前期　遺構出土遺物32 …… 229
第193図　弥生時代前期　遺構出土遺物33 …… 230
第194図　弥生時代前期　遺構出土遺物34 …… 231
第195図　弥生時代前期　遺構出土遺物35 …… 232
第196図　弥生時代中期　遺構出土遺物１ …… 234
第197図　弥生時代中期　遺構出土遺物２ …… 235
第198図　弥生時代終末～古墳時代前期　遺構出土遺物１… 241
第199図　弥生時代終末～古墳時代前期　遺構出土遺物２… 242
第200図　弥生時代終末～古墳時代前期　遺構出土遺物３… 243
第201図　SD3094出土遺物１ …… 244
第202図　SD3094出土遺物２ …… 245
第203図　SD3094出土遺物３ …… 246
第204図　SD3094出土遺物４ …… 247
第205図　SD3094出土遺物５ …… 248
第206図　SD3094出土遺物６ …… 249
第207図　SD3094出土遺物７ …… 250
第208図　SD3094出土遺物８ …… 251
第209図　弥生時代終末～古墳時代前期　遺構出土遺物４… 252
第210図　弥生時代終末～古墳時代前期　遺構出土遺物５… 253
第211図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物1 …… 259
第212図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物2…… 260
第213図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物3…… 261
第214図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物4…… 262
第215図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物5…… 263
第216図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物6…… 264
第217図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物7…… 265
第218図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物8…… 266
第219図　古代　遺構出土遺物１ …… 272
第220図　古代　遺構出土遺物２ …… 273
第221図　古代　遺構出土遺物３ …… 274
第222図　古代　遺構出土遺物４ …… 275
第223図　古代　遺構出土遺物５ …… 276
第224図　古代　遺構出土遺物６ …… 277
第225図　中世　遺構出土遺物１ …… 281
第226図　中世　遺構出土遺物２ …… 282
第227図　中世　遺構出土遺物３ …… 283
第228図　中世　遺構出土遺物４ …… 284
第229図　中世　遺構出土遺物５ …… 285
第230図　中世　遺構出土遺物６ …… 286
第231図　中世末～近世前半　遺構出土遺物１ …… 288
第232図　中世末～近世前半　遺構出土遺物２ …… 289
第233図　近世以降　遺構出土遺物１ …… 292
第234図　近世以降　遺構出土遺物２ …… 293
別　　図　矢野遺跡周辺の調査区図

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の地理的環境

矢野遺跡は島根県出雲市矢野町に所在する。島根県東部に位置する出雲市は，面積543.48㎢で，出雲平野を中心に市街地が広がっている。遺跡は平野のほぼ中央部，市街地の北西に位置する。

出雲平野は中国山地から宍道湖に流れ込む斐伊川と，日本海に注ぐ神戸川の二大河川の沖積作用で形成された，東西約20㎞，南北約５㎞にわたる沖積平野で，県内では最も広い平野である。北は島根半島，南は中国山地に囲まれ，東は宍道湖に，西は日本海に面している。島根半島側の山地は鼻高山（標高536m）をはじめとして，標高400mを越える山が連なる。

出雲平野において，斐伊川・神戸川による沖積作用が始まったのは3,700年前頃と考えられる。河川は氾濫しながら自然堤防を作り，矢野遺跡周辺には徐々に微高地が形成されていった。当時の斐伊川の流れは現在とは異なり，主として西流し大社湾へ注いでいた。沖積作用で形成された微高地に集落が営まれ，周囲の湿地帯を水田として開発し発展していったものと考えられる（詳細は第10章第１節参照）。

第1図　矢野遺跡の位置

第２節　遺跡の歴史的環境

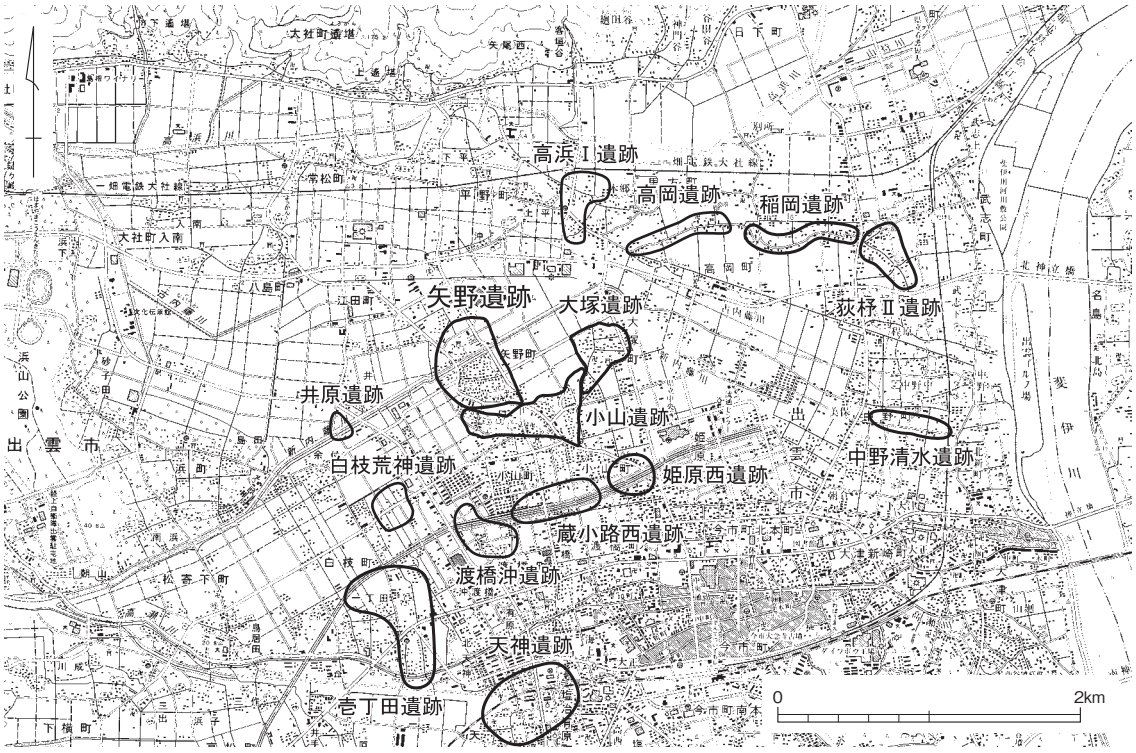
矢野遺跡は，神戸川の沖積作用によって堆積した三角州状の微高地の北端に位置し，現在の出雲市四絡（よつがね）地区（大塚町，矢野町，小山町，渡橋町）に広がっている（第２図）。約２㎞四方の範囲に及ぶ四絡遺跡群（小山遺跡，大塚遺跡，姫原西遺跡，蔵小路西遺跡，渡橋沖遺跡）の遺跡のひとつであり，遺跡群内最大の集落遺跡として知られている。縄文時代後期から近世に至るまでの時期の遺物が出土しており，長期間にわたって人々の活動の痕跡が認められる。四絡遺跡群周辺には，弥生時代の集落遺跡として，壱丁田遺跡，天神遺跡などが神戸川による三角州地帯に，荻杼Ⅱ遺跡，稲岡遺跡，中野清水遺跡などが斐伊川による三角州地帯に存在する。矢野遺跡周辺には二大河川の沖積作用で形成された土地に集落遺跡が存在している。

このたびの調査での出土遺物は，弥生時代前期から古墳時代中期にかけての土器類の出土量が多く，顕著であった。この時期の検出遺構数は遺物の出土量に比例しないが，神戸川扇状地の末端付近の微高地に古くから大規模な集落があったことを改めて示す結果のひとつと言える。遺構は，奈良時代から中世にかけての建物跡等を多く検出している。以下，縄文時代から中世にかけての出雲平野の主要遺跡を概観する。

縄文時代

出雲平野での遺跡の出現は，縄文時代早期である。平野部北西端の北山山麓に所在する大社町の菱根遺跡や，平野の西部，大社湾に位置する上長浜貝塚が知られている。菱根遺跡では黒曜石製石器や，「菱根式」として知られる早期末の繊維土器が出土した。

後期から晩期になると平野南部の丘陵下に三田谷Ⅰ遺跡や後谷遺跡などから遺物が出土している。



第2図　矢野遺跡周辺の集落遺跡（1：50,000）

また，近年では築山遺跡や御崎谷遺跡，九景川遺跡からも縄文時代後期の遺物が出土している。

弥生時代

弥生時代になると，神戸川や斐伊川下流域の微高地や丘陵縁辺部に集落が営まれるようになり，周辺の湿地帯を水田として広げながら集落が発展していったと考えられる。

前期には，原山遺跡において配石墓が確認されている。また，天神遺跡の甕棺墓やゴホウラ貝の貝輪を腕に装着した人骨が発見された猪目洞窟遺跡なども知られている。平野部では古志本郷遺跡，蔵小路西遺跡，山持遺跡，里方本郷遺跡，青木遺跡等で前期の土器が出土している。集落遺跡としては，中野清水遺跡，山持遺跡などが知られる。

中期には，天神遺跡，山持遺跡，白枝荒神遺跡，田畑遺跡，古志本郷遺跡，下古志遺跡，知井宮多門院遺跡などの遺跡が出現する。出雲平野中央部だけでなく，神戸川西岸を含め出雲平野全体に広範囲にわたって大規模な集落が展開されるようになる。

また，斐川町の神庭荒神谷遺跡からは大量の青銅器が発見されている。弥生時代前期頃から出雲平野に有力者の集団とその集落があった可能性が考えられる。

そして，弥生時代後期になると，大規模集落の展開と共に首長の墓が出現する。出雲市大津町の西谷丘陵には四隅突出型墳丘墓が築かれる。なかでも，３号墓と９号墓は山陰地方最大級の大きさを誇る。吉備地方から搬入されたと考えられる土器や，丹後や北陸地方の影響を受けた土器が出土し，他地域との広域交流があったことを窺い知ることができる。また，四隅突出型墳丘墓は，中野美保遺跡，青木遺跡でも確認され，丘陵上だけでなく平野低地においても築造されていることが明らかになっている。

古墳時代

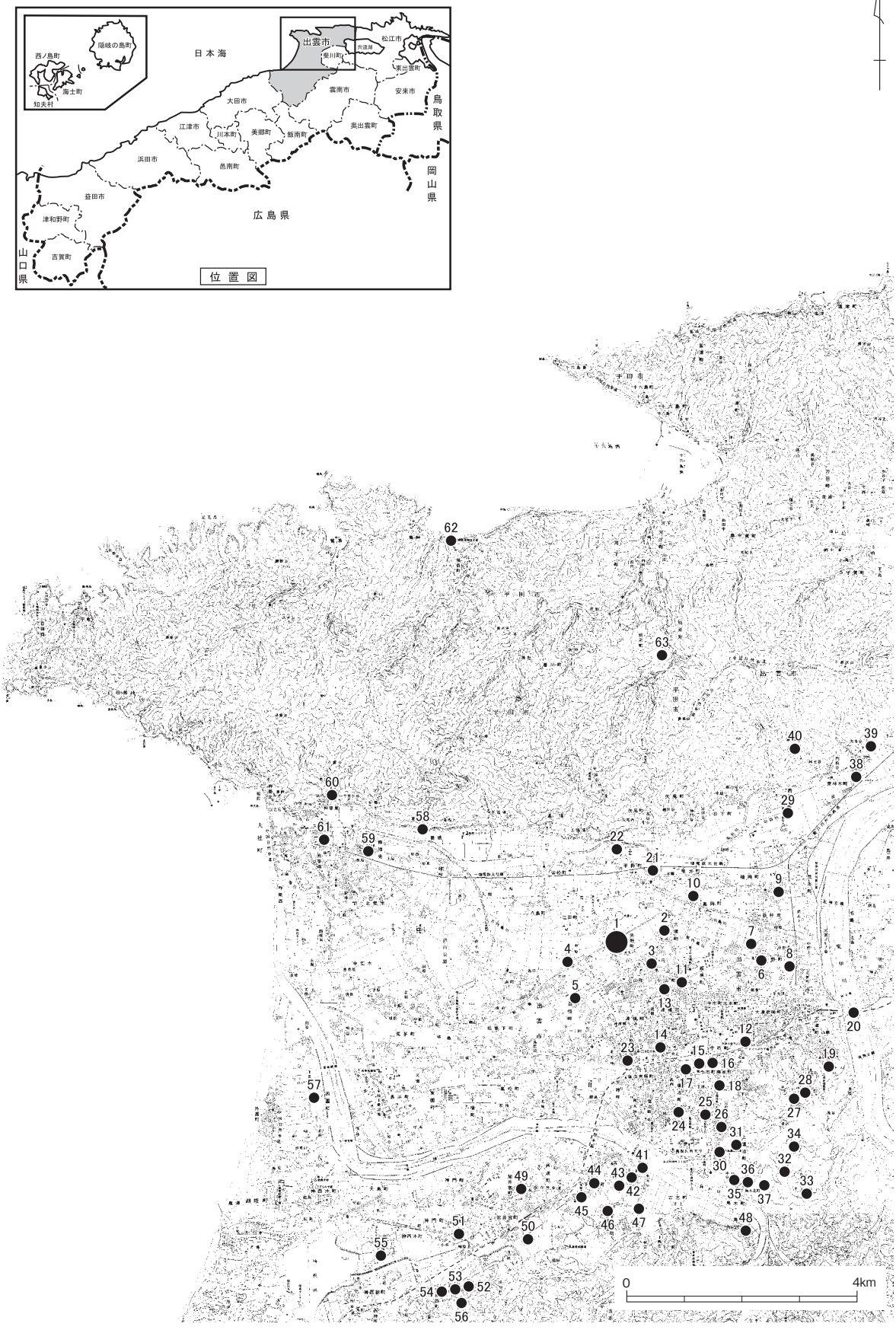
古墳時代の出雲平野の集落は，斐伊川流域の山持遺跡，斐伊川鉄橋遺跡などでは継続して生活が営まれるが，神戸川流域の古志本郷遺跡や下古志遺跡などでは集落の区画大溝への土器廃棄がみられ，その後衰退していく。このように，弥生時代中期から発展してきた集落は全体に減少する傾向がみられる。

中・後期になると三田谷Ⅰ遺跡や中野美保遺跡など生活遺跡は数例となるが，浅柄遺跡で住居跡が確認され，御崎谷遺跡でも大量の遺物が出土していることから，神戸川西岸にはこの時期の集落が営まれていたことがわかる。

一方，出雲平野には古墳は前期末になって出現する。前方後円墳で最も古いと考えられているのが，斐伊川左岸に位置する大寺１号墳である。平野南西部では，山地古墳，浅柄遺跡，間谷東古墳などの小規模ながら主体部に礫床を有する円墳が見られる。

中期になると，出雲平野の南丘陵上に北光寺古墳が築かれる。北光寺古墳は全長約70ｍと，この時期の前方後円墳としては出雲平野最大の大きさを誇る。

後期になると，神戸川右岸に出雲最大の前方後円墳である今市大念寺古墳，上塩冶築山古墳，上塩冶地蔵山古墳といった有力首長墳が築かれ，神戸川左岸では妙蓮寺山古墳，放レ山古墳などが存在し，神戸川右岸の首長墳に次ぐ位置づけとして連続して築かれる。また，後期以降横穴墓が盛んに造られ，神戸川右岸に上塩冶横穴墓群，左岸に神門横穴墓群など大規模な横穴墓群が築造されている。



第3図　矢野遺跡の位置と周辺の遺跡１（1：100,000）

1　矢野遺跡
2　大塚遺跡
3　小山遺跡
4　井原遺跡
5　白枝荒神遺跡
6　中野美保遺跡
7　中野西遺跡
8　中野清水遺跡
9　荻杼Ⅱ遺跡
10　高岡遺跡
11　姫原西遺跡
12　今市大念寺古墳
13　蔵小路西遺跡
14　海上遺跡
15　藤ケ森Ⅰ遺跡
16　藤ケ森Ⅱ遺跡
17　善行寺遺跡
18　角田遺跡
19　西谷墳墓群
20　斐伊川鉄橋遺跡
21　高浜Ⅰ遺跡
22　高浜Ⅱ遺跡
23　天神遺跡
24　神門寺境内廃寺
25　築山遺跡
26　上塩冶築山古墳
27　菅沢古墓
28　長者原廃寺
29　山持遺跡･山持川川岸遺跡
30　上塩冶地蔵山古墳
31　池田古墳
32　大井谷Ⅰ遺跡
33　大井谷Ⅱ遺跡
34　上塩冶横穴墓群
35　三田谷Ⅰ遺跡
36　三田谷Ⅱ遺跡
37　光明寺3号墓
38　青木遺跡
39　大寺1号墳
40　鳶ケ巣城跡
41　古志本郷遺跡
42　大梶古墳
43　田畑遺跡
44　下古志遺跡
45　宝塚古墳
46　妙蓮寺山古墳
47　放レ山古墳
48　小坂古墳
49　知井宮多聞院遺跡
50　浅柄遺跡
51　神門横穴墓群
52　間谷東古墳
53　御崎谷遺跡
54　九景川遺跡
55　山地古墳
56　北光寺古墳
57　上長浜貝塚
58　菱根遺跡
59　原山遺跡
60　出雲大社境内遺跡
61　鹿蔵山遺跡
62　猪目洞窟遺跡
63　鰐淵寺
64　上島古墳
65　中村1号墳
66　西西郷廃寺
67　後谷Ⅱ遺跡
68　後谷Ⅴ遺跡
69　天寺平廃寺
70　神庭荒神谷遺跡
71　神庭岩船山古墳
72　加茂岩倉遺跡
73　神原神社古墳

第4図　矢野遺跡の位置と周辺の遺跡２（1：100,000）

奈良時代～中世

矢野遺跡では，奈良時代以降の建物跡を多く検出している。調査を行った範囲のなかでは，遺跡の東側で多く遺構を確認した。この地が弥生時代以降も変わらず集落としての発展を続けていることがわかる。また，八野神社周辺の調査区では，神社の参道跡と考えられる遺構が確認された。墨書土器や石帯など，神社遺構や官衙に関係のある遺物も出土している。

出雲平野での奈良時代以降の遺跡を見てみると，大型建物が確認された官衙関連の遺跡や，社寺関連の遺跡が注目される。出雲郡の中では，礎石建物跡が検出され，出雲郡家との関連が指摘される後谷遺跡や，墨書土器，三彩，帯金具などが出土した大社町の鹿蔵山遺跡が知られる。

出雲平野南西部，神戸川左岸では，神門郷の郡家との関連が指摘されている古志本郷遺跡が知られ，三田谷Ⅰ遺跡では大型の建物が検出されている。

集落遺跡としては，建物跡が確認されている九景川遺跡や，多数の掘立柱建物跡が検出された浅柄遺跡がある。

出雲国風土記に記載される新造院のうち，神門寺境内廃寺は朝山郷新造院に，天寺平廃寺は河内郷新造院と考える説もある。墳墓としては火葬骨を納めた石櫃が出土した光明寺３号墓や石製骨蔵器を納めた小坂古墳，朝山古墓，菅沢古墓などが知られている。

平野部では，蔵小路西遺跡，渡橋沖遺跡，下古志遺跡等で城館跡が確認されている。12世紀後半～15世紀の建物跡が発見された蔵小路西遺跡では，「中世朝山家惣領家」の居館の可能性が指摘されている。

室町時代から戦国時代には多くの山城が築かれるようになり，代表的な例として神西城，鳶ヶ巣城，大井谷城，などが丘陵部に築城されている。

参考文献

出雲市教育委員会1997『遺跡が語る古代の出雲』
出雲市教育委員会2000『浅柄遺跡　西出雲駅南土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
加茂町教育委員会2002『神原神社古墳』
島根県教育委員会1980『出雲・上塩冶を中心とする埋蔵文化財調査報告』
島根県教育委員会2000『三田谷Ⅰ遺跡Vol.３』
島根県教育委員会・加茂町教育委員会2002『加茂岩倉遺跡』
島根県教育委員会2003『古志本郷遺跡Ⅴ　斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ』
島根県教育委員会2004『中野美保遺跡　一般国道９号線出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書４』
島根県教育委員会2005『山持遺跡Vol.１』
島根県教育委員会2007『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区Vol.２』
島根県教育委員会2005『山持遺跡（Ⅳ区）Vol.３』
島根県教育委員会2008『九景川遺跡　一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
田中義昭・西尾克己・広江耕史・山本清・磯田由紀子1987「出雲市矢野遺跡の研究（１）」『山陰地域研究』
伝統文化No.３　島根大学山陰地域研究総合センター

第２章　過去の調査

出雲平野のほぼ中央に位置する四絡（よつがね）地区には，矢野遺跡･小山遺跡･大塚遺跡･姫原西遺跡･渡橋遺跡･蔵小路西遺跡･渡橋沖遺跡といった遺跡が密集しており，四絡遺跡群と呼ばれている（第５図･別図）。この遺跡群の存在が知られるようになったのは，1948年，山本清が大塚遺跡に関する報告を発表したことによる(1)。そして，小山遺跡で弥生土器・土師器の確認(2)，さらには大谷従二等により矢野遺跡（八野神社周辺）で弥生時代前期の土器が採集された(3)。これらによって，四絡遺跡群が弥生時代前期から奈良時代にかけての遺跡であることが知られるようになった。

1953年には山本清を中心とする旧島根考古学会が，矢野遺跡で一番最初にトレンチ調査を実施した（第１次調査）。この調査ではヤマトシジミを中心とする貝塚が確認された。弥生時代前期から古墳時代前期にいたる土器が多量に出土し，石器や骨角器も出土した(4)。以後，矢野貝塚として知られるようになり，1959年には出雲市の史跡に指定されている。この頃，大谷等による採集資料が増え，遺跡の上限が縄文時代後期まで遡ることがわかってきた。

1970年代に入ると，四絡地区周辺での開発が増加し，遺跡の破壊が懸念される状況となった。１次調査隣接地でも養豚用糞尿処分場設置による掘削が進められ，事態を重く見た川上稔・西尾克己等が1971～73年まで緊急調査を実施した。この調査では碧玉製の管玉が出土したほか，弥生時代後期前半の土器を伴う土壙墓が検出されている（第２次調査）(5)。

その後，出雲考古学研究会が四絡遺跡群の分布調査を実施し，出雲平野の弥生・古墳時代の集落の動向について体系的にまとめた。その結果，矢野遺跡から吉備の特殊土器が表採されていること，他遺跡と比べ遺物量が多いことなどから，矢野遺跡を弥生時代の出雲平野の拠点集落と評価した(6)。

1980年代に入ると，四絡地区周辺のベッドタウン化が進む。1985年には，出雲市教育委員会が市道拡幅に伴い，矢野遺跡の東辺部でトレンチ調査を実施している（第３次調査）。

1984～85年には，隣接する斐川町の神庭荒神谷遺跡から弥生時代の青銅器が次々と出土し，その意義解明のために出雲平野の集落研究の重要性が指摘された。そこで出雲平野の拠点集落と考えられていた矢野遺跡を初めとする四絡遺跡群の総合的調査と遺跡保存が急務となった。

島根大学の田中義昭を中心とする出雲平野集落遺跡研究会は，矢野遺跡のトレンチ調査を実施した（第４次調査）。八野神社境内付近の調査では，古墳時代前期の竪穴住居跡が確認された(7)。

翌1986～87年にかけて行われた遺跡中心部でのトレンチ調査（第５次調査）においては，大量の土器と石器が出土した。土器は弥生中期中葉から後期中葉を中心とし，弥生前期から古墳時代前期のものが出土しているほか，玉作関係遺物も出土しており，玉生産の可能性も考えられた(8)。

1989・91年には出雲平野集落遺跡研究会が，矢野遺跡に隣接する小山遺跡の調査を実施した。調査では弥生時代の溝や古墳時代の土坑を検出した(9)。

1990年代に入ると，公共事業などの規模が拡大した。1990年には，遺跡の北端で，出雲健康公園整備に伴い，出雲市教育委員会が発掘調査を実施した（第６次調査）。調査の結果，古墳時代終末から中

第5図　矢野遺跡周辺図　平成21年度版（1：5,000）

世期に至る集落跡を確認した。特に13世紀末～14世紀初頭の屋敷地から青磁・常滑焼・木簡などの遺物が出土したことが特筆される[10]。

また同年，遺跡中央部の地元地権者から庭地整備中に多量の遺物が出土したとの連絡が出雲市教育委員会にあり，1990年から翌91年にかけて調査を行なった（第７次調査）。調査範囲は狭小であったが，貝層などから弥生時代中期中葉から古墳時代前期の土器が多量に出土した。このことから，貝塚が広範囲に点在することが確認された[11]。

このように矢野遺跡周辺の開発事業が増加するに伴い，矢野遺跡の調査が実施されてきた。しかし，遺跡の範囲が明確でないため，1991年に国庫および県費の補助を得て，遺跡の南東部分の広がりを確認する範囲確認調査を実施した（第８次調査）。その結果，遺跡の範囲がさらに広がることがわかった。また，併せて四絡遺跡群の分布調査を行ない，渡橋町で渡橋遺跡を確認した[12]。

1990年代半ば頃からは，小山遺跡周辺でも開発が活発化する。1996年には市道改良工事に伴い，発掘調査が行われた。小山町は，周辺に残る「狭（はざま）」，「中之島」の小字地名[13]や古地理の検討から，調査以前より遺跡の北側には自然河道の存在が推定されたが，発掘調査でも確認され，河道の北岸に矢野遺跡，南岸に小山遺跡という環境が復元できた[14]。

1996～98年にかけて国道９号線出雲バイパス建設に伴い島根県教育委員会が調査した蔵小路西遺跡・姫原西遺跡でも自然河道が計４本確認され，河道沿いに弥生集落が密集していたことがわかってきた。姫原西遺跡では弥生時代の橋が検出されたほか，農具や生活用具などの木製品が多量に出土した[15]。蔵小路西遺跡からは，12～15世紀の有力武士である朝山惣領家の居館跡と考えられる遺構も確認された[16]。

小山遺跡で1994年に行われた調査では，底部に「池内」と墨書された９世紀後半頃の土師器杯や「井」とヘラ描きされた８～９世紀頃の須恵器長頸壺が出土しており，郷庁の関連施設などが近傍に存在する可能性が指摘されている[18]。なお，1997年にはその隣接地が調査され，南北方向にのびる大溝などが検出された[19]。2000年及び2004年に行われた市道改良工事に伴う調査では，奈良時代から平安時代の掘立柱建物跡等が確認されたほか，「井」とヘラ描きされた須恵器高台付杯が出土した[20・21]。また，2000年の調査では，倉庫跡と推定される掘立柱建物跡も検出されている[22]。これらの調査から小山遺跡は，弥生時代中期後葉から中世にいたる集落跡と判明してきた。

大塚遺跡は，2007年に県道建設に伴う発掘調査が行われた。その結果，中世後半に遡る可能性のある溝を検出し，調査地周辺の地割との関連が考えられている[23]。

以上のように，四絡遺跡群は出雲平野の中でも特に発掘調査が多く実施されてきた。そして，今回報告する新内藤川改修工事に伴う調査が第９次調査となった。第９次調査は，過去の調査の中で数段に調査面積が広く，遺物も多く出土した。過去に行われた調査と同じく，矢野遺跡単独の評価ではなく，四絡遺跡群全体の動向と絡めた評価が必要であろう。

註

（１）山本清1948「出雲市大塚町土器散布地」『島根考古学』第２号
（２）池田満雄1956「四絡小学校付近出土土器」『出雲市の文化財』第１集　出雲市教育委員会

（３）池田満雄1956「矢野貝塚」『出雲市の文化財』第１集　出雲市教育委員会
（４）山本清1957『島根県出雲市矢野町貝塚調査概報』
（５）東森市良・西尾克己1980「矢野遺跡」『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会
（６）出雲考古学研究会1986『出雲平野の集落遺跡Ⅱ－矢野遺跡とその周辺―古代の出雲を考える５』
（７）田中義昭・西尾克己・広江耕史・山本清・磯田由紀子1987「出雲市矢野遺跡の研究（１）」『山陰地域研究』№３　島根大学山陰地域研究総合センター
（８）田中義昭編1989「出雲市矢野遺跡の発掘調査」『古代出雲文化の展開に関する総合的研究－斐伊川下流域を中心として－昭和63年度科学研究費補助金（一般研究A）研究成果報告書』
（９）島根大学山陰地域研究総合センター編1992『古代金属生産の地域特性に関する研究－山陰地方の銅・鉄を中心にして－平成３年度科学研究費補助金（一般研究A）研究成果報告書』
(10) 出雲市教育委員会1991『出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う矢野遺跡第2地点発掘調査報告書』
(11) 出雲市教育委員会2000『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集高浜II遺跡・田中谷貝塚・矢野遺跡』
(12) 出雲市教育委員会1992『四絡地区遺跡発掘調査報告書』
(13) 永田滋史1986「村名・地名考」『四絡郷土誌』四絡郷土誌編集委員会
(14) 出雲市教育委員会1998『市道渡橋平野線道路改良工事に伴う小山遺跡第２地点発掘調査報告書』
(15) 島根県教育委員会1999『姫原西遺跡－一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１－』
(16) 島根県教育委員会1999『蔵小路西遺跡－一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２－』
(17) 島根県教育委員会『渡橋沖遺跡－一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３－』
(18) 出雲市教育委員会1996『小山遺跡　県立看護短大教職員宿舎事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書出雲市埋蔵文化財調査報告書第６集』
(19) 出雲市教育委員会1999『平成９年度島根県看護短期大学教職員宿舎建設に伴う小山遺跡発掘調査報告書』
(20) 出雲市教育委員会2002『平成12年度市道四絡30号外1線道路改良工事に伴う小山遺跡第３地点発掘調査報告書（第３次発掘調査)』
(21) 出雲市教育委員会2005『小山遺跡第三地点発掘調査報告書（第５次発掘調査)』
(22) 出雲市教育委員会2002『平成12年度四絡幼稚園改築事業に伴う小山遺跡第３地点発掘調査報告書』
(23) 島根県教育委員会2009『大塚遺跡－一般県道矢尾今市線地方道路交付金事業（大塚工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１－』

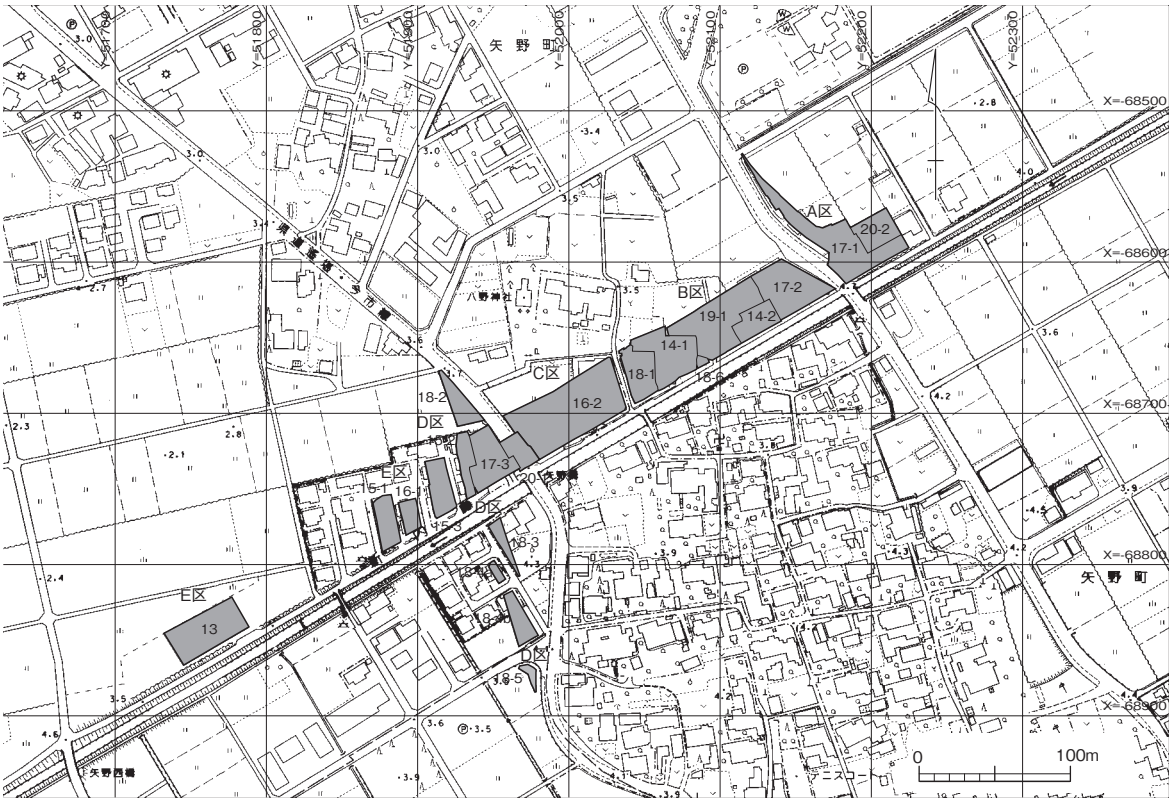
第３章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

島根県出雲土木建築事務所（平成19年４月１日より島根県出雲県土整備事務所）は新内藤川河川改修事業を計画し，出雲市文化財室に埋蔵文化財の有無について照会をした。これに対して，出雲市文化財室（平成17年３月21日の新設合併により文化財課）は，矢野町周辺の工区については，周知の遺跡である矢野遺跡を横断することから，調査が必要であることを回答し，平成13年度から現地の調査を開始することとなった。本事業に伴う発掘調査を矢野遺跡第９次調査とする。埋蔵文化財発掘の通知（旧文化財保護法第57条の３）は，島根県出雲土木建築事務所より出雲市教育委員会を経由し，島根県教育委員会に提出されている（平成13年４月１日付，出土　第990号）。

第２節　調査の経過

発掘調査は，土地買収の終了したところから実施した。埋蔵文化財発掘調査の報告（旧文化財保護法第58条の２）については，年度毎に調査開始に併せて島根県教育委員会教育長に提出している。なお，平成17年度以降は文化財保護法改正に基づき，旧保護法の報告に替わり，調査開始前に埋蔵文化財発掘調査の通知（文化財保護法第99条第１項）を島根県教育委員会教育長に提出している。



第6図　矢野遺跡周辺図　平成13年度版（1：5,000）

発掘調査は平成13年度から始まった。Ｅ区西側（13区）は７月６日から12月５日に調査を実施し，調査の結果，遺構・遺物が少なく，遺跡の西端付近と考えられる。

平成14年度はＢ区（14－１・２区）を平成14年５月29日から平成15年２月25日まで調査した。調査では溝から多量の弥生時代前期の土器が出土しており，出雲地方でこの時期の土器が遺構から多量に出土した例はこれが初めてであった。

平成15年度は県道遙堪今市線の西側３か所のＥ区とＤ区（15－１～３区）を平成15年７月３日から平成16年３月17日まで調査した。米軍空撮写真の検討(1)や島根大学の林正久氏の論文(2)などから県道遙堪今市線周辺が自然河道の東岸である可能性が指摘されていた。調査の結果，指摘のとおり，Ｄ区で自然河道の西岸が確認された。

平成16年度は県道遙堪今市線の西側に位置するＥ区（16－１区）と八野神社南側のＣ区（16－２区）を平成16年６月９日から平成17年２月25日まで調査した。特に八野神社南側周辺は，地元住民からも「畑の中から多量の土器が出土する」との情報があり，調査前より多量の遺物の出土が予想されていた。調査は当初1,700㎡の範囲において行なっていたが，調査途中で調査可能範囲が拡がったため，一部については包含層を取り除いたところで調査を終了した。

平成17年度は前年度のＣ区（16－２区）と遺跡の東側Ａ区（17－１・２区），県道西側Ｄ区（17－３区），八野神社の南東側Ｂ区（18－１区）の計５か所を４月12日から翌年３月30日まで調査した。その結果，遺跡の東側Ａ区では古代以降の遺構が多いなどの成果を得た。

平成18年度は前年度から継続したＤ区（17－３区），Ｂ区（18－１・６区），県道遙堪今市線付け替えに係わるＤ区（18－２～５区），計７か所を平成18年４月７日から平成19年２月28日まで調査した。Ｂ区では，中世末から近世初めの掘立柱建物跡などが検出されたほか，Ｄ区では，自然河道跡から多量の弥生時代前期の土器が出土した。

平成19年度はＢ区（19－１区）を平成19年６月11日から平成20年１月31日まで調査した。調査では２条の溝を検出し，中世の道路側溝と推定した。そして，現在の矢野集落の地割との比較から，矢野集落の地割が少なくとも中世に遡る可能性が考えられた。

平成20年度は県道遙堪今市線の道路部分Ｄ区（20－１区）と遺跡の東端に当たるＡ区（20－２区）を平成20年５月１日から11月27日まで調査した。Ｄ区では，自然河道の右岸を確認し，Ａ区では，掘立柱建物跡４棟などを確認した。

平成20年度の調査の終了をもって，平成13年から８年かけて実施した新内藤川河川改修事業に伴う発掘調査は，全てを終了した。そして，平成21年度に８年間の調査成果報告書を作成した。

なお，市民現地説明会は平成13年から計10回行い，平成20年11月15日に８年間の調査成果をまとめた説明会を実施している。

註

（１）出雲市教育委員会1997『遺跡が語る古代の出雲－出雲平野の遺跡を中心としてー』
（２）林正久1996「荒神谷遺跡周辺の地形環境」『古代文化研究』№４島根県古代文化センター

第４章　調査の概要と基本層序

第１節　グリッドの設定

平成13年度から平成20年度まで実施した調査では，年度調査区ごとにグリッドを設定した。そのためグリッド配置や名称が統一性のないものとなった上にグリッド名が重複するなど，混乱が生じた。そこで報告書作成にあたり，統一したグリッドを設定した。設定にあたっては，既往の調査と今後の調査を考慮し，遺跡全域をカバーする１㎞四方の広範囲なグリッド配置をおこなった。

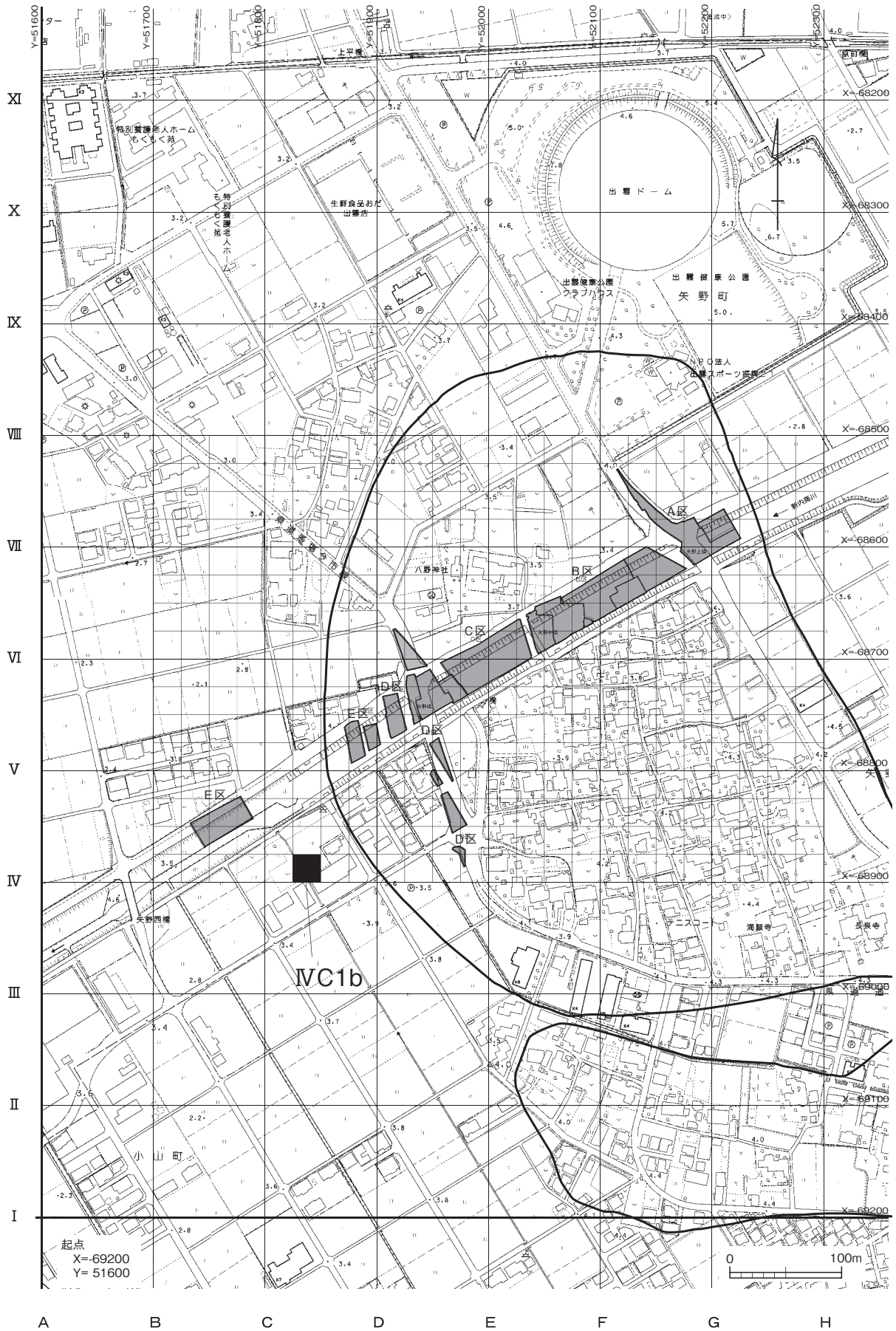
まず，世界測地系の座標軸に基づき，X＝－69200とY＝51600の交点を基点とし，北と東に100mピッチで100m×100mの大グリッドを設定した。大グリッドには北へ向けて①ローマ数字（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ･･･），東へ向けて②大文字アルファベット（A，B，C･･･）を与えた。さらに大グリッド内を25mメッシュ16分割した小グリッドを設定し，北へ向けて③アラビア数字（１～４），東へ向けて④小文字アルファベット（ａ～ｄ）を付与した。そして新グリッド名を①②③④の順に呼称した（例：ⅣC1ｂグリッド）。いずれの区画も名称の基準は南西隅である（第７図）。

第２節　調査の概要

調査区は，新内藤川改修事業に伴うものであるため，矢野遺跡の北部を東西に流れる新内藤川に沿う形をなす。約35mの幅をもち，東端から西端まで約550mを測る。調査面積は約13,750㎡である。既存の道路で分断されるため，便宜上東からＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区・Ｅ区と５分割して報告する。Ｄ区・Ｅ区はさらに道路等により細分される（第７図）。（調査年度と調査区の配置は例言および第３章を参照されたい）調査の結果，多くの遺構を検出し，多量の遺物が出土した（コンテナ約2,000箱）。

Ａ区は矢野遺跡の東端に位置する（第８図）。南北に走る道路の拡幅部分を含むため，北西に細長く延びた形状である。東西45m，南北110m，調査面積は約2,150㎡である。検出された遺構は古墳時代後期，古代，中世の３時期に分けられる。古墳時代後期前半までの遺構は確認されなかった。古墳時代後期は溝を１条確認したのみで，古代になって遺構数が多くなる。溝や掘立柱建物，土坑・井戸跡などを検出し，東側で掘立柱建物がまとまりを見せる。また，遺物のほとんどは古代のもので，墨書土器などが出土している。中世の遺構はあったが，近世以降のものは確認されなかった。

Ｂ区は矢野遺跡の北部中央にあたる（第９・11図）。幅35m，長さ約150mと今回の調査でもっとも広く，調査面積は約4,700㎡である。遺構密度が高く，縄文時代から近世まで，弥生時代中・後期を除いてほぼすべての時代にわたって遺構が確認された。縄文時代では，本遺跡が属する四絡遺跡群では蔵小路西遺跡に次いで２例目となる晩期の遺構を検出した。弥生時代では，出雲平野で検出例の稀な前期の溝や土坑が見つかった。古墳時代には遺構数が減少するが，古代では増加する傾向がみられる。掘立柱建物跡が古墳時代から近世まで各時代においてみられ，中世から近世前半にかけての建物跡が調査区西部に集中する。また，中世の道路状遺構を確認した。

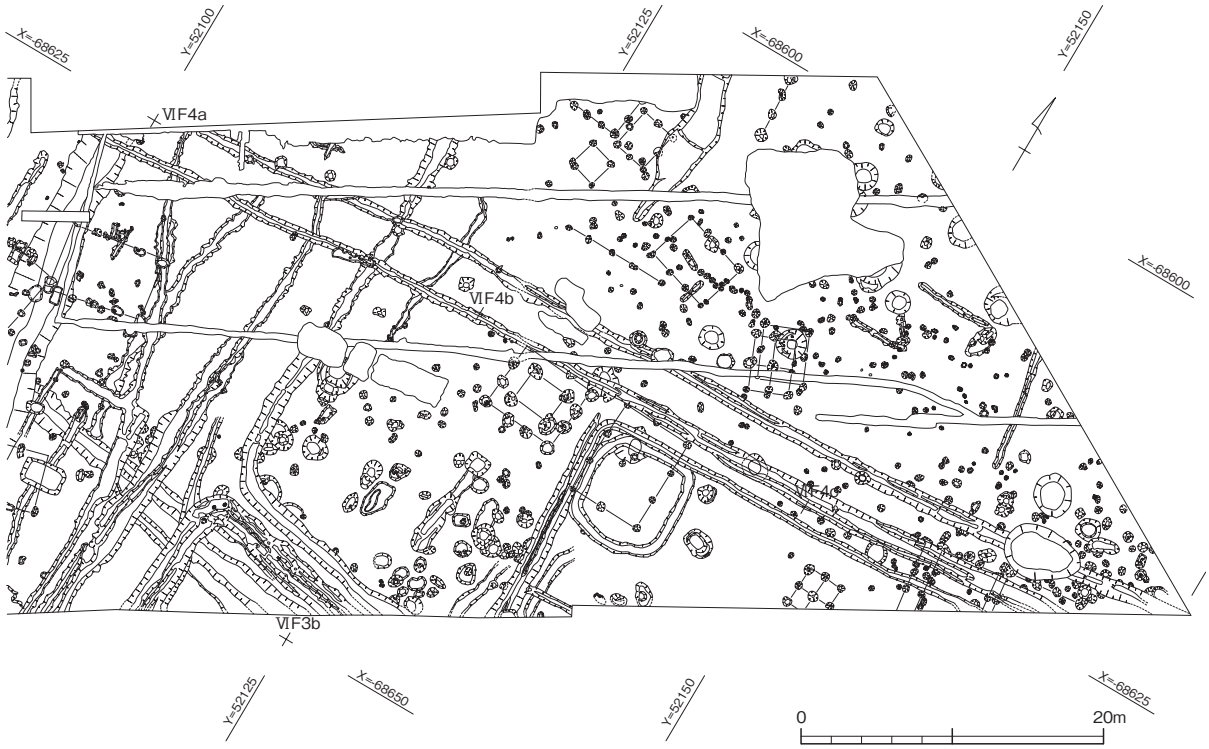


第7図　矢野遺跡調査区配置図（1：5,000）

第8図　A区全体図（1：500）

第9図　B区全体図西半分（1：500）

第10図　C区全体図（1：500）

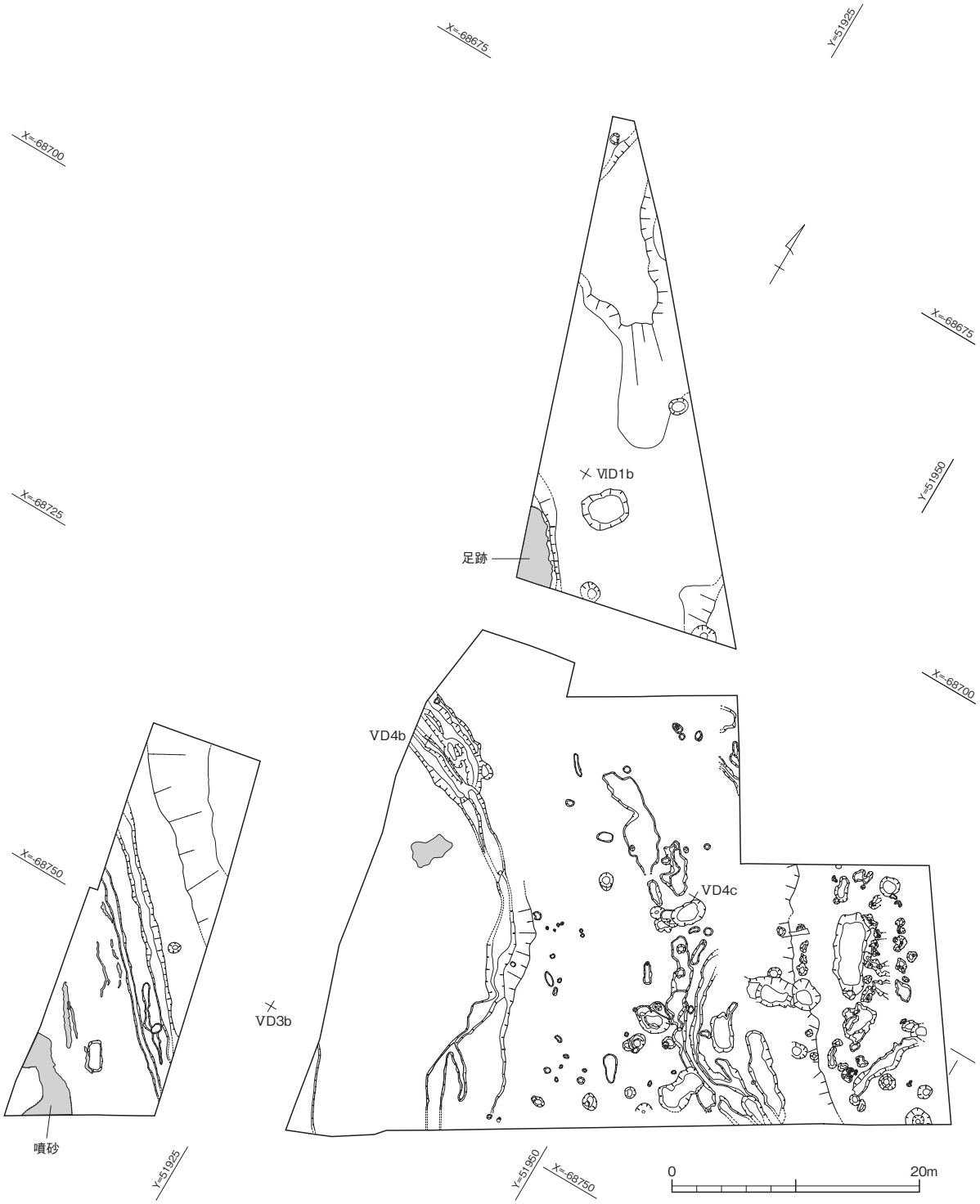


第11図　Ｂ区全体図東半分（1：500）

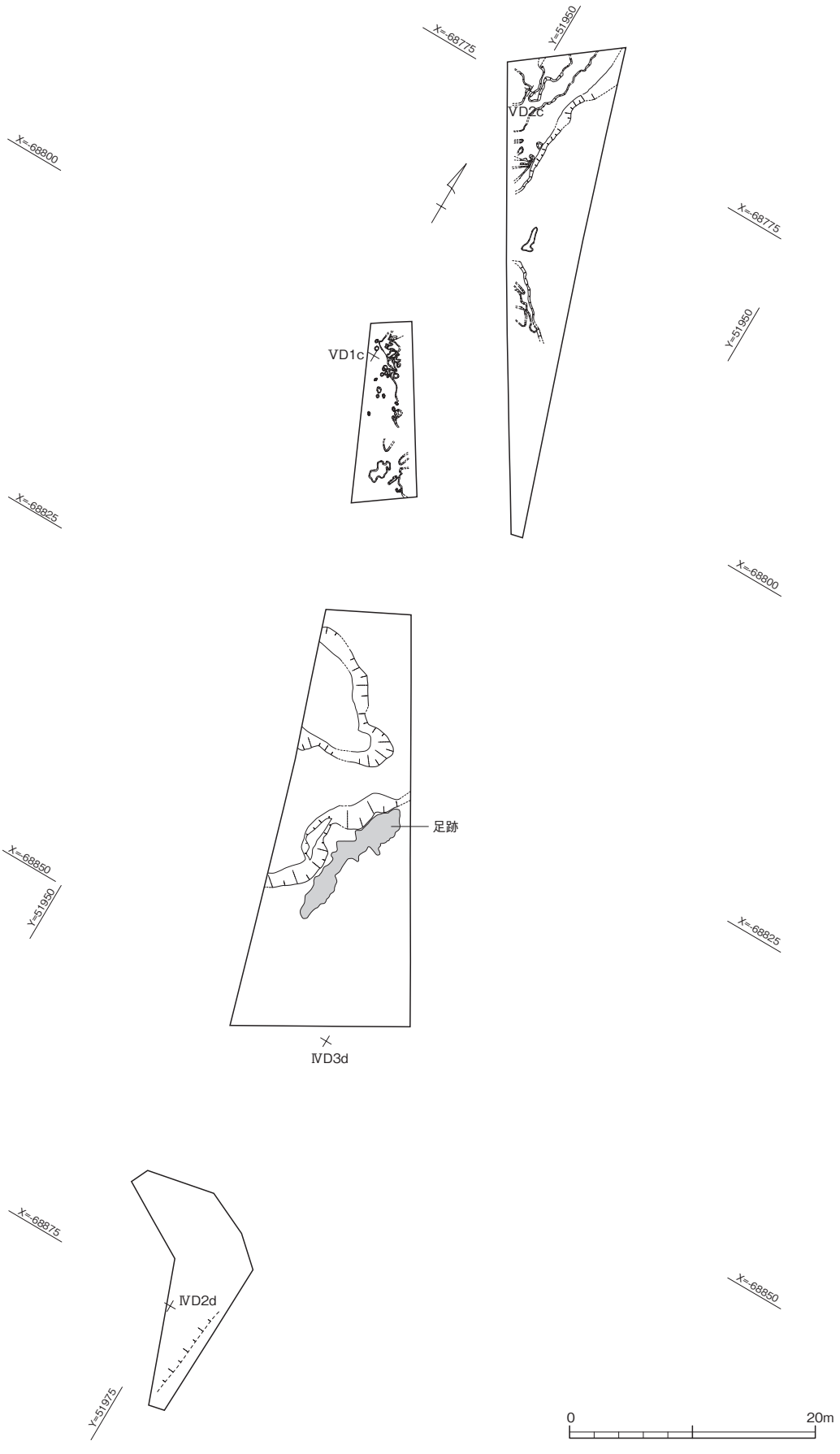
Ｃ区は矢野遺跡の中心から北西にあたり，「八野神社」の南側に位置する（第10図）。幅35m，長さ約75mを測り，調査面積は約2,400㎡である。遺構の密度はＢ区に次いで高い。弥生時代から近世までの各種遺構を確認した。弥生時代の遺構は前期の土坑群や，中期から後期にかけての遺構を検出した。古墳時代の遺構としては，前・中・後期の溝や土坑などを検出した。中・後期の遺構は数が少ない。古代から中世にかけて遺構は数が増加するが，近世以降は減少する。

Ｄ区は，新内藤川拡幅部分と現在の矢野集落の西側を南北に走る道路に沿う部分である（第12・13図）。南北220mに及び，調査面積は約3,000㎡である。道路により，大小７箇所に分割される。調査の結果，Ｄ区は矢野遺跡の西側にあった自然河道跡にあたることが確認された。この自然河道は最大幅約50m，深さ約2.7mの規模である。自然河道跡は，弥生時代前期から古代までの堆積が確認され，膨大な量（コンテナ約1,000箱）の遺物が出土した。特に，最下層（Ⅴ層）からは県内でも数少ない弥生前期の土器，石器，木器などが出土した。Ｄ区の遺構は少なく，自然河道左岸で弥生時代前期の土坑を１基確認したのみである。また，古墳時代前期の堆積段階で出来た足跡を検出した。自然河道が埋没した古代以降，調査区東側で中近世の遺構を確認した。墨書土器，漆器椀，石帯などが出土している。また，時期ははっきりしないが，地震に伴う噴砂現象がみられた。

Ｅ区は自然河道の左岸側にあたる（第14図）。調査区は東西約190mを測るが，道路により３箇所に分割される。調査区西部までの約100mに，試掘調査時に遺構・遺物が確認されなかった部分がある。調査面積は約1,500㎡である。自然河道に近い東側で，弥生時代前期の遺構を検出した。遺構密度は低く，西側では時期のはっきりしない自然流路や溝を確認した。西端の調査区では地山面の標高が1.4mと低く，現代まで居住に適さない環境だったと考えられる。



第12図　Ｄ区全体図北半分（1：500）



第13図　Ｄ区全体図南半分（1：500）

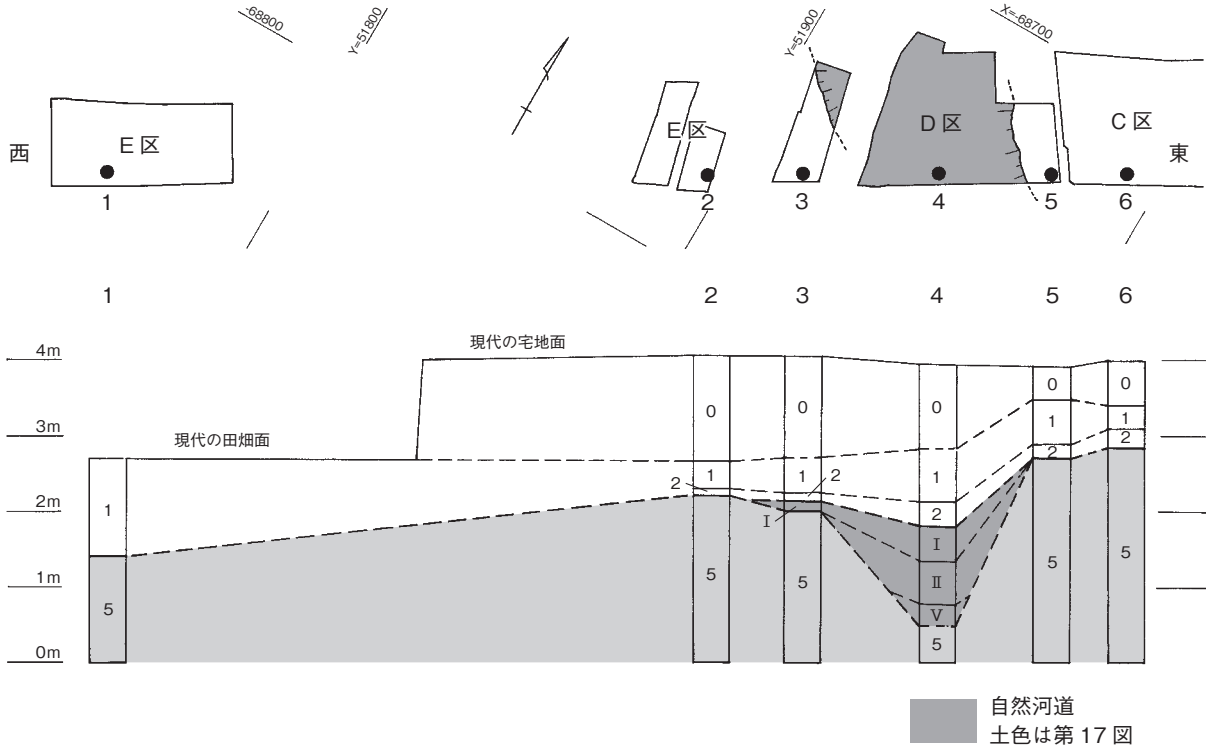
第14図　E区全体図（1：500）

第３節　基本層序と自然河道の層序

東西に長い調査区（Ａ～Ｅ区）の南壁土層断面を基準に，それぞれの調査区の遺物包含層を分層し，基本層序を設定した。また，Ｄ区で検出した自然河道については層序を別項に示した。

１．基本層序

現地表面の標高は宅地部分が約４ｍ，水田部分はＡ区が3.0m，Ｄ区が2.8m，Ｅ区が2.7ｍで西へ向かって低くなる。宅地部分の造成による盛土は，Ａ区・Ｂ区・Ｃ区で約40～80㎝，Ｄ区の東側で約40



第15図　基本層序A～E区　東西１（平面1：2,000　土層1：100）

cmである。また，Ｄ区中央部からＥ区東側までは約1.1～1.4mである。現代の造成土よりも下の近現代の耕作土から地山までを５層に分けた。

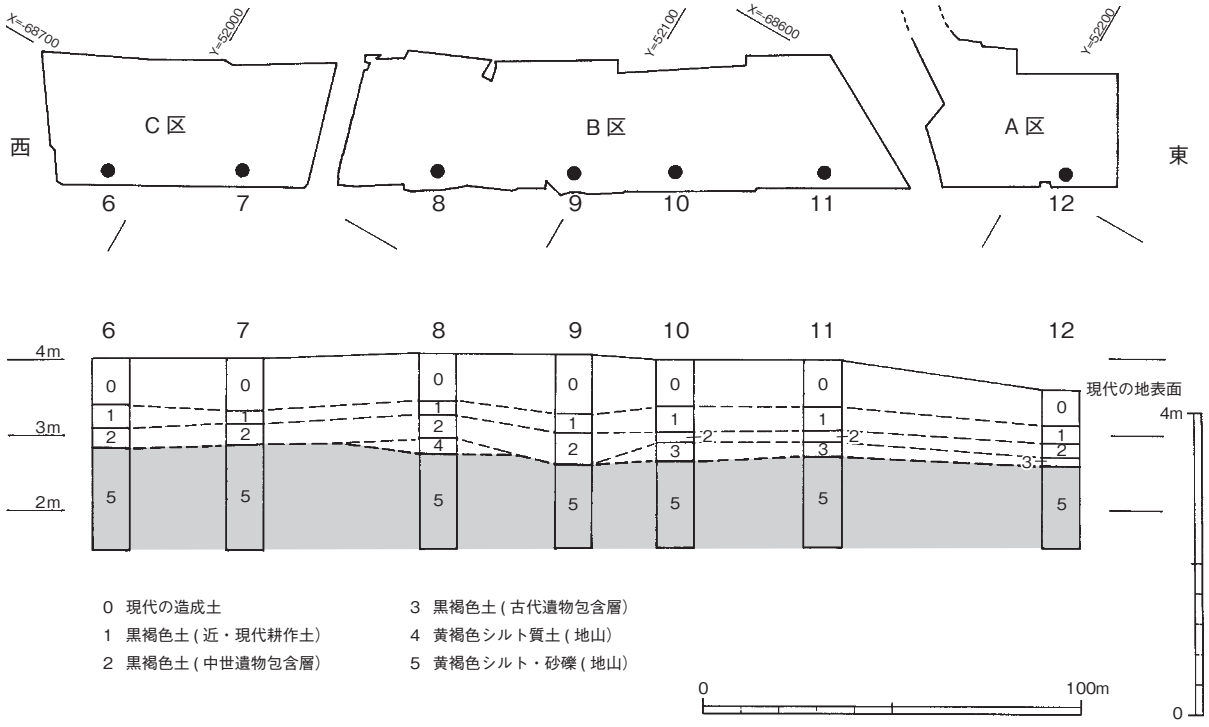
１層は近現代の耕作土である。黒褐色土を主体とする土層で，約20～40cm堆積する。

２層は中世の遺物包含層である。小砂礫を多く含む黒褐色土を主体とする土層で，Ａ区とＢ区の東側，及びＥ区で厚さ約10cm，Ｂ区西側とＣ・Ｄ区で20～40cm堆積する。Ｃ区とＥ区，Ｂ区の中央部では地山（５層）直上に堆積している。上面が中世末から近世の遺構検出面である。

３層は古代の遺物包含層である。黒褐色土を主として構成され，Ａ区ではソフト感が増す。Ｂ区中央部以東で確認され，Ａ区で約20cm，Ｂ区で約10～30cm堆積する。上面が中世の遺構検出面である。

４層は黄褐色シルト質土で，20cmほどの厚みをもつ無遺物層である。Ｂ区の西側（８地点）でのみ確認される。縄文時代晩期から弥生時代前期までに堆積したと考えられる土層である。標高３ｍの上面が弥生時代前期の遺構検出面である。

５層は縄文時代晩期までに堆積した地山である。黄褐色シルトおよび砂礫からなり，Ｄ区自然河道の左岸以西は砂質土が堆積する。Ｂ区では５層上面が縄文時代晩期の遺構検出面である。標高は，Ｂ区西側とＣ区東側（７地点）が最も高く2.9mを測り，ここから東と西に向かって緩やかに下る。Ａ区東端（12地点）で2.6m，Ｄ区自然河道の左岸側が２ｍを測る。Ｅ区東側（２地点）で2.2mとわずかに上がるが，Ｅ区西端（1地点）で1.4mと下る。



第16図　基本層序A～E区　東西２（平面1：2,000　土層1：100）

２．自然河道の層序

Ｄ区の自然河道は，東西の土層断面（４地点）以外に13地点から18地点の土層を南北方向につなげ，埋土を分層した。堆積の最終段階である古代をⅠ層とし，堆積の開始時期を弥生時代前期のⅤ層とした。なお，現代の造成土から中世の包含層までは基本層序と同じである。

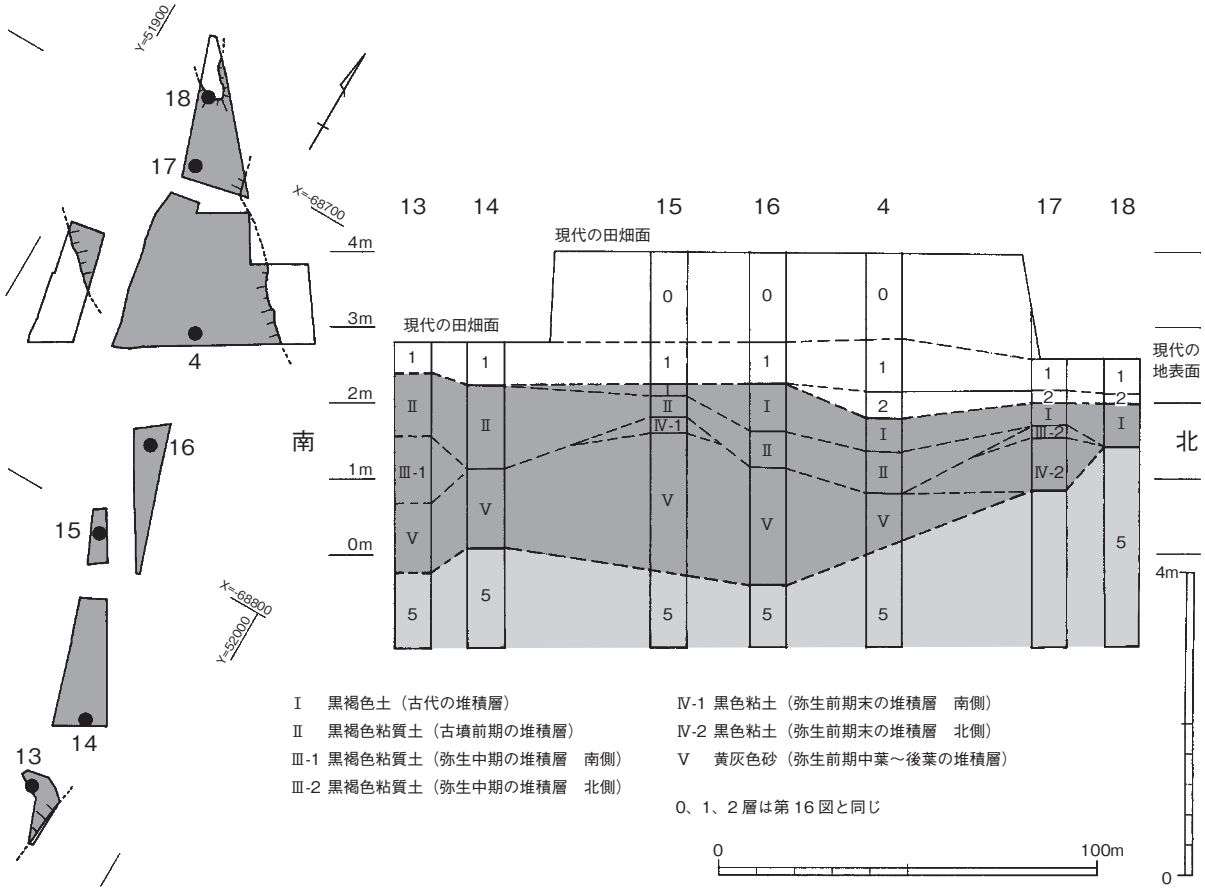
Ⅰ層は古代に相当する。砂礫を多く含む黒褐色土を主体とする土層で，砂と粘土を混合する。南側では堆積がなく，中央部から北側で約15～60㎝堆積する。上面が中世から近世の遺構検出面である。

Ⅱ層は古墳時代前期に相当する。黒褐色粘質土を主体とする土層で，粘質土の間にシルト層または砂層が互層状に堆積する。流水と滞水を繰り返しながら堆積したものと考えられる。北側（17･18地点）を除いて全域で堆積が確認される。中央部（15･16地点）でやや薄くなるが，約30～100㎝の厚みをもって堆積し，最深部で標高0.4ｍに至る。土器・木器・石器などの遺物を大量に包含する。

Ⅲ層は弥生時代中期に相当する。黒色粘質土を主体とする土層で，約80㎝堆積する南側（13地点）をⅢ－1層，約20㎝堆積する北側（17地点）をⅢ－２層とした。中央部（14～17地点）では堆積がない。

Ⅳ層は弥生時代前期末に相当する。黒色粘土を主体とする土層で，砂層を混合する。中央部（15地点）をⅣ－1層，北側（17地点）をⅣ－２層とした。南側と中央部の一部では堆積がみられない。

Ⅴ層は弥生時代前期中葉～後葉に相当する。砂層を主体とする土層で，砂質土を混合する。約20～150㎝の厚みをもって堆積し，中央部（15・16地点）が厚く，南側と北側で薄くなる。Ⅴ層下面は最深部で標高－0.5ｍ（深さ約2.7ｍ）に至る。土器を中心に遺物を大量に包含する。



第17図　基本層序Ｄ区自然河道　南北（平面1：2,000　土層1：100）

第５章　遺構の詳細

今回の矢野遺跡第９次調査では，矢野微高地の北側を東西に帯状に長い調査区を設け，そこに1850基の遺構を確認した。本報告では，その中から年代の判断資料があるなど主要な275基の遺構を抽出し報告する。本章では，抽出した遺構について，１縄文時代晩期，２弥生時代前期，３弥生時代中期，４弥生時代終末期～古墳時代前期，５古墳時代中期～終末期，６古代，７中世，８中世末～近世前半，９近世以降，10時期不明の節に分け，調査区ごとに述べていく。

第1節　縄文時代晩期の遺構

縄文時代晩期の遺構は，Ｂ区西側で土坑を３基確認した。他では検出されていない。

１．Ｂ区の遺構

Ｂ区は調査区の中で最も標高が高く，北東のＡ区や南西のＤ区方向へ緩やかに下がる。遺構検出地点には，無遺物層の黄褐色シルト層（基本層序の４層）が10㎝ほど堆積していた。土坑３基はいずれもこの土を除去後，標高2.8ｍの黄灰色砂層（基本層序５層，以下「５層」と記す）の上面より検出した。

土坑SK2673（第18図　図版15－３　160－１）

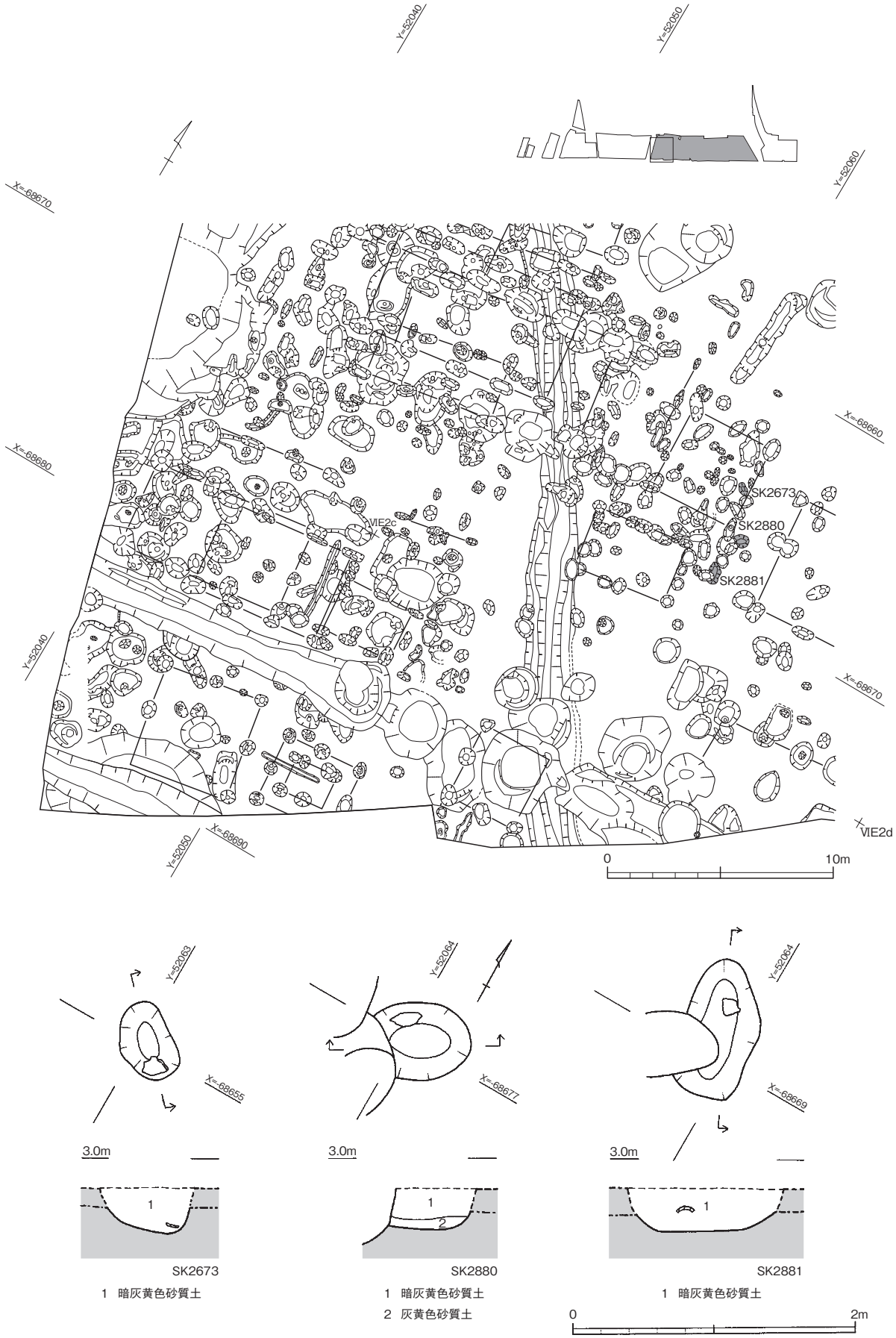
SK2673はＢ区の西,ⅦE2cグリッドに位置する。平面形が0.57ｍ×0.35ｍの楕円形をなす土坑である。断面形は逆台形状をなす。深さは0.35ｍであったが，0.2ｍ分が残存している。埋土は１層で，下部より縄文時代晩期の粗製深鉢の胴部破片が出土した。

土坑SK2880（第18図　図版15－２　160－２）

SK2880はＢ区の西,ⅦE2cグリッドに位置する。平面形が0.6ｍ×0.55ｍの楕円形の土坑である。後世に南西側が壊されている。断面形は逆台形状をなす。深さは0.3ｍである。埋土は２層に分層でき，第２層の床面ちかくで縄文土器の粗製深鉢の破片が出土した。

土坑SK2881（第18図　160－２）

SK2881はＢ区の西,ⅦE2cグリッドに位置する。平面形は１ｍ×0.55ｍの楕円形で後世に南西側が壊されている。断面形は逆台形状をなす。深さは0.3ｍである。埋土は1層で，縄文土器の粗製深鉢の破片が出土した。SK2880とSK2881より出土した土器は同一個体であった。



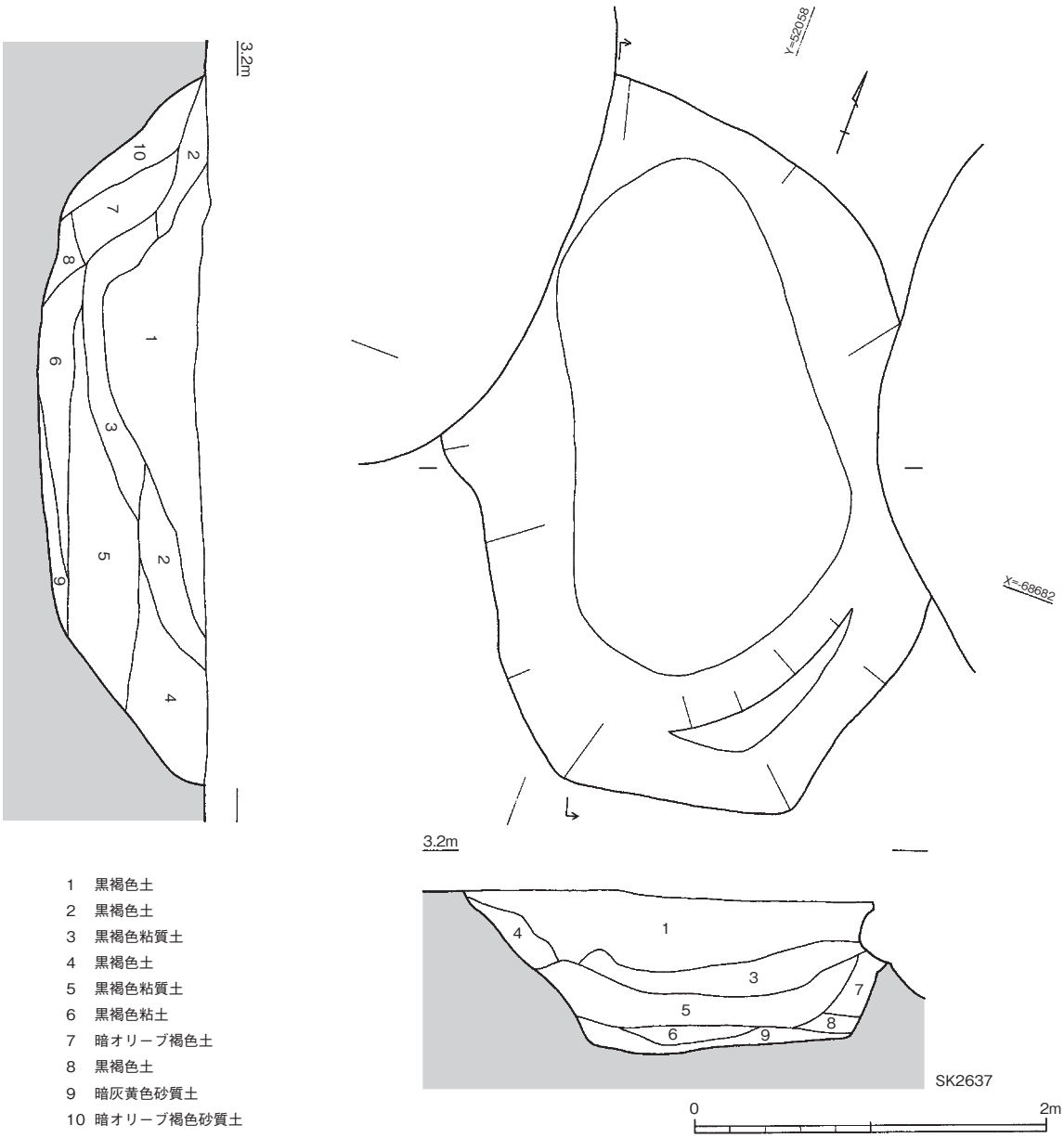
第18図　縄文晩期Ｂ区遺構図（全体図1：250　土坑1：40）

第２節　弥生時代前期の遺構

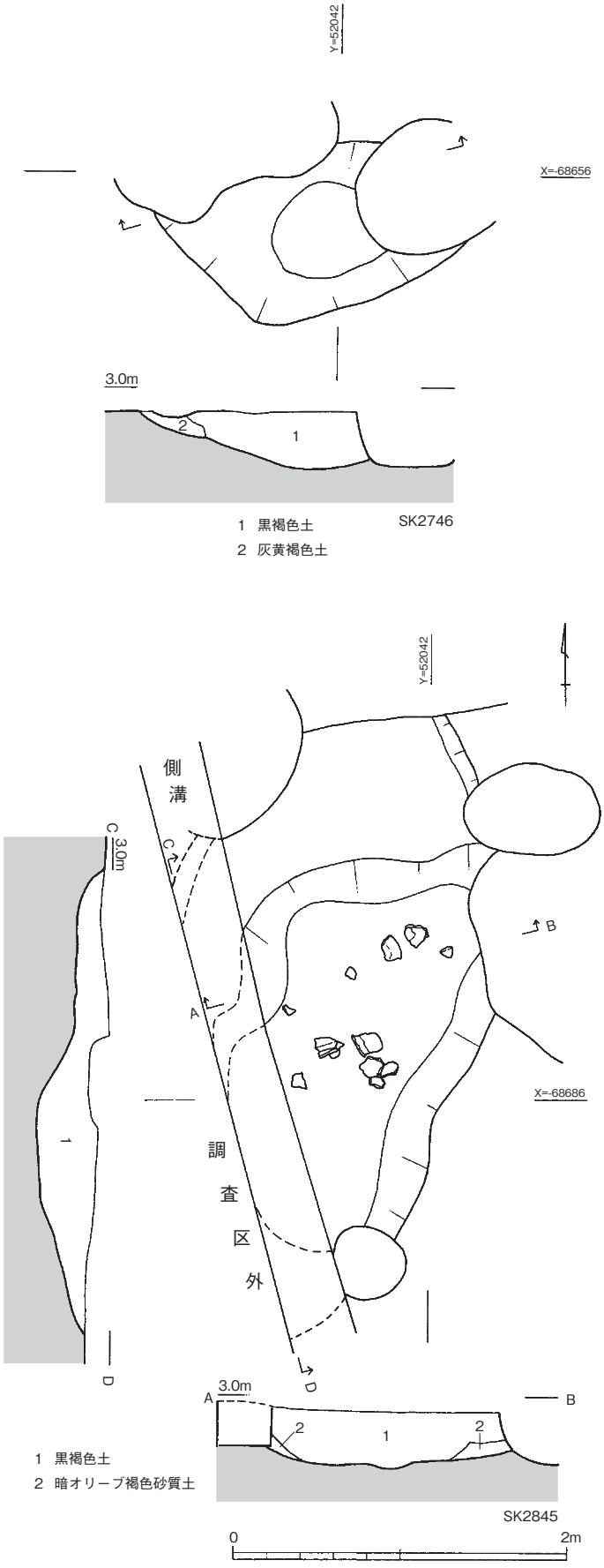
弥生時代前期の遺構はＢ区からＥ区に分布する。土坑17基，溝２条を確認した。また，Ｄ区には北へ向かって流れる幅約50m，深さ約2.7mの自然河道がある。自然河道については第７章にて報告する。

１．Ｂ区の遺構

Ｂ区では土坑が５基，溝が２条確認された。土坑はすべて溝の西側で検出された。検出面（標高2.98～2.8m）は主に５層である。



第19図　弥生前期Ｂ区土坑実測図１（1：40）



第20図　弥生前期Ｂ区土坑実測図２（1：40）

土坑SK2637（第19・22図　図版20－１・２　161－１～165－８）

SK2637はＢ区の西，ⅦE1cグリッドに位置し，SD2626の西約２ｍのところに掘られている土坑である。長径4.4m，短径2.7ｍの楕円形をなす。断面形は逆台形状で，深さは0.9ｍである。埋土は10層に分層した。全体に小炭化物を含み，第６層の黒褐色粘土内には腐食物が多く含まれる。

出土遺物は上層から下層まで弥生土器や石器が散在して出土した。遺構の性格は廃棄土坑の可能性が考えられる。

土坑SK2746（第20・22図）

SK2746はＢ区西端の北壁，ⅦE2bグリッドに位置する。弥生時代前期の溝SD2626の西方2.5ｍの地点で標高2.85ｍの５層上面にて検出した。後世に一部を壊されている。長径1.8m，短径１ｍ弱の長楕円形の土坑である。断面は浅い三日月状で，深さは0.35ｍである。遺構の性格は不明である。埋土は２層に分層できた。

埋土の第１層から弥生時代前期の土器が若干出土したが，いずれも小片で図示し得るものはなかった。

土坑SK2750（第22図　160－３～８）

SK2750はＢ区の北西，ⅦE2bグリッドに位置する。後世に南側を壊され，北側は調査区外であった。推測すると平面形は円形で，長径は２ｍ，短径は１ｍを測る。断面形は三日月状で，深さは約0.2ｍである。遺構の性格は不明である。

第１層より弥生土器と石器が出土した。

土坑SK2845（第20・22図　図版21－１　160－９～13）

SK2845はＢ区の西壁，ⅦE1bグリッドに位置する。後世に一部を壊されているうえに西側が調査区外であるため，長さ３ｍ×幅1.7ｍ分の調査にとどまった。推測すると歪な長楕円形の平面形をと思われる。断面形は三日月状をなすが，北側は深さ0.2ｍほどで，南西部が深さ0.4ｍある。埋土は２層に分層できた。遺構の性格は不明である。

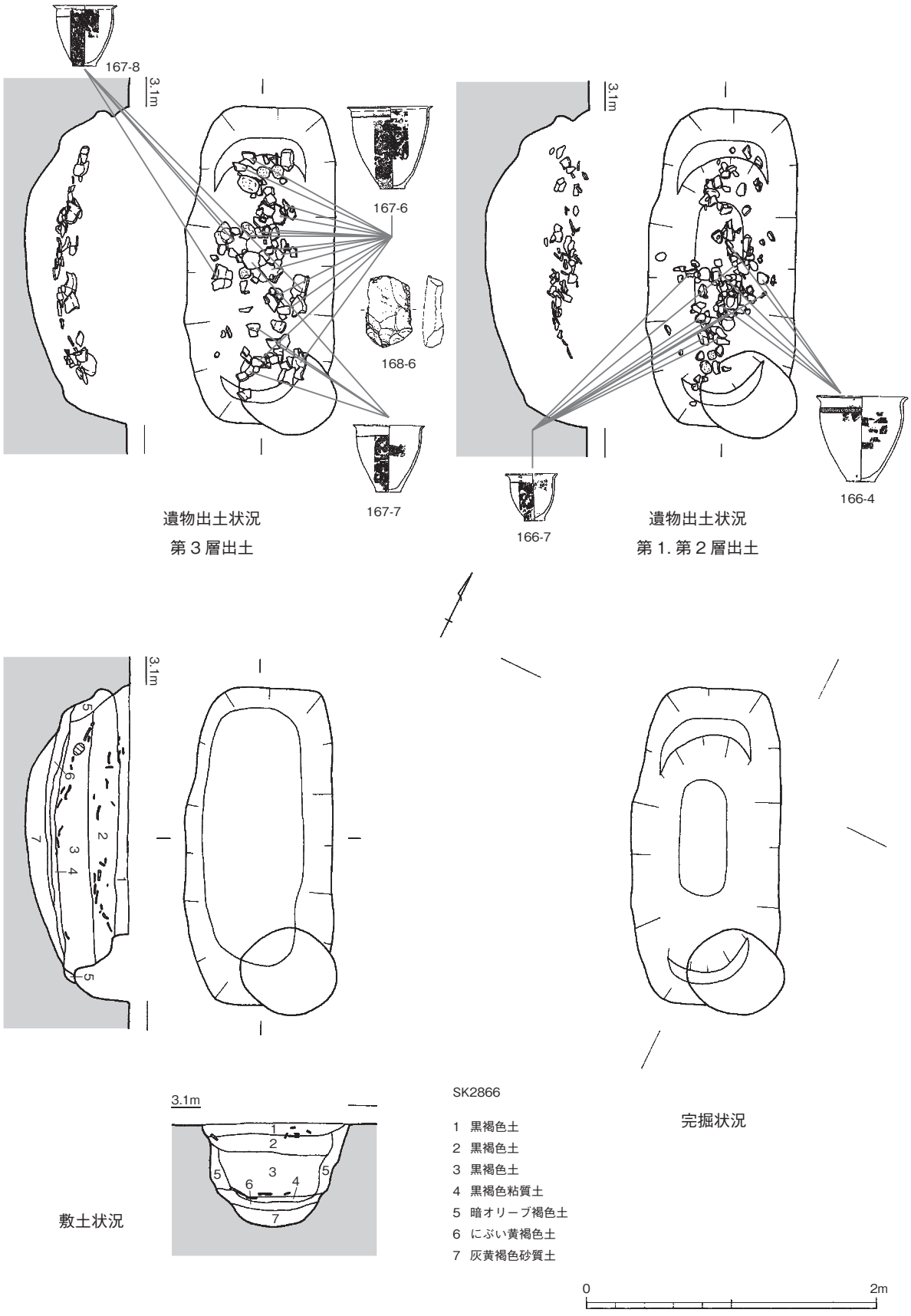
第１層上部から弥生土器，底面近くから黒曜石の石鏃が出土した。

土坑SK2866（第21・22図　図版19－１～４　166－１～168－７）

SK2866はＢ区の南西端，ⅦE1bとⅦE1cグリッドにまたがる。遺構の南側の一部を壊されているが，長径2.2ｍ，短径１ｍの隅丸長方形をなす。断面形は東側と西側の壁がほぼ垂直に落ち，底は匙状に凹む。北側と南側に三日月状の平坦面があり，底から平坦面まで約0.2ｍである。全体の深さは0.7ｍを測る。埋土は７層に分層でき，土壙墓の可能性を考えた。底には灰黄色砂と黄褐色シルトの混合土（第６・７層），第４層はやや粘質な黒褐色土で，第３層との境界には炭化物が多く見られた。第５層は裏込め土状で，６層上面に木棺が据えられた可能性がある。

埋土から弥生土器と石器が多数出土した。それらは，出土層位から２群に分けられる。第１・２層出土の上層出土遺物群と第３・４層出土の中層出土遺物群である。これら２群は明確に土層で分離されている。このような遺物出土状況は珍しく，遺構の性格と密接にかかわっていると考えられる。現状では，土壙墓とは断定せずに，それ以外の性格をもつ可能性も視野に入れて類例をさがした。

土壙墓の可能性が考えられたため土質分析をおこなった。その結果，第３層と第４層の境界で高濃度のリンが帯状に分布することが判明し，動物遺体などに由来したリンの可能性を示唆された（第10章第４節参照）。



第21図　弥生前期Ｂ区土坑実測図３（1：40）

溝SD2626（第22図　図版17－１・２，18－１～３，70－５　170－１～186－４）

SD2626はＢ区の西，ⅥE1c，2b，2cグリッドに位置し，調査区の北西から南西（Ｎ－35°－Ｗ）へ直線的に走る溝である。検出面の標高は北側が2.66m，南側が2.86mで４層上面から掘りこまれる。調査区内で確認した長さは37.5m，上端幅1.2～2.2m，底面幅0.4～0.8m，深さは0.8m前後である。底面の標高は北側が2.40m，南側は2.25mである。断面は２段の逆台形である。

埋土は３層に分層できた。第３層では北西から南東へ水が流れたことを示す，砂と粘土の混合堆積層を確認した（第10章第５節参照）。その後に堆積した第１・２層は粘質土で常時水が流れていたわけではなく空濠状態が続いたと考えられる。遺物が出土したのは主に第１層中で，弥生土器や土笛，石器がある。第２・３層は，遺物はほとんどなかった。

溝SD2371（第23図　図版16－１～３　169－１～18）

SD2371はＢ区の中央，ⅥE3c・3d，ⅥF3a・3bグリッドに位置する。調査区の北西から南東（Ｎ－80°－Ｗ）へ直線的に走る。検出面の標高は北西側が2.43m，南東側が2.86mで標高2.9mの５層上面で掘りこまれる。調査区内で確認した長さは約55m，上端幅3.2～4.0m，底面幅0.9～1.2m，深さは0.6～0.7mを測る。両肩にステップを持ってなだらかに下り，深さ0.3mから深く落ち込む。断面形は２段の逆台形状である。底面の標高は北西側が2.2m，南東側が2.34mで高低差は小さい。

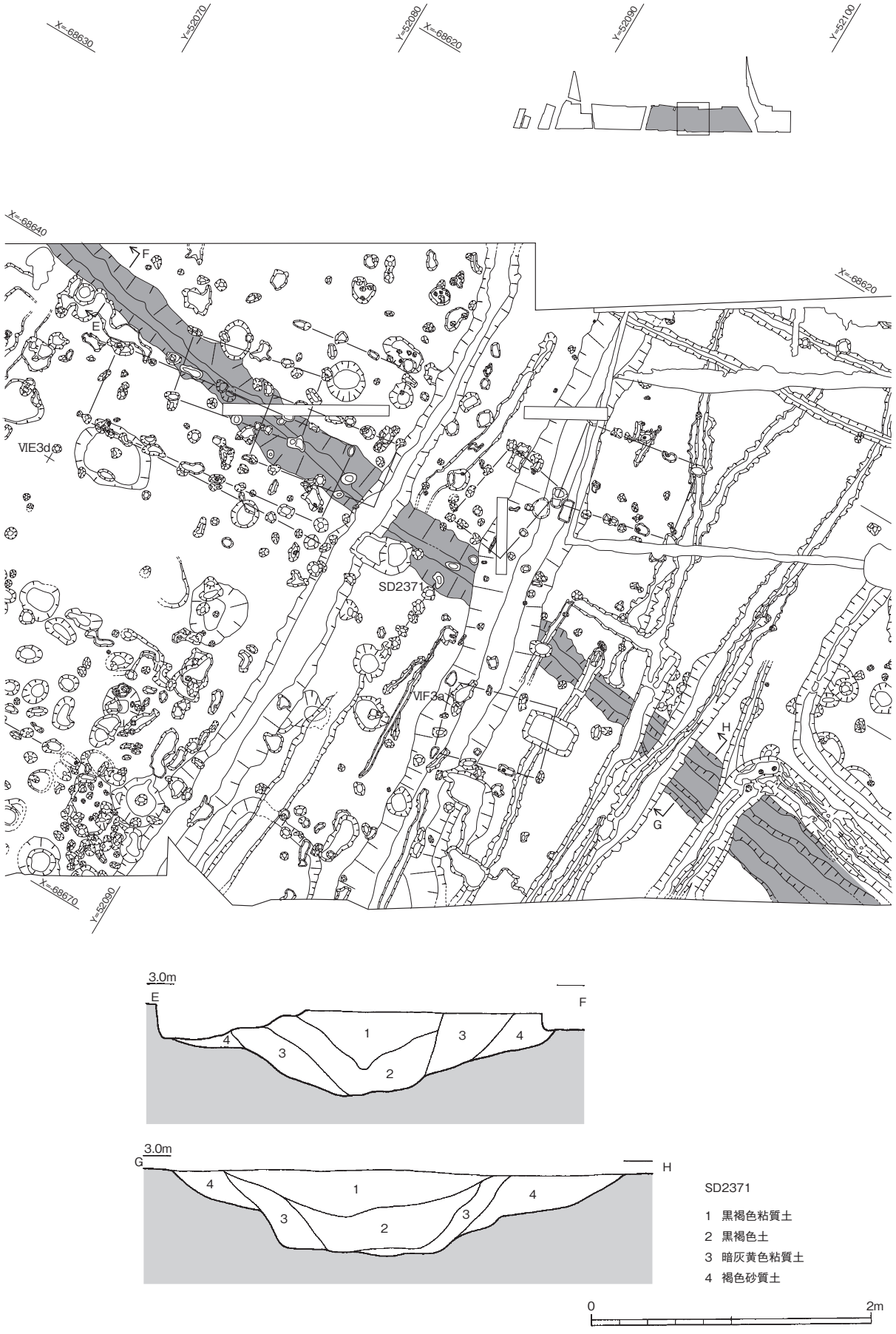
埋土は４層に分層でき，数回の掘り直しが行われた考えられる。掘り直していく過程で小規模になり浅くなってゆく。

遺物は主に第１層から出土し，弥生土器の破片などがある。第２～４層では遺物の出土はわずかである。

SD2371 とSD2626

SD2626は当該期の集落の東側を区画する区画溝であった可能性が高い。同様に，同時期に埋没したと考えられるSD2371も同じく区画溝と考えている。

第22図　弥生前期Ｂ区遺構図１（全体図1：300　溝土層断面図1：40）



第23図　弥生前期Ｂ区遺構図２（全体図1：300　溝土層断面図1：40）

２．Ｃ区の遺構

Ｃ区では土坑を７基確認した。これらの遺構の検出面（標高3.0～2.8m）は５層である。

土坑SK3049（第25・26図　187－１～７）

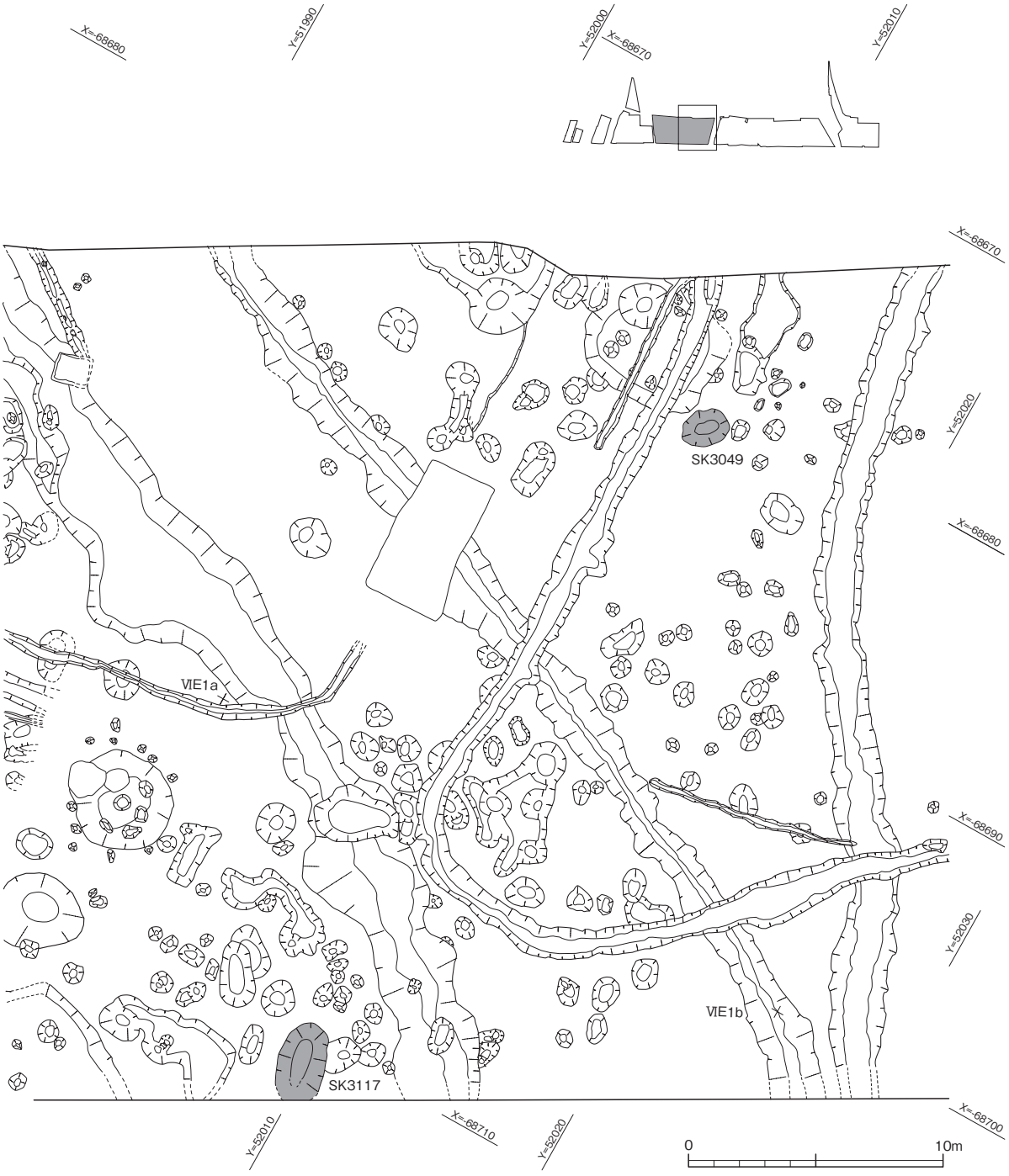
SK3049はＣ区の東，ⅦE1aグリッドに位置する。平面形は長径1.9m，短径1.45mの楕円形である。断面形は逆台形状で，深さは0.4mである。埋土は３層に分層できた。第１・２層で弥生土器の破片がまとまって出土した。

第24図　弥生前期Ｃ区遺構図１（1：250）

土坑SK3117（第25図）

SK3117はＣ区の東，VE4aグリッド，調査区南壁際に位置する。平面形は長楕円形の土坑で，南端部が調査区外となる。長径は2.5m以上，短径は1.9m，深さは0.56mである。断面は逆台形状である。

出土遺物は弥生時代前期の甕の底部や肩部がある。いずれも小片で図示していない。



第25図　弥生前期Ｃ区遺構図２（1：250）

土坑SK3123（第24・26図）

SK3123はＣ区の西，南壁近くのVD4dグリッドに位置する。古墳時代前期の大型土坑SX3120の底面にて検出した土坑である。平面形は長径0.9m，短径0.7ｍの楕円形をなす。断面形は逆台形状をなす。埋土は４層に分層できた。

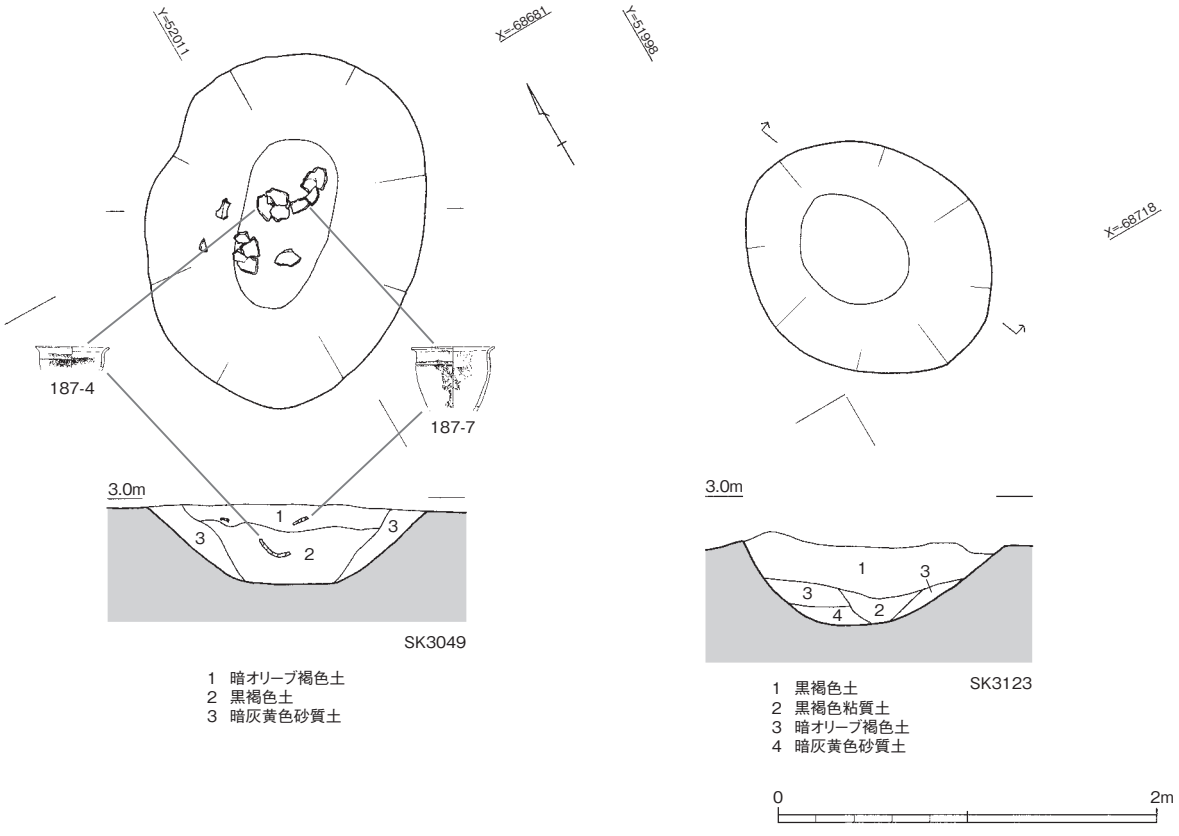
埋土各層から弥生時代前期の土器片が出土しているが，いずれも小片で図示していない。

土坑SK3149（第24・27図　図版51－１～４　187－８～189－10）

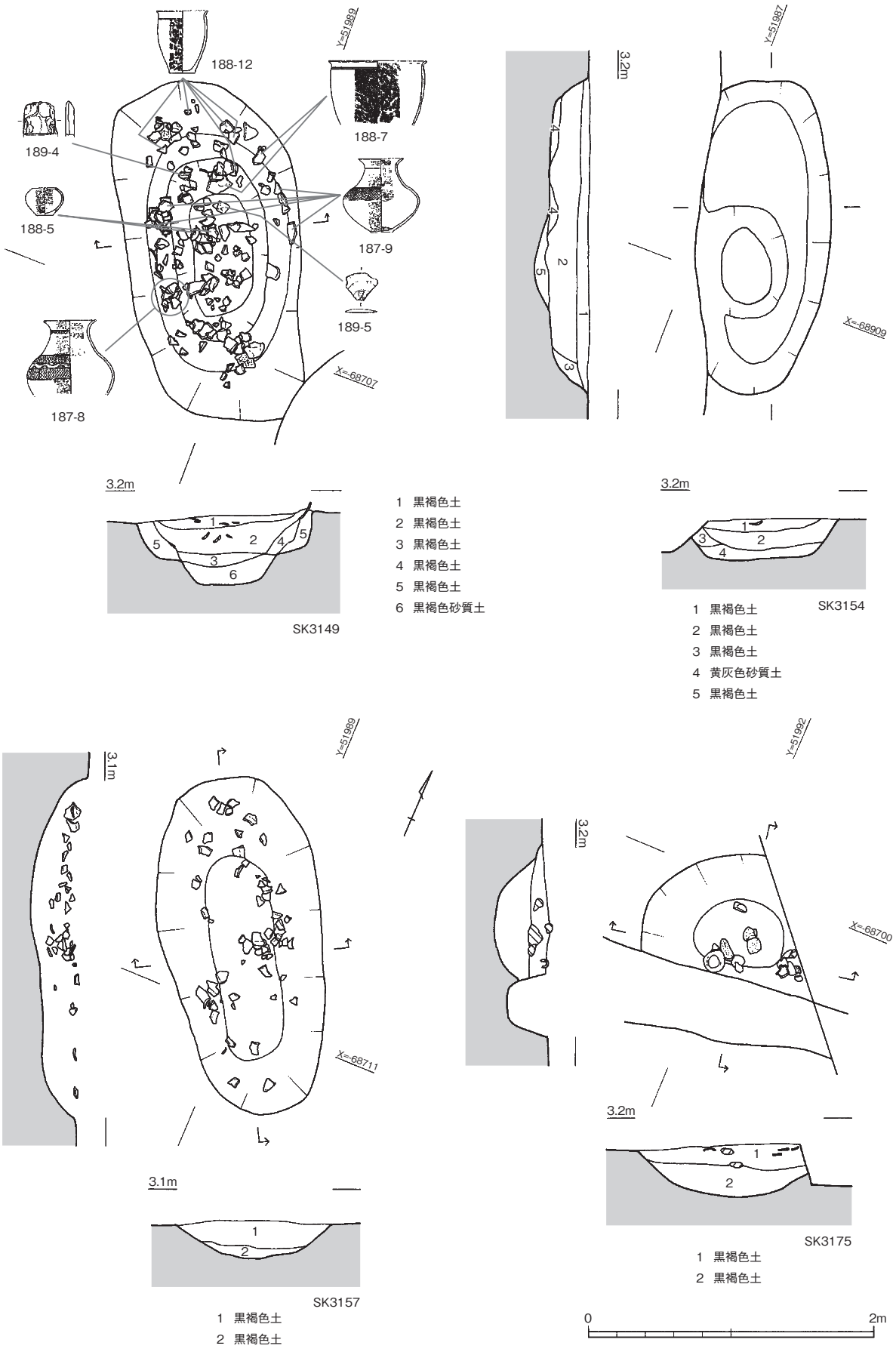
SK3149はＣ区西側のほぼ中央，VD4dグリッドに位置する。平面形は長楕円形をした，２段に掘りこまれた土坑である。長径2.4m，短径1.2m，深さ0.5ｍである。

埋土は６層に分層できた。第１・２層で弥生時代前期の壺や甕の破片や石器が多数出土した。また，南と北側の床面近くで径20㎝大の軽石を数個確認した。

出土した土器のなかには焼成失敗品とみられるものや，復元できない多数の破片がある。これらのことから，廃棄土坑としての要素が強い遺構と考えられる。



第26図　弥生前期Ｃ区土坑実測図１（1：40）



第27図　弥生前期Ｃ区土坑実測図２（1：40）

土坑SK3154（第24・27図　図版51－１，52－１）

SK3154はＣ区西側のほぼ中央，VD4dグリッドに位置し，SK3149に近接する。遺構西側は壊されている。平面形は長楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径2.2m，短径0.9m，深さは0.3mである。

埋土は５層に分層できた。第１層で弥生時代前期の土器が出土した。いずれも小片で図示していない。また，第２層から拳大から人頭大の軽石を数個検出した。

土坑SK3157（第24・27図　図版51－１，52－２　190－１～19）

SK3157はＣ区西側のほぼ中央，VD4dグリッドに位置し，SK3154に隣接する。遺構南側の上面は壊されている。平面形は長楕円形で，断面形は浅い逆台形状をなす。長径2.35m，短径1.15m，深さは0.3mである。

埋土は２層に分層できた。第１層から弥生土器や石器などが出土した。

土坑SK3175（第24・27図　191－１～７）

SK3175はＣ区西側のほぼ中央，VD4dグリッドに位置する。遺構の３分の２が壊されている。推定で平面形は楕円形で，断面形は逆台形状をなす。深さは0.4mである。

埋土は２層に分層できた。第１層から弥生時代前期の土器片が出土した。その中の壺の１片がSK3175から約10m南に位置するSK3135上層出土の土器片と接合した。SK3135は古墳時代終末期の土坑と判断しており，SK3175からSK3135へ遺物が流れ込んだと推定される。このことから，SK3175の上部が古墳時代終末期までに削平されたと考えられる。

また，土坑中央部では拳大の軽石が数個まとまって出土した。

以上の土坑のうち，SK3149は廃棄土坑，それ以外は性格不明である。

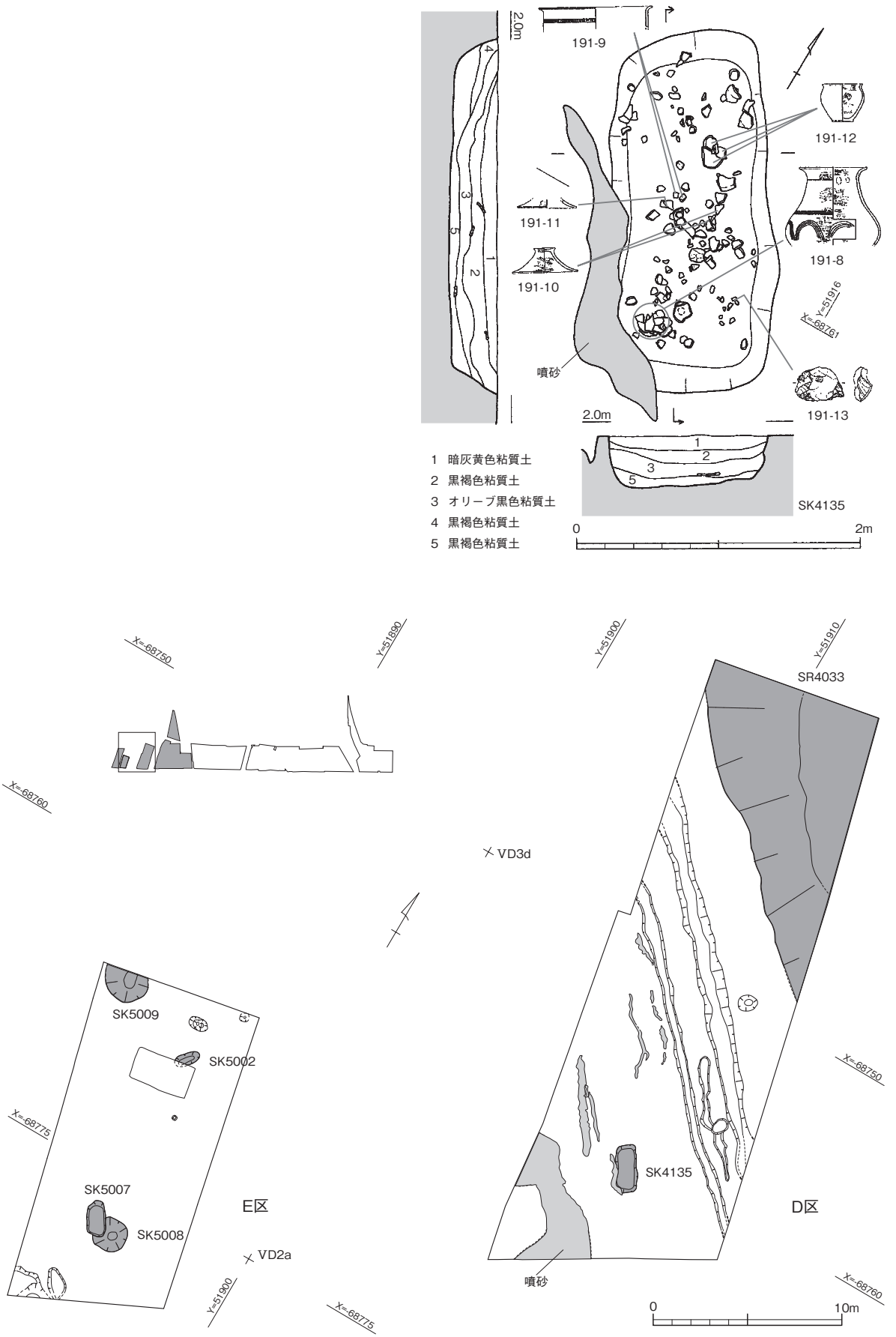
３．Ｄ区の遺構

Ｄ区では南北に大きな自然河道SR4033が流れていたため遺構は少ない。Ｄ区西部の自然河道左岸にて土坑が１基確認された。

土坑SK4135（第28図　図版65－１・２　191－８～13）

SK4135はＤ区の西，VD2aグリッドに位置する。検出面は５層上面（標高1.9m）である。南西側の一部が壊されている。平面形は長楕円形をなし，断面形は逆台形をなす。長径2.55m，短径1.1m，深さは0.35mである。

埋土は５層に分層できた。遺物は各層から出土し，弥生土器や石器がある。



第28図　弥生前期Ｄ区・Ｅ区遺構図（全体図1：300　D区土坑1：40）

４．Ｅ区の遺構

Ｅ区は自然河道の左岸側にあたる。当該期の遺構は自然河道に近い東側で土坑が４基確認された。これらの遺構の検出面（標高2.1～2.3m）は５層である。

Ｅ区西側では遺構は検出されなかった。

土坑SK5002（第28・29図）

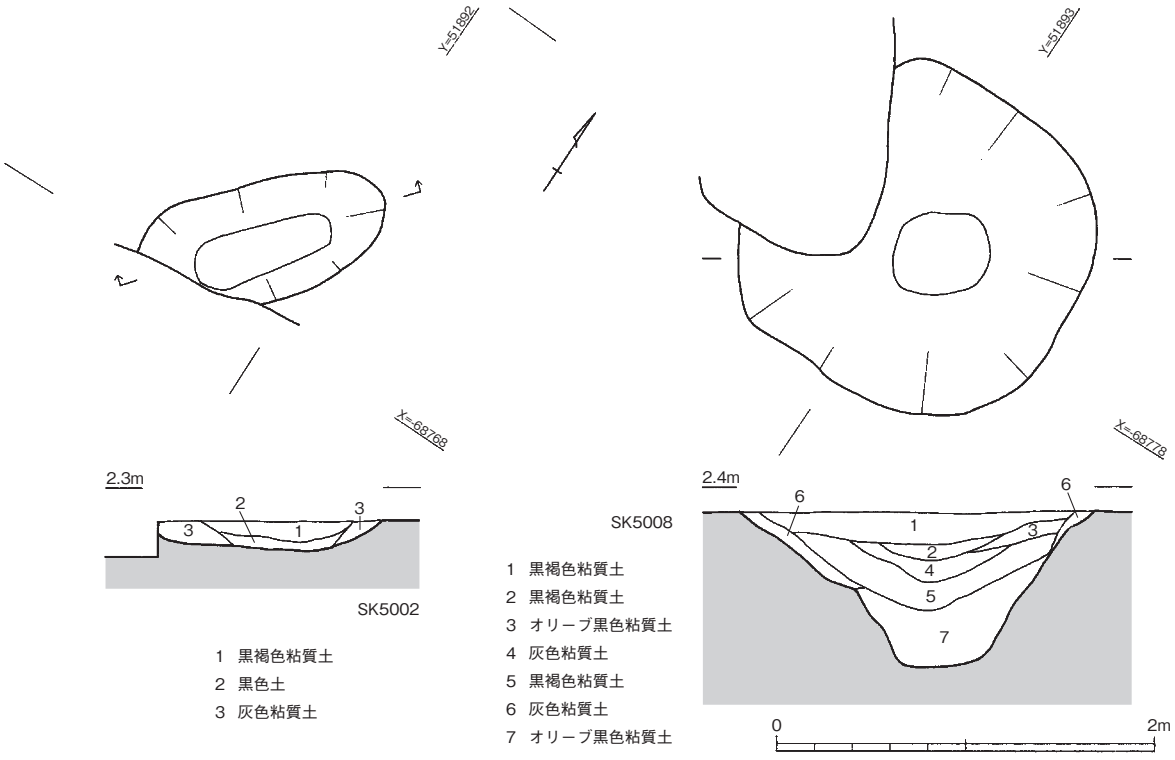
SK5002はＥ区の東，VC2dグリッドに位置し，遺構南側は試掘坑に壊される。平面形は長楕円形をなし，断面形は逆台形状をなす。長径1.3m，短径0.6m，深さは0.16mである。他に対応するピットが無い。

埋土は３層に分層できた。第２層は弥生時代前期の土器の破片が出土し，多くの炭化物を含んでいた。土器はいずれも小片で図示していない。

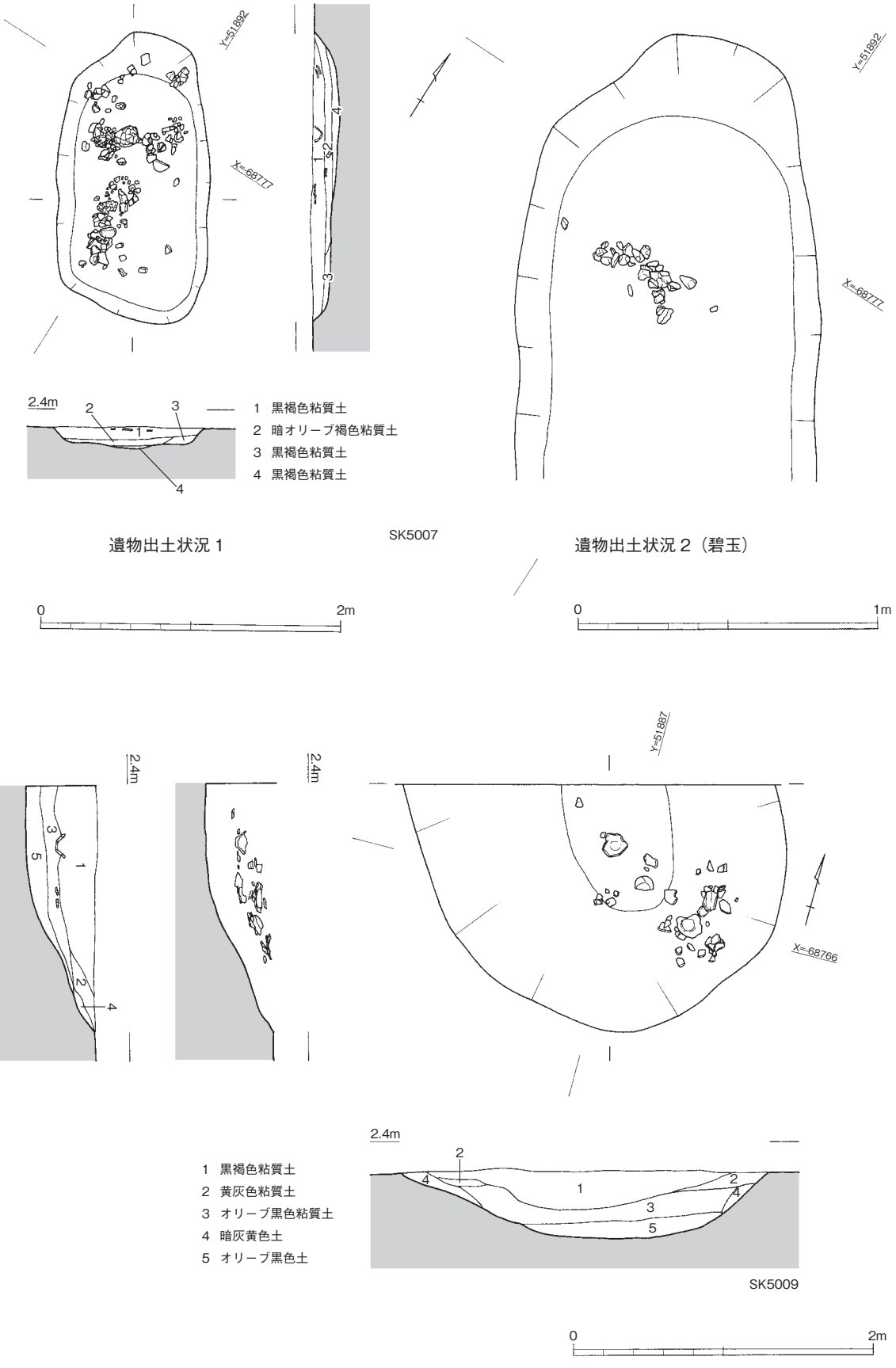
土坑SK5007（第28・30図　図版69－１～４　192－１～194－Ｃ）

SK5007はＥ区の東，VC2dグリッドに位置する。平面形は長楕円形をなし，断面形は逆台形状をなす。長径1.94m，短径1.0m，深さ0.17mである。

埋土は４層に分層できた。第１層から弥生時代前期の土器の破片や石器が出土した。第２層から碧玉片がまとまって出土した。これらの剥片はいくつか接合するものがあり，一つの母岩（核）から剥離されたものと考えられる。



第29図　弥生前期E区土坑実測図１（1：40）



第30図　弥生前期E区土坑実測図１（1：40　1：20）

土坑SK5008（第28・29図　図版70－３・４）

SK5008はＥ区の東，VC2dグリッドに位置し，SK5007に西側を壊されている。平面形は隅丸正方形をなし，断面形は２段掘りの逆台形状をなす。一辺の長さ1.9m，深さ0.85mである。深さ0.4mのところから垂直気味に落ち込む。底面からは若干湧水が認められる。素堀の井戸の可能性が考えられる。

埋土は７層に分層できた。各層から弥生時代前期の土器片がわずかに出土した。いずれも小片で図示していない。。

土坑SK5009（第28・30図　図版70－１・２　195－１～10）

SK5009はＥ区の東，VC2dグリッドに位置する。推定で平面形は長楕円形をなし，断面形は逆台形状をなす。深さ0.45mである。

埋土は５層に分層できた。そのうち，第１～３層から弥生時代前期の土器片が出土した。また，第３層からの炭化物が出土した。

第１～３層で弥生時代前期の土器破片がまとまって多く出土しているが，これは南東方向からの流れ込みの可能性が考えられる。

以上，Ｅ区で検出した土坑の性格は不明である。

第３節　弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構は少なく，土坑５基，溝１条である。いずれもＣ区において，５層上面（標高2.65～2.8m）で確認した。土坑は主なものを３基記述する。

１．　Ｃ区の遺構

土坑SK3115（第31・32図　図版52－３）

SK3115はＣ区の西，VE4aグリッドに位置する。平面形は長楕円形をなし，断面形は逆台形状をなす。長径2.6m，短径1.3m，深さ0.5mである。

埋土は４層に分層できた。第４層を掘りこむように第２，３層が堆積し，最後に第１層が堆積している。第３層は炭化物や有機腐食物を含んでいた。

遺物はの弥生時代中期の土器が若干あったが，いずれも小片で図示していない。

土坑SK3170（第31・32図　196－１～10）

SK3170はＣ区の西，VD4dグリッドに位置する。北側と南側は壊されている。遺構残存部で東西3.6m，南北1.5mを測り，平面形は不整楕円形と推定した。断面形は逆台形状で，深さは約0.15m，床面は，凸凹している。

埋土は１層で，弥生時代中期の土器片が出土している。

土坑SK3246（第31・32図）

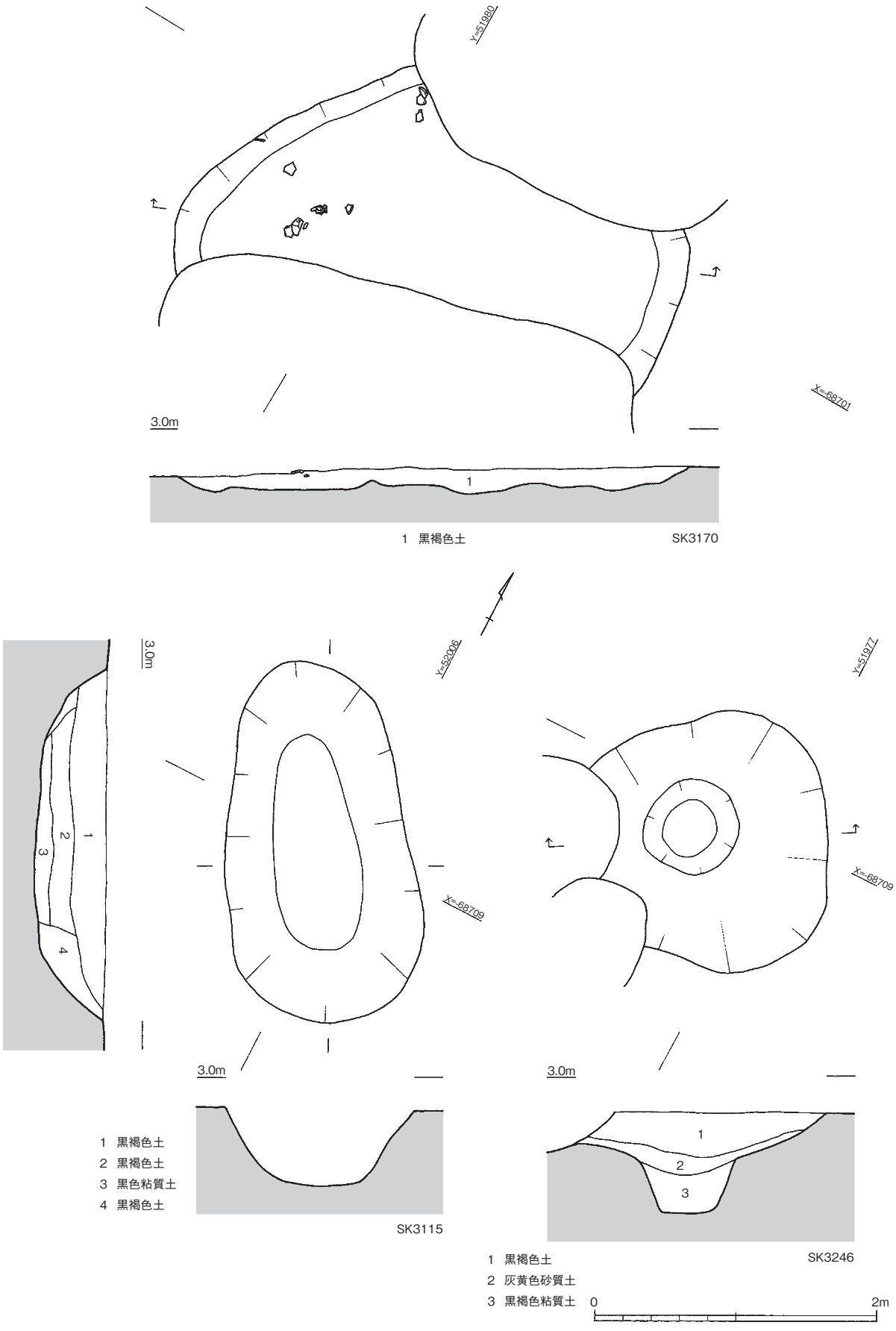
SK3246はＣ区の西，VD4d グリッドに位置する。南西肩部は壊されている。平面形は歪な方形をなし，断面形は２段掘りの逆台形状をなす。長径2.0m，短径1.8m，深さ0.7mである。

埋土は３層に分層できた。底面から湧水があった。このことから，素掘りの井戸の可能性が考えられる。出土遺物は弥生時代中期の土器の破片がわずかに出土した。いずれも小片で図示していない。

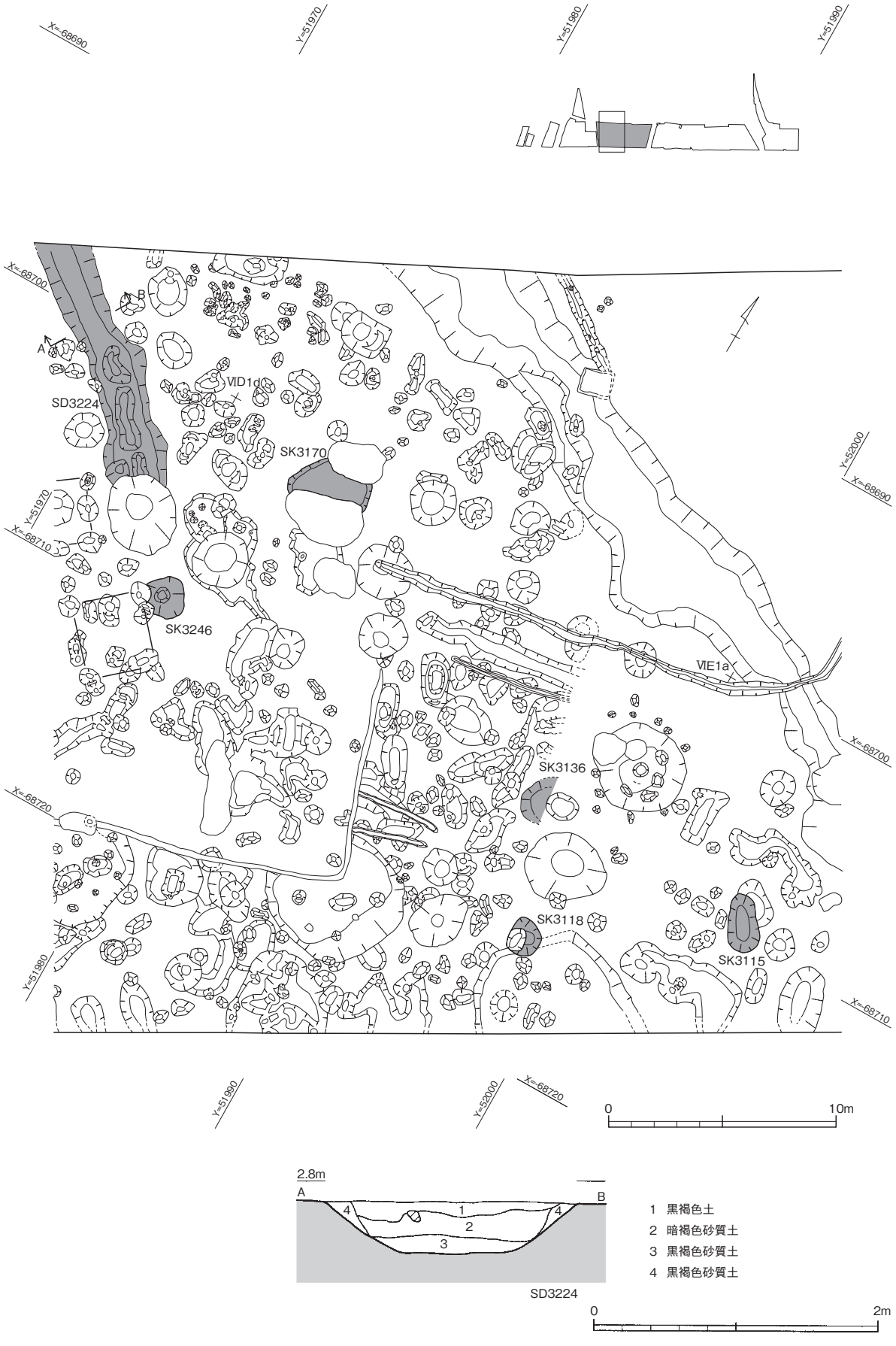
溝SD3224（第32図　図版49－１　196－11～197－15）

SD3224はＣ区の西端，VD4c，ⅦD1cグリッドに位置する。北西－南東（Ｎ－49°－Ｗ）の軸を持つ溝である。遺構の南は，中世の井戸に壊され，そこから南は検出できなかった。確認した長さは10mである。断面形は逆台形状をなす。幅2.0～2.5m，深さ0.3mである。

埋土は４層に分層できた。第２・３層から弥生時代前期～中期の土器が出土した。



第31図　弥生中期Ｃ区土坑実測図（1：40）



第32図　弥生中期Ｃ区遺構図（全体図1：250　溝土層断面図1：40）

第４節　弥生時代終末～古墳時代前期の遺構

弥生時代終末～古墳時代前期の遺構は，Ｃ区以西で井戸１基，土坑15基，溝１条，大型土坑５基，足跡２か所，ピット１基を確認した。

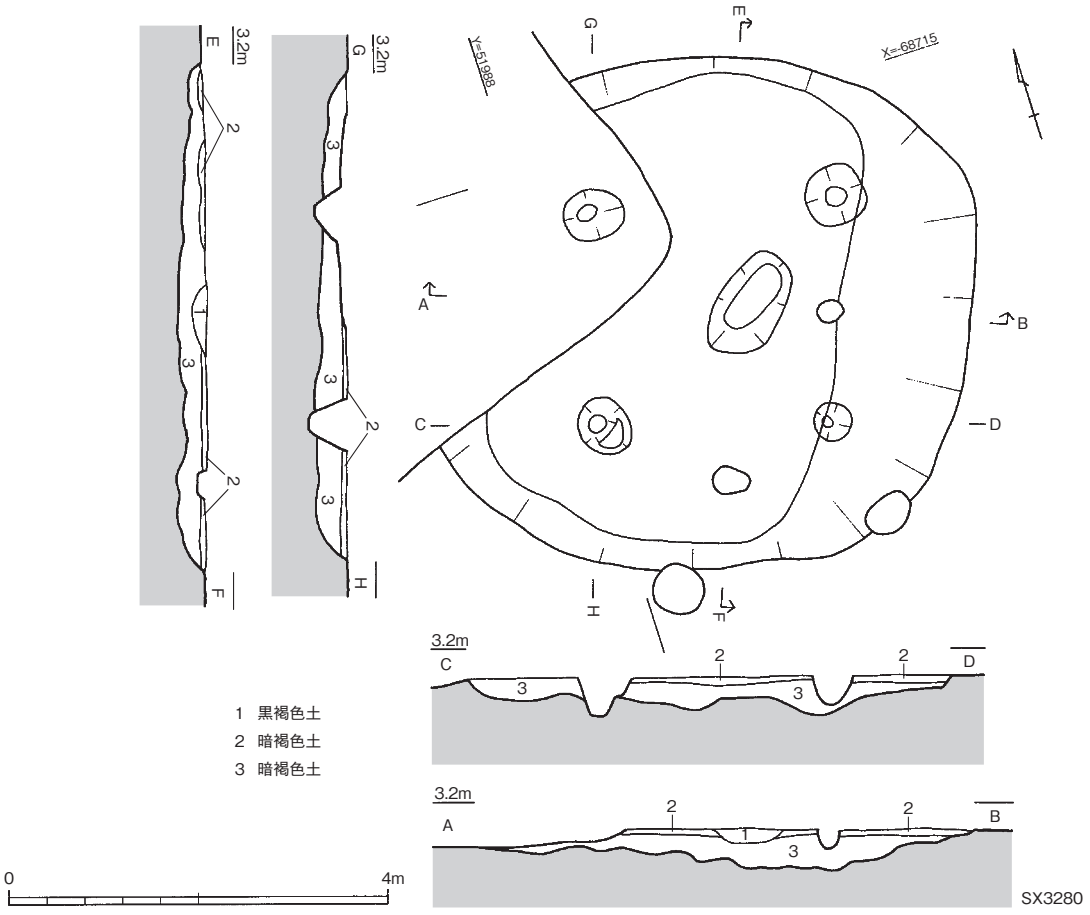
１．　Ｃ区の遺構

Ｃ区では井戸１基，土坑14基，溝１条，大型土坑５基，ピット1基を検出した。遺構検出面は，５層上面（標高2.65～3.0m）である。

大型土坑SX3280（第33・38図　図版55－１・２　198－１・２）

SX3280はＣ区の南西，VD4dグリッドに位置する。平面形は隅丸方形をなし，断面形は逆台形状をなす。規模は約5.5m四方，深さは0.4mを測る。底面は凸凹している。

埋土は第２・３層の２層に分層できた。この第２層上面あるいはそれより上から掘り込まれたピットを５つ検出した。そのうち４つは方形に並び，中央にはやや大きなピットが配置される。方形に並ぶピットの直径は0.3～0.6mとばらつきがある。深さは0.3～0.4mでピット間距離は2.3m～2.6mである。中央ピットは長径1.1m，短径0.7mの楕円形をなし，深さは0.2mである。ピットの埋土に炭化物を多く含む。第２・３層から弥生時代前期の甕の口縁などの破片が出土し，ピットから弥生時代終末



第33図　弥生終末～古墳前期Ｃ区大型土坑実測図（1：80）

期ごろの土器の小片が若干出土している。

この大型土坑の性格は不明で，また，ピットとの関係も不明である。

井戸SE3101（第34・38図　図版53－１　198－３～５）

SE3101はＣ区の西，VD4dグリッドに位置する。平面形は1.6m×1.4mの円形である。上部は漏斗状で，下半部はバケツ状である。深さ0.75mである。

土坑の中央部，深さ0.4mのところから完形の甕が出土した。さらに底面で数個体の土師器の甕が折り重なった状態で出土した。井戸と考えられる。

土坑SK3110（第34・38図　198－６・７）

SK3110はＣ区の西，VD4dグリッドに位置する。平面形は1.4m×1.2mの円形をなす。断面形は逆台形状で，深さは0.25mである。埋土から土師器の甕が出土した。

土坑SK3128（第34・38図　199－１～６）

SK3128はＣ区の西，VD4dグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は歪な逆台形状をなす。長径1.04m，短径0.75m，深さ0.4mである。埋土から土師器の甕などが出土した。

土坑SK3129（第34・38図　198－８～12）

SK3129はＣ区の西，VD4dグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は逆三角形状をなす。長径2.8m，短径2.1m，深さは0.45mを測る。埋土は２層に分層できた。第２層から土師器の小型丸底壺や高杯が出土した。

土坑SK3143（第34・38図）

SK3143はＣ区の西，VD4dグリッドに位置する。平面形は長楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径1.9m，短径0.9m，深さ0.24mである。埋土は３層に分層できた。埋土から弥生時代終末～古墳時代前期の土師器胴部片や甕の口縁部片などが出土した。いずれも小片で図示していない。

土坑SK3147（第35・38図　199－７～10）

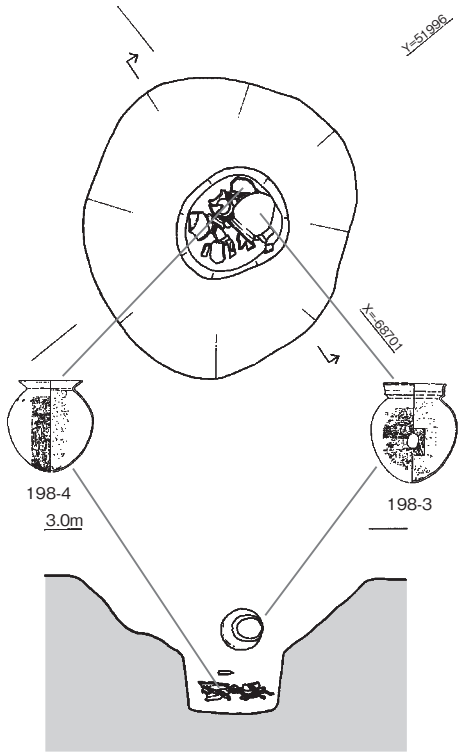
SK3147はＣ区の西，VD4dグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径2.5m，短径1.75m，深さ0.3mである。埋土は２層に分層できた。埋土から土師器の低脚杯や管玉が出土した。遺構の性格は不明である。

土坑SK3200（第35・38図　199－11～16）

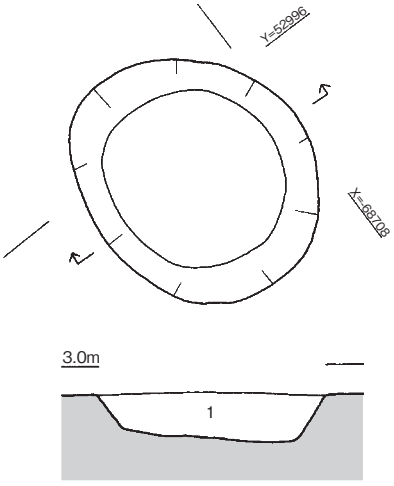
SK3200はＣ区の西，ⅦD1dグリッドに位置する。平面形は隅丸方形で，断面形は逆台形状をなす。長径２m，短径1.7m，深さ0.37mである。埋土は５層に分層できた。主に第３・４層から土師器の甕などが出土した。

土坑SK3205（第36・38図　図版53－２・３　200－１～７）

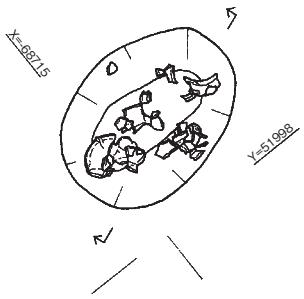
SK3205はＣ区の西，ⅦD1cグリッドに位置する。平面形は推定すると長楕円形で，断面形は逆台形状をなす。底面は凸凹である。長径3m，短径1.3m以上，深さ0.3mである。埋土は２層に分層できた。第２層から土師器の甕，鼓形器台や高杯などが出土した。



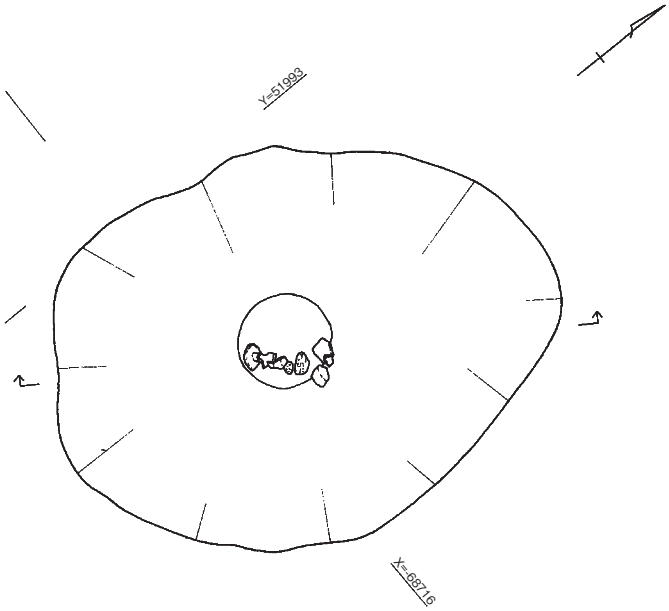
SE3101



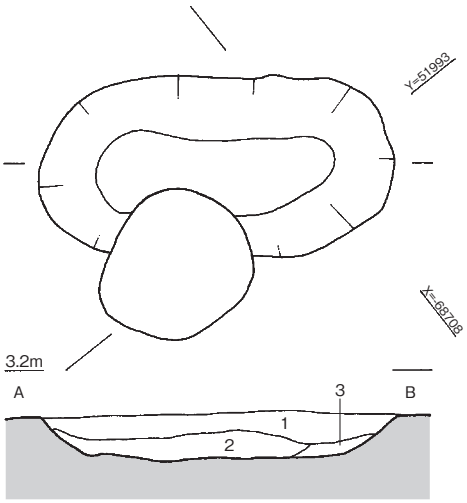
1　黒褐色土　　SK3110



1　黒褐色土　　SK3128



1　黒褐色土　　SK3129
2　黒褐色砂質土



1　黒褐色土　　SK3143
2　黒褐色土
3　オリーブ褐色土

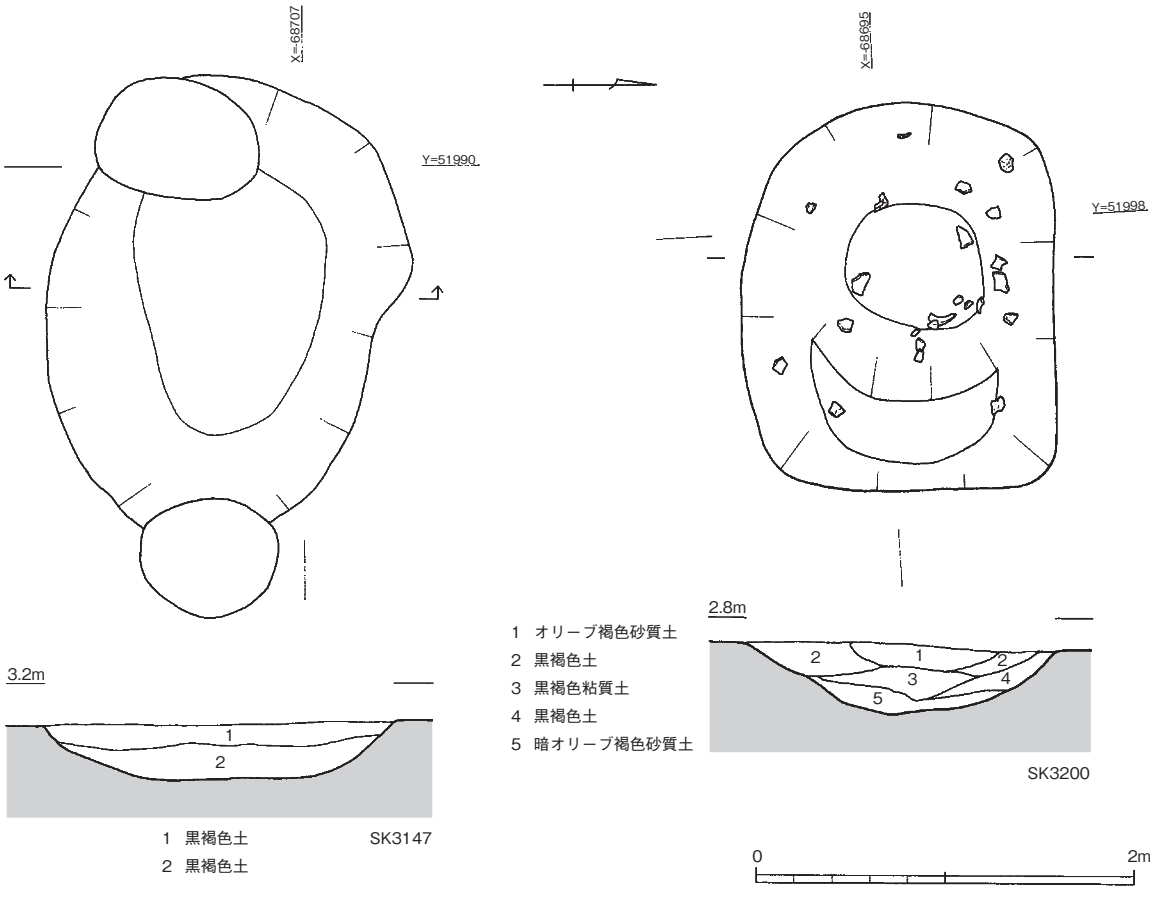
第34図　弥生終末～古墳前期Ｃ区土坑実測図１（1：40）

土坑SK3232（第37・38図　図版54－６　200－８）

SK3232はＣ区の西壁，VD4cグリッドに位置する。平面形は隅丸方形で，断面形は逆台形状をなす。南北2.5m，東西3.05m以上，深さ0.22mである。埋土は２層に分層できた。第２層から土師器の大甕が出土した。

土坑SK3235（第37・38図）

SK3235はＣ区の西端，VD4cグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は鉢状をなす。底面は凸凹している。長径1.2m，短径0.8m，深さ0.3mを測る。埋土は２層に分層できた。第１層から土師器の甕などが出土した。



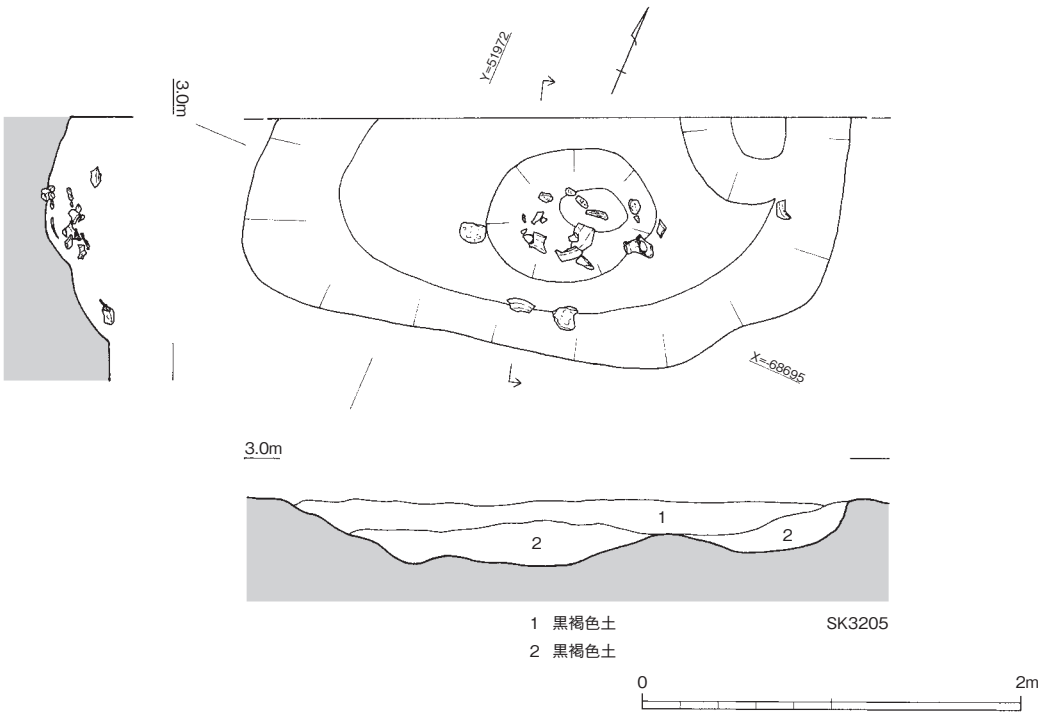
第35図　弥生終末～古墳前期Ｃ区土坑実測図２（1：40）

土坑SK3312（第37・38図　図版54－２　200－９～12）

SK3312はＣ区西端の南，VD4dグリッドに位置する。SX3270上面（標高2.85m）で検出した。平面形は楕円形をなし，断面形は逆台形状をなす。土坑中央がさらに深くなる。長径1.25m，短径0.96m，深さ0.45mである。埋土は３層に分層できた。第１層から土師器の甕などが出土した。

土坑SK3313（第37・38図　図版54－２）

SK3313はＣ区西端の南，VD4dグリッドに位置しSK3312の南側にある。SX3270上面（標高2.85m）で検出した。平面形は楕円形で，断面形は２段掘りの逆台形状である。長径1.5m，短径0.9m，深さ0.66mである。埋土から土師器の甕などのが出土した。底面付近から出土した破片はSX3270出土の低脚杯破片と接合した（210－７）。



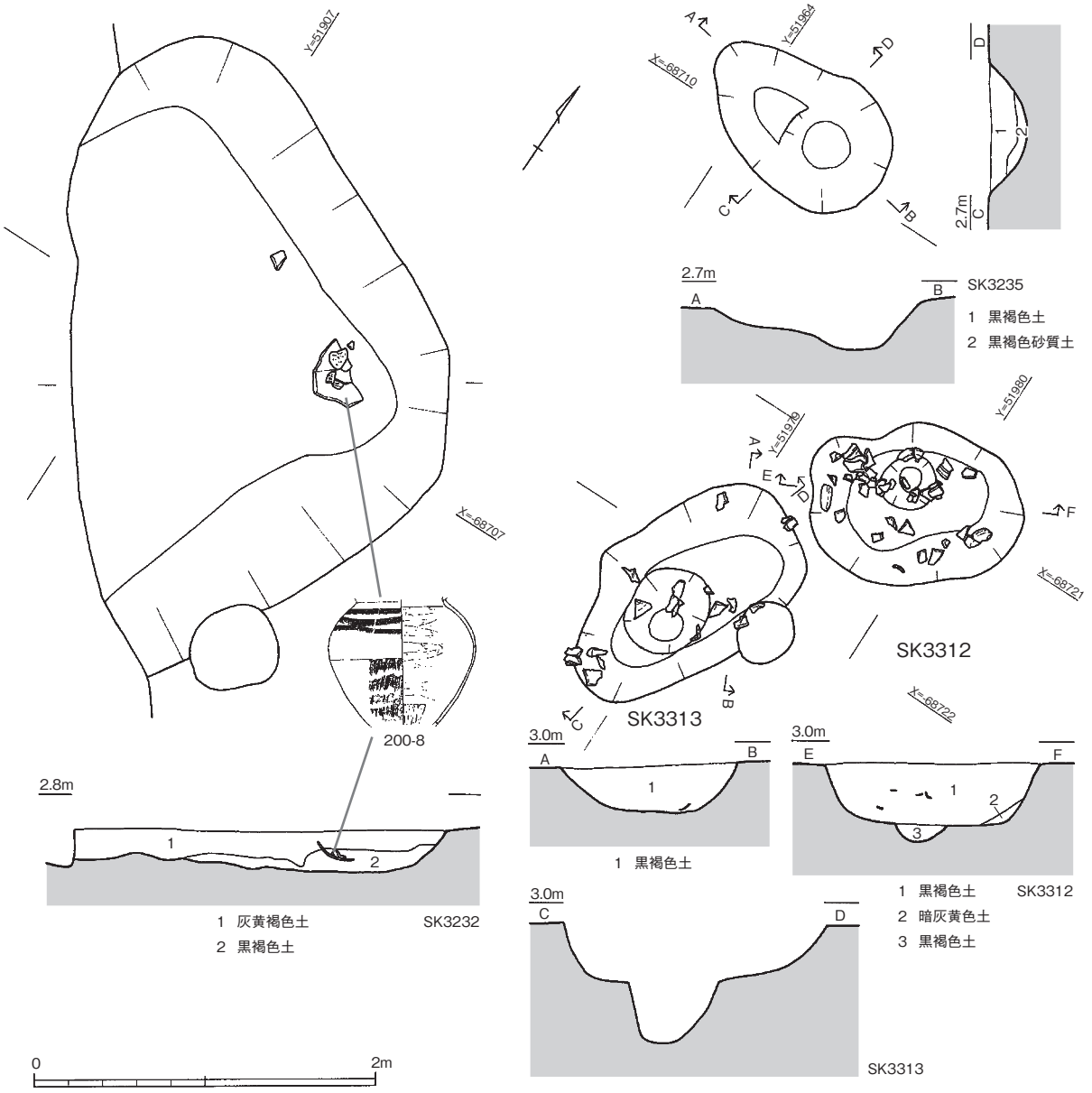
第36図　弥生終末～古墳前期Ｃ区土坑実測図３（1：40）

土坑SK3286（第38図　図版54－３）

SK3286はＣ区西の南壁，VD4dグリッドに位置する。平面形は推定すると楕円形で，断面形は逆台形状をなし，底面は凸凹している。東西4.4m，南北3.1m以上，深さ0.4mである。

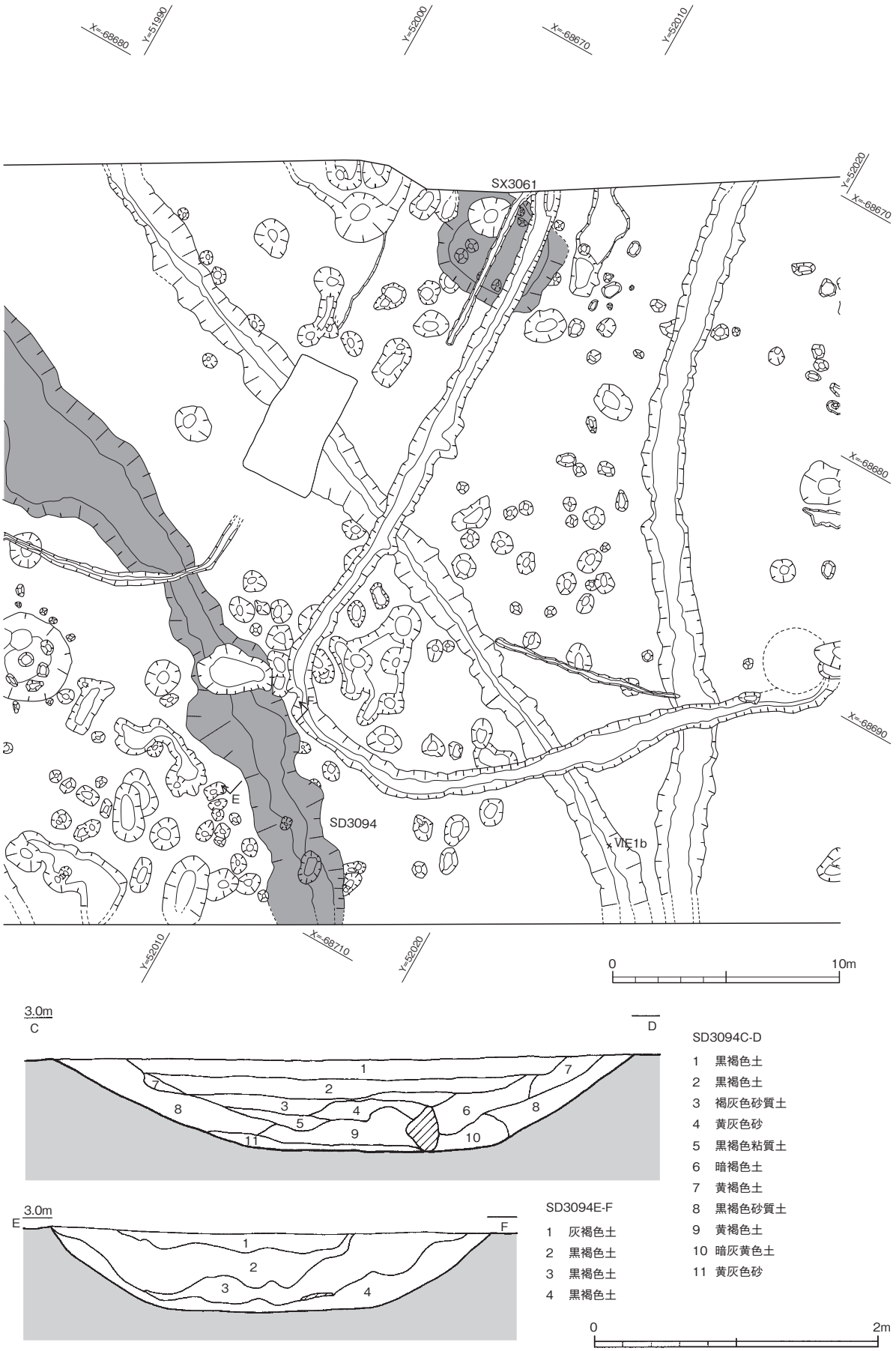
埋土は２層に分層できた。第２層から弥生時代終末～古墳時代前期の土師器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

以上のＣ区において確認した土坑の性格は不明である。



第37図　弥生終末～古墳前期Ｃ区土坑実測図４（1：40）

第38図　弥生終末～古墳前期Ｃ区遺構図１（全体図1：250　土坑土層断面図1：40）



第39図　弥生終末～古墳前期Ｃ区遺構図２（全体図1：250　溝土層断面図1：40）

溝SD3094（第38・39図　図版49－２　201－１～208－12）

SD3094はＣ区中央やや西側，ⅥD1d，ⅥE1a，VE4aグリッドに位置する。５層上面（標高北側2.7m，南側2.9m）である。南東－北西（Ｎ－65°－Ｗ）の方位で直線的に走る大規模な溝である。調査区内での長さは37.5mを確認し，調査区外にさらに延びる。幅は3.5mから５mを測り，断面は逆台形状をなす。深さは約0.8mで底面の砂層から湧水する。

Ｃ－Ｄ土層図とＥ－Ｆ土層図は30mほど離れており土層が対応していないが，おおむねＣ－Ｄ土層図の第８～11層がＥ－Ｆ土層図の第４層に，Ｃ－Ｄ土層図の第３～７層がＥ－Ｆ土層図の第３層に対応すると考えられる。同様に，第１・２層も対応する層と考える。底のレベルは北西側が若干下っており水は南東から北西へ流れていたようである。中層から下層には砂礫や粘質土が帯状に堆積しており，何回かの流れと停滞期があったものと考えられる。

遺物は弥生時代中期後半を中心に，弥生時代前期から古墳時代前期の土器が出土した。北側で人頭大から40㎝大の礫が集合して出土した。この礫群はＣ－Ｄ土層図の第９，10層中で確認できたが，性格は不明である。

大型土坑SX3061（第39・40図）

SX3061はＣ区中央の北壁際，ⅥE1aグリッドに位置する。平面形は隅丸方形，断面形は皿状である。南北5.04m，東西5.36m，深さ0.3mである。底面で直径0.3～0.7m，深さ0.1～0.2mのピットを７基検出した。Ｐ１～３はP1－Ｐ２の距離が2.2m，Ｐ２－Ｐ３の距離が2.72mと建物の柱穴の可能性のある配列をなしている。埋土から弥生時代終末～古墳時代前期の土師器片が出土した。いずれも小片で図示していない。

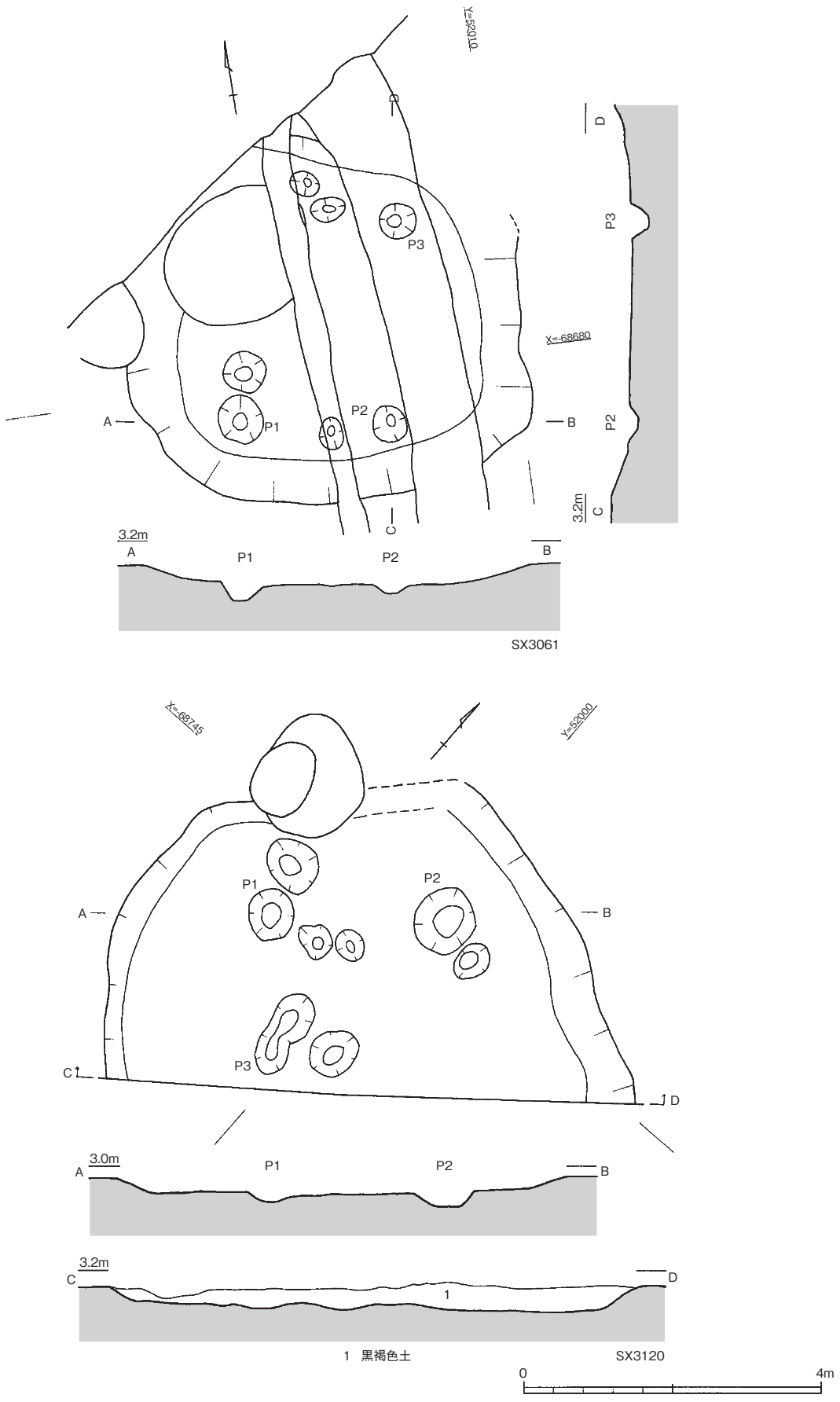
大型土坑SX3120（第38・40図　図版54－１）

SX3120はＣ区西の南壁際，VD4d，VE4aグリッドに位置する。遺構の南東部約４分の１は調査区外である。平面形は歪な隅丸方形で，断面形は逆台形状をなす。東西7.2m，南北4.3m,深さ0.3mである。底面で直径0.3～0.8m，深さ0.1～0.2mのピットを８基検出した。そのうちのＰ１～３はＰ１－Ｐ２の距離が2.2m，Ｐ２－Ｐ３の距離が1.9mと建物の柱穴の可能性のある配列をなしている。埋土から弥生時代終末～古墳時代前期の土師器片が出土した。

大型土坑SX3104（第38・41図　209－１～14）

SX3104はＣ区の中央，VD4dグリッドに位置する。平面形は歪な円形をしており，断面形は逆台形状である。直径約4.0m，深さ0.7mである。中央部で検出したピット（直径0.6m，深さ0.6m）のほか，その周囲にもいくつかピットを検出しているが，いずれも埋土第３・４層より上から掘り込まれている。これらのピットがSX3104に伴うかは不明である。

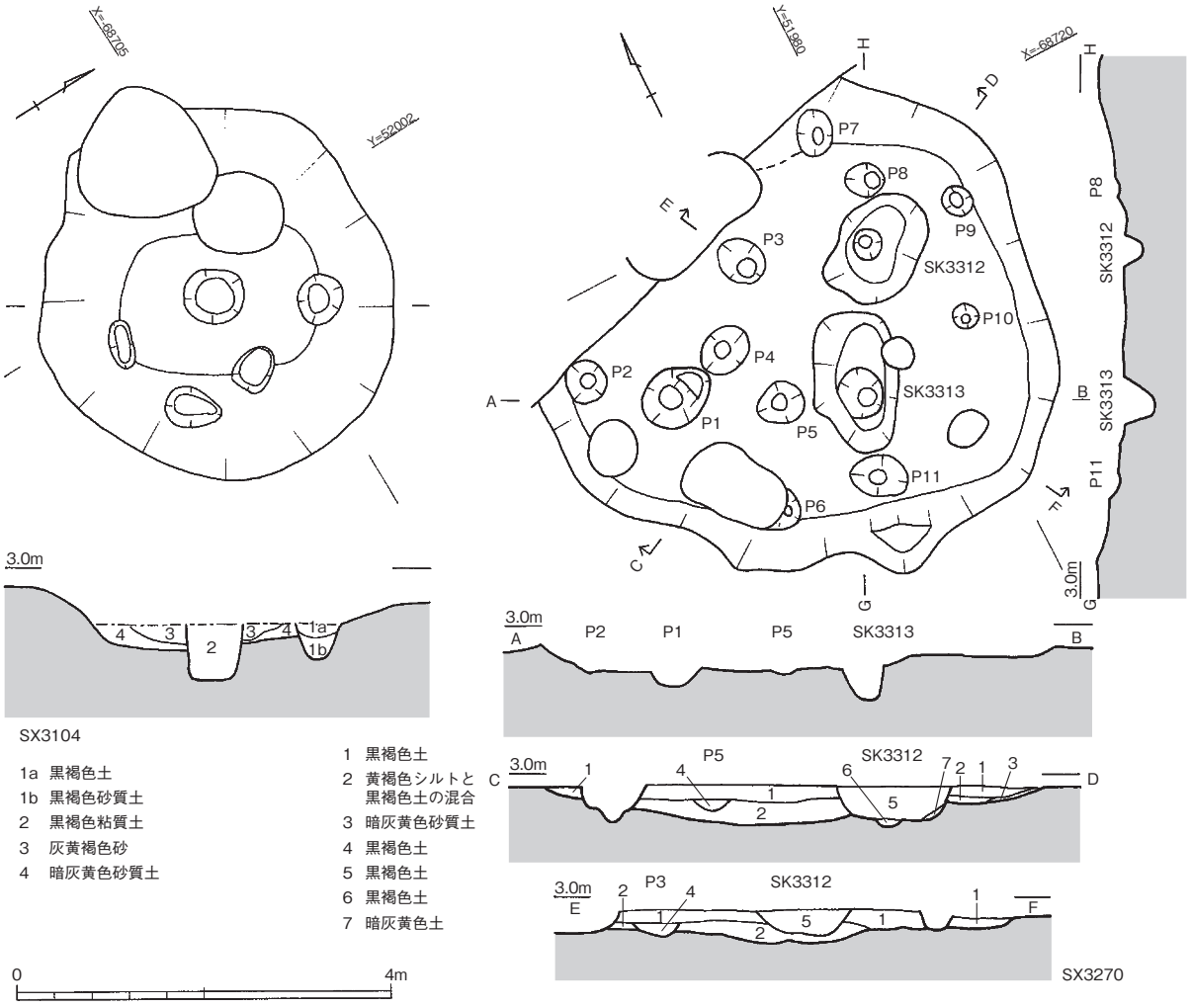
中央ピットの底面直上から土師器片がかたまって出土した。



第40図　弥生終末～古墳前期Ｃ区大型土坑実測図１（1：80）

大型土坑SX3270（第38・41図　図版54－５　209－15～210－７）

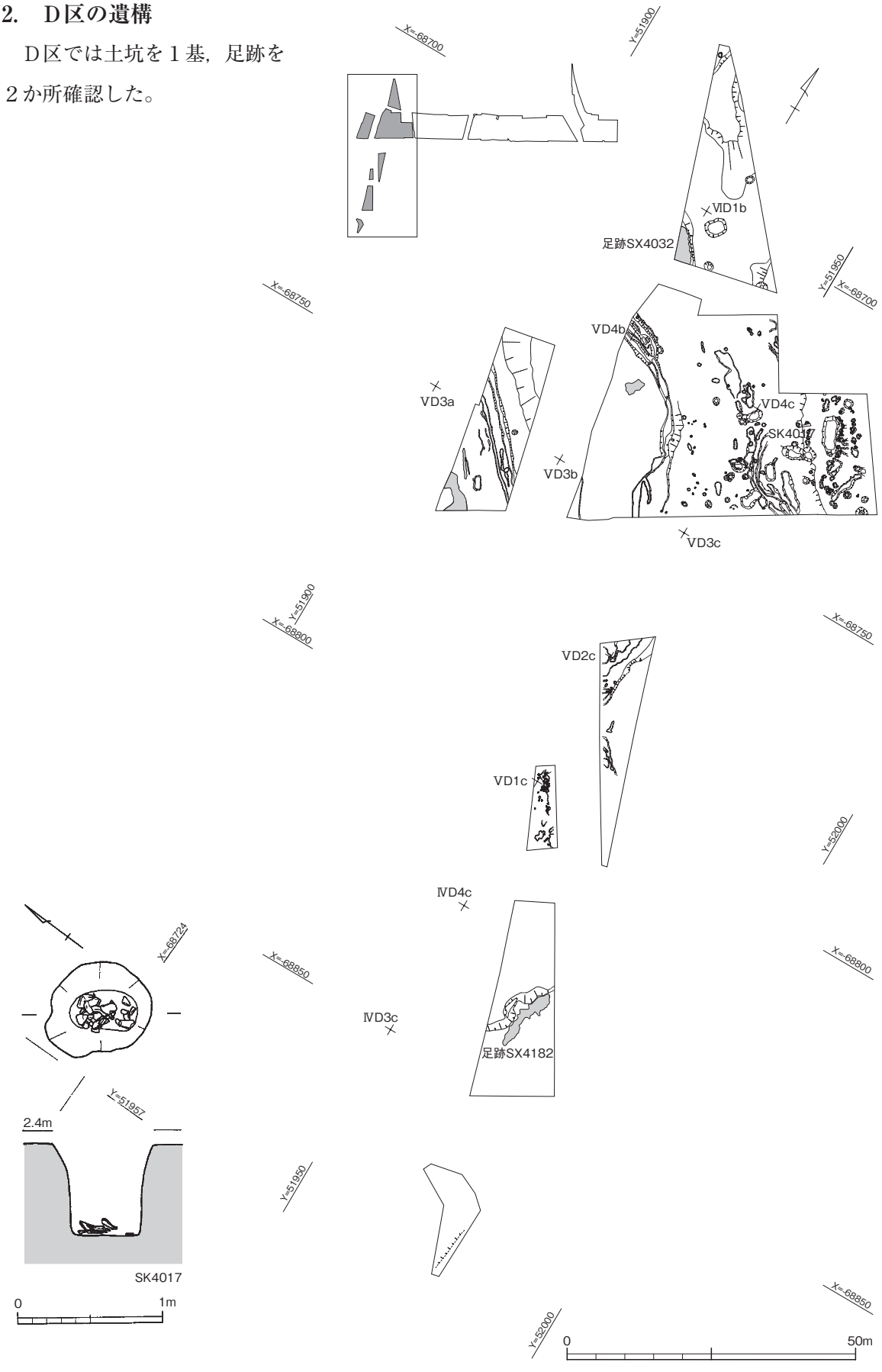
SK3270はＣ区の西端，VD4dグリッドに位置する。遺構の北側が壊されている。平面形を推測すると歪な隅丸方形で，皿状をなす。長径5.5m，短径5.3m以上，深さ0.4mである。壁の立ち上がりはとても緩やかで，底面中央に向かってなだらかに低くなる。遺構内でピットや土坑を16基検出した。埋土は７層に分層できた。Ｐ２～10は第２層を掘りこんでいる。その他は後世のピットの可能性もある。第１層から土師器の甕や鼓形器台，低脚杯が出土した。209－15はSK3312，SK3313出土の破片と接合した。



第41図　弥生終末～古墳前期Ｃ区大型土坑実測図２（1：80）

2.　D区の遺構

D区では土坑を１基，足跡を２か所確認した。



第42図　弥生終末～古墳前期Ｄ区遺構図（全体図1：1,000　土坑1：40）

土坑SK4017（第42図　図版65－３　210－８～11）

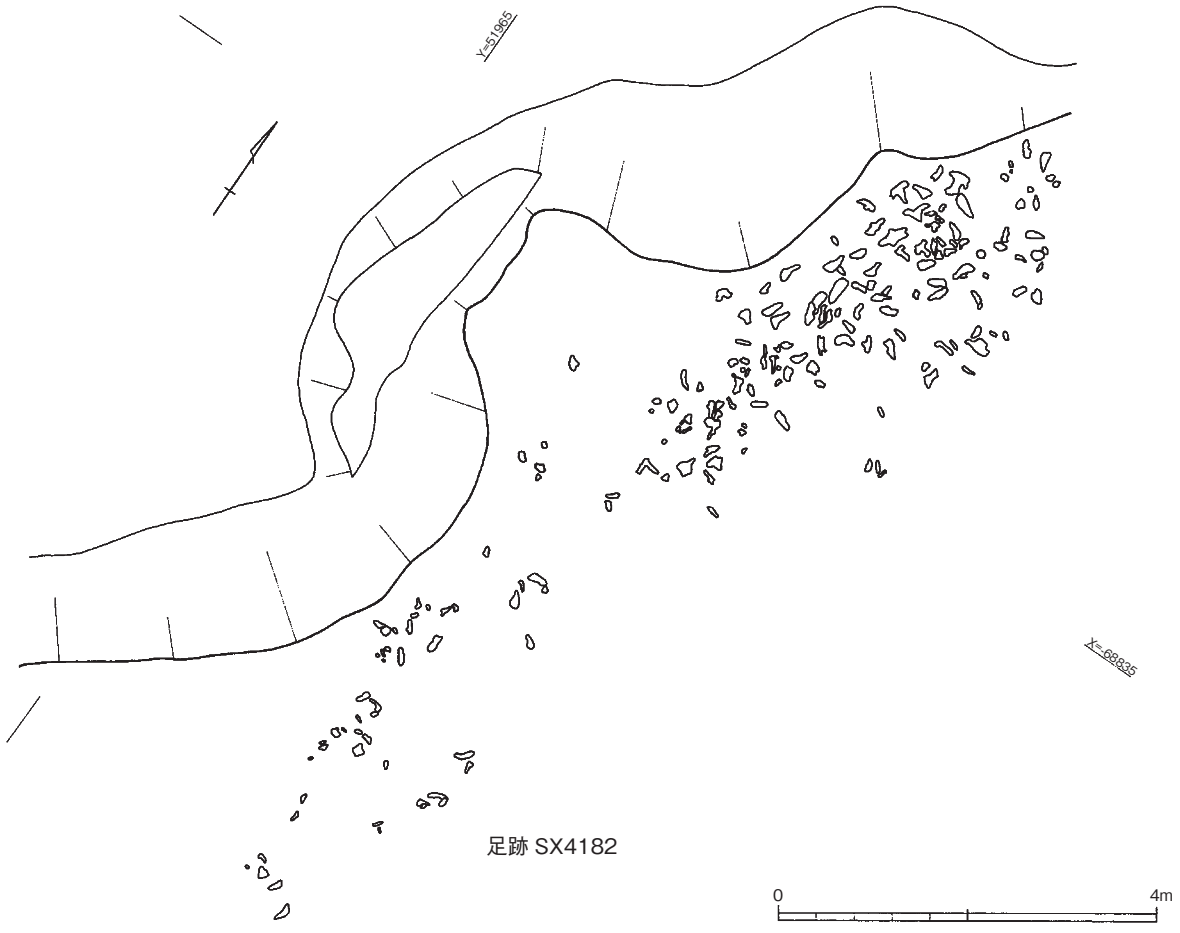
SK4017はＤ区の中央，VD4cグリッドに位置する。５層上面（標高2.3m）で検出した。平面形は歪な円形で，断面形は長方形をなす。長径約0.75m，深さ0.63mである。底面上に土器破片が折り重なる状態で出土した。遺構の性格は不明である。

足跡SX4032（第42図　図版64－１～３）

足跡SX4032はＤ区の北，VD4bグリッドに位置する。標高1.7～1.95mの黒色粘土層上面で検出した。黒色粘土層は自然河道SR4033の埋土で弥生時代終末から古墳時代前期に堆積した層である。足跡の大きさは18～20㎝前後で一部には指の形の判別できるものもあり，指先部分が深くはまるものが多い。多数の足跡だが方向は一定しない。足跡の埋土は灰色細砂である。

足跡SX4182（第42・43図　巻頭カラー３　図版63－１～４）

足跡SX4182はＤ区の南，ⅣD3cグリッドに位置する。標高1.7mの黒色粘土層上面で検出した。黒色粘土層は自然河道SR4033の埋土で弥生時代終末から古墳時代前期に堆積した層である。足跡は幅約２m，長さ約12mにわたって検出した。足跡の埋土は黄褐色砂である。



第43図　弥生終末～古墳前期Ｄ区足跡実測図（1：80）

第５節　古墳時代中期～終末期の遺構

古墳時代中期～終末期は掘立柱建物２棟，土坑14基，井戸７基，溝５条を確認した。

１．A区の遺構

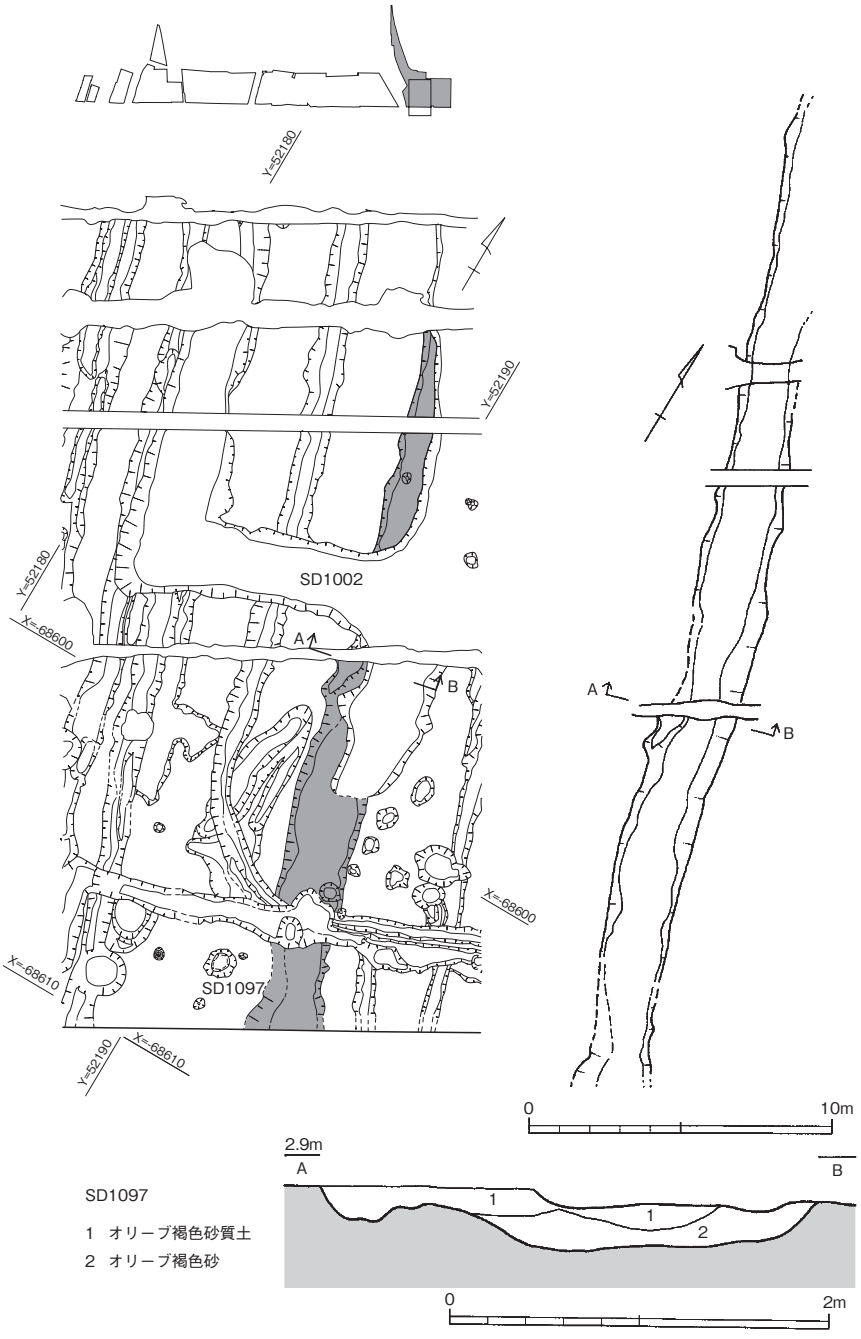
A区では，溝1条を検出した。これがA区で確認された最古の遺構である。

溝SD1097（第44図　図版３－１　211－１～11）

A区の西，ⅣF1d，ⅣF4dグリッドに位置する。南東－北西（N－14°－W）の方位で直線的に走る大型の溝である。検出面は北側が標高2.7m，南側2.6mの５層上面である。

調査区内での長さは32.5m，幅は2.4～2.6mを測る。断面は逆台形状で，深さ約0.3m。底のレベルは北側が標高2.2m，南側が2.36mと北側が若干下っている。埋土は２層に分層できた。

各層から須恵器の大甕や杯，土師器の甕，高杯，移動式竈などが出土した。いずれも破片である。



第44図　古墳中期～終末期A区遺構図（全体図1：250　溝土層断面図1：40）

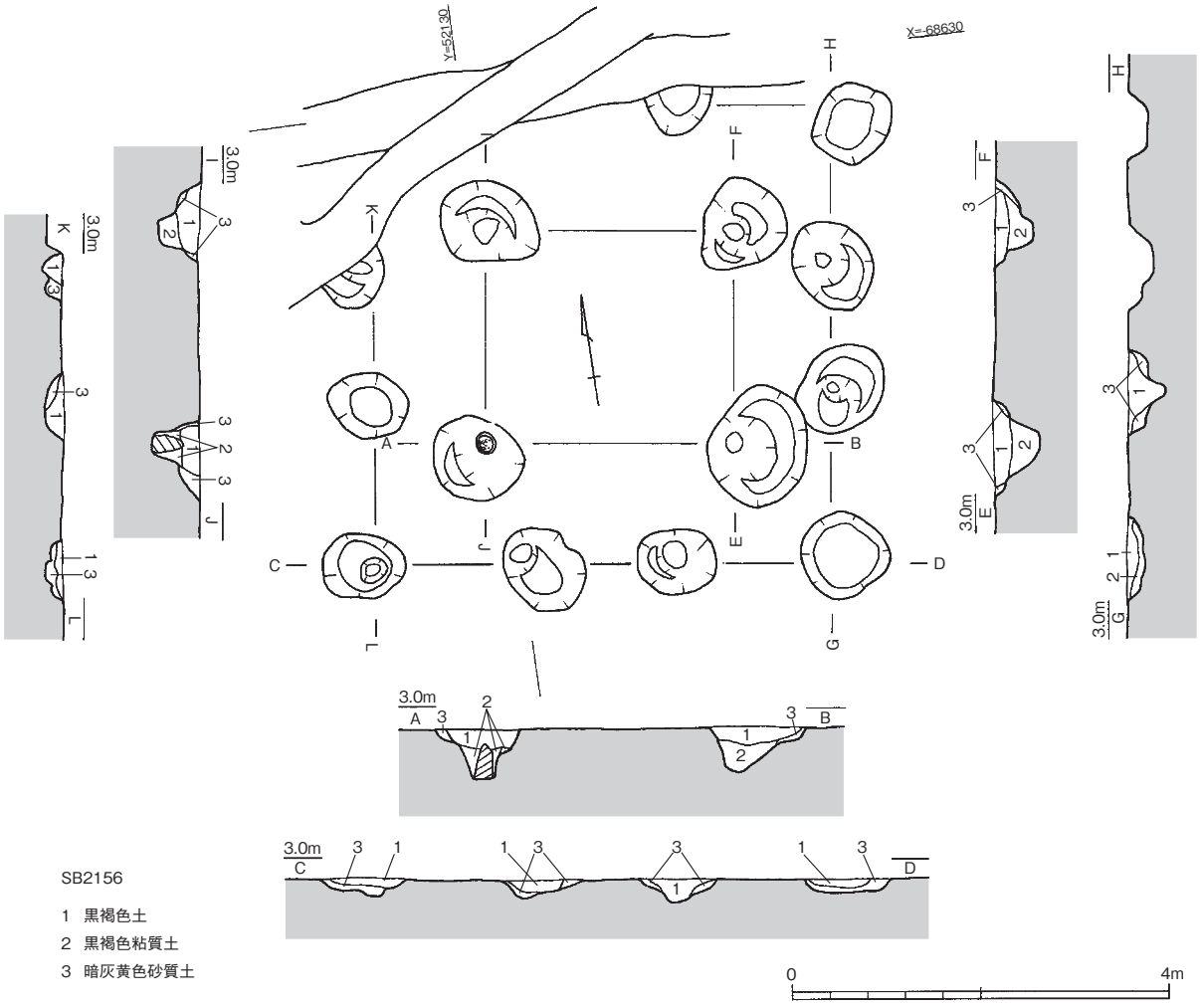
２．Ｂ区の遺構

Ｂ区では掘立柱建物２棟，土坑13基，井戸６基，溝２条を確認した。遺構検出面は，５層上面（標高2.6～3.0m）である。

建物SB2156（第45・49図　図版39－１　212－１～３）

SB2156はＢ区の東，ⅥF3bグリッドに位置する掘立柱建物である。１×１間の身舎に，３×３間の庇がつく。身舎は東西方向（桁行）2.6m，南北方向（梁間）2.2mで，主軸方位はＮ－82°－Ｗである。柱穴の規模は径0.9m～1.3m，深さ0.4～0.5m。柱穴のやや内寄りに柱を据えている。内側の建物プランの外側に３×３間で柱穴が巡る。庇は東西方向（桁行）4.9m，南北方向（梁間）4.8mの方形である。柱穴はやや小型で径0.7m～0.9m，深さ0.2m前後と浅い。身舎南西隅の柱穴には径20㎝の柱根が残存していた。

ほぼすべての柱穴から遺物が出土した。須恵器・土師器などのいずれも小片だが，それらは概ね古墳時代後半とみてよいであろう。

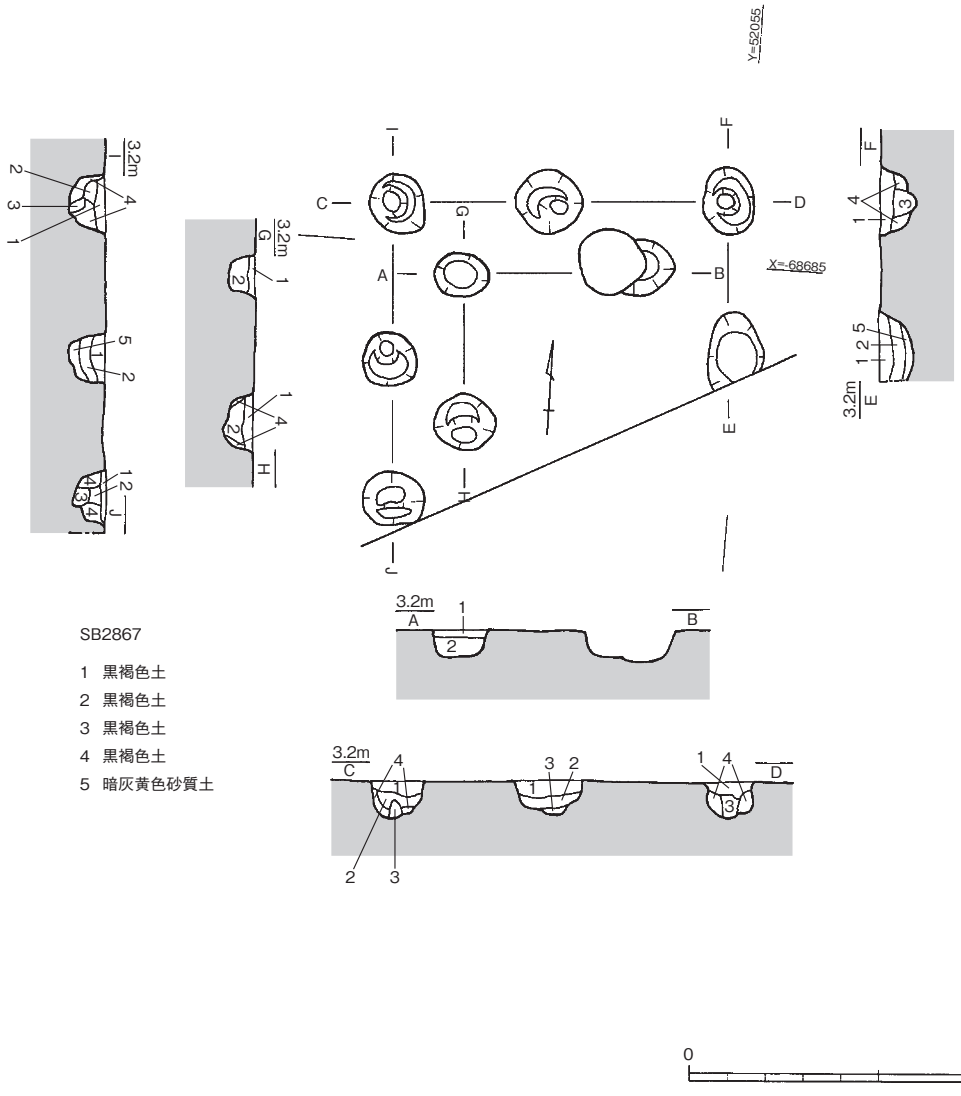


第45図　古墳中期～終末期Ｂ区建物実測図１（1：80）

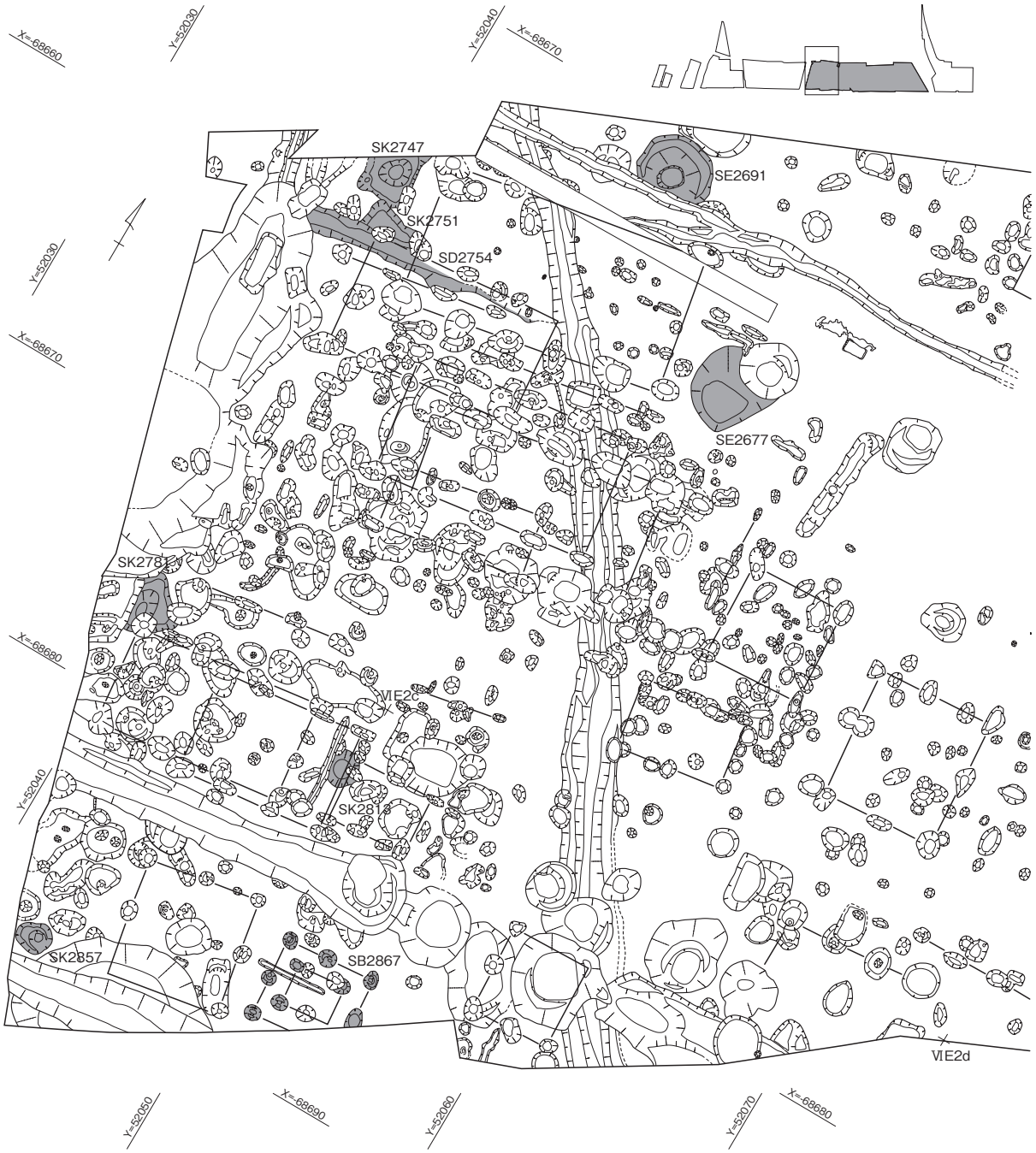
建物SB2867（第46・47図　図版39－２）

SB2867はＢ区西端の南壁際，ⅦE1cグリッドに位置する。１×１間の身舎に，２×２間の庇がつく。身舎北東隅の柱穴は一部壊されて，南東側は調査区外のため柱穴が確認できなかった。身舎は東西方向（桁行）２m，南北方向（梁間）1.7mで，主軸方位はＮ－85°－Ｅである。柱穴はほぼ円形をなし，直径0.57～0.65m，深さ0.3m前後である。庇は東西方向（桁行）3.5m，南北方向（梁間）３mである。柱穴は東側の２穴が0.7m×0.55mの楕円形でそのほかは直径0.6m前後の円形をなす。深さは0.4m前後と内側の柱穴より深い。南西隅の柱穴には柱痕らしき土層が認められ，そこから推測して柱の径は20cm弱と考えられる。

出土遺物は庇の柱穴より古墳時代後期～終末期の須恵器・土師器などが出土した。いずれも小片で図示していない。内側の柱穴からは遺物は出土しなかった。



第46図　古墳中期～終末期Ｂ区建物実測図２（1：80）



第47図　古墳中期～終末期Ｂ区遺構図１（1：250）

第48図　古墳中期～終末期Ｂ区遺構図２（1：250）

第49図　古墳中期～終末期Ｂ区遺構図３（1：250）

第50図　古墳中期～終末期Ｂ区遺構図４（1：250）

土坑SK2062（第50・51図　図版24－１・２　212－４～８）

SK2062はＢ区東端の東壁際，ⅥF4cグリッドに位置する。遺構の一部は調査区外へ続く。平面形は円形で，断面形は逆台形状である。直径約３m，深さ約0.9mである。

埋土は４層に分層できた。第４層から炭化した木材や木片などを出土した。遺物は各層から古墳時代後期頃の須恵器片や土師器片が若干出土した。

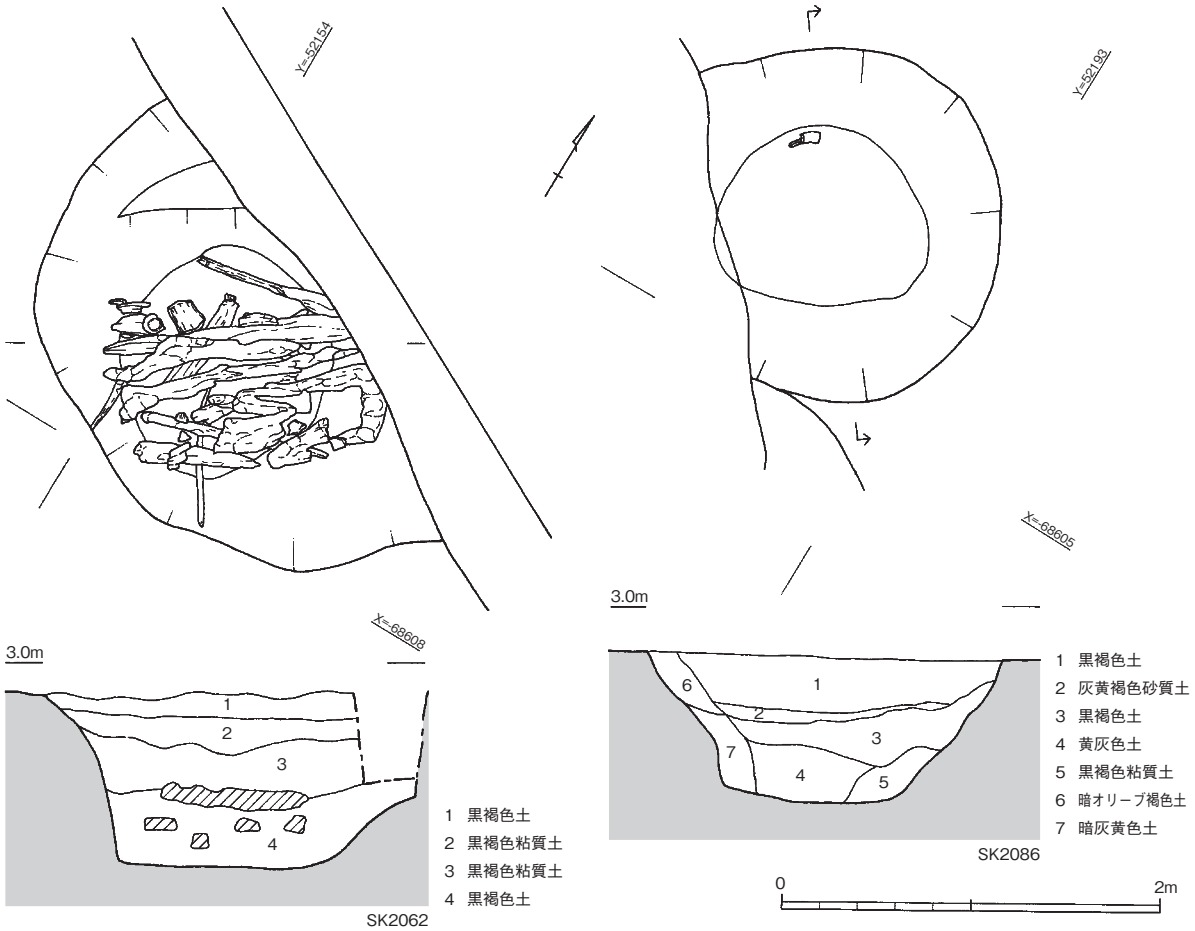
土坑SK2086（第50・51図）

SK2086はＢ区の東端，Ⅵ4Fbグリッドに位置する。遺構の一部は壊されている。平面形は円形で，断面形は逆台形状である。直径1.8m，深さ１mである。埋土は７層に分層できた。第４層から古墳時代後半頃の赤色塗彩の土師器や須恵器などが出土した。いずれも小片で図示していない。

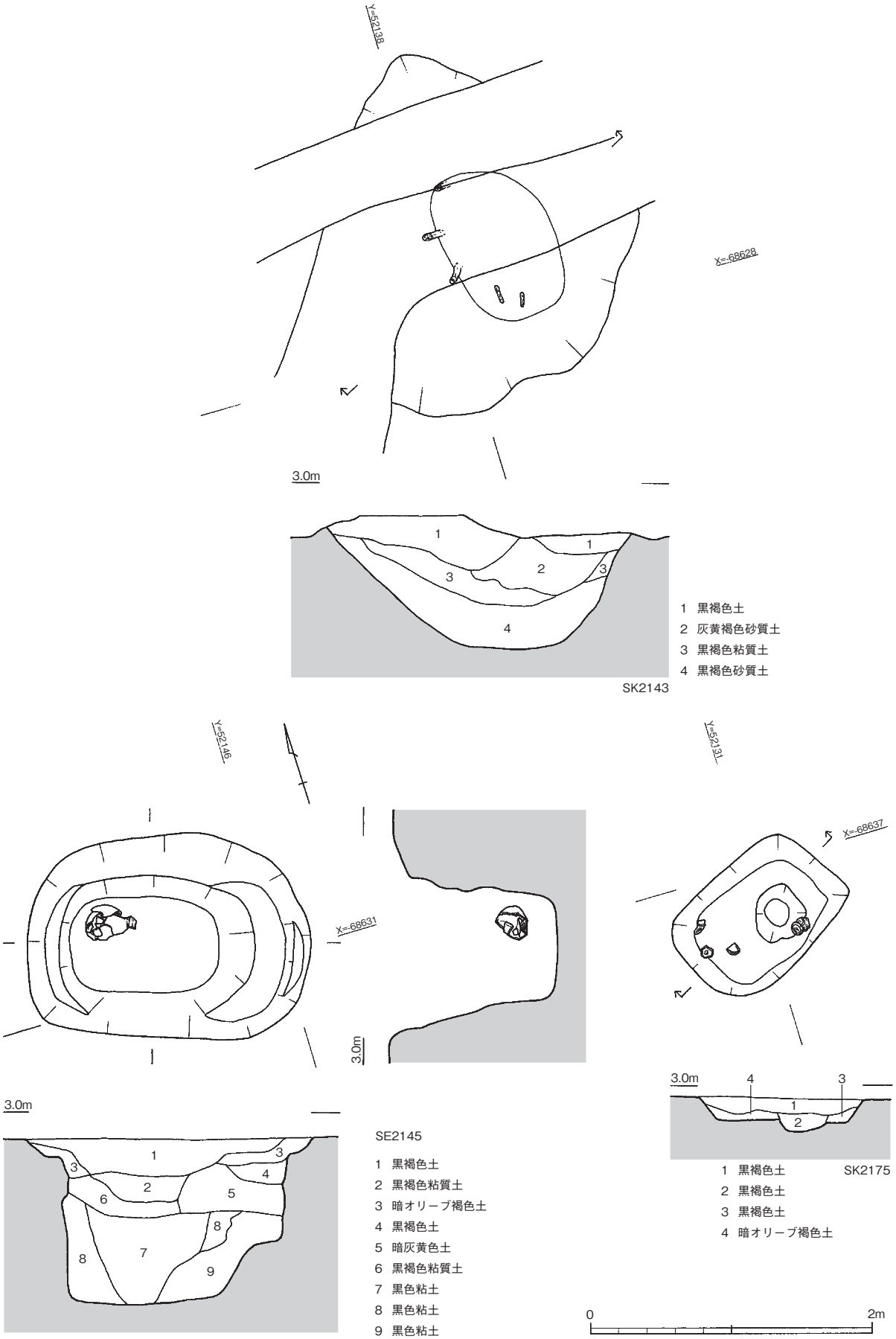
土坑SK2143（第50・52図　図版23－２）

SK2143は，Ｂ区の東,ⅥF4bグリッドに位置する。遺構の一部は壊されている。平面形は歪な方形で，断面形は逆台形状である。長径2.5m，短径2.3m，深さ0.9mである。地山砂礫層より湧水する。底面には５本の細い杭が半円を描くように打ち込まれていた。

埋土は４層に分層できた。埋土からは古墳時代後半頃の土師器などが出土した。いずれも小片で図示していない。ただし，第２・３層から出土した古墳時代の土師器とSE2145出土の土師器が接合した（212－９）。



第51図　古墳中期～終末期Ｂ区土坑実測図１（1：40）



第52図　古墳中期～終末期Ｂ区土坑実測図２（1：40）

井戸SE2145（第50・52図　212－9～14）

SE2145はＢ区の東,ⅥF4bグリッドに位置する。平面形は楕円形で,断面形は逆台形状をなす。長径2.2ｍ，短径1.5m，深さ1.2mである。砂礫層の底からは激しく湧水し，井戸の可能性が考えられる。埋土は９層に分層できた。第８・９層が裏込め土と思われるが，井筒などは出土しなかった。各層から古墳時代後半の土師器や須恵器が出土した。

土坑SK2175（第49・52図　図版25－２　214－１～５）

SK2175はＢ区の中央東側，ⅥF3bグリッドに位置する。平面形は隅丸方形で，断面形は逆台形状をなす。長径1.2m，短径0.8m，深さ0.2mである。埋土は４層に分層できた。第２層は第３・４層を掘りこんでピット状に浅く落ち込む。

各層から古墳時代の須恵器，土師器などが出土した。

土坑SK2193（第49図）

SK2193はＢ区中央東側の南壁付近，ⅥF3bグリッドに位置する。平面形が楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径約１m，短径0.8m，深さ0.3mである。

埋土から，古墳時代後半の土師器が出土した。いずれも小片で図示していない。

井戸SE2197（第49・53図　図版22－１～４　213－１～11）

SE2197はＢ区の中央東側，ⅥF3aグリッドに位置する。遺構の一部が壊されている。平面形は歪な楕円形状で,断面形は２段掘りの逆台形状である。長径3.6m,短径2.8m,深さ約１mである。標高1.76ｍの砂礫層まで掘られ，激しく湧水する。

埋土は13層に分層できた。底面（第13層）からやや浮いた状態で古墳時代の土師器甕が出土した。また，第２層からも古墳時代の土師器や須恵器がまとまって出土した。

井戸SE2207（第49・54図　図版25－１　214－６～８）

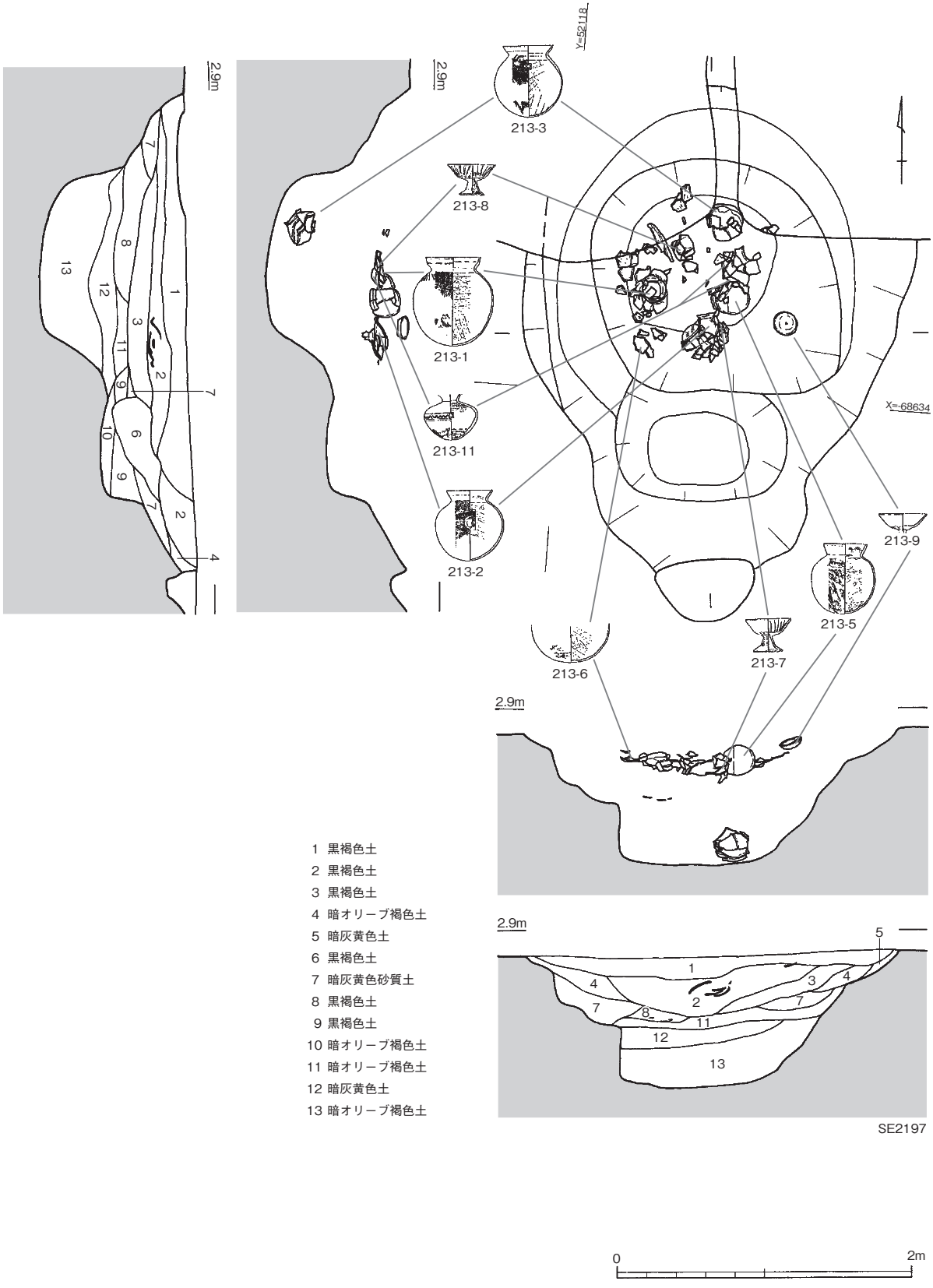
SE2207はＢ区の中央東側，ⅥF3aグリッドに位置する。遺構の一部が壊されている。平面形は楕円形で，断面形は２段掘りの逆台形状である。長径２m，短径1.5m，深さ0.8mで，標高2.1mの砂礫層まで至り，湧水が見られる。埋土は６層に分層できた。遺物は第１・２層から古墳時代の土師器と須恵器片が出土した。

土坑SK2232（第49・54図　214－９・10）

SK2232はＢ区の中央東側，ⅥF4aグリッドに位置する。平面形は歪な方形で，断面形は逆台形状をなす。長径1.15m，短径1.1m，深さ0.4mである。遺構の性格は不明である。埋土から土師器と須恵器が出土した。

土坑SK2353（第48・54図　214－11～17）

SK2353はＢ区の中央，ⅥE3dグリッドに位置する。平面形は歪な円形で,断面形は逆台形状をなす。長径1.1m，短径0.9mである。深さ0.7m以下は湧水が著しく遺構壁面が崩落したため，掘り下げを停止した。遺構の性格は不明である。埋土は４層に分層できた。埋土から古墳時代の土師器や須恵器が出土した。



第53図　古墳中期～終末期Ｂ区井戸実測図１（1：40）

土坑SK2570（第48・54図　214－18～22）

SK2570はＢ区中央の南壁際，ⅦE2dグリッドに位置する。遺構の一部は調査区外である。平面形は円形で，断面形は２段掘りの逆台形状である。直径2.3m，深さ１ｍである。底面からは激しく湧水する。落ち込みには粘質土が堆積し，木片が若干見られた。埋土は７層に分層できた。

出土遺物はおもに第１層から古墳時代の土師器片が出土した。

土坑SK2747（第47・55図　214－23～25）

SK2747はＢ区西端の北壁際，ⅦE2bグリッド位置する。遺構の一部が調査区外である。平面形は隅丸方形で，断面形は２段掘りの逆台形状をなす。２ｍ四方，深さ0.4ｍである。埋土は４層に分層できた。出土遺物は第３層から土師器片が少量出土した。遺構の性格は不明である。

土坑SK2751（第47・55図　215－１・２）

SK2751はＢ区の西端，ⅦE2bグリッドに位置する。遺構の大部分が壊されている。平面形は隅丸方形状で，断面形は逆台形状をなすと考えられる。深さは0.2m。埋土は４層に分層できた。埋土から，古墳時代の土師器の甕や須恵器片が少量出土している。遺構の性格は不明である。

土坑SK2781（第47・55図　図版23－１　215－３～７）

SK2781はＢ区西端の西壁際，ⅦE1bグリッドに位置する。遺構の一部は壊されている。平面形は隅丸方形で，断面形は２段掘りの逆台形状と推定できる。一辺2.2m，深さ0.54ｍである。SK2747・SK2751と同形態である可能性がある。埋土は３層に分層できた。出土遺物は第３層から土師器片が出土した。遺構の性格は不明である。

土坑SK2813（第47・56図　図版26－１　215－８・９）

SK2813はＢ区の西，ⅦE1bグリッドに位置する。遺構の一部は壊されている。平面形は歪な円形で，断面形は逆台形状をなす。直径1.5m，深さは0.8ｍである。埋土は４層に分層できた。出土遺物はおもに第１・２層から古墳時代の土師器や須恵器と35㎝大の大礫が出土した。遺構の性格は不明である。

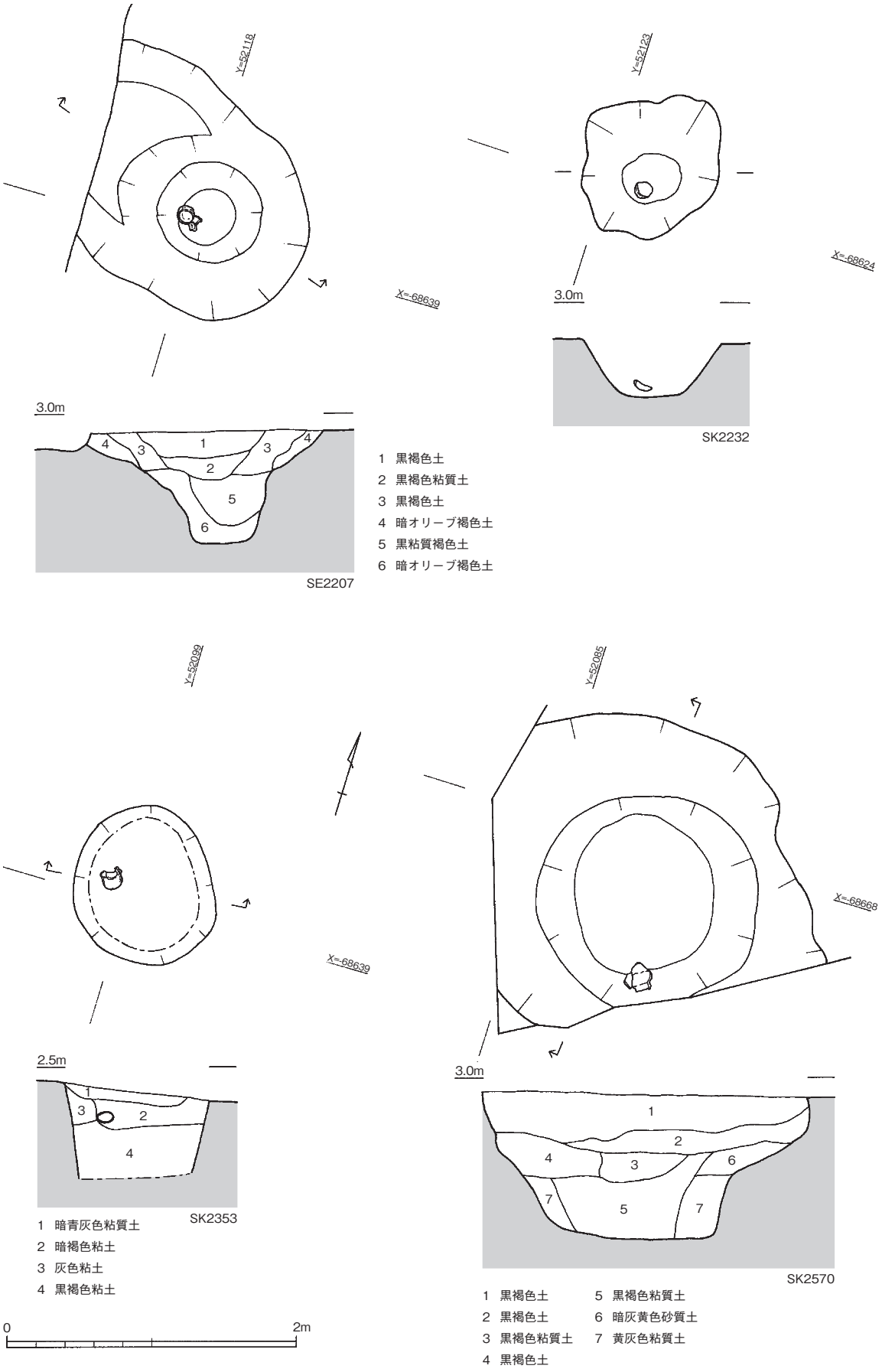
土坑SK2857（第47・56図　図版26－２　215－10）

SK2857はＢ区西端の西壁際，ⅦE1bグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で，断面形は２段掘りの逆台形状をなす。長径1.４ｍ，短径1.25m，深さ0.7ｍである。遺構の性格は不明である。

出土遺物は，床面から約0.1ｍ上で平板な礫と須恵器の平瓶が出土した。

井戸SE2022（第50・57図　図版31－３・４　216－１）

SE2022はＢ区の東端，ⅦF4cグリッドに位置する。平面形は歪な方形で，断面形は逆台形状をなす。一辺約0.8m，深さ0.7ｍである。坑内で板材を0.4ｍ四方に組んだ井戸枠を検出した。井戸枠の下端は底面に接していない。埋土は５層に分層できた。第５層の黒褐色土は裏込め土と考えられる。トイレの可能性を考え土質分析をおこなったが，寄生虫などは検出されなった（第10章第８節参照）。井戸とするには井戸枠が小さい。十分な湧水があり簡易的な水汲み施設と判断した。木枠内（第３層）から須恵器の壺が１点出土した。



第54図　古墳中期～終末期Ｂ区土坑実測図３（1：40）

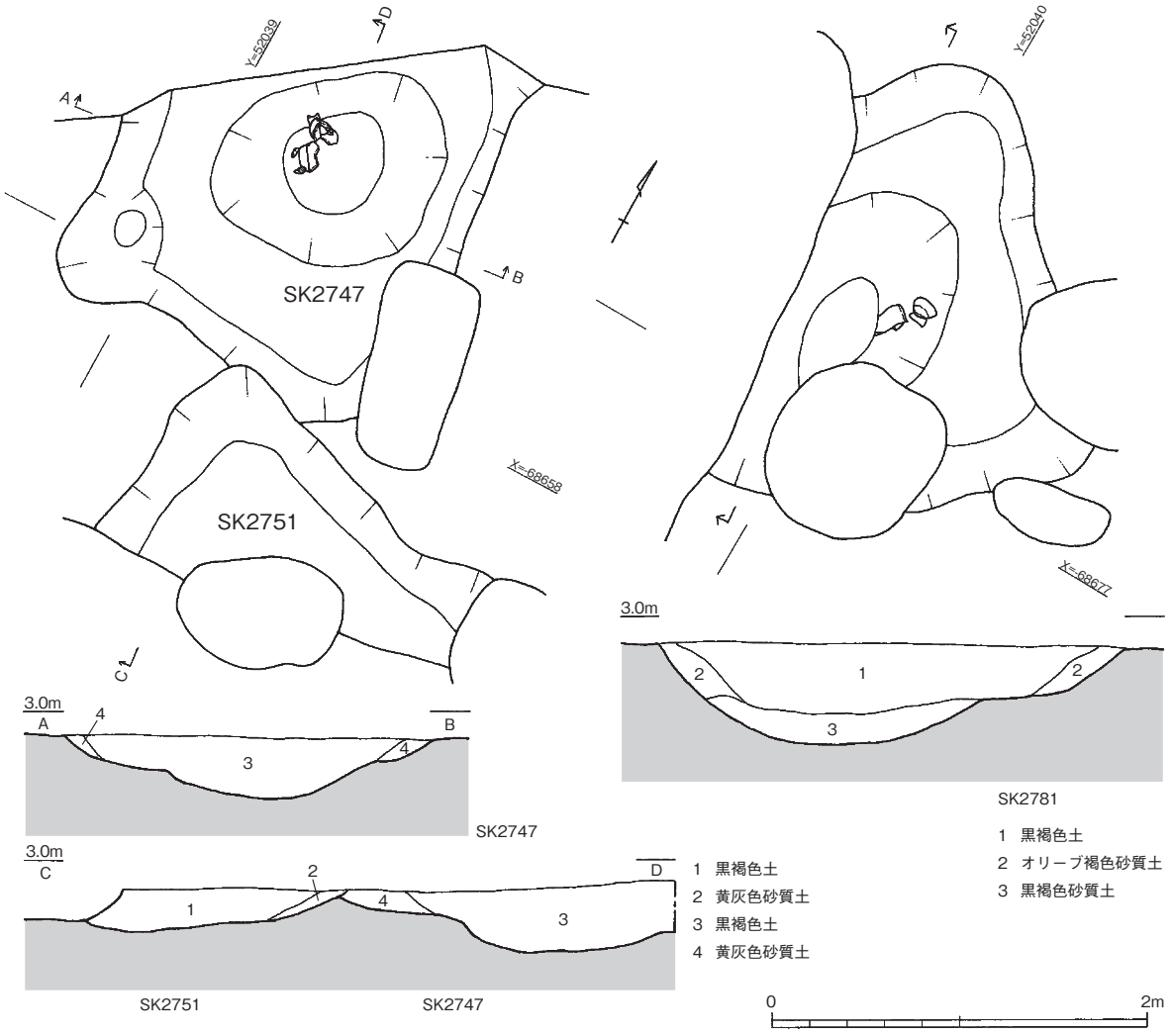
井戸SE2677（第47・57図　図版31－５・６　216－２～４）

SE2677はＢ区の西端，ⅥE2cグリッドに位置する。遺構の一部が壊されている。平面形は歪な楕円形で，断面形は２段掘り状の歪な逆台形状をなす。長径3.1ｍ以上，短径2.9m，深さ約0.45ｍである。埋土は６層に分層できた。

底面から大小の板材が出土した。直立する115㎝の長い板に，他の２本が直角に接する。井戸側の部材が崩れたものか。埋土から古墳時代の土師器や須恵器片が出土した。

井戸SE2691（第47・57図　図版31－１・２　216－５～14）

SE2691はＢ区西端の北壁際，Ⅵ2Ebグリッドに位置する。平面形は円形で，断面形は２段掘りの逆台形状をなす。直径３ｍ，深さ0.5ｍである。埋土は６層に分層できた。第３・４層から土師器片がまとまって出土した。底面では，長さ0.4m，幅0.15ｍの板材２枚が直角に配置されていた。井戸側の一部と考えられる。



第55図　古墳中期～終末期Ｂ区土坑実測図４（1：40）

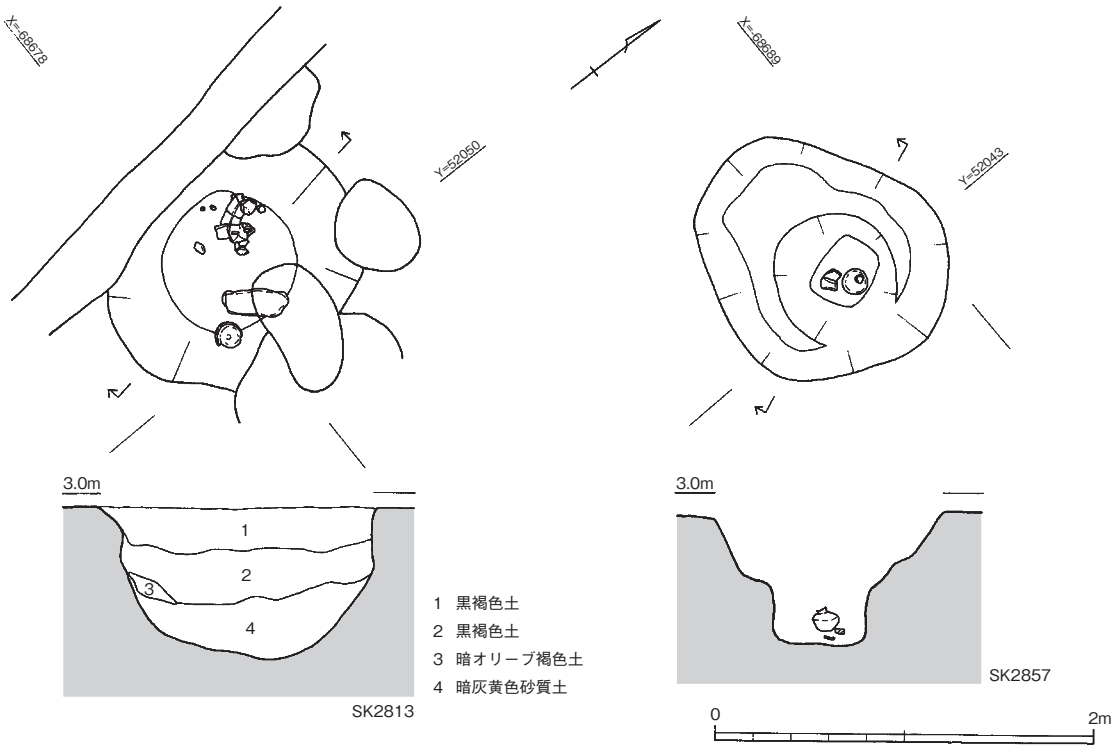
溝SD2754（第58図　217－９～11）

SD2754はＢ区西端の北壁際，ⅥE2bグリッドに位置する。ほぼ東西に直線的に走り（Ｅ－12°－Ｎ），調査区内では長さは10.5ｍを確認した。幅は約１ｍ，深さは0.2ｍである。埋土は２層に分層できた。各層から須恵器の壺などが出土した。

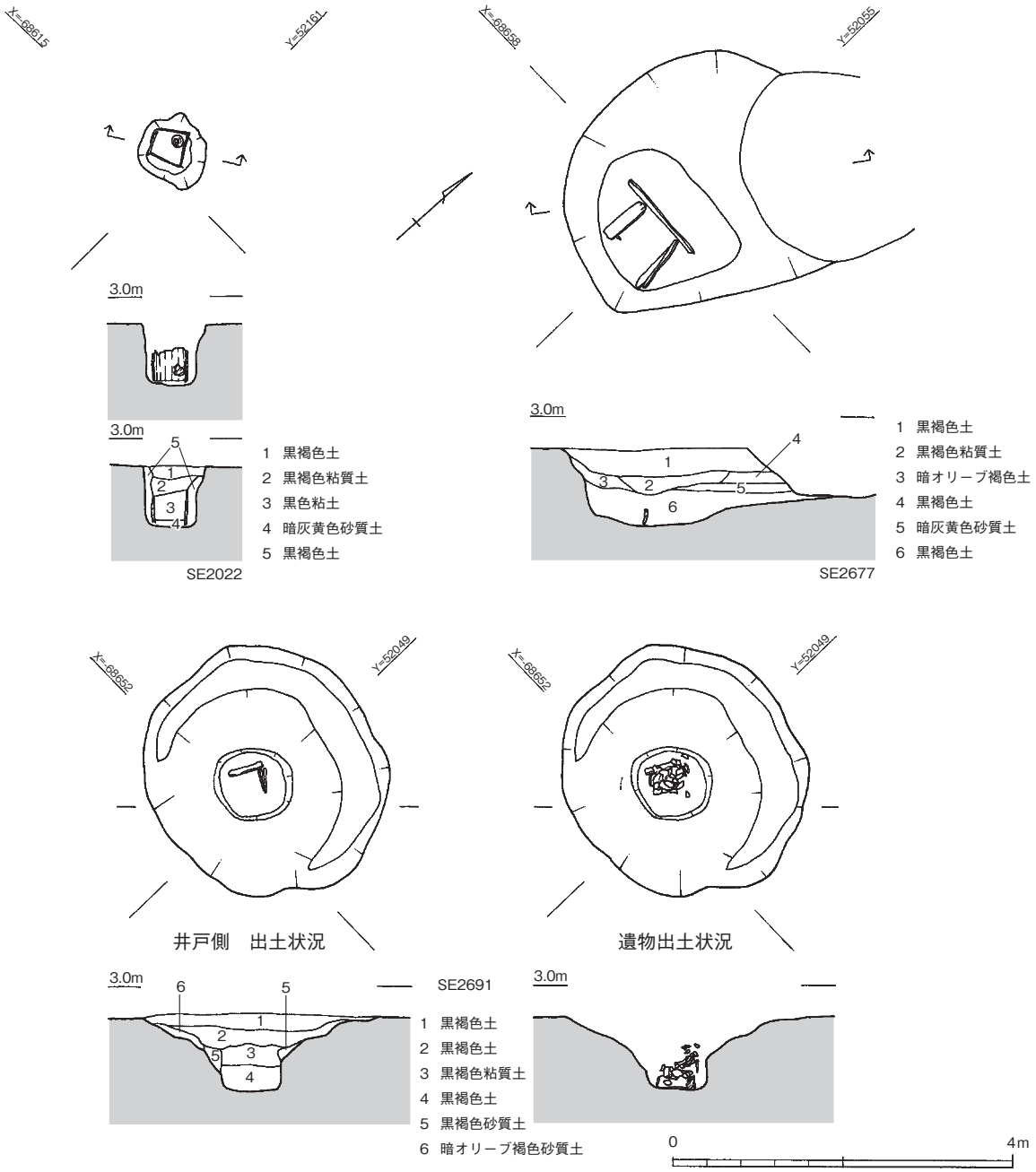
溝SD2265（第58図　217－１～８）

SD2265はＢ区中央の南壁際，ⅥF2・3aグリッドに位置する。南北方向（Ｎ－１°－Ｗ）にゆるやかに蛇行する。調査区内では長さ16ｍを確認した。幅は0.6～0.8ｍ，深さは0.2～0.4ｍである。

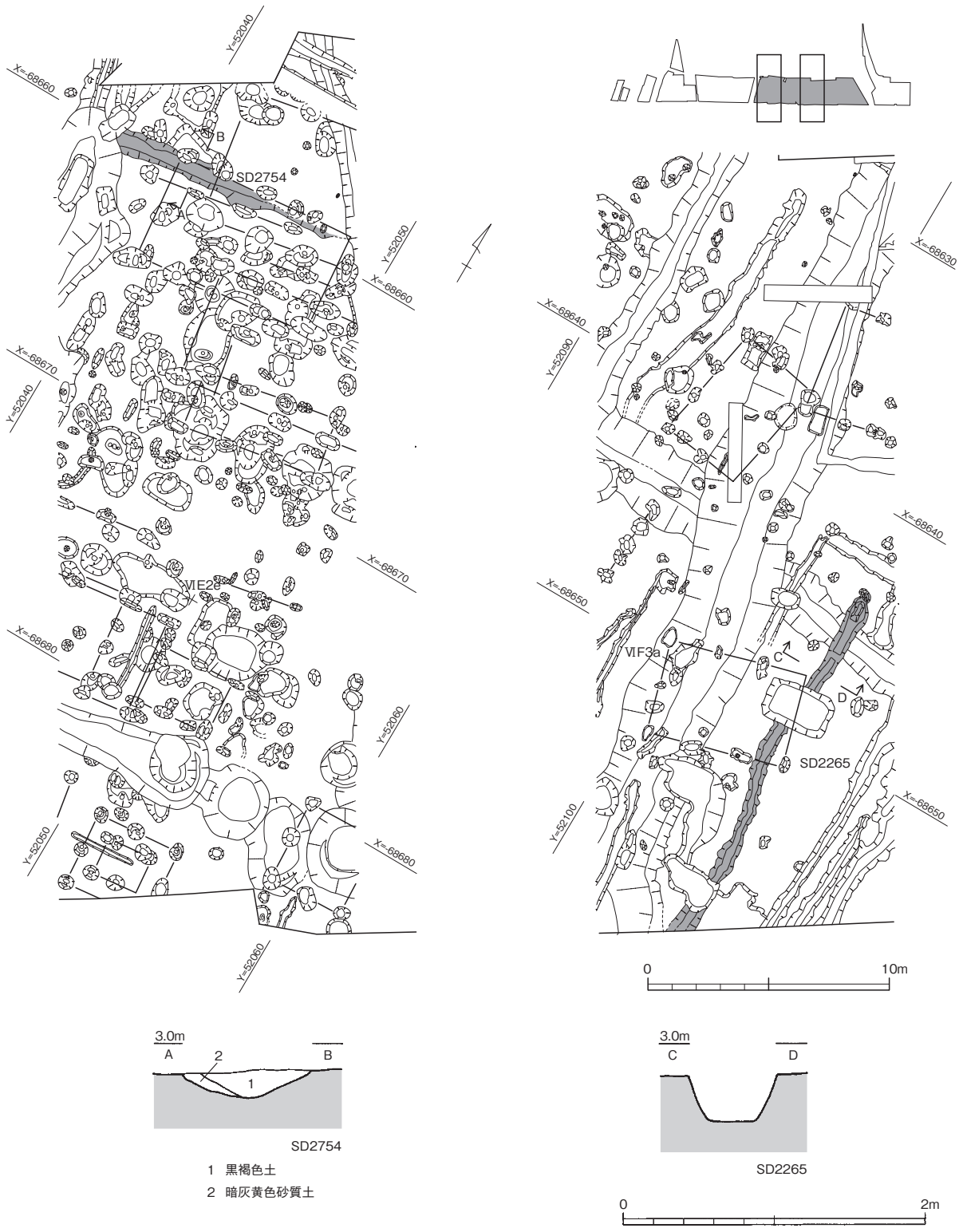
出土遺物は，古墳時代の土師器や須恵器などが出土した。



第56図　古墳中期～終末期Ｂ区土坑実測図５（1：40）



第57図　古墳中期～終末期Ｂ区井戸実測図２（1：80）



第58図　古墳中期～終末期Ｂ区遺構図（全体図1：250　溝土層断面図1：40）

３．Ｃ区の遺構

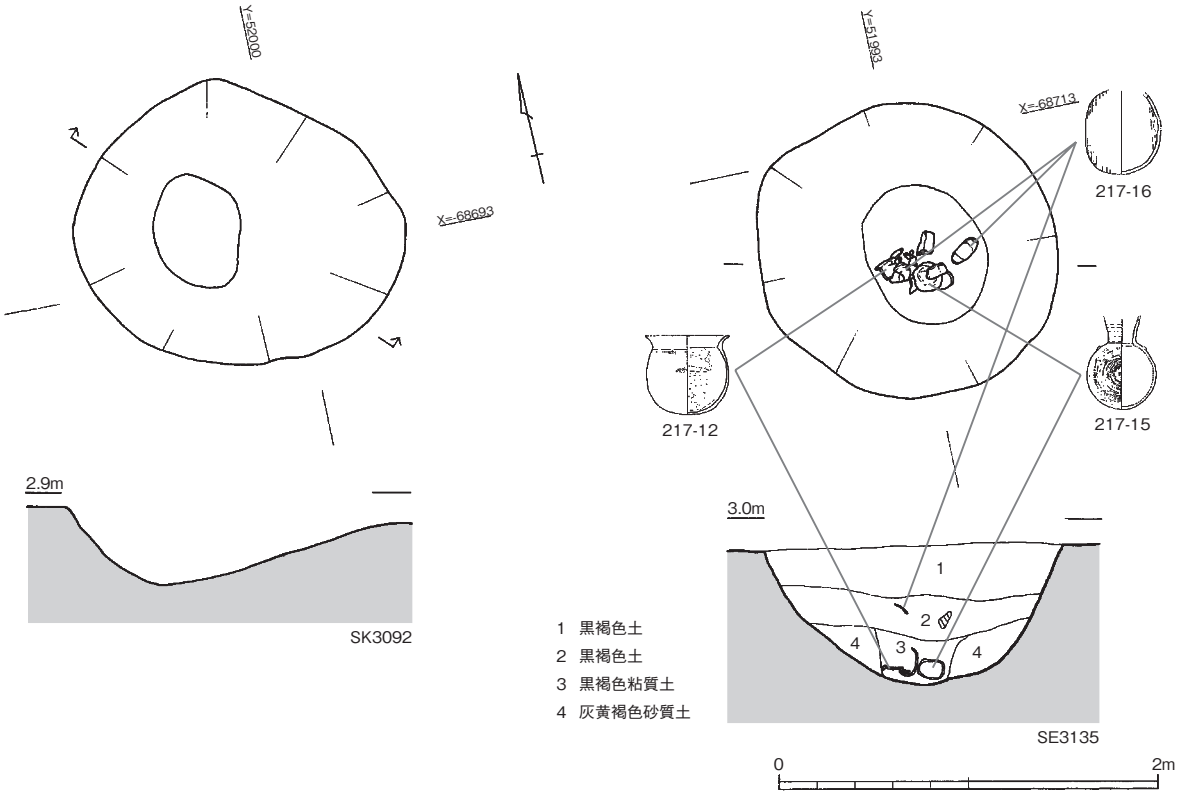
Ｃ区では土坑１基，井戸１基，溝を２条確認した。遺構検出面は，５層上面（標高2.8～3.0m）である。

土坑SK3092（第59・60図）

SK3092はＣ区の中央，ⅥD1dグリッドに位置し，一部Ⅵ1Eaグリッドにかかる。平面形は楕円形で，長径1.75m，短径1.6mである。深さは0.4mである。埋土から古墳時代後半頃の土師器片が出土した。いずれも小片で図示していない。。遺構の性格は不明である。

井戸SE3135（第59・60図　図版56－１　217－12～16）

SE3135はＣ区の南西，VD4dグリッドに位置する。平面形は円形で，断面形は逆台形状をなす。直径1.6m，深さ0.8mである。埋土は４層に分層できた。底面直上で，古墳時代の須恵器や土師器が出土した。井戸と考えられる。



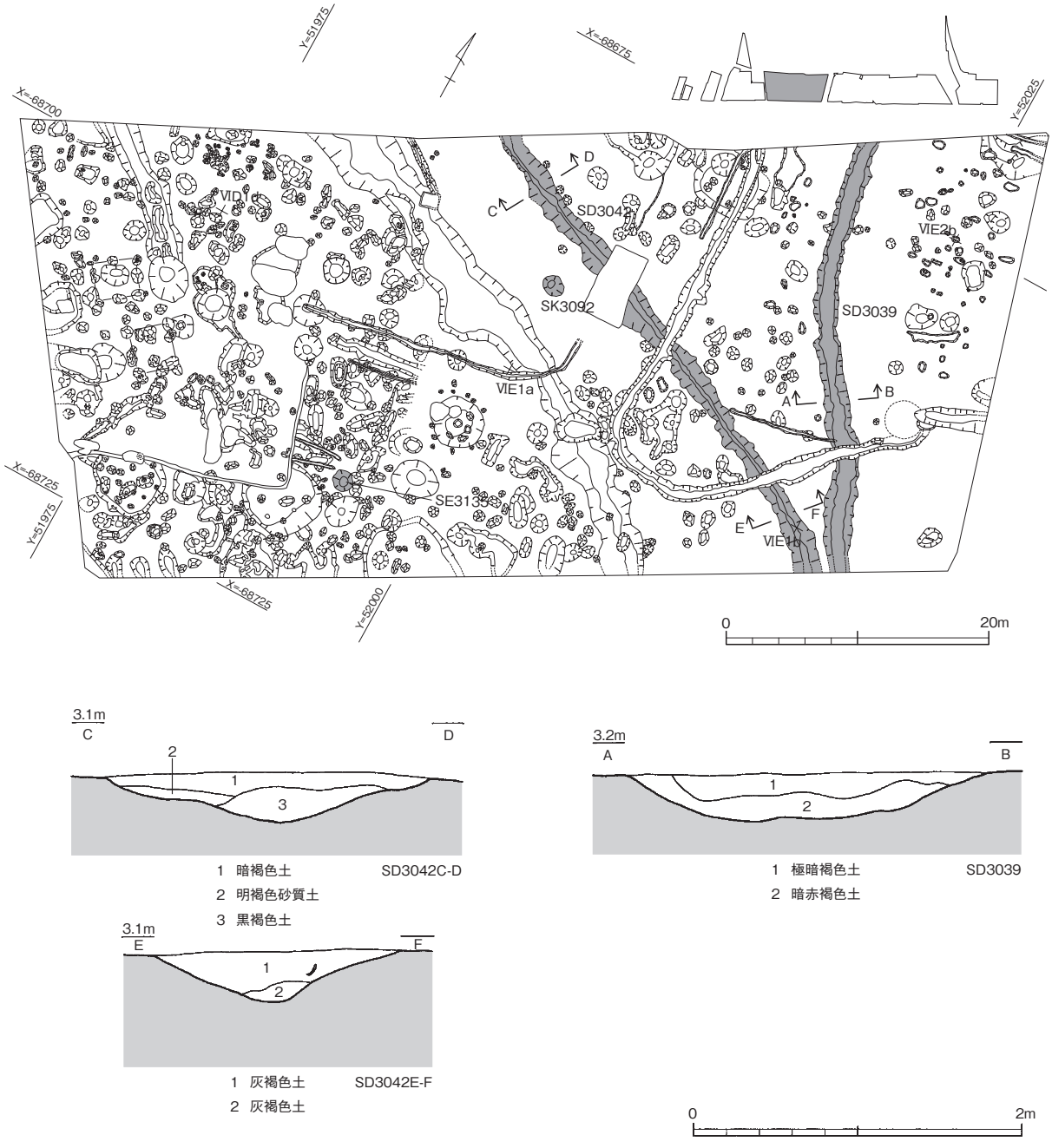
第59図　古墳中期～終末期Ｃ区土坑実測図（1：40）

溝SD3039（第60図　図版50－１　218－１～５）

SD3039はＣ区の東端，ⅦE1a・2a・1bグリッドにある。南南東から北北西（Ｎ－25°－Ｗ）へ緩やかに蛇行する。長さは調査区内で33ｍを確認した。幅は約１ｍ，断面形は半円形状で深さ0.3ｍである。底面は北西側が約0.1ｍ低い。埋土は２層に分層できた。各層から古墳時代の土師器などが出土した。

溝SD3042（第60図　図版50－２　218－６～13）

SD3042はＣ区の中央，ⅦD1d,ⅦE1a,VE4a,4bグリッドにある。南東から北西（Ｎ－65°－Ｗ）へＣ区を直線的に走る。長さは調査区内で37ｍを確認した。幅は1.75ｍ，深さ0.3ｍである。底面は北西側が約0.2ｍ低い。埋土は３層に分層できた。各層から古墳時代の土師器や須恵器が出土した。



第60図　古墳中期～終末期Ｃ区遺構図（全体図1：500　溝土層断面図1：40）

第６節　古代の遺構

古代の遺構は，主にＡ区・Ｂ区・Ｃ区において確認した。掘立柱建物21棟，柱穴列４列，土坑24基，井戸16基，溝21条，方形周溝状遺構１基を確認した。このうち建物や溝の向きは，いくつかのまとまりを示していた。Ｄ区の自然河道は古代で埋まったことが判明した。

１．　Ａ区の遺構

Ａ区では，掘立柱建物７棟，土坑７基，井戸４基，溝13条を検出した。遺構検出面は基本層序５層の上面（標高2.5～2.8m）ので検出した。

建物SB1004（第63・64図　図版９－２）

SB1004はＡ区東端の北側，ⅦG2aグリッドに位置する。２×３間の掘立柱建物で梁行3.3m×桁行5.0mである。主軸方位はＮ－82°－Ｅである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.4～0.8m，深さ0.1～0.4mである。柱穴底の標高は2.2～2.4m。柱穴の埋土のうち第３・４層は柱抜き取り穴埋土，第５層が掘方埋土である。北面の柱穴Ｐ３にスギ材の柱根が，南東隅の柱穴Ｐ１には径15㎝のカヤ材の柱根が残存していた。

遺物は，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB1005（第63・64図　図版９－２）

SB1005はＡ区東端の北側,ⅦG2aグリッドに位置する。SB1004の北で検出した掘立柱建物である。遺構の一部は壊され，また調査区外へ広がる。２間以上×３間の建物と推測される。確認できる建物の規模は梁行3.3m×桁行5.0mである。建物の主軸方位はＮ－75°－Ｅである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.4～0.5m，深さ0.1～0.2mである。柱穴底の標高は2.4～2.5m。

遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB1009（第63・65図　図版10－１）

SB1009はＡ区の東端,ⅦG1aグリッドに位置する。遺構の一部は壊されている。２×３間の掘立柱建物である。建物の規模は，梁行3.3m×桁行5.0mで，建物の主軸方位はＮ－81°－Ｅである。柱穴の形は不整な楕円形で，長径0.4～0.5m，深さ0.1mである。柱穴底の標高は2.4～2.5m。

遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB1014（第63・65図）

SB1014はＡ区の東端,ⅦG1aグリッドに位置する。１×３間の掘立柱建物である。遺構の一部は壊れている。建物の規模は梁行3.5m×桁行4.5mで，建物の主軸方位はＮ－75°－Ｅである。柱穴の形は不整な楕円形で，長径0.2～0.8m，深さ0.1～0.3mである。柱穴底の標高は2.4～2.7m。遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB1031（第63・66図　図版10－２　219－１）

SB1031はＡ区の中央,Ⅶ F1dグリッドに位置する。２×２間の掘立柱建物で，建物の規模は梁行4.0ｍ×桁行4.3ｍで，平面形は正方形に近い。建物の主軸方位はＮ－80°－Ｅである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.3～0.6ｍ，深さ0.1～0.2ｍである。柱穴底の標高は2.3～2.4ｍ。南面の柱穴Ｐ６には数個の角礫とともにマツ材の柱根が残存していた。

遺物は，古代の土師器片が出土した。

建物SB1163（第61・66図　図版９－１）

SB1163はＡ区の北西,Ⅶ F2bグリッドに位置する。３×３間の掘立柱建物であるが，調査区外に広がる可能性がある。建物の規模は梁行4.2ｍ×桁行4.8ｍで，建物の主軸方位はＮ－10°－Ｗである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.4～0.9ｍ，深さ0.2～0.4ｍである。柱穴底の標高は2.4～2.6ｍ。

遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB1250（第63・67図）

SB1250はＡ区の東壁側,Ⅶ G1aグリッドに位置する。遺構の一部は調査区外にある。２×３間の掘立柱建物で，建物の規模は梁行4.9ｍ×桁行5.0ｍである。建物の主軸方位はＮ－77°－Ｅ。東西梁行の中間にある柱穴がやや外側に出る。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，直径0.3～0.5ｍ，深さ0.1～0.2ｍである。柱穴底の標高は2.3～2.5ｍ。

遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

土坑SK1021（第63図　図版６－２　219－２）

SK1021はＡ区の東端,Ⅶ G1aグリッドに位置する。遺構の一部は壊されている。平面形は隅丸方形である。規模は１辺0.6～0.7ｍ，深さ0.5ｍである。遺物は，古代の須恵器が出土した。

土坑SK1047（第63・68図　219－３・４）

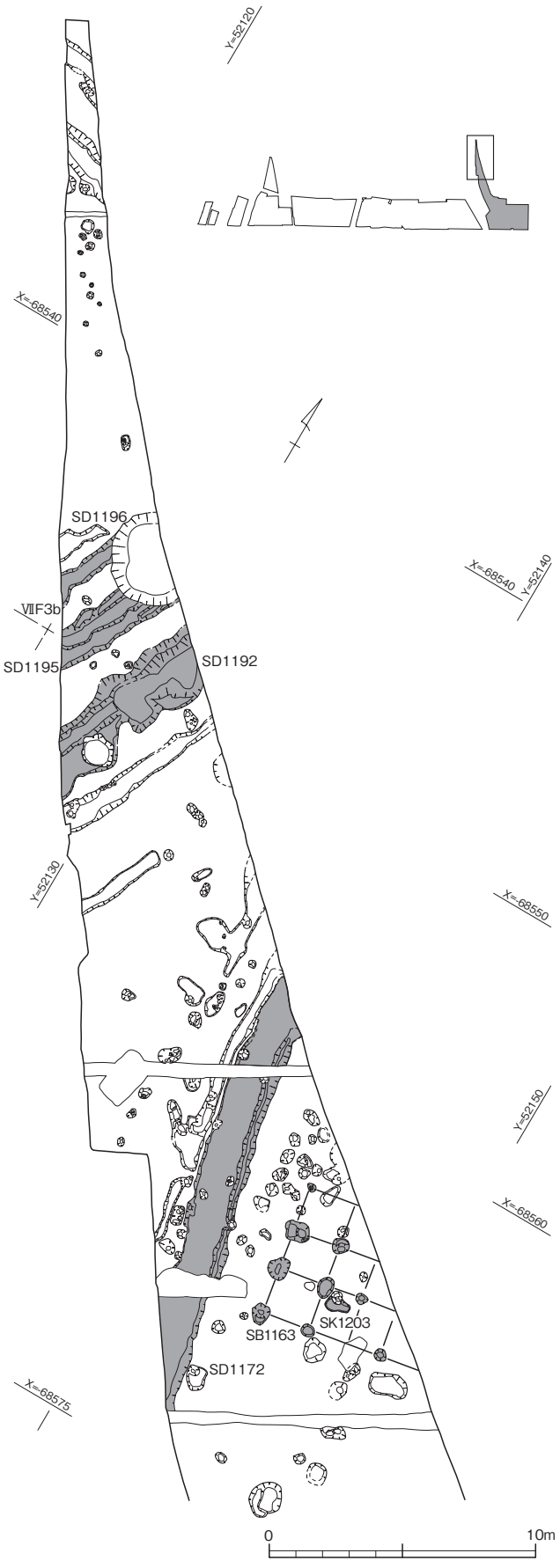
SK1047はＡ区中央の北壁側,Ⅶ F1aグリッドに位置する。遺構の一部は壊され，北側は調査区外にある。確認できた規模は長径1.1ｍ，短径0.6ｍ，深さ0.2ｍ。断面形は逆台形状である。埋土は２層に分層できた。底面直上で古代の須恵器が出土した。

土坑SK1093（第62・69図　219－５）

SK1093はＡ区の南,Ⅵ F4bとⅦ F1dグリッドにまたがって位置する。遺構の一部が壊される。平面形は歪な長楕円形で，断面形は「Ｗ」字状をなす。規模は長径5.3ｍ，短径1.8ｍ，深さ0.2ｍ。黒褐色砂質土の埋土が堆積する。遺物は，古代の須恵器片が出土した。

井戸SE1136（第62・68図　219－６）

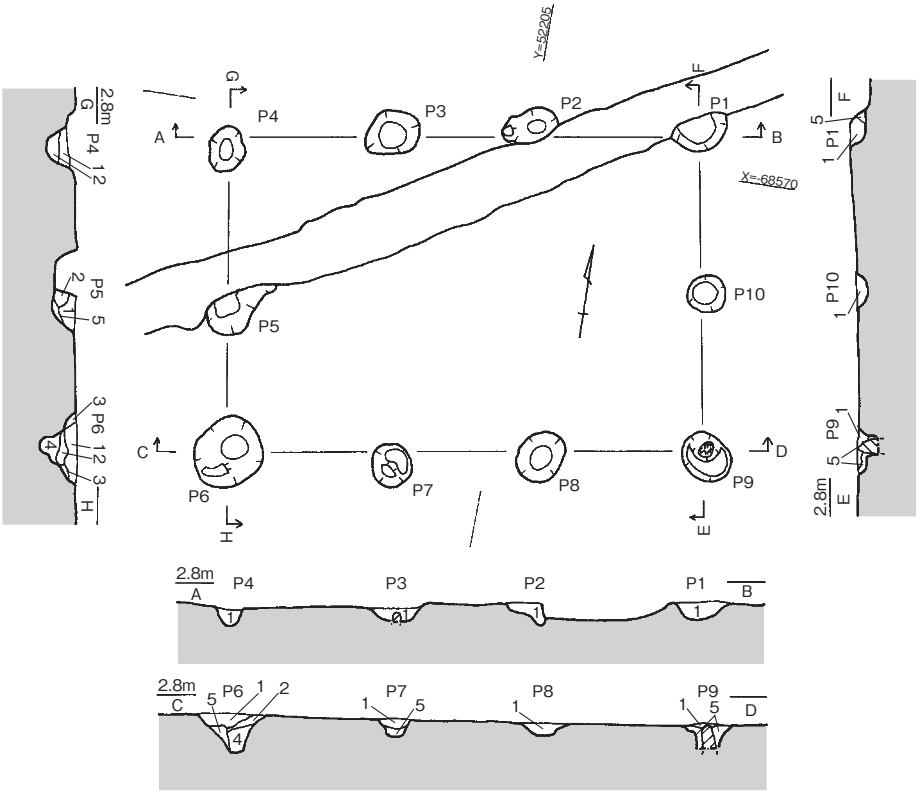
SE1136はＡ区西端の西壁際,Ⅵ F4cグリッドに位置する。西側が調査区外にある。平面形は歪な楕円形で，断面形は２段掘りの逆台形状をなす。確認できた規模は長径2.5ｍ，短径1.1ｍ，深さ0.9ｍ。埋土は５層に分層できた。第３層から厚さ５㎝，高さ40㎝の板材が１枚立った状態で確認した。この板材は井戸枠の一部，第５層が裏込め土と考えられる。遺物は，８世紀中頃の須恵器が出土した。

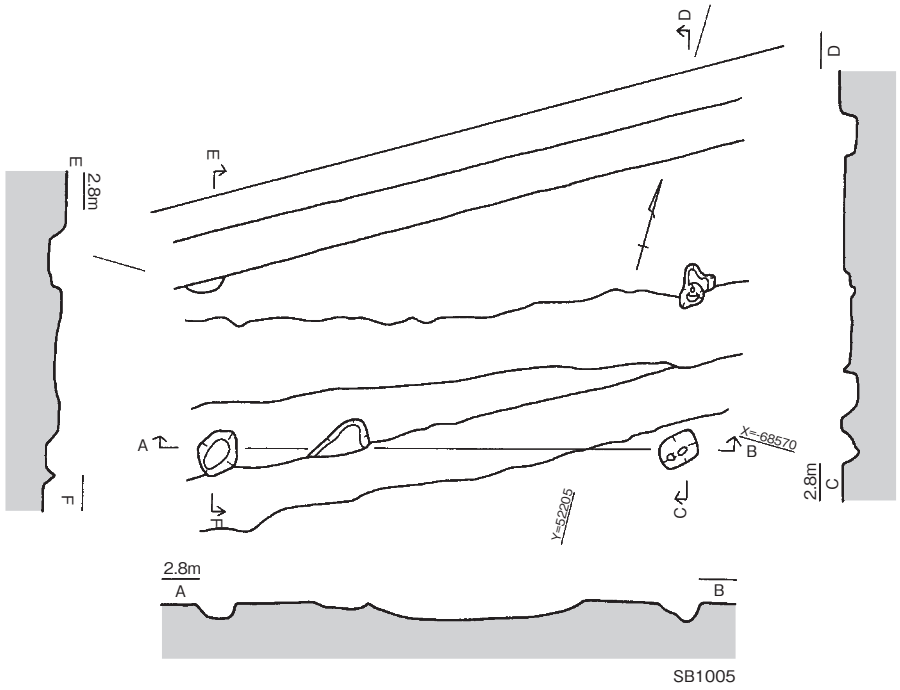


第61図　古代Ａ区遺構図１（1：250）

第62図　古代Ａ区遺構図２（1：250）

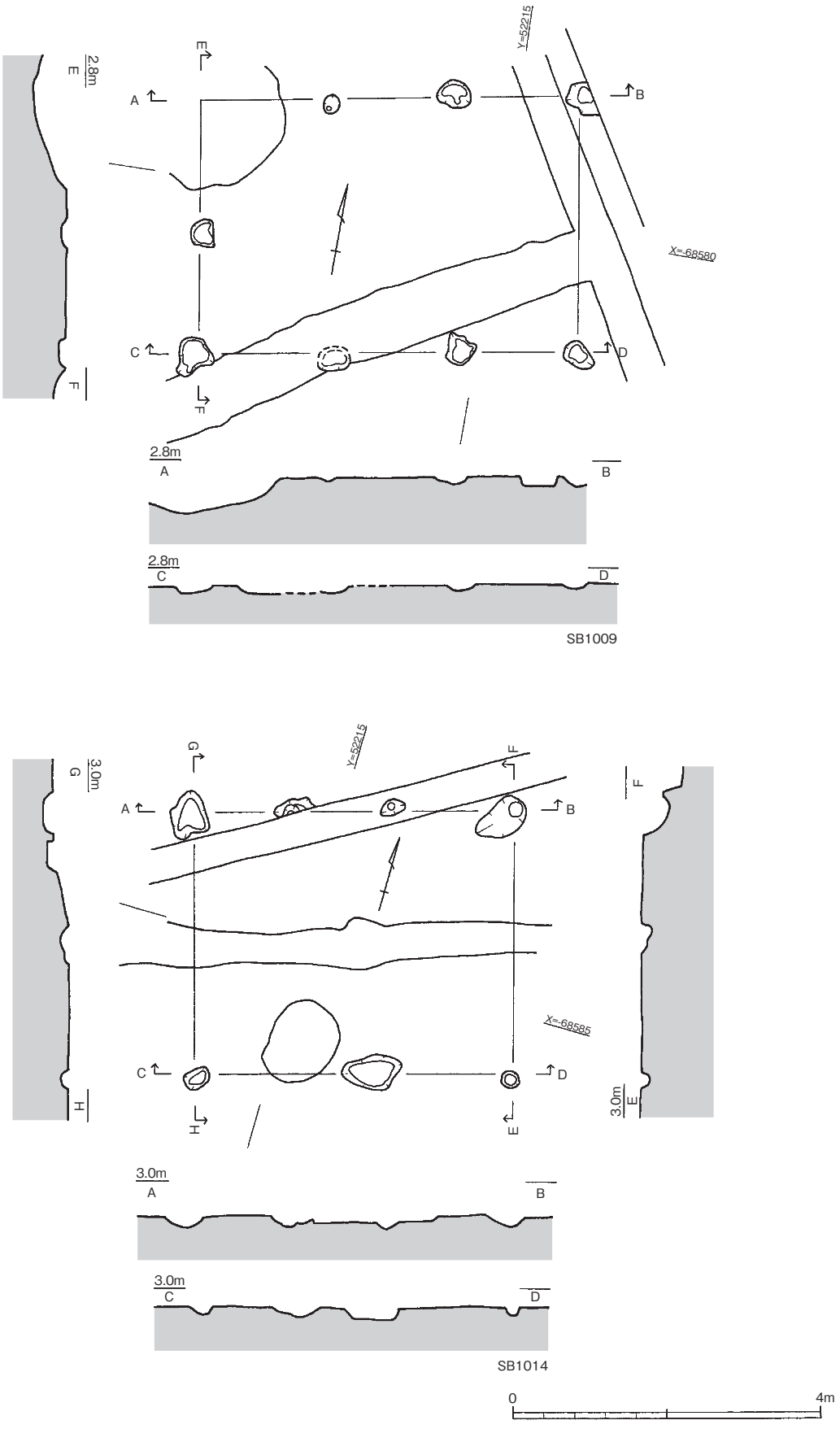
第63図　古代Ａ区遺構図３（1：250）



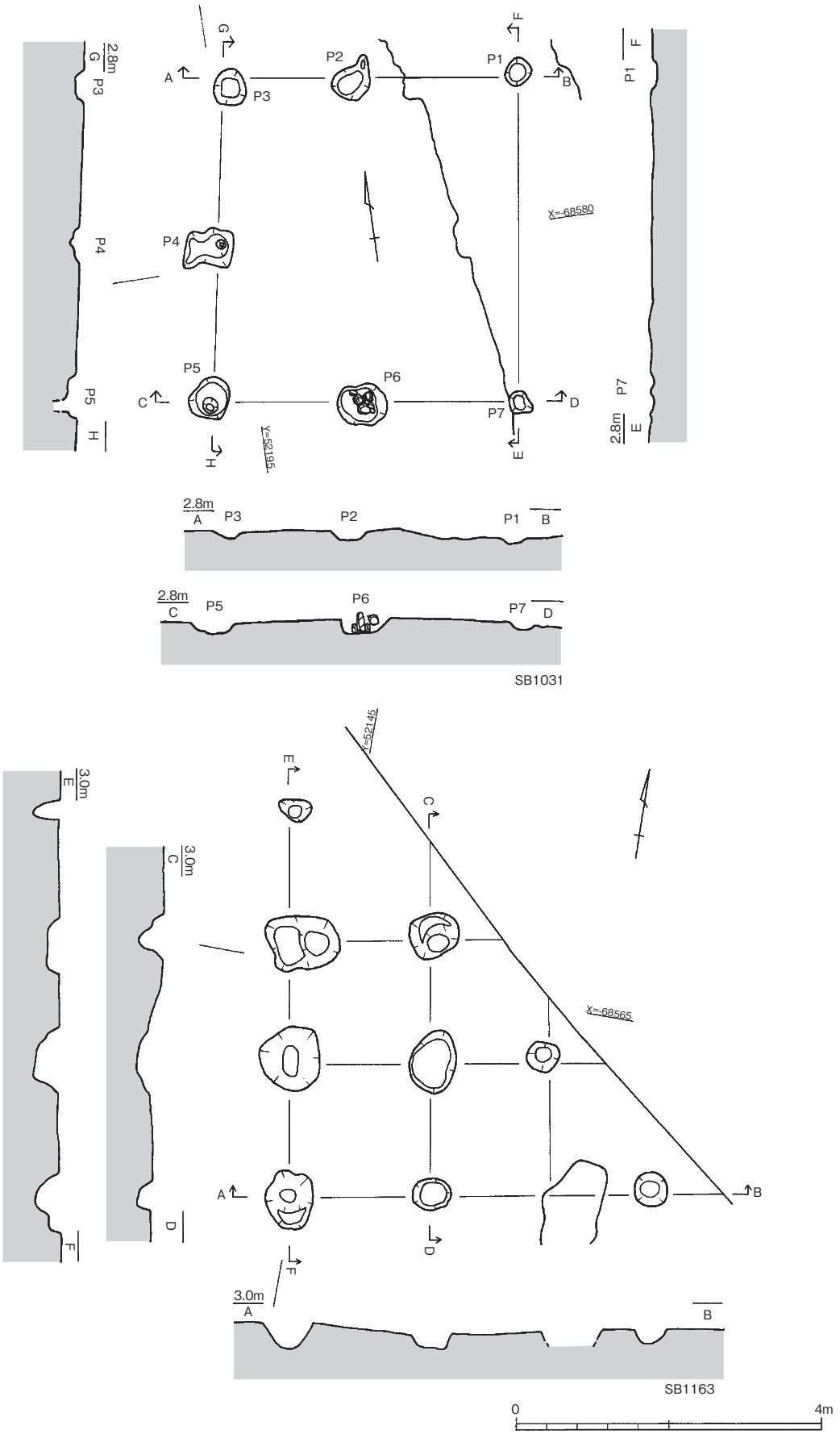


0　4m

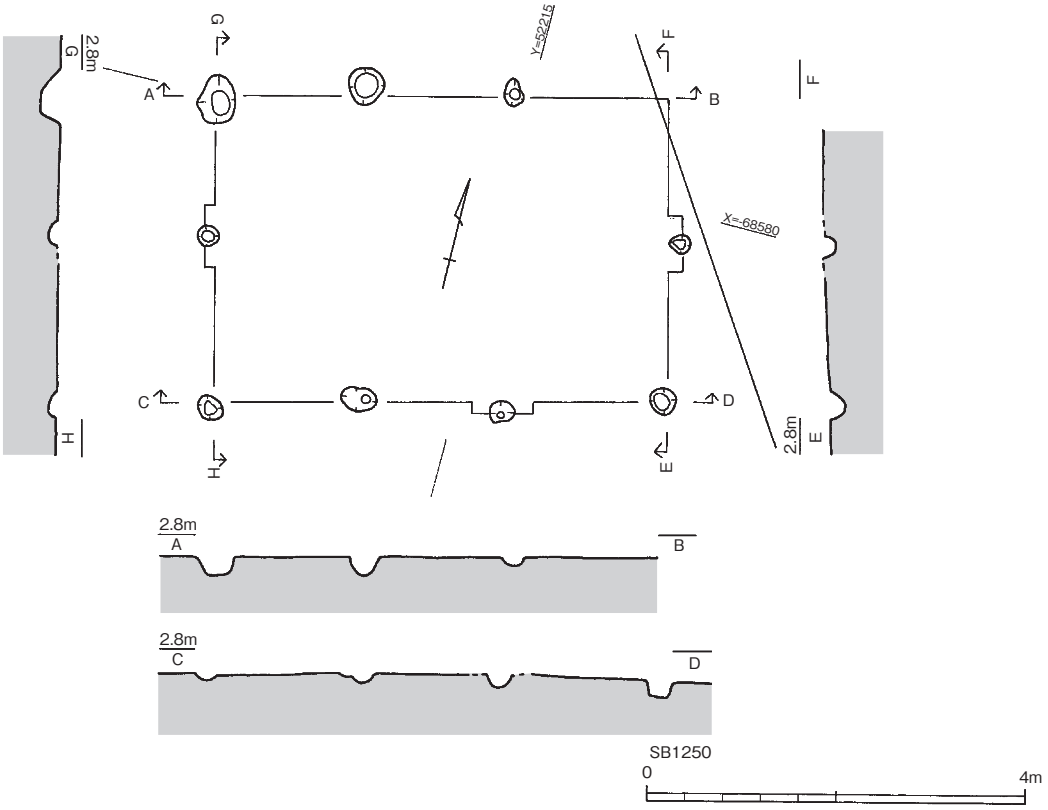
第64図　古代Ａ区建物実測図１（1：80）



第65図　古代Ａ区建物実測図２（1：80）



第66図　古代Ａ区建物実測図３（1：80）



第67図　古代Ａ区建物実測図４（1：80）

土坑SK1140（第62図　219－７）

SK1140はＡ区の西端,ⅥF4dグリッドに位置する。遺構の一部が壊されている。平面形は楕円形であろう。確認できた規模は長径1.2m，短径0.6m，深さ0.2m。遺物は，９世紀代の土師器が出土した。

土坑SK1141（第62・69図　219－８～10）

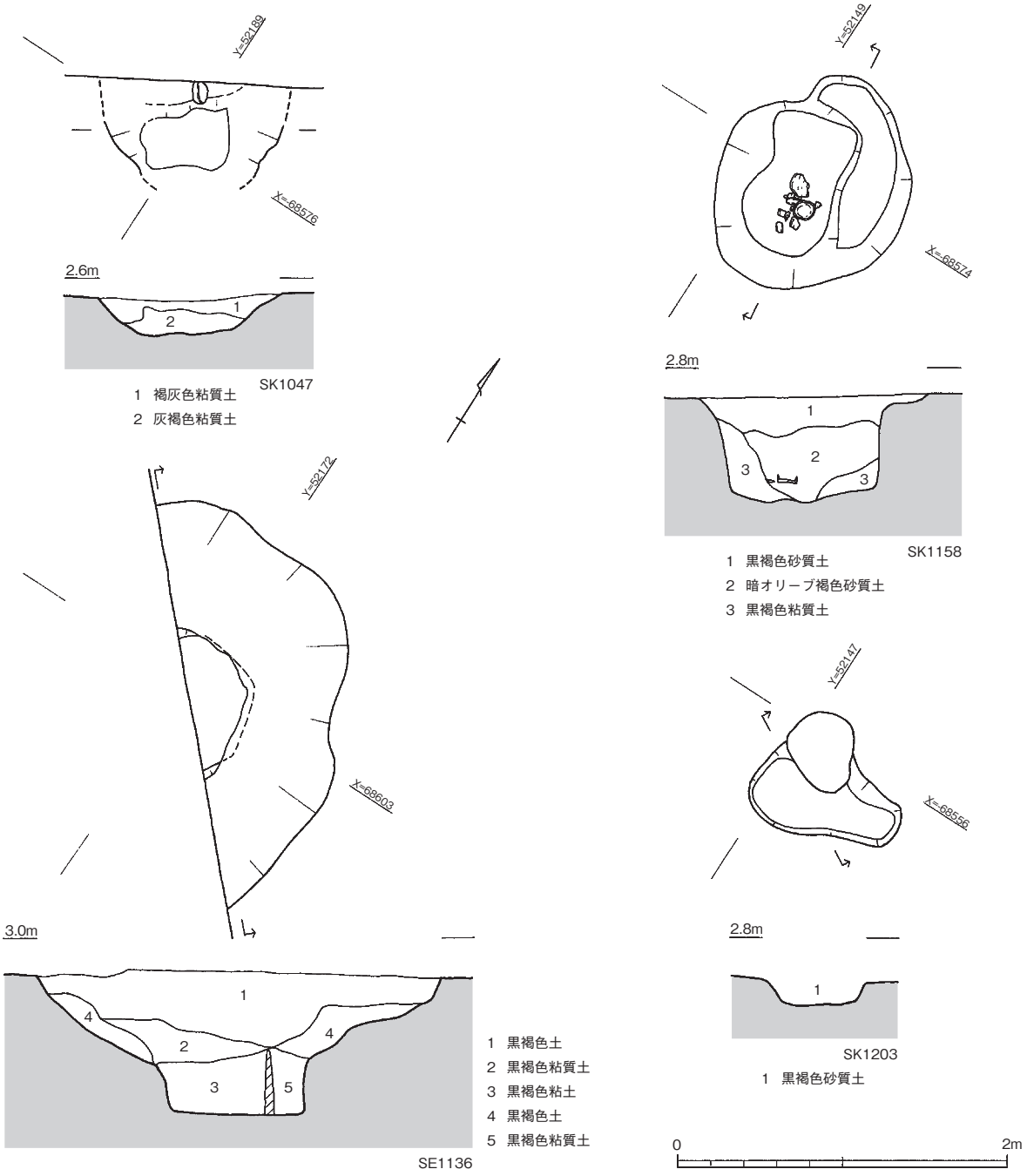
SK1141はＡ区の西端,ⅥF4dグリッドに位置する。遺構の一部が壊されている。平面形は円形で，掘形の断面形は逆台形状をなす。直径2.3m，深さ1.0m。埋土は５層に分層できた。第５層から古代の須恵器や土師器破片などが出土した。

土坑SK1158（第62・68図　図版５－４　219－11～13）

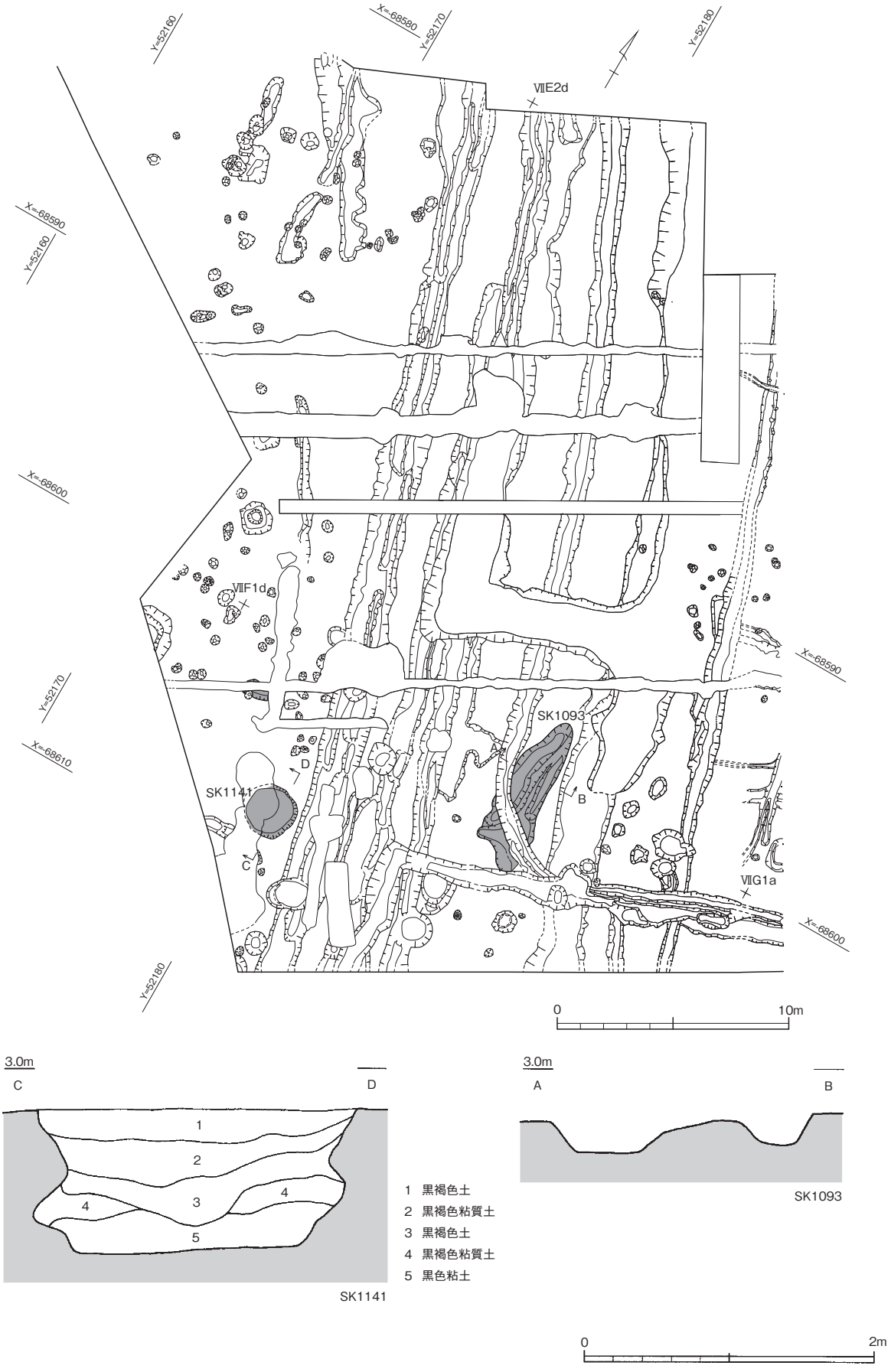
SK1158はＡ区の北西,ⅦF2bグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で，断面形は「Ｕ」字状をなす。長径1.4m，短径1.2m，深さ0.6m。埋土は３層に分層できた。第２層下半部から，８世紀の墨書土師器や須恵器片がまとまって出土した。

土坑SK1203（第61・68図　219－17）

SK1203はＡ区の北西,ⅦF2bグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で，断面形は逆台形状である。長径0.9m，短径0.6m，深さ0.2m。遺物は，９世紀の墨書土師器が出土した。



第68図　古代Ａ区土坑実測図１（1：40）



第69図　古代Ａ区土坑実測図２（平面1：250　土層断面1：40）

井戸SE1019（第63・70図　図版７－１・２）

SE1019はＡ区東端の北側,Ⅶ G1aグリッドに位置する。遺構の一部が壊される。平面形は隅丸方形で，断面形は逆台形状の掘り方である。一辺0.7～0.9m，深さ0.7m。埋土は９層に分層できた。埋土から高さ40～50cm，厚さ４cmの板４枚が45cm四方に組まれた木枠が出土した。

遺物は，木枠内から桃と思われる種子が出土した。

井戸SE1026（第63・70図　図版８－１　219－14～16）

SE1026はＡ区東端の北側,Ⅶ G2aグリッドに位置する。平面形は円形で，断面形は２段掘りで逆台形の掘り方をもつ。直径1.6m，深さ1.3m。遺構内には，上部に板組，下部に曲物を用いた井筒からなる井戸側を確認した。上部の板組は，高さ60cm，厚さ２cmの板１～３枚に８cm角の横桟を渡して70cm四方に組む。下部の井筒は，径40cmほどの曲物を３段（高さ70cm）に積み上げる。

遺物は，８世紀中頃から後半の須恵器や赤彩土師器などが出土した。

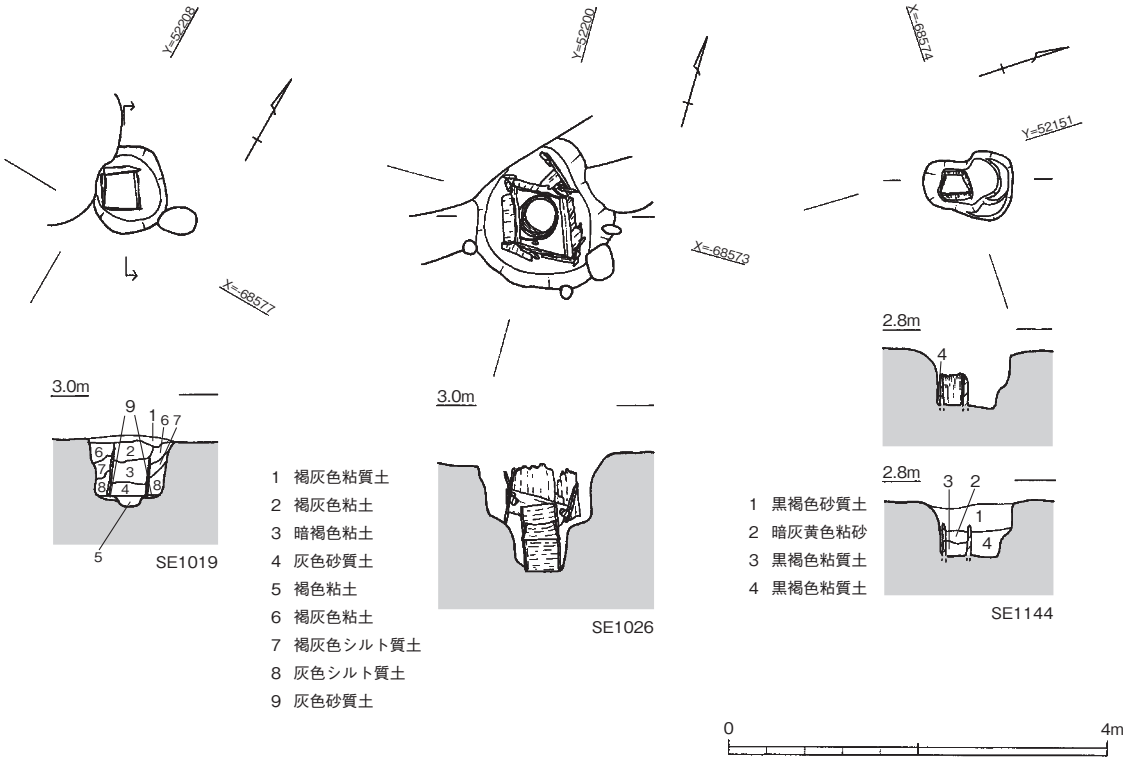
井戸SE1144（第62・70図　図版８－２）

SE1144はＡ区の北西,Ⅶ F2cグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形，断面形は逆台形状の掘り方を持つ。長径1.0m，短径0.7m，深さ0.6m。埋土は４層に分層できた。遺構内南側に，井戸枠を確認した。井戸枠は高さ35cm，幅30cm，厚さ４cmの板４枚が30cm四方に組まれていた。

溝SD1007（第63・71図　220－１）

SD1007はＡ区東端の東壁際,Ⅶ G1aグリッドの南部に位置する南北溝（Ｎ－８°－Ｅ）である。確認できる規模は，長さ7.0m，幅0.2～0.4m，深さ0.1m。

遺物は，８世紀中頃の須恵器が出土している。



第70図　古代Ａ区井戸実測図（1：80）

溝SD1038（第63・74図）

SD1038はＡ区の中央,Ⅶ F1dグリッド位置する南北溝（Ｎ－８°－Ｗ）である。確認できる規模は，長さ19m，幅0.4～0.7m，深さ0.1～0.2m。南端と北端は壊されている。

溝SD1045（第63・72図）

SD1045はＡ区の中央,Ⅶ F1dグリッドからⅦF4dグリッドにかけて位置する南北溝（Ｎ－20°－Ｗ）である。確認できる規模は，長さ34m，幅0.5～0.9m，深さ0.2mである。

溝SD1079（第62・63・72図　図版４－１）

SD1079はＡ区の中央,Ⅶ F1dグリッドからⅦG4aグリッドにかけて「Ｌ」字状に延びる溝である。確認できる規模は，長さ56m，幅0.9m，深さ0.3m。溝の主軸は南北方向（Ｎ－19°－Ｗ）である。本遺構はⅦF4dグリッドで東に直角に折れ（東西方向Ｎ－70°－Ｅ），調査区外へ延びる。底面の標高は東西溝が2.5m，南北溝の北部が2.4mである。全体的な高低差はほとんどない。

溝SD1089（第62・63・72図　220－２～９）

SD1089はＡ区の中央,Ⅶ F1dグリッドに位置する南北溝（Ｎ－19°－Ｗ）である。長さ28m，幅1.0～2.6m，深さ0.2m。南側で東西（Ｎ－79°－Ｅ）の溝に枝分かれする。東西溝の西側は６m延びて北へ直角に折れ，南北溝に平行する。遺物は，７～８世紀の須恵器や土師器などが出土した。

第71図　古代Ａ区溝実測図１（平面1：500　土層断面1：40）

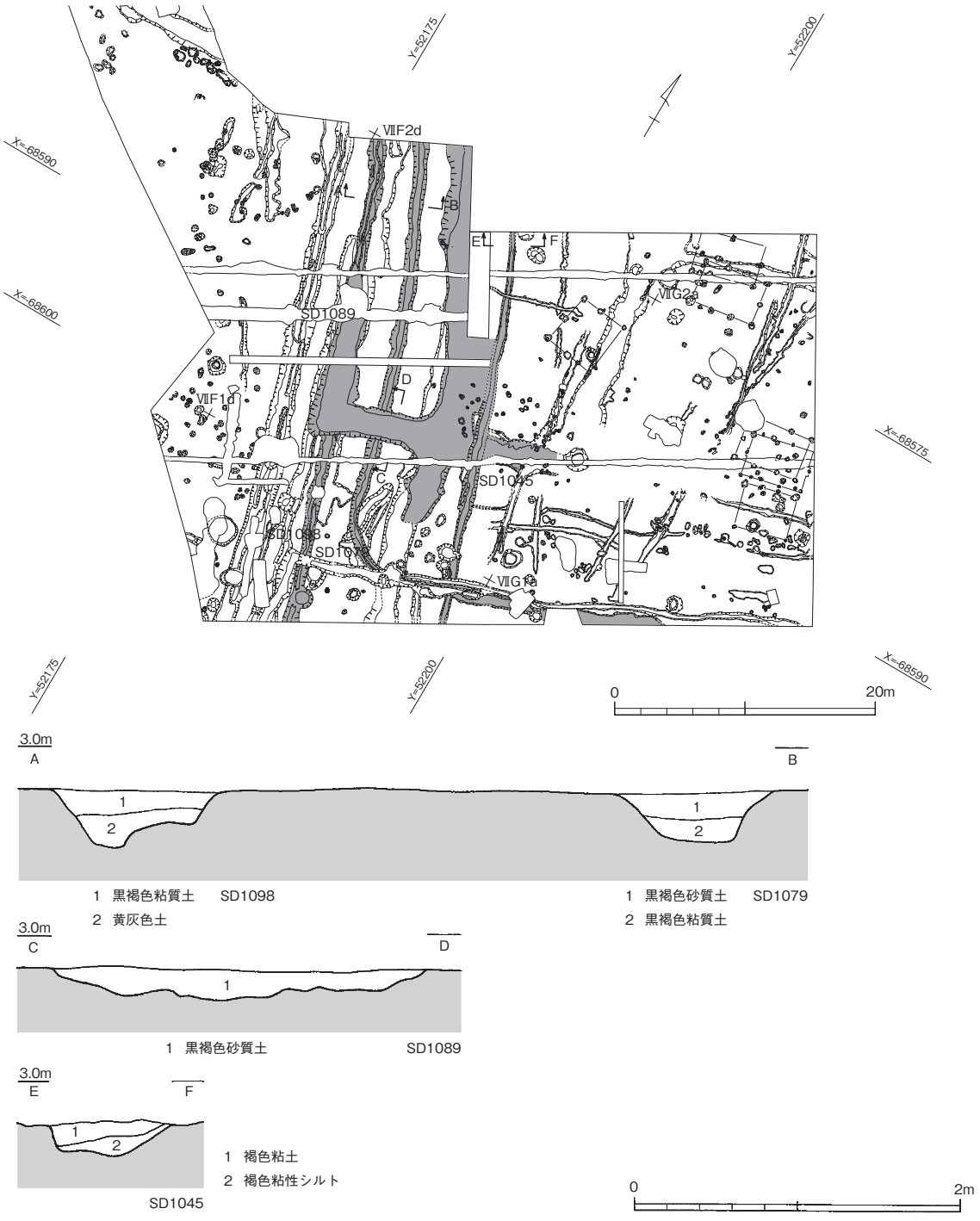
溝SD1098（第62・72図　図版３－２，４－１・３）

SD1098はＡ区の南西,ⅥF4dグリッドからⅦF1dグリッドに位置する南北溝（Ｎ－19°－Ｗ）である。長さ38m，幅1.0m，深さ0.3～0.4m。南側で一部が直径1.8mの土坑状に膨らむ。

溝SD1101（第62・73図　図版３－２，４－１・３　220－10～20）

SD1101はＡ区の西,ⅥF4dグリッドからⅦF1dグリッドにかけて位置する南北溝（Ｎ－15°－Ｗ）である。遺構の一部を壊される。確認できる規模は，長さ38m，幅1.5～2.2m，深さ0.2～0.3m。

遺物は，７世紀後半から９世紀前葉の須恵器や土師器が出土した。



第72図　古代Ａ区溝実測図２（平面1：500　土層断面1：40）

溝SD1103（第62・73図　図版４－２　220－21～28）

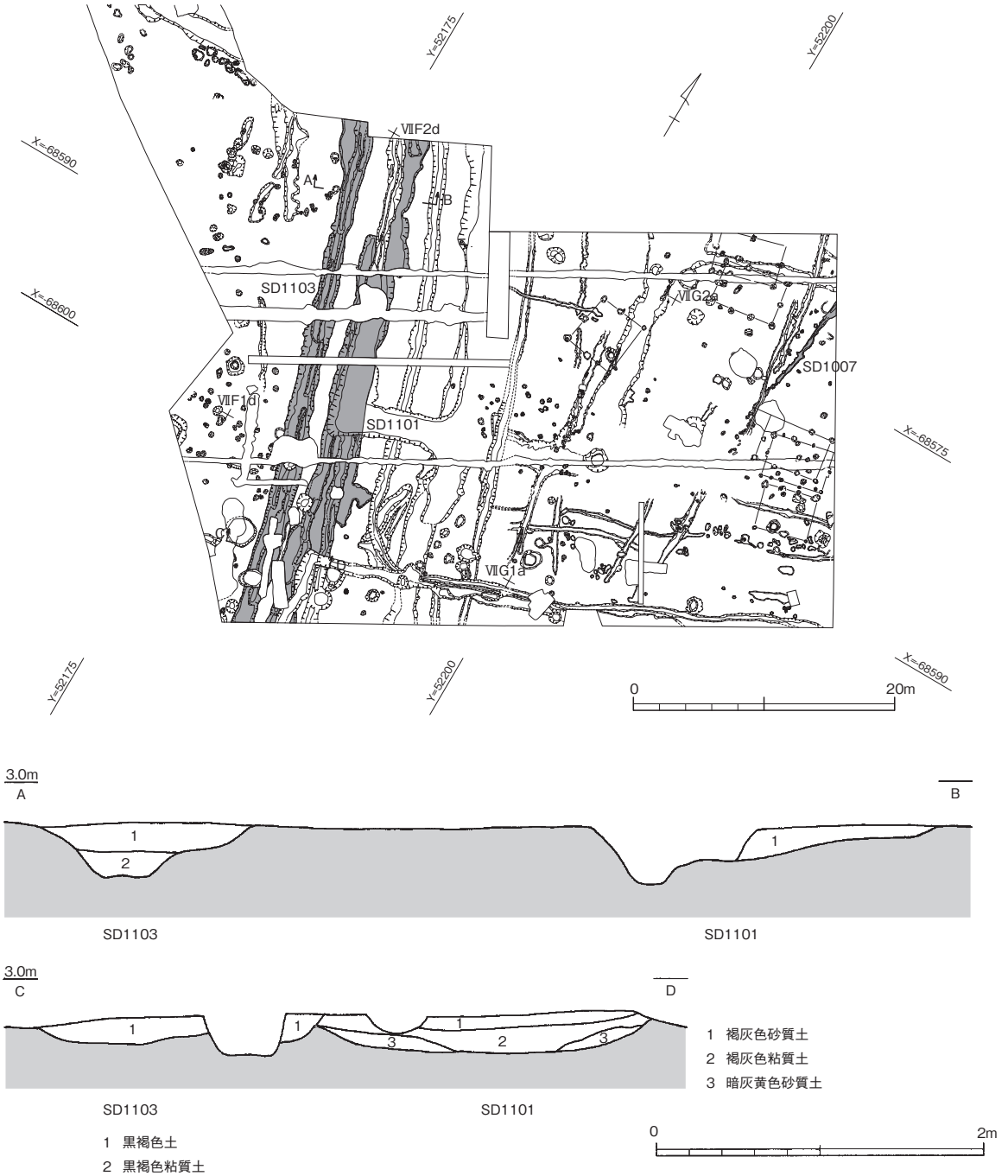
SD1103はＡ区の西,ⅦF1dグリッドからⅦF4dグリッドにかけて位置する南北溝（Ｎ－16°－Ｗ）である。遺構の一部を壊される。確認できる規模は，長さ40m，幅1.3～1.8m，深さ0.3～0.4m。

遺物は，８世紀代の須恵器や土師器が出土した。

溝SD1152（第62・74図　図版３－３　220－29～33）

SD1152はＡ区の北西,ⅦF1bグリッドからⅦF1cグリッドにかけて位置する東西溝（Ｎ－88°－Ｅ）である。確認できる規模は，長さ15m，幅1.8m，深さ0.2m。

遺物は，８世紀代の須恵器や土師器が出土した。



第73図　古代Ａ区溝実測図３（平面1：500　土層断面1：40）

第74図　古代Ａ区溝実測図４（平面1：500　土層断面1：40）

溝SD1172（第61・74図　図版３－４）

SD1172はＡ区の北西,ⅦF2bグリッドに位置する南北溝（Ｎ－10°－Ｗ）である。確認できる規模は，長さ15m，幅1.8m，深さ0.1～0.2m。前述のSD1152とは調査区外でほぼ直角に交わる位置関係である。規模・埋土が同じことから，同一遺構の可能性が考えられる。

溝SD1192（第61・75図）

SD1192はＡ区の北西,ⅦF2bグリッドからⅦF3bグリッドにかけて位置する南北溝（Ｎ－25°－Ｅ）である。確認できる規模は，長さ7.0m，幅1.8m，深さ0.5m。

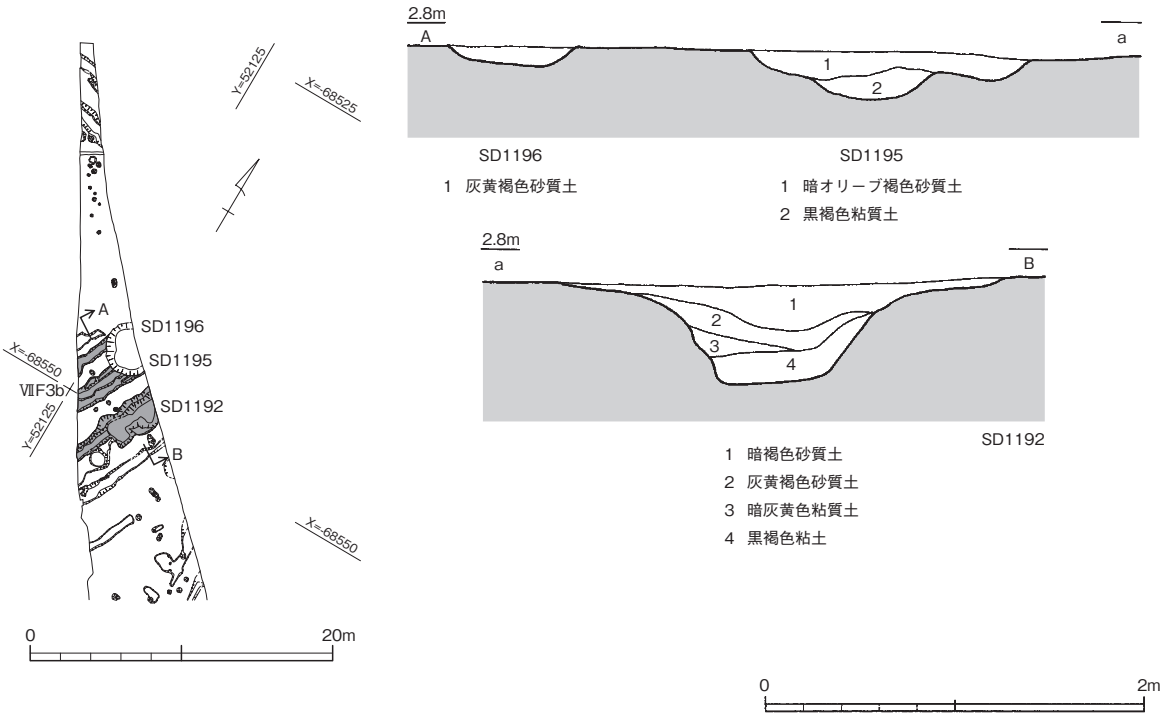
溝SD1195（第61・75図　220－34）

SD1195はＡ区の北西,ⅦF3bグリッドに位置する南北溝（Ｎ－25°－Ｅ）である。北側は壊されている。確認できる規模は，長さ4.6m，幅1.5m，深さ0.3m。南１mにあるSD1192と平行する。

遺物は古代の須恵器片が出土した。

溝SD1196（第61・75図）

SD1196はＡ区の北西,ⅦF3bグリッドに位置する南北溝（Ｎ－25°－Ｅ）である。北側は壊されている。確認できる規模は，長さ３m，幅0.7m，深さ0.1m。南１mにあるSD1195と平行する。



第75図　古代Ａ区溝実測図５（平面1：500　土層断面1：40）

２．Ｂ区の遺構

Ｂ区では，掘立柱建物12棟，柱穴列４列を確認した。これらの遺構は，調査区の中央部を除く東側と西側で分布密度が高い。また，土坑16基，井戸９基，溝８条，方形周溝１基を確認した。このうち，溝は調査区の東側で多くみられる。方形周溝を除き，遺構検出面は，５層上面（標高2.7～3.0m）である。

建物SB2005（第79・80 図）

SB2005はＢ区の東,ⅥF4cグリッドに位置する。南側は調査区外にある。確認できた規模は１×３間の掘立柱建物で，梁行1.8m×桁行5.0mである。北面の柱穴列を主軸とした場合，方位はＮ－83°－Ｅである。柱穴の形は不整な楕円形で，長径0.6～0.8m，深さ0.2～0.3mである。柱穴底の標高は2.3～2.5m。柱穴の埋土は第２層が柱の腐食痕または抜き取り穴の埋土，第３層が掘形埋土である。

遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2050（第79・80図）

SB2050はＢ区の東,ⅥF4cグリッドに位置する。南面の柱列と東面・西面の柱列の一部は調査区外にある。確認できた建物は２×３間の西面に庇が付く。梁行3.3m×桁行5.0mである。建物の主軸方位はＮ－84°－Ｅである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.4～0.8m，深さ0.２～0.３mである。柱穴底の標高は2.5m。柱穴の埋土は第１層が柱抜き取り時の流入土，第２層が掘形埋土である。

遺物は，奈良時代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2102（第79・81図　図版40－２）

SB2102はＢ区の東,ⅥF3cグリッドに位置する。２×２間の総柱建物である。2.5m×2.5mを確認したが，南側に広がる可能性がある。建物の主軸方位はＮ－１°－Ｅである。柱穴の形は円形か不整な円形で，長径0.4～0.7m，深さ0.2～0.3mである。柱穴底の標高は2.5～2.6m。柱穴の埋土は第１層が後世の堆積または柱抜き取り穴の埋土，第２層が掘形埋土である。

遺物は奈良時代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2105（第79・81図　図版40－１）

SB2105はＢ区の東,ⅥF4bグリッドに位置する。１×２間の堀立柱建物で，梁行3.2m×桁行3.6mである。建物の主軸方位はＮ－22°－Ｗである。遺構の一部が壊される。柱穴の形は円形か楕円形で，長径0.3～0.6m，深さ0.1～0.3mである。柱穴底の標高は2.4～2.6m。柱穴の埋土は第２層が柱抜き取り穴の埋土，第３層が掘形埋土である。

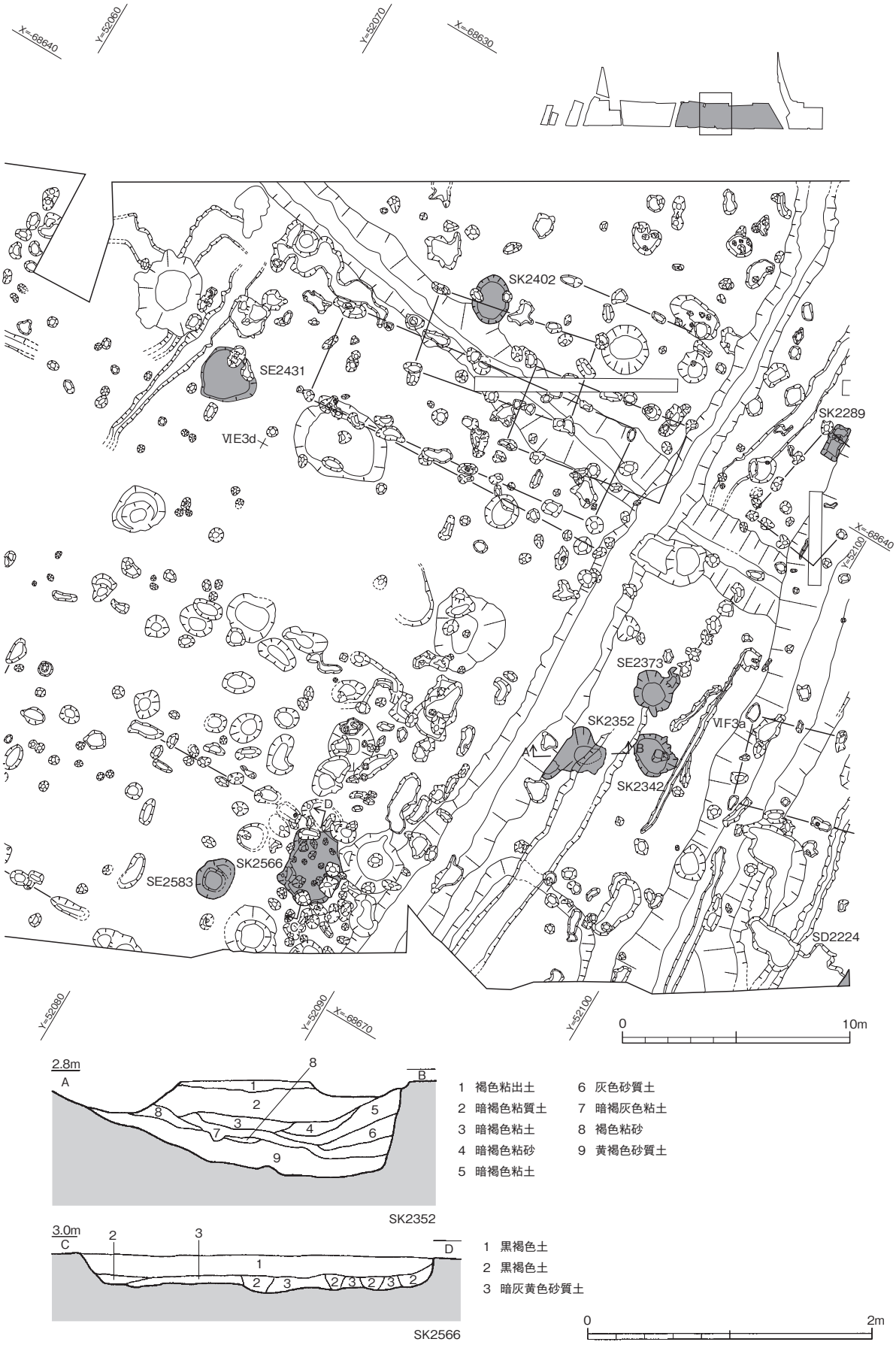
遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2107（第79・82図　図版40－１）

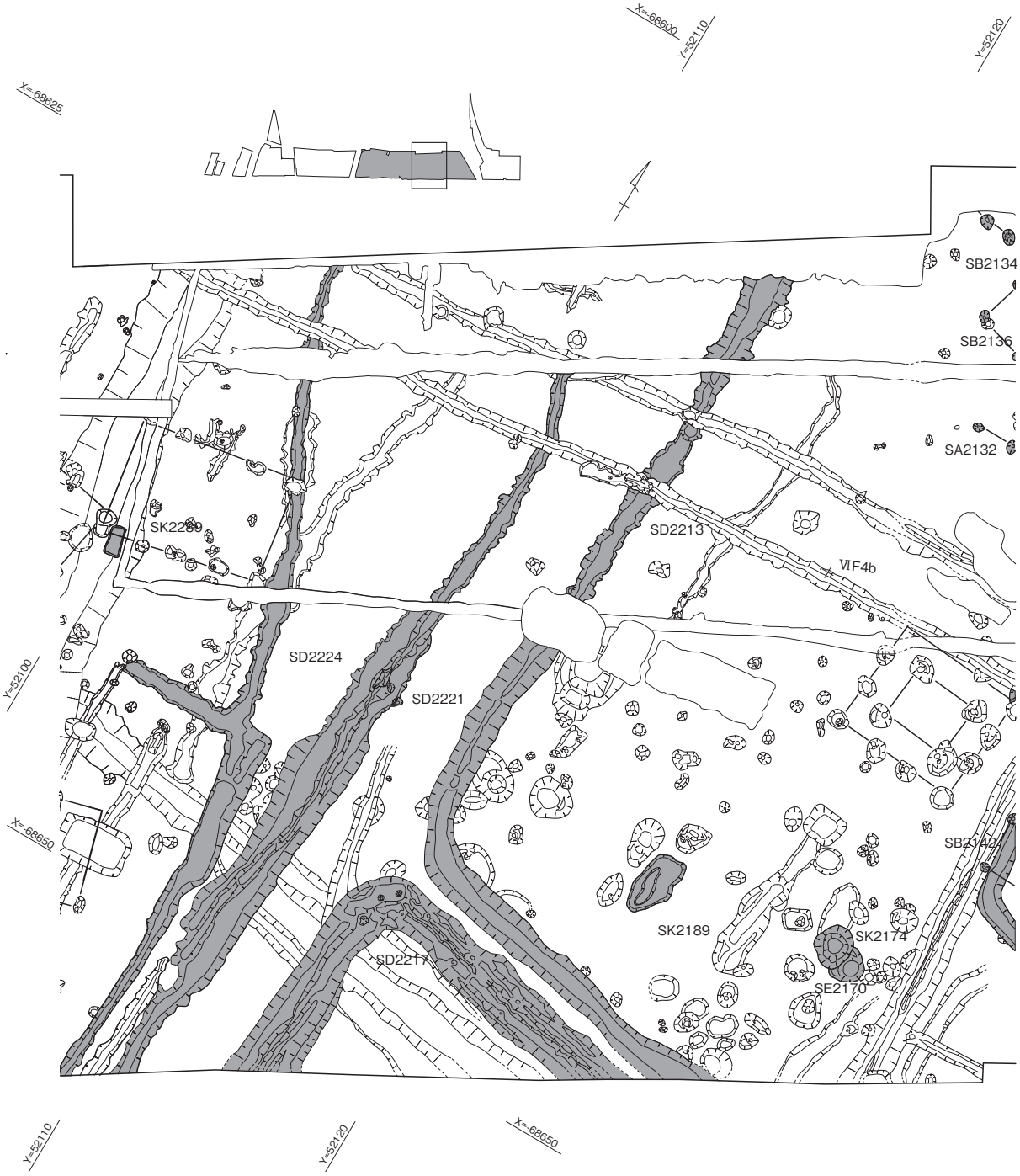
SB2107はＢ区の東,ⅥF4bグリッドに位置する。２×３間の総柱建物で，梁行3.0m×桁行3.6mである。建物の主軸方位はＮ－19°－Ｗである。遺構の一部は壊されている。柱穴の形は不整な円形か楕円形で，長径0.4～0.9m，深さ0.1～0.3mである。柱穴底の標高は2.4～2.6m。柱穴の埋土は第２層が柱抜き取り穴の埋土，第３・４層が掘形埋土である。

遺物は，奈良時代の土器片が若干出土しているが，いずれも小片で図示していない。

第76図　古代Ｂ区遺構図１（全体図1：250　溝土層断面図1：40）



第77図　古代Ｂ区遺構図２（全体図1：250　溝土層断面図1：40）

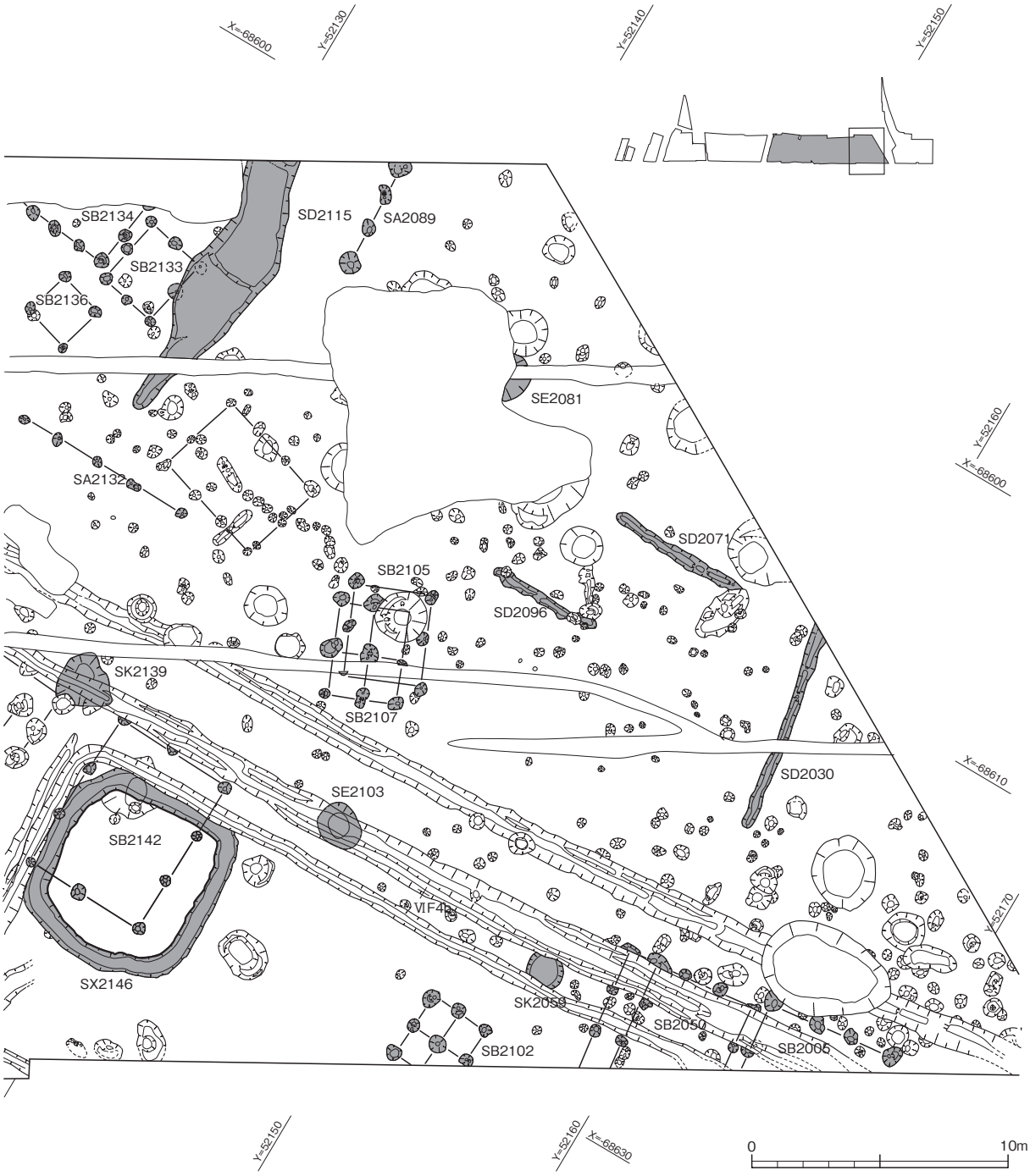


第78図　古代Ｂ区遺構図３（1：250）

建物SB2133（第79・82図　図版41－２）

SB2133はＢ区の東,ⅦF4bグリッドに位置する。２×２間の掘立柱建物で，建物の規模は梁行2.5m×桁行2.8mである。平面形はほぼ正方形。建物の主軸方位はＮ－11°－Ｅである。遺構一部が壊されている。柱穴の形は円形か不整な円形で，長径0.4～0.6m，深さ0.1～0.3mである。柱穴底の標高は2.5～2.6m。柱穴の埋土は第２層が柱抜き取り穴の埋土，第３層が掘形埋土である。

遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

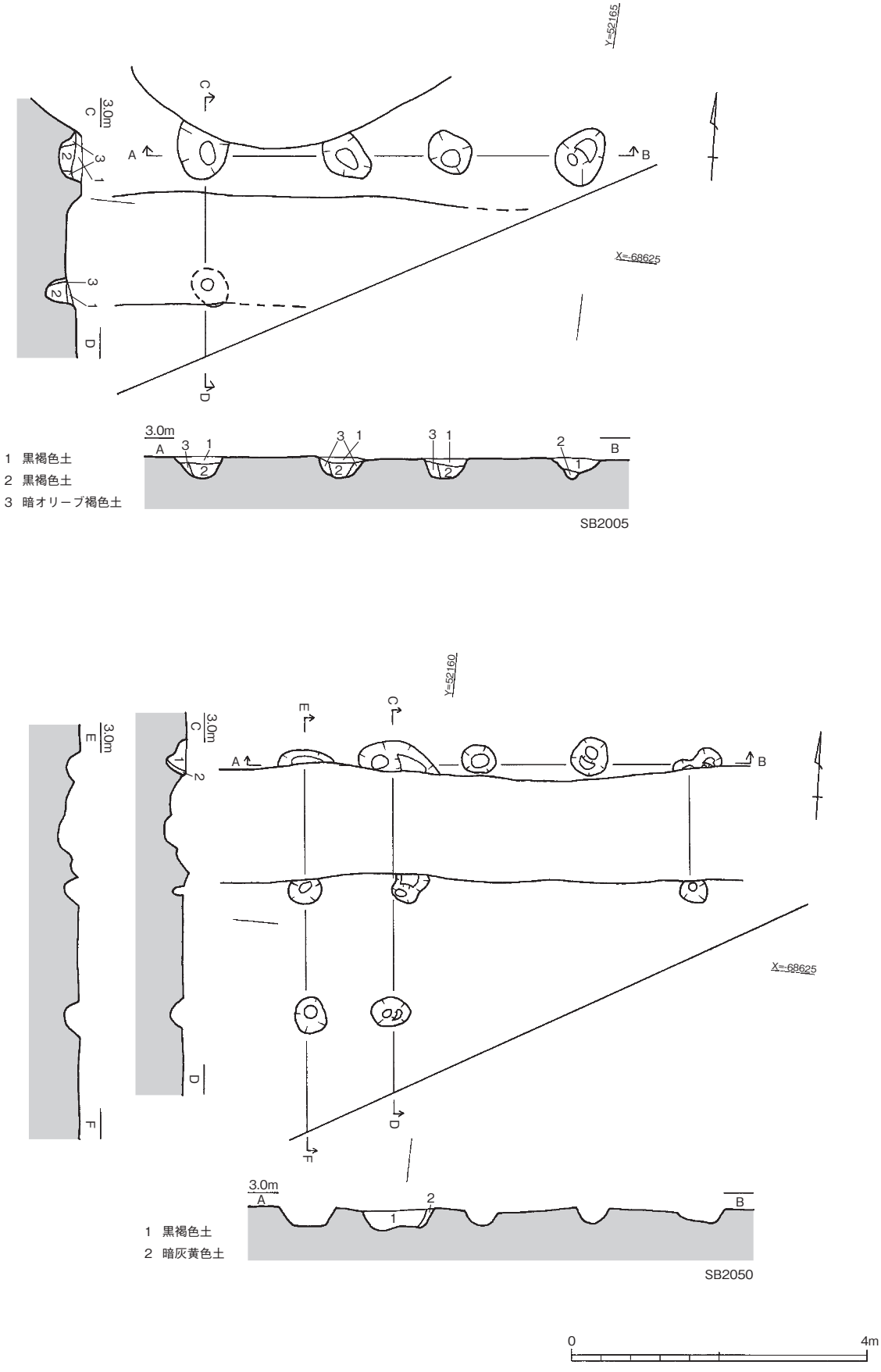


第79図　古代Ｂ区遺構図４（1：250）

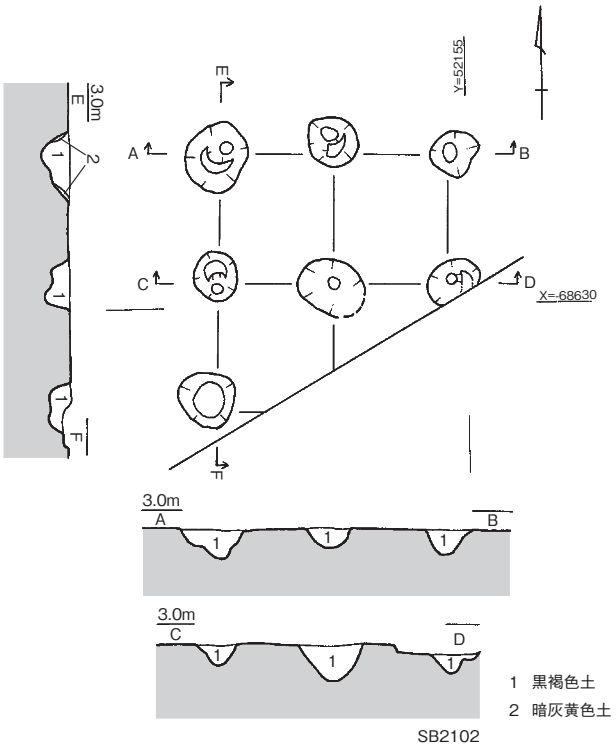
建物SB2134（第79・83図　図版41－２）

SB2134はＢ区の東,ⅥF4bグリッドに位置する。遺構の一部が壊されている。確認できた建物は２×３間で，梁行3.0m×桁行3.3mである。建物の方位は東西方向を棟とした場合Ｎ－84°－Ｗである。柱穴の形態は円形か不整な円形で，長径0.5～0.6m，深さ0.1～0.2mである。柱穴底の標高は2.5～2.6m。柱穴の埋土は第２層が柱抜き取り穴の埋土，第３層が掘形埋土である。

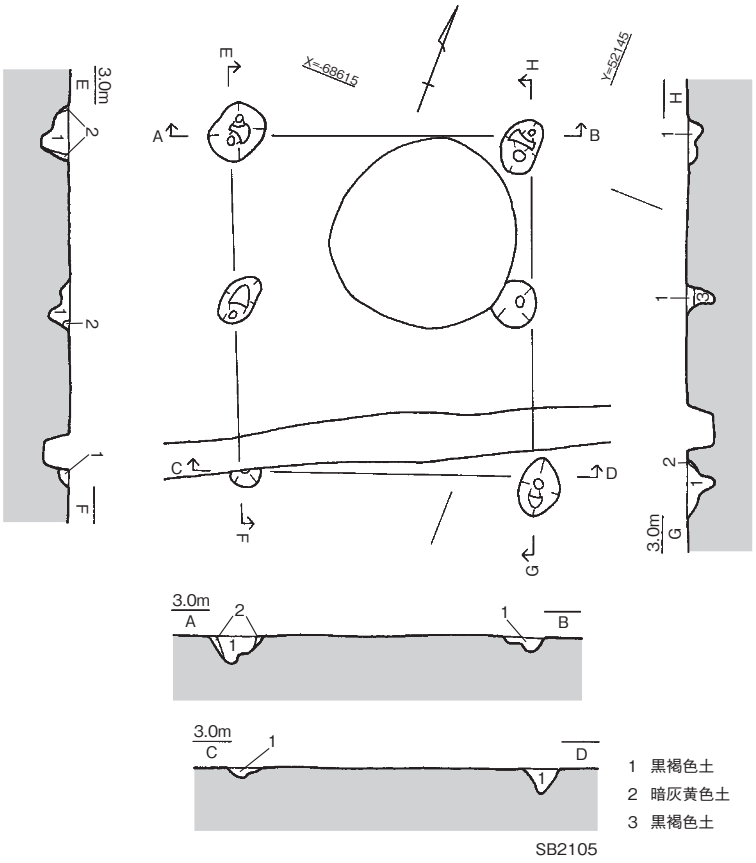
遺物は，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



第80図　古代Ｂ区建物実測図１（1：80）

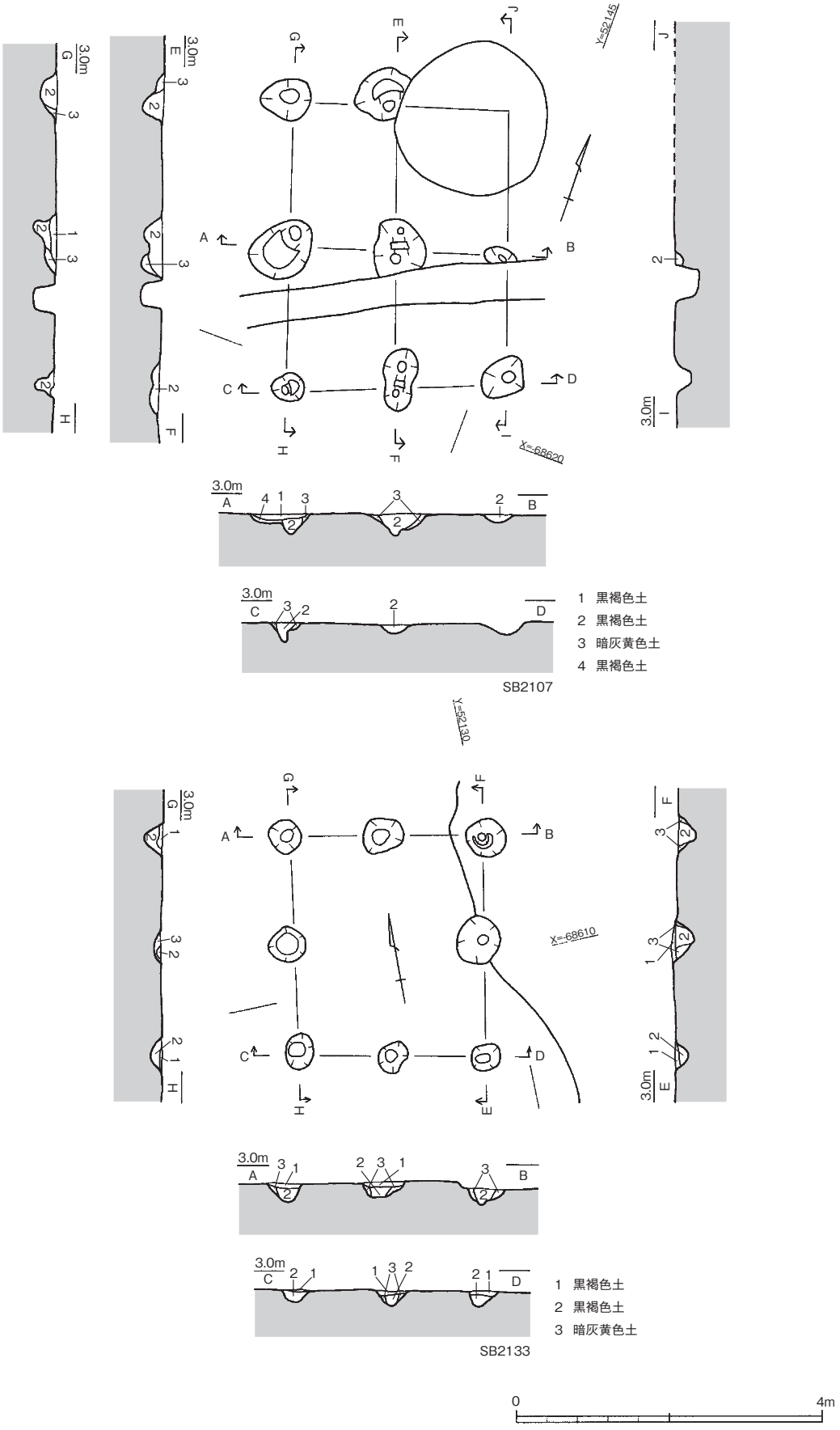


SB2102

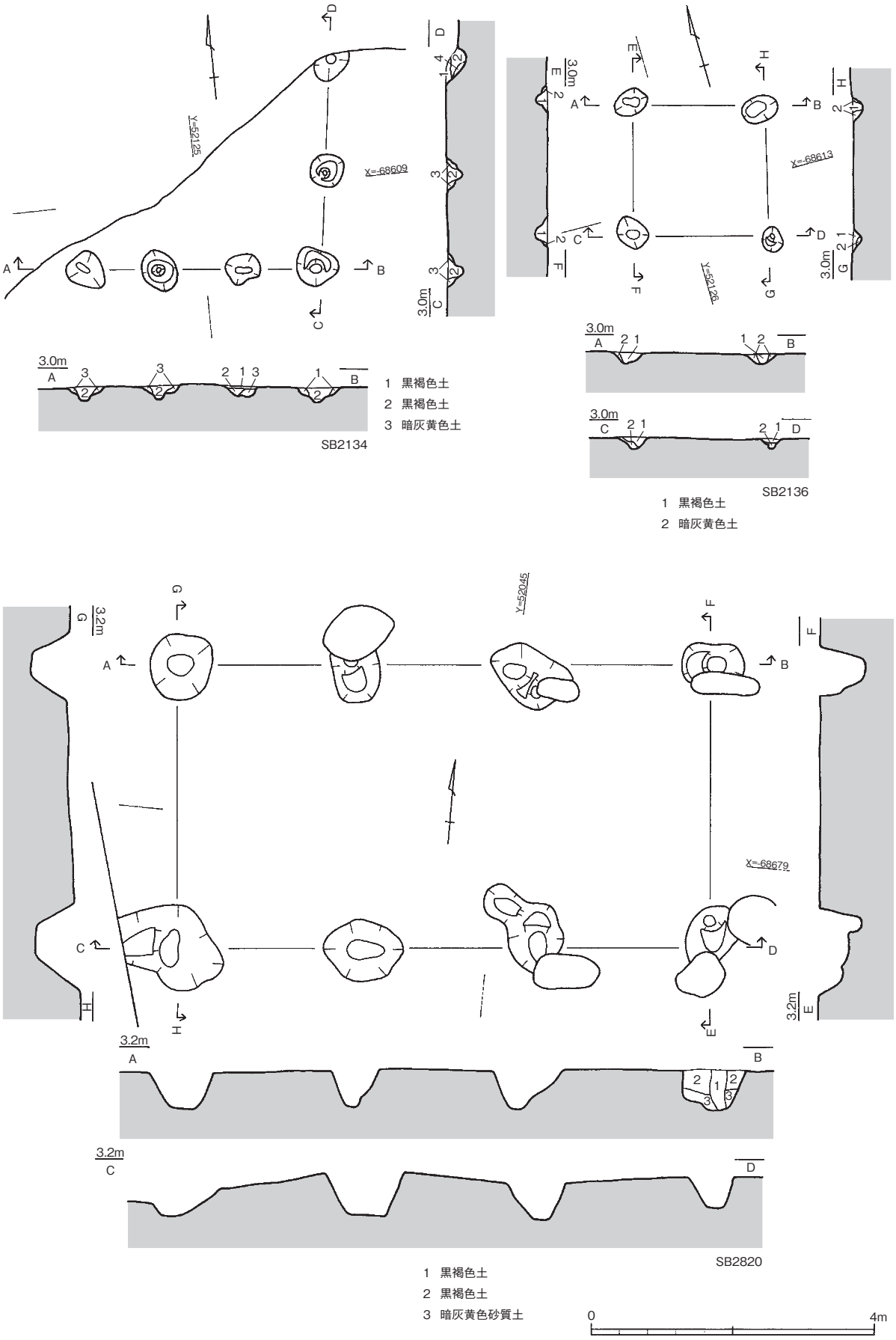


SB2105

第81図　古代Ｂ区建物実測図２（1：80）



第82図　古代Ｂ区建物実測図３（1：80）



第83図　古代Ｂ区建物実測図４（1：80）

建物SB2136（第79・83図　図版41－２）

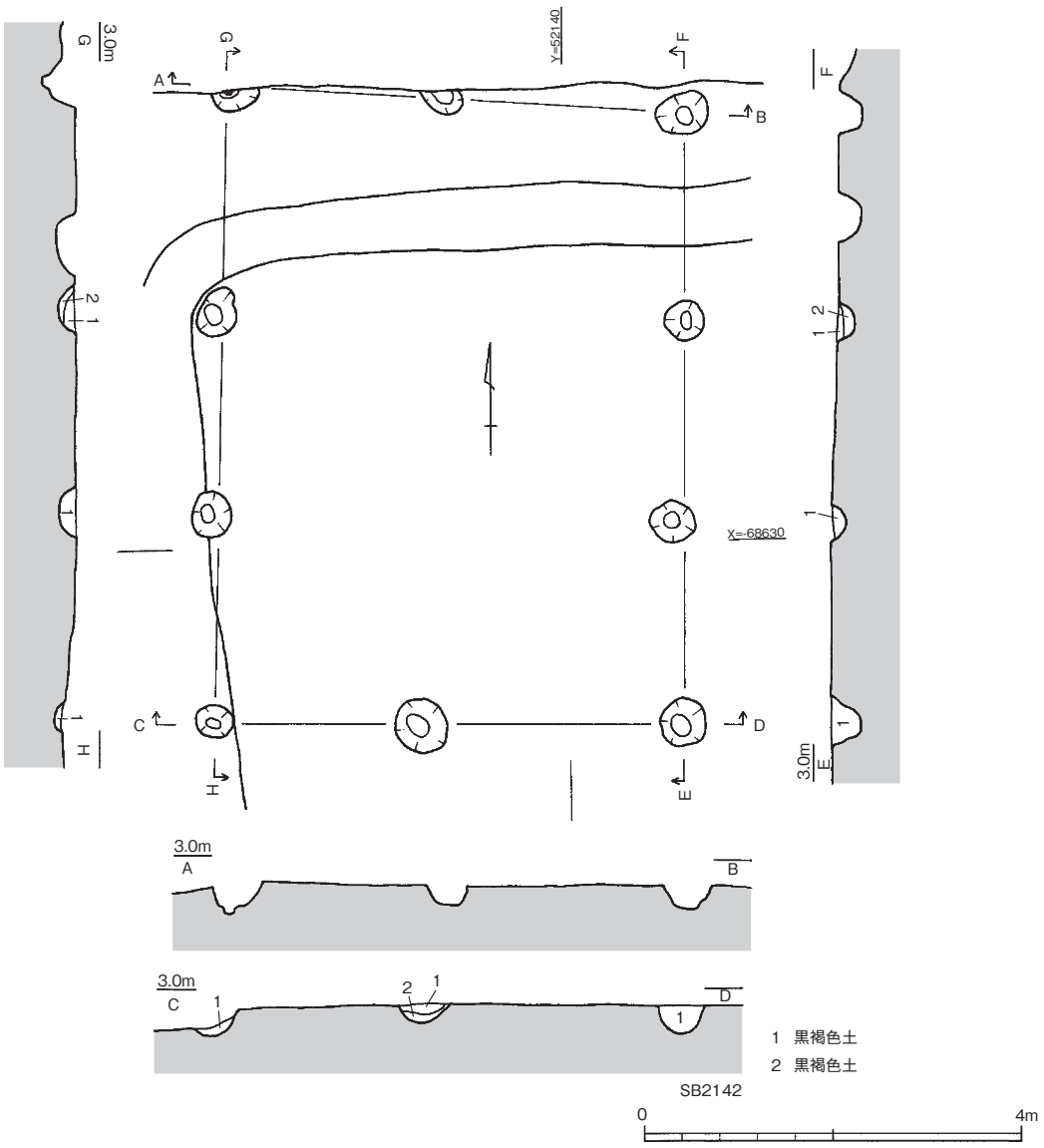
SB2136はＢ区の東,ⅥF4bグリッドに位置する。１×１間の掘立柱建物で，1.9m四方である。建物の主軸方位はＮ－16°－Ｅである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.3～0.6m，深さ0.1～0.3mである。柱穴底の標高は2.4～2.6m。柱穴の埋土は第２層が掘形埋土である。

遺物は，奈良時代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

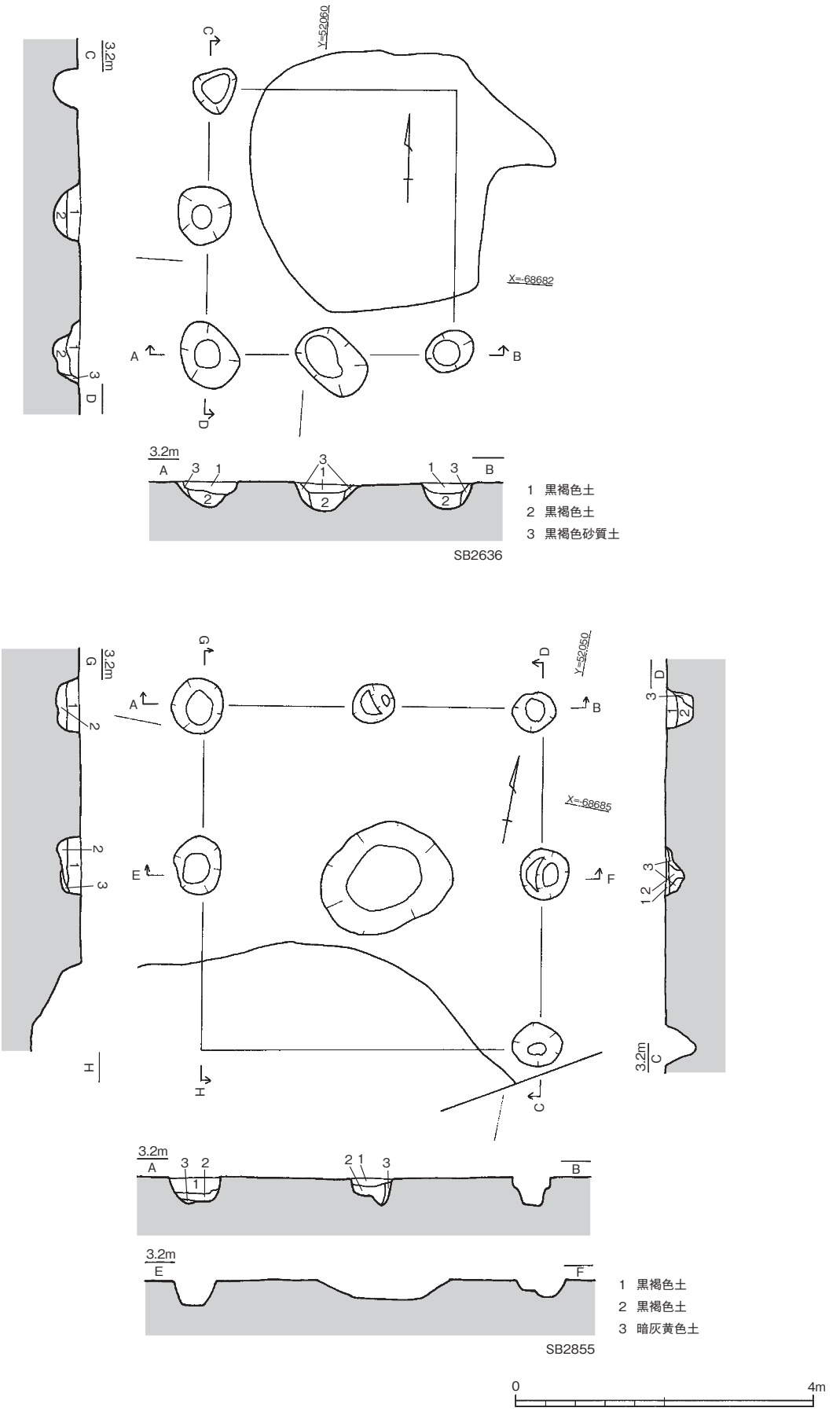
建物SB2142（第79・84図　図版42－２）

SB2142はＢ区の東,ⅥF3bグリッドに位置する。遺構の一部は壊される。２×３間の掘立柱建物で，梁行4.8m×桁行6.6mである。桁行の柱間は2.2mであるが，梁行の柱間は中央より東側が2.6m，西側が2.2mと異なる。建物の主軸方位はＮ－１°－Ｅである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.3～0.5m，深さ0.1～0.2mである。柱穴底の標高は2.4～2.6mである。柱穴の埋土は第２層が柱抜き取り穴の埋土である。

遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



第84図　古代Ｂ区建物実測図５（1：80）



第85図　古代Ｂ区建物実測図６（1：80）

建物SB2636（第76・85図）

SB2636はＢ区の西,ⅦE1cグリッドに位置する。遺構の一部が壊されているため総柱の建物の可能性もある。２×２間の掘立柱建物で，総柱規模は梁行3.2m×桁行3.6mである。建物の主軸方位はＮ－４°－Ｗである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.6～0.9m，深さ0.3mである。柱穴底の標高は2.5m。柱穴の埋土は第２層が柱抜き取り穴の埋土，第３層が掘形埋土である。

遺物は，奈良時代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2820（第76・83図）

SB2820はＢ区の西,ⅦE1bグリッドに位置する。１×４間の掘立柱建物で，梁行4.0m×桁行7.6mである。建物の主軸方位はＮ－84°－Ｅである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.9～1.3m，深さ0.4～0.5mである。柱穴底の標高は2.4～2.5m。

遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2855（第76・85図　図版43－１　221－１）

SB2855はＢ区の西,ⅦE1bグリッドに位置する。遺構の一部が壊されている。確認できた規模は２×２間で，4.6m四方である。なお，建物の中央に土坑（SK2891）があり，これを中央柱穴とすれば総柱建物の可能性も考えられる。建物の主軸方位はＮ－10°－Ｗである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.6～0.7m，深さ0.2～0.3mである。柱穴底の標高は2.6～2.7m。柱穴の埋土は第２層が柱抜き取り穴の埋土，第３層が掘形埋土である。

遺物は，古代の土器片が出土した。図示した須恵器高杯の脚部片は，中央のSK2891から出土した。７世紀代のものである。

柱穴列SA2089（第79・86図）

SA2089はＢ区の東,ⅦF4bグリッドに位置する。柱間1.2mの３間で全長５ｍを確認した。北の調査区外へ広がる可能性がある。主軸方位はＮ－２°－Ｗである。柱穴の形態は円形か不整な楕円形で，長径0.5～0.8m，深さ0.3～0.5mである。柱穴底の標高は2.2～2.4m。柱穴の埋土は第１・２層が柱抜き取り穴の埋土，第３層が掘形埋土である。

遺物は，８～９世紀代と思われる土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

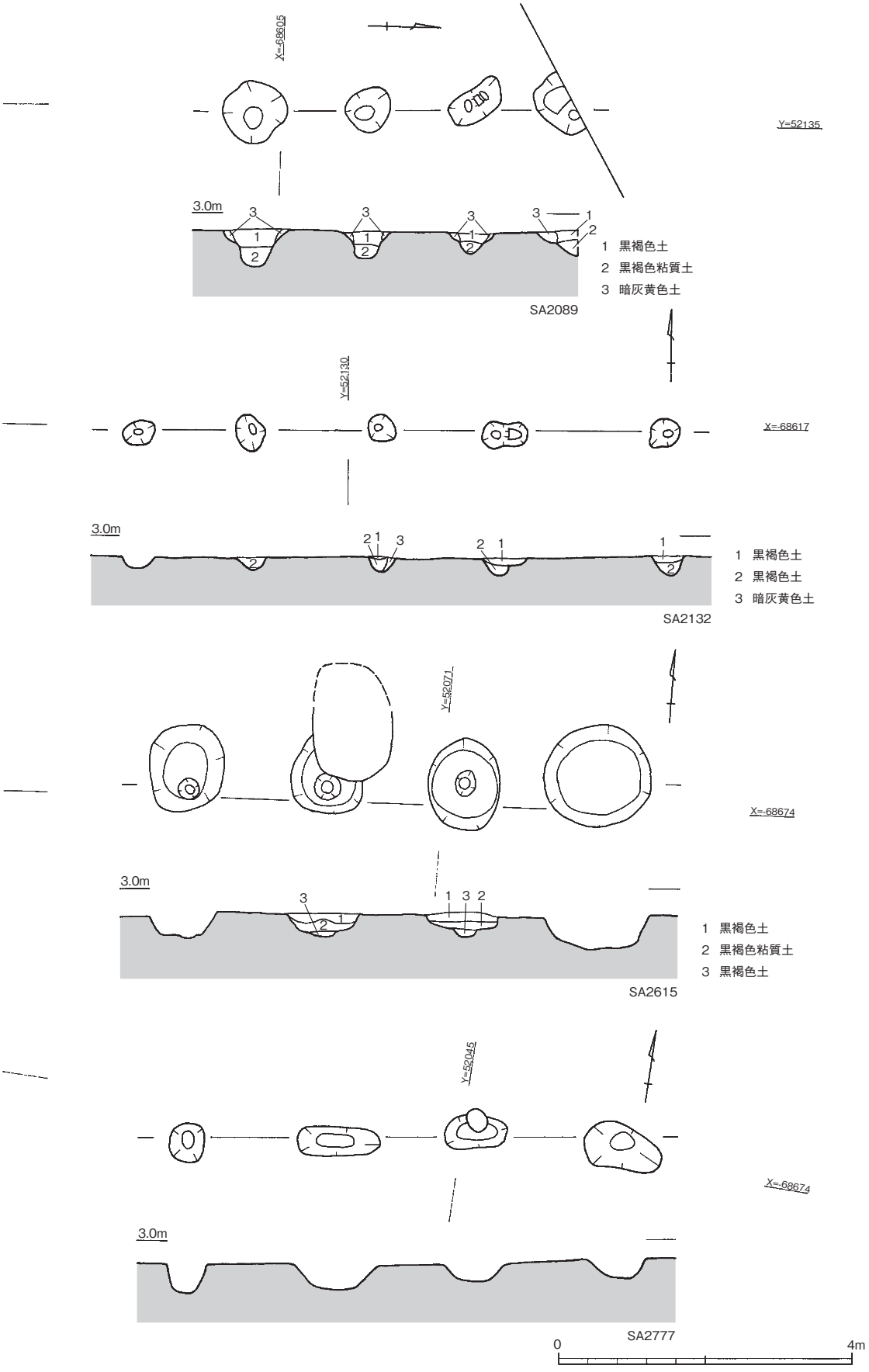
柱穴列SA2132（第79・86図）

SA2132はＢ区の東,ⅦF4bグリッドに位置する。柱間1.6～1.7mの４間で全長7.4mを確認した。東の１間は2.4mと長い。主軸方位はＮ－90°－Ｅである。柱穴の形は楕円形で，長径0.5～0.8m，深さ0.2～0.3m。柱穴底の標高は2.2～2.4m。埋土は第１・２層が柱抜き取り穴の埋土，第３層が掘形埋土である。

遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

柱穴列SA2615（第76・86図　図版42－１）

SA2615はＢ区の西,ⅦE2cグリッドに位置する。柱間1.9mの３間で全長5.7mを確認した。主軸方位はＮ－85°－Ｅである。柱穴の形は直径1.0～1.4mの円形で，深さ0.3～0.4mである。柱穴底の標高は2.2～2.4m。遺物は，奈良時代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



第86図　古代Ｂ区柱穴列実測図（1：80）

柱穴列SA2777（第76・86図）

SA2777はＢ区の西,Ⅵ F4bグリッドに位置する。柱間1.9～2.0ｍの３間で，全長5.9ｍを確認した。主軸方位はＮ－82°－Ｅである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，直径0.4～0.8ｍ，深さ0.3～0.4ｍである。柱穴底の標高は2.5～2.7ｍ。

遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

土坑SK2059（第79・87図　221－２～４）

SK2059はＢ区の東,Ⅵ F4cグリッドに位置する。遺構の一部が壊されている。平面形は円形で，断面形は逆台形状をなす。直径1.5ｍ，深さ0.2ｍである。埋土は２層に分層できた。各層から８世紀代の土師器や須恵器が出土した。

土坑SK2139（第79・87図　221－５・６）

SK2139はＢ区の東,Ⅵ F4bグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で，断面形は２段掘りの逆台形状をなす。直径1.8～2.0m, 深さ0.7ｍである。遺構の一部が壊されている。埋土は６層に分層できた。

遺物は，７～８世紀の土師器などが出土した。

土坑SK2174（第78図）

SK2174はＢ区の東,Ⅵ F3bグリッドに位置する。平面形は円形で, 断面形は逆台形状をなす。直径1.6ｍ，深さ1.1ｍである。埋土から８世紀の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

土坑SK2189（第78・87図　221－７～11）

SK2189はＢ区の東,Ⅵ F3bグリッドに位置する。平面形は歪な長楕円形で, 断面形は逆台形状をなす。長径2.5m, 短径1.4m, 深さ0.3m。埋土は３層に分層できた。第１層から９世紀代の土器片が出土した。

土坑SK2289（第77・87図　221－12）

SK2289はＢ区の東,Ⅵ E3dグリッドに位置する。平面形は長方形で, 断面形は逆台形状をなす。長径1.6ｍ，短径0.7ｍ，深さ0.5ｍ。埋土は５層に分層できた。埋土から７世紀代の須恵器などが出土した。

土坑SK2342（第77・88図　221－13～17）

SK2342はＢ区の中央,Ⅵ E2dグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で，断面形は２段掘りの逆台形状をなす。長径2.0ｍ，短径1.6ｍ，深さ0.8ｍ。埋土は５層に分層できた。底面直上から７世紀末の須恵器や土師器などが出土した。

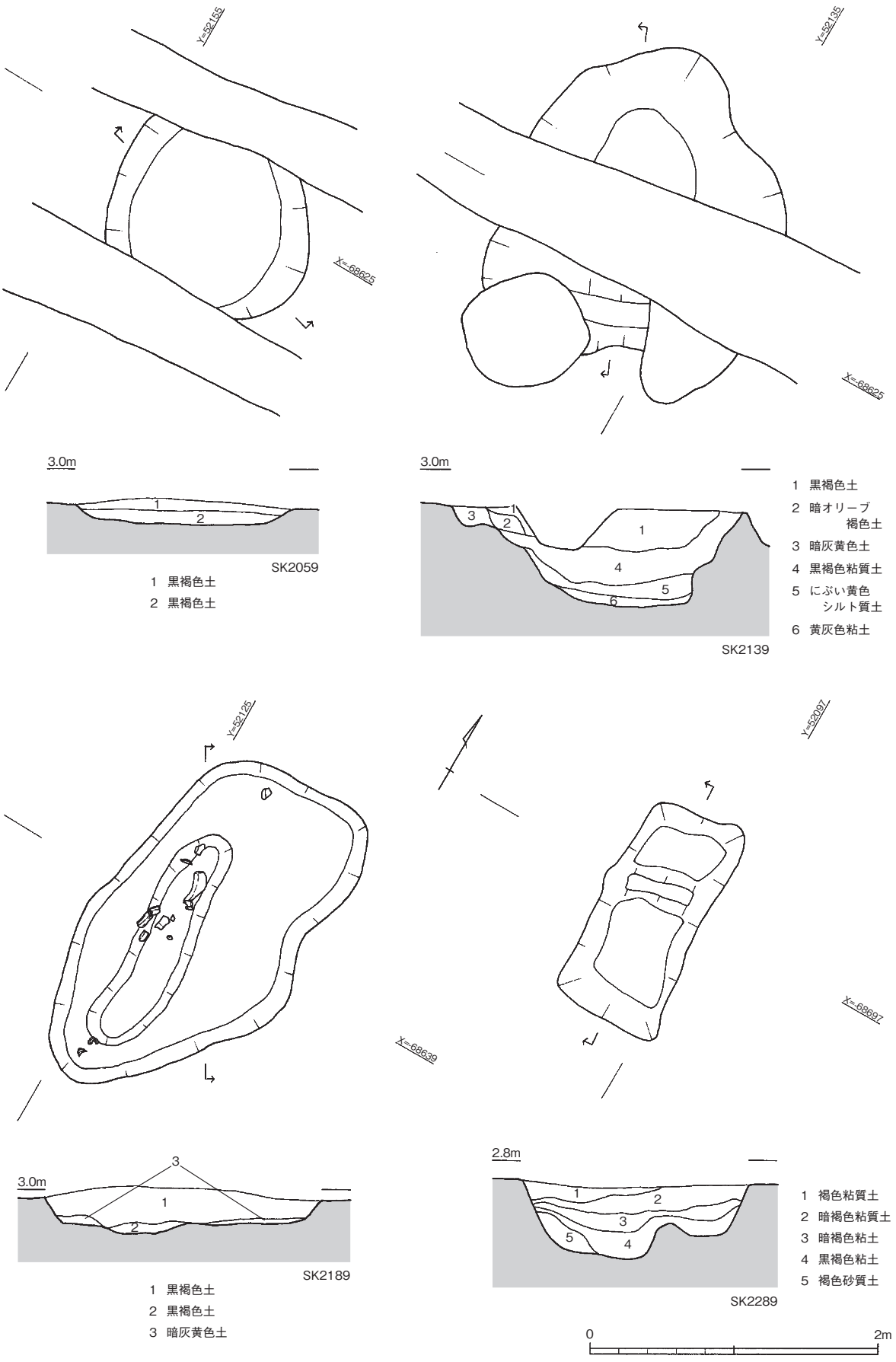
土坑SK2352（第77図　222－１～９）

SK2352はＢ区の中央,Ⅵ E3dグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で, 断面形は逆台形状をなす。規模は長径2.8ｍ，短径2.0ｍ，深さ0.5ｍ。遺構の一部が壊されている。

遺物は，８世紀代の須恵器や土師器などが出土した。

土坑SK2402（第77図　222－10～13）

SK2402はＢ区の中央,Ⅵ E3dグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径2.0ｍ，短径1.7ｍ，深さ0.4ｍ。埋土から，土師器などが出土した。



第87図　古代Ｂ区土坑実測図１（1：40）

土坑SK2566（第77図　図版29－２　222－14～18）

SK2566はＢ区の中央,ⅦE2dグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で,断面形は逆台形状をなす。長径3.3m，短径2.4m，深さ0.2m。遺構の一部が壊されている。底面は凹凸である。

埋土上層から７～８世紀初頭の須恵器や土師器などが出土した。

土坑SK2622（第76・88図）

SK2622はＢ区西の南側,ⅦE1cグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径2.3m，深さ0.3mである。

遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

土坑SK2631（第76・89図）

SK2631はＢ区西の南側,ⅦE1cグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径2.9m，短径2.2m，深さ0.8m。埋土は５層に分層できた。第２・３層で10～20㎝大の礫がまとまって出土した。遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

土坑SK2676（第76・88図）

SK2676はＢ区西の北側,ⅦE2cグリッドに位置する。平面形は円形で,断面形は逆台形をなす。直径2.5m，深さ0.5mである。埋土は４層に分層できた。遺構の中央部で10～20㎝大の礫がまとまって出土した。遺物は，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

井戸SE2798（第76・89図　223－１・２）

SE2798はＢ区西端の南側,ⅦE1cグリッドに位置する。平面形は楕円形で,断面形は逆台形状をなす。長径2.8m，短径2.4m，深さ0.8mである。激しく湧水する。埋土は５層に分層できた。第３層と第４・５層の間に板材の痕跡が確認される。

埋土から，９世紀代の土師器や古銭などが出土した。

土坑SK2843（第76・90図　223－４～７）

SK2843はＢ区西端の南側,ⅦE1cグリッドに位置する。遺構の一部は壊されている。平面形は不整円形で，断面形は逆台形状をなす。直径3.5m，深さは0.7m。湧水する。底面中央で人頭大の礫が出土した。

埋土から７～８世紀代の須恵器や土師器片が出土した。

土坑SK2860（第76図　図版27－1　223－３・８）

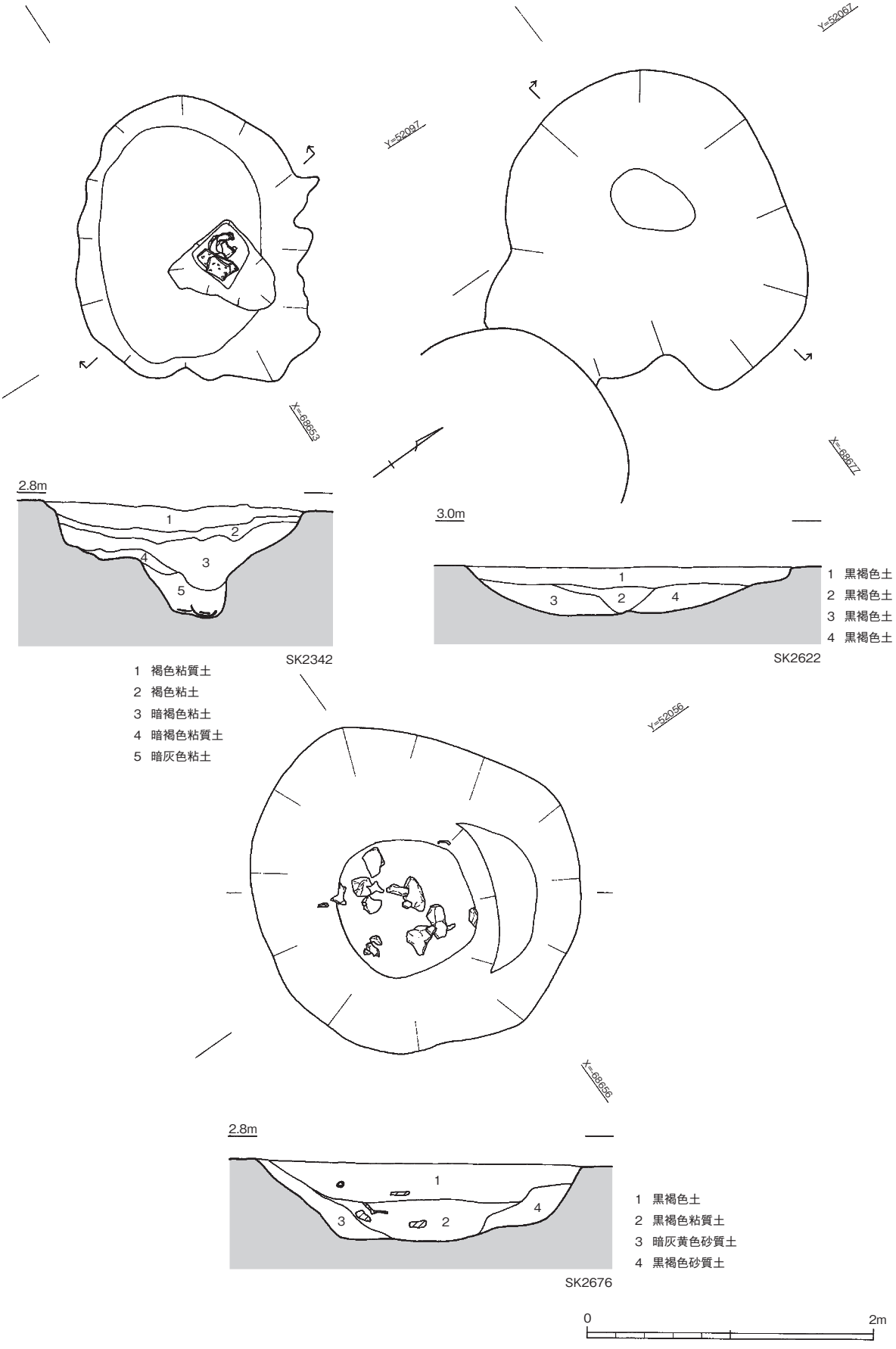
SK2860はＢ区西端の南壁際,ⅦE1bグリッドに位置する。遺構南側は調査区外にある。推測すると平面形は円形で,確認できた規模は東西7m，南北３m，深さ0.8mである。遺構の一部は壊されている。埋土は７層に分層できた。

埋土から，土師器片と古銭が出土した。

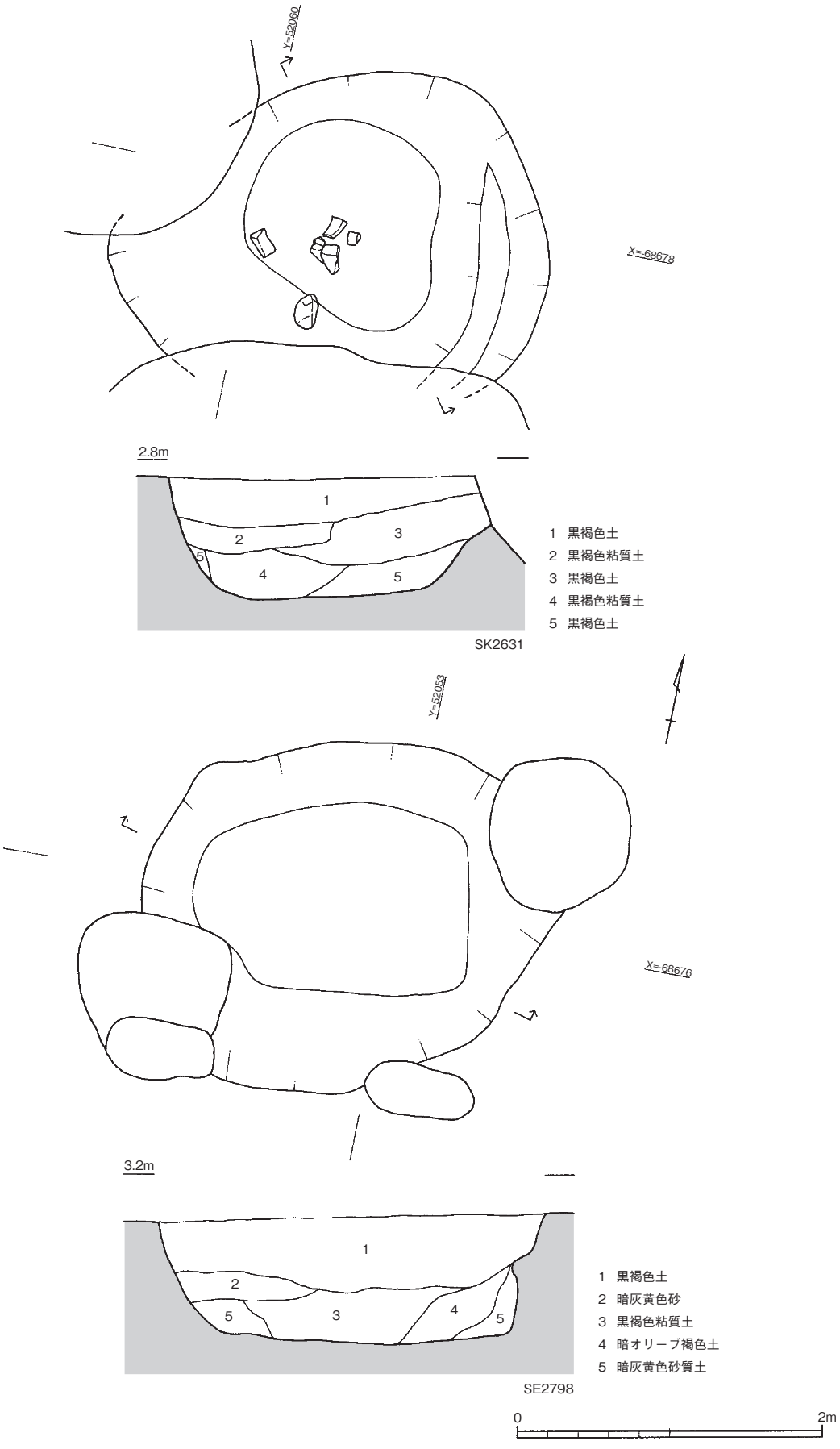
土坑SK2890（第76・90図　223－10）

SK2890はＢ区西端の南側,ⅦE1cグリッドに位置する。平面形は歪な円形で，断面形は逆台形状をなす。長径1.0m，深さ0.4mである。

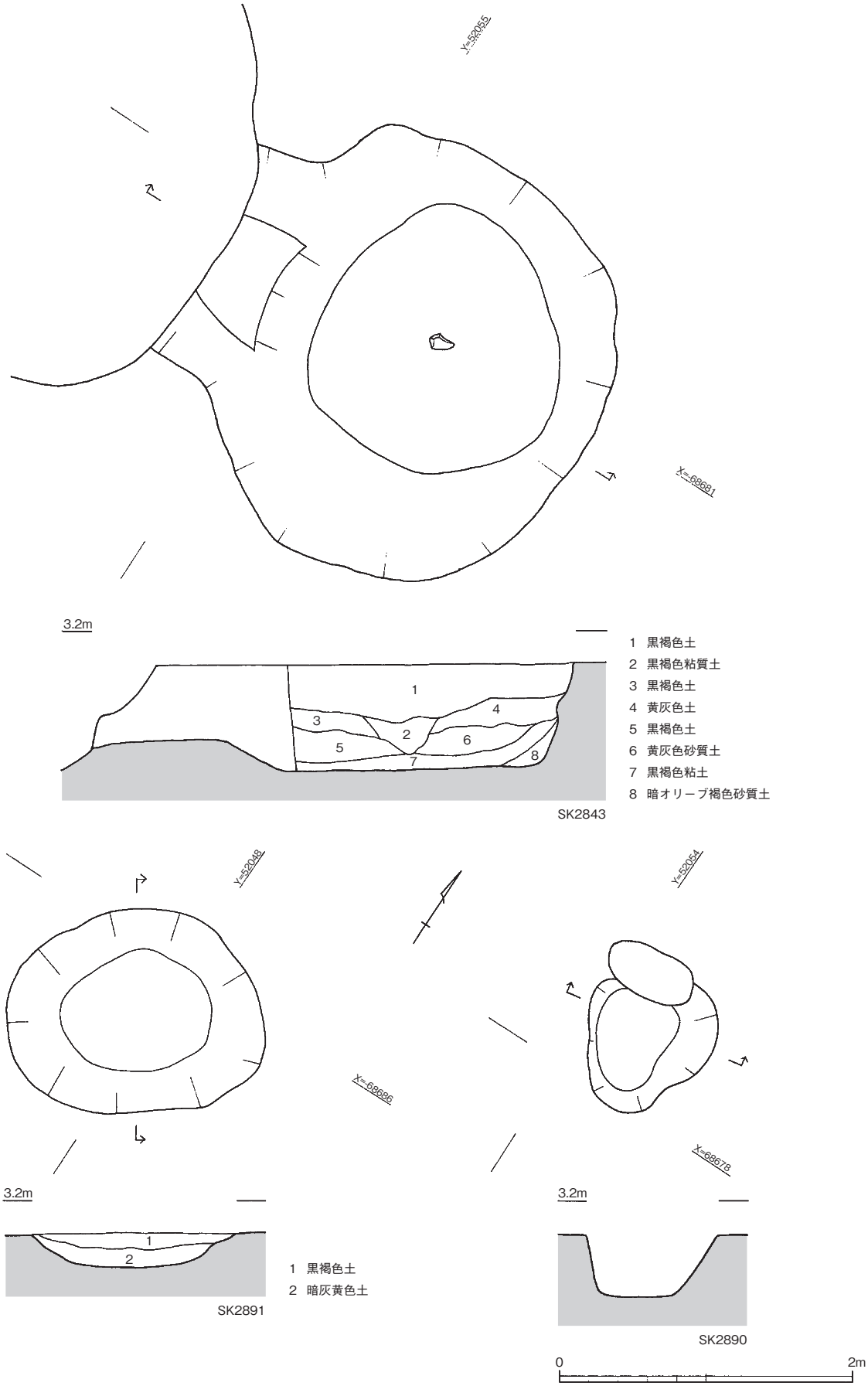
埋土から８世紀代の土師器片が出土した。



第88図　古代Ｂ区土坑実測図２（1：40）



第89図　古代Ｂ区土坑実測図３（1：40）



第90図　古代Ｂ区土坑実測図４（1：40）

土坑SK2891（第76・85・90図　221－１）

SK2891はＢ区西端の北側,ⅦE1bグリッドに位置する。平面形は楕円形で,断面形は逆台形状をなす。長径1.8m,短径1.4m,深さ0.25mである。SB2855の中央にあり,柱穴の一つになる可能性も考えられる。遺物は，古代の須恵器片が出土した。

井戸SE2081（第79・91図　図版32－３・４　223－11）

SE2081はＢ区の東端,ⅦF4bグリッドに位置する。遺構の一部が壊されている。推定で平面形が円形で断面形は逆台形の掘形をもつ。直径２m弱，深さ1.3mである。遺構下部の南寄りから，木枠が出土した。板は高さ60㎝，厚さ約２㎝。東側の板は内側へ倒れ，西側は撹乱により確認できないが，60㎝四方の木枠が推測される。北と南側の板には穿孔があり，横桟を通して組む構造と考えられる。埋土は３層に分層できた。第２層は木枠内の堆積土，第３層は裏込め土である。

遺物は，古代の土師器片などが出土した。

井戸SE2103（第79・91図　図版33－１）

SE2103はＢ区の東,ⅦF4bグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状の掘形でる。遺構の一部が壊されている。長径1.8m，短径1.6m，深さ0.8mである。遺構下部から，２枚の刳り貫き材を用いた井筒が出土した。井筒は長径70㎝,短径40㎝の楕円形状をなす。刳り貫き材は長さ80㎝,高さ60㎝，厚さ5㎝で，下端が鋭角に加工され，底面に３㎝ほど埋めて設置されていた。

遺物は，奈良時代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

井戸SE2170（第78・91図　図版32－６）

SE2170はＢ区の東,ⅦF3bグリッドに位置する。遺構の上部を壊されている。平面形は円形で，断面形は逆台形状をなす。直径1.3m，深さ0.9mである。遺構下部から，幅30㎝，高さ60㎝，厚さ４㎝の板４枚が方形に組まれた木枠が出土した。板には長方形の穴が穿たれた一対と,内側に幅１～３㎝,深さ４㎜ほどの凹みが横方向に見られる一対があることから,横桟を渡して組んだものと考えられる。埋土は６層に分層できた。埋土から，奈良時代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

井戸SE2373（第77・91図　図版32－５　223－12～19）

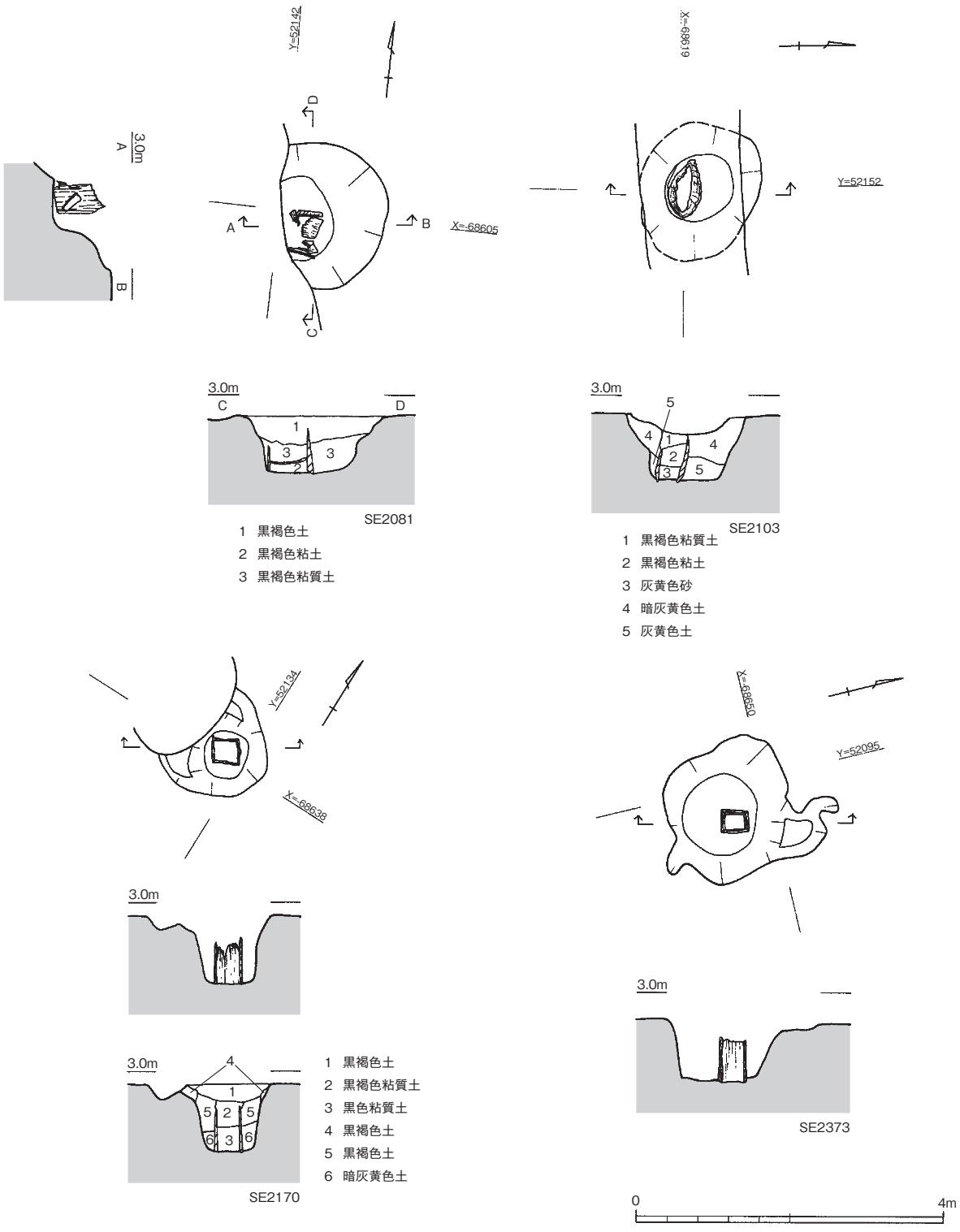
SE2373はＢ区の中央,ⅦE2dグリッドに位置する。平面形は歪な方形で，断面形は逆台形状をなす。長径2.0m，短径1.7m，深さ0.8mである。坑内の北で，４枚の板で組まれた木枠が出土した。板は高さ60㎝，幅30㎝，厚さ５㎝で穿孔等はない。下端部がやや底面に埋まるように設置されていた。

埋土から８世紀中頃から９世紀代の須恵器や土師器などが出土した。

井戸SE2431（第77・92図）

SE2431はＢ区の西,ⅦE3cグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径2.6m，短径2.4m，深さ0.5mである。遺構下部から，曲物を二段に組んだ井筒が出土した。曲物は上段が径50㎝，下段が径40㎝を測る。湧水と壁面崩落のため標高1.9mで調査を中止したため，井筒は高さ60㎝を確認するにとどまった。

埋土から奈良時代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



第91図　古代Ｂ区井戸実測図１（1：80）

井戸SE2583（第77・92図　図版33－３）

SE2583はＢ区の西,ⅥE2dグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径1.9m，短径1.2m，深さ0.9mである。遺構下部から，曲物を二段に組んだ井筒が出土した。曲物はいずれも径45cmで，組まれた井筒の高さは65cmを測る。埋土は７層に分層できた。

埋土から奈良時代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

井戸SE2684（第76・92図）

SE2684はＢ区の西,ⅥE2cグリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で，断面形は逆台形状をなす。長径2.2m，短径1.8m，深さ0.6mである。遺構下部から，４枚の板を35×45cmの長方形に組んだ木枠が出土した。板は高さ20cm，幅20～45cm，厚さ４cmである。埋土は４層に分層できた。

遺物は，奈良時代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

井戸SE2848（第76・92図　図版32－１・２　223－20～25）

SE2848はＢ区の西端,ⅥE1bグリッドに位置する。遺構の一部が壊されている。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状である。長径1.7m，短径1.1m以上，深さ0.8mである。遺構下部から，高さ20～30cm，厚さ２cmの板４枚を30cm四方に組んだ木枠が出土した。埋土は６層に分層できた。木枠内から８世紀前半の須恵器などがまとまって出土した。遺構の廃絶時に一括廃棄されたのであろう。

溝SD2030（第79・93図　224－１）

SD2030はＢ区の東端,ⅥF4cグリッドに位置する南北溝（Ｎ－11°－Ｗ）である。確認できる規模は，長さ8.6m，幅0.2～0.4m，深さ0.1mである。

埋土から８世紀代の須恵器などが出土した。

溝SD2071（第79・93図）

SD2071はＢ区の東端,ⅥF3bグリッドに位置する東西溝（Ｎ－89°－Ｗ）である。確認できる規模は，長さ5.6m，幅0.5m，深さ0.1～0.2mである。

埋土から，奈良時代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

溝SD2096（第79・93図）

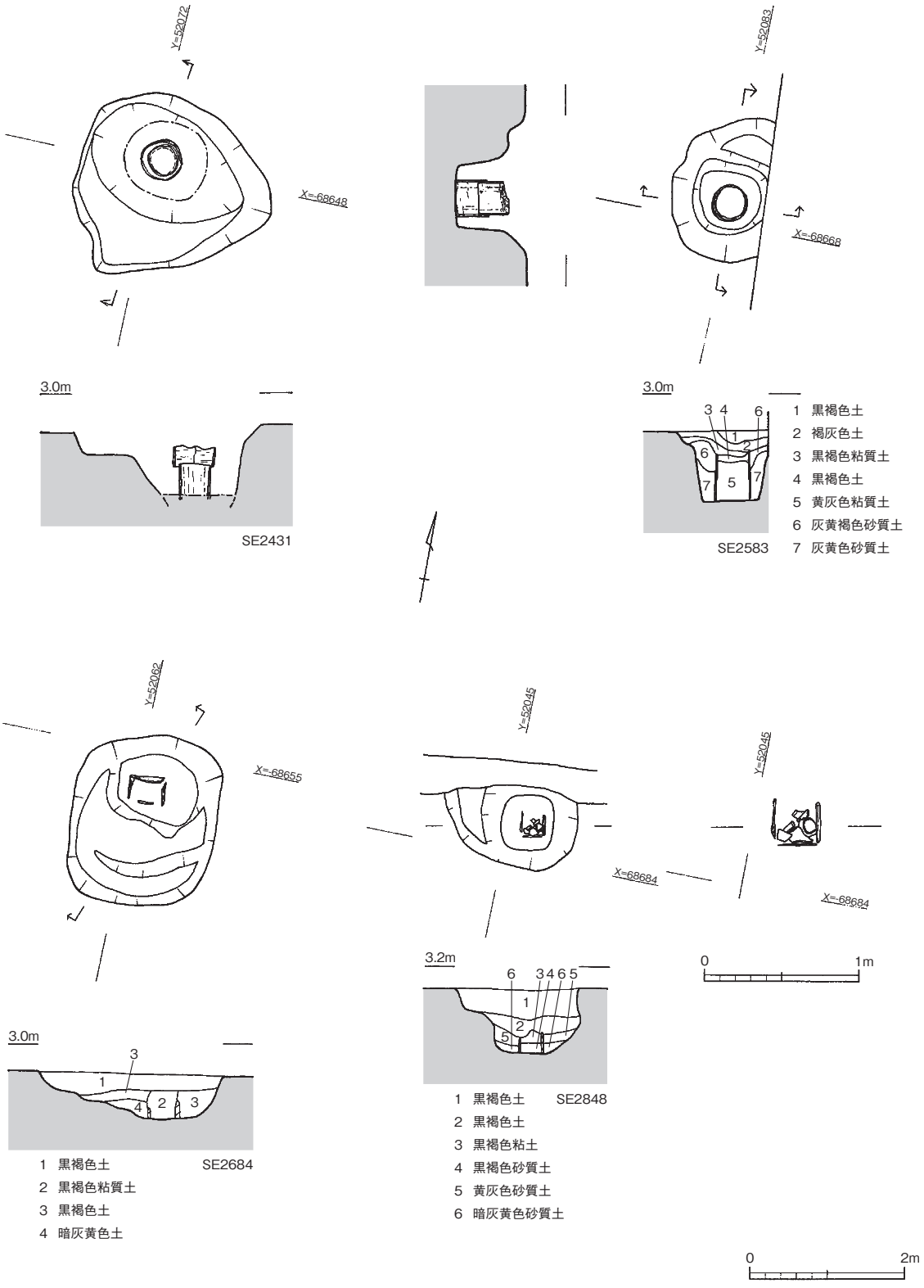
SD2096はＢ区の東端,ⅥF3bグリッドに位置する東西溝（Ｎ－89°－Ｗ）である。確認できる規模は，長さ3.8m，幅0.4m，深さ0.1mである。SD2071と平行する。

埋土から，奈良時代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

溝SD2115（第79・93図）

SD2115はＢ区東端の北側,ⅥF3bグリッドに位置する南北溝（Ｎ－89°－Ｗ）である。南側の幅が細く，北側が広い。確認できた規模は,長さ11m，最大幅2.5mを測る。深さ0.1～0.2mで，南側が若干深くなる。

埋土から，８世紀代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



第92図　古代Ｂ区井戸実測図２（1：80　SE2848井戸側１：40）

溝SD2213（第78・93図　図版34－１・２　224－２～７）

SD2213はＢ区の中央,ⅥF3b・ⅥF3a・ⅥF4aグリッドに位置する「Ｌ」字状の溝である。総延長は38ｍを測り，幅0.7～1.4m，深さ0.2～0.5m。Ｎ－３°－Ｅの軸をもって南北方向に延び，ⅥF3aグリッドの南側でやや丸みをもって東に屈曲する。東西方向の溝はＮ－79°－Ｗである。底面標高は，東西溝と南北溝の北側が2.6～2.7m，南北溝の南側が部分的に落ち込み，2.4ｍを測る。本遺構の東側では古代の建物や井戸などの遺構を検出していることから，本遺構は区画溝と考えられる。

埋土から８世紀後葉の須恵器や土師器などが出土した。

溝SD2217（第78・93図　図版34－１・２　224－８～22）

SD2217はＢ区中央の南壁際,ⅥF2aグリッドとⅥF3aグリッドに位置する溝である。前述のSD2213の南に位置し，「逆Ｌ」字状をなす。総延長20m，幅は1.5～2.0m。南北方向の溝は，SD2213の南北溝とほぼ同じＮ－４°－Ｅの軸をもつ。東西方向の溝は，SD2213の東西溝から１ｍほど南で，Ｎ－79°－Ｗの軸をもって平行する。断面形は「W」字状をなす。東西方向の溝の底面はやや凹凸を持ち，深さ約0.3m（標高2.6m）を測る。南北方向の溝の底面は深さ0.4m（標高2.5m）とやや深くなる。埋土は３層に分層できた。各層から７～10世紀代の須恵器や土師器が出土した。本遺構はSD2213と同様の区画溝と考えられる。

溝SD2221（第78・93図　224－23～28）

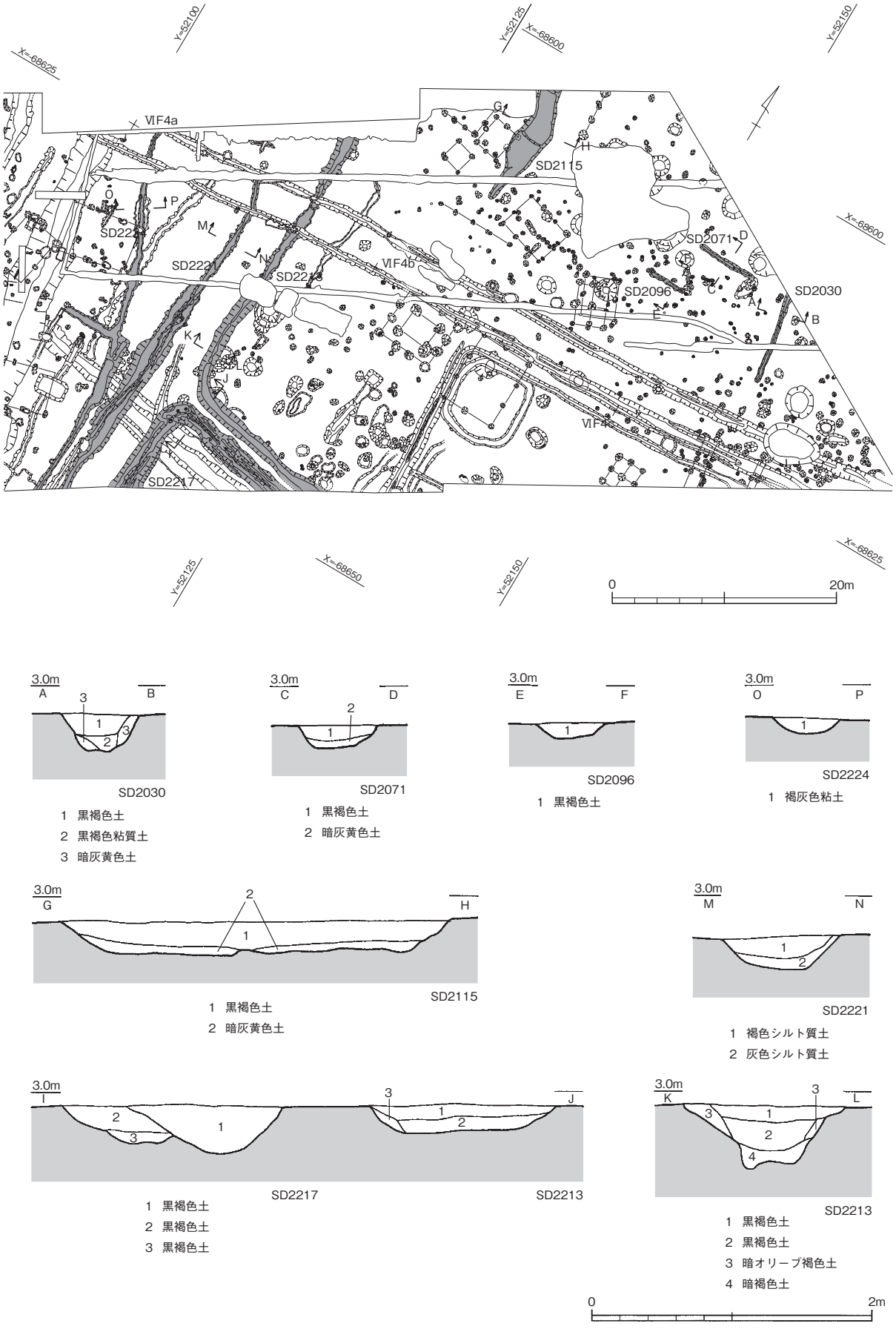
SD2221はＢ区の中央,ⅥF2aグリッドからⅥF3aグリッドにかけて位置する南北溝（Ｎ－３°－Ｅ）である。本遺構はSD2213・SD2217から約３ｍ西で確認し，また，南北溝と同軸である。北端部がやや西に振れ撹乱により消滅する。確認できた規模は長さ33m，北側は幅0.5～1.0m，深さ0.3ｍで，底面標高2.5ｍである。南側は幅1.8ｍ～2.5m，深さ0.6ｍで，底面標高2.3ｍである。溝の中央部は幅約0.4ｍほどの細い溝状になって一段深くなる。南側が広く深くなることから，北から南に向う流れが推測される。

埋土から８世紀代の須恵器や土師器などが出土した。

溝SD2224（第78・93図　224－29）

SD2224はＢ区の中央,ⅥF2aグリッドからⅥF3aグリッドにかけて位置する南北溝（Ｎ－３°－Ｅ）である。確認できた規模は長さ33m，幅0.4～1.5m，深さ0.1～0.3ｍである。中央部で西にほぼ直角に屈曲し，長さ4.3m，幅0.8ｍの溝に枝分かれする。底面標高は，枝分かれ部分が2.4ｍとやや深いが，主軸の南北溝は2.6ｍで高低差はみられない。

埋土から８世紀代の須恵器片などが出土した。



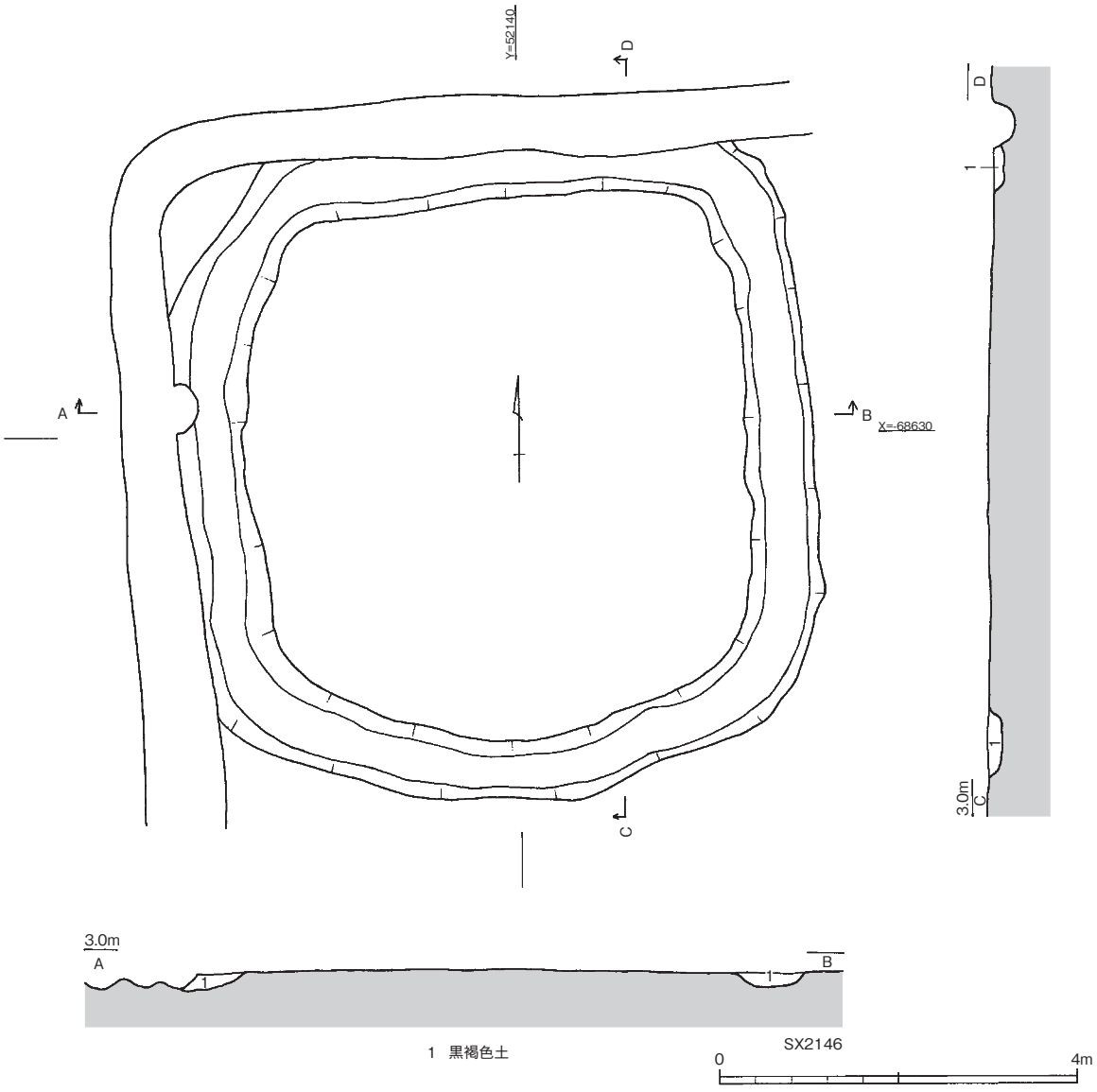
第93図　古代Ｂ区溝実測図（平面1：500　土層断面1：40）

方形周溝状遺構SX2146（第79・94図　図版30－１・２）

SX2146はＢ区の東,ⅥF3bグリッドに位置する。断面形が逆台形状をした溝が，隅丸方形に巡る。３層（古代の包含層）を掘り下げる段階の標高2.8mで検出した。北側と西側の一部は壊されている。溝の外縁で東西7.2m，南北7.6mを測る。方位は南北を主軸とした場合Ｎ－３°－Ｗである。溝は幅0.6～0.8m，深さ0.2mである。底面標高は2.6mで高低差はみられない。

周溝の内側は，後世の柱穴がみられるのみであり，性格は不明である。

溝埋土から土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



第94図　古代Ｂ区方形周溝状遺構実測図（1：80）

３．Ｃ区の遺構

Ｃ区では，掘立柱建物２棟，土坑１基，井戸３基を確認した。いずれも遺構検出面は５層上面（標高2.8～3.0m）である。遺構密度が低く，Ｃ区の西側にまとまる。Ｃ区の東側は，古代の遺構が削平された可能性が考えられる。

建物SB3240（第95・96 図）

SB3240はＣ区の西,VD4cグリッドに位置する。２×２間の掘立柱建物で，梁行3.0m×桁行3.5mである。平面形は北面がやや開く歪な方形をなす。建物の主軸方位はＮ－50°－Ｅである。柱穴の形は楕円形か不整な楕円形で，長径0.5～1.0m，深さ0.2～0.4mであるが，北西隅の柱穴は小型で深さ0.1mと浅い。柱穴底の標高は2.3～2.6m。柱穴の埋土のうち第２層は柱抜き取り穴の埋土である。

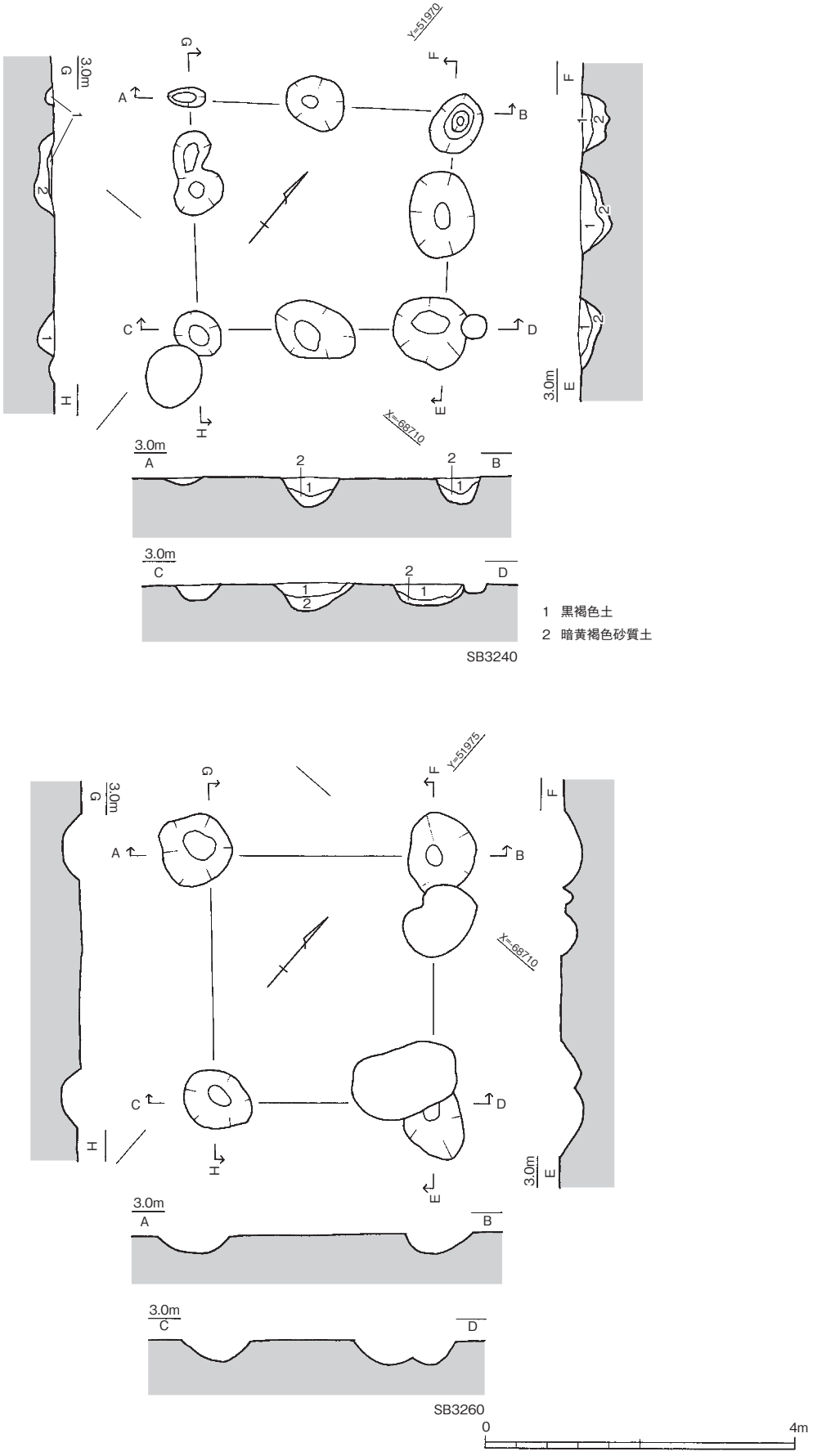
埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB3260（第95・96図）

SB3260はＣ区の西,VD4cグリッドとVD4dグリッドにまたがって位置する。１×１間の掘立柱建物で,梁行2.9m×桁行3.2mである。建物の主軸方位はＮ－41°－Ｗである。柱穴の形は不整な楕円形で，長径0.9m，深さ0.3mである。柱穴底の標高は2.4m。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

第95図　古代Ｃ区遺構図（1：500）



第96図　古代Ｃ区建物実測図（1：80）

土坑SK3083（第95・97 図　224－30）

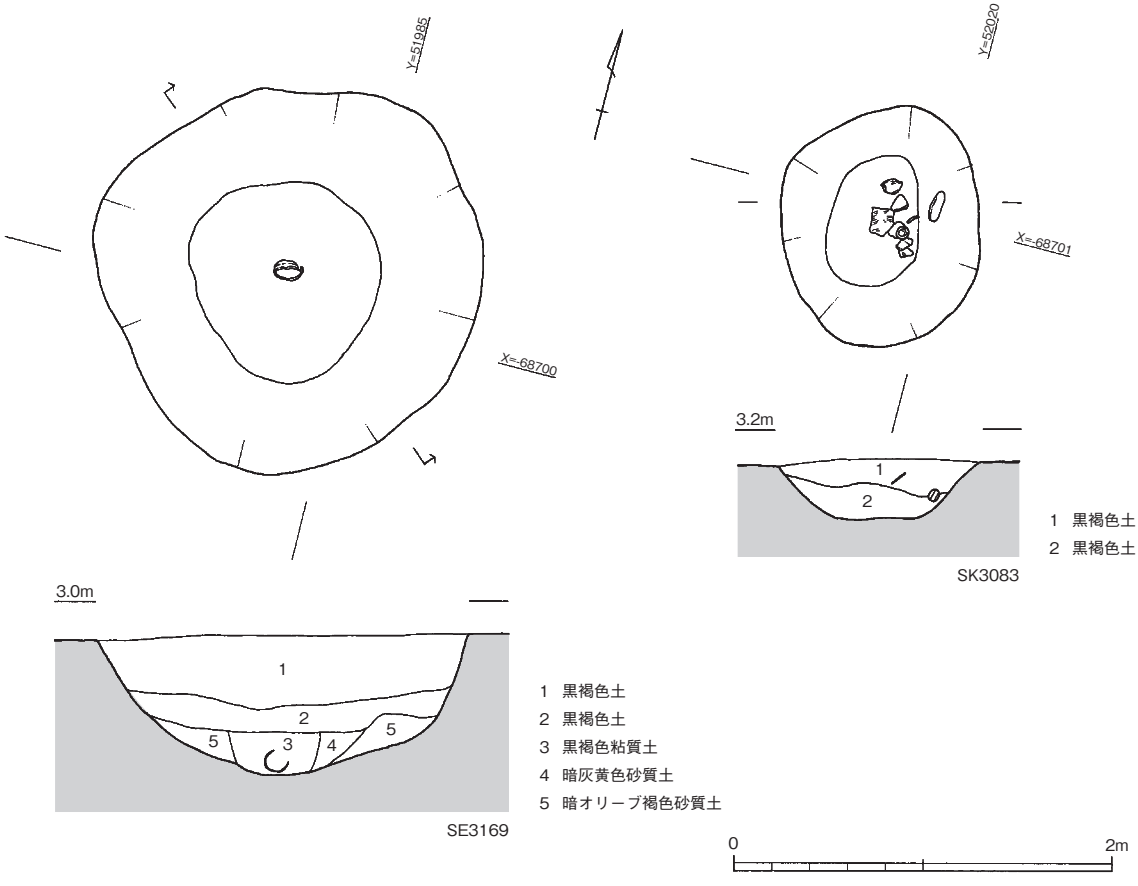
SK3083はＣ区の東,VE4aグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径1.3m，短径1.0m，深さ0.3mである。埋土は２層に分層できた。第１層から，須恵器などがまとまって出土した。

井戸SE3169（第95・97図　224－31）

SE3169はＣ区の西,VD4dグリッドとⅦD1dグリッドに位置する。平面形は円形で，断面形は逆台形状の掘形である。直径2.0m，深さ0.7mである。埋土は５層に分層できた。第３層と第４・５層の間に，木質の腐食した痕跡がみられた。井戸側等は確認されないが，第３層の粘質土が井側内の堆積土，第４・５層が裏込め土である。第３層の底面直上で，須恵器の長頸壺が出土した。

井戸SE3237（第95・98 図）

SE3237はＣ区の西,VD4cグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状の掘形である。長径2.1m，短径1.5m，深さ0.7mである。遺構の東側で木枠の板が２枚立った状態で出土した。板は北側が高さ40cm，幅40cm，厚さ２cm，西側が高さ20cm，幅15cm，厚さ２cmである。東と南側の板は出土していない。木枠は40cm四方に組まれたと推測される。埋土は５層に分層できた。木枠内より古代の須恵器の破片が出土した。いずれも小片で図示していない。

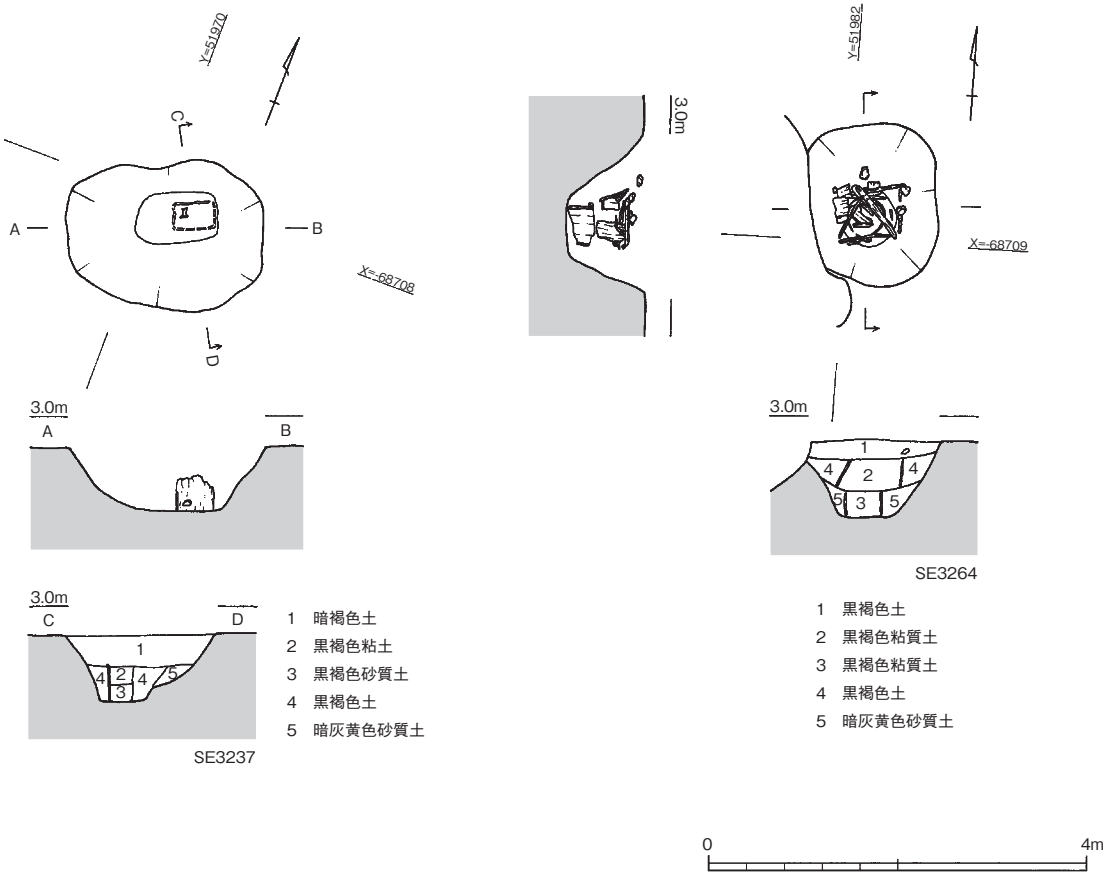


第97図　古代Ｃ区土坑実測図（1：40）

井戸SE3264（第95・98 図　図版56－２・３）

SE3264はＣ区の西,VD4dグリッドに位置する。平面形は隅丸方形で，断面形は逆台形状の掘形である。１辺1.7m，深さ0.8mである。埋土は５層に分層できた。第１層で拳大の礫が数個出土した。第２層と第４層との間で，幅20～30㎝，高さ30㎝，厚さ３㎝の板を検出した。板は立った状態で60㎝四方の方形をなす位置にある。また,長さ50～60㎝,厚さ２～５㎝の角材も検出した。底面には直径40㎝,高さ30㎝の曲物が残存していた。角材は横桟と思われ，板とともに井戸側の残骸と考えられる。角材の長さから60㎝四方の板組が復元できる。本遺構は上部に板組,下部に曲物を用いた二段構造である。

埋土から，古代の土器片が出土した。いずれも小片で図示していない。



第98図　古代Ｃ区井戸実測図（1：80）

第７節　中世の遺構

中世の遺構は，Ａ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区で確認した。Ｂ区の遺構密度が高い。掘立柱建物２棟，柱穴列１列，土坑20基，井戸８基，溝10条，墓３基，道路状遺構１基，足跡１か所，不明遺構１基を確認した。このうち掘立柱建物はＢ区の東側と西側で１棟ずつ，墓はＢ区の西側とＣ区で確認した。溝は軸方位に，いくつかのまとまりをもつ。道路状遺構はＢ区の東側で確認した。自然河道の埋没後，Ｄ区では足跡を確認し，中世になって土坑や井戸などの生活跡が確認される。

１．Ａ区の遺構

Ａ区では，遺構密度が低い。土坑４基と溝３条を確認した。土坑は調査区の北側，南側，東側に点在し，溝は北東側で確認した。いずれも標高2.6～2.8ｍで検出した。

土坑SK1064（第99・100図）

SK1064はＡ区の東,Ⅶ G1aグリッドに位置する。標高2.8ｍの３層上面で確認した。平面形は楕円形で，断面形は２段掘り逆台形状をなす。長径1.1ｍ，短径0.9ｍ，深さ0.6 ｍである。埋土は５層に分層できた。

埋土から，古代の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

土坑SK1104（第99・100図　図版６－１　225－２）

SK1104はＡ区の南,Ⅶ F4dグリッドに位置する。標高2.8ｍの５層上面で検出した。平面形は楕円形で，断面形は２段掘り逆台形状をなす。長径1.4ｍ，短径1.2ｍ，深さ0.7 ｍである。埋土は２層に分層できた。底面直上で漆器椀が１点出土した。

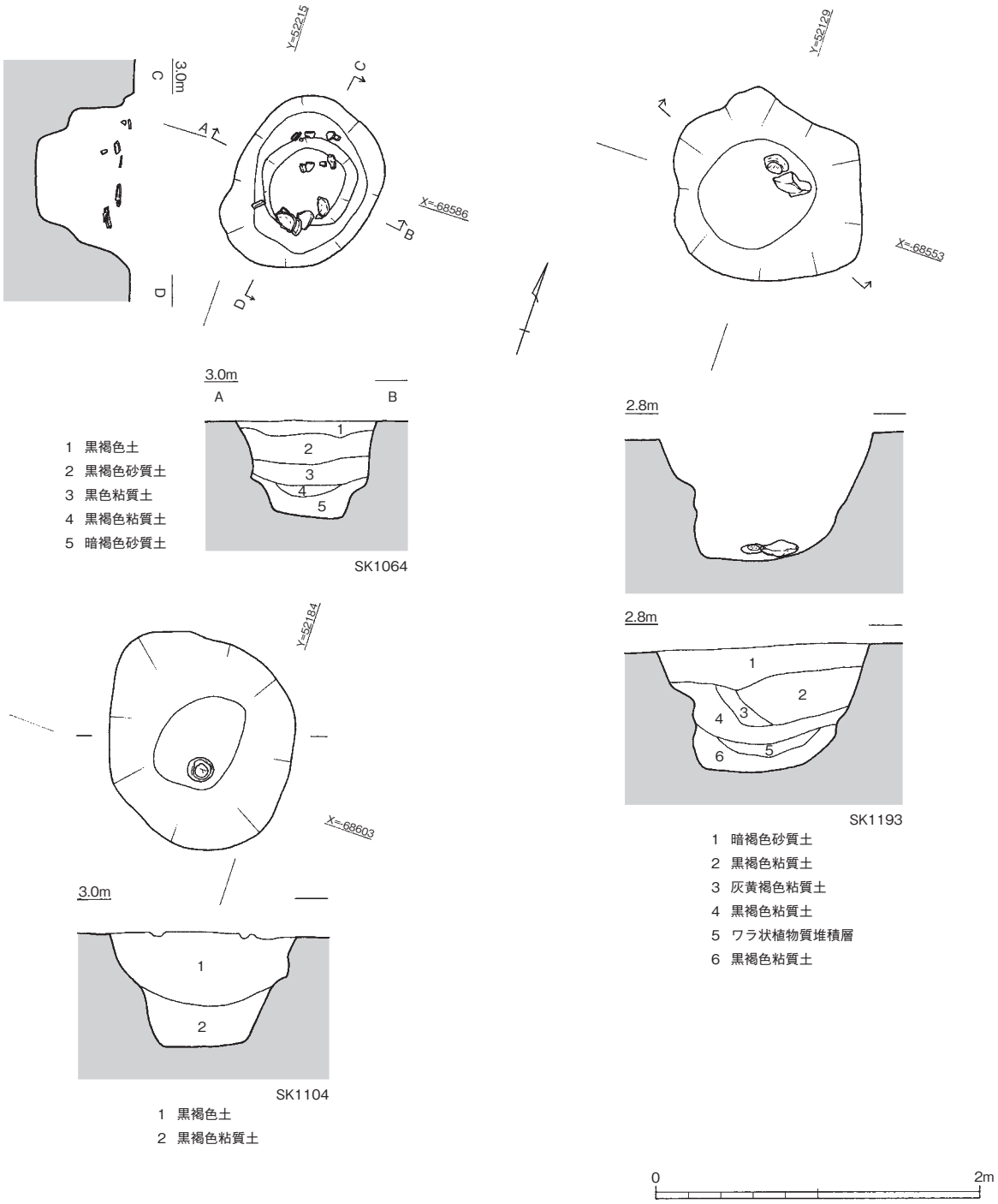
土坑SK1193（第99・100図　図版５－１～３　225－１）

SK1193はＡ区の北西,Ⅶ F2bグリッドに位置する。標高2.6ｍの５層上面で検出した。平面形は歪な円形で，断面形は逆台形状をなす。直径1.3ｍ，深さ0.8ｍである。埋土は６層に分層できた。第５層からは藁状の植物が５㎝の厚さで堆積していた。底面直上で柄杓が出土した。

土坑SK1198（第99・101図　225－３）

SK1198はＡ区の北西,Ⅶ F3bグリッドに位置する。標高2.7ｍの５層上面で検出した。東側が調査区外にある。平面形は円形で，断面形は逆台形状をなすと推測される。確認できた規模は直径3.5ｍ。深さ0.9ｍまで掘り進んだところで，激しく湧水したため調査を中止した。埋土は８層に分層できた。埋土から人頭大の礫を数点と板状・棒状の木片が数点出土した。また，漆器椀が出土した。

第99図　中世Ａ区遺構図（1：500）

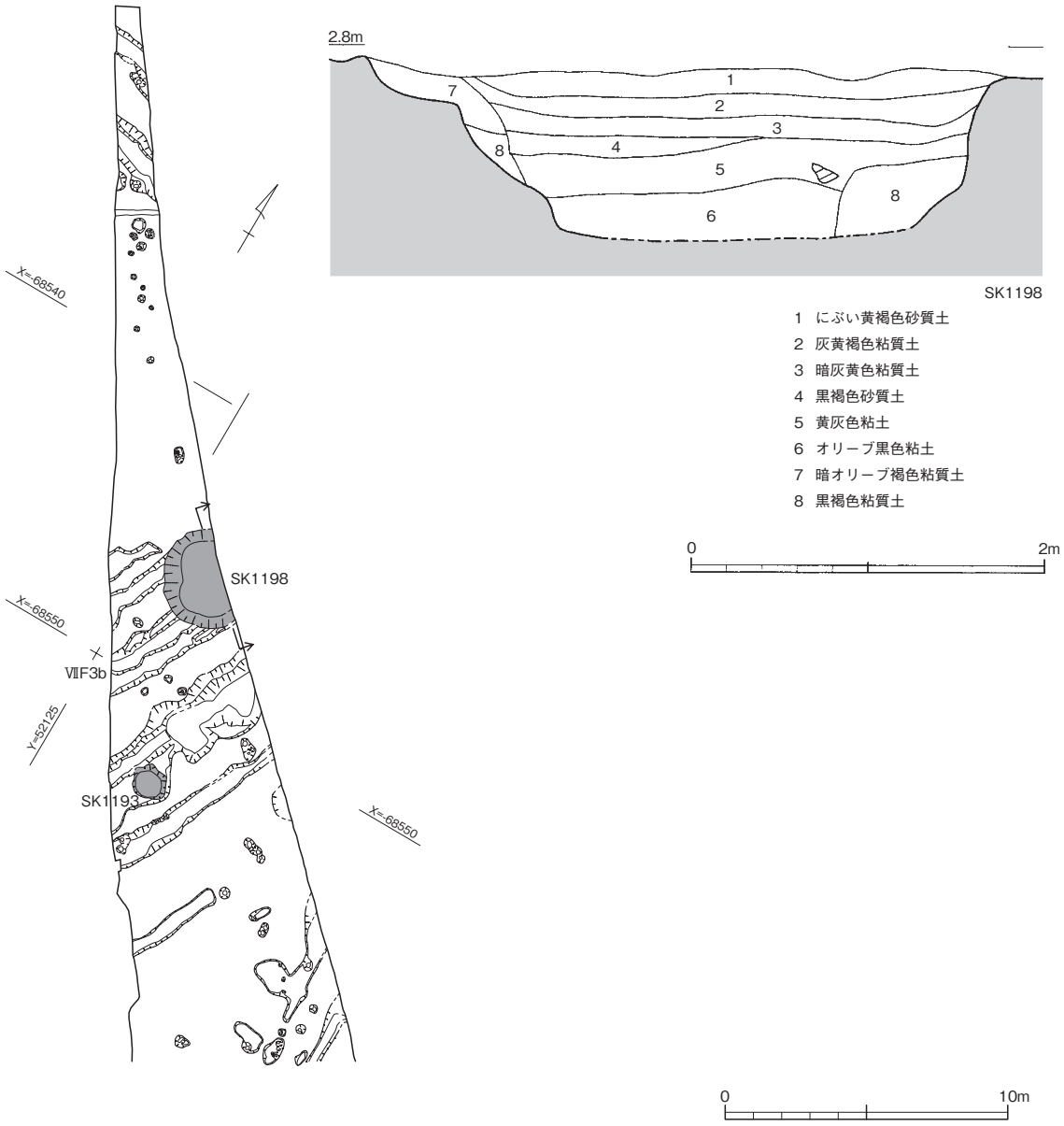


第100図　中世Ａ区土坑実測図１（1：40）

溝SD1002（第99・102図　図版４－１・３　225－４～６）

SD1002はＡ区の東,ⅦF1d・ⅦF2b・ⅦG2aグリッドに位置する溝である。幅広の南北溝（Ｎ－７°－Ｅ）と細い東西溝（Ｎ－70°－Ｗ）がつながった形をなす。東側と北側は調査区外へ延び，南側は壊されている。標高2.6mで，南北溝は３層上面，東西溝は５層上面で確認した。確認できた規模は，南北溝が長さ16m，幅3.0～3.5m，深さ0.1m，東西溝が長さ11m，幅0.6～0.8m，深さ0.1mである。

南北溝から中世の須恵器や土師器などが出土した。



第101図　中世Ａ区土坑実測図２（平面1：250　土層断面1：40）

溝SD1003（第99・102図）

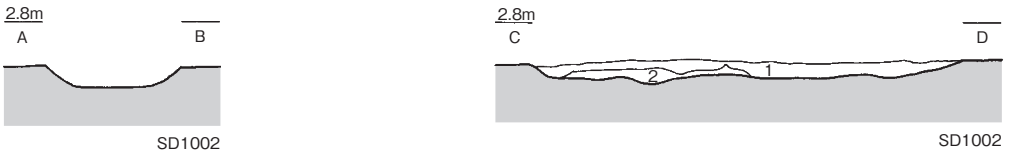
SD1003はＡ区の東,ⅦG1aグリッドからⅦG2aグリッドに位置する南北溝（Ｎ－９°－Ｗ）である。標高2.6ｍの５層上面で検出した。北側は調査区外へ延びる。確認できた規模は，長さ11ｍ，幅0.5ｍ，深さ0.1ｍ。SD1002の南北溝とほぼ平行する。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

溝SD1036（第99・102図）

SD1036はＡ区の東,ⅦF1dグリッドに位置する南北溝（Ｎ－27°－Ｗ）である。北側は調査区外へ延び，南側は壊されている。標高2.8ｍの３層上面で検出した。確認できる規模は，長さ10ｍ，幅0.4～0.8ｍ，深さ0.1～0.2ｍである。

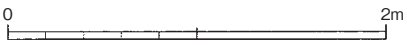
埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



1　褐灰色粘質土
2　灰色シルト質土

1　褐灰色粘性シルト質土

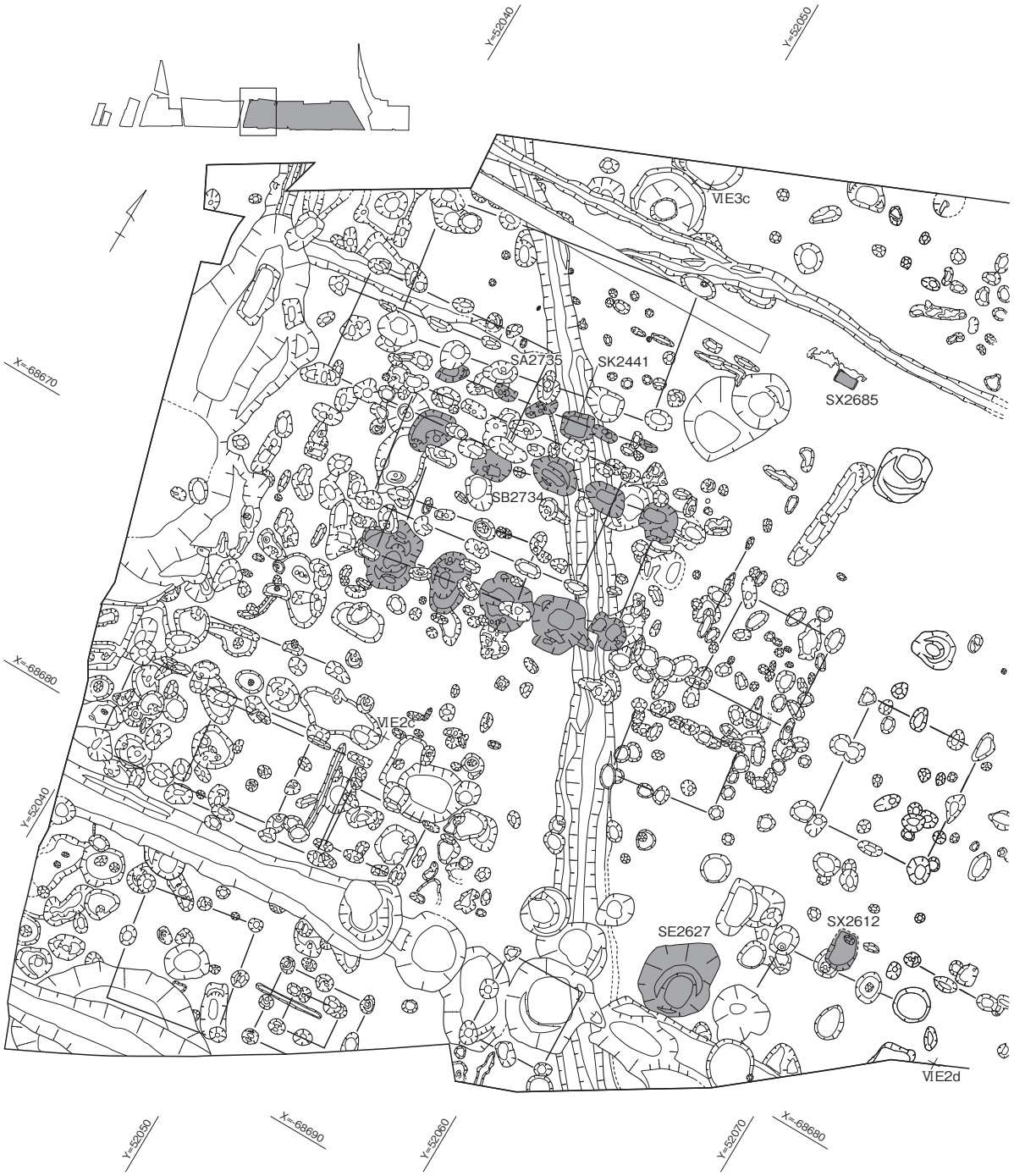
1　褐色粘質土



第102図　中世Ａ区溝実測図（平面1：500　土層断面1：40）

２．Ｂ区の遺構

Ｂ区では，掘立柱建物２棟，柱穴列１列，土坑10基，井戸１基，溝２条，墓２基，道路状遺構１条，不明遺構１基を確認した。土坑は調査区の東側でまとまり，墓は西側に点在する。道路状遺構が調査区の東端から中央にかけて確認された。ほとんどの遺構は標高2.6～3.0ｍで検出した。



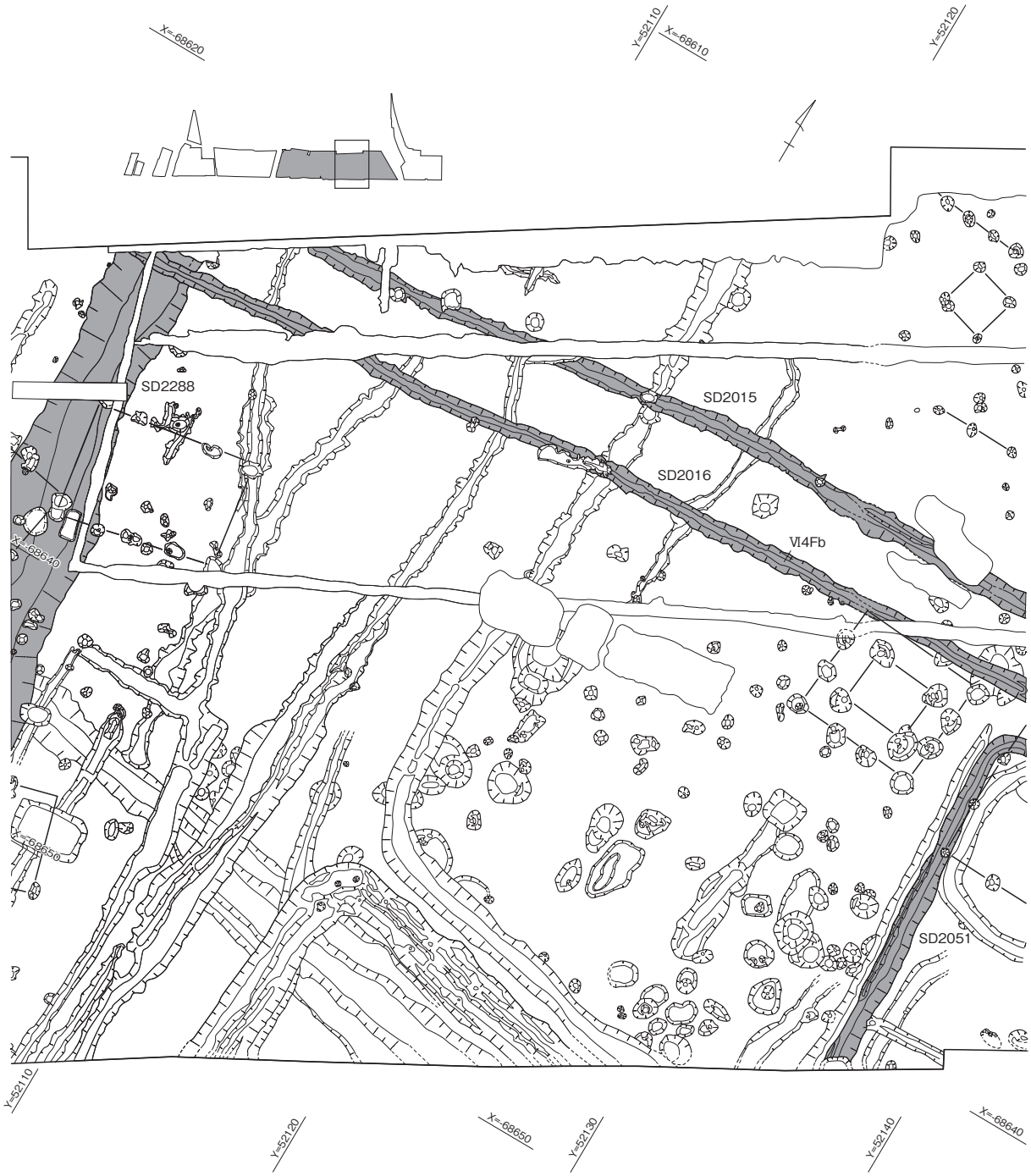
第103図　中世Ｂ区遺構図１（1：250）

第104図　中世Ｂ区遺構図２（全体図1：250　土坑土層断面図1：40）

建物SB2113（第106・107 図　図版41－１）

SB2113はＢ区の東,ⅥF4bグリッドに位置する。２×３間の掘立柱建物で，梁行3.6m×桁行4.7mである。柱間は桁行が1.5～1.6m，梁間が1.8mである。梁間の中間の柱穴が，建物の軸から0.3mほど内側に位置する。建物の主軸方位はＮ－74°－Ｗである。標高2.7mの５層上面で検出した。柱穴の形は円形か楕円形で，長径0.4～0.7m，深さ0.1～0.3mである。柱穴底の標高は2.4～2.6m。柱穴の埋土は第２層が掘形埋土である。

埋土から，中世前半の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



第105図　中世Ｂ区遺構図３（1：250）

建物SB2734（第103・108図　図版45－２，46－１　225－７・８）

SB2734はＢ区の西,ⅦE2b･ⅦE2cグリッドに位置する。１×４間の掘立柱建物で,梁行5.0m×桁行9.0mである。桁行の柱間は2.2～2.4m。建物の主軸方位はＮ－78°－Ｅである。標高3.0mの２層で確認した。柱穴の形は楕円形か不整な楕円形で，長径1.5～2.8m，短径1.1～2.3m，深さ0.6～0.8mである。柱穴底の標高は2.2～2.4m。北東隅の柱穴には径20cmの柱根が長さ30cmほど残存していた。柱穴に対して柱根径が小さいことから，掘り直しによって柱穴が広がったのであろう。

埋土から，中世後半の土師器や白磁の破片などが出土した。

第106図　中世Ｂ区遺構図４（1：250）

柱穴列SA2735（第103・109図）

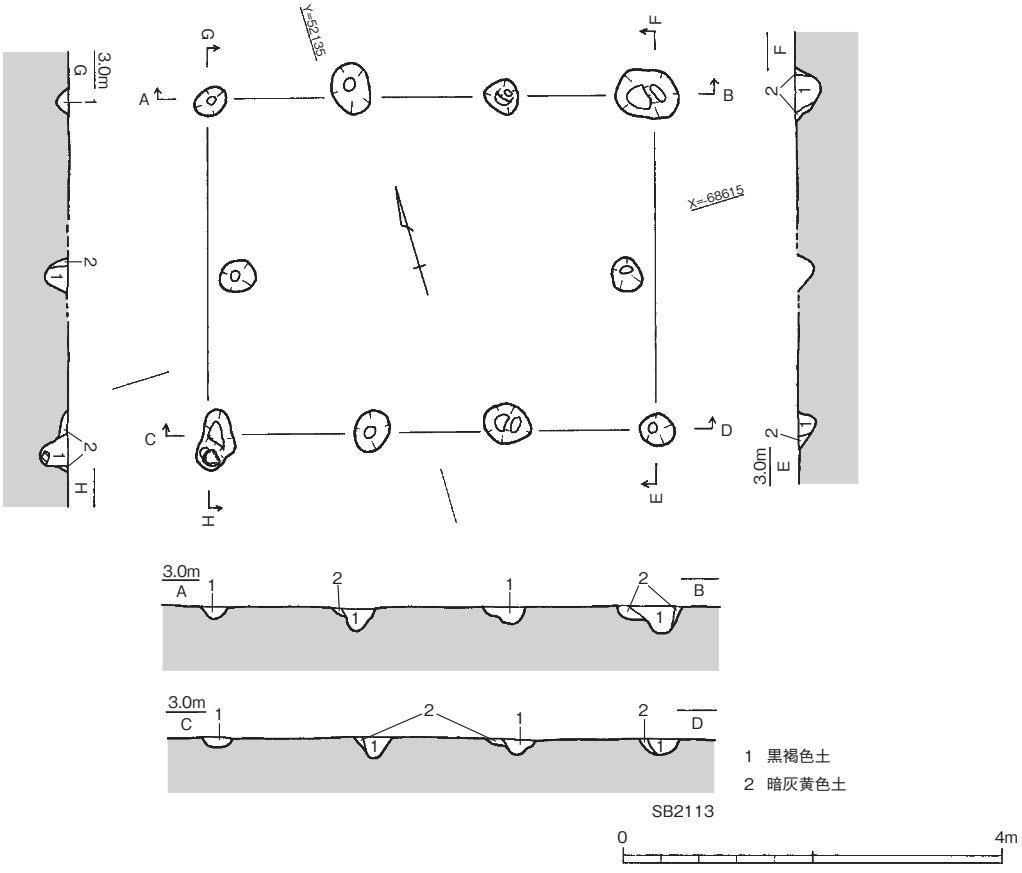
SA2735はＢ区の西,ⅥE2c･ⅥE2dグリッドに位置する。４間の柱穴列で，柱間1.8～2.4ｍで，全長8.2ｍである。主軸方位はＮ－76°－Ｅで，SB2734とほぼ同じである。SB2734の北面に平行するが，対応する柱穴の位置と軸がややずれる。庇の可能性があるものの，柱穴列とした。柱穴の形は不整な楕円形で，長径0.8～1.3m，短径0.4～0.7m，深さ0.4～0.6ｍである。柱穴底の標高は2.4～2.6m。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

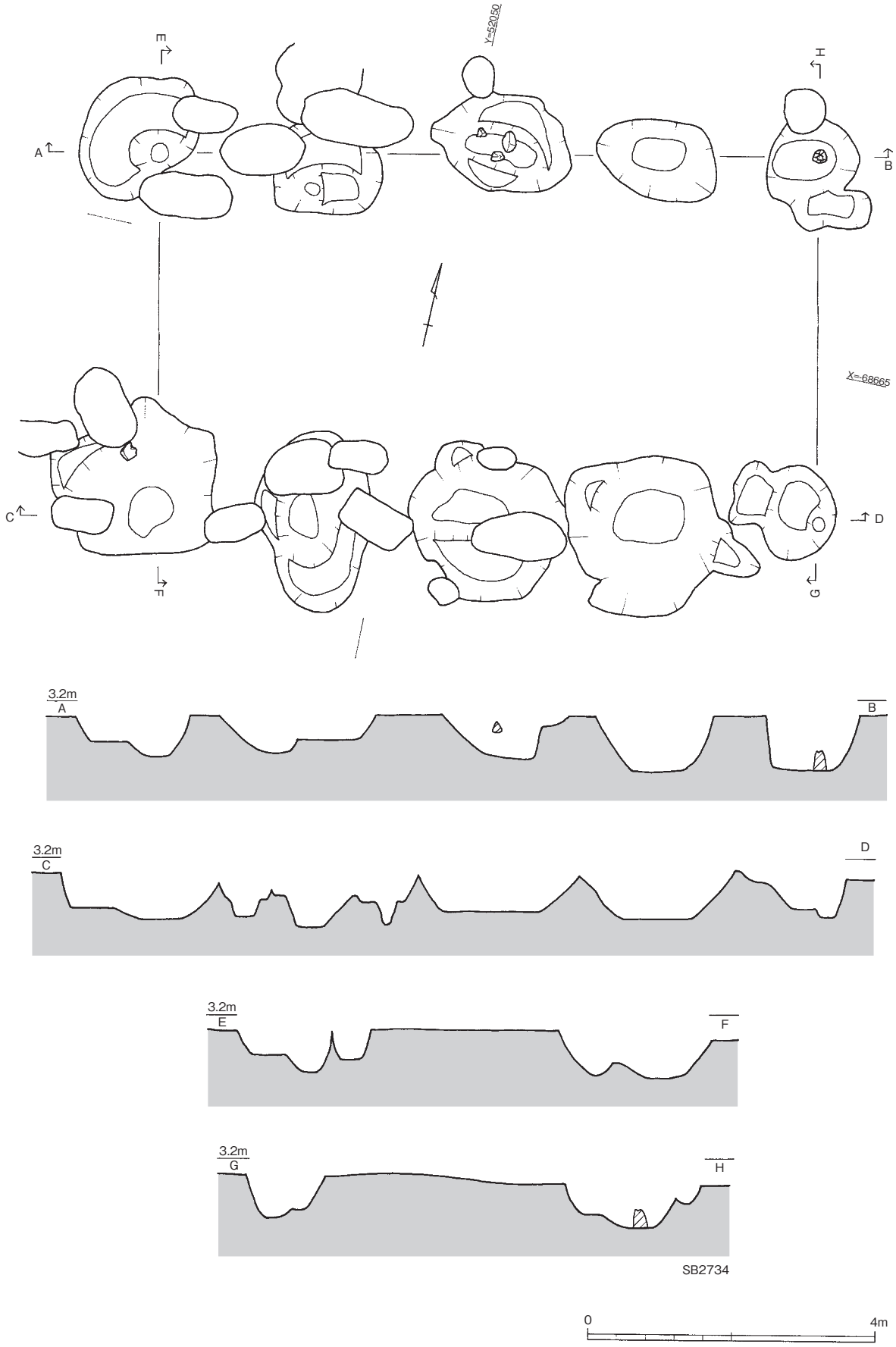
土坑SK2002（第106・111図　226－１・２）

SK2002はＢ区の東,ⅥF4cグリッドに位置する。平面形は円形で，断面形は２段掘り状の逆台形をなす。直径1.6m，深さ1.0ｍである。標高2.7ｍの３層上面で検出した。底面から激しく湧水する。埋土は５層に分層できた。第１・２層内から拳大から人頭大の礫が多数出土した。また，底面中央で20㎝大の角礫を１個出土した。

埋土から，13～14世紀の土師器片などが出土した。



第107図　中世Ｂ区建物実測図１（1：80）



第108図　中世Ｂ区建物実測図２（1：80）

土坑SK2003（第106・110図　図版28－１・２　226－３～19・22～26）

SK2003はＢ区の東,ⅥF4cグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は２段掘り状の逆台形をなす。長径5.2m，短径3.6m，深さ1.0mである。標高2.8mの３層上面で検出した。埋土は８層に分層できた。第２・４・５層内で13世紀の須恵器や土師器，漆器椀，木製品などが多く出土した。第２層内で拳大から人頭大の礫を多数検出した。底面には数本の杭が刺さっており，激しい湧水が認められた。井戸側などは確認されないが，何らかの水溜施設の可能性がある。

土坑SK2004（第106・111図　227－１～３）

SK2004はＢ区の東,ⅥF4cグリッドに位置する。平面形は楕円形，断面形は歪な逆台形状をなす。長径2.9m，短径2.5m，深さ1.0mである。標高2.8mの３層上面で検出した。遺構下部がやや袋状に抉られるが，壁が崩落したものと思われる。埋土は２層に分層できた。底面から激しく湧水する。

埋土から13世紀の土師器などが出土した。

土坑SK2083（第106・111図　227－４）

SK2083はＢ区の東,ⅥF4bグリッドに位置する。平面形は楕円形で断面形は逆台形状をなす。長径1.7m，短径1.4m，深さ0.8mである。標高2.8mの５層上面で検出した。湧水があった。埋土は６層に分層できた。第５層から，13世紀の土師器片や20㎝大の礫が出土した。

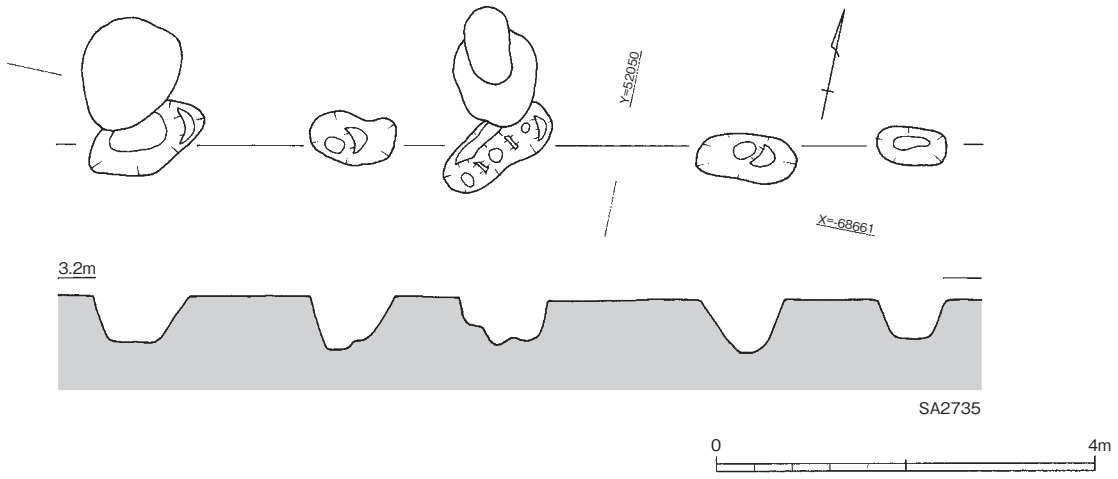
土坑SK2084（第106・111図　227－５・６）

SK2084はＢ区の東,ⅥF4bグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状をなす。北側が後世の撹乱に壊され，正確な規模・形状は不明である。確認できた規模は長さ3.2m，幅1.0m，深さ0.7mである。標高2.8mの３層上面で検出した。埋土は４層に分層できた。

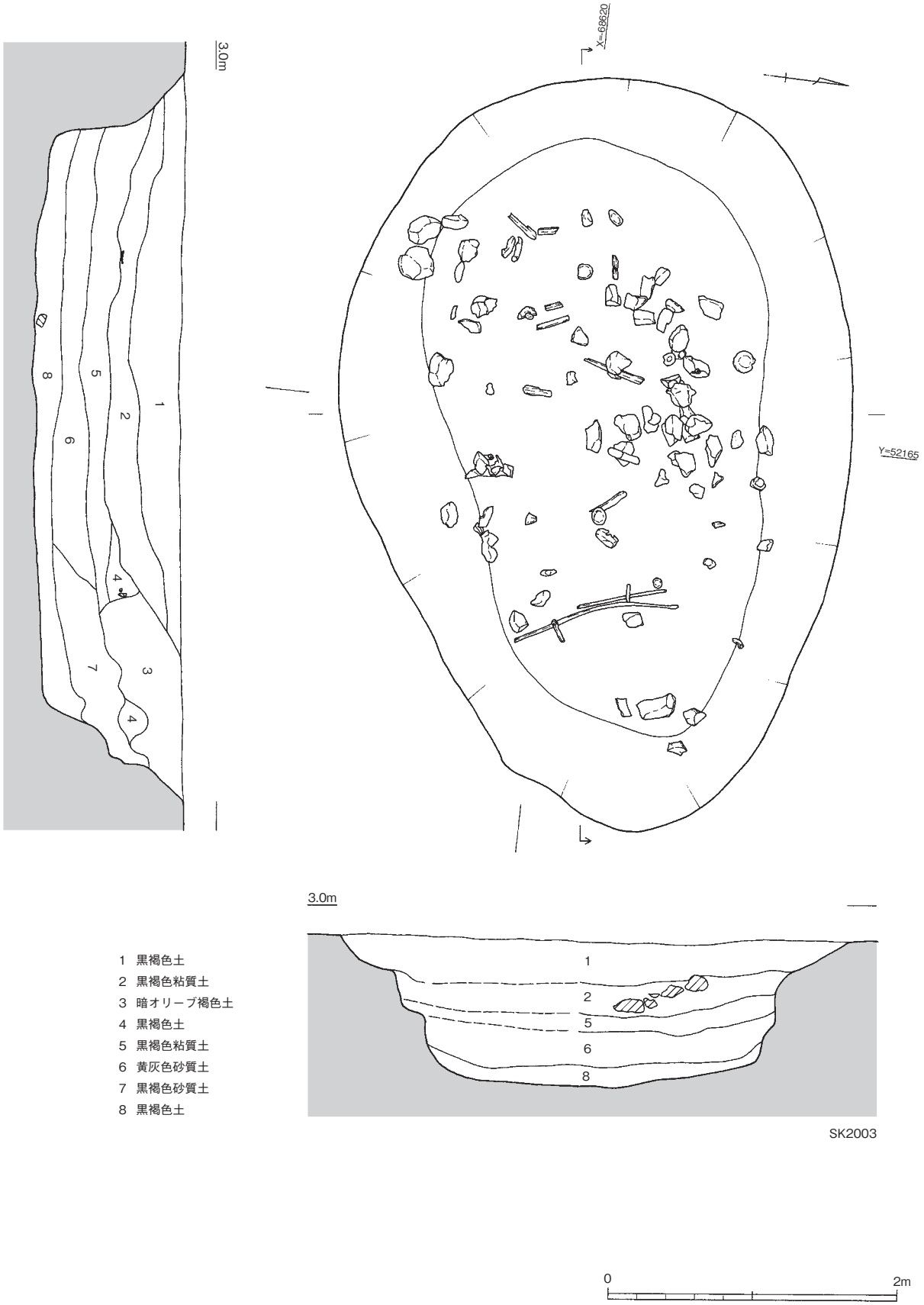
埋土から，13～14世紀の擂鉢の破片が出土した。

土坑SK2116（第106・111図　図版27－５・６　227－７）

SK2116はＢ区の東,ⅥF4bグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径1.7m，短径1.5m，深さ0.9m。標高2.8mの３層上面で検出した。埋土は６層に分層できた。第２層から拳大の礫が，第６層から折敷の底板が出土した。



第109図　中世Ｂ区柱穴列実測図（1：80）



1　黒褐色土
2　黒褐色粘質土
3　暗オリーブ褐色土
4　黒褐色土
5　黒褐色粘質土
6　黄灰色砂質土
7　黒褐色砂質土
8　黒褐色土

第110図　中世Ｂ区土坑実測図１（1：40）

土坑SK2123（第106・112図　図版27－３・４　227－８～12）

SK2123はＢ区の東,ⅥF4bグリッドに位置する。平面形は円形で，断面形は２段掘りの逆台形状をなす。標高2.8ｍの３層上面で検出した。直径1.1ｍ，深さ0.6ｍである。埋土は４層に分層できた。第１層から人頭大の礫が出土した。第２層から13世紀代の土師器の皿が５枚出土した。土器は西側から中心部に向かって傾斜して点在する。

土坑SK2351（第104・112図）

SK2351はＢ区の中央,ⅥE3dグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状をなす。標高2.6ｍの５層上面で検出した。長径4.4ｍ，短径3.2ｍ，深さ0.6ｍである。埋土は３層に分層できた。遺構中央で拳大から人頭大の礫がまとまって出土した。また，湧水する底面の東側に５本の細い杭が列状に打ち込まれていた。

埋土から，13世紀代の土器片が出土した。いずれも小片で図示していない。

土坑SK2385（第104図）

SK2385はＢ区の中央,ⅥE2dグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状をなす。標高2.6ｍの３層上面で検出した。遺構の一部は壊されている。長径3.4ｍ，短径3.1ｍ，深さ0.6ｍである。埋土は６層に分層できた。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

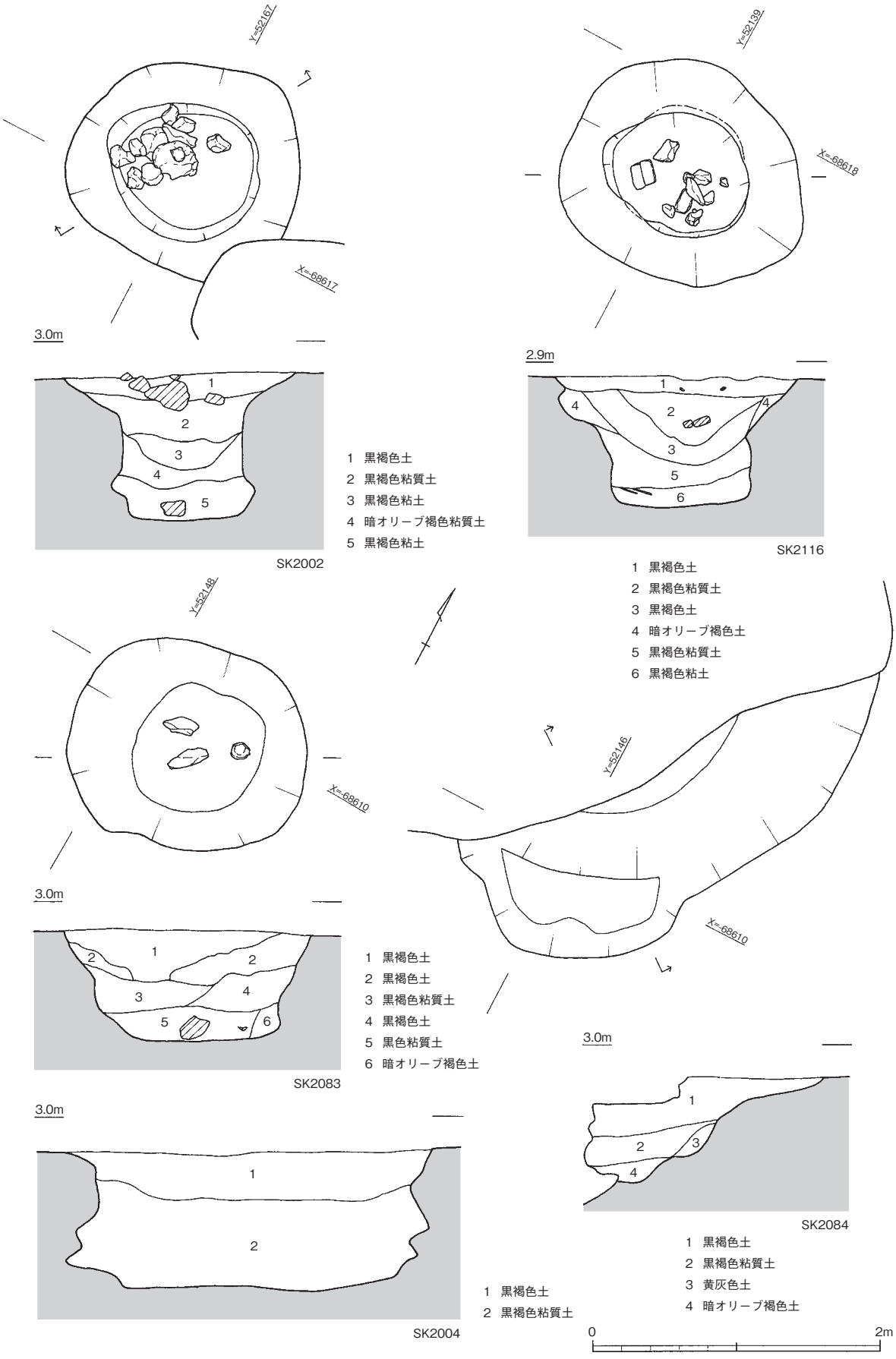
土坑SK2441（第104・112図　227－20）

SK2441はＢ区の中央,ⅥE2dグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で，断面形は逆台形状をなす。標高2.6ｍの３層上面で検出した。長さ1.3ｍ，幅1.0ｍ，深さ0.8ｍである。遺構北側の標高2.5ｍで半月状の平坦面がある。

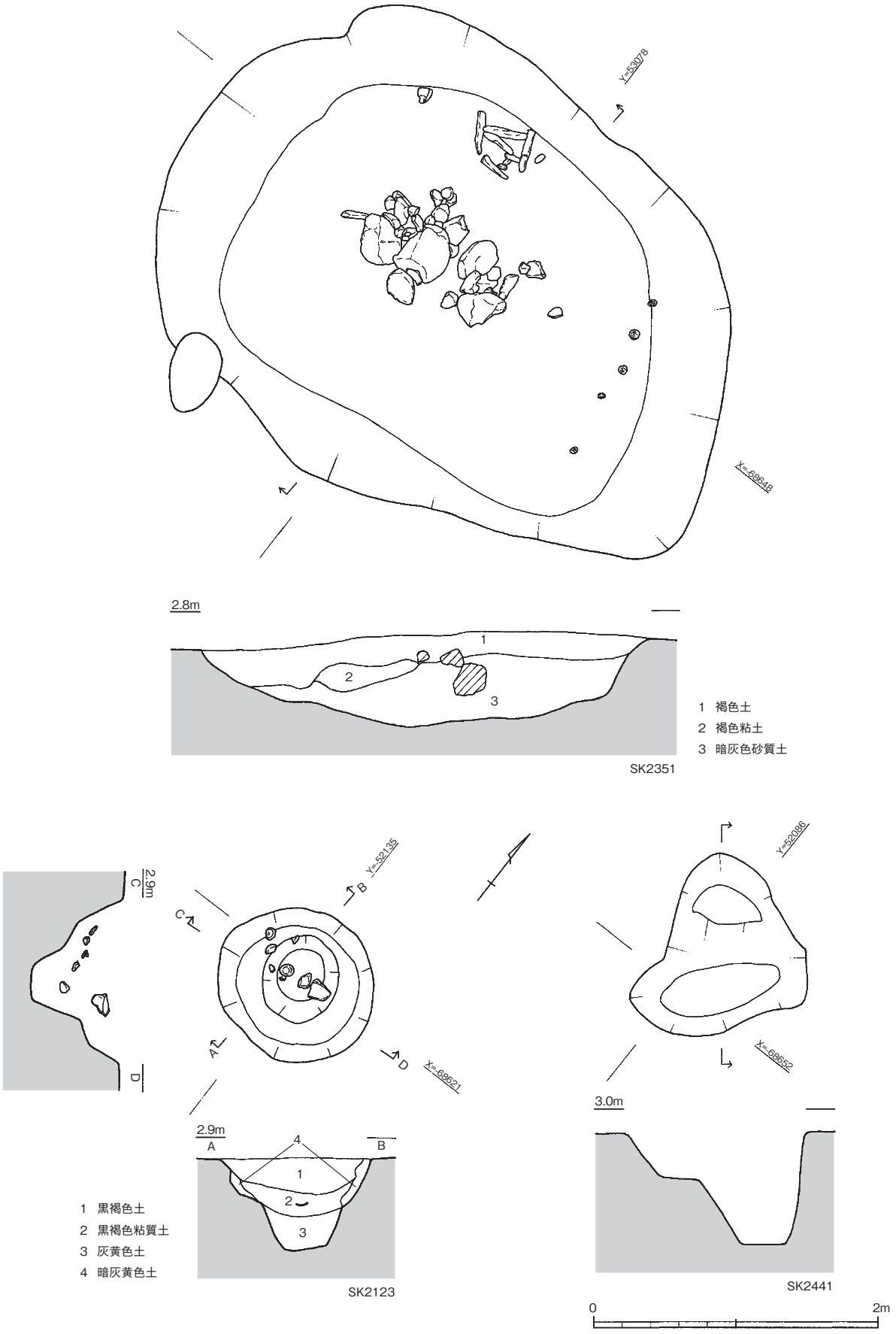
埋土から，穿孔のある土師質の杯が１点出土した。

井戸SE2627（第103・113図　図版33－５・６　227－13・14）

SE2627はＢ区の西,ⅥE1cグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で，断面形は逆台形状をなす。標高2.7ｍの５層上面で検出した。長径3.5ｍ，短径2.9ｍ，深さ0.7ｍである。埋土は７層に分層できた。第１～３層は井戸廃絶後の埋土，第４層は井筒内の堆積土，第７層は掘形埋土である。遺構下部で，径40㎝の曲物を２個検出した。一つは中央の底面に接して位置し，高さ20㎝ほどで東側が破損している。もう一つのは中央の曲物の南側にあり，第３層の下半で検出した。高さ25㎝を測り，中央の曲物とは一部が重なる位置にあるが，接してはいない。これらの曲物の出土状況から，井筒として用いられていた曲物が井戸廃絶時に壊され，その上部が南へ移動したものと考えられる。井戸廃絶後の埋土から，底部に穿孔のある土師質土器の皿（227－13）が出土した。14～15世紀。



第111図　中世Ｂ区土坑実測図２（1：40）



第112図　中世Ｂ区土坑実測図３（1：40）

溝SD2051（第105・106・114図　図版35－１）

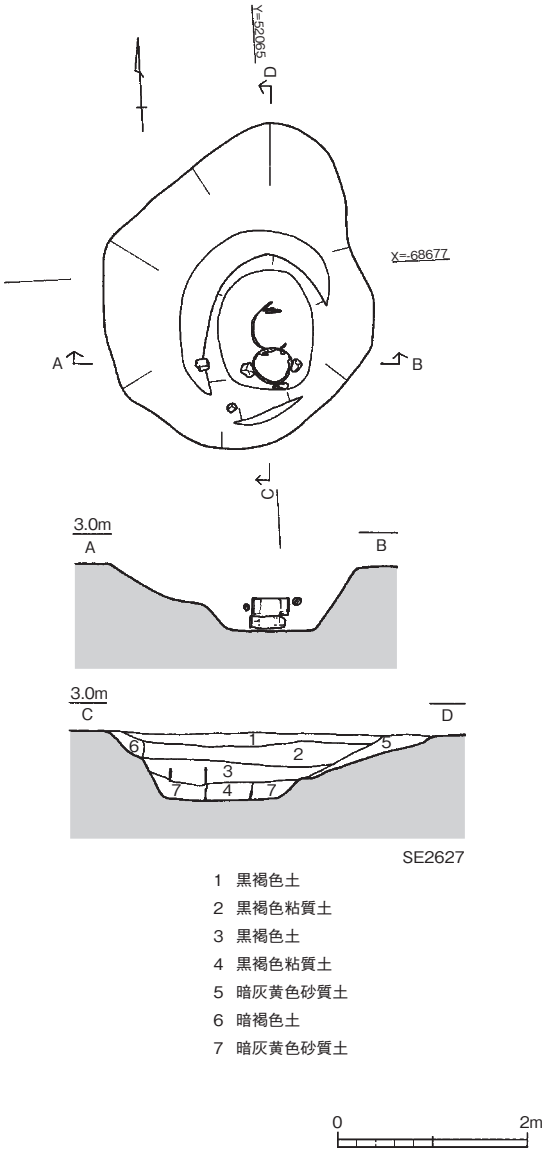
SD2051はＢ区の東,ⅥF3bからⅥF3cグリッドに位置する「Ｌ」字状の溝である。標高2.8ｍの３層上面で検出した。総延長は48m，幅0.6～0.8m，深さ0.3ｍである。Ｎ－82°－Ｅの軸をもって東西方向に延び，ⅥF3bグリッドで直角に屈曲し，Ｎ－８°－Wの軸方位をもって南に進む。東側と南側は調査区外へ延びる。底面の標高は2.5ｍで，東西溝・南北溝とも高低差はみられない。本遺構は区画溝と考えられる。

埋土から，12世紀後半から13世紀の土器片が出土した。いずれも小片で図示していない。

溝SD2288（第104・105・114図　図版35－２）

SD2288はＢ区の中央,ⅥF2a･ⅥF3a･ⅥE3dグリッドに位置する南北溝（Ｎ－８°－W）である。標高2.7ｍの５層上面で検出した。長さ34m，幅3.0～4.0m，深さ0.4ｍである。底面の標高は2.2ｍ前後だが，南側がやや低い。埋土は３層に分層できた。

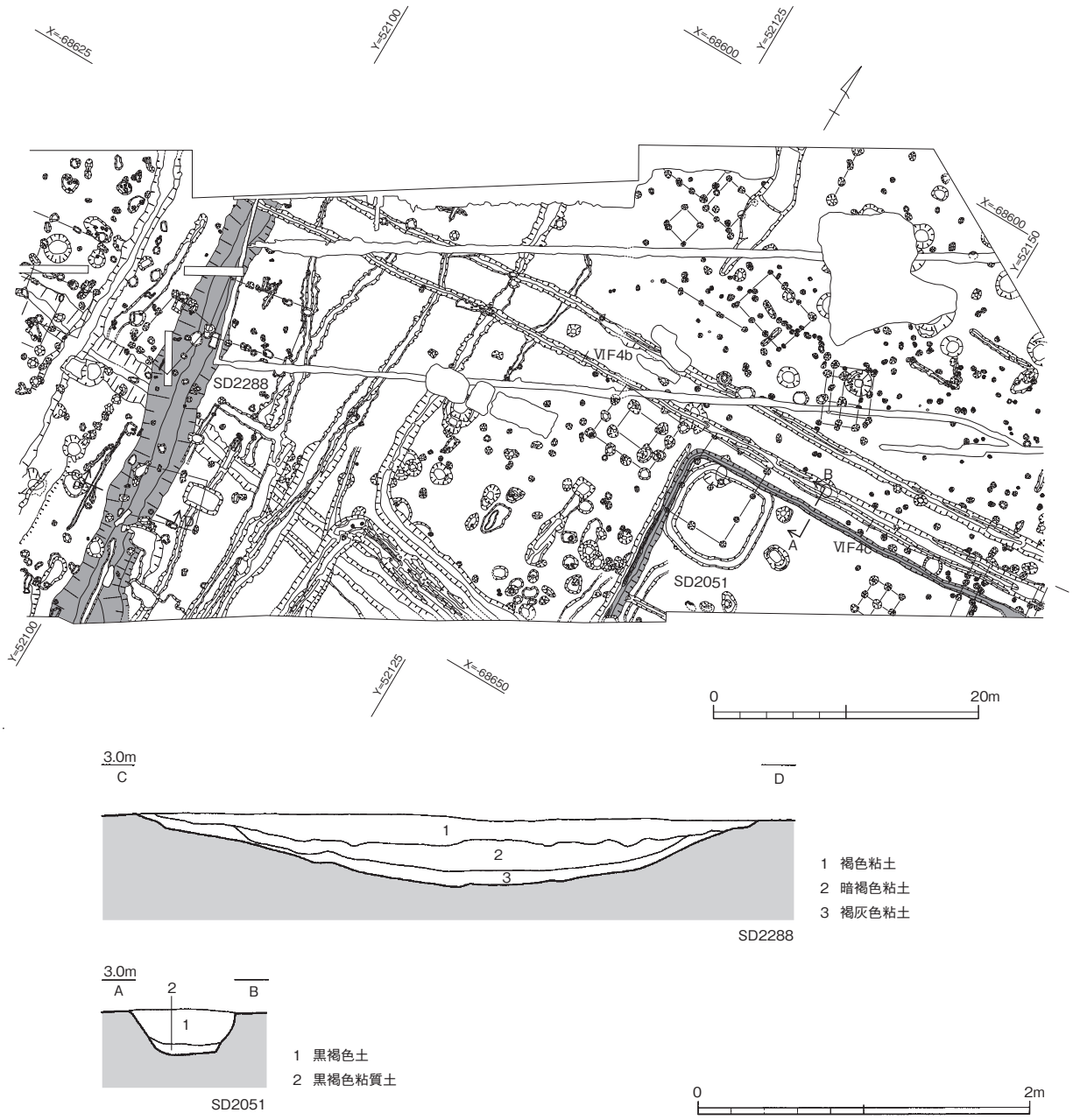
埋土から，古代から中世前半の土器片が出土した。いずれも小片で図示していない。



第113図　中世Ｂ区井戸実測図（1：80）

道路状遺構SD2015・SD2016（第105・106・115図　図版37－１・２，38－１・２ 227－15～19・21～35）

SD2015･SD2016はＢ区の東側,ⅥF3a･ⅥF4aグリッドからⅥF4b･ⅥF4cグリッドに位置する。標高2.8ｍの５層上面で検出した。道路側溝と考えられる平行する２条の溝が，Ｂ区の東端から中央北側まで直線的に走る（Ｎ－82°－Ｅ）。長さ71ｍ，幅は，SD2015の底面中心からSD2016の底面中心まで東側で3.1ｍ，西側で3.5ｍである。北側溝SD2015は幅0.8～1.2ｍ,深さ0.3～0.4ｍ。南側溝SD2016は幅0.6～1.4ｍ,深さ0.3ｍ。断面形はいずれも東側が逆台形状，西側が「Ｖ」字状をなし，東側が幅広である。底面標高は北側溝が2.4ｍ，南側溝が2.5ｍ弱で，北側溝がやや深い。２条の溝の底面はいずれも東に対して西側が若干低く，東から西へ向かって排水されたものと思われる。北側溝SD2015から13世紀後半から14世紀の土師器や土錘などが，南側溝SD2016から土師質皿や捏ね鉢などが出土した。

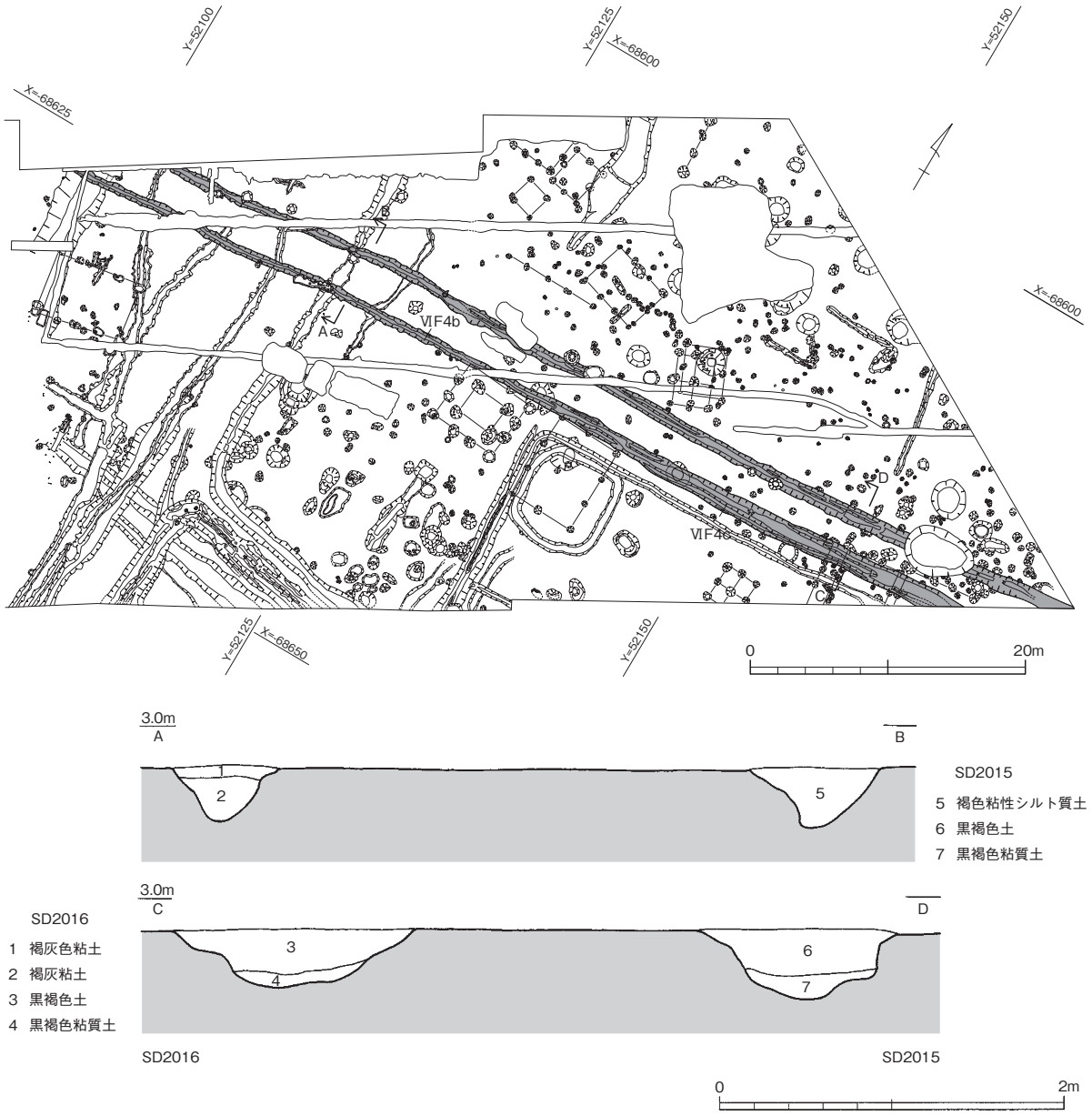


第114図　中世Ｂ区溝実測図（平面1：500　土層断面1：40）

墓SX2612（第103・116図　図版28－５・６　228－１～９）

SX2612はＢ区の西,ⅥE2cグリッドに位置する。平面形は長楕円形で，断面形は逆台形状をなす。標高2.9mの３層上面で検出した。遺構の約３分の１が壊されている。確認できた規模は長さ1.1m，幅1.1m。深さは0.25mである。埋土は３層に分層できた。第２層と第３層の間で，腐食した木片が出土した。木片は遺構の南側の中心から東側に「Ｌ」字状に確認でき，木棺の痕跡と考えられる。第２層では腐食した木片とともに遺構中央部で古銭（228－４～９）が，西端で土師器の杯（228－１）が出土した。また，第３層から土師器の杯（228－２）が出土した。

15世紀の木棺墓と考えられる。



第115図　中世Ｂ区道路状遺構実測図（平面1：500　土層断面1：40）

墓SX2685（第103図　図版29－１　228－10～14）

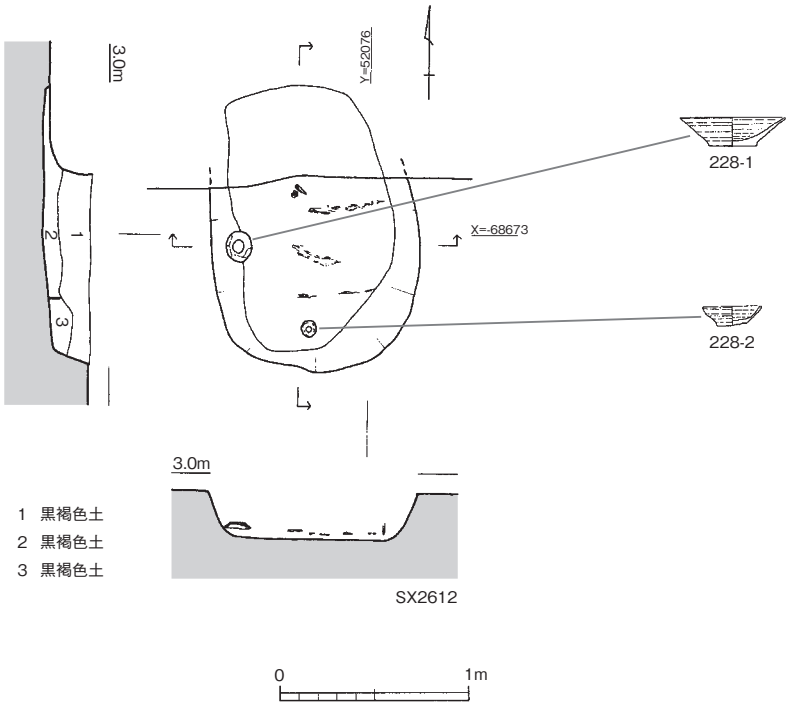
SX2685はＢ区の西,ⅦE2cグリッドに位置する。平面形は長方形である。標高2.9ｍの３層上面で検出した。遺構のほとんどが壊されており，底部付近のみ確認した。長さ1.7ｍ，幅0.8～0.9ｍである。埋土から木棺と考えられる木片とその痕跡を0.75×1.55ｍの長方形の枠状に検出した。主軸方位はＮ－87°－Ｅである。腐食した木片や人骨と思われる骨片が，遺構から北西方向に幅0.5～1.0ｍ,長さ約5.0ｍの範囲で散在していた。遺構が壊された際に散らばったものと考えられる。

埋土から古銭が出土した。

不明遺構SX2519（第104図）

SX2519はＢ区の中央,ⅦE2dグリッドに位置する。平面形は隅丸方形で，断面形は逆台形状をなす。標高2.8ｍの５層上面で検出した。上部を壊されている。南側は調査区外にある。確認できた規模は東西6.0ｍ，南北5.6ｍ，深さ0.2ｍである。底面で中・小のピットを検出したが，建物としての明確な柱穴配置をなしていないことから不明遺構とした。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



第116図　中世Ｂ区墓実測図（1：40）

３．Ｃ区の遺構

Ｃ区では，遺構密度が低く，土坑２基，井戸３基，溝３条，墓１基を確認した。いずれも標高2.7～3.0ｍで検出した。

土坑SK3091（第117・119 図　229－１）

SK3091はＣ区の中央,VE4aグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径3.3m，短径2.3m，深さ0.6m。埋土は４層に分層できた。各層から15世紀の擂鉢などの土器片が出土した。

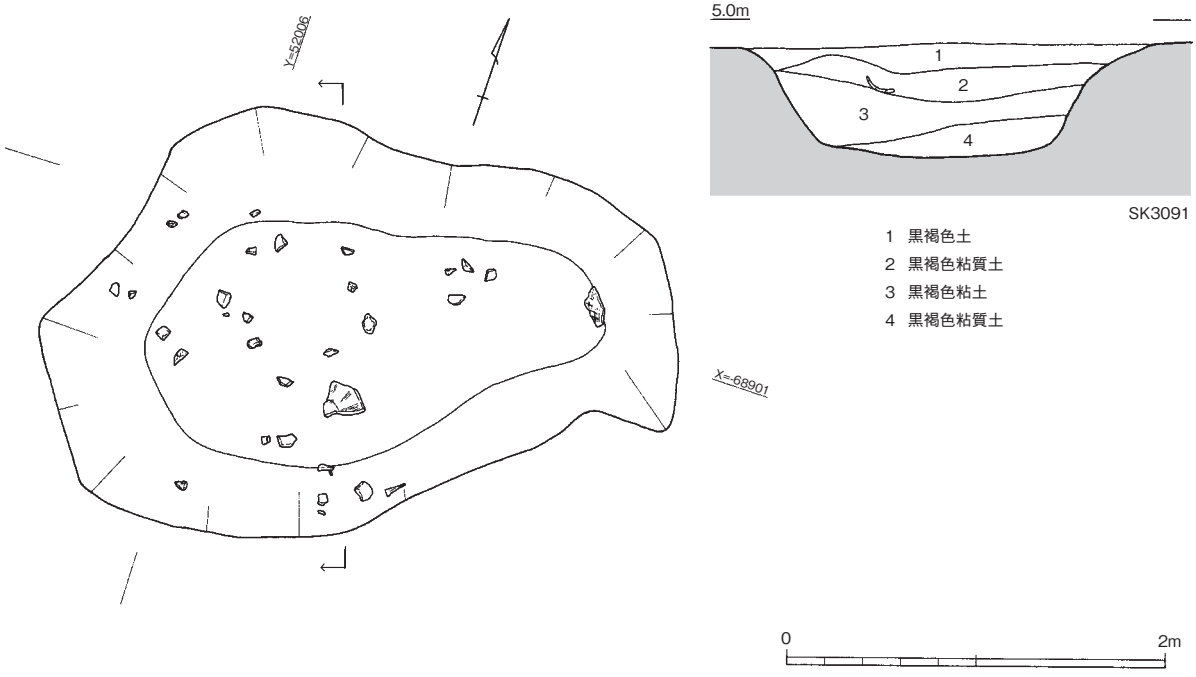
土坑SK3285（第118 図　229－２・３）

SK3285はＣ区西の南壁際,VD4dグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状をなす。２層上面で検出した。長径1.2m，短径0.6m，深さ0.4m。埋土から15～16世紀の土師器や備前焼の壺などが出土した。

井戸SE3060（第119・120図）

SE3060はＣ区の東,ⅦE1aグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は２段掘状の逆台形状をなす。５層上面で検出した。長径2.1m，短径1.8m，深さ0.8m。埋土は５層に分層できた。遺構下部で曲物を用いた井筒が出土した。曲物は直径40㎝，高さ30㎝で約３分の１が残存している。

埋土から，中世の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



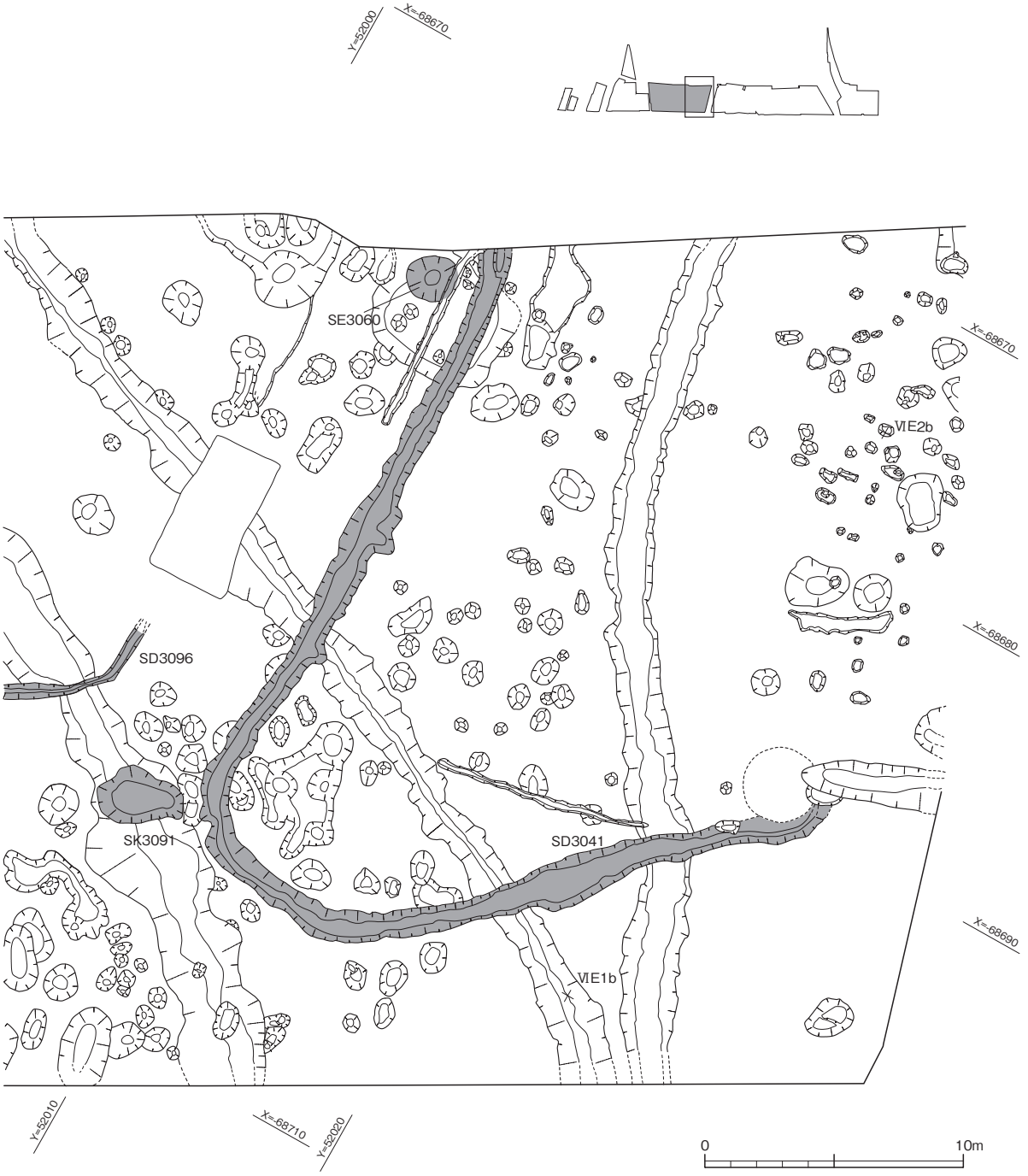
第117図　中世Ｃ区土坑実測図（1：40）

井戸SE3220（第118・120 図　229－４～９）

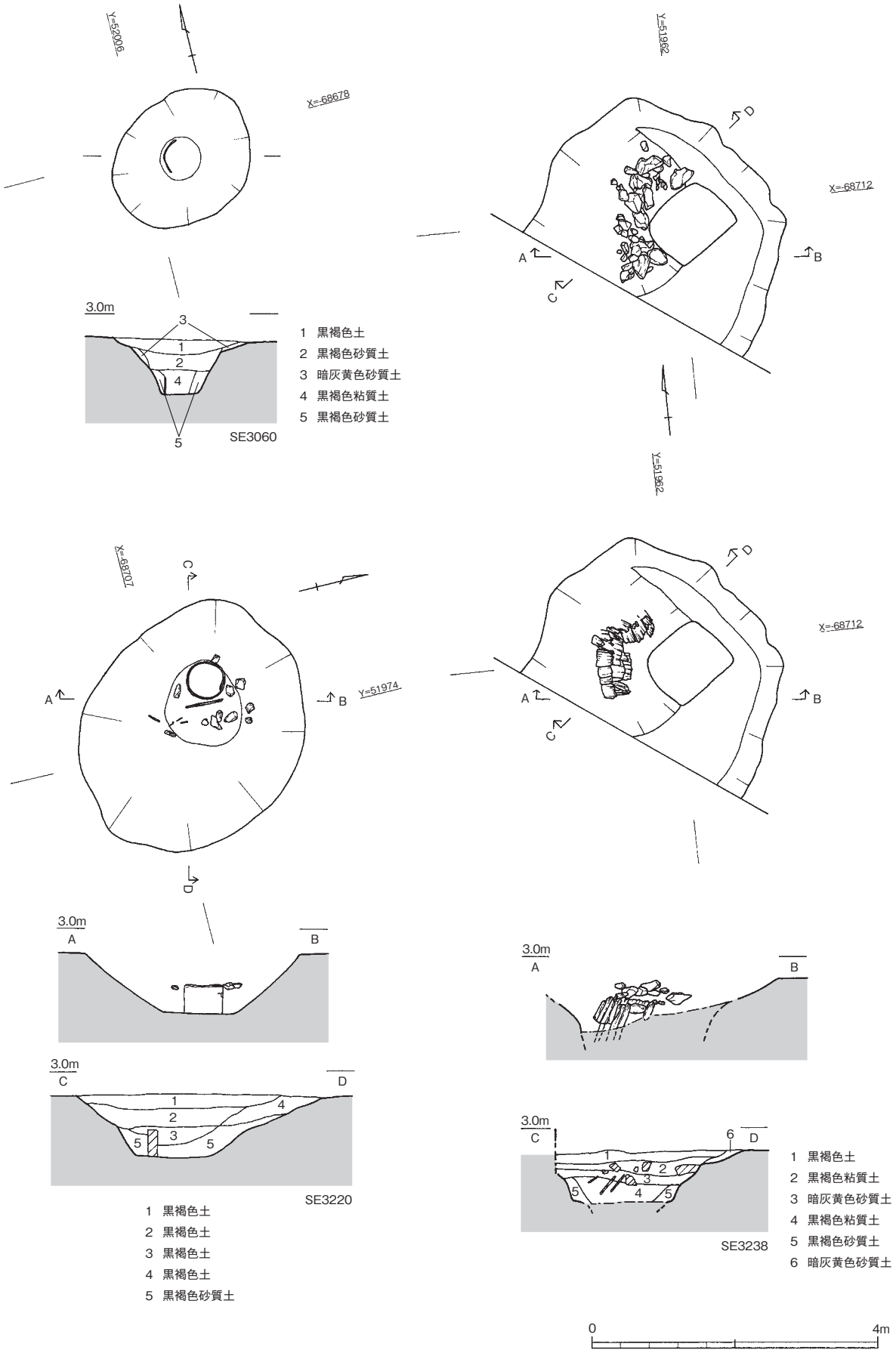
SE3220はＣ区の西,VD4c・VD4dグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は２段掘状の逆台形をなす。５層上面で検出した。長径3.6m，短径3.0m，深さ0.9m。埋土は５層に分層できた。底面西寄りに，曲物を用いた井筒が出土した。曲物は直径50㎝，高さ40㎝。曲物の上に堆積する第２・３層は井戸廃絶後の埋土で，第５層が掘形埋土である。

埋土から，８世紀前後の須恵器や瓦質土器，常滑系甕などが出土した。

第118図　中世C区遺構図１（1：250）



第119図　中世C区遺構図２（1：250）

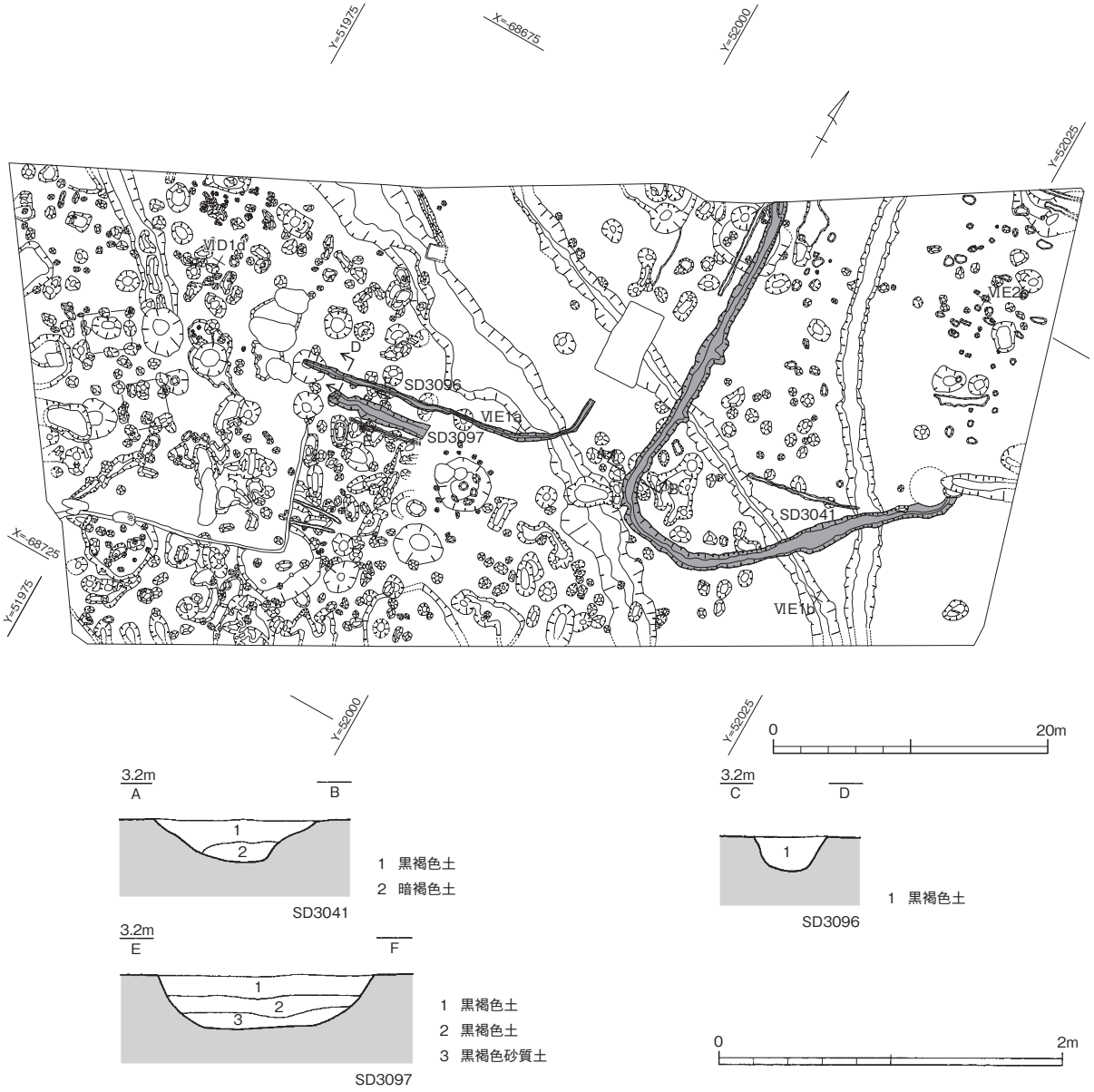


第120図　中世Ｃ区井戸実測図（1：80）

井戸SE3238（第118・120 図　図版56－４　229－10）

SE3238はＣ区の西壁側,VD4cグリッドに位置する。南西側が調査区外ある。平面形は隅丸方形で，断面形は２段掘状の逆台形をなす。５層上面で検出した。標高2.0ｍに至ったところで湧水が激しく，掘り下げを中止した。一辺3.6ｍ以上，深さ40㎝以上。埋土は６層に分層できた。第１・２層で拳大から人頭大の礫が多数出土した。遺構下部では，三重の板組からなる井戸側が出土した。板組は内側から外側に向かって１枚，２～３枚，５～６枚の板で組まれ，内側ほど少ない枚数で幅広の板を用いている。外側の板組の四隅には，幅５㎝，長さ50～70㎝ほどの縦杭（角材・枝材を使用）が打ち込まれていた。四隅の縦杭で板組を支える構造であろう。井戸側は板組の大きさと縦杭の位置から0.9ｍ四方に復元できる。

埋土から，13世紀の土師質土器片などが出土した。



第121図　中世Ｃ区溝実測図（平面1：500　土層断面1：40）

溝SD3041（第119・121図　229－11～21）

SD3041はＣ区東側,VE4a・VE1a・VE1bグリッドに位置する溝である。５層上面で検出した。VE1aグリッドの北からＮ－１°－Ｗの軸をもって南に向かい，VE4aの北側で東に屈曲し，Ｎ－８°－Ｗの軸方位をなして北東方向に延びる。東端は壊されている。長さ２ｍ，幅1.0～1.8m，深さ0.3mである。

遺物は，８世紀の土師器や15世紀代の土師質皿や擂鉢・製塩土器・青磁椀などが出土した。

溝SD3096（第118・119・121図　229－22）

SD3096はＣ区の中央,VD4dからVE1aグリッドに位置する溝である。５層上面で検出した。VD4dグリッドの北側でＮ－81°－Ｅの軸をもって東西方向に延び，VE1aグリッドの南西側で北へ向かって屈曲する。南北方向の溝の方向はＮ－１°－Ｗである。長さ23m，幅0.4～0.6m，深さ0.3m。底面は，南北溝・東西溝とも大きな高低差はない。

遺物は，８世紀の土製支脚の破片などが出土した。

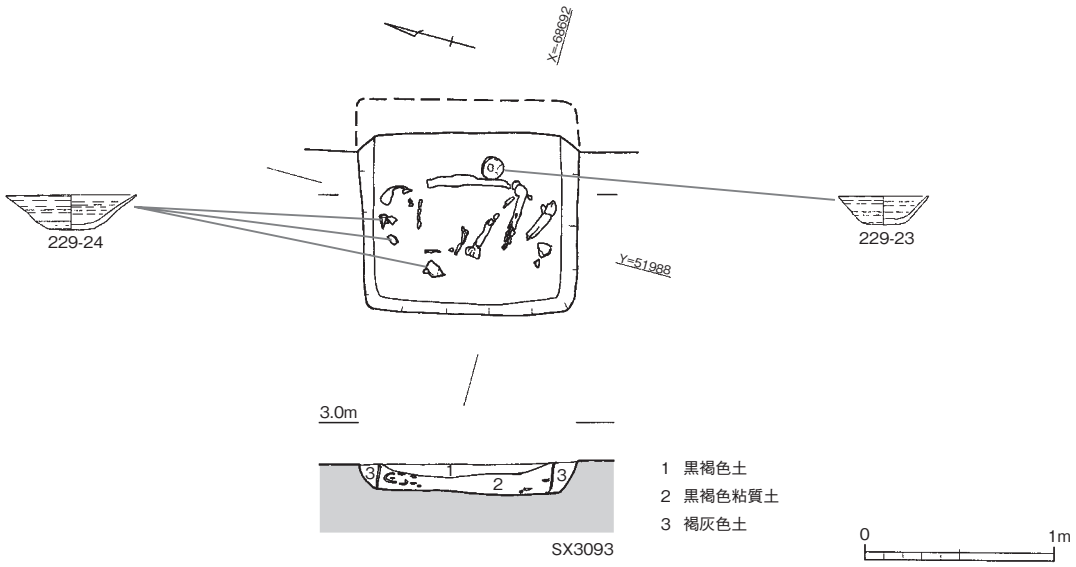
溝SD3097（第118・121図）

SD3097はＣ区の中央,VD4dグリッドに位置する東西溝（Ｎ－82°－Ｅ）である。５層上面で検出した。東側が壊されている。長さ7.5m，幅1.2m，深さ0.3mである。

埋土から，中世の土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

墓SX3093（第118・122図　図版54－４　229－23・24）

SX3093はＣ区中央の北側,ⅥD1dグリッドに位置する。平面形は方形で，断面形は逆台形状をなす。５層上面で検出した。１辺1.1m，深さ0.2mである。埋土は３層に分層できた。第２層と第３層の境界で，腐食した木質を検出した。木質は遺構内で「コ」字状で，木棺の痕跡と考えた。0.9m四方に復元できる。第２層で土師質土器の杯が２点出土した。１点（229－23）は完形の状態で中心から東寄りで，もう１点（229－24）は北西側に破片が点在していた。棺内で成人と思われる人骨が確認された。腐食が進んでおり，性別・年齢は不明。また，骨は本来の位置から移動している部位もあるが，頭部を北にして東向きに屈葬されたものと推測される。出土遺物から，15～16世紀の木棺墓と考えられる。



第122図　中世Ｃ区墓実測図（遺構1：40）

４．Ｄ区の遺構

Ｄ区では，主に自然河道の右岸側で遺構を確認した。土坑２基，井戸４基。自然河道の左岸側で溝２条，埋没した自然河道上で土坑２基，足跡１か所を確認した。これらは標高1.9～2.9mで確認した。

土坑SK4003（第124図　図版65－５　230－１）

SK4003はＤ区の北,VD4bグリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で，断面形は逆台形状をなす。自然河道Ⅰ層上面で検出した。長径3.8m，短径3.0m，深さ0.4m。底面直上に拳大から人頭大の礫が点在する。埋土から10世紀代の土師器などが出土した。

土坑SK4016（第124図　230－３・４）

SK4016はＤ区の東,VD4cグリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で断面形は逆台形状をなす。５層上面で検出した。長径6.0m，短径2.5m，深さ0.7m。埋土は12層に分層できた。埋土から拳大の礫や木片，13～14世紀の土師質杯や擂鉢などが出土した。

土坑SK4031（第123・124 図　230－２）

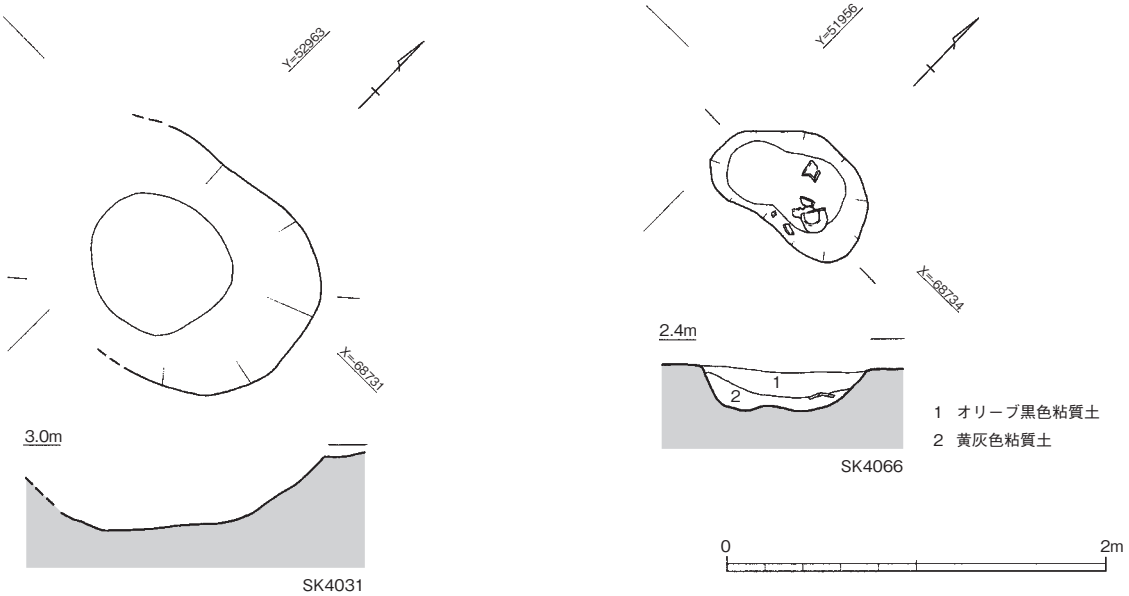
SK4031はＤ区の東,VD3cグリッドに位置する。南西側が壊されている。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径1.2m，短径1.2m，深さ0.4m。５層上面で検出した。埋土から13～15世紀の青磁片などが出土した。

土坑SK4066（第123・124 図　図版65－４　230－５～７）

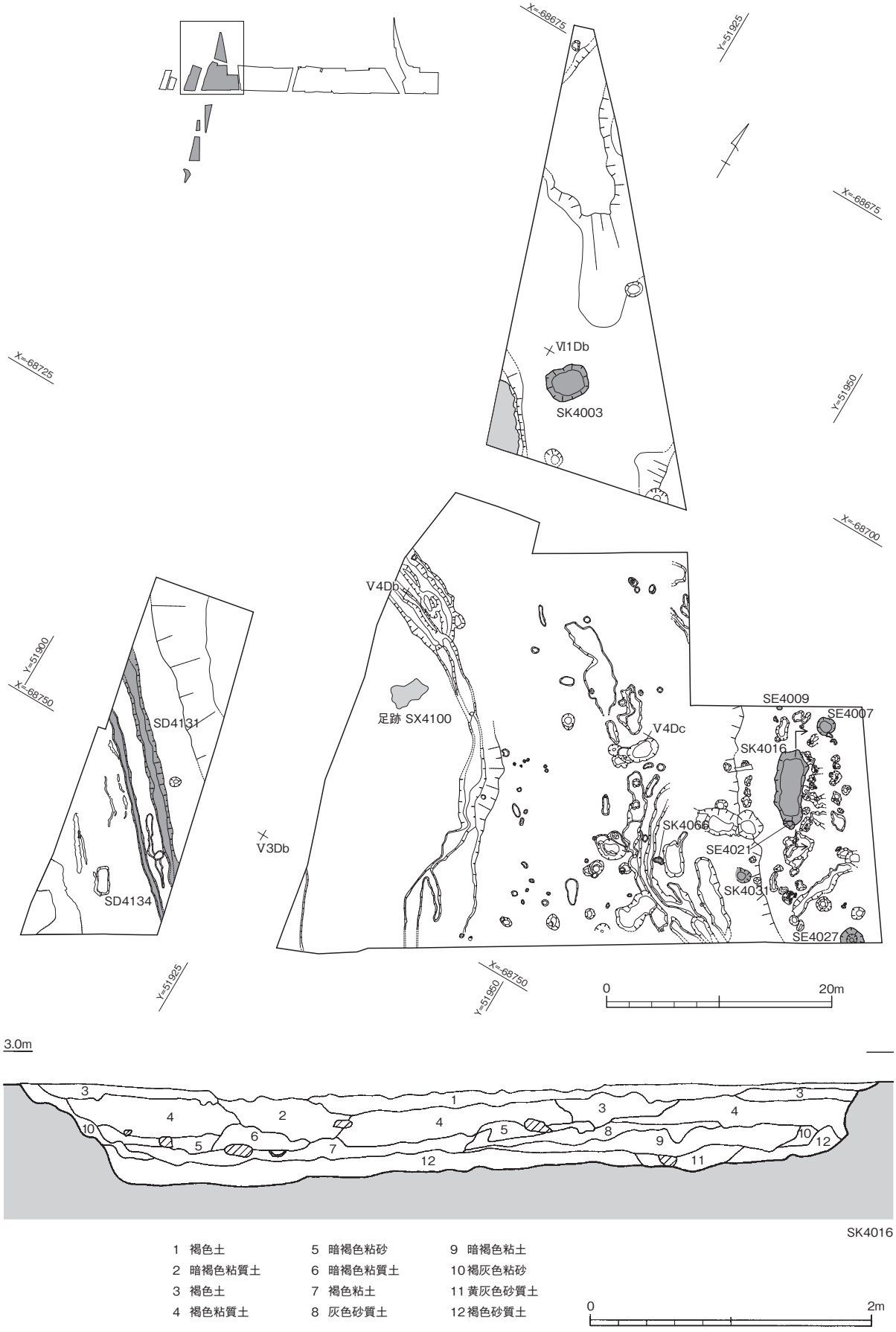
SK4066はＤ区の東,VD3cグリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で，断面形は逆台形状である。２層上面で検出した。長径0.8m，短径0.5m，深さ0.2mである。埋土は２層に分層できた。第２層から漆器椀が出土した。

井戸SE4007（第124・125図）

SE4007はＤ区の東,VD4cグリッドに位置する。５層上面で検出した。遺構下部で曲物を２段組んだ井筒が出土した。曲物は上段が直径40㎝，下段が直径30㎝で，高さは約50㎝を測る。



第123図　中世Ｄ区土坑実測図（1：40）



第124図　中世Ｄ区遺構図（全体図1：500　土坑土層断面図１：４）

井戸SE4009（第124 図　図版66－３）

SE4009はＤ区の東,VD4cグリッドに位置する。５層上面で検出した。遺構内から曲物を３段に組んだ井筒が出土した。曲物は直径35㎝前後のものを用い，高さは約40㎝。

井戸SE4021（第124・125 図　図版66－６）

SE4021はＤ区の東,VD3cグリッドに位置する。５層上面で検出した。遺構下部で曲物を２段組んだ井筒が残存していた。曲物は上段が直径30㎝，下段が直径25㎝で，高さは約30㎝。

井戸SE4027（第124・125図　図版66－５　230－８・９）

SE4027はＤ区の東,VD3dグリッドに位置する。５層上面で検出した。遺構下部で曲物を２段組んだ井筒が残存していた。曲物は上段が直径40㎝，下段が直径35㎝で，高さは約40㎝。

遺物は，13～14世紀の瓦質の捏ね鉢とともに古代の石帯が出土した。

溝SD4131（第124・126図）

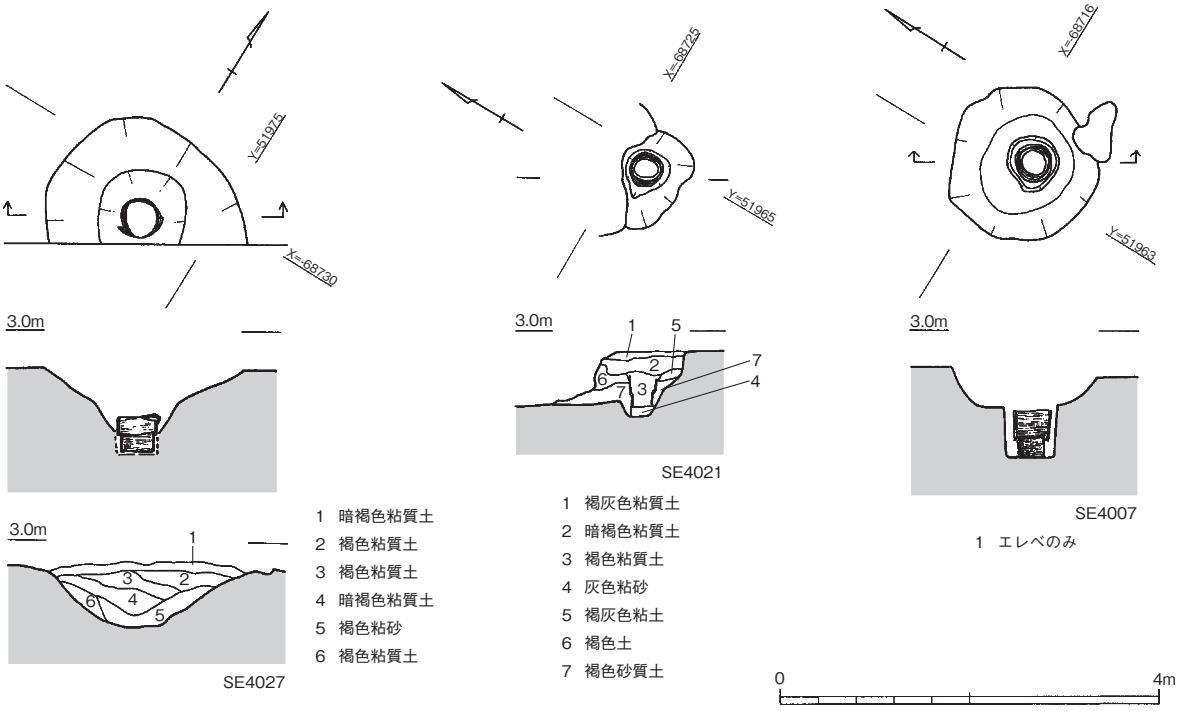
SD4131はＤ区の西,VD2aグリッドからVD3aグリッドに位置する。平行する２条の溝を確認した。そのうちの北側の溝（Ｎ－43°－Ｗ）である。３層上面で検出した。規模は幅1.4m,深さ0.2mである。

溝SD4134（第124・126図）

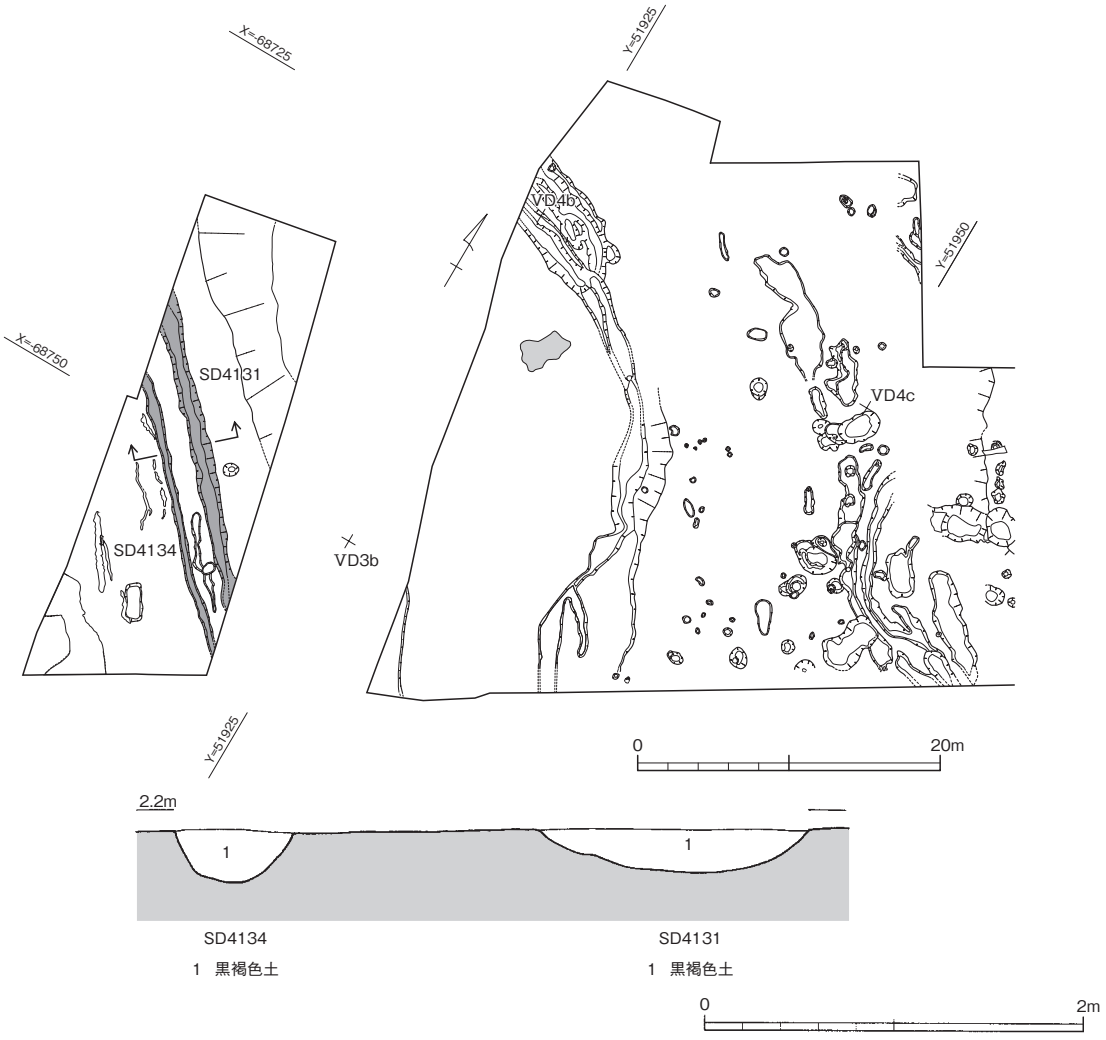
SD4134はＤ区の西,VD2aグリッドからVD3aグリッドに位置する。平行する２条の溝のうち，南側の溝（Ｎ－43°－Ｗ）である。SD4131との間は1.5mを測る。規模は幅0.6m，深さ0.3mである。

足跡SX4100（第124・127図）

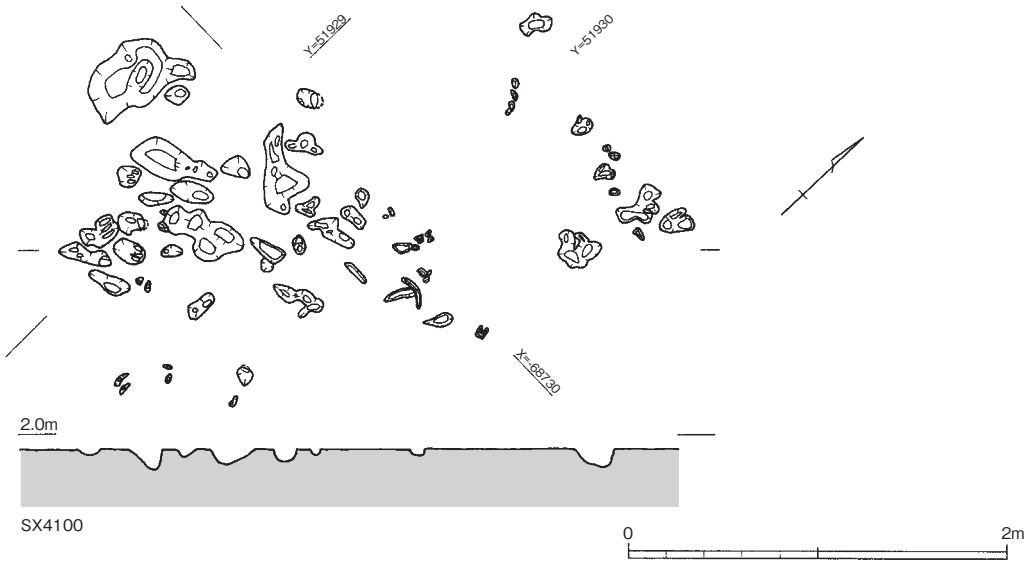
SX4100はＤ区中央の北側,VD3bグリッドに位置する。Ⅰ層上面で検出した。人と牛の足跡が2.5×3.5mの範囲で確認された。足跡内の埋土は暗灰黄色砂である。



第125図　中世Ｄ区井戸実測図（1：80）



第126図　中世Ｄ区溝実測図（平面1：500　土層断面1：40）



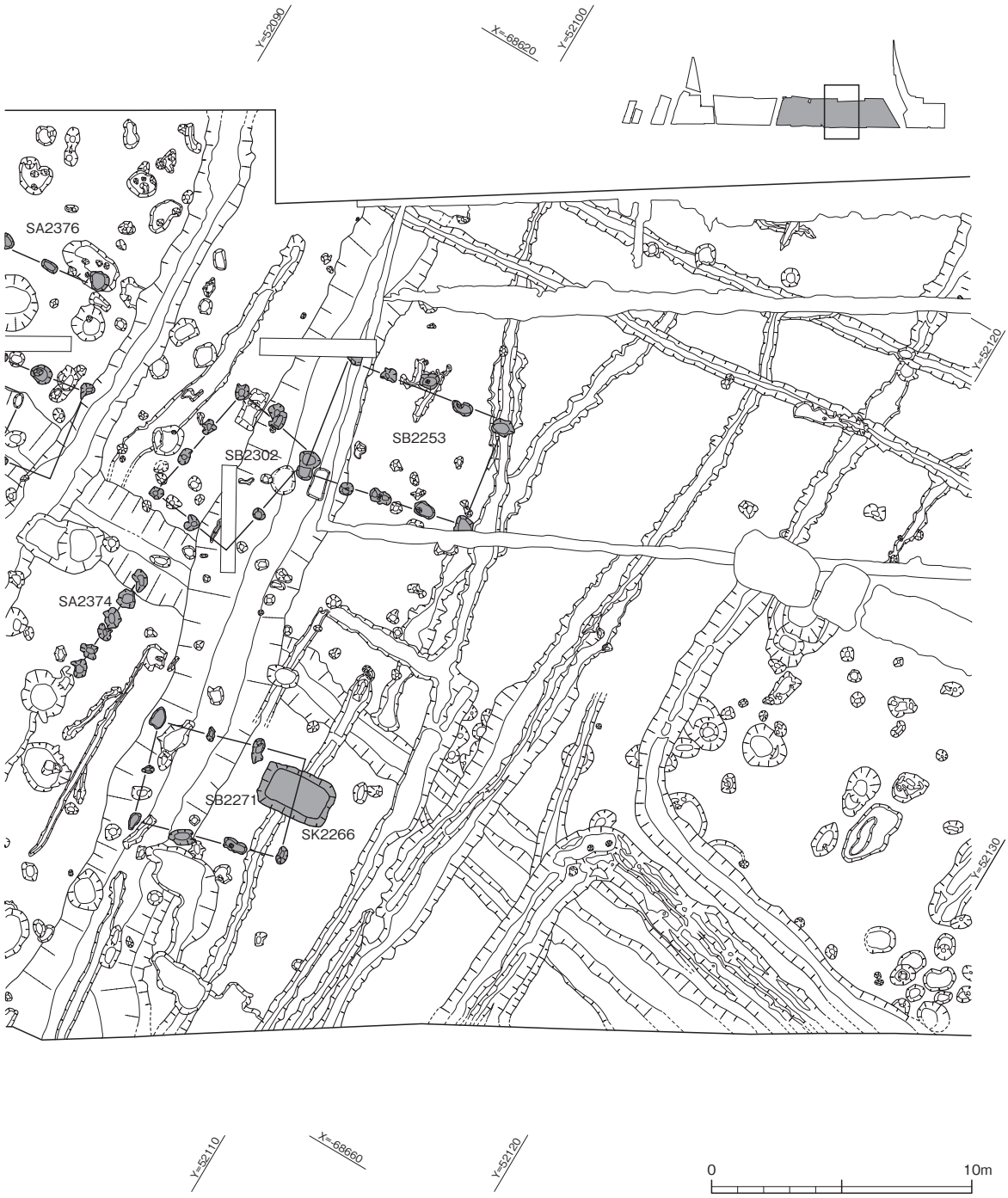
第127図　中世Ｄ区足跡遺構実測図（1：40）

第８節　中世末～近世前半の遺構

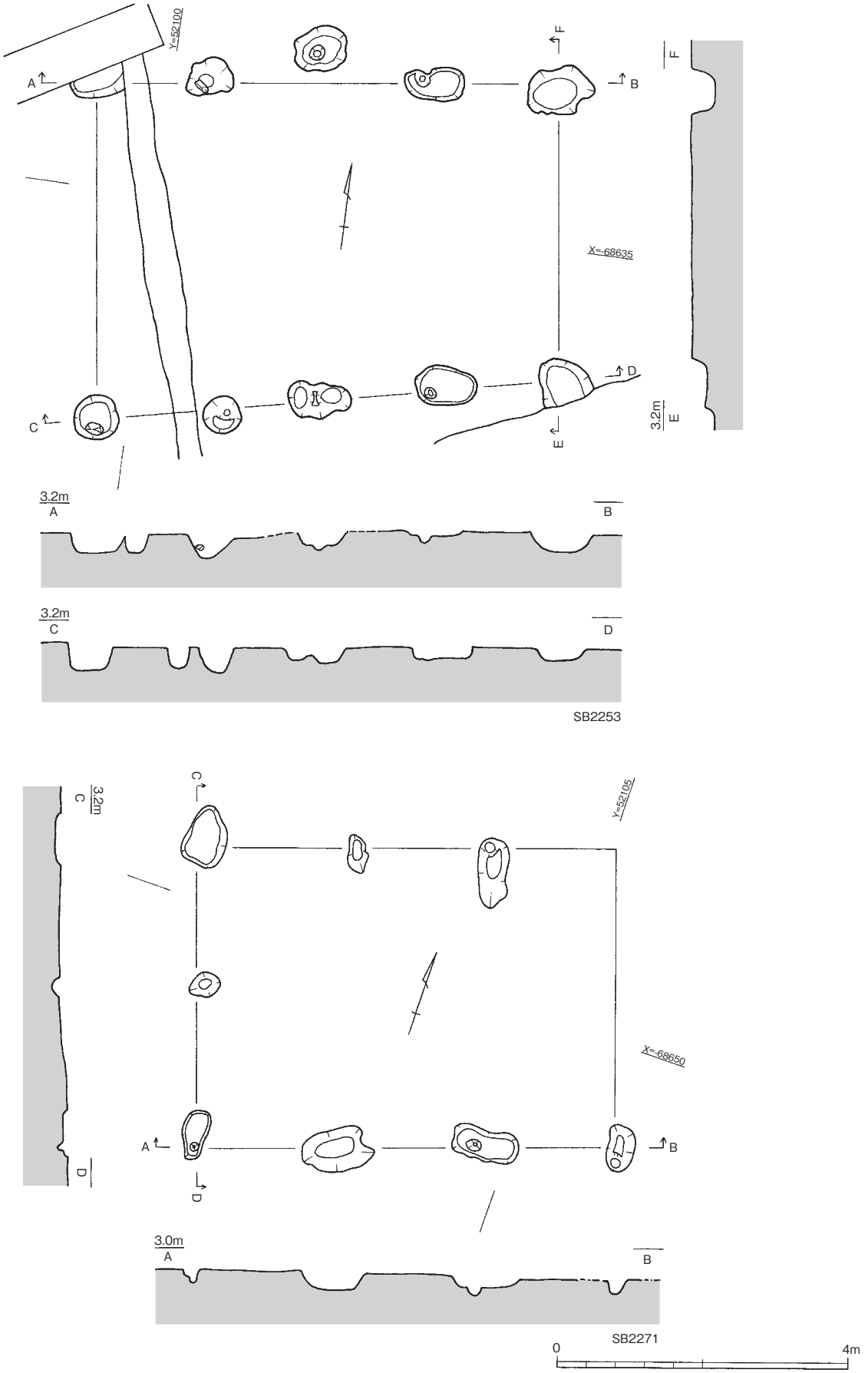
中世末から近世前半の遺構は，Ｂ区とＤ区に分布している。掘立柱建物13棟，柱穴列６基，土坑６基，井戸１基，溝５条，墓１基を確認した。遺構の大半はＢ区の西側に集中し，A・C・E区では遺構がない。

第128図　中世末～近世前半Ｂ区遺構図１（1：250）

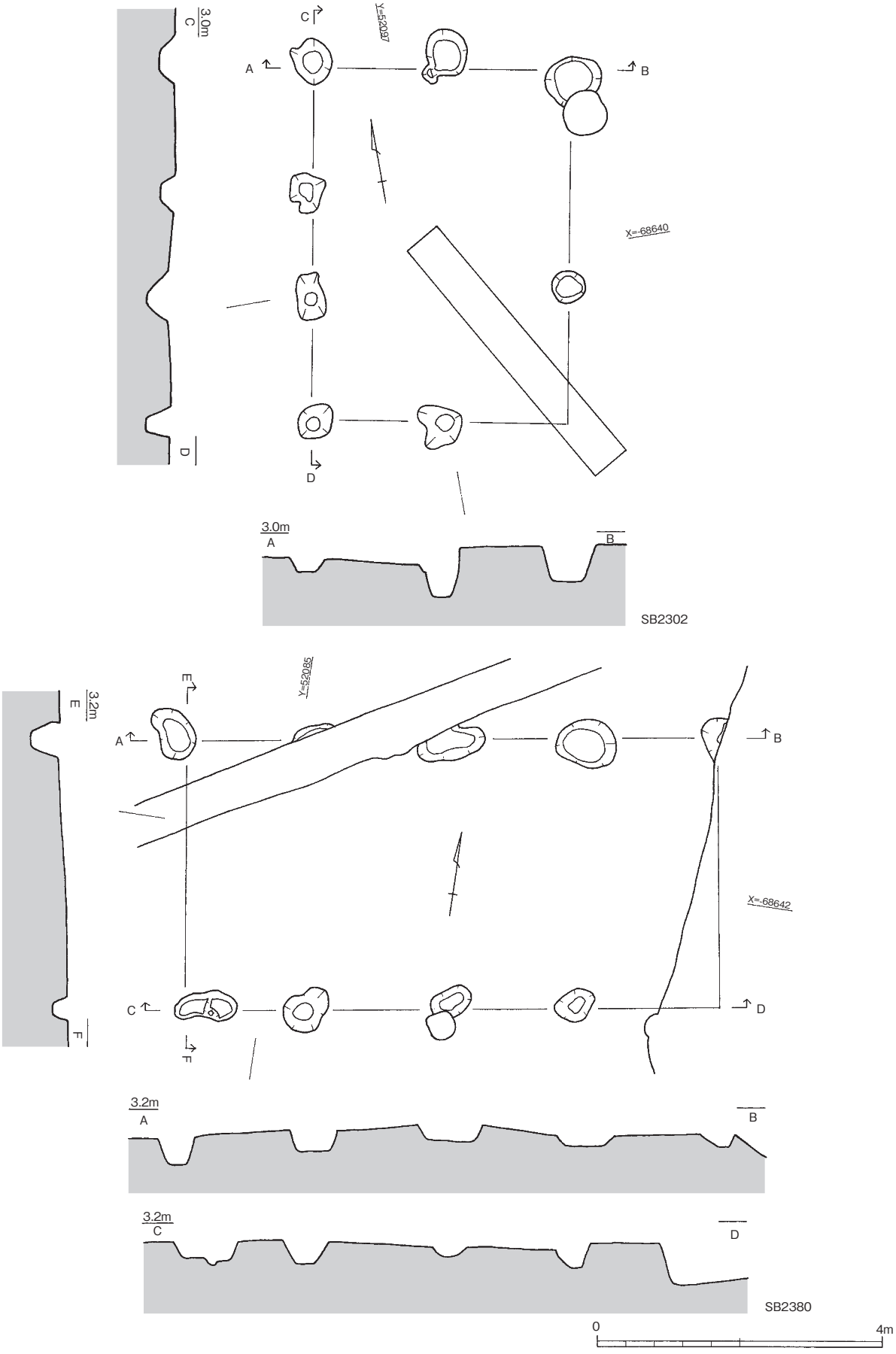
第129図　中世末～近世前半Ｂ区遺構図２（1：250）



第130図　中世末～近世前半Ｂ区遺構図３（1：250）



第131図　中世末～近世前半Ｂ区建物実測図１（1：80）



第132図　中世末～近世前半Ｂ区建物実測図２（1：80）

１．Ｂ区の遺構

Ｂ区では，掘立柱建物13棟，柱穴列６基，土坑２基，溝５条，墓１基を確認した。掘立柱建物はＢ区の中央部と西側に集中する。遺構検出面はほとんどが２層上面（標高2.6～3.0m）で確認した。

建物SB2253（第130・131図）

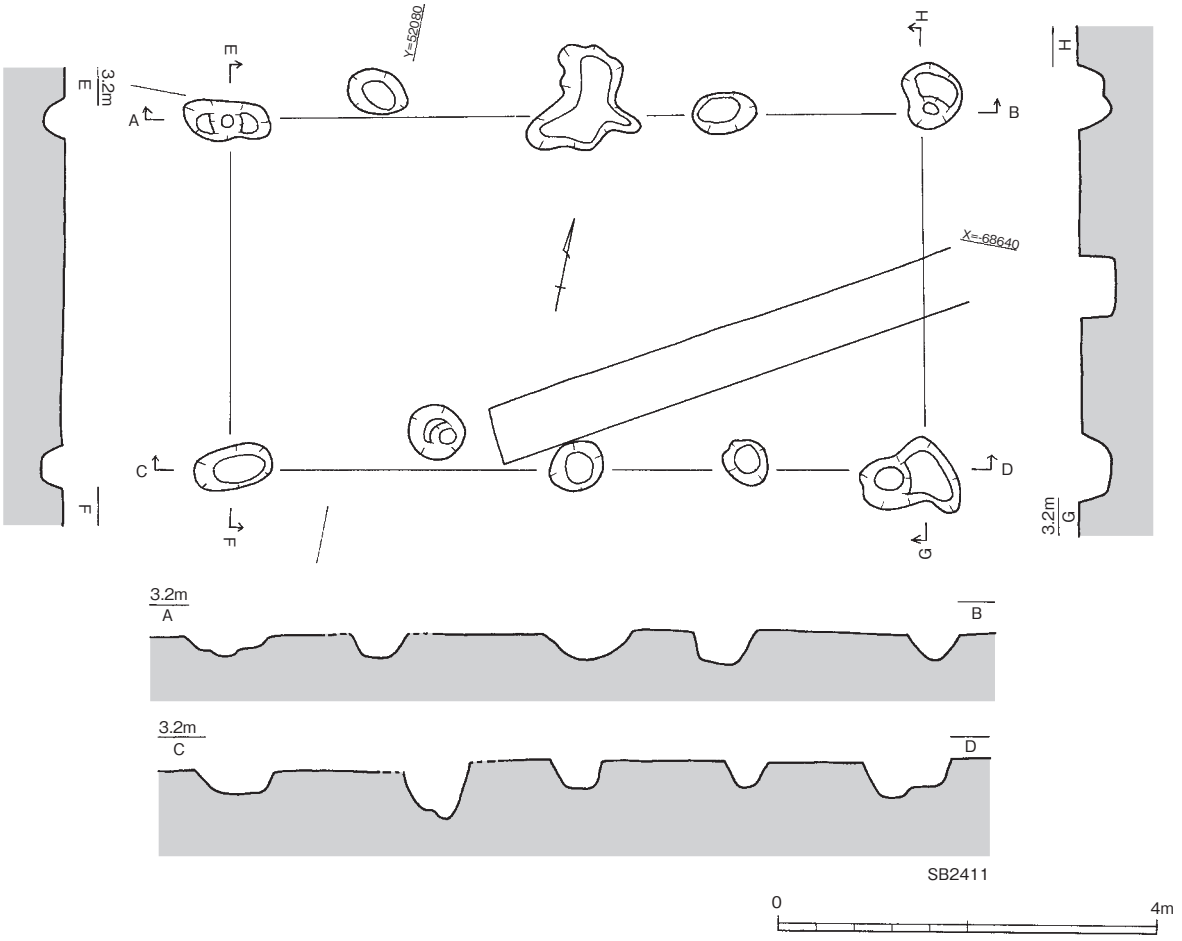
SB2253はＢ区の中央,ⅥF3aグリッドに位置する。１×４間の掘立柱建物で，梁行4.0～4.6m×桁行6.3mで，西側の梁行が長い歪な長方形をなす。桁行の柱間は1.5～1.8m。北面の中央に位置する柱穴が，柱穴列から0.3mほど外側にある。建物の主軸方位はＮ－83°－Ｅである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.5～0.9m，深さ0.2～0.3mである。柱穴底の標高は2.5～2.6m。柱穴内に礫が残存するものがある。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2271（第130・131図　図版43－２）

SB2271はＢ区の中央,ⅥF2aとⅥF3aグリッドに位置する。２×３間の掘立柱建物で，梁行4.1m×桁行5.9mである。東面の中央と北側の柱穴は壊されている。柱間は1.9～2.1m。建物の主軸方位はＮ－71°－Ｅである。柱穴の形は不整な楕円形で，長径0.5～1.0m，深さ0.1～0.3mである。柱穴底の標高は2.5～2.7m。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



第133図　中世末～近世前半Ｂ区建物実測図３（1：80）

建物SB2302（第130・132図）

SB2302はＢ区の中央,ⅦE3dグリッドに位置する。２×３間の掘立柱建物で，梁行3.6m×桁行5.2mである。トレンチにより南東隅の柱穴が壊されている。柱間は1.8m。建物の主軸方位はＮ－10°－Ｅである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.5～0.8m，深さ0.2～0.6mである。柱穴底の標高は2.1～2.5m。北東隅の柱穴がSB2253の柱穴に壊されることから，SB2253より古いものと考えられる。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2380（第129・132図）

SB2380はＢ区の中央,ⅦE3dグリッドに位置する。１×４間の掘立柱建物で，梁行3.8m×桁行7.5mである。北東隅の柱穴が壊され，南東隅の柱穴も確認できない。柱間は1.8～2.0m。建物の主軸方位はＮ－81°－Ｅである。柱穴の形は不整な楕円形で，長径0.5～1.0m，深さ0.2～0.4mである。柱穴底の標高は2.4～2.6m。埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2411（第129・133図）

SB2411はＢ区の中央,ⅦE3dグリッドに位置する。１×４間の掘立柱建物で，梁行3.8m×桁行7.5mである。柱間は1.6～2.2m。梁行の西から２番目の柱穴が柱穴列から0.3m北に位置する。建物の主軸方位はＮ－79°－Ｅである。柱穴の形は不整な楕円形で，長径0.5～1.0m，深さ0.2～0.4mである。柱穴底の標高は2.4～2.6m。本遺構は南東に約５m離れたSB2380と規模・形状が類似し主軸方位も同じである。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2422（第129・134図）

SB2422はＢ区中央の西側,ⅦE3dグリッドに位置する。１×７間の掘立柱建物で，梁行4.2m×桁行13.8mである。柱間は1.8～2.1m。建物の主軸方位はＮ－83°－Ｅである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.3～1.4m，深さ0.2～0.4mである。柱穴底の標高は2.4～2.6m。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2603（第128・135図　図版44－２）

SB2603はＢ区の西,ⅦE2cグリッドに位置する。２×２間の掘立柱建物で，梁行4.5m×桁行5.4mである。５層上面で検出した。柱間は2.0～2.2m。桁行の南側の柱間が約3.0mと長い。建物の主軸方位はＮ－４°－Ｗである。柱穴の形は楕円形か不整な楕円形で，長径0.9～1.4m，深さ0.1～0.4mである。柱穴底の標高は2.2～2.5m。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2642（第128・136図）

SB2642はＢ区の西,ⅦE2cグリッドに位置する。１×２間の掘立柱建物で，梁行2.8m×桁行4.4mである。５層上面で検出した。柱間は2.2m。建物の主軸方位はＮ－81°－Ｅである。柱穴の形は円形か楕円形で，長径0.6～0.9m，深さ0.1～0.3mである。柱穴底の標高は2.5mを測る。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2652（第128・136図　図版44－１）

SB2652はＢ区の西,ⅦE2cグリッドに位置する。１×１間の掘立柱建物で，梁行4.0m×桁行4.0mで正方形である。５層上面で検出した。建物の方位は南北を主軸とした場合Ｎ－３°－Ｗである。2.4m東側のSB2603とほぼ同軸である。柱穴の形は楕円形で，長径0.9～1.2m，深さ0.2～0.3mである。柱穴底の標高は2.4～2.5m。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2730（第128・137図　図版46－１）

SB2730はＢ区西の北側,ⅦE2bグリッドに位置する。１×４間の掘立柱建物で，梁行4.7m×桁行7.5mである。北東隅の柱穴は確認できない。柱間は1.8～2.2m。建物の主軸方位はＮ－82°－Ｅである。柱穴の形は楕円形か不整な楕円形で，長径0.7～1.6m，深さ0.4～0.6mである。柱穴底の標高は2.3～2.5m。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2732（第128・138図　図版46－１）

SB2732はＢ区の西,ⅦE2bグリッドとⅦE2cグリッドに位置する。１×３間の掘立柱建物で，梁行2.5m×桁行5.7mである。中世のSB2734の柱穴を壊している。柱間は1.8～2.1m。建物の主軸方位はＮ－80°－Ｅである。柱穴の形は楕円形で，長径0.8～1.3m，深さ0.4～0.6mである。柱穴底の標高は2.4～2.6m。底面の落ち込み形状から，直径15cmほどの柱が推測される。SB2730から約３m南に位置し，主軸もほぼ同方位であることから，これらの建物は同時期に建っていた可能性が考えられる。

埋土から，土器破片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2801（第128・138図　図版46－１）

SB2801はＢ区西の南側,ⅦE1cグリッドに位置する。１×２間の掘立柱建物で，梁行2.4m×桁行3.2mである。柱間は1.2～1.8m。南面の柱穴列中央に位置する柱穴がやや西に寄る。建物の主軸方位はＮ－84°－Ｅである。柱穴の形は楕円形で，長径0.5～0.8m，深さ0.3～0.5mである。柱穴底の標高は2.5～2.7m。埋土のうち第１・２層は柱抜き取り穴埋土である。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2816（第128・139図　図版46－１）

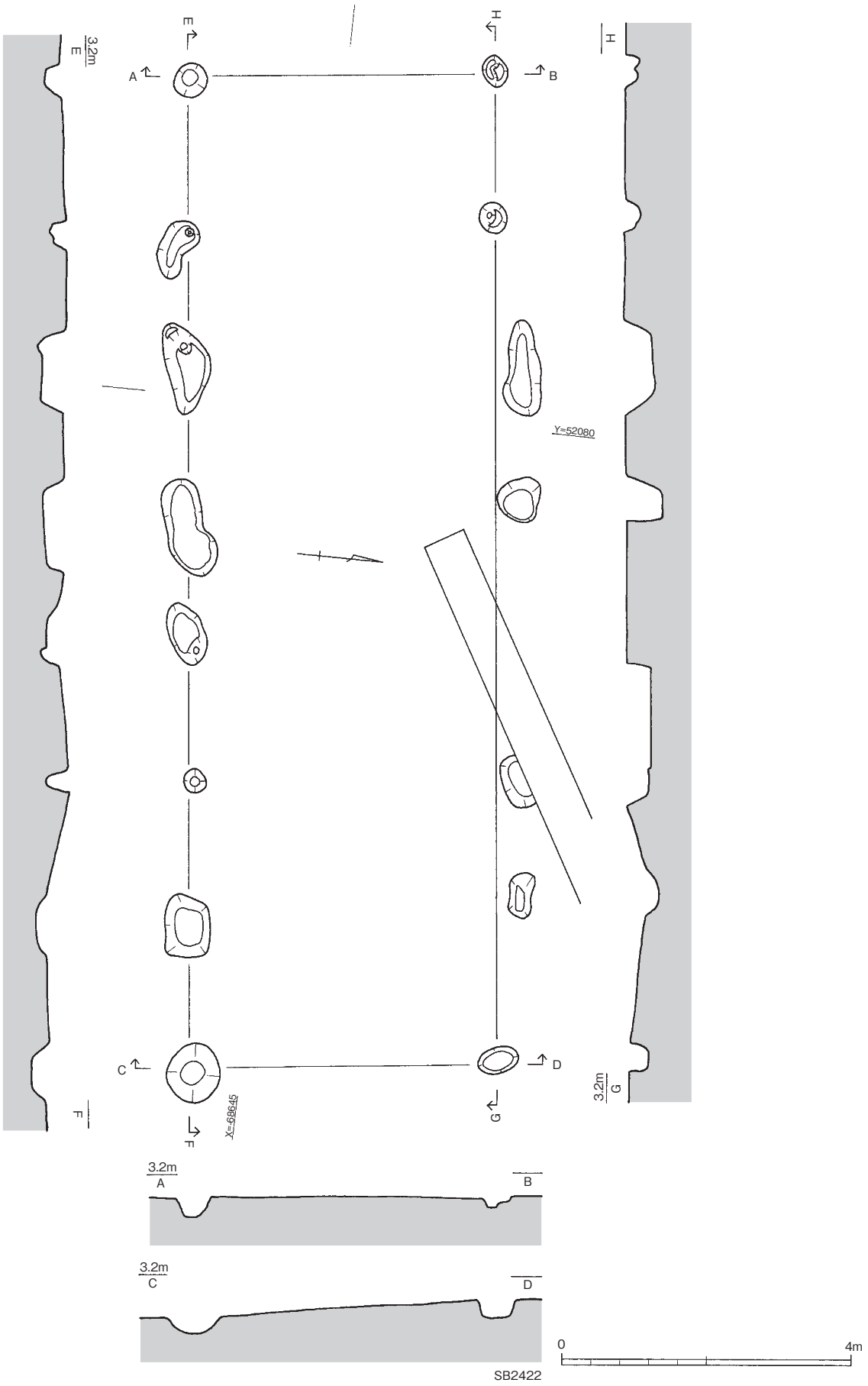
SB2816はＢ区西の南側,ⅦE1bグリッドに位置する。１×３間の掘立柱建物で，梁行4.0m×桁行6.0mである。柱間は2.0m。建物の主軸方位はＮ－84°－Ｅである。柱穴の形は楕円形で，長径0.6～1.2m，深さ0.4～0.6mである。柱穴底の標高は2.4～2.6m。SB2801と主軸方位が同じである。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

柱穴列SA2374（第129・140図）

SA2374はＢ区の中央,ⅦE3dグリッドに位置する。５間の柱穴列で，柱間0.9m，全長4.3mである。主軸方位はＮ－４°－Ｅである。柱穴の形は不整な円形で，直径0.5～0.8m，深さ0.1～0.3mである。柱穴底の標高は2.3～2.5m。塀または柵跡と思われる。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



第134図　中世末～近世前半Ｂ区建物実測図４（1：80）

柱穴列SA2376（第129・140図）

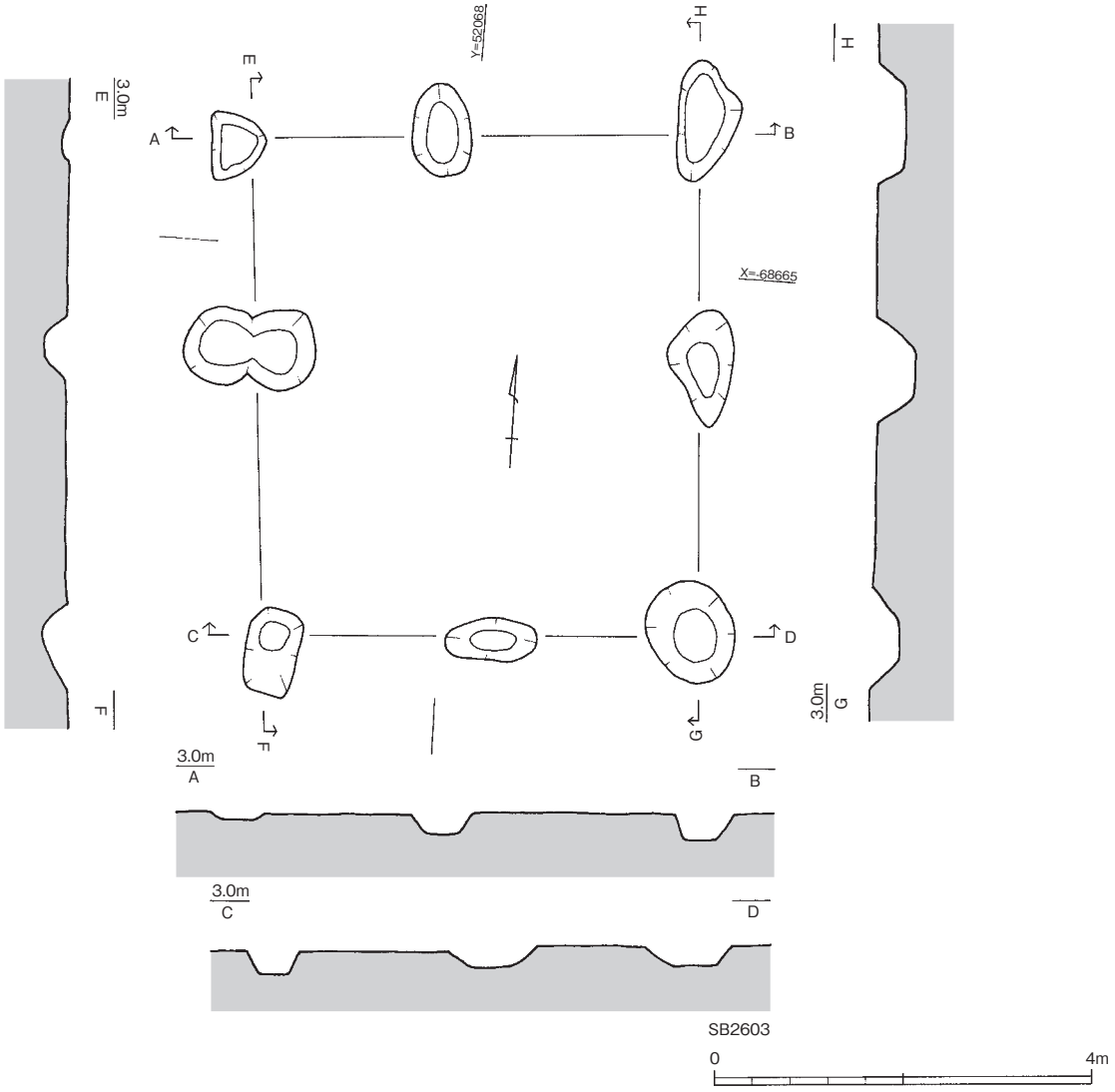
SA2376はＢ区中央の北側,ⅥE3dグリッドに位置する。３間の柱穴列で，柱間1.8～2.0m，全長6.2mである。主軸方位はＮ－82°－Ｅで，約４ｍ南のSB2380と平行する。柱穴の形は不整な楕円形で，長径0.7～0.9m，短径0.4～0.7m，深さ0.2～0.3mである。柱穴底の標高は2.5～2.6m。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

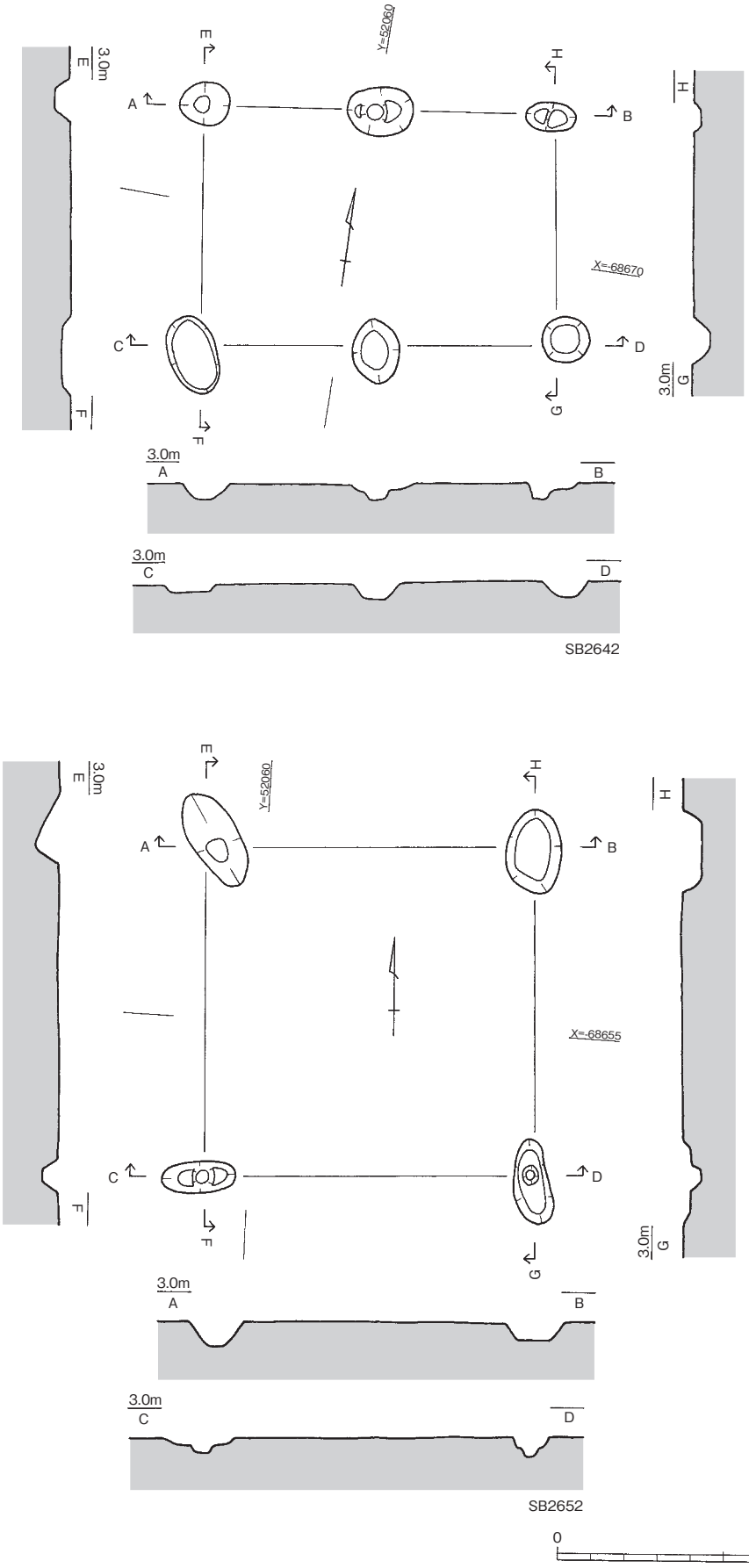
柱穴列SA2421（第129・140図）

SA2421はＢ区の中央,ⅥE3dグリッドに位置する。７間の柱穴列で，柱間1.6～1.9m，全長12.5mである。主軸方位はＮ－88°－Ｅで，南に位置するSA2619とほぼ同じである。柱穴の形は円形か不整な楕円形で，長径0.4～1.2m，短径0.4～0.6m，深さ0.2～0.5mである。柱穴底の標高は2.4～2.7m。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



第135図　中世末～近世前半Ｂ区建物実測図５（1：80）



第136図　中世末～近世前半Ｂ区建物実測図６（1：80）

柱穴列SA2619（第129・141図）

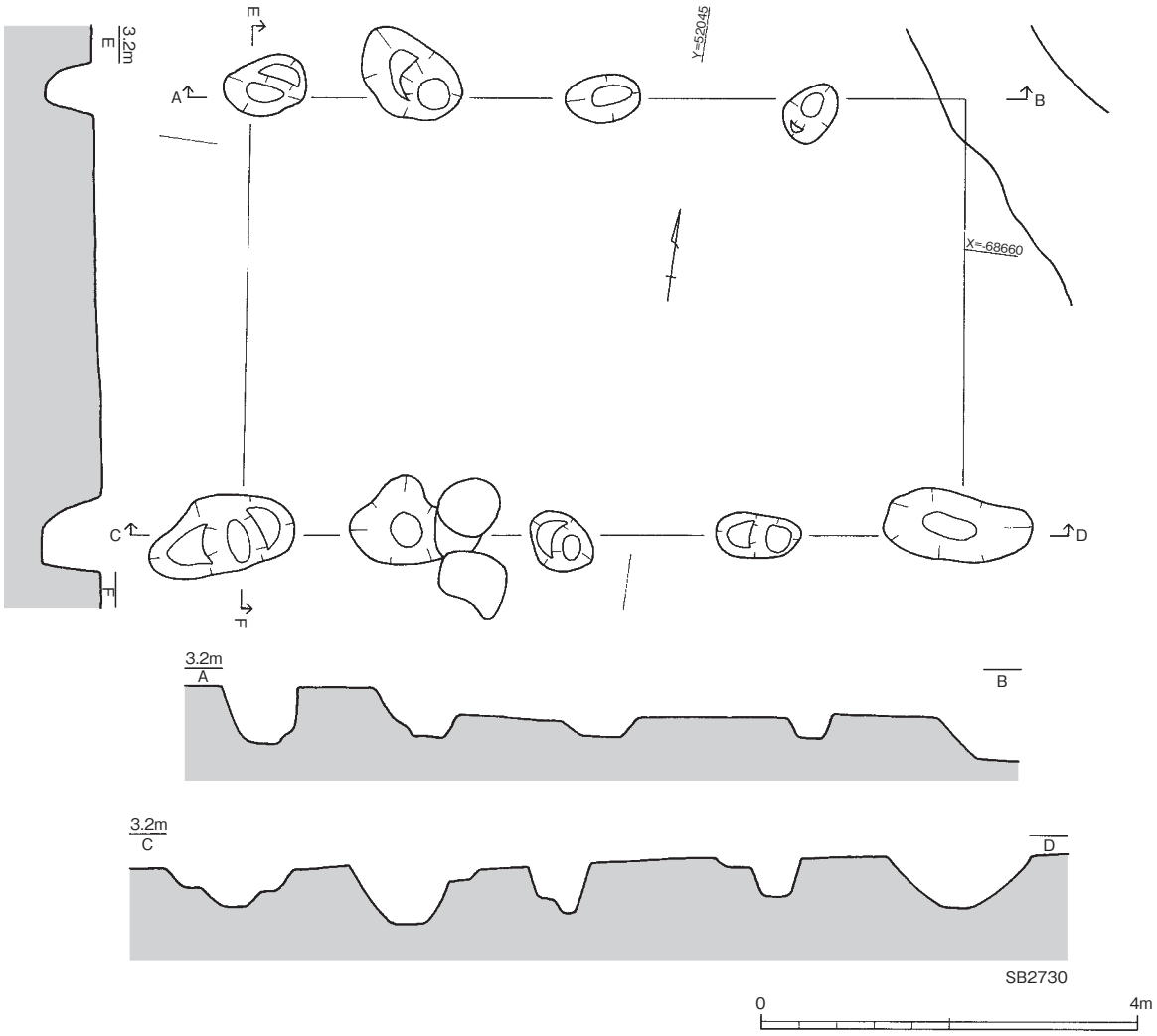
SA2619はＢ区中央の南側,Ⅵ E2dグリッドに位置する。５間の柱穴列で，柱間1.6m，全長8.0mである。主軸方位はＮ－89°－Ｅで，約12m北のSA2421と平行する。柱穴の形は不整な楕円形で，長径0.6～1.1m，短径0.4～0.7m，深さ0.2～0.3mである。柱穴底の標高は2.3～2.4m。東端の柱穴内に直径15cmの柱根が長さ20㎝ほど残存していた。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

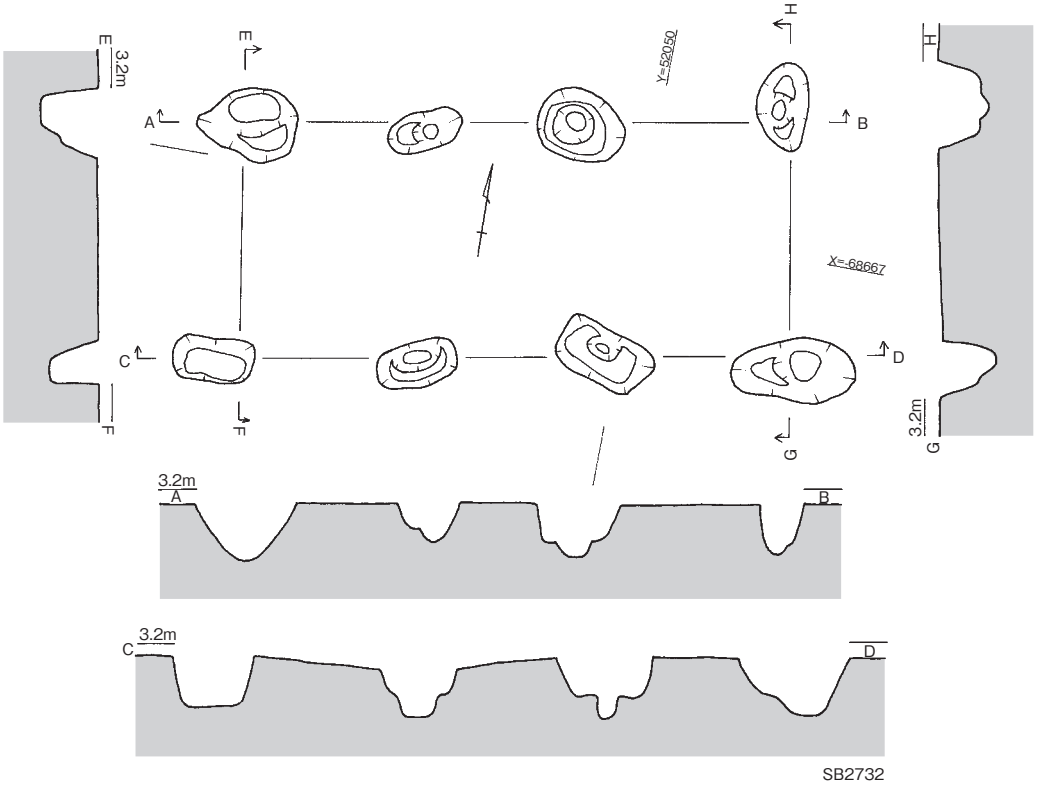
柱穴列SA2663（第128・141図）

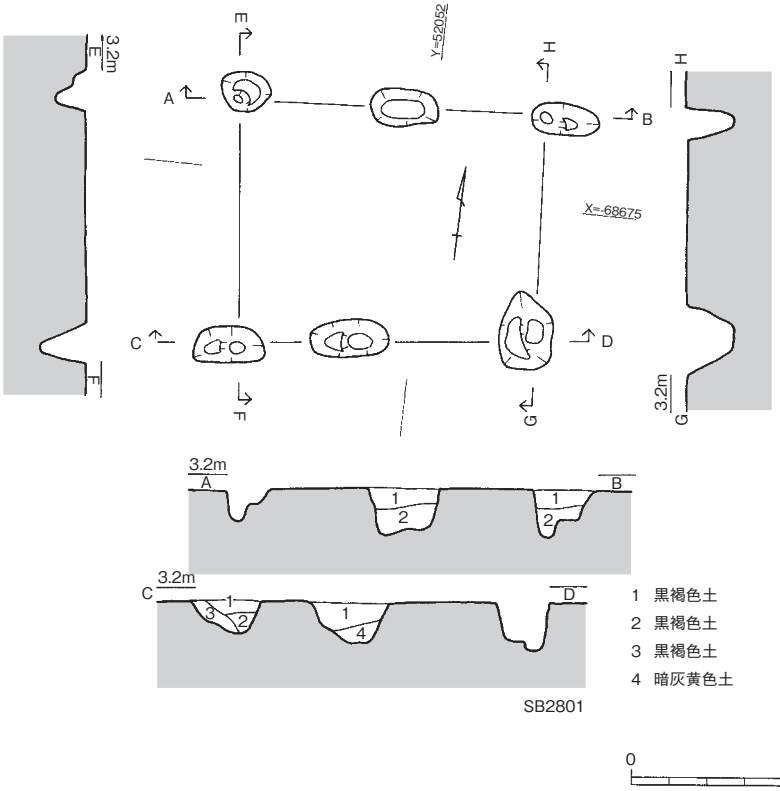
SA2663はＢ区の西,Ⅵ E2cグリッドに位置する。２間の柱穴列で，柱間1.8m，全長3.6mである。主軸方位はＮ－３°－Ｗである。SB2652の西面から0.8m西側にあり，主軸を同じくする。柱穴の形は不整な楕円形で，長径0.5～1.2m，短径0.2～0.4m，深さ0.3～0.4mである。柱穴底の標高は2.4～2.5m。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



第137図　中世末～近世前半Ｂ区建物実測図７（1：80）





第138図　中世末～近世前半Ｂ区建物実測図８（1：80）

柱穴列SA2792（第128・141図　図版46－１）

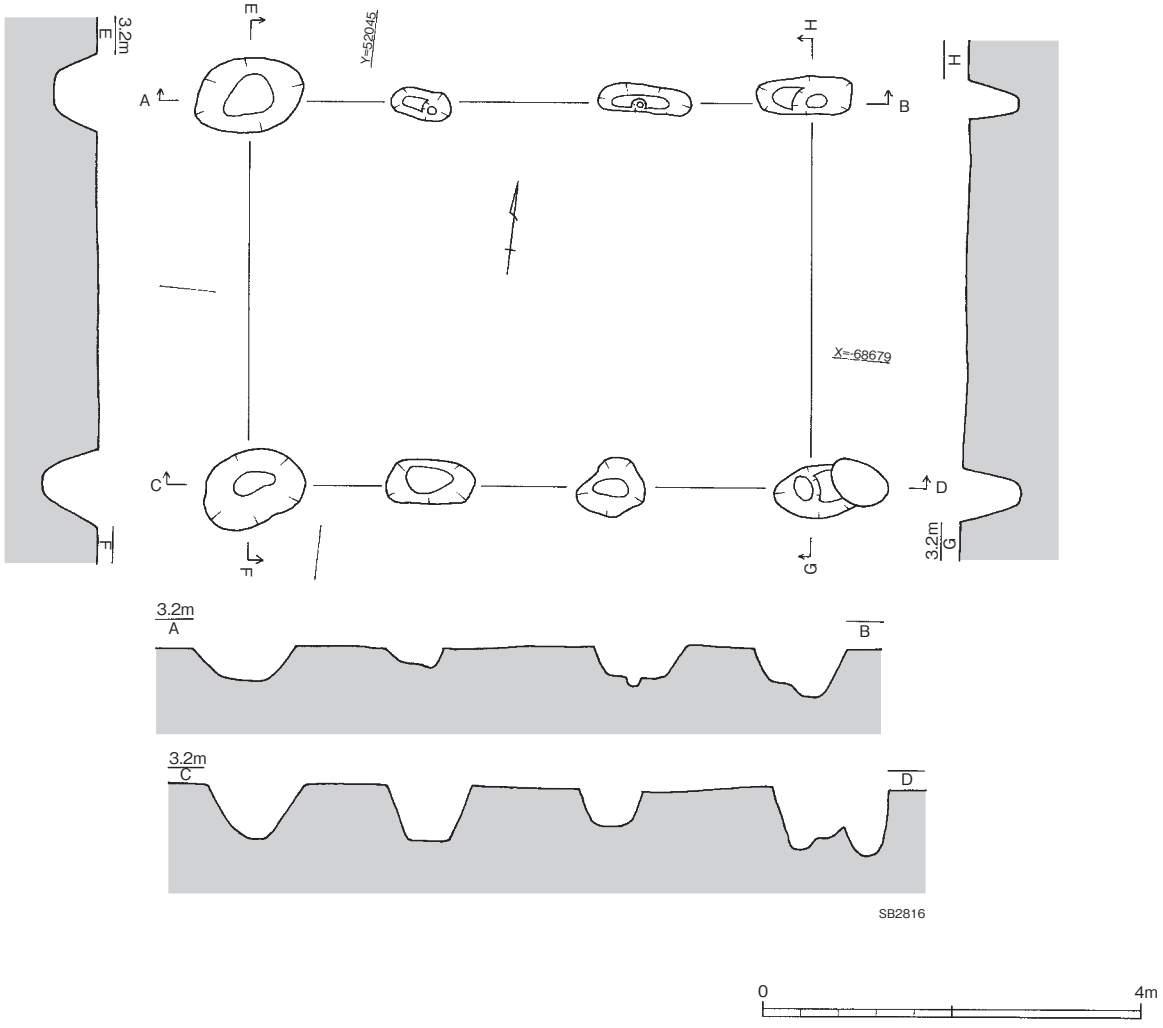
SA2792はＢ区の西,ⅦE2cグリッドに位置する。２間の柱穴列で，柱間1.7m，全長3.4mである。SB2732の南面から5.5m南で主軸を同じくして平行する。主軸方位はＮ－79°－Ｅである。柱穴の形は楕円形で，長径0.5～0.8m，短径0.3～0.4m，深さ0.1～0.5mである。柱穴底の標高は東端の柱穴が2.9m，他の柱穴は2.5～2.7m。東端の柱穴の底面で礎盤と思われる直径20㎝ほどの扁平な円礫が確認された。SB2732・SB2730と主軸を同じくすることから，これらと同時期の遺構と考えられる。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

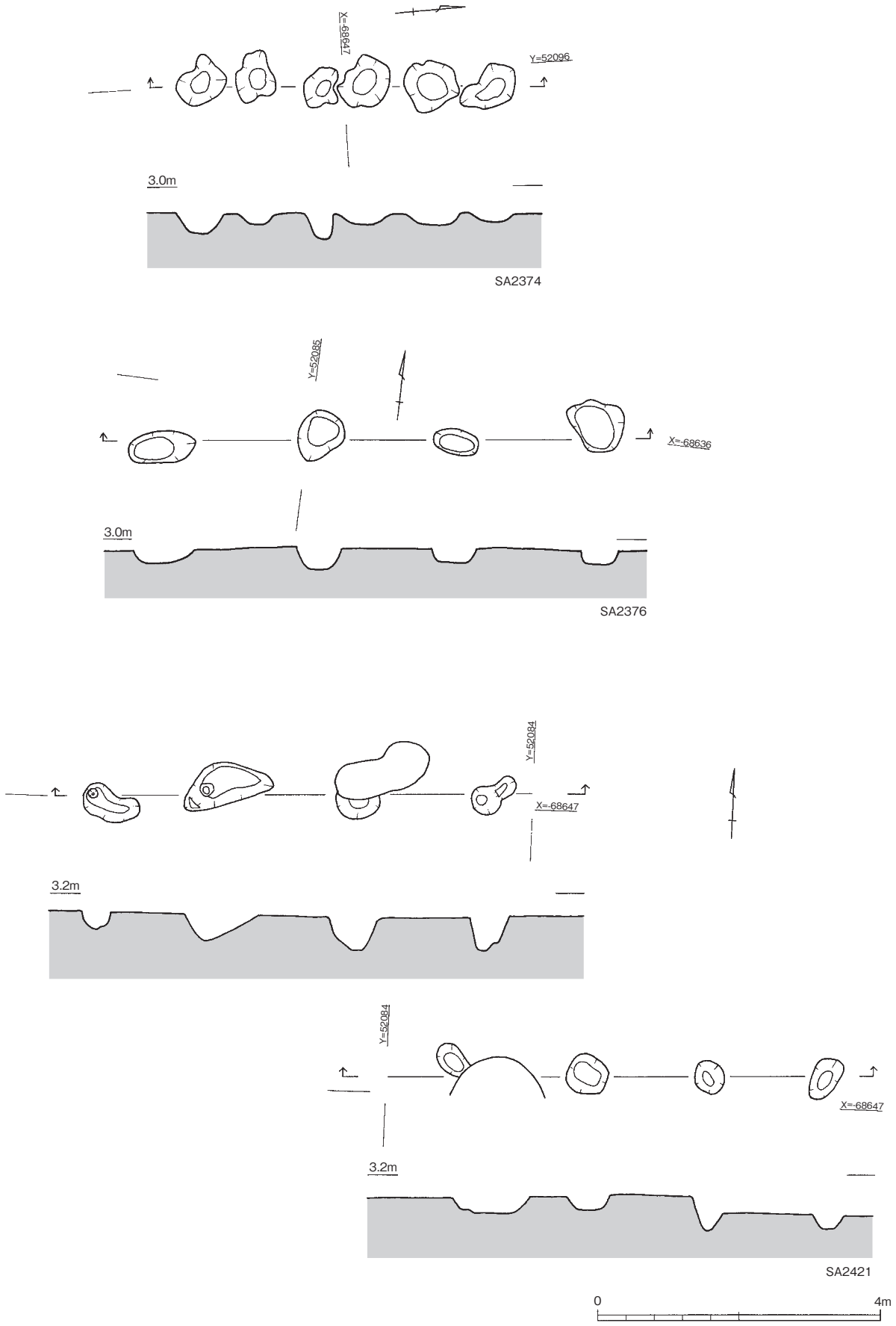
土坑SK2266（第130・142図　231－１・２）

SK2266はＢ区の中央,ⅦF3aグリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で断面形は逆台形状をなす。長径2.9m，短径1.8m，深さ0.6m。埋土は６層に分層できた。第６層は棒状・板状の木片を含む。SB2271の柱穴を壊していることから，SB2271より新しいと考えられる。

埋土からは，８世紀の須恵器や漆器椀などが出土した。



第139図　中世末～近世前半Ｂ区建物実測図９（1：80）



第140図　中世末～近世前半Ｂ区柱穴列実測図１（1：80）

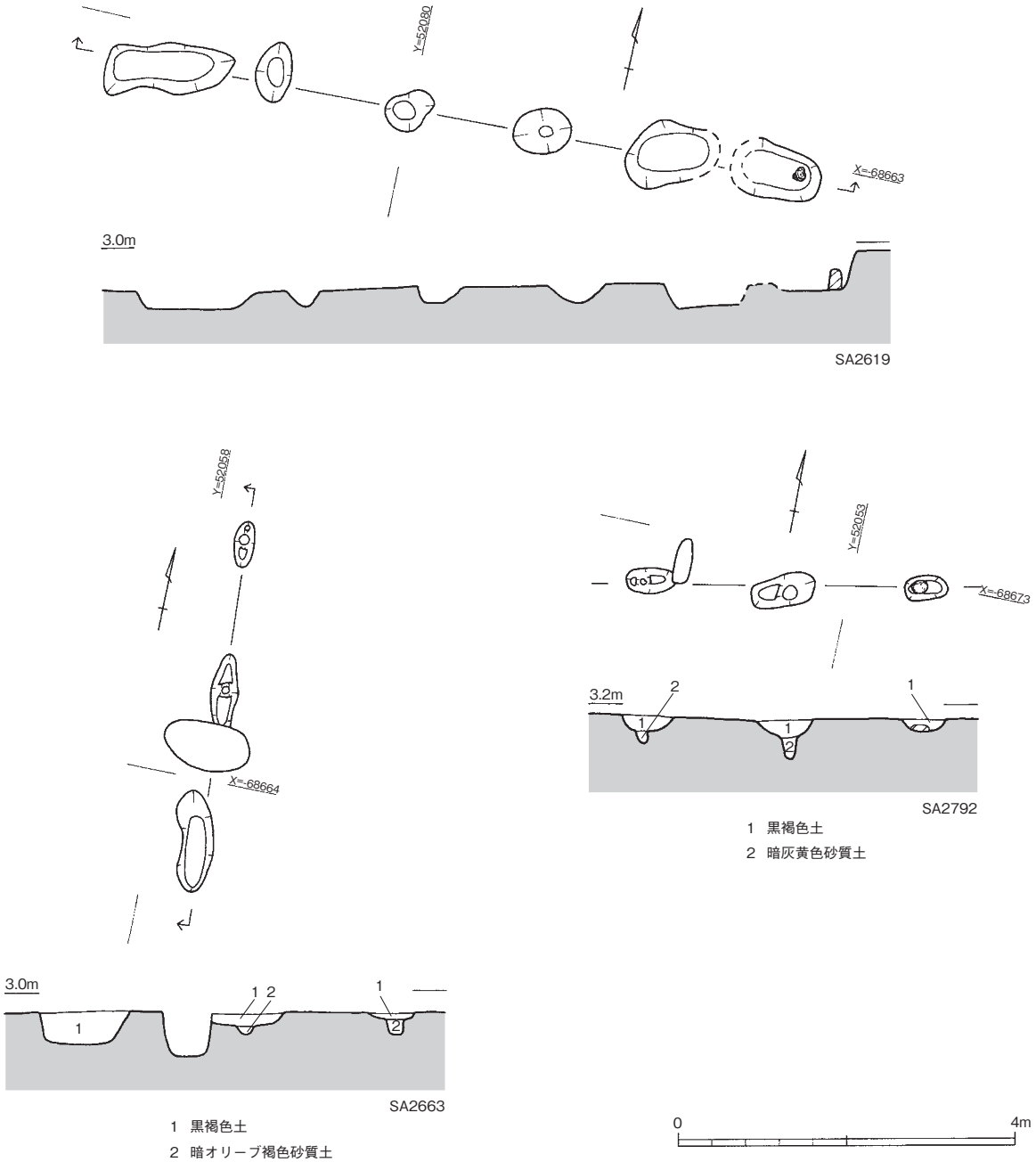
土坑SK2822（第128・142図　231－３）

SK2822はＢ区西の南側,ⅦE1bグリッドに位置する。南東側が壊されている。平面形は円形で，断面形は逆台形状をなす。直径0.7m，深さ0.35mである。底面上から16世紀前半の土師質土器が出土した。

溝SD2625（第128・143図　231－４・５）

SD2625はＢ区西の南側,ⅦE1cグリッドに位置する東西溝（Ｎ－84°－Ｅ）である。遺構の一部が壊され，東側は調査区外へ延びる。確認できた規模は長さ７ｍ，幅2.6～2.8m，深さ0.5m。溝の西端部は楕円形の土坑状に落ち込む。底面の標高は2.5mを測るが，土坑状の西端部は2.3mと深くなる。

埋土から，18世紀の土師質の皿や朝鮮王朝陶器の皿などが出土した。



第141図　中世末～近世前半Ｂ区柱穴列実測図２（1：80）

溝SD2686（第128・143図　図版36－１・２　231－６～９）

SD2686はＢ区西の北側,ⅥE2bグリッドからⅥE2cグリッドに位置する東西溝（Ｎ－83°－Ｅ）である。５層上面で検出した。西側の大部分と東側も壊されている。確認できた規模は長さ23m，幅0.3～0.5m，深さ0.2～0.3m。断面形は逆台形状をなす。底面の標高は東側が2.4m，西側が2.5mを測り，東に向かってやや下る。SD2687を壊して東側が重複することから，SD2687の掘り直しの可能性がある。埋土は２層に分層できた。第２層から下駄が４点出土した。

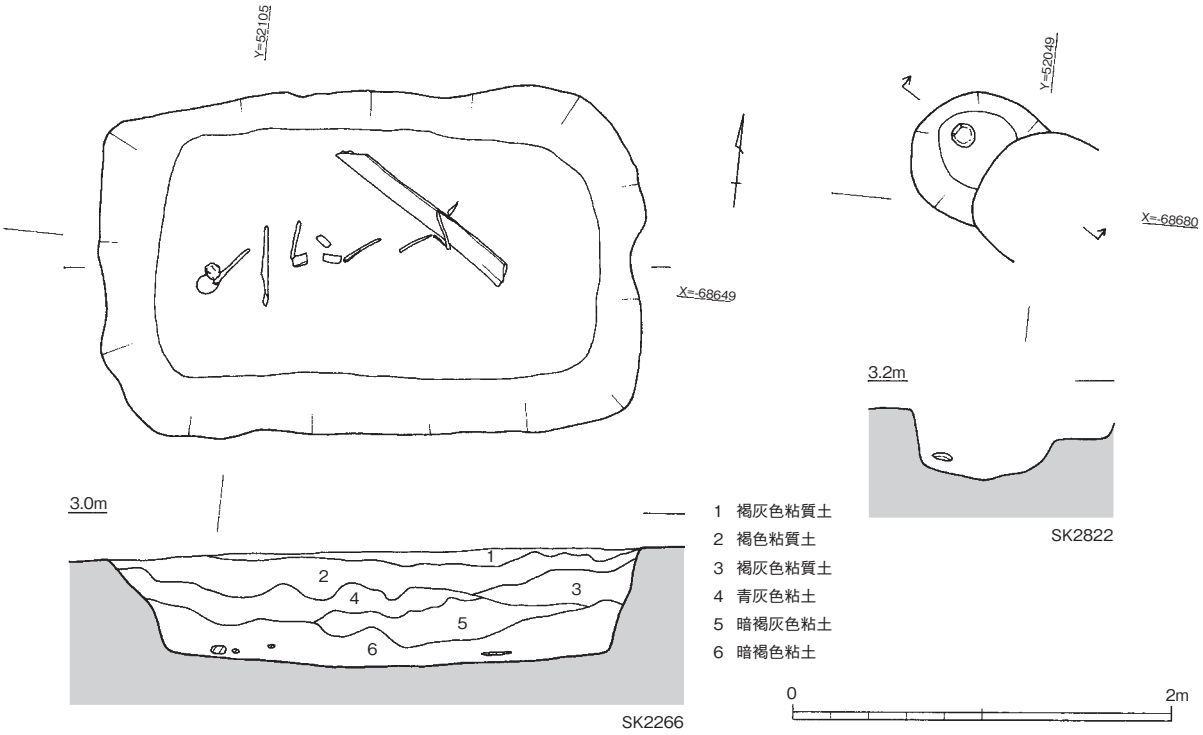
溝SD2687（第128・143図）

SD2687はＢ区西の北側,グリッドからⅥE2cグリッドに位置する東西溝（Ｎ－84°－Ｅ）である。５層上面で検出した。直線的に延びるが，東側がSD2686に壊される。確認できた規模は長さ10m，幅0.3～0.6m，深さ0.2m。断面形は逆台形状をなす。底面の標高は2.5m。

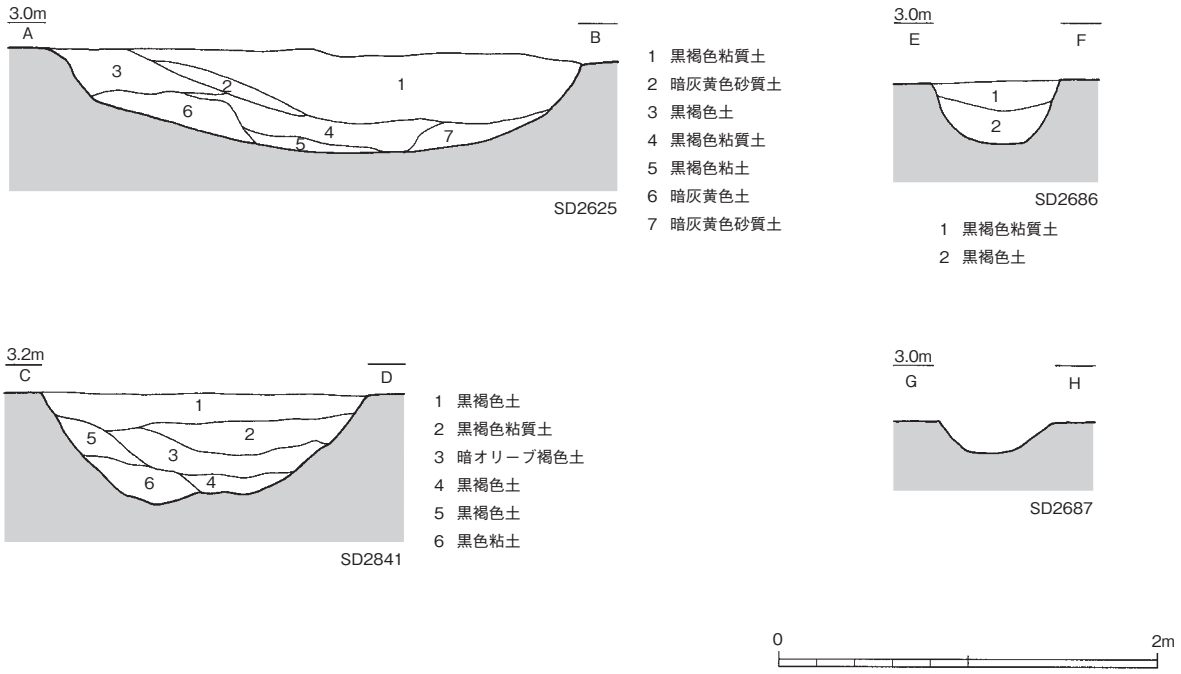
埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

溝SD2752（第128図　232－１・２）

SD2752はＢ区西の北壁際,ⅥE2bグリッドに位置する南北溝（Ｎ－16°－Ｗ）である。５層上面で検出した。南側が壊されている。確認できた規模は長さ２m，幅１m，深さ0.2m。断面形は逆台形状をなす。底面の標高は2.5m。埋土から，17世紀の白磁や陶器などが出土した。



第142図　中世末～近世前半Ｂ区土坑実測図（1：40）



第143図　中世末～近世前半Ｂ区溝状遺構実測図（平面1：500　土層断面1：40）

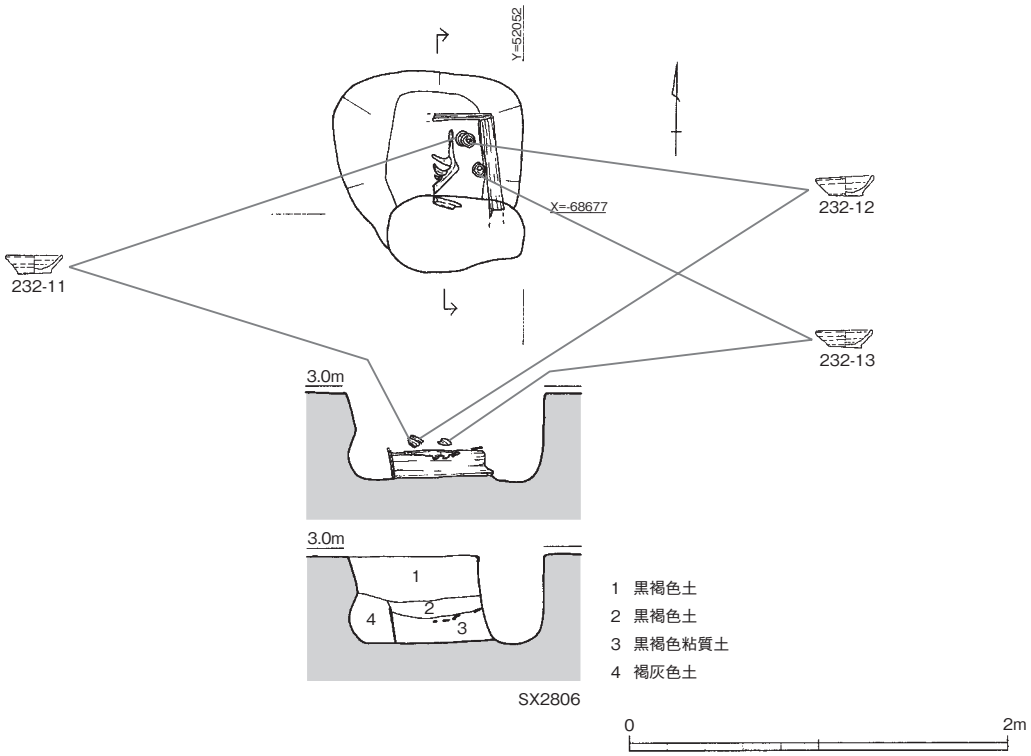
溝SD2841（第128・143図　図版36－３・４　232－３～９）

SD2841はＢ区西の南側,ⅦE1bグリッドからⅦE1cグリッドに位置する東西溝（Ｎ－84°－Ｅ）である。西側は調査区外へ延びる。確認できた規模は長さ12m，幅1.7m，深さ0.5m。断面形は逆台形状をなす。遺構の東端部が直径３mほどの土坑状に落ち込む。底面の標高は2.5mであるが，土坑状の東端部は2.2mである。前述のSD2625と同軸で，SD2625と本遺構の間は約8.5mを測る。形状が類似し，時期も同じことから，これらの溝は同時期に存在していたものと考えられる。なお，西に隣接するＣ区では，本遺構の延長部分が確認されないため，未調査区間で方向を変えている可能性がある。

遺物は，12世紀から17世紀の白磁片や備前焼の壺，肥前系陶器，天目茶碗などが出土した。

墓SX2806（第128・144図　図版28－３・４　232－10～13）

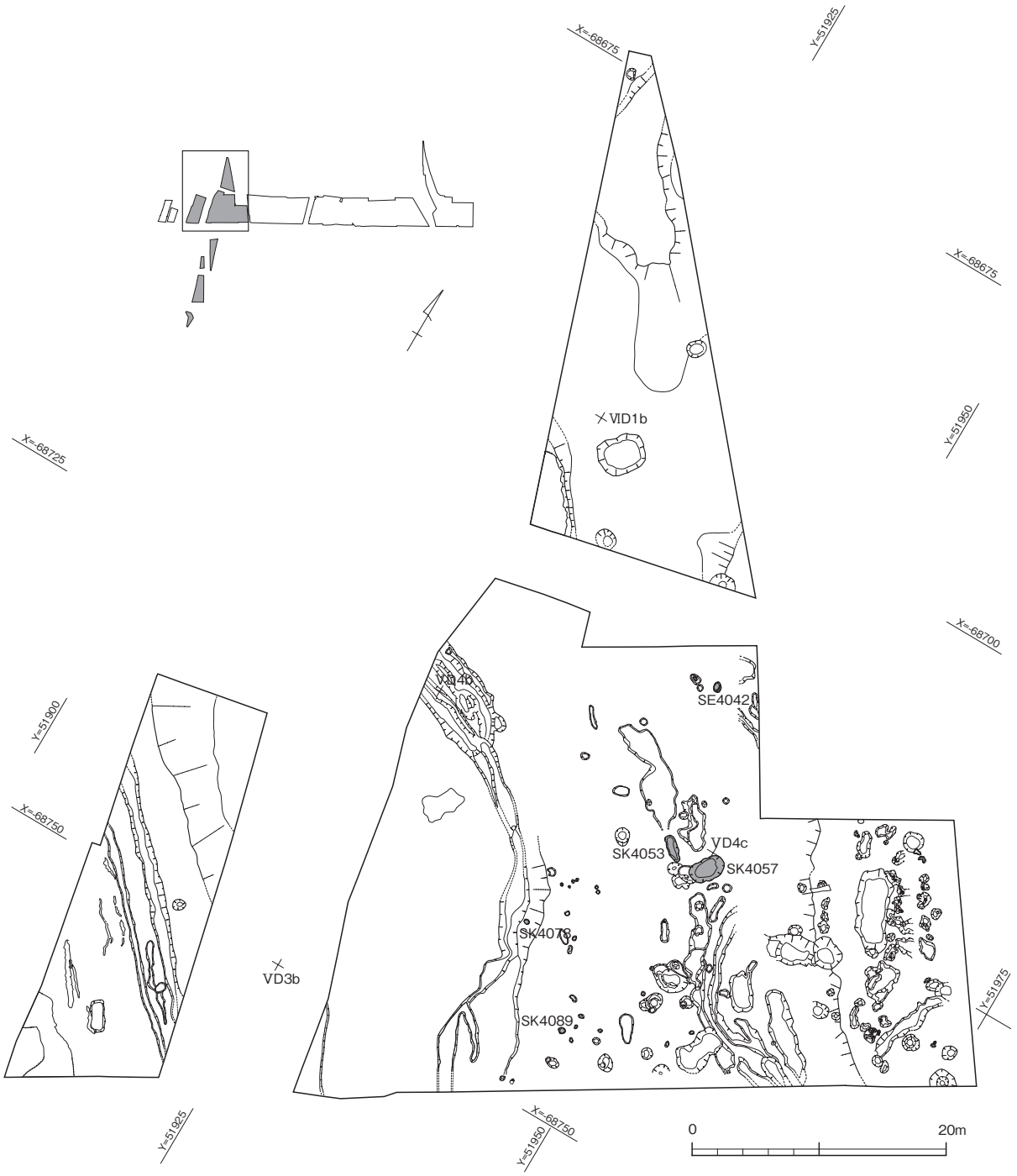
SX2806はＢ区の西,ⅦE1cグリッドに位置する。遺構の南側が壊されている。平面形は隅丸方形で，断面形は逆台形状をなす。一辺1.0m，深さ0.45m。遺構下部で高さ15cmほどの木棺が出土した。約３分の２が壊されていた。木棺内で人骨と思われる骨片を確認した。骨片は遺構の底面から10cmほど上で出土した。骨片は腐食が進んでいて，年齢・性別・部位は不明である。埋土は４層に分層できた。第４層は掘形埋土である。第２層で16世紀の土師質土器が出土した。埋葬時に副葬されたものであろう。



第144図　中世末～近世前半Ｂ区墓実測図（1：40）

２．Ｄ区の遺構

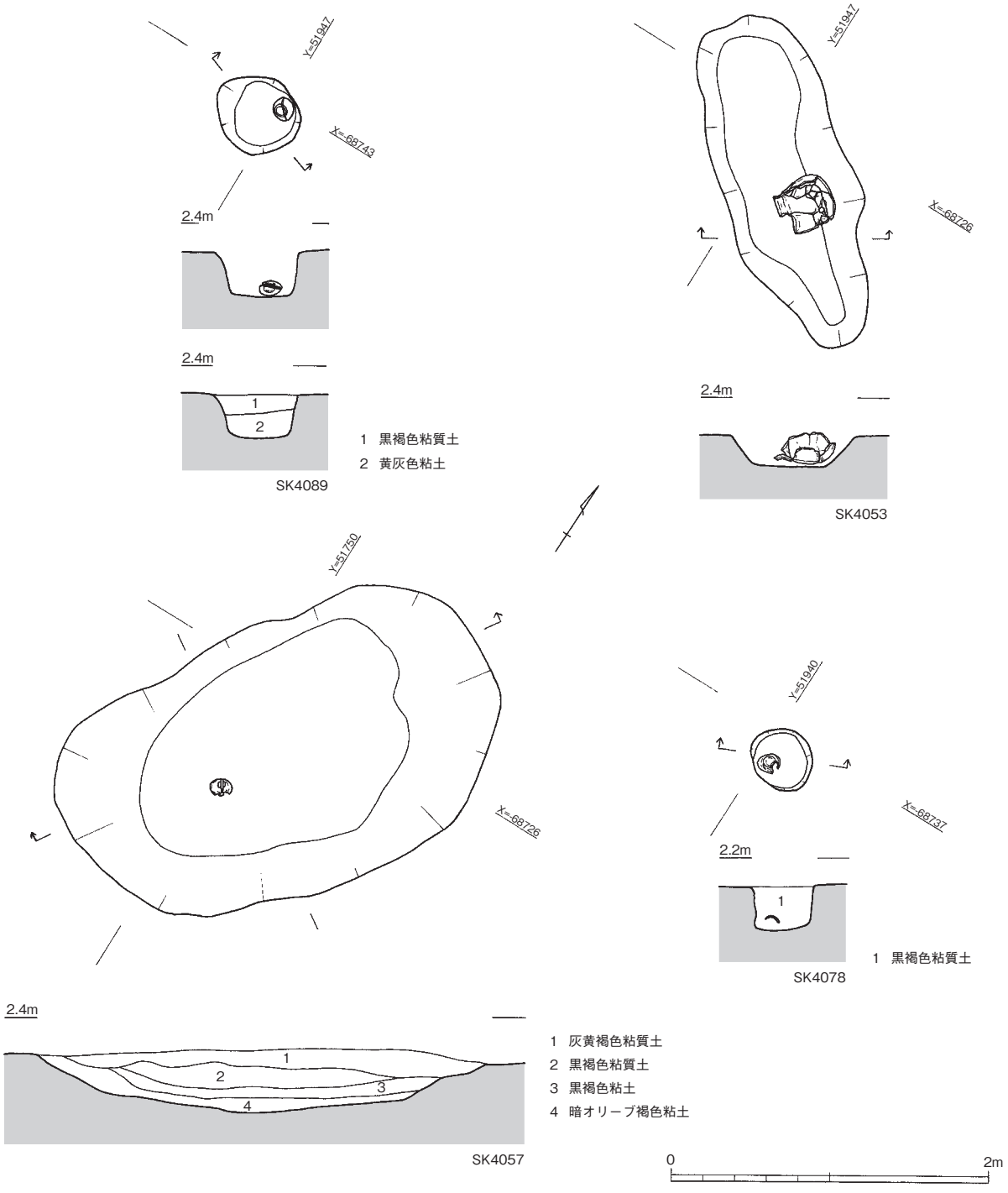
Ｄ区では，土坑４基，井戸１基を確認した。遺構密度は全体的に低いが，ほとんどの遺構は，Ｄ区の東側で確認される。遺構検出面は２層上面（標高は2.0～2.2m）である。



第145図　中世末～近世前半Ｄ区遺構図（1：500）

土坑SK4053（第145・146図　232－14）

SK4053はＤ区の東,VD3bグリッドに位置する。平面形は歪な長楕円形で,断面形は逆台形状をなす。長径2.1m，短径0.8m，深さ0.2mである。埋土から８世紀の土師器が出土した。検出面が２層上面であるため中世末から近世前半の遺構とした。



第146図　中世末～近世前半Ｄ区土坑実測図（1：40）

土坑SK4057（第145・146図　232－15）

SK4057はＤ区の東,VD3bとVD3cグリッドに位置する。平面形は楕円形で，断面形は逆台形状をなす。長径2.8m，短径1.8m，深さ0.4mである。埋土は４層に分層できた。埋土から13世紀の土師質土器片などが出土した。検出面が２層上面であるため中世末から近世前半の遺構とした。

土坑SK4078（第145・146 図　232－16）

SK4078はＤ区の中央,VD3bグリッドに位置する。平面形は円形で, 断面形は「Ｕ」字状をなす。直径0.3m，深さ0.3mである。埋土から漆器椀が出土した。

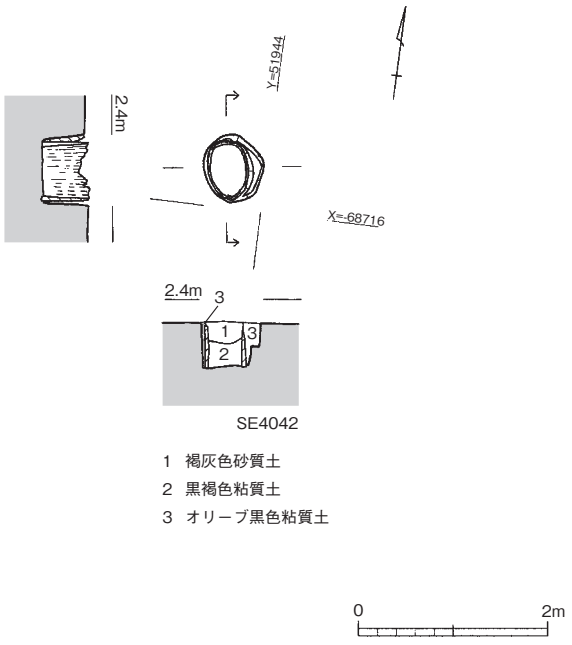
土坑SK4089（第145・146 図　図版66－２　232－17）

SK4089はＤ区の中央,VD3bグリッドに位置する。平面形は円形で, 断面形は逆台形状をなす。直径0.5m，深さ0.3m。埋土は２層に分層できた。底面直上で漆器椀が出土した。

井戸SE4042（第145・147図　図版66－４）

SE4042はＤ区の東,VD4bグリッドに位置する。平面形は楕円形で, 断面形は逆台形状の掘形である。長径0.7m，短径0.6mである。埋土は３層に分層できた。遺構内から刳り抜き材を使用した井戸側が出土した。刳り抜き材は楕円形で，長径60㎝，短径45㎝，高さ50㎝を測る。

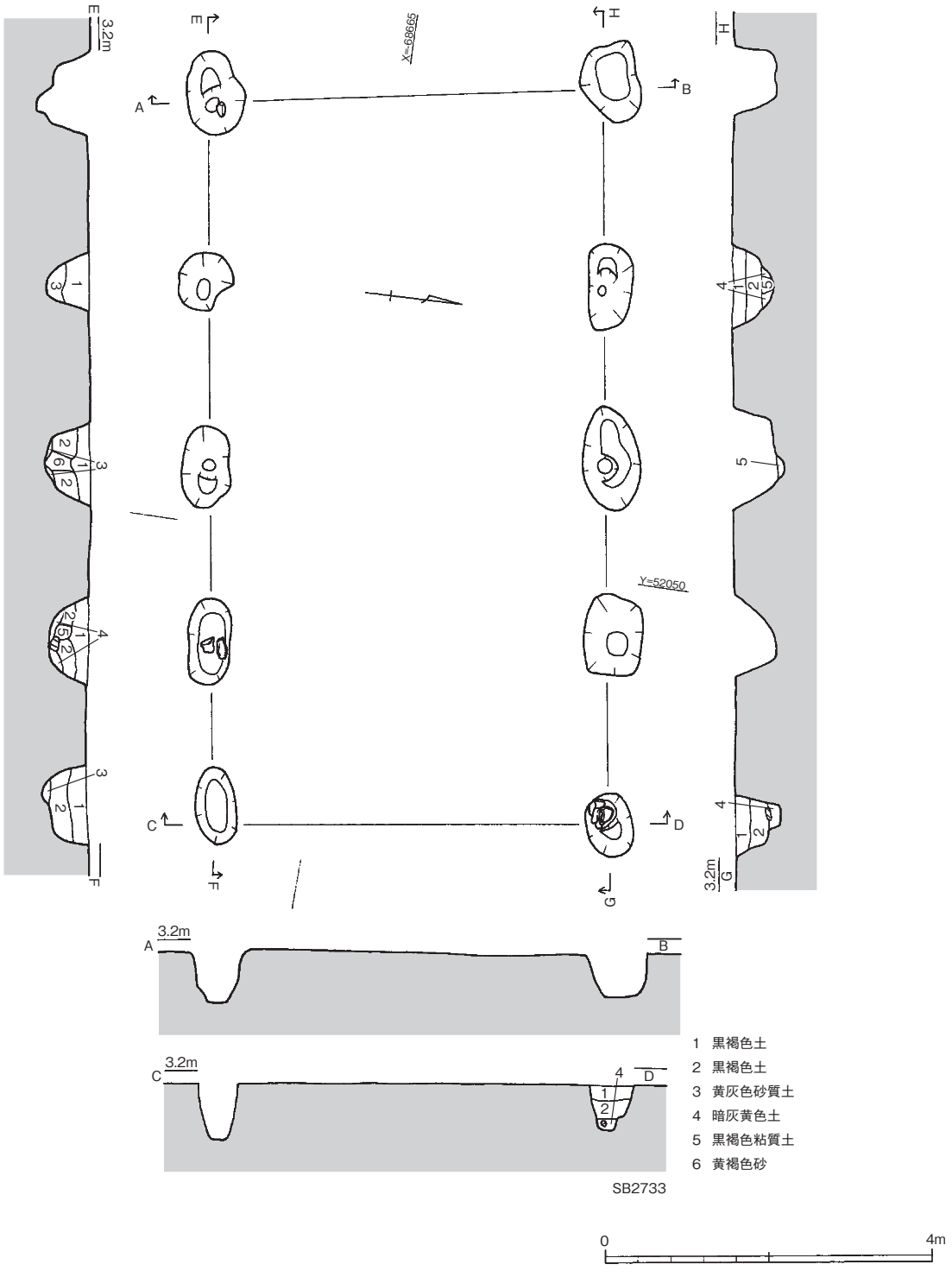
埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



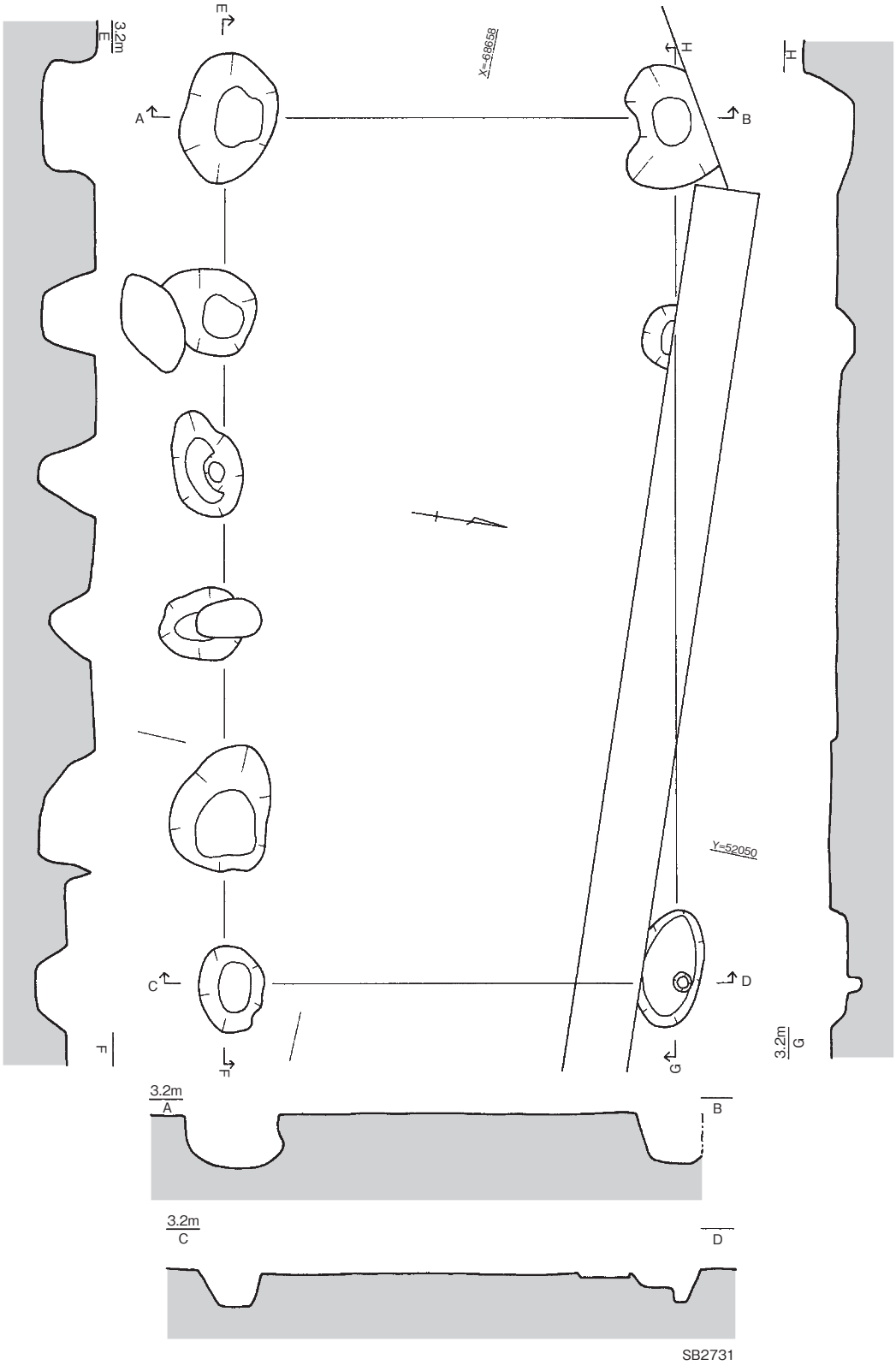
第147図　中世末～近世前半Ｄ区井戸実測図（1：80）

第９節　近世以降の遺構

近世以降の遺構はＢ区の西半分からＣ区に分布している。掘立柱建物２棟，柱穴列1列，土坑６基，井戸４基，溝３条，墓１基，ピット５基を確認した。Ａ・Ｄ・Ｅ区では遺構は確認されていない。



第148図　近世以降Ｂ区建物実測図１（1：80）



第149図　近世以降Ｂ区建物実測図２（1：80）

１．Ｂ区の遺構

Ｂ区では，調査区の西側で掘立柱建物２棟，柱穴列１列，土坑４基，井戸３基，溝２条，ピット２基を確認した。遺構検出面はほとんどが２層上面（標高2.9～3.1ｍ）である。

建物SB2733（第148・151 図　図版45－１）

SB2733はＢ区の西端，ⅦE2bグリッドとⅦE2cグリッドに位置する。１×４間の掘立柱建物で，梁行4.9m×桁行8.9mである。桁行の柱間は2.1～2.3m。建物の主軸方位はＮ－82°－Ｅである。柱穴の形は楕円形か不整な楕円形で，長径0.8～1.2m，深さ0.5～0.7ｍである。柱穴底の標高は2.3～2.5m。柱穴の埋土は第５層が柱根，第２・４層が掘形埋土である。北東隅の柱穴と南面の柱列の東から２番目の柱穴内で，10～20㎝大の礫が出土した。

遺物は，陶磁器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

建物SB2731（第149・151図　233－１～３）

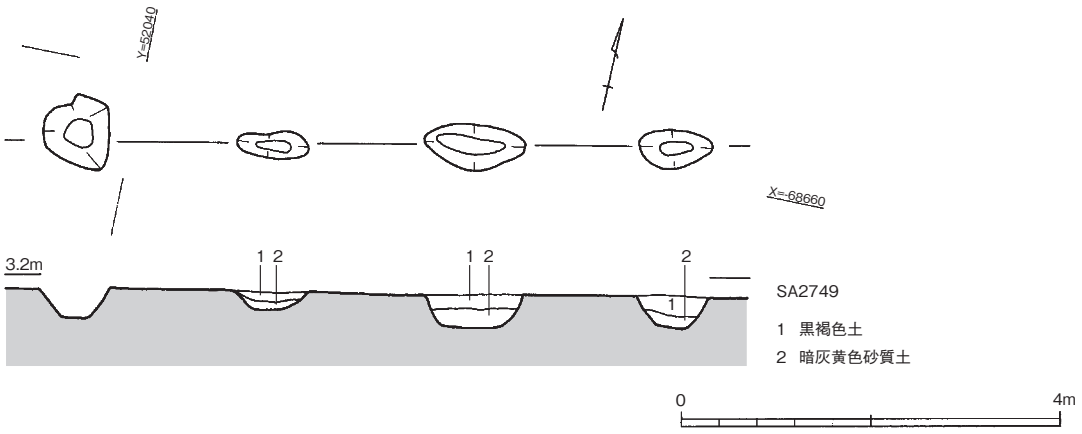
SB2731はＢ区西端の北側，ⅦE2bとⅦE2cグリッドに位置する。１×５間の掘立柱建物で，梁行5.6ｍ×桁行11ｍである。桁行の柱間は2.0～2.4m。建物の主軸方位はＮ－79°－Ｅである。北面の柱列はトレンチに壊され確認できない柱穴が多い。柱穴の形は楕円形か不整な楕円形で，長径1.0～1.5m，短径0.8～1.2m，深さ0.5～0.7ｍである。柱穴底の標高は2.3～2.5m。

埋土から，17世紀後半の肥前系陶器や青花皿などが出土した。

柱穴列SA2749（第150・151図）

SA2749はＢ区西端の北側，ⅦE2bグリッドに位置する。３間の柱穴列で，柱間2.1m，全長6.4mである。主軸方位はＮ－79°－Ｅである。柱穴の形は不整な楕円形であるが，西端に位置する柱穴は歪な隅丸方形状をなす。柱穴は長径0.7～1.0m，短径0.3～0.7m，深さ0.4～0.6ｍである。柱穴底の標高は2.7～2.8m。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。



第150図　近世以降Ｂ区柱穴列実測図（1：80）

第151図　近世以降Ｂ区遺構図１（全体図1：250　土層断面1：40）

土坑SK2883（第151図　233－４～14）

SK2833はＢ区西端の西壁際，ⅦE2bグリッドに位置する。南西側が調査区外にある。確認できた規模は長さ16m，最大幅5.0mで，南北に長い不整形な土坑状をなす。東西方向の断面形は鉢状で，深さ0.8m。東側で平坦面をもって落ち込み，最深部で標高2.2mに至る。底面は南北に長い溝状をなし，湧水が認められる。

埋土から，17世紀後半の朝鮮王朝陶器や肥前系陶器，備前焼擂鉢などが出土した。

第152図　近世以降Ｂ区遺構図２（1：250）

井戸SE2372（第152・153図　図版33－４　233－15）

SE2372はＢ区の中央，ⅥE3dグリッドに位置する。平面形は歪な長方形で，断面形は逆台形状の掘形である。規模は長径3.2m，短径2.0mである。標高2.4mで平坦面をもつ。東側が土坑状に落ち込み，深さ0.9mを測る。この落ち込みの北側で，拳大から人頭大の礫を使用した石組を確認した。石組は崩れた部分もあるが，縦0.9m，横0.8m，高さ0.5mを測る。埋土は７層に分層できた。第１～６層は井戸廃絶後の堆積土，第７層は掘形埋土である。第６層の下層部には，むしろ状のものが含まれていた。

埋土から，17世紀後半から18世紀の陶磁器片や古銭などが出土した。陶磁器片はいずれも小片で図示していない。

井戸SE2510（第152・153図　図版33－２）

SE2510はＢ区中央の北側，ⅥE2dグリッドに位置する。平面形は歪な円形で，断面形は逆台形状の掘形である。SD2344を掘り込んでいる。直径2.9m，深さ0.9m。遺構下部で石組を確認した。石組は長さ50～70㎝，幅20～30㎝の加工された石と拳大から人頭大の礫を使用し，１段組まれていた。北側の石組がないが，一辺1.3m前後の方形の石組であろう。石組内下部で直径0.6m，深さ0.2mほど落ち込んでいる。埋土は６層に分層できた。第１・２層は井戸廃絶後の埋土，第４・５層は井戸側内の堆積土，第６層は掘形埋土である。

埋土から，土器片が若干出土した。いずれも小片で図示していない。

井戸SE2633（第151・153図　233－16～19）

SE2633はＢ区西端の南側，ⅥE1cグリッドに位置する。平面形は歪な円形で，断面形は２段掘りの逆台形状の掘形である。直径3.6m，深さ1.2m。掘形の東側が一部膨らみ，標高2.3mで三日月状の平坦面をもって落ち込む。遺構下部から桶を２段に組んだ井筒が出土した。桶は上段が径50㎝，下段が径40㎝。上段の桶の上部は破損している。組まれた井筒高は約80㎝である。掘形内の標高2.2～2.3mで人頭大の礫の集まりを検出した。井筒内でも同レベルで礫が１個出土した。底面には自然木の枝杭が数本打ち込まれていた。埋土は７層に分層できた。第３層は井筒内の堆積土，第６・７層は掘形埋土である。遺物は，第６・７層から16世紀代の土師質土器や朝鮮王朝陶器・青磁皿の破片などが出土した。第１層から擂鉢などの土器片が出土した。

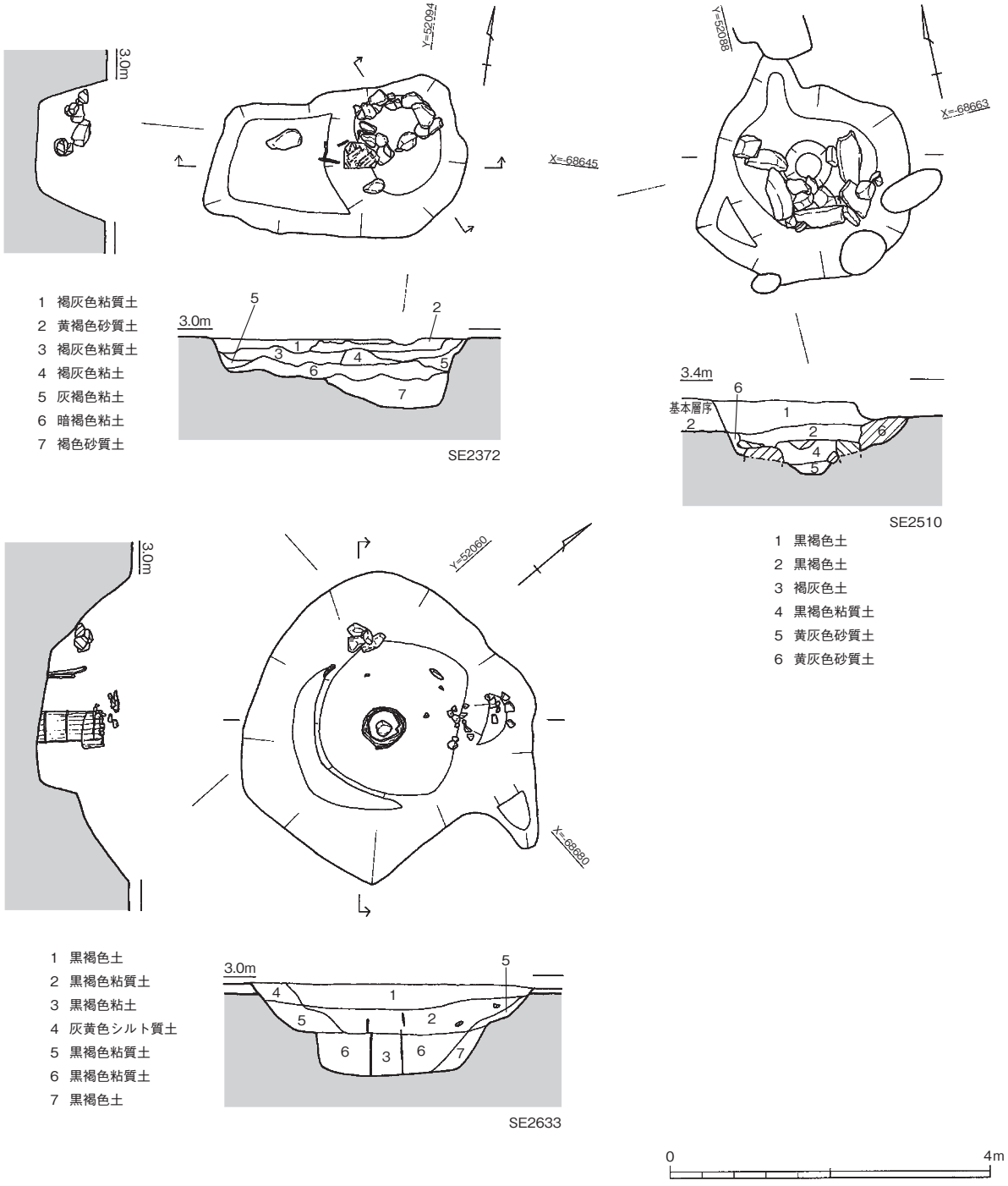
溝SD2344（第152・154図　234－１～14）

SD2344はＢ区の中央，ⅥE2dグリッドからⅥE3dグリッドに位置する南北溝（Ｎ－１°－Ｅ）である。南側と北側が調査区外へ延びる。確認できた規模は，長さ約40m，幅1.7～2.6m，深さ0.4m。南側で溝の西肩がSE2510に壊される。北側ではＮ－21°－Ｗと西に振れる。底面の標高は北側が2.5m，南側が2.3mで，北から南に向かって下る。埋土は３層に分層できた。埋土から12～18世紀の瓦質の捏ね鉢や瀬戸美濃の灰釉皿，土師質土器や肥前系陶器，漆器椀や折敷底板などの木製品も出土した。

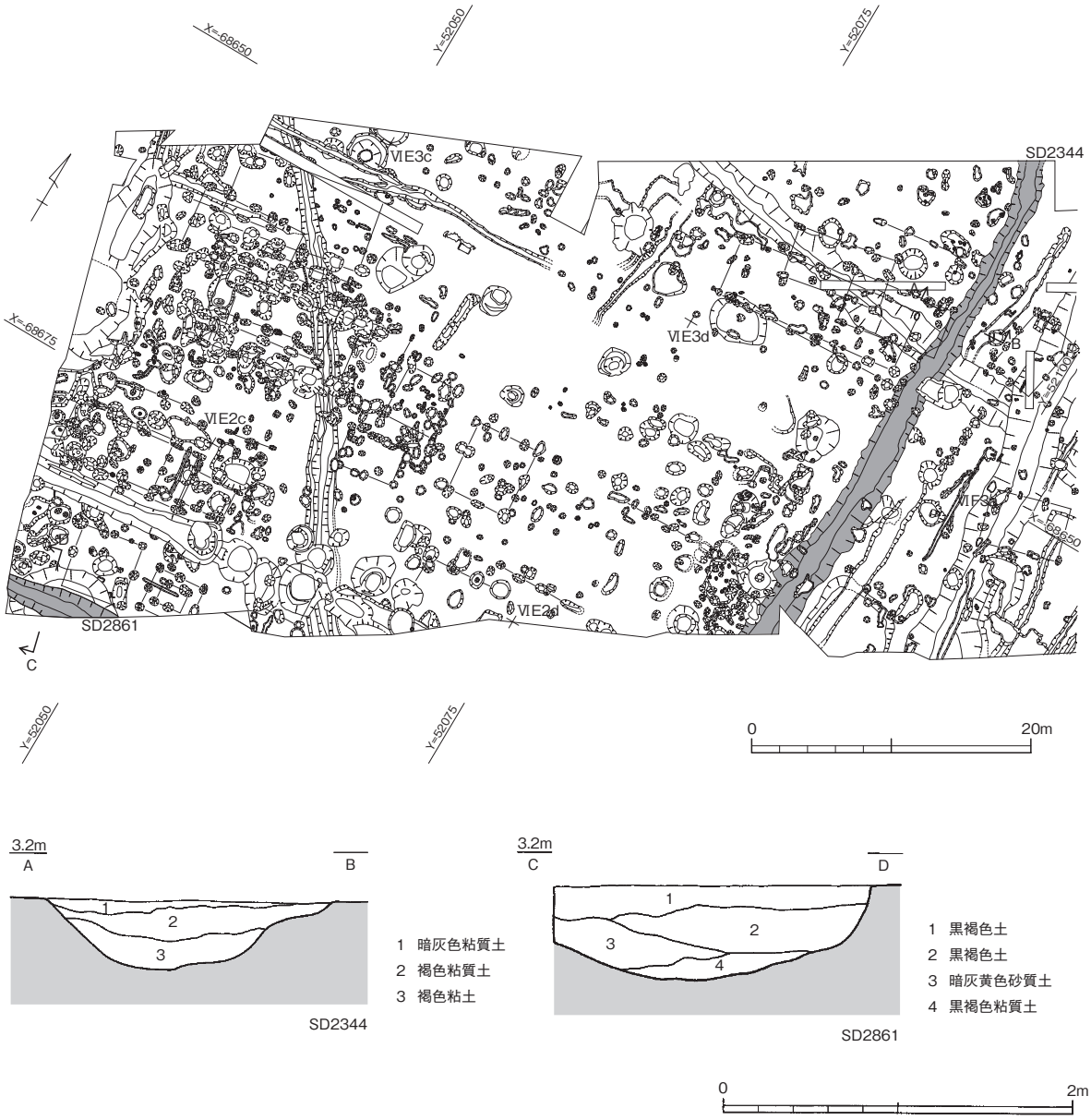
溝SD2861（第151・154図　233－20～25）

SD2861はＢ区の南西端，ⅦE1bグリッドに位置する東西溝（Ｎ－８4°－Ｅ）である。長さ約７ｍ，幅約２ｍ，深さ0.7ｍ。底面の標高は2.3ｍ。

遺物は，17～18世紀の土師質土器，肥前系陶磁器の破片などが出土している。



第153図　近世以降Ｂ区井戸実測図（1：80）



第154図　近世以降Ｂ区溝実測図（平面1：500　土層断面1：40）

２．Ｃ区の遺構

Ｃ区では，土坑２基，井戸１基，溝１条，墓１基，ピット３基を確認した。遺構密度は低い。遺構検出面は２層上面（標高3.0～3.4m）である。

土坑SK3036（第155・156 図　234－15～20）

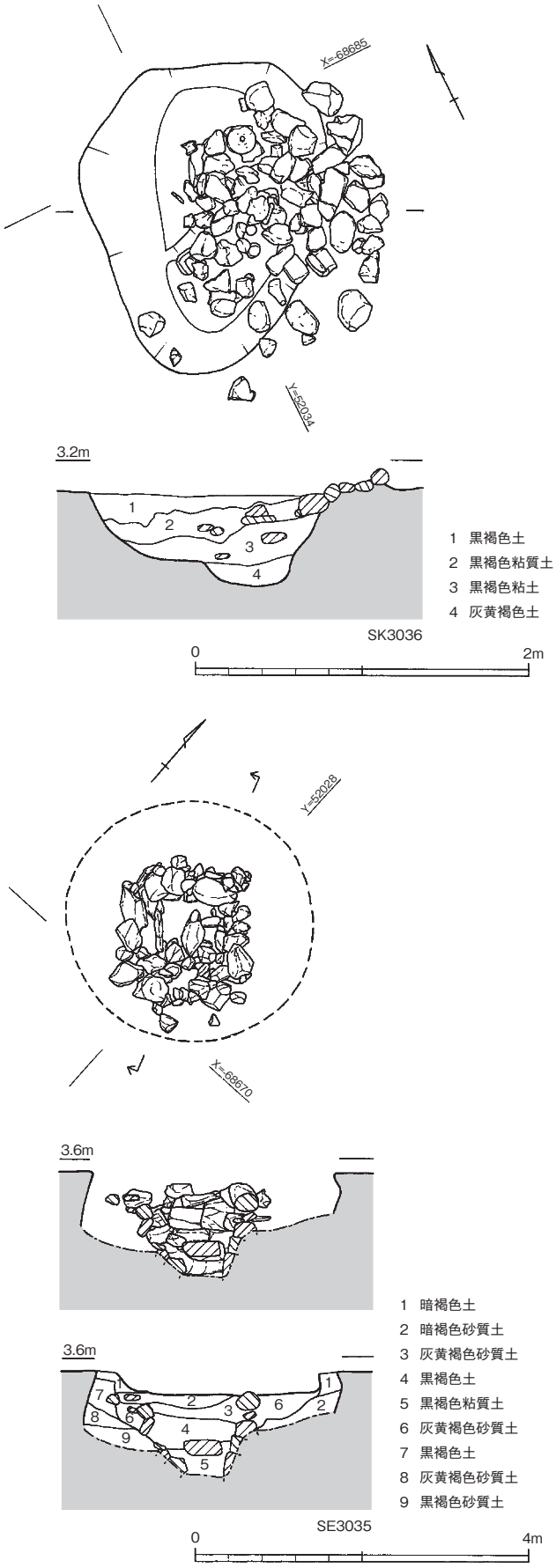
SK3036はＣ区東の南壁際，ⅥE1bグリッドに位置する。平面形は北東側がやや広がる楕円形で，断面形は２段掘り逆台形状をす。長径1.9m，短径1.4m，深さ0.6m。東側が落ち込む。遺構上面と遺構内で，拳大から人頭大の礫が多数出土した。礫は南東方向から遺構中央に向かって落ち込む。埋土は４層に分層できた。埋土から，17世紀以降の肥前系の陶器や瓦質の香炉，石製火鉢などが出土している。

土坑SK3066（第155 図　234－21～23）

SK3066はＣ区中央の北壁際，VD1dグリッドとⅥE1aグリッドに位置する。北側は調査区外にある。平面形は歪な楕円形である。東西約５m，南北約３mを測り，底面は凹凸がみられる。

埋土から，18世紀代と考えられる土師質土器や古銭が出土した。

第155図　近世以降Ｃ区遺構図（1：500）



第156図　近世以降Ｃ区遺構実測図（土坑1：40　井戸1：80）

井戸SE3035（第155・156 図　234－24・25）

SE3035はＣ区の東側，ⅦE1bグリッドに位置する。平面形は円形で，断面形は逆台形状の掘形をなす。直径３ｍ。遺構内で方形の石組が出土した。東と南側については一部石が崩れていた。内法は上段が0.7ｍ，下段が0.5ｍ四方の規模になる。石組は長さ50～60㎝，幅20～30㎝の加工された石が四方に２～３段積み上げられ，拳大から人頭大の礫で補強するように造られていた。全体では最高４段に組まれていた。石組に五輪塔の石が６個転用されていた（火輪部分１個，水輪部分２個，地輪部分３個）。埋土は９層に分層できた。土層断面で第６層が第７層を掘り込むことから，井戸の上部を修復した可能性がある。標高1.2ｍに至ったところで，湧水が激しくなり，調査を中止した。第１～４層が井戸廃絶後の埋土，第６層が修復時の掘形，第７～９層が井戸造築時の掘形埋土である。第３層から17～18世紀の土師質土器，肥前系陶器皿片が出土した。

墓SX3076－１～４（第155図　234－26～30）

SX3076はＣ区の中央，ⅦE1aグリッドに位置する。現代の屋敷墓が取り払われた下面で検出した。不整形の土坑で，遺構内は４つの小土坑（SX3076－１～４）に分かれる。小土坑のうちSX3076－１～３からは，骨片とともに17～18世紀の土師質の小皿がまとまって出土した。小皿は副葬品と考えられる。

第10節　時期不明の遺構

時期は特定できないが，重要と思われるものをあげる。

Ｄ区で地震跡を確認した。また，Ｅ区で溝２条と自然流路３条確認した。

１．Ｄ区の地震跡

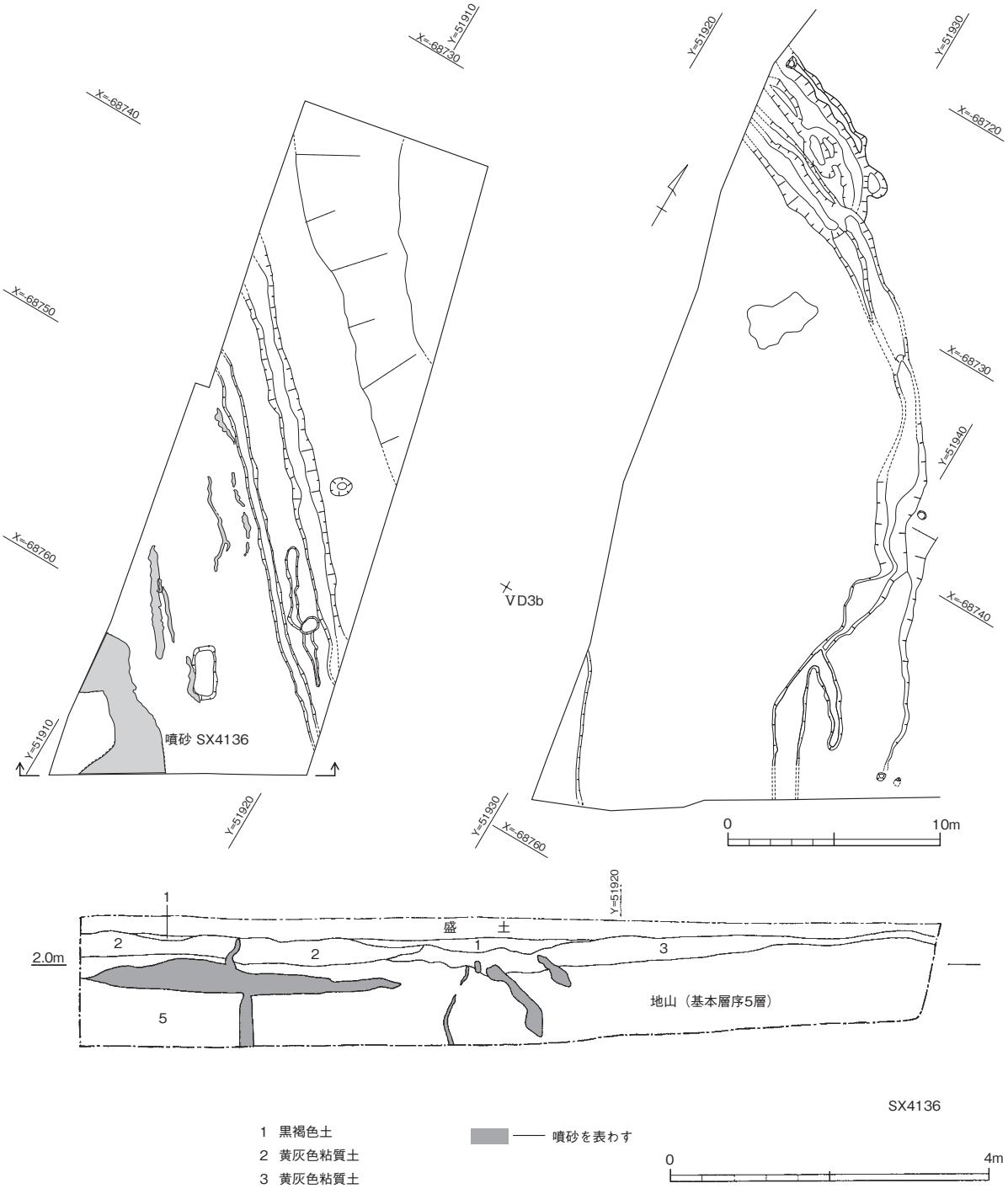
噴砂SX4136（第157図　図版65－６）

SX4136はＤ区の西側，VD2aグリッドで地震による噴砂を確認した。自然河道の左岸側に位置する。平面的には，黄灰色砂が自然河道の方向に沿うように走る何本かの砂脈が確認された。砂脈は直線的に走るものもあるが，蛇行し枝分れするものが多くみられる。砂脈の規模は長さ約１～９ｍ，幅0.1～0.5ｍのものが多い。南西端で長さ約７ｍ，最大幅約３ｍを測る噴砂を確認した。この噴砂は５層を掘り下げる段階で検出したものである。砂脈の一つは弥生前期のSK4135の一部を壊している。

南壁の土層断面で噴砂が観察された。検出面は現地表面から約２ｍ下である。１層は近･現代耕作土，２層は中世の，３層は古代の遺物包含層である。地山である５層（黄灰色砂質土）は粘質な砂質土が20㎝ほど堆積する上層部と，粘質土と細砂が互層状に堆積する下層部に分けられる。土層断面は湧水と壁面崩落の危険から，標高1.0ｍで掘り下げを停止したが，ボウリング調査により，標高1.0ｍから0.0ｍまでは細砂が堆積していることが確認できた。南壁の土層観察トレンチの底面からは細砂が水とともに噴き上げる状況がみられ，現在も地下水位が高いことを示した。また，５層は水分を含むとスポンジ状に不安定になることから，地下の堆積層が軟弱であることが推測される。

観察の結果，確認された噴砂は過去２回の地震による液状化現象であることがわかった。土層断面の中央側で検出した砂脈の噴砂については，垂直あるいは斜め方向の噴砂が数条みられる。５層下から上昇するもの，５層内から現れるものがある。５層内から現れるものや間で途切れるものは，噴砂の方向が壁面とずれるためと考えられる。この噴砂は３層内で止まっており，その上の１層まで達するものはないことから，古代以降の地震に起因するものと考えられる。また，南西端で検出した幅広の噴砂は，垂直に上昇してきた噴砂が，５層の上層部と下層部の間である比較的土質の弱い境界面で水平方向に広がる。この噴砂は境界面で広範囲の堆積をみせ，厚い所で約40㎝に達する。さらに上昇した一部は５層の上層部を突き抜け２層に達して止まる。このことから，この噴砂は中世以降に発生した地震により起こったものと考えられる。しかし，時期が特定できる資料に乏しく，これらの噴砂を発生させた地震が，これまで確認されている過去の地震のいずれに該当するものかは判断し難い。

なお，出雲平野では『山持川川岸遺跡』･『藤ヶ森遺跡』などでも噴砂現象が報告されている。



第157図　時期不明Ｄ区噴砂実測図（平面1：300　土層断面1：80）

２．Ｅ区の遺構

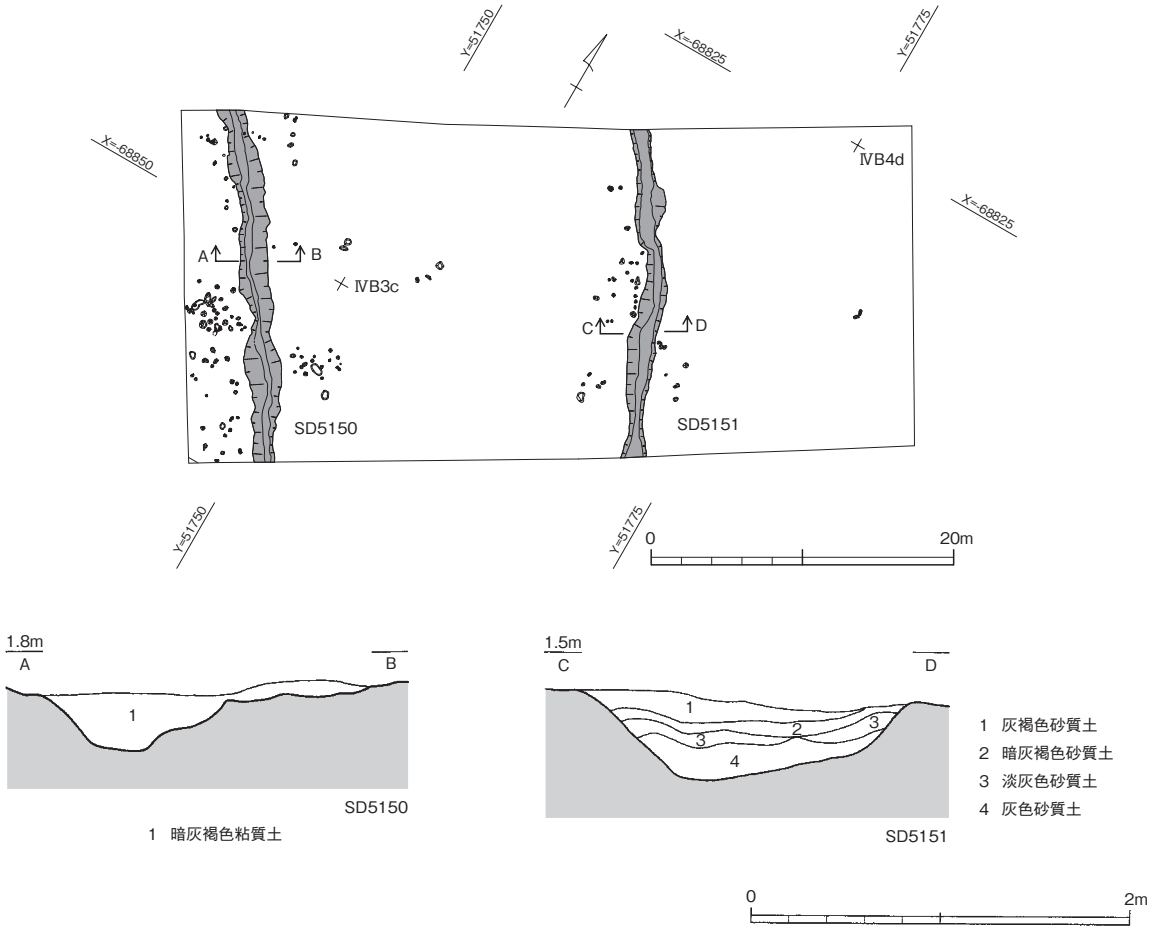
Ｅ区では，調査区の東側で自然流路３条，西側で溝２条を確認した。

溝SD5150（第158図）

SD5150はＥ区の西端，ⅣB2bからⅣB2cグリッドに位置する。標高1.6mの５層上面で検出した。南東－北西方向にやや蛇行して延びる。確認できた規模は長さ約23m，幅1.4～2.8m，深さ0.3m。溝の主軸方位はＮ－34°－Ｗである。底面の標高は南東側が1.4m，北西側が1.3mで，北西側に向かって下る。遺物は無く，時期は不明である。調査区の西端にあり，これより西に遺構は確認されない。

溝SD5151（第158図　図版67－２）

SD5151はＥ区の西側，ⅣB3cグリッドに位置する。SD5250から約25m東，標高1.3mの５層上面で検出した。南東－北西方向にやや蛇行して延びる。確認できた規模は長さ約23m，幅1.0～2.8m，深さ0.5m。溝の主軸方位はＮ－29°－Ｗである。底面の標高は南東側が1.0m，北西側が0.8mで，北西側に向かって下る。出土遺物は無く，時期は不明である。

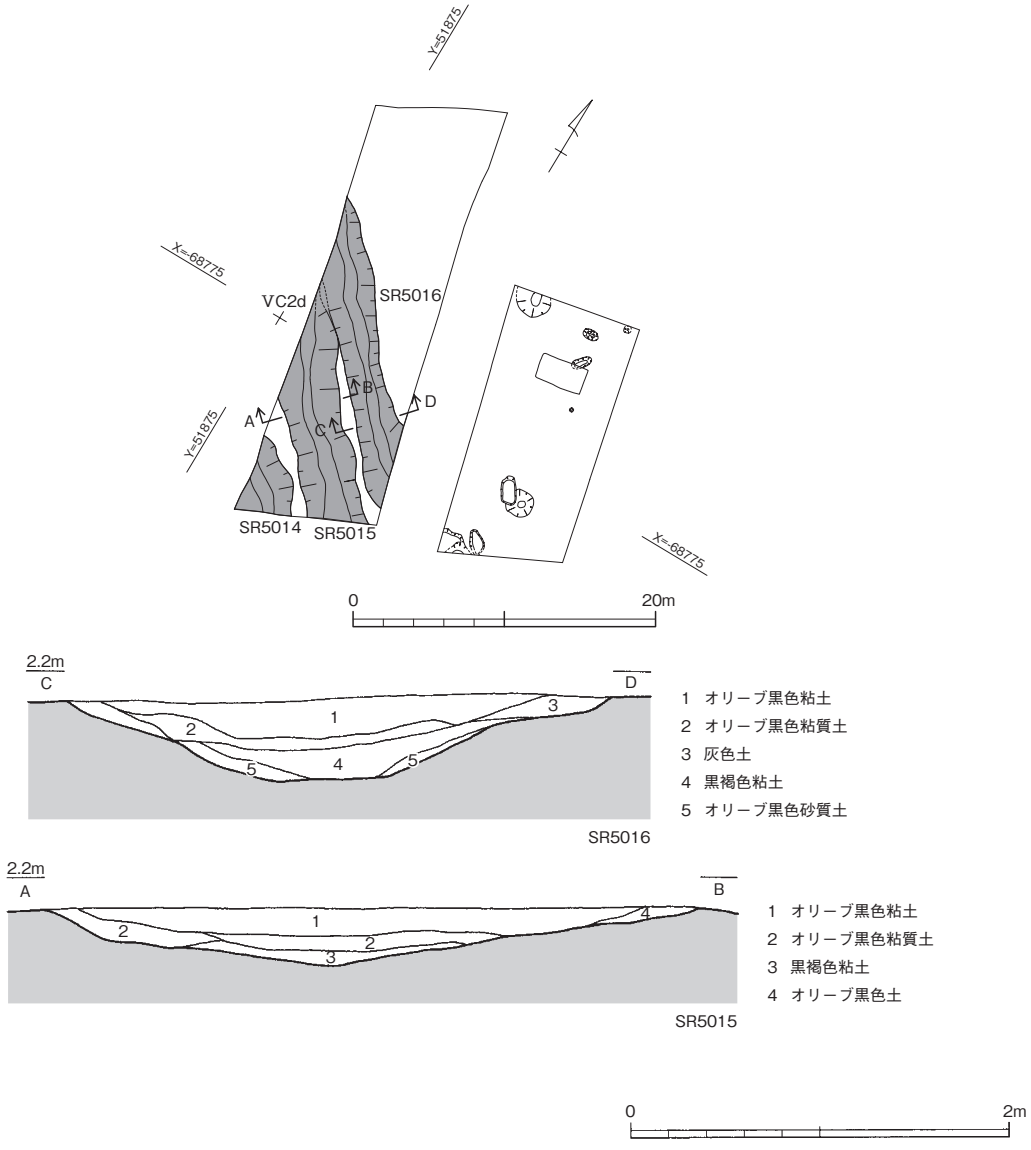


第158図　時期不明Ｅ区溝実測図（平面1：500　土層断面1：40）

自然流路SR5014・SR5015・SR5016（第159図　図版68－１）

SR5014・SR5015・SR5016はＥ区の東側，VC1dからVC2dグリッドに位置する。平行して走る３条の自然流路である。標高2.1ｍの５層上面で検出した。SR5014の西肩は確認できない。SR5015の北東側でSR5016の西肩が接する。確認できた長さは，SR5014が約５ｍ，SR5015が約14ｍ，SR5016が約18ｍである。幅は3.0～3.5ｍ。深さはSR5014が0.3ｍ，SR5015が0.4ｍ，SR5016が0.5ｍである。流路の主軸方位はＮ－42°－Ｗ。断面形は皿状であるが，SR5016は鉢状に近い。

これらの自然流路が，同時期に流れていたかは不明である。自然河道の左岸で確認した中世の溝SD4031・SD4034と同軸の方位を示すが，出土遺物は無く，時期は不明である。



第159図　時期不明Ｅ区自然流路実測図（平面1：500　土層断面1：40）

第６章　遺構出土の遺物

本章では，第５章で報告した遺構から出土した遺物のうち，実測可能なものを抽出して報告する。遺構と同じく，１縄文時代晩期，２弥生時代前期，３弥生時代中期，４弥生時代終末期～古墳時代前期，５古墳時代中期～終末期，６古代，７中世，８中世末～近世前半，９近世以降の節に分け，調査区ごとに述べていく。遺構内から出土しているが，確実に流れ込みと判断できる遺物については，第８章の１～３層の遺物包含層で報告した。あわせて，第９章の観察表にも遺物の情報を記載している。遺物のスケールは土器１：４，石器１：３，剥片・石核など２：３，石鏃など１：１，古銭１：１を基本とするが，例外もある。

第１節　縄文時代晩期の遺構出土遺物

縄文時代晩期の遺構出土遺物は，Ｂ区の３基の土坑から出土したものである。

１．Ｂ区の遺構出土遺物

土坑SK2673（160－１　図版79）

160－1は粗製深鉢の胴部上半から下半にかけての破片である。口縁部と底部を欠く。器形は砲弾形をなすであろう。時期は縄文時代晩期であろう。

土坑SK2880・SK2881（160－2　図版79）

160－２は粗製深鉢の口縁部から胴部下半にかけての破片で，底部を欠く。２基の遺構からそれぞれ，１片ずつの破片が出土し，その破片が接合した。出土状況から，双方が流れ込み，あるいはどちらかが流れ込み，または，それぞれの遺構に人間が故意に入れたなどが考えられるが，断定できない。時期は縄文時代晩期前半頃と考えられる。

第２節　弥生時代前期の遺構出土遺物

弥生時代前期の遺構出土遺物は，13基の遺構を報告する。出雲平野でこれだけまとまって遺構から遺物が出土したことは過去になく，重要な発見である。

１．Ｂ区の遺構出土遺物

土坑SK2750（160－３～８　図版79）

SK2750からは弥生土器と石器が出土した。160－３は中大型（口径サイズにより分類，第11章第１節参照）の甕の口縁部から胴部の破片で，口縁部は長く大きく外反する。口縁直下には段が巡る。160－４～６は底部片で，160－４は大型壺あるいは甕の底部，160－５は小型壺の底部，160－６は中・中大型甕の底部であろう。160－７は扁平片刃石斧である。基部の厚みが刃部より若干厚く，島根県内では古い型式。160－８は黒曜石の石核である。産地分析の結果，隠岐の久見産と判定されている。

以上の遺物が土坑内の１層から散在して出土した。よって，SK2750は，土器から弥生時代前期後葉に埋没したと考えられる。

土坑SK2845（160－９～13　図版75・79）

SK2845からは弥生土器と石器が出土した。160－９は中大型の甕の口縁部から胴部の破片で，口縁部は長く大きく外反する。口縁直下にはやや緩い段が巡る。160－10は中大型の甕の胴部上半から底部にかけての破片である。160－11は甕蓋である。天井部が全体にやや凹む。口縁部から体部にかけてミガキが，天井部付近外面にはハケメが施されている。160－12・13は小型の黒曜石の石鏃である。三角形をなし，基部はやや凹む。

以上の遺物が土坑の１層から散在して出土した。よって，SK2845は土器から弥生時代前期後葉に埋没したと考えられる。

土坑SK2637（161－１～165－８　図版75・79～81・99・100）

SK2637からは弥生土器と石器が出土した。161－１ は中型壺の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部は長く大きく屈曲しながら外反する。口縁部と頸部の境には曖昧な段が巡る。161－２はミニチュア壺の胴部上半から底部にかけての破片で，文様は無い。161－３は中大型壺の胴部上半の破片である。頸部と胴部の境は段と沈線で区画され，その下には５段以上の無軸羽状文が巡る。

161－４～６は大型の甕で，口縁部が長く強く外反する。口縁直下に低く曖昧な段が巡る。161－４は口縁端部が面取り後撫でられ，口縁上端，下端それぞれに刻目が施される。161－５は，口縁端部に刻目は無い。161－６は口縁下端に刻目が施される。

161－７～163－12は中・中大型の甕である。161－７～163－７は口縁部が長く外反，強く屈曲する。161－７～162－１は口縁直下に低く曖昧な段が巡る。口縁端部には刻目は無い。162－２～６は口縁直下に沈線が巡るもので，口縁端部に刻目が無いものがほとんどである。162－６は口縁端部が先細りして，全面に刻目が施される。162－７～163－１は，無文の甕である。163－２～４は口縁直下に低く曖昧な段が巡る。163－２は口縁部上端に刻目，163－３は口縁端部下端に刻目が施される。163－４は，口縁端部が先細り刻目は無い。163－５は，口縁直下に２条の沈線が巡り，口縁部下端には刻目が施される。163－６は口縁直下に１条の沈線が巡り，口縁部下端には刻目が施される。163－７は破片が小さく，口縁直下の文様は不明である。口縁部下端には刻目が施される。163－８～10は，口縁部が短いが，強く外反する。163－８は破片が小さく，口縁直下の文様は不明である。口縁部下端には刻目が施される。163－９・10は無文の甕である。163－11は外面の剥離が激しい。163－12は胴部片で，口縁直下に刻目，その下に曖昧な段が施される。

163－13は壺あるいは鉢の口縁部から胴部下半にかけての破片である。胴部下半に最大径をもつ特異な形状をなす。口縁部の中央で屈曲し，外反して開く。

163－14・15は大型甕の口縁部片と考えられる。口縁部は長いが，外反度は弱く，立ち気味である。163－14は口縁直下に段が巡り，口縁部上端が強く撫でられ，下端に刻目が施される。163－15は破片が小さく，口縁直下の文様は不明である。口縁部下端には刻目が施される。この２点は他の土器よりも１型式古いものと判断した。

163－16は大型甕の底部，163－17・18は中大型甕の底部である。163－18は外傾接合がよくわかる資料である。粘土が接合面で剥離しているため，粘土を積み上げる際の指頭圧痕がわかる。

164－１～３は鉢である。164－１は中大型で，口縁部が長く強く外反する。164－２は大型あるいは中大型で，口縁部が外反して開く。口縁直下に１条の沈線が巡る。164－３は小型で，口縁部が短いが，強く外反する。

164－４～７は甕蓋である。164－４・５は天井部が全体に少し凹む。164－６は天井部が平坦である。

164－８は小型の鉢である。直線的に立ち上がり，口縁端部は面をなす。口縁部上端の２か所に粘土を張り付けている。

164－９は壺の頸部と胴部上半の境に突帯が巡るものである。164－10は壺あるいは鉢の胴部片である。164－11は甕の胴部片である。

164－12～14は黒曜石の楔形石器である。164－15は黒曜石の石核で，一部に自然面が残る。産地分析の結果，隠岐の久見産である。165－１～３は瑪瑙の石核である。165－４は流紋岩製の剥片石器，165－５は頁岩製の石庖丁である。破片が小さく断定はできないが刃部，背部は直線状をなす。165－６は砂岩製の砥石である。165－７・８は黒曜石の三角形石鏃である。165－７は基部が凹む。

以上の遺物が土坑内から散在して出土した。よって，SK2637は土器から弥生時代前期後葉に埋没したと考えられる。

土坑SK2866（166－１～168－７　図版81・82・99・100）

SK2866からは上層（１・２層）と中層（３・４層）から弥生土器と石器が出土した。上層出土遺物は166－１～167－３，中層出土遺物は167－４～168－７に掲載した。

166－１は中大型壺の胴部上半の破片で，外面に沈線と無軸の羽状文が巡る。166－２は無頸壺の口縁部から胴部下半の破片である。胴部下半には多条の沈線が巡り，口縁部には円孔が穿たれている。166－3は壺あるいは鉢の底部片である。

166－４～６は大型甕で，口縁部が長く強く外反する。166－４は口縁直下に２条の沈線が巡り，その沈線間に刺突文が施される。166－５は口縁直下に低く曖昧な段が巡る。

166－７・８は中型甕である。166－７は口縁部が長く強く外反し，口縁直下に１条の沈線が巡る。口縁端部に刻目は無い。166－８は口縁部が長く強く外反する。口縁部下端には刻目が巡る。

166－９は甕の口縁部片である。口縁部は長く屈曲しながら外反する。口縁部下端には刻目が巡る。166－10は甕の胴部片である。胴部上半外面に２条の沈線が巡り，その上下と沈線間に刻目が施される。166－11～14は中大型・大型甕の底部である。

166－15・16は黒曜石の石核で，産地分析の結果，隠岐の久見産である。166－15は自然面が残ることから，掌に乗る程度の大きさの原石であったと考えられる。167－１は瑪瑙の石核である。167－2は横断面形が楕円形をなす棒状の石器で，敲打痕がよく残り，一部に研磨痕もみられる。厚さ4.6㎝もあり，石棒の可能性が考えられる。167－３は細粒花崗岩製の粗製剥片石器である。

以上の遺物が土坑の上層から散在して出土した。よって，SK2866上層からは弥生時代前期後葉の遺物が出土している。

167－４・５は中型壺で，口縁部の中央から大きく屈曲し外反する。167－４は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部と頸部の境には曖昧な段が巡る。167－５は，口縁部片で，口縁部と頸部の境には曖昧な段が巡り，その下に２段の刻目が施される。また，口縁部内面にも２段の刻目が施され，口縁部上端は強くつまみだされる。

167－６～８は中大型甕である。口縁部は長く，強く屈曲する。口縁端部は先細る。167－６は，口縁直下に曖昧な段が巡り，167－７・８は口縁直下に１条の沈線が巡る。167－９は，大型の鉢で，口縁部は長く，強く屈曲する。口縁直下に曖昧な段が巡る。

168－１は壺の底部片である。168－２は，大型甕の口縁部片である。口縁部は，長く緩やかに外反し，口縁端部は面をなす。口縁直下には曖昧な段が巡る。この土器は他の土器よりも１型式古いものと判断した。168－３・４は甕の胴部片である。

168－５は黒曜石の石核で，一部に自然面が残る。産地分析の結果，隠岐の久見産と判定されている。168－６は安山岩製の伐採石斧あるいは打製石斧の破片である。168－７は剥片石器である。刃部には微小な剥離が，体部には研磨痕がみられる。

以上，SK2866中層からは土器から弥生時代前期後葉頃に埋没したと考えられる。

溝SD2371（169－１～18　図版82）

SD2371からは弥生土器が出土した。169－１～４は中型壺である。169－１は，口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は長く，口縁部の中ほどの屈曲が強い。口縁と頸部の境には曖昧な段，頸部と胴部上半の境は段と沈線が巡る。169－２・３は口縁部と底部を欠く。頸部と胴部の境には沈線が巡る。169－４は胴部の破片で，沈線間に５段の無軸羽状文が巡る。169－５はミニチュアの壺で，口縁部が短く外反する。169－６は壺の底部である。

169－７は大型甕，169－８は中大型甕である。169－７・８は口縁部が長く強く外反する。169－７は口縁直下に曖昧な段が巡る。169－８は口縁直下に沈線が巡り，その下に刻目が施される。

169－９・10は中大・中型甕で，口縁直下に曖昧な段が巡る。169－９は口縁部が短いが，強く外反する。169－10は口縁部が長く強く外反する。

169－13～15は鉢である。169－13は口縁部が強く屈曲する。169－14は短く緩やかに外反する。169－15は口縁部を欠く。169－16は小型鉢で，直線的に立ち上がり，口縁端部は先細る。

169－17・18は甕蓋で，169－17は天井部外面がやや凹む。169－18は天井部外面中央が凹む。

以上の遺物が１・２層を中心に散在して出土した。よって，SD2371は土器から弥生時代前期後葉に埋没したと考えられる。

溝SD2626（170－１～186－４　図版75・83～88・99・100）

SD2626からは弥生土器と石器が出土した。

170－１～171－６は中・中大型壺である。口縁部は長く，口縁部中央で強く外反する。口縁部と頸部の境には，曖昧な段が巡るものや，170－３のような１条の沈線が巡るもの，170－８のような無文のものがある。頸部と胴部上半の境には，段や沈線が巡る。胴部上半の文様は，170－５の斜格子文や，170－１の有軸逆転羽状文もあるが，大半が無軸の逆転羽状文である。171－１は底部中央に円孔が開

いている。意図的に穿った可能性もあるが，器壁が薄く，自然に開いた可能性も考えられる。

171－７は小型壺の口縁部から胴部の破片である。口縁部は長く，口縁部中央で強く外反する。171－８も小型壺の胴部から底部にかけての破片である。171－９はミニチュア壺で，口縁部を欠く。171－10～12は中・大型壺の底部である。171－10・11は底部くびれ部に１条の沈線が巡る。171－10は底部外面に２条の沈線が施されている。

172－１は大型壺の破片である。口縁部は長く，口縁部中央で強く外反する。口縁部と頸部の境には３条の沈線，頸部と胴部上半の境には２条の沈線が巡る。172－２～４は中大型壺である。口縁部は長く，口縁部中央で強く外反する。172－５は中型壺である。口縁部は短く口縁先端が折れ曲がる。口縁部と頸部の境に１条の沈線，頸部と胴部の境にも１条の沈線が巡る。この土器は他の土器よりも１型式古いものと判断した。

173－１～175－10は中大型甕で，口縁部が強く屈曲するものである。173－１～５は無文の甕である。173－６～13は口縁直下に曖昧な段が巡る。それらの中で，173－12・13は口縁端部に刻目が施される。174－１～９は口縁直下に１条の沈線が巡る。174－10～175－４は口縁直下に２条の沈線が巡る。それらの中で，175－４のみ口縁部下端に刻目が施される。175－５～10は口縁直下に２条あるいは３条の沈線が巡り，その沈線間に刺突文が施される。

176－１～４は中型甕で，口縁部が強く屈曲するものである。176－１・２は無文，176－３は口縁端部に刻目，口縁直下に１条の沈線，176－４は口縁直下に曖昧な沈線が巡る。

176－５～177－３は大型甕で口縁部が強く屈曲する。176－５・７・９は口縁直下に曖昧な段が巡る。それらの中で176－９のみ口縁端部全面に刻目が施される。176－６・８は口縁直下に１条の沈線が巡る。177－１・２は口縁直下に２条の沈線が巡り，177－２のみ沈線間に刺突文が施されている。177－３は口縁端部の上端，下端に細かい刻目が施され，口縁直下及び，胴部上半には刺突文が巡る。沈線は無い。

177－４は大型甕である。口縁部は長く，緩やかに外反し，口縁上端をつまみあげている。口縁直下に段は無く，胴部上半に曖昧な段が巡る。177－５は中大型甕である。口縁部は長く，緩やかに外反し，口縁上端をつまみあげている。胴部上半には段が巡る。この２点の土器は他の土器よりも１型式古いものと判断した。

178－１・２は超大型甕である。口縁は長く，強く屈曲する。178－１は口縁下端に刻目が部分的に巡る。口縁直下に段が巡る。178－２は口縁下端に刻目が部分的に巡る。また，内面側にも刻目が部分的に巡る。口縁直下及び胴部中央に曖昧な段が巡る。178－３は大型甕である。口縁部は長く，強く屈曲する。口縁端部全面に刻目，口縁直下に段が巡る。

178－４～179－15は甕の底部である。基本は平底をなし，括れて立ち上がる。底部の中央で約２㎜程度上底になるものも少数ある。179－14・15は焼成後に底部外面から円孔が１つ穿かれている。

180－１～181－６は鉢である。180－１～４は中大型鉢である。口縁部は強く屈曲する。内外面ともハケメが施されている。180－１～３は無文である。180－４は口縁直下に１条の沈線が巡る。180－５～10は中型鉢で，口縁部が短く外反し，口縁端部が先細る。内外面ともハケメが施されている。

180－11は胴部から直線的に開く口縁部で，口縁端部は先細る特異な器形をなす。口縁直下には２条の沈線が巡る。180－12は口縁部が長く折れ曲がり，口縁直下には曖昧な段が巡る。

181－１は大型鉢で，口縁部が長く強く外反する。口縁直下には段が巡り，内外面ともにミガキが施されている。181－２～５は中大型鉢で，口縁は短く，強く屈曲する。胴部文様は無く，181－３～５は内外面ともにミガキが施されている。181－６は中型鉢で，口縁部が強く屈曲する。胴部文様は無く，内外面ともにミガキが施されている。

181－７は高杯の接合部である。接合部には断面三角形の突帯が巡る。

181－８～11は中大型甕の甕蓋である。181－８は天井部中央が窪み，器高約11㎝を測る。内外面ともミガキが施される。181－９～11は天井部全体が凹む。181－９は器高約９㎝を測る。

181－12はミニチュアの鉢の蓋である。天井部は全体に凹む。口縁部には２か所に２つ１組の円孔が穿かれている。181－13・14はミニチュアの鉢である。181－13は口縁が内湾して立ち上がり，口縁部には２か所に２つ１組の円孔が穿かれている。181－15はミニチュアの高杯である。

181－16・17は土笛である。181－17はミニチュアの土笛で前後に4つずつ，合わせて８つの円孔が穿かれた変わった土笛である。

181－18は，棒状土製品である。粘土紐を片手で握りそのまま乾燥させ，焼成したものである。このような土製品の出土は稀で，また，このような土製品を遠方に移動させる意図が考えにくい。よって，土器焼成が近くで，つまり矢野遺跡で行われていたことを示す資料と考えられる。

182－１・２は黒曜石の石鏃である。基部が凹む。182－３は黒曜石の楔形石器である。182－４は黒曜石の石核で,片面は剥離面,その反対には自然面が残る。この資料から,原石は握拳大のものであったと考えられる。産地分析の結果，隠岐の久見産と判定された。182－５は黒曜石の楔形石器の削片である。182－６は黒曜石の楔形石器である。182－７は黒曜石で，２次加工のある剥片（以下，RFと略す），あるいは石鏃の未製品である。182－８は黒曜石のRFである。182－９は瑪瑙の使用痕のある剥片である（以下，UFと略す）。182－10は瑪瑙の楔形石器である。182－11・12は瑪瑙の原石であるが，割れがある。183－１・２は瑪瑙の石核である。183－３・４は瑪瑙の原石である。

184－１は安山岩の伐採石斧の未製品で，敲打後，体部を研磨した段階と考えられる。横断面は扁平で，厚さ約3.4㎝を測る。厚斧化する前段階の資料である。184－２・３は石庖丁の破片である。184－２は直線刃半月形をなす。184－４～６は粗製剥片石器である。184－７は扁平な磨製石器である。当該期の一般的な扁平片刃石斧とは異なるものである。184－８・９は石鏃である。体部や側部が部分的に研磨されている。185－１～４は敲石，185－５・６は砥石である。186－１は砂岩の原石，186－２は安山岩の原石，186－３・４は流紋岩の原石である。

以上の遺物が溝の１層を中心に散在して出土した。よって，SD2626は土器から弥生前期後葉に埋没したと考えられる。

２．Ｃ区の遺構出土遺物

土坑SK3049（187－１～７　図版88・100）

SK3049の上層から下層にかけて弥生土器が出土している。187－１～３は中型壺である。187－１・３は口縁部が強く屈曲している。187－４は中型甕で，口縁部は長く，強く屈曲する。187－５～７は中大型甕で，口縁部は長く，強く屈曲する。187－５・６は口縁直下に１条の沈線が巡る。187－７は口縁直下に２条の沈線が巡る。

以上の遺物が土坑内で散在して出土した。よって，SK3049は土器から弥生時代前期後葉に，短期間に埋没したと考えられる。

土坑SK3149（187－８～189－10　図版75・88・89・99・100）

SK3149からは弥生土器と石器が出土した。187－８～188－４は中型壺である。口縁部は長く，口縁中央で強く屈曲して開く。口縁端部は先細る。187－８～11は口縁部と頸部の境に段が巡る。187－８は貝殻腹縁で作りだされた段があり，その直下に貝殻腹縁による無軸羽状文が巡る。胴部文様も貝殻腹縁による段，沈線，逆転無軸羽状文，重弧文が巡る。187－９の胴部文様も，貝殻腹縁による段，沈線，無軸逆転羽状文が巡る。188－１の胴部文様はヘラによる有軸羽状文が巡る。188－５は無頸壺で，口縁部は内湾して立ち上がり，口縁先端の２か所に円孔が穿かれている。

188－６～９は大型甕である。口縁部が長く，強く屈曲する。188－６は口縁直下に１条の沈線，188－７は口縁直下に２条の沈線，188－８・９は口縁直下に２条の沈線と沈線間刺突文が巡る。188－10・11は中大型甕で，口縁部が長く，強く屈曲する。無文の甕である。188－12は中型甕で，口縁部は短く屈曲する。口縁直下には１条の沈線が巡る。188－13は大型甕の底部と考えられ，大きくくびれて立ち上がる。188－14は玉縁状の口縁をなす甕である。189－１～３は円盤状の甕の胴部片である。

189－４は安山岩の石鏃の基部である。189－５は安山岩のスクレーパーである。189－６は凝灰岩の砥石である。189－７は瑪瑙のUFである。189－８は瑪瑙の楔形石器である。一部自然面が残る。189－９は瑪瑙の原石である。189－10は黒曜石の三角形石鏃で，基部が凹む。

以上の遺物が土坑内で散在して出土した。よって，SK3149は土器から弥生時代前期後葉に，短期間に埋没したと考えられる。

土坑SK3157（190－１～19　図版75・99・100）

SK3157からは弥生土器と石器が出土している。190－１・２は中型壺である。口縁部が長く，口縁の途中で強く屈曲する。口縁部と頸部の境には段が巡る。190－３は壺の底部である。

190－４～11は中大型甕である。口縁部が強く屈曲する。190－４・５は口縁直下に曖昧な段が巡る。190－６～８は口縁直下に１条の沈線が巡る。190－９は口縁直下に２条の沈線が巡る。190－10は口縁端部に部分的な刻目が施され，口縁直下に３条の沈線が巡り，その沈線間に刺突文が施されている。190－11は口縁下端に刻目が施されている。190－12・13は甕の底部である。190－14は中大型鉢である。口縁部は短く強く屈曲する。口縁直下に曖昧な段が巡る。

190－15は安山岩の大型石庖丁である。190－16は黒曜石の三角形石鏃で，基部が凹む。190－17は黒曜石のUFである。190－18は安山岩製のスクレーパーである。190－19は黒曜石のRFである。

以上の遺物が土坑内で散在して出土した。よって，SK3157は土器から弥生時代前期後葉の短期間に埋没したと考えられる。

土坑SK3175（191－１～７　図版89・100）

SK3175からは弥生土器と石器が出土している。191－１は小型壺である。頸部と胴部の境に１条の沈線が巡る。191－２～４は中・中大型甕の底部である。191－５は匙型土製品で，柄は欠損している。191－６は瑪瑙のRFの可能性がある。191－７は瑪瑙の楔形石器の可能性がある。

以上の遺物が土坑内の１層から散在して出土した。よって，SK3175は土器から弥生時代前期後葉に埋没したと考えられる。

３．Ｄ区の遺構出土の遺物

土坑SK4135（191－８～13　図版89・100）

SK4135からは弥生土器と石器が出土した。191－８は中大型壺である。口縁部が長く，口縁中央で強く屈曲する。口縁部と頸部の境に１条の沈線が巡る。頸部と胴部の境には段と沈線がめぐり，その下に大型の重弧文が巡る。191－９は大型甕である。口縁部は強く屈曲する。口縁端部全面に刻目が巡る。口縁直下には２条の沈線が巡り，その沈線間に刺突文が施されている。191－10・11は中・中大型甕の蓋である。191－10は天井部全体が凹む。191－12は小型鉢である。191－13は黒曜石の石核である。一部に自然面が残る。産地分析の結果，隠岐の久見産と判定されている。

以上の遺物が土坑内から散在して出土した。よって，SK4135は土器から弥生時代前期後葉に短期間に埋没したと考えられる。

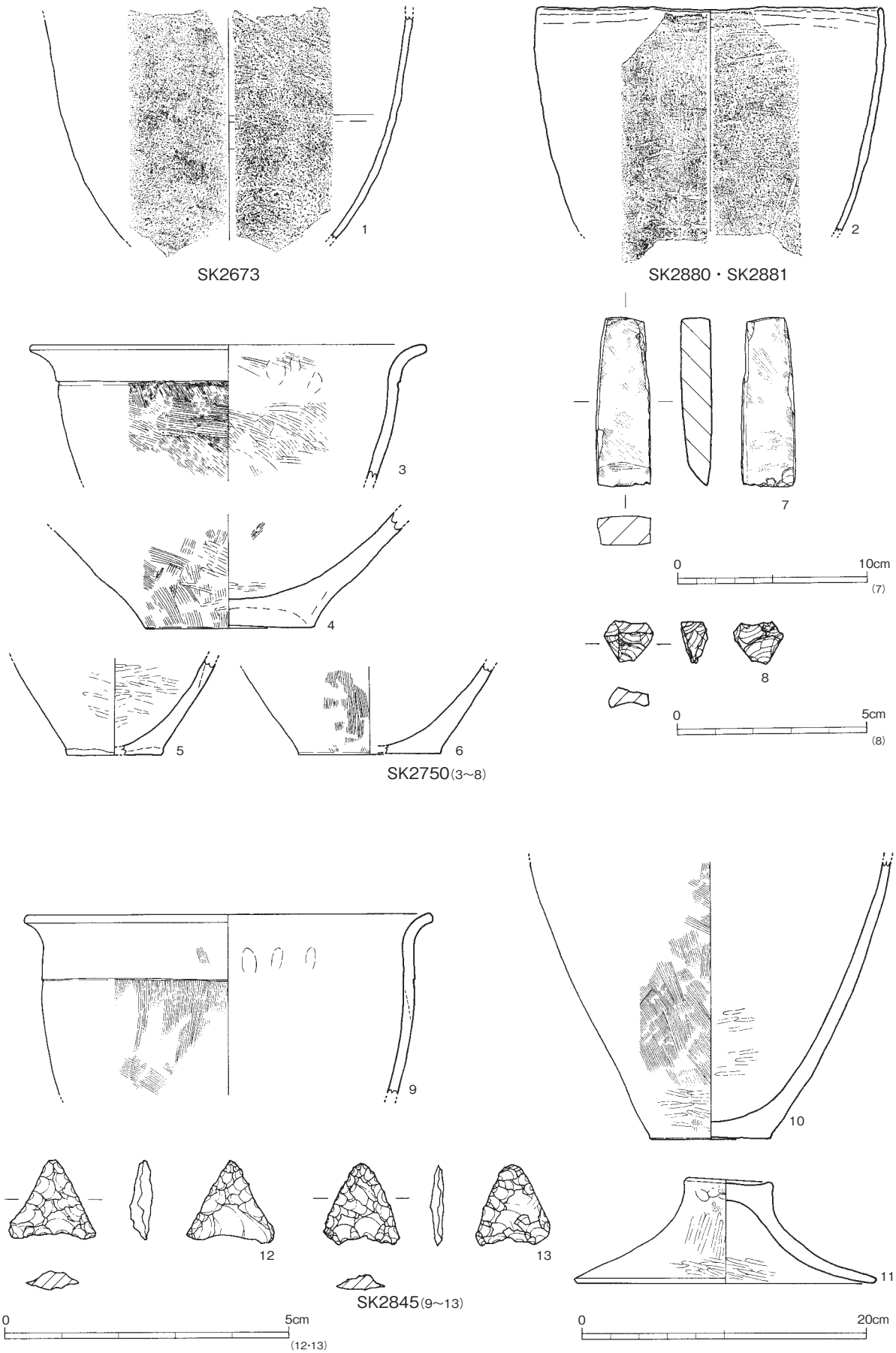
４．Ｅ区の遺構出土遺物

土坑SK5007（192－１～194－Ｃ　図版98）

SK5007からは弥生土器と石器が出土した。192－１～４は中大型甕である。192－１・２は口縁部が長く，強く屈曲する。192－２は口縁直下に１条の沈線が巡る。192－５は大型鉢である。口縁部が長く，強く屈曲する。

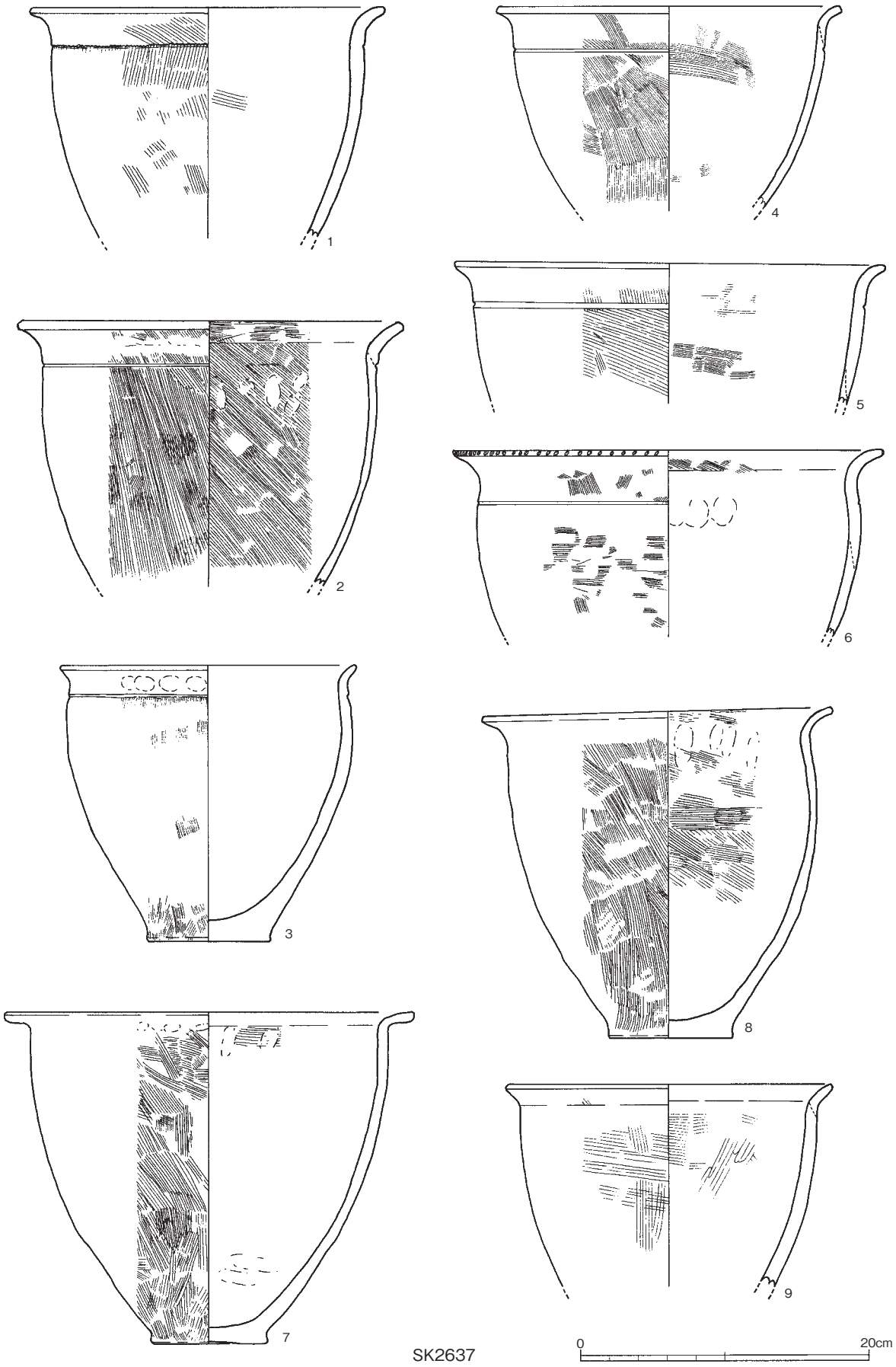
192－A1～194－Ｃは玉髄の剥片接合資料である。自然面が部分的に残る。Ａは13点の剥片が接合する。上部の礫面Ａ１を取り除き，ある程度平坦な面を打点として，正面，右面から剥片を取っているが，他面では剥離方向は一定しない。Ａ４はさらに５片に分割される。A4－３，A4－４は上下両端に潰れをもち，楔形石器としての利用がうかがえる。また，Ａ４－５はさらに３片に分割される。Ｂは８点の剥片が接合する。ＢはＡと同一原石から分割されたと思われるが接合はしなかった。Ｂは打面と作業面の関係が不安定であり，剥片も不定形なものが多い。Ｂ２とＢ３は接合時に楔形石器として利用したことがうかがえる。194－Cは楔形石器である。Ａ・Ｂとは接合しないが，同一の原石から剥離したものと判断した。Ｃの産地分析を行った結果，「東出雲産」に似るが，産地の特定には至らなかった。矢野遺跡では玉髄の石材を使った定型的な製品はなく，何を作ろうとしていたかは不明である。

以上の遺物のうち，土器は１層から，玉髄の剥片は２層から出土している。よって，SK5007は土

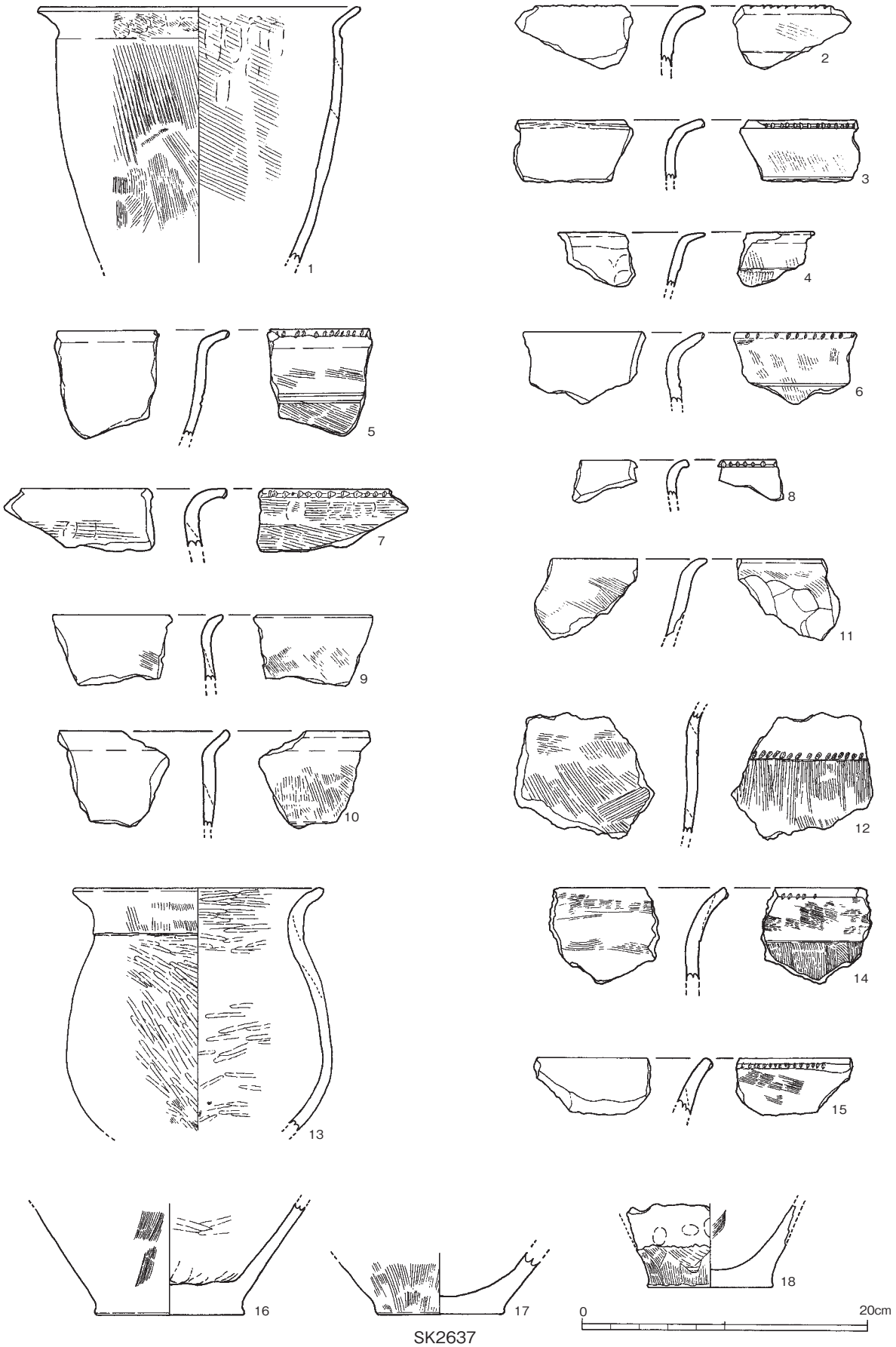


第160図　縄文時代晩期・弥生時代前期　遺構出土遺物（1：4，1：3，2：3，1：1）

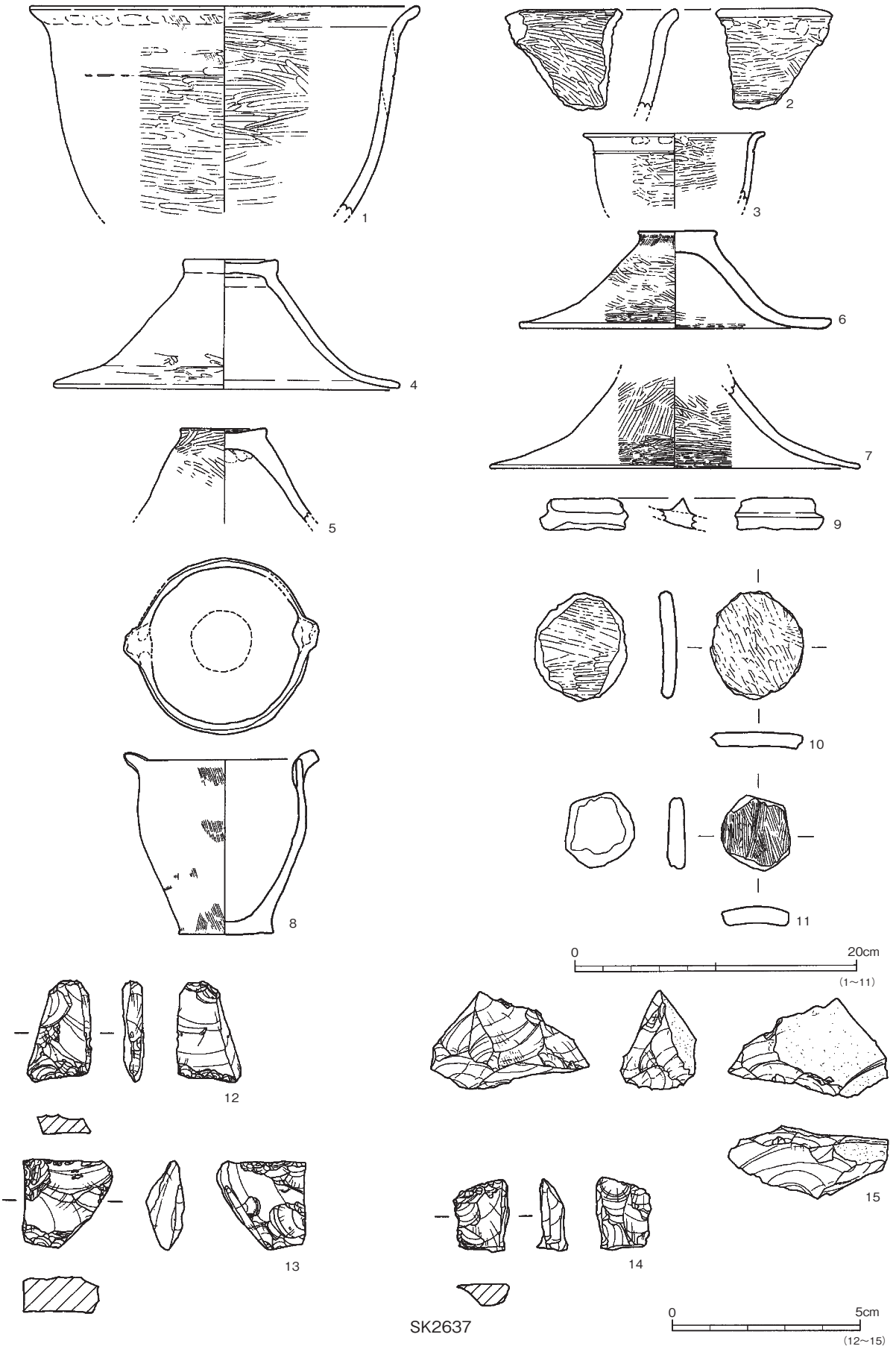
第161図　弥生時代前期　遺構出土遺物１（1：4）



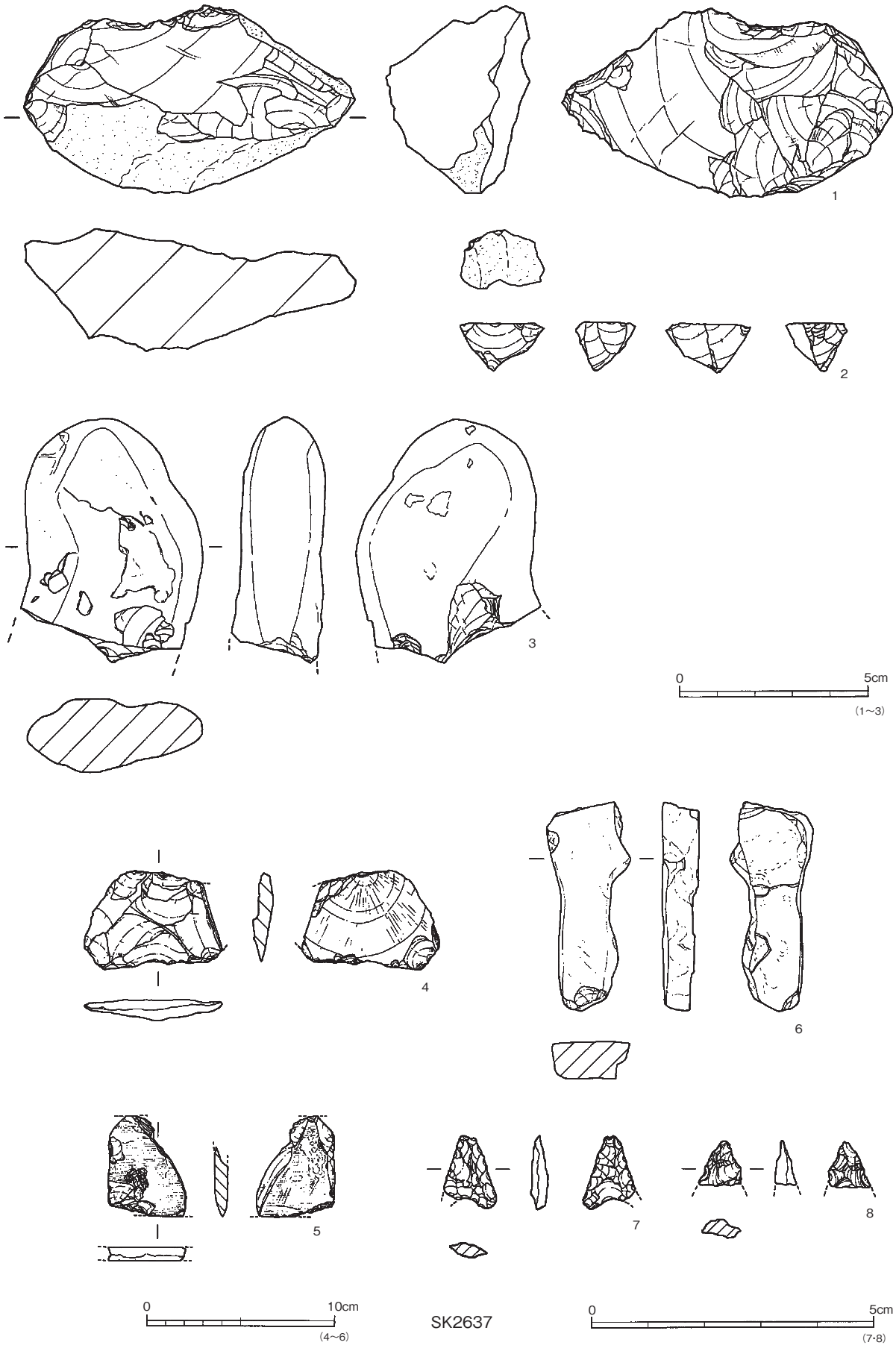
第162図　弥生時代前期　遺構出土遺物２（1：4）



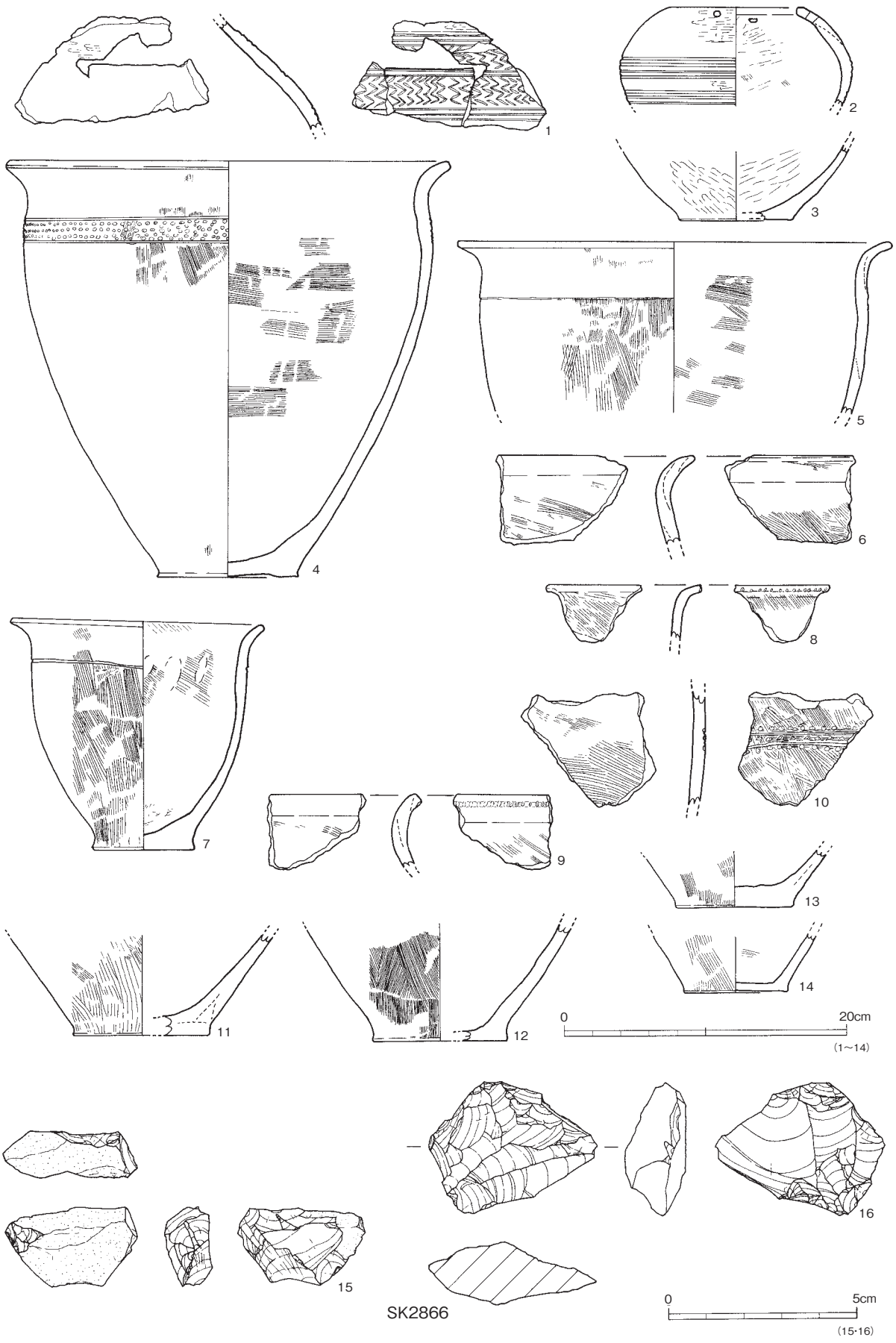
第163図　弥生時代前期　遺構出土遺物３（1：4）



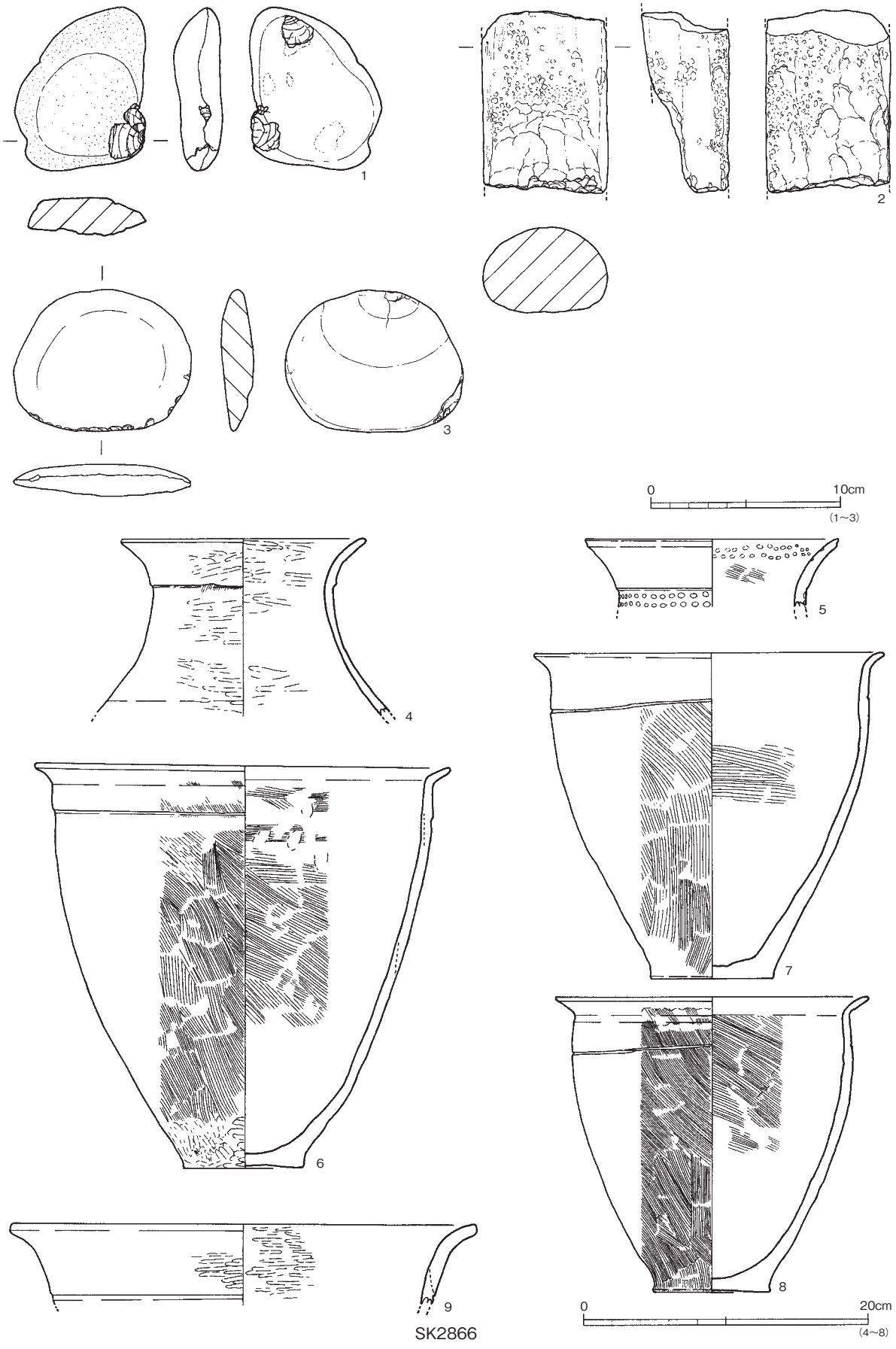
第164図　弥生時代前期　遺構出土遺物４（1：4，2：3）



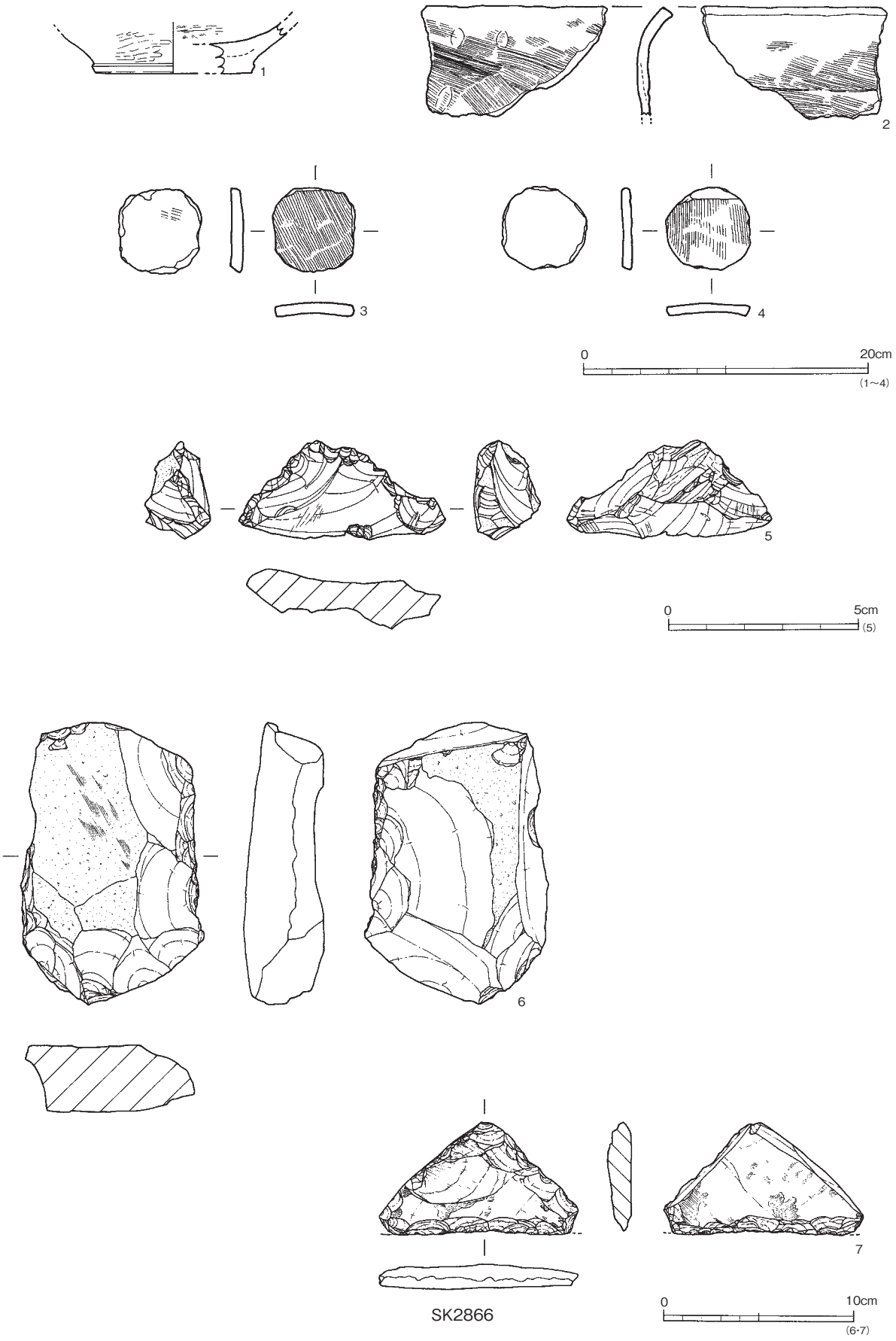
第165図　弥生時代前期　遺構出土遺物５（1：3，2：3，1：1）



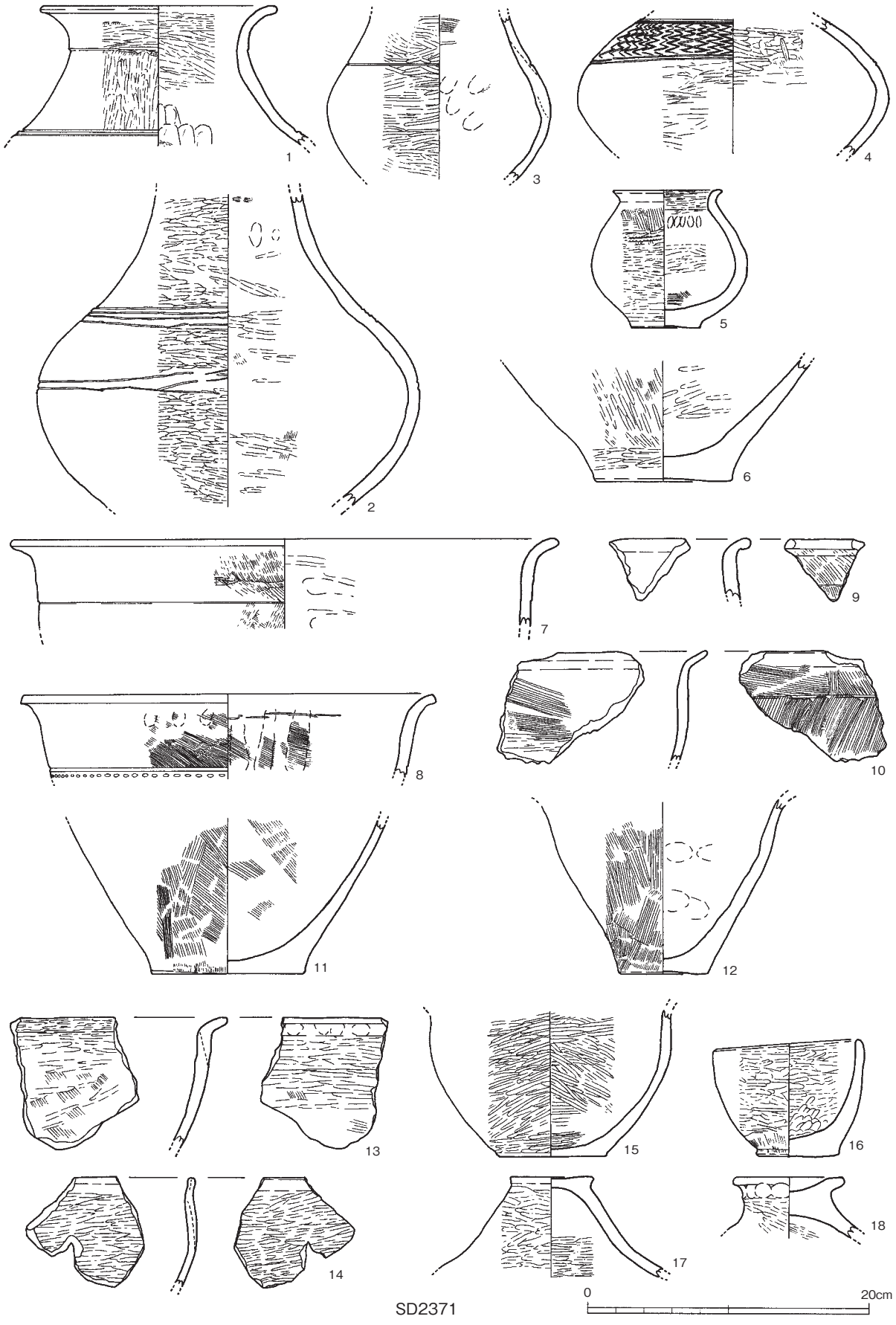
第166図　弥生時代前期　遺構出土遺物６（1：4，2：3）



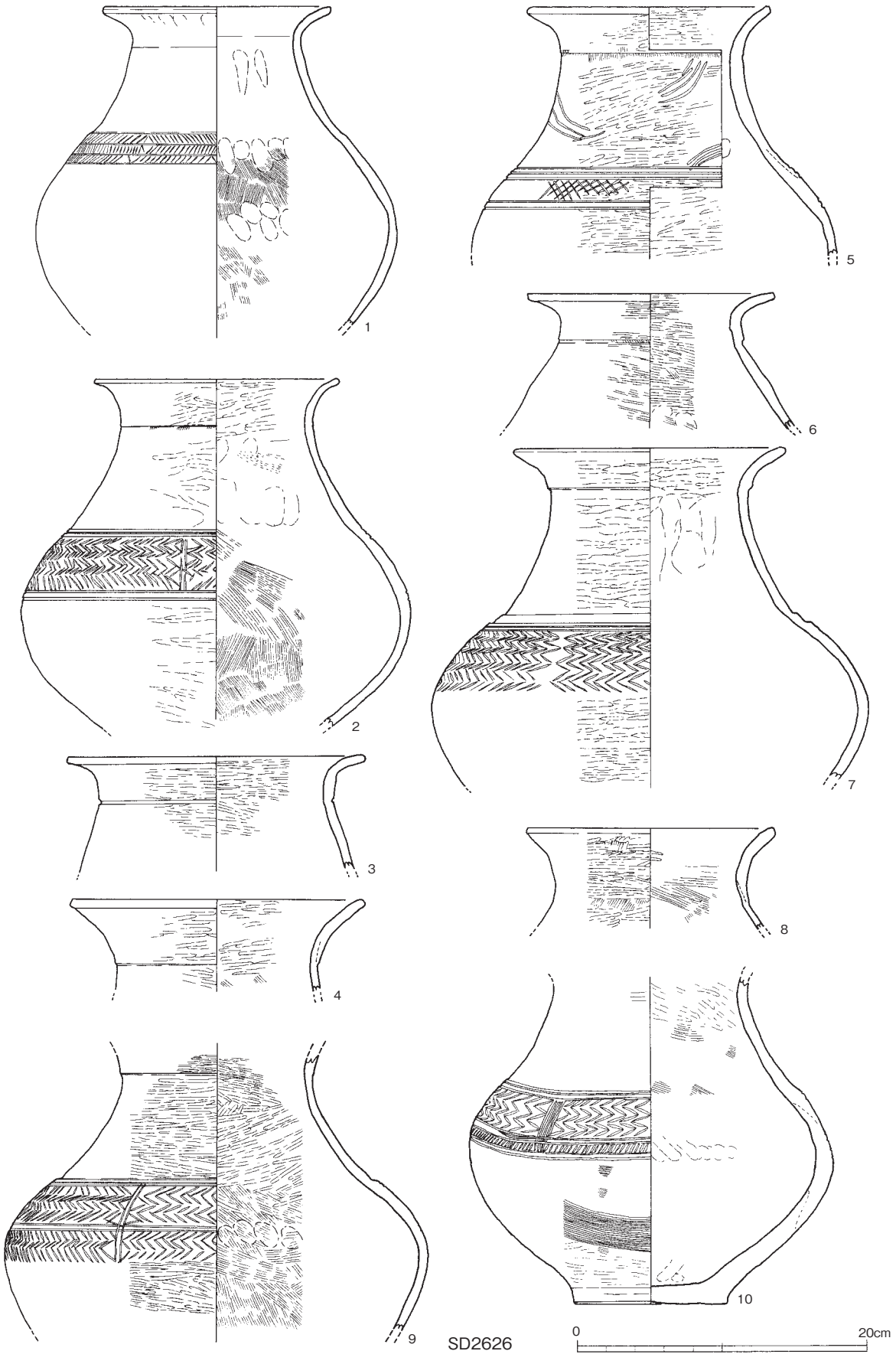
第167図　弥生時代前期　遺構出土遺物７（1：4，1：3）



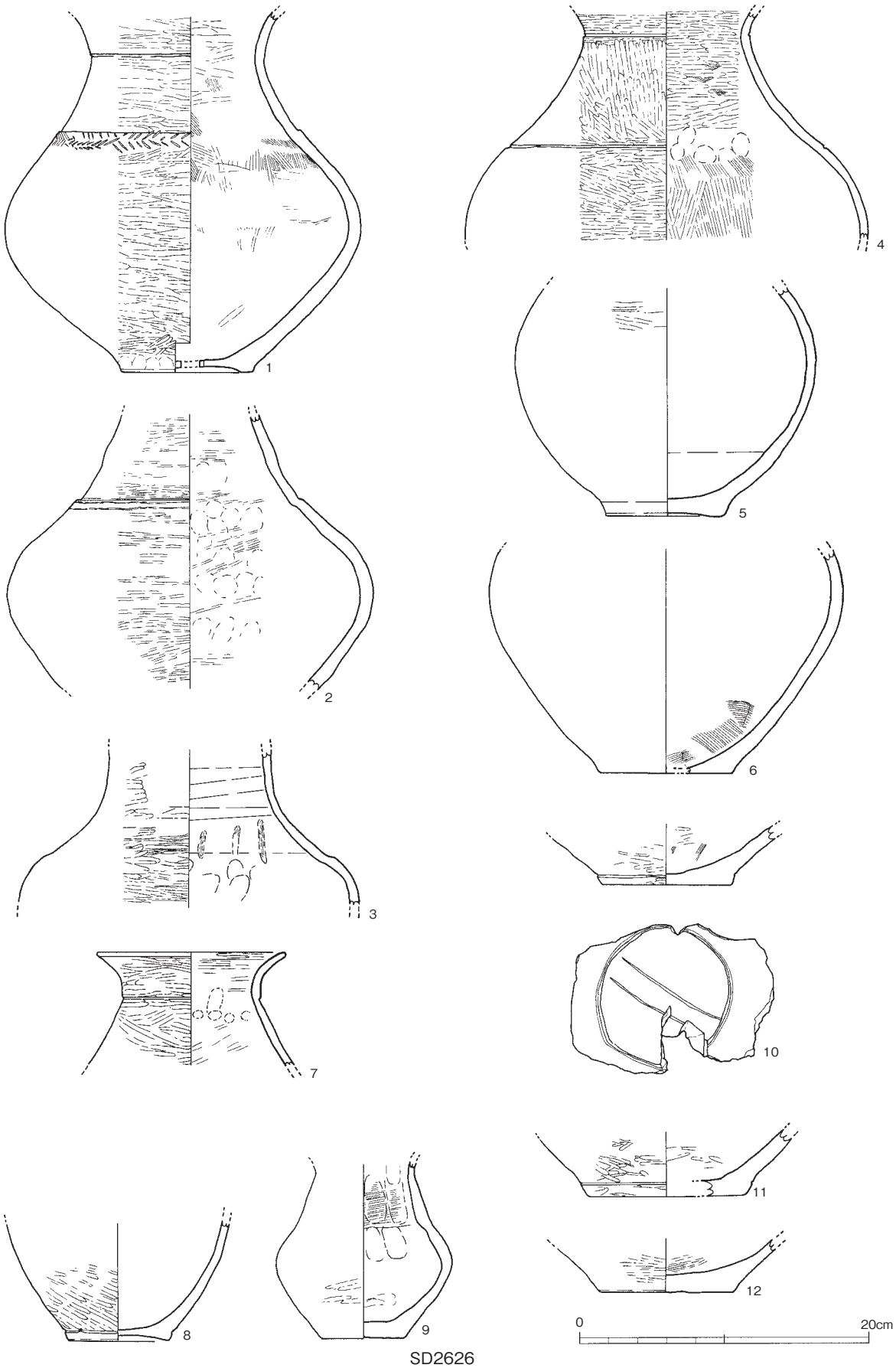
第168図　弥生時代前期　遺構出土遺物８（1：4，1：3，2：3）



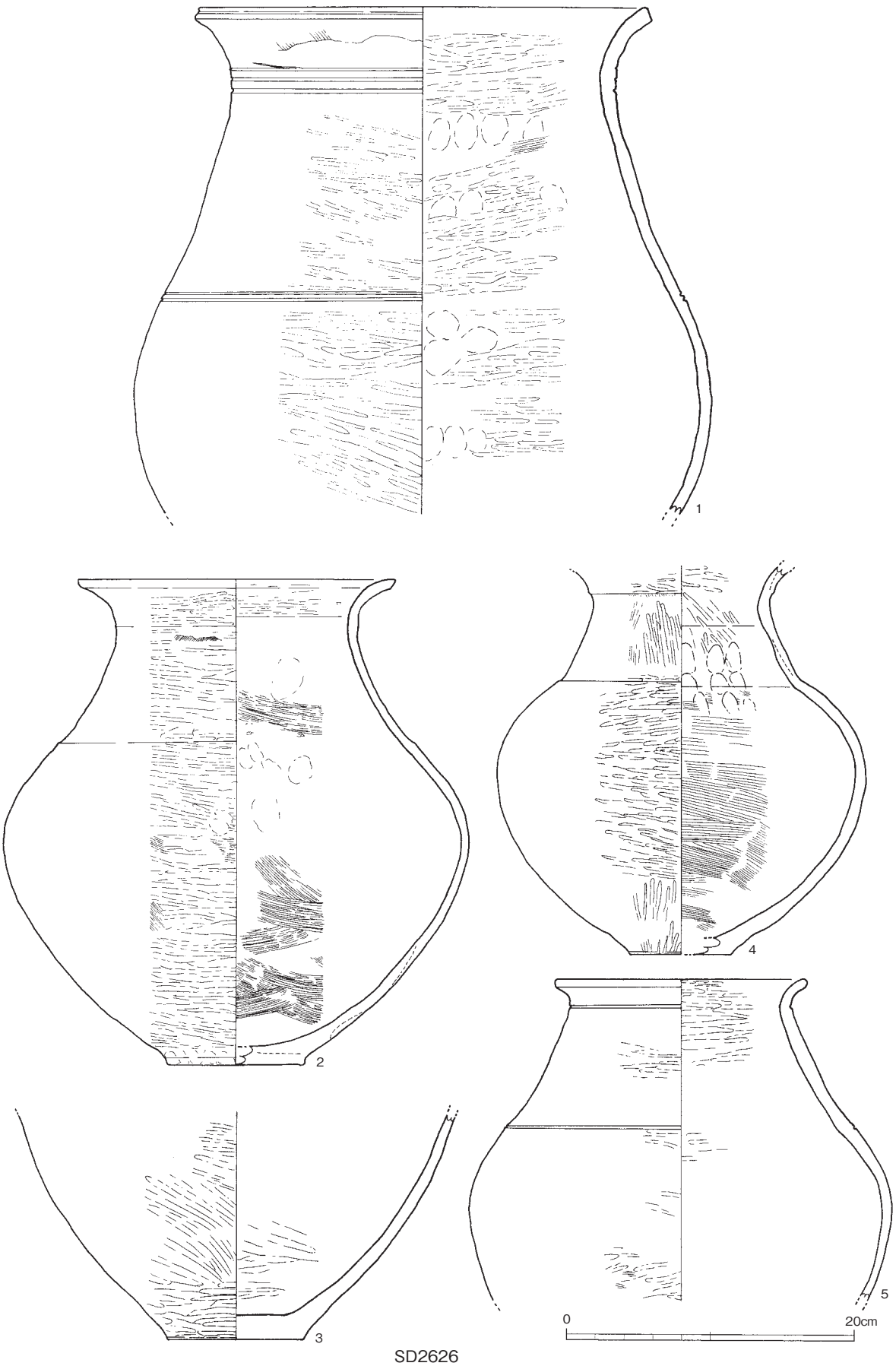
第169図　弥生時代前期　遺構出土遺物９（1：4）



第170図　弥生時代前期　遺構出土遺物10（1：4）

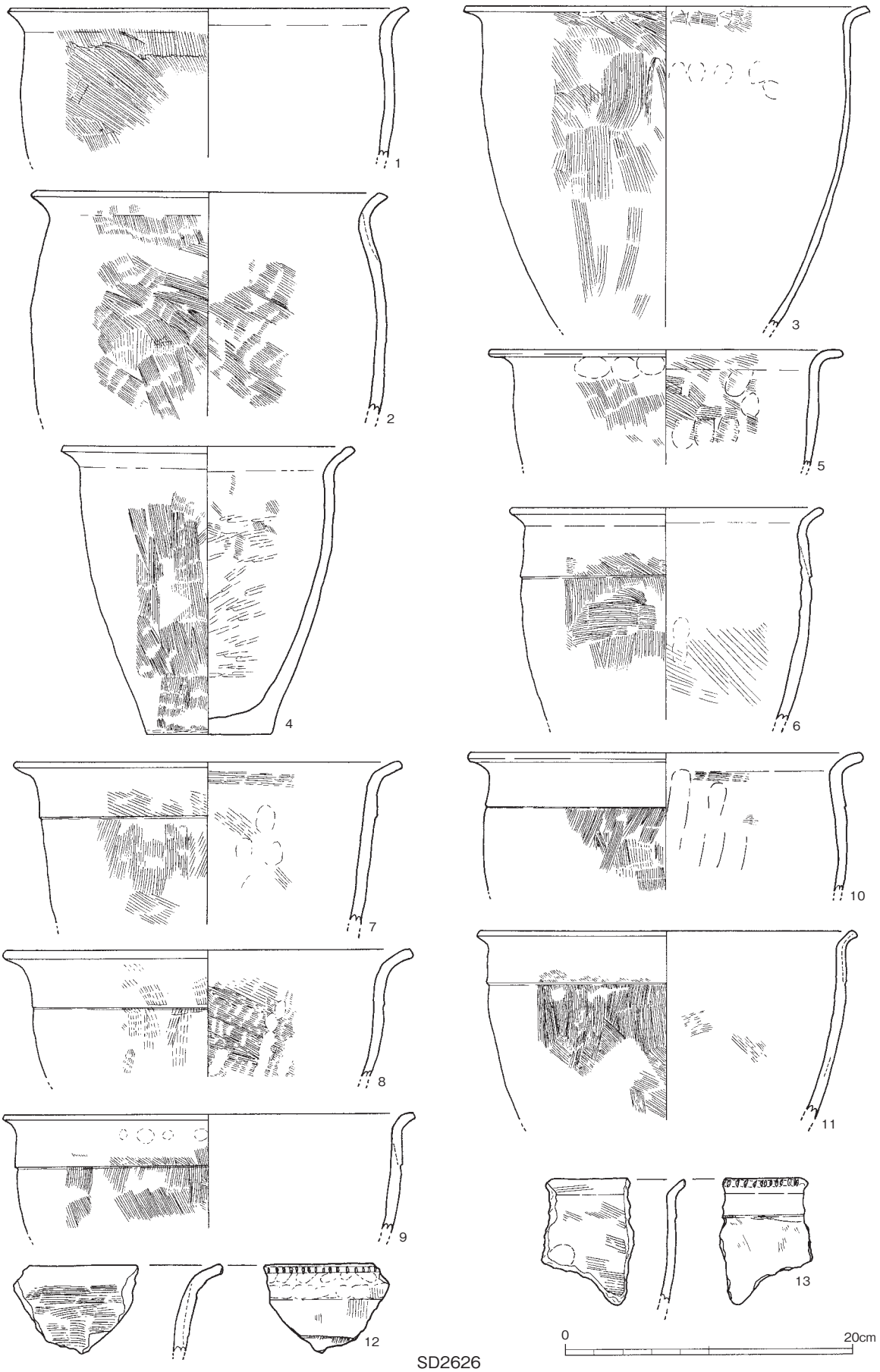


第171図　弥生時代前期　遺構出土遺物11（1：4）



SD2626

第172図　弥生時代前期　遺構出土遺物12（1：4）

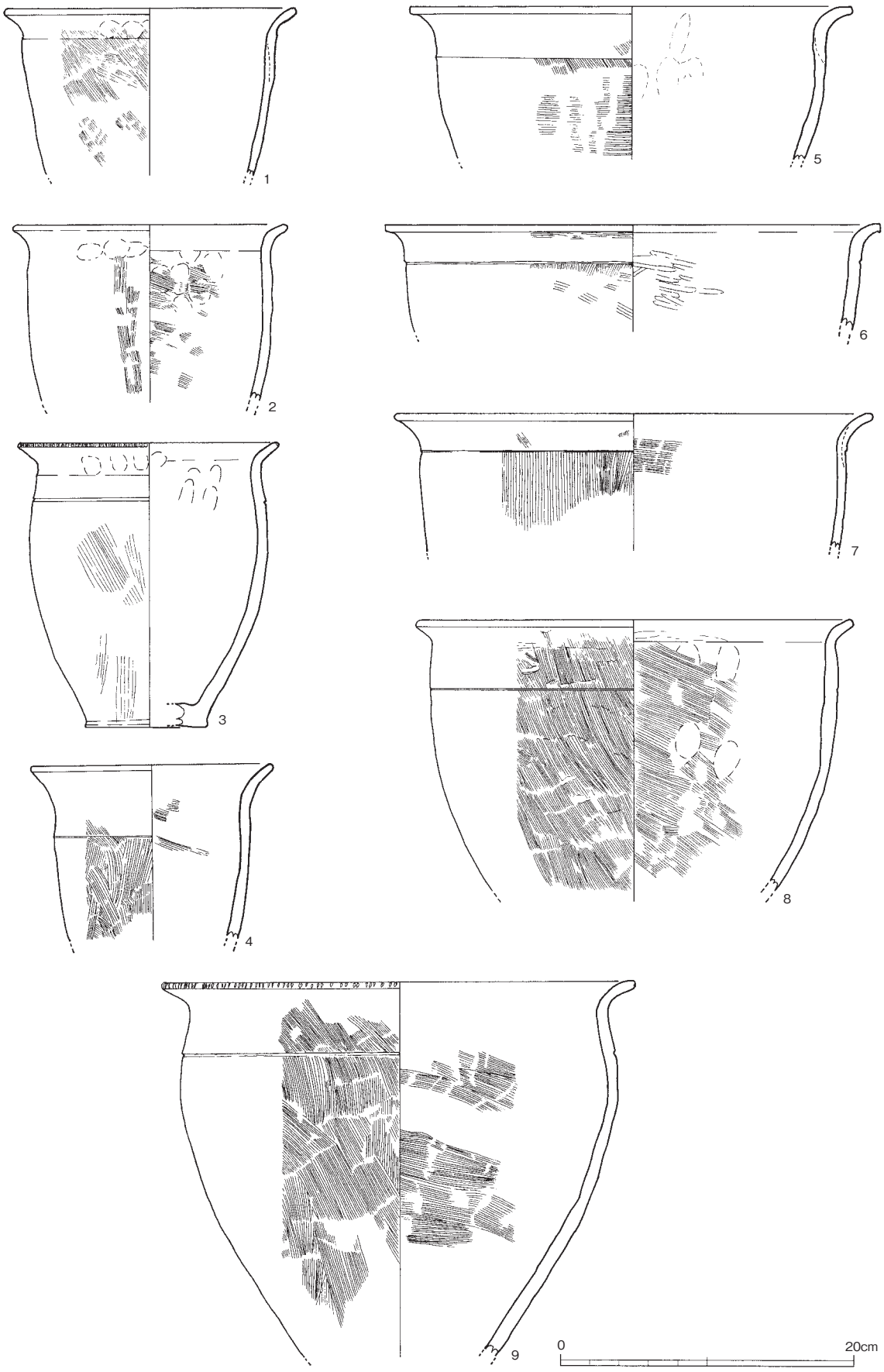


SD2626

第173図　弥生時代前期　遺構出土遺物13（1：4）

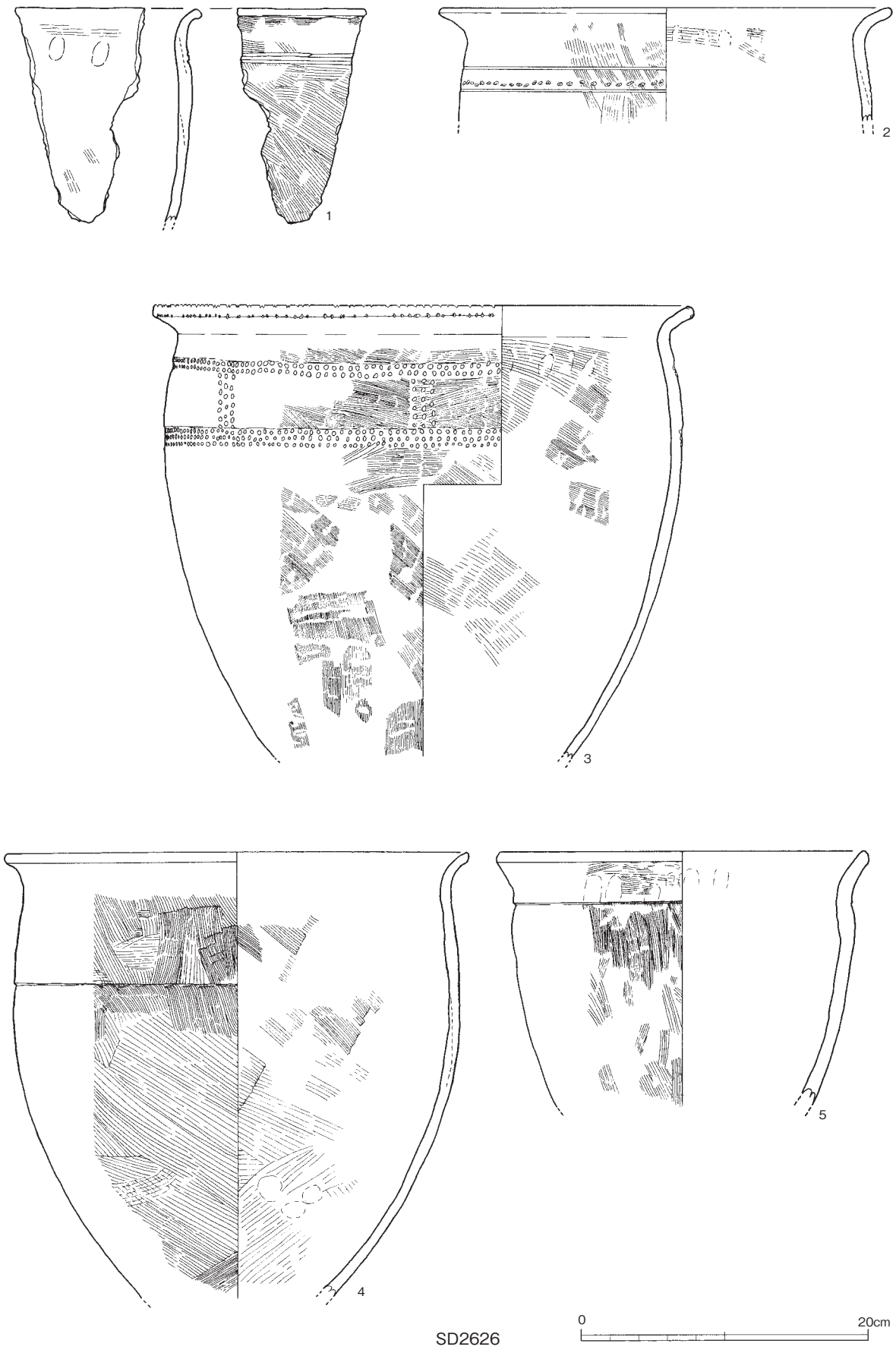
第174図　弥生時代前期　遺構出土遺物14（1：4）

第175図　弥生時代前期　遺構出土遺物15（1：4）



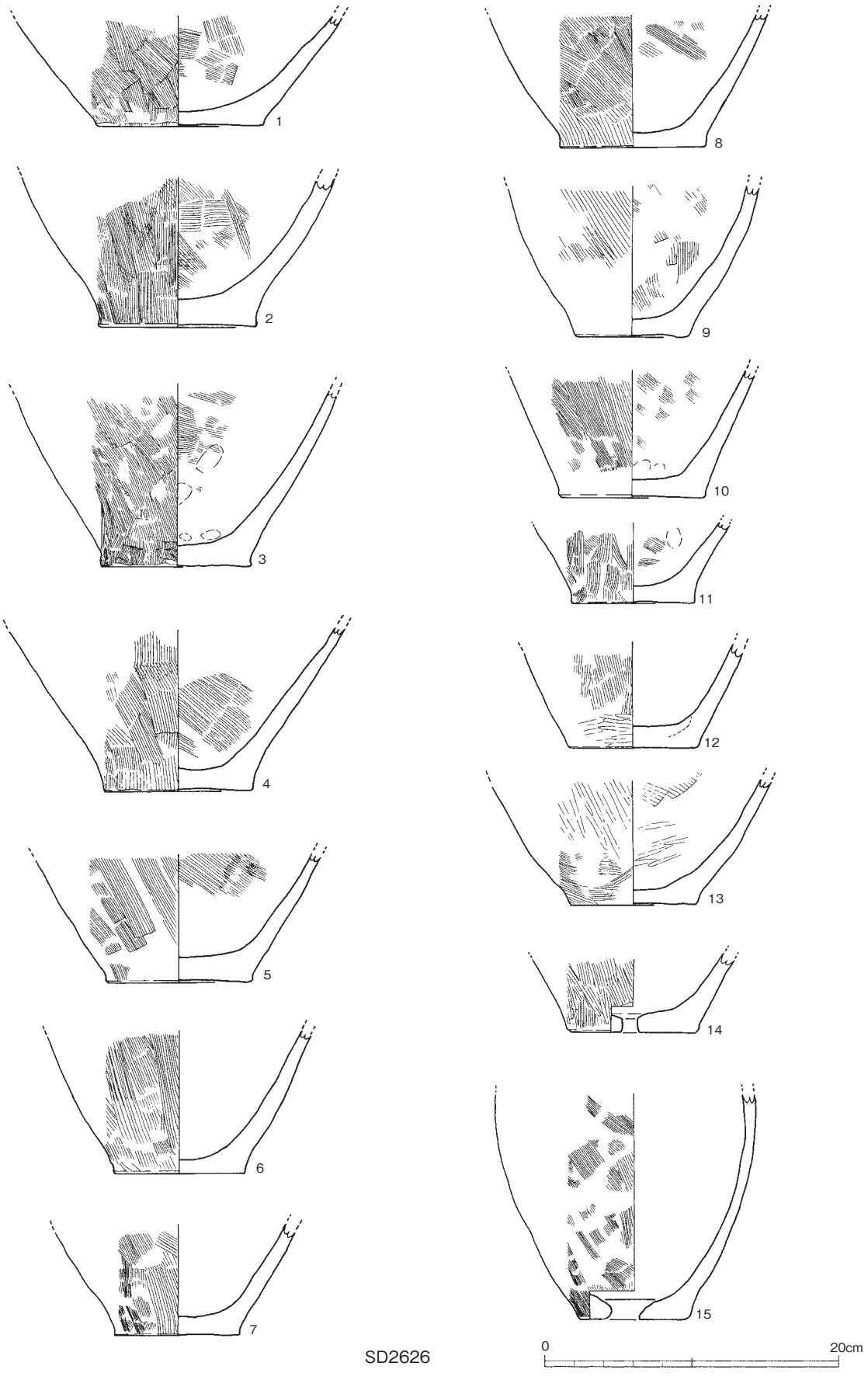
SD2626

第176図　弥生時代前期　遺構出土遺物16（1：4）

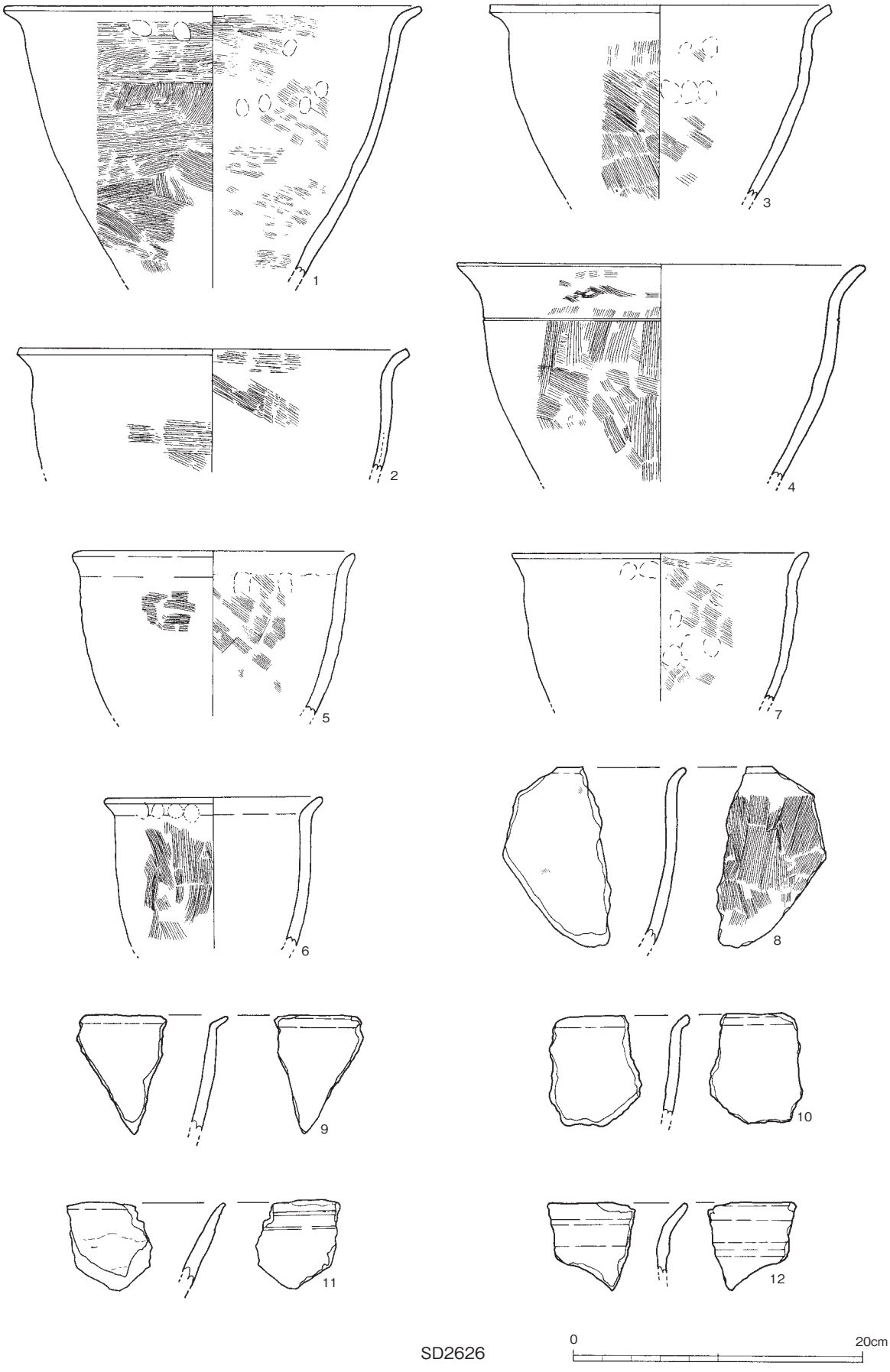


第177図　弥生時代前期　遺構出土遺物17（1：4）

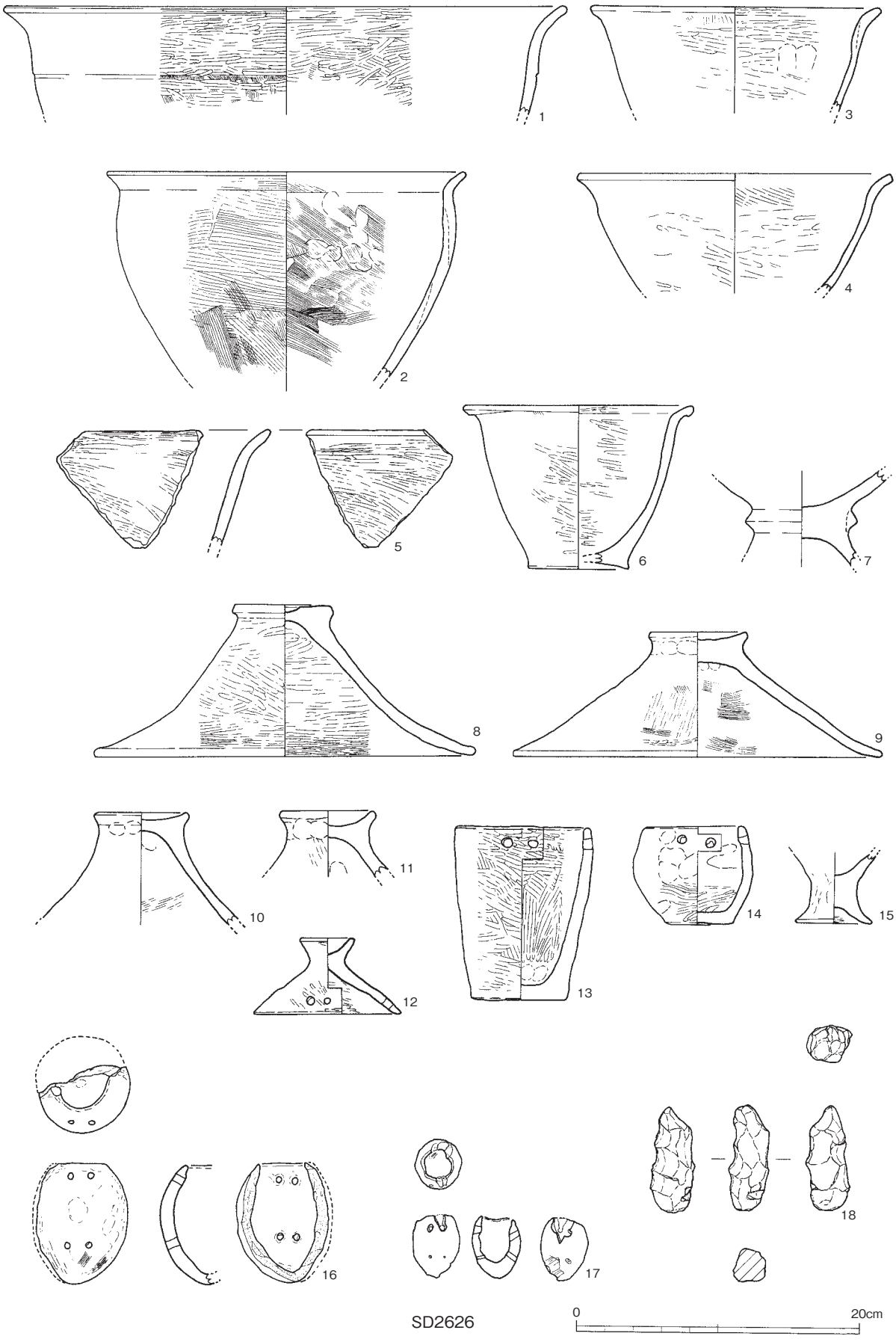
第178図　弥生時代前期　遺構出土遺物18（1：4）



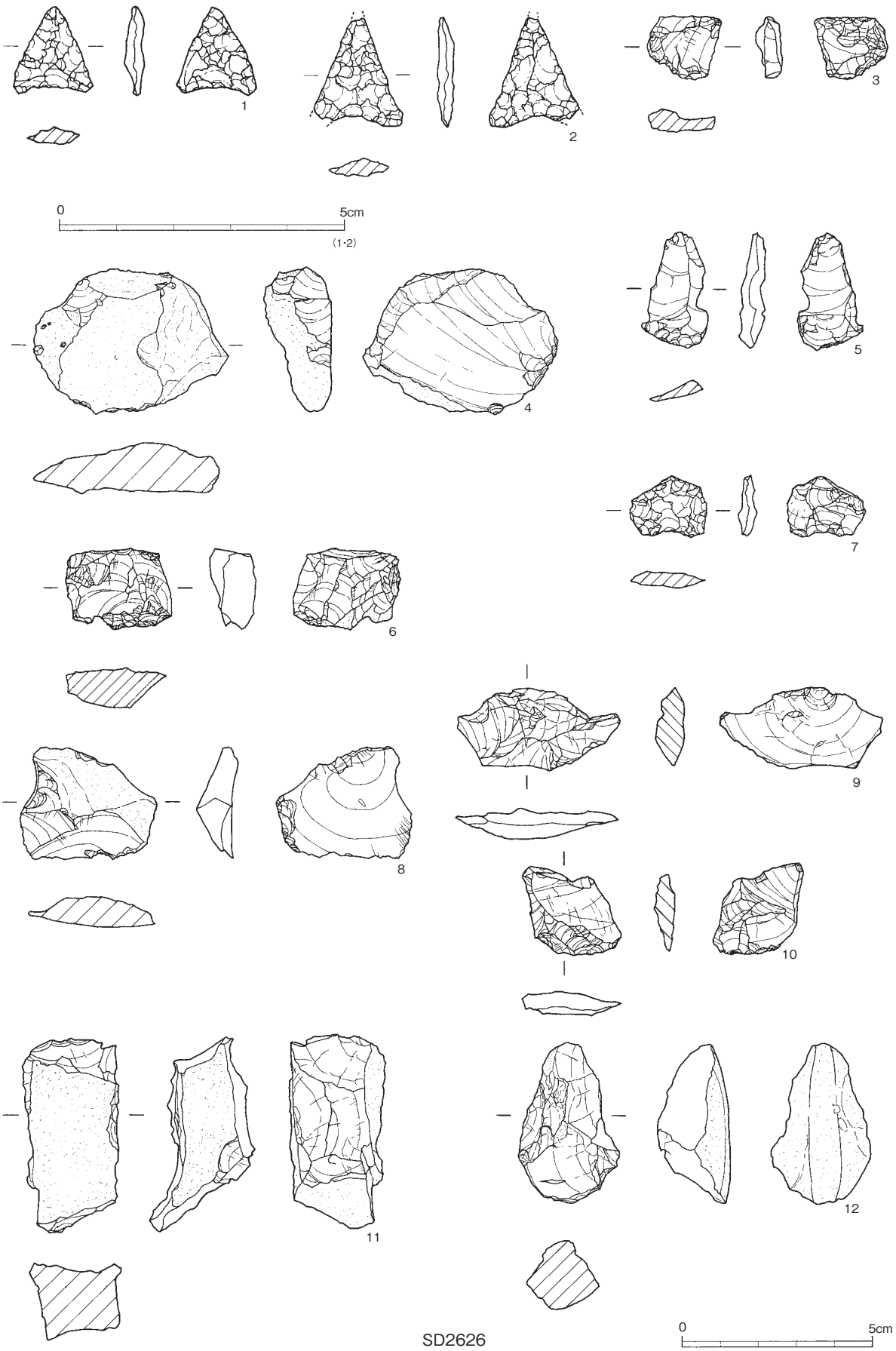
第179図　弥生時代前期　遺構出土遺物19（1：4）



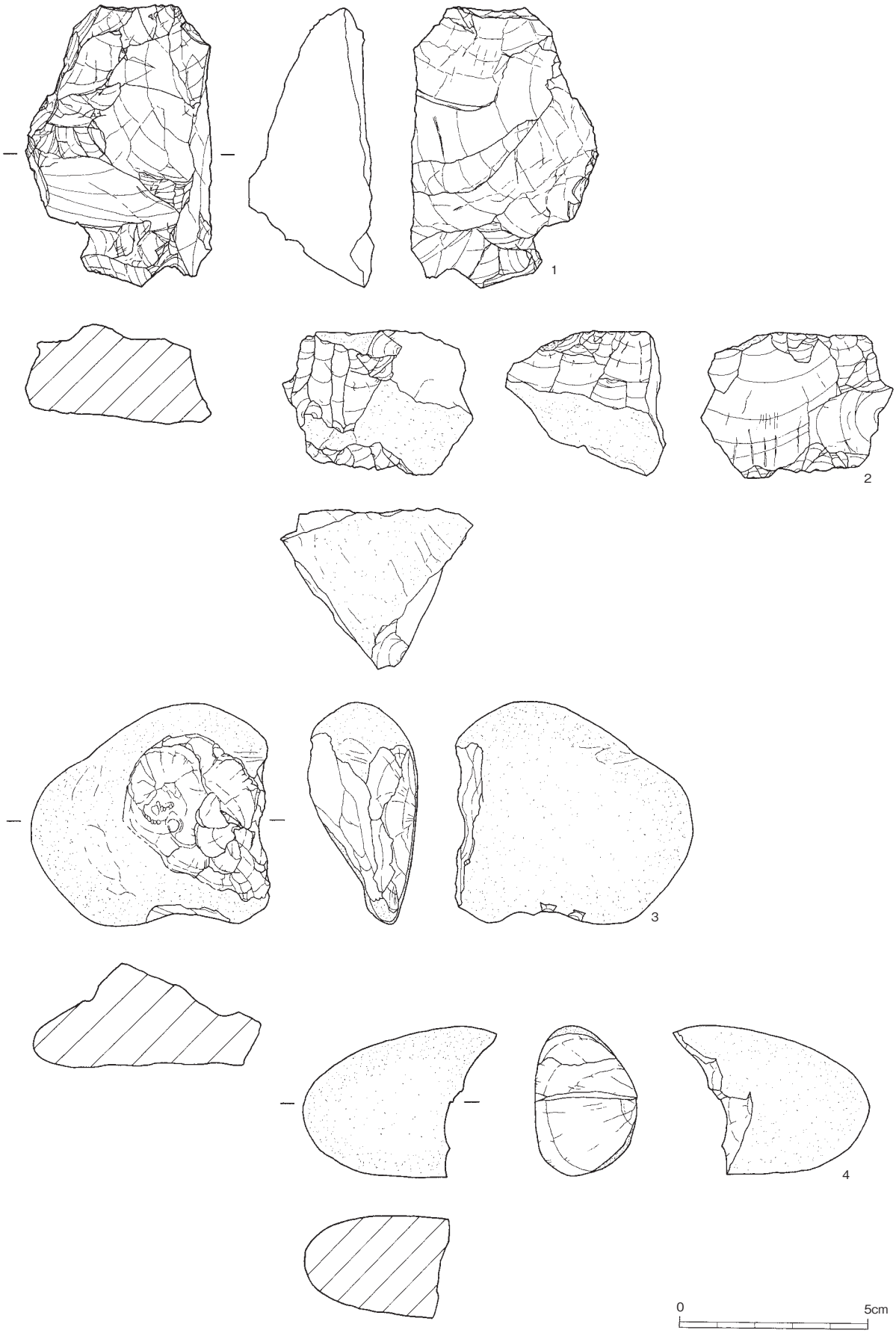
第180図　弥生時代前期　遺構出土遺物20（1：4）



第181図　弥生時代前期　遺構出土遺物21（1：4）

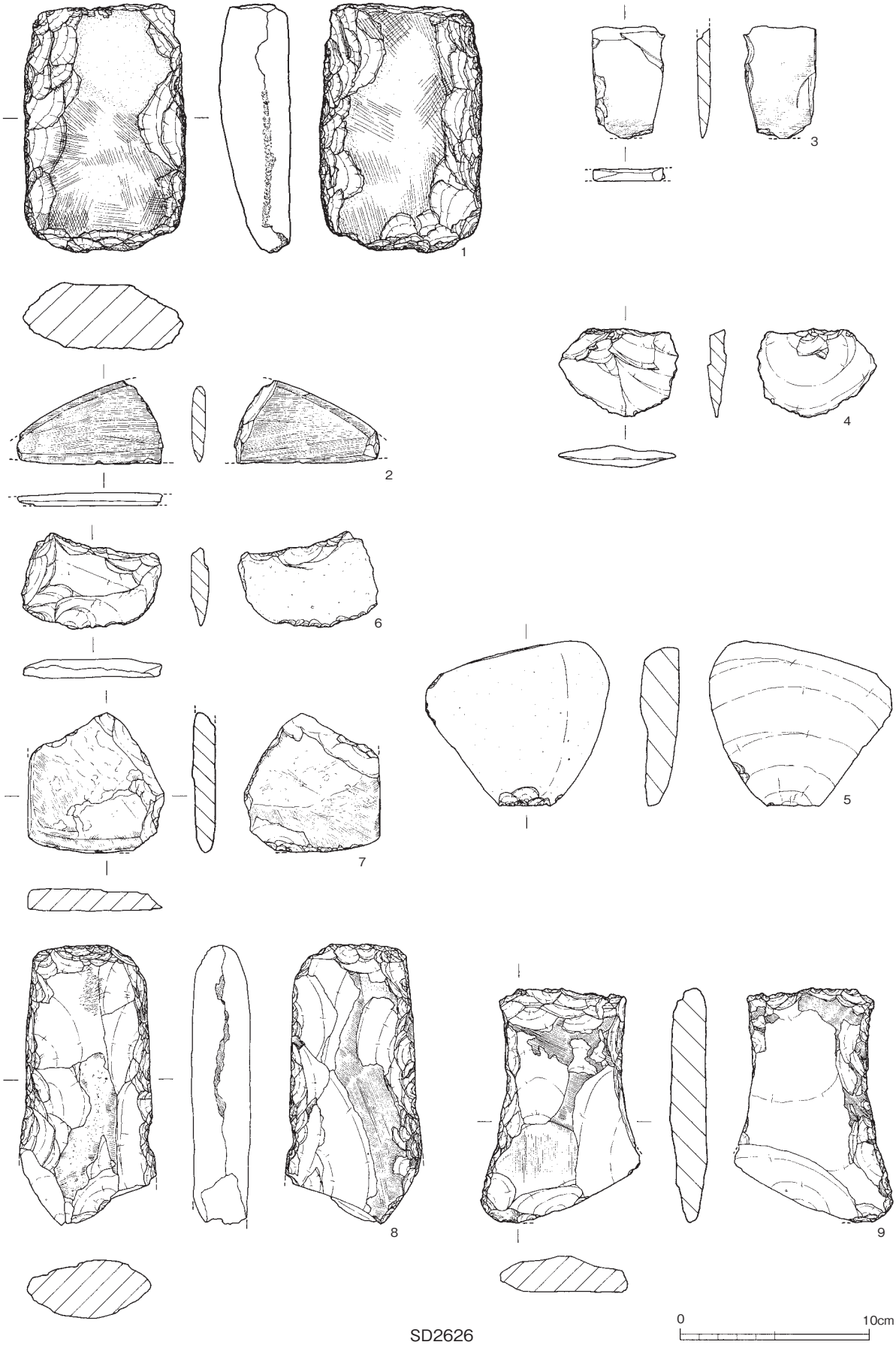


第182図　弥生時代前期　遺構出土遺物22（2：3，1：1）



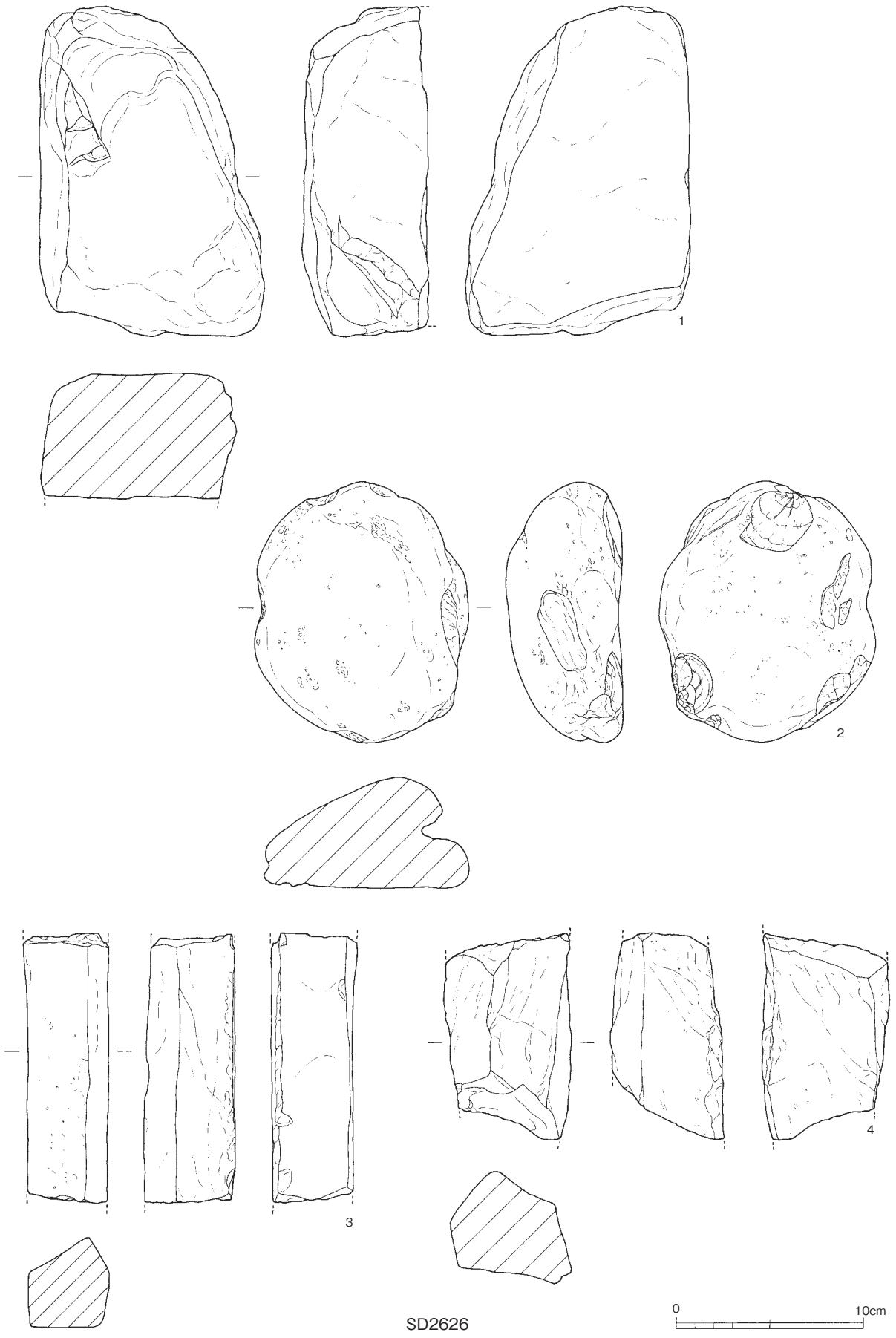
SD2626

第183図　弥生時代前期　遺構出土遺物23（2：3）

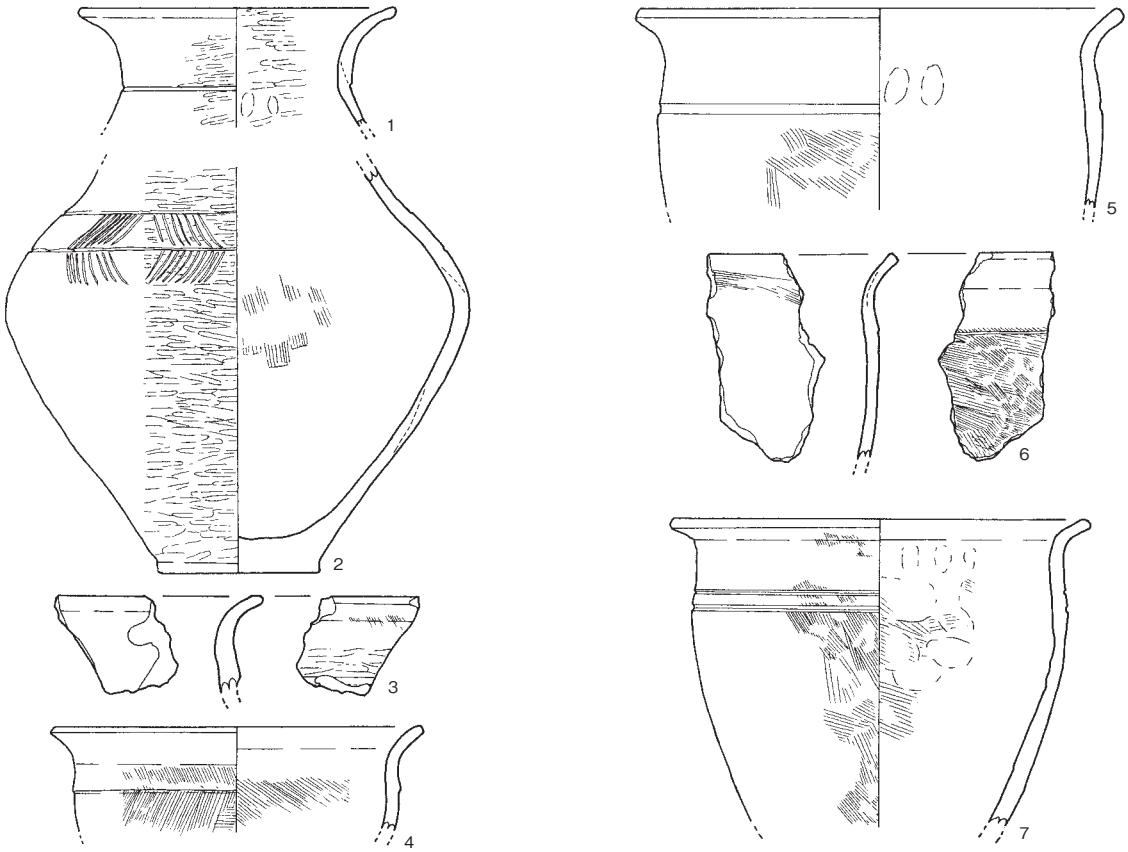


第184図　弥生時代前期　遺構出土遺物24（1：3）

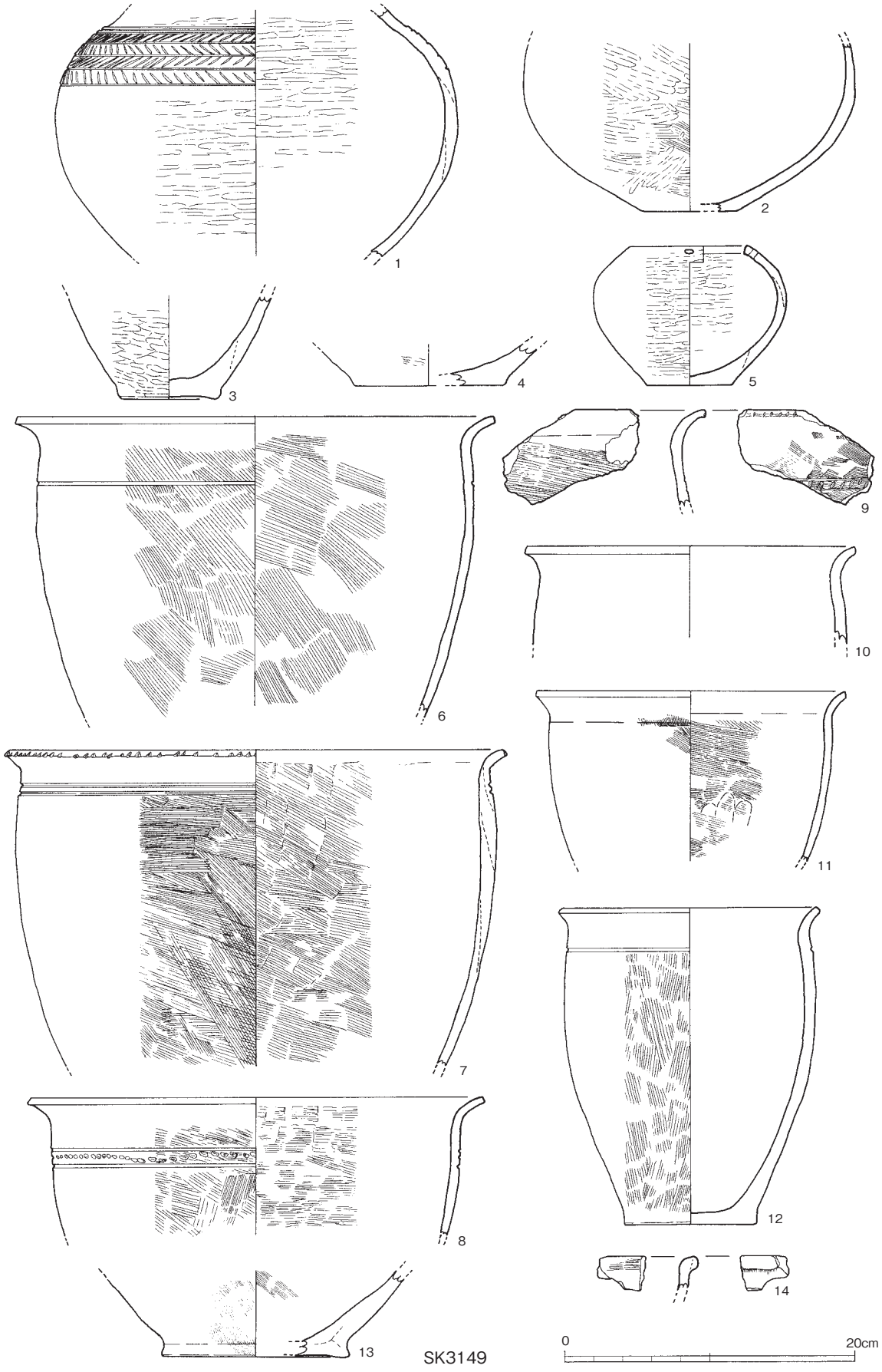
第185図　弥生時代前期　遺構出土遺物25（1：3）



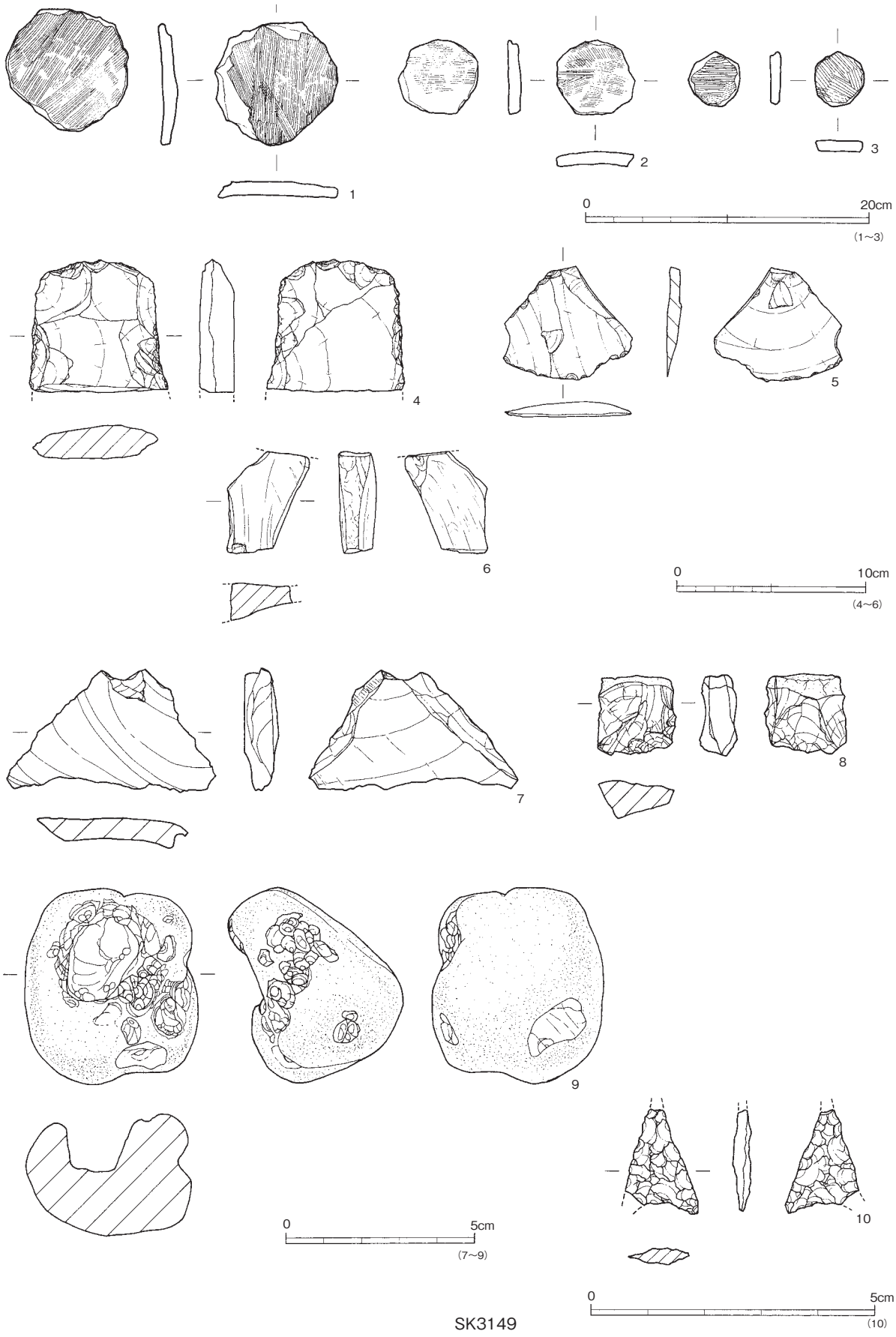
第186図　弥生時代前期　遺構出土遺物26（1：3）



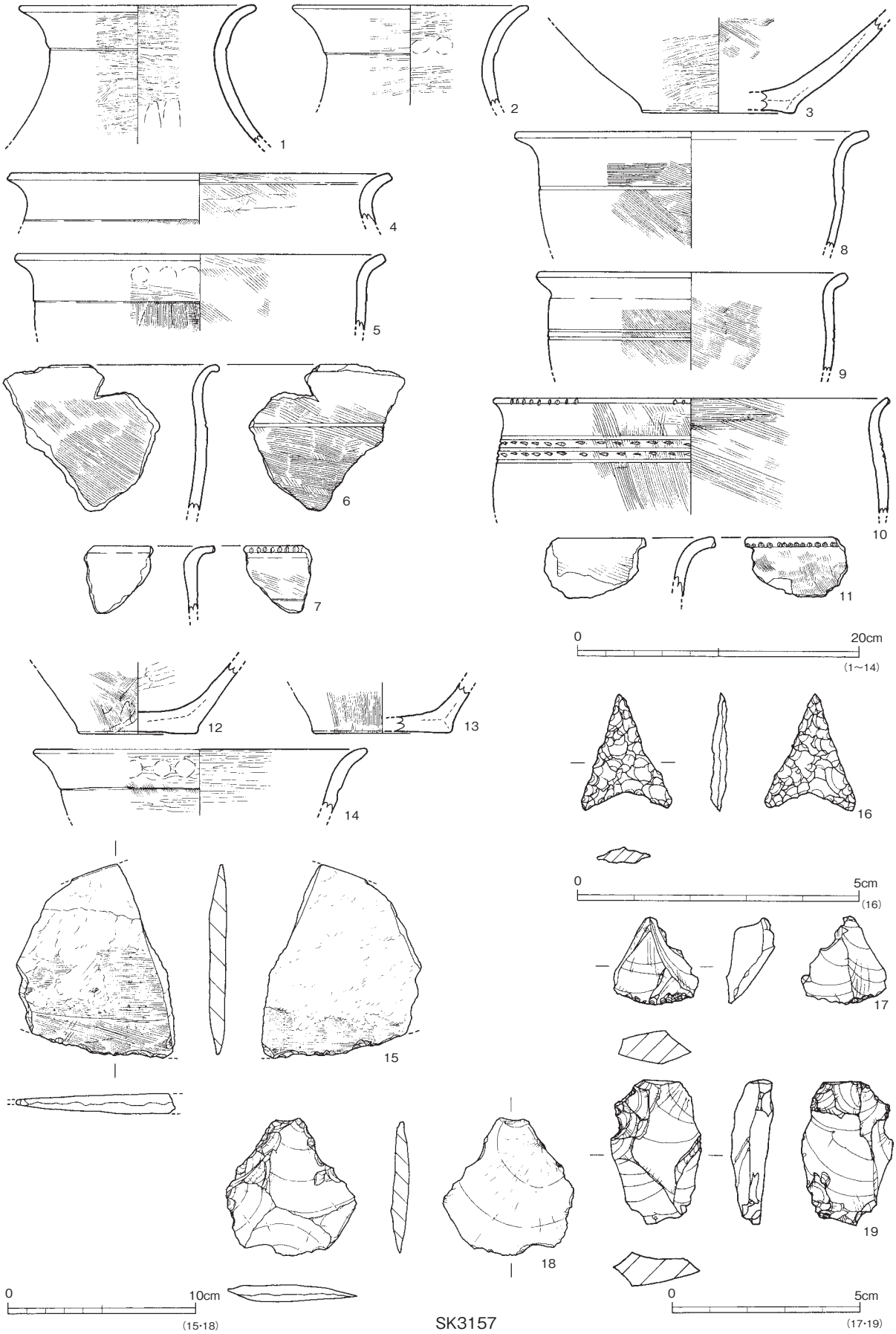
第187図　弥生時代前期　遺構出土遺物27（1：4）



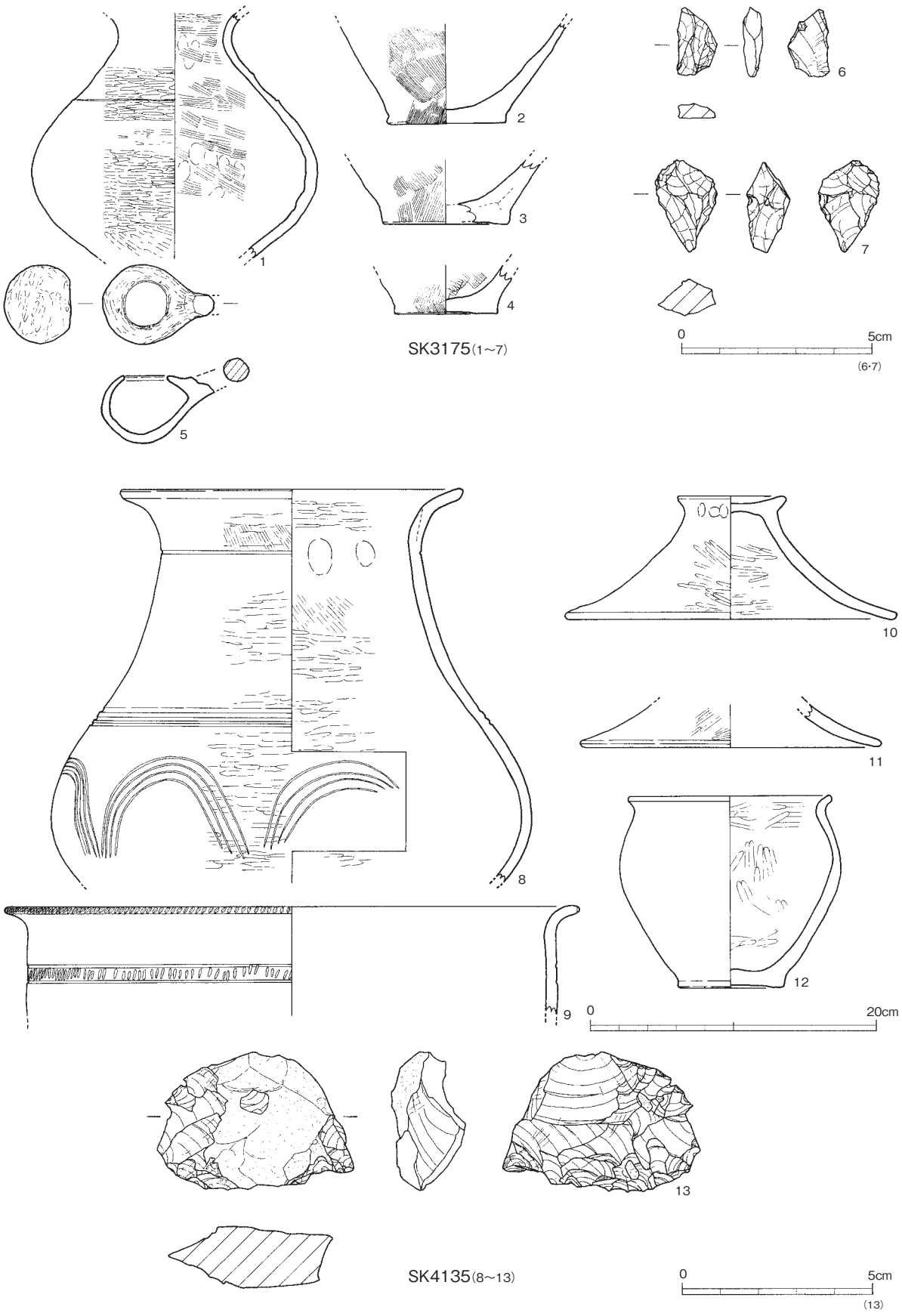
第188図　弥生時代前期　遺構出土遺物28（1：4）



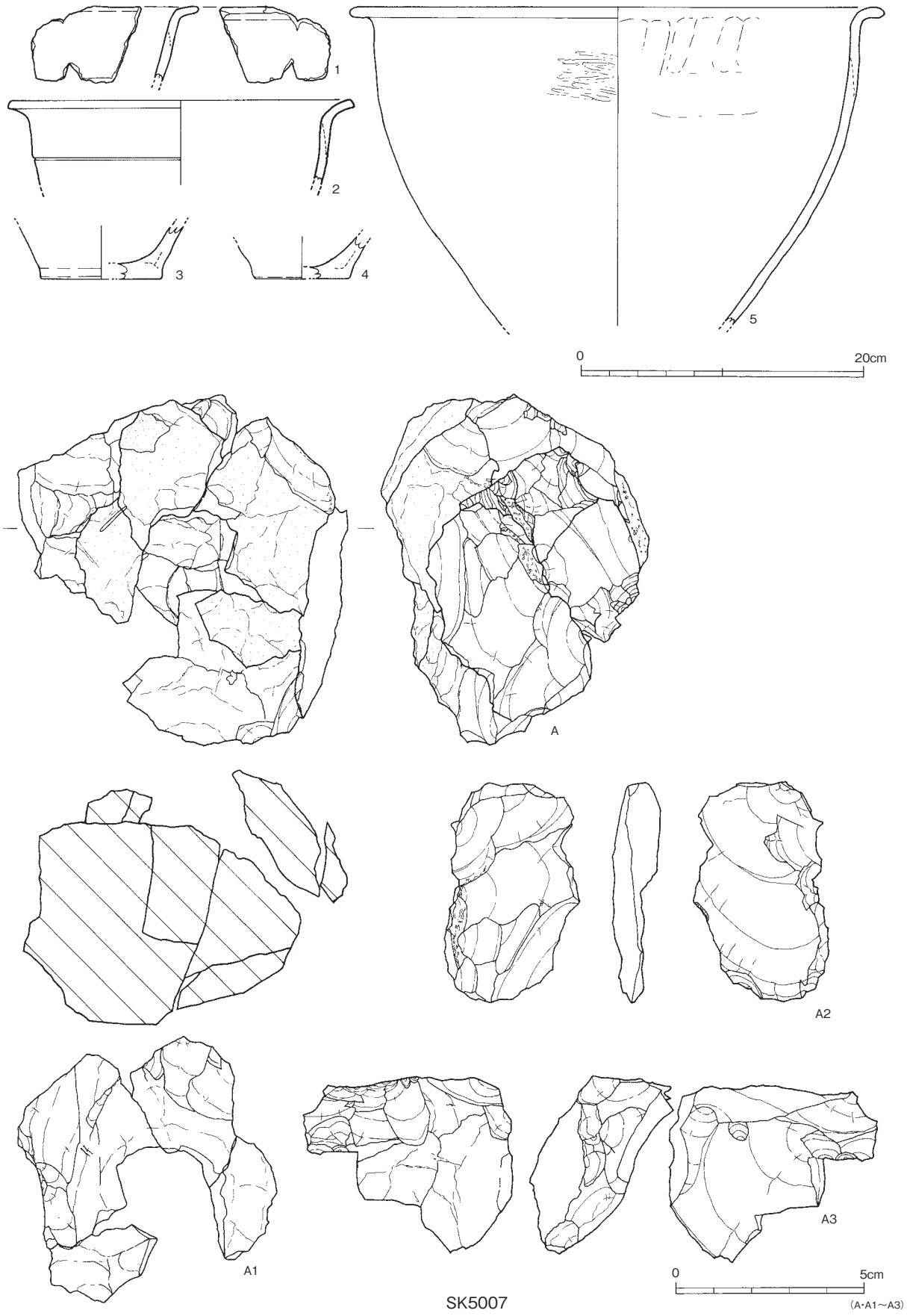
第189図　弥生時代前期　遺構出土遺物29（1：4，1：3，2：3，1：1）



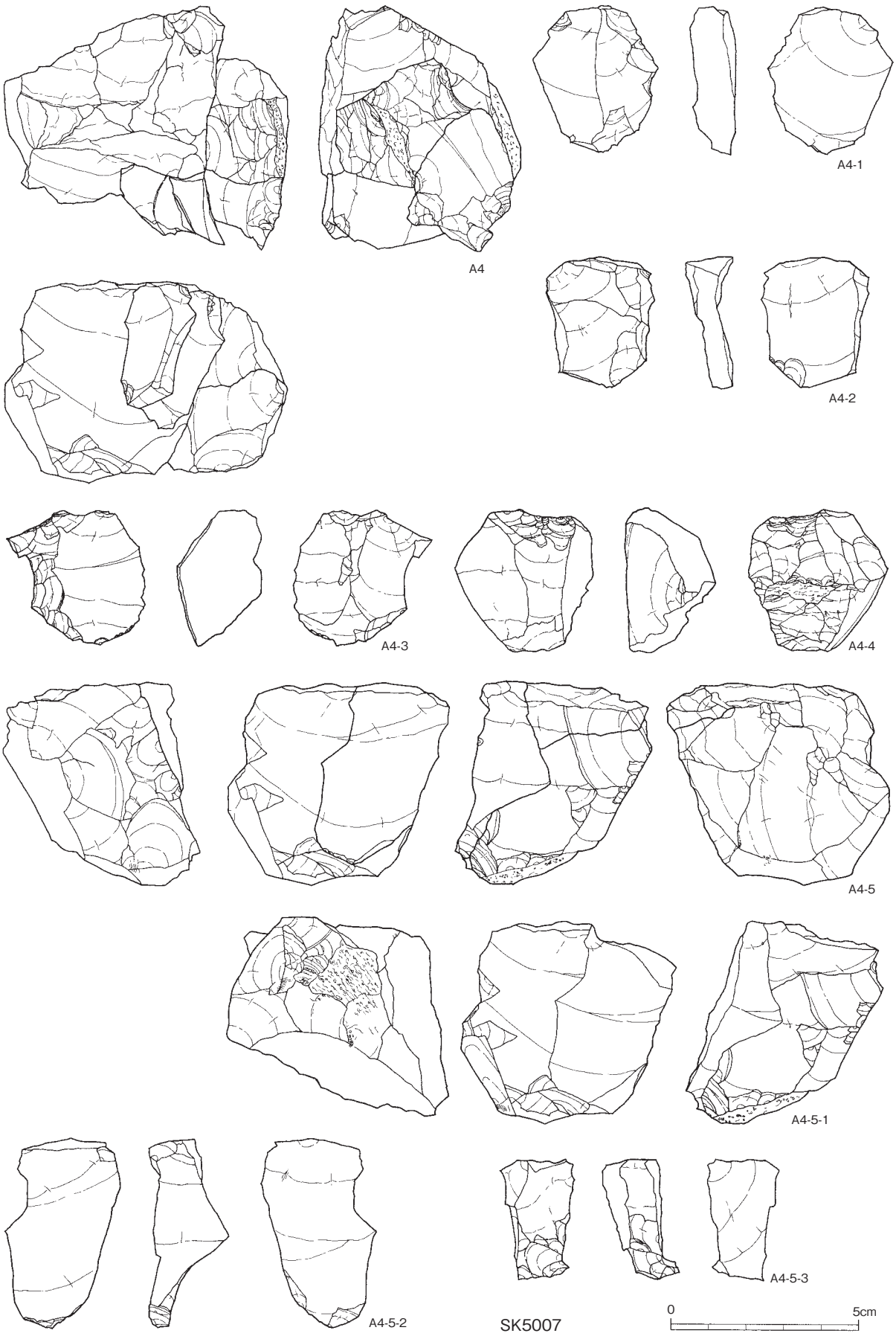
第190図　弥生時代前期　遺構出土遺物30（1：4，1：3，2：3，1：1）



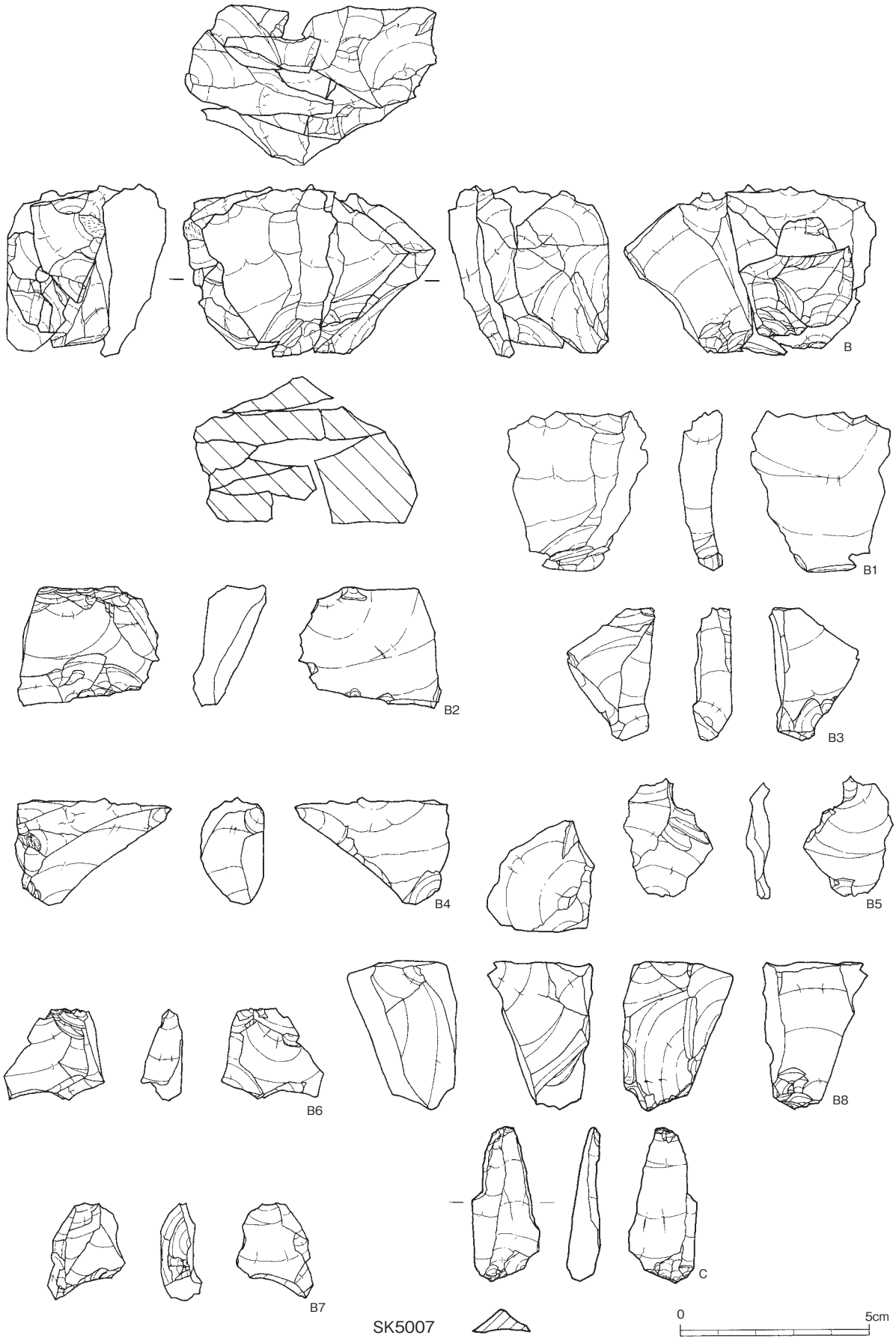
第191図　弥生時代前期　遺構出土遺物31（1：4，2：3）



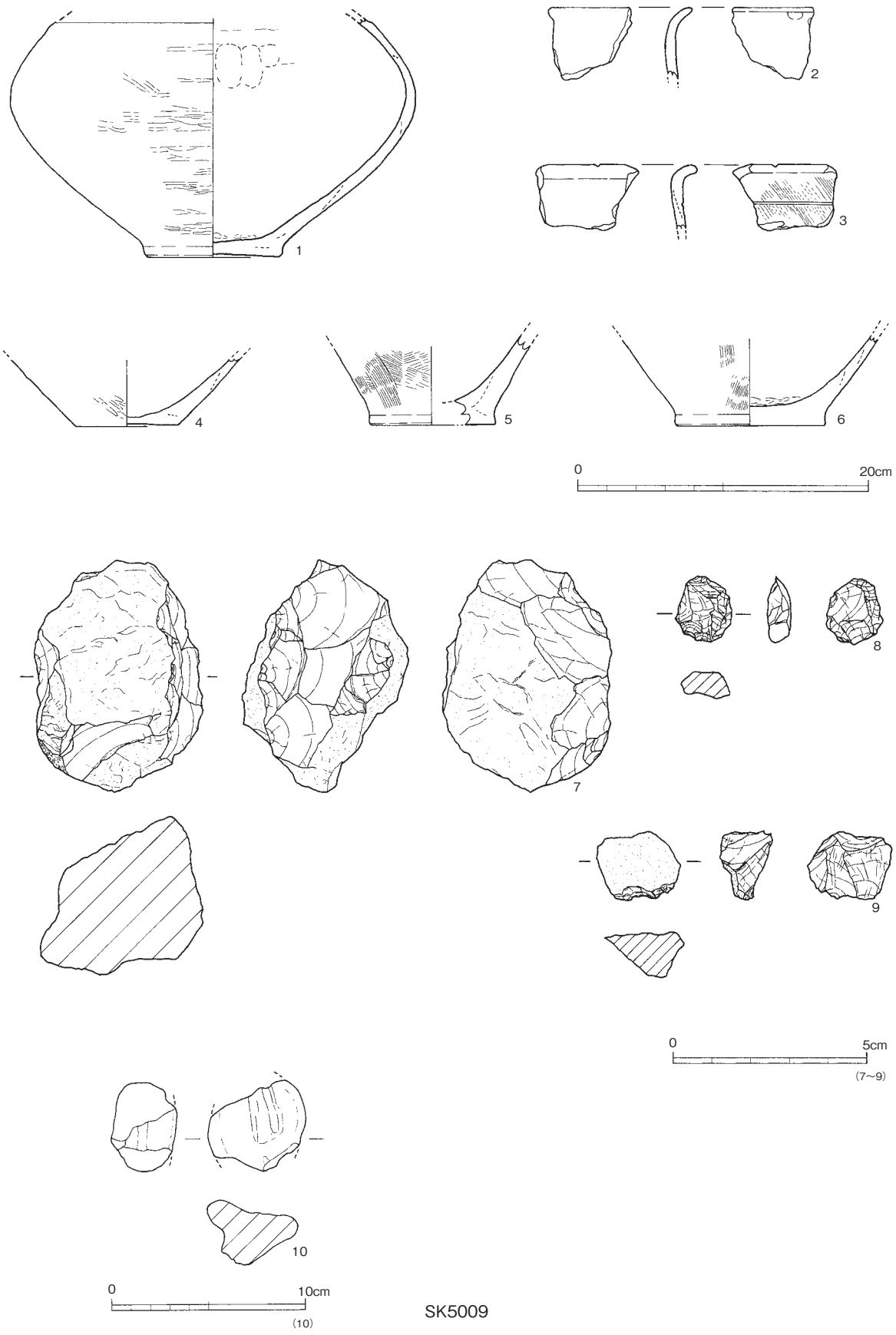
第192図　弥生時代前期　遺構出土遺物32（1：4，2：3）



第193図　弥生時代前期　遺構出土遺物33（2：3）



第194図　弥生時代前期　遺構出土遺物34（2：3）



第195図　弥生時代前期　遺構出土遺物35（1：4，1：3，2：3）

器から弥生時代前期後葉に埋没したと考えられる。

土坑SK5009（195－１～10　図版99・100）

SK5009からは弥生土器と石器が出土した。195－１は中型壺である。195－２・３は甕の口縁部片である。口縁部は強く屈曲する。195－３は口縁直下に１条の沈線が巡る。195－４は壺の底部，195－５・６は甕の底部である。

195－７は瑪瑙の敲石あるいは石核である。自然面が多く残る。195－８・９は瑪瑙の楔形石器である。195－10は細粒花崗岩あるいは砂岩の砥石である。２条の筋状の使用痕が残る。

以上の遺物が土坑から散在して出土した。よって，SK5009は土器から弥生時代前期後葉に短期間に埋没したと考えられる。

第３節　弥生時代中期の遺構出土遺物

弥生時代中期の遺構出土遺物は，実測可能であったＣ区の２基の遺構について報告する。

１．Ｃ区の遺構出土遺物

土坑SK3170（196－１～10　図版99・100）

SK3170からは弥生土器と石器が出土した。196－１は壺で，口縁部と頸部が短く，強く外反する。196－２は高杯の杯部の口縁部である。口縁端部は左右に若干肥厚し，口縁端部外面側に刻目が巡る。196－３～８は甕である。196－３・４は口縁部片で，口縁端部が強く屈曲し，口縁上端が横ナデされ，上方に跳ね上げられる。196－６～８は甕底部で，ややくびれて立ち上げる。外面は縦ミガキが施され，内面はナデが施されている。

196－９は器種不明の石器である。砂岩製で，棒状をなすが上下を欠く。平面形は図面の下部が，細くなる。横断面形は扁楕円形をなす。196－10は黒曜石の楔形石器である。

以上の遺物が土坑から散在して出土した。よって，SK3170は土器から弥生時代中期中葉（坂本編年中期Ⅱ新）頃に短期間に埋没したと考えられる。

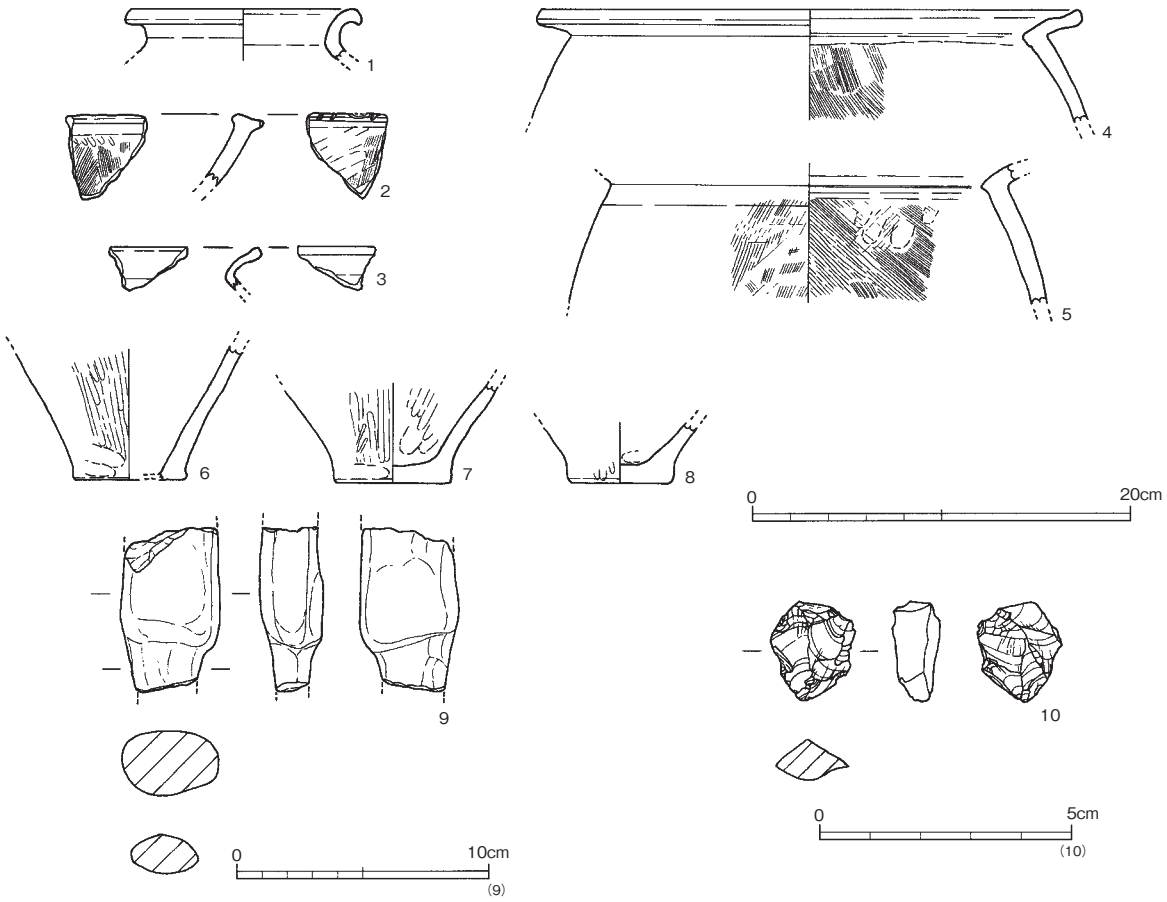
溝SD3224（196－11～197－15　図版75・99・100）

SD3224 からは縄文土器，弥生土器，石器が散在して出土した。196－11は縄文後期の鉢である。２条の凹線間に縄文が施されている。

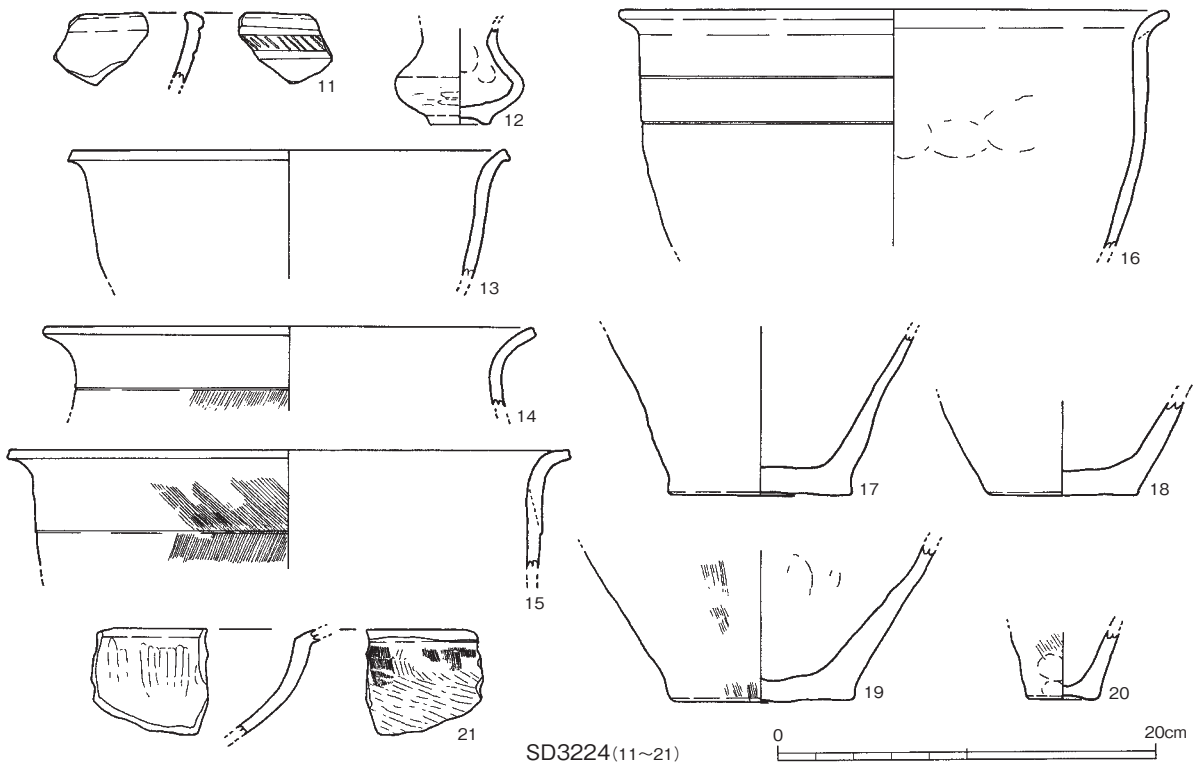
196－12～20は弥生前期の土器である。196－12はミニチュアの壺で，口縁部を欠く。196－13は中大型の甕あるいは鉢である。短く緩やかに外反する口縁部をもつ。口縁下端がつまみ出される。196－14～19は中大型甕である。口縁部が強く屈曲する。196－14・15は口縁直下に曖昧な段が巡る。196－16は口縁直下に２条の沈線が巡る。196－20はミニチュアの甕の底部である。

196－21は弥生前期から中期の高杯の杯部と考えられる。杯部は内湾して立ち上る椀状をなし，口縁部は強く屈曲し外方に引き出される。口縁部の先端を欠く。

197－１は広口壺の口縁部で，朝顔状に大きく開き，口縁端部は指ナデにより肥厚する。197－２は

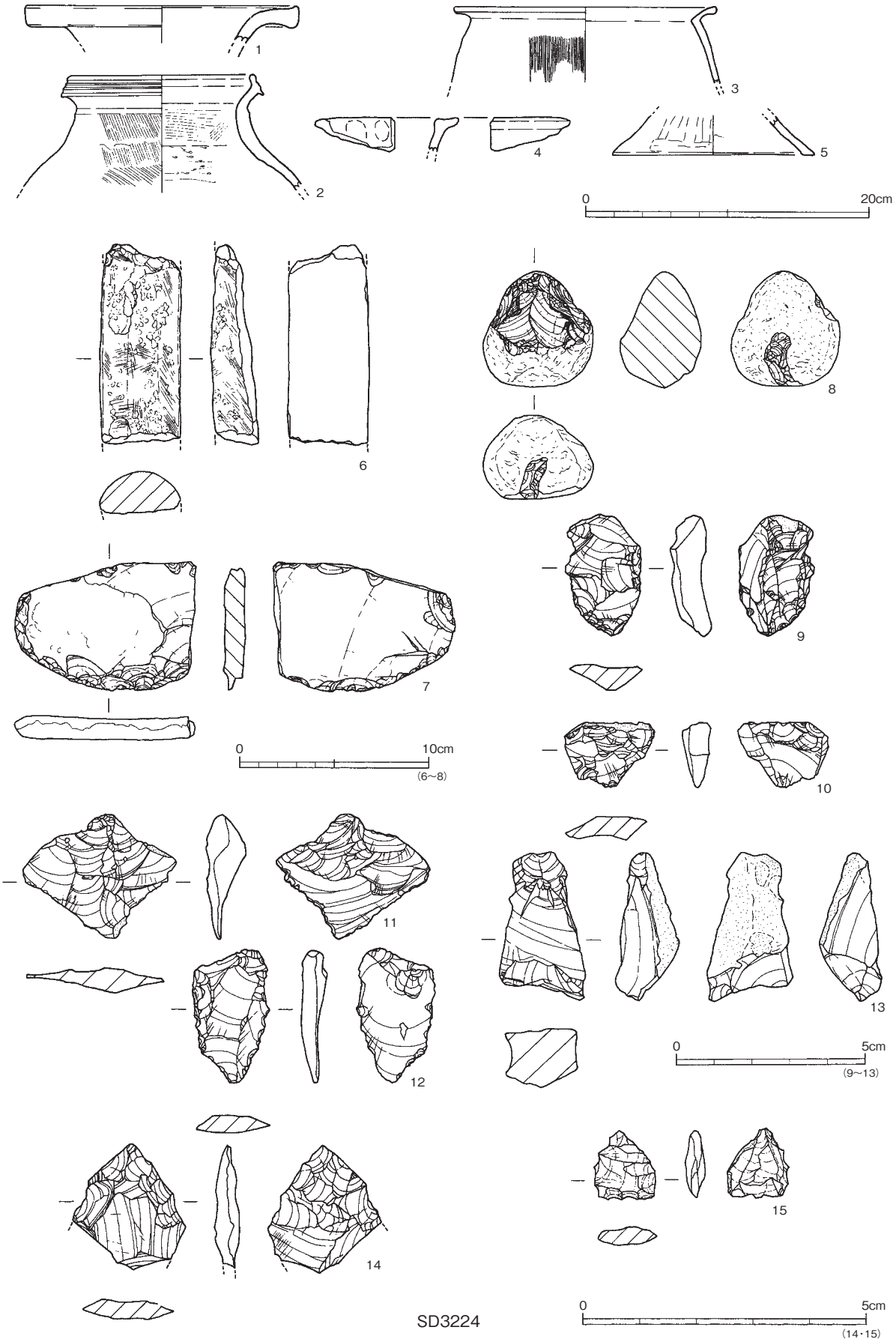


SK3170(1～10)



SD3224(11～21)

第196図　弥生時代中期　遺構出土遺物１（1：4，1：3，2：3）



第197図　弥生時代中期　遺構出土遺物２（1：4，1：3，2：3，1：1）

口縁部と頸部が短い広口壺である。口縁端部は上下に拡張され，内傾する。口縁端部には３条の凹線文が巡る。197－３は甕である。口縁部は強く屈曲し，口縁端部は丸い。197－４は須玖式の甕の模倣品で，胎土は地元のものである。197－５は高杯の脚部である。「八」字状に開き，脚端部の内側が肥厚する。

197－６は塩基性片岩の伐採石斧である。刃部及び基部を欠く。また，縦方向にも割れている。全面に研磨が施されているが，敲打痕もよく残る。197－７は打製の刃器である。刃部には微小な剥離がみられる。197－８は珪質岩の敲石である。197－９・10は黒曜石の楔形石器である。197－11は黒曜石のUFである。197－12は黒曜石のスクレーパーである。197－13は黒曜石の石核で，一部に自然面が残る。産地分析の結果，隠岐の久見産と判定されている。197－14・15は黒曜石の石鏃未製品であろう。

土器は縄文後期土器，弥生前期土器，弥生中期後半（中期Ⅱ～中期Ⅲ）の土器が出土している。溝の開削時期は不明であるが，埋没時期は弥生中期末（中期Ⅲ新）と考えられる。

第４節　弥生時代終末～古墳時代前期の遺構出土遺物

弥生時代終末～古墳時代前期の遺構出土遺物は，実測可能であった14基の遺構のものを報告する。

１．Ｃ区の遺構出土遺物

大型土坑SX3280（198－１・２）

SX3280の中央土坑より土師器が出土した。198－１・２は複合口縁甕の口縁部片である。口縁端部は緩やかに外反し，口縁先端は先細る。

以上の遺物から，SX3280は弥生時代終末頃の遺構と考えられる。

井戸SE3101（198－３～５　図版91）

SE3101からは土師器が出土した。198－３・５は複合口縁甕である。198－３は口縁部が直立して立ち上がり，口縁端部は外方につまみ出される。底部は丸底で，底部内面には指頭圧痕があり，型作りと考えられる。胴部中央には焼成後に円孔が穿かれている。198－５は口縁部を欠く。底部は丸底で，底部内面には指頭圧痕がある。198－４は球形の胴部から「く」字状に屈曲する口縁をもつ甕である。胴部上半には刻目が施される。

以上の遺物が井戸から出土している。198－３は井戸の廃絶期に入れたものであろう。井戸の底面上では198－４・５がまとまって出土している。これらの遺物は古墳時代初頭と考えられる。よって，SE3101は古墳時代初頭に機能したものと考えられる。

土坑SK3110（198－６・７）

SK3110からは弥生時代終末～古墳時代初頭の複合口縁をなす甕が出土した。198－６は，口縁部が外傾して立ち上がり，口縁端部は外方に若干つまみ出される。198－７は，口縁部が外傾して立ち上がり，口縁端部は先細る。

以上の遺物が土坑から出土した。よって，SK3110は弥生時代終末期～古墳時代初頭に機能したも

のと考えられる。

土坑SK3129（198－８～12　図版91）

SK3129からは古墳時代の土師器が出土した。198－８・９は小型丸底壺である。口縁部は短く直線的に外傾する。198－10は高杯の杯部である。杯部に明瞭な段があり，口縁端部は外反する。198－11・12は低脚杯の脚部である。198－11は脚部が大きく開く。198－12は短い脚部である。

以上の遺物が土坑中央の下層からまとまって出土した。よって，SK3129の時期は，古墳時代前期末と考えられる。ただ，198－８～10は古墳時代中期にもみられる形態で，中期まで下る可能性もあろう。

土坑SK3128（199－１～６　図版91）

SK3128からは弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が出土した。199－１～５は複合口縁の甕である。199－１～４は口縁部が外傾して，口縁端部は先細る。199－５は口縁部が外傾し，口縁端部は面をなす。199－６は鼓形器台である。筒部は短い。

以上の遺物が土坑から散在して出土した。よって，SK3128は土器から弥生時代終末～古墳時代初頭の短期間に埋没したと考えられる。

土坑SK3147（199－７～10　図版74・99）

SK3147からは土師器と石器が出土した。199－７は低脚杯の杯部から脚部にかけての破片である。199－８・９は管玉である。199－８は小型細身の碧玉製管玉である。孔は両面から直線的に穿たれている。色は黒色。産地分析の結果，「女代南Ｂ遺物群・菩提－１群」に同定されているが，断定はできないようである。199－９は，碧玉製管玉である。石材は硬質で濃緑色を呈し，肉眼観察では花仙山産碧玉と大差ない。長さ0.6㎝，径0.4㎝，重量0.15ｇを測り，下半は欠損している。管玉の法量から孔は両面から穿たれているものと考えられる。産地分析の結果，「矢野７遺物群」と判定されている。199－10は安山岩の砥石である。

以上の遺物が土坑から散在して出土した。よって，SK3147は土器から弥生時代終末～古墳時代初頭に埋没したと考えられる。

土坑SK3200（199－11～16）

SK3200からは弥生時代終末の土器が出土した。199－11～16は複合口縁をなす甕である。口縁部は外傾し，口縁端部は先細る。199－16のみ，口縁端部が丸く膨らみ，他の甕より古いタイプである。199－11は器壁が厚く，特異なものである。

以上の遺物が土坑から散在して出土した。よって，SK3200は土器から弥生時代終末の短期間に埋没したと考えられる。

土坑SK3205（200－１～７）

SK3205からは土師器が出土した。200－１～５は複合口縁をもつ甕である。口縁部は外傾し，口縁端部は外方に折り曲げられ，先細る。200－６は鼓形器台の筒部である。筒部は短い。200－７は長脚の高杯の脚部である。中空の筒部から「八」字状に脚が開く。

以上の遺物が土坑から散在して出土した。よって，SK3205は土器から古墳時代初頭の短期間に埋没したと考えられる。

土坑SK3232（200－８）

SK3232からは土師器が出土した。200－８は口縁部を欠くが，複合口縁をなす大型甕の胴部片である。胴部は長胴をなし，肩が張り，胴部上半に最大径をもつ。胴部上半外面には３段の櫛描直線文が巡る。

以上の遺物が土坑から出土した。よって，SK3232の時期は弥生時代終末～古墳時代初頭頃と考えられる。

土坑SK3312（200－9～12）

SK3312からは弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が出土した。200－９は複合口縁をなす壺である。口縁部は外反し，口縁先端は先細る。200－10は複合口縁をなす甕である。口縁部が外傾し，口縁端部内面が面をなし先細る。200－11は高杯の杯部である。椀状の杯部から口縁部が若干外反して開く。200－12は鼓形器台の筒部である。口縁部と脚部を欠く。筒部は短い。

以上の遺物が土坑から散在して出土した。よって，SK3312は弥生時代終末～古墳時代初頭の短期間に埋没したと考えられる。

溝SD3094（201－１～208－12　図版72・75・90・99・100）

SD3094からは弥生土器，土師器，石器が出土した。201－１～15は弥生時代前期中頃の土器である。201－１は中型壺である。口縁部中央で屈曲し，さらに口縁部先端でも屈曲する。口縁直下には段が巡る。201－２は中型壺で，口縁部と頸部を欠く。頸部と胴部の境に４条の沈線が巡る。201－３は中大型壺の胴部片である。胴部上半には上から無軸羽状文，１条沈線，斜格子文，１条沈線，上弦重弧文・下弦重弧文が施される。201－４は壺の胴部上半の破片である。頸部と胴部の境には三角形突帯が巡る。突帯の下には斜軸の木葉文，縦軸羽状文，沈線が施されている。201－５は壺の胴部上半の破片である。頸部と胴部の境には段と沈線が巡り，その下には斜格子文，１条沈線，無軸羽状文が施されている。201－６は大型壺の口縁部片である。口縁部は緩やかに外反する。頸部と胴部の境には３条の沈線が巡る。201－７は大型の甕あるいは壺の底部片である。底部の厚さは3.4㎝と厚い。201－８は中型あるいは小型壺の底部片である。底部外面には５条の沈線が巡る。201－９は中型あるいは小型の甕の底部片である。底部外面に９粒の籾痕がみられる。201－10は小型鉢で，口縁部は内湾する。201－11は小型鉢で，口縁先端が外反する。201－12は高杯の口縁部片である。口縁部は外方に拡張する。201－13は小型鉢の口縁部片である。口縁部は短く，強く屈曲する。口縁直下には３条の沈線，その下に上弦重弧文が施される。201－14は鉢の口縁部片である。口縁部は長く，強く屈曲する。口縁端部中央に１条の沈線，口縁上端と下端それぞれに刻目，口縁内面には１条の沈線，その下に山形文が施されている。201－15は中大型あるいは中型甕の蓋である。天井部は平坦をなす。器高は低く７㎝前後であろう。

201－16～204－８は弥生時代中期の土器である。201－16～21は広口壺である。口縁部は朝顔状に開く。201－16は口縁下端が若干肥厚する。頸部と胴部の境には突帯が巡り，突帯上には指頭による刻目が施されている。201－17～20は口縁端部が下垂する。201－17・19・20は口縁端部に斜格子文，口縁内面に斜格子文や重弧文，浮文が施された装飾豊かな壺である。202－１は小型の鉢である。口

縁部は短く強く屈曲する。屈曲部に円孔が穿たれている。202－２は無頸壺である。口縁部は内傾し，口縁端部は若干肥厚している。内傾する口縁部には５条の突帯が巡り，突帯上に刻目が施されている。加えて突帯上に２条の棒状浮文が施されている。202－３は高杯の杯部である。杯部は椀状をなし，口縁部は内湾する。口縁端部は外方に肥厚する。口縁端部には斜格子文が施されている。

202－４～203－６は口縁部が「く」字状に強く屈曲する甕である。202－４～８は口縁端部は先細るか丸く仕上げられている。202－９～203－６は口縁端部が上方に跳ね上げられるものや，それを意識して若干上方に肥厚するものである。203－７・８は壺の胴部片である。

203－９～15は甕で，口縁部が「く」字状に屈曲し，口縁端部は上下に肥厚する。胴部は大きく張る。形状は甕に近いが，煤が付着しないため煮焚きには使用されていないようである。

203－16は大型壺の口縁部である。頸部が短く，口縁部は短く屈曲する。口縁端部は上下に肥厚する。器壁が２cmと厚い。頸部と胴部の境に三角形突帯が巡り，突帯上には指頭による刻目が施されている。203－17・18は広口壺の口縁部である。朝顔状に広がり，口縁端部は下垂する。口縁端部には５条の凹線文が巡る。204－１は「出雲型広口壺」（坂本2008を参照）の胴部上半の破片である。凹線文，刺突文，羽状文，円形浮文で装飾される。204－２～４は甕である。口縁部が「く」字状に屈曲し，口縁端部が上下に拡張され，口縁端部に２～３条の凹線文が施されている。204－４は口縁部に刻目，円形浮文，屈曲部に突帯が巡る。突帯上には指頭による刻目が巡る。204－５～８は甕の胴部から底部の破片である。外面には縦ミガキが施される。

204－９～19は弥生時代後期の土器である。204－９～11は口縁部が「く」字状に屈曲する甕で，口縁部が直立気味に拡張する。口縁端部には擬凹線が施される。204－12は高杯あるいは蓋の脚部片である。脚端部は下方に拡張し，口縁端部には擬凹線が巡る。204－13は高杯の口縁部である。杯部から上方に屈曲して，口縁端部は外側に拡張する。口縁端部上面には擬凹線が巡る。

204－14～18は複合口縁をなす甕である。口縁部外面には擬凹線が巡る。204－14・15は直立する口縁部をなし，口縁端部は丸くなる。204－16～18は口縁部が外反する。204－19は鼓形器台の筒部から脚部にかけての破片である。筒部は長く，筒部には上から擬凹線，羽状文，擬凹線が施される。脚部にも擬凹線が巡る。

205－１～13は弥生時代終末～古墳時代初頭の土器である。205－１は複合口縁をなす壺である。口縁部は外傾し，口縁端部は面をなす。205－２～７は複合口縁をなす甕である。口縁端部は先細るもの，面をなすもの，外方に肥厚するものがある。205－８は壺あるいは甕の胴部片である。ヘラによる３段の山形の文様が刻まれている。205－９・10は鼓形器台である。筒部は短い。205－11は小型器台である。杯部は皿状をなし，脚部は「八」字状に開く。脚部には円孔が穿たれる。205－12は低脚杯の脚部である。205－13は高杯の杯部である。杯部は椀形をなし若干外湾して開く。205－14は土師器の杯である。底部は凸レンズ状をなし，口縁部は短く外傾する。205－15は土錘である。

205－16～208－12は弥生時代の石器である。205－16・17は磨製伐採石斧である。205－16は基部を欠く。横断面形は扁楕円形なし，厚さは3.8cmで薄い。205－17は刃部を欠く。横断面形は楕円形をなし，厚さは4.5cmと厚斧化している。206－１は扁平な磨製石斧の未製品と考えられる。基部を欠く。

刃部研磨途中で，刃部は丸い。横断面形は扁楕円形をなし，稜線は甘い。206－２は砂岩の用途不明の石器である。206－３・４は石鏃である。206－３は刃部を欠く。平面形は撥形をなし全面が研磨されている。206－４は基部を欠く。平面形は撥形をなし，刃部は円刃となる。刃部は研磨され，側面は部分的な研磨がみられる。206－５は大型石庖丁である。平面形は直線刃半月形をなす。刃部と側縁は研磨され，体部は剥離面を残す。206－６は磨製石庖丁である。刃部の一部が残り，直線刃をなす。刃部付近のみ研磨され，体部に研磨は及ばない。206－7は打製石庖丁である。平面形は長方形に近い。刃部が緩やかに弧を描く。縁辺には微小剥離がみられ，体部は若干研磨痕がみられる。206－８は安山岩製の粗製剥片石器である。刃部には微小な剥離がみられる。207－１は瑪瑙のUFである。使用痕分析の結果，Ｂタイプの光沢がみられた。この剥片で穂摘みをおこなっていた可能性が考えられる。207－２は玄武岩の石皿である。擦面が窪み使用痕が残る。207－３は砂岩の砥石である。

208－１～６は黒曜石の石鏃である。208－１～３は三角形石鏃で基部が凹む。208－１は剥離面が大きいため未製品と考えられる。208－４～６は基部が凹まない三角形石鏃である。208－７～10は安山岩の石鏃である。２辺が長い二等辺三角形状をなし，底辺にあたる基部は凹む。産地分析の結果，208－７は鳥取県馬ノ山産，208－８～10は香川県金山東産と判定されている。208－11は黒曜石の石錐の先端である。

208－12は緑色凝灰岩の長方形板状の素材である。管玉製作途中の資料である。全面いずれも入念に研磨されている。表面は上下端面の一部に剥離面を残すが，丁寧に長軸方向に研磨した後，等分割になるように長軸中央部に施溝している。施溝は幅３㎜，深さ２㎜まで達しており，やや鈍い印象を持つ。裏面も表面と同様に長軸方向に研磨して平滑している。両側面は光沢を発するまで入念に研磨され，直線的に整形されている。上下端面は研磨されていて，ともに外湾する。産地分析より，「矢野Ｂ遺物群」と判定されている。

以上の遺物がSD3094からは弥生前期～古墳時代前期の遺物が散在して出土した。掘削時期は不明であるが，古墳時代前期までに埋没したと考えられる。

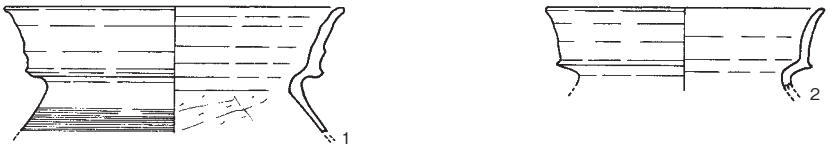
大型土坑SX3104（209－１～14）

SX3104からは弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が出土した。209－１～14は複合口縁をなす甕である。209－１～10は口縁部片である。209－１～６は口縁端部が外方に引き出され，端部は先細る。209－７～10は口縁端部が面をなし若干肥厚する。209－11は胴部片で，胴部上半に刻目と，櫛描直線文が２段施されている。209－12～14は胴部から底部にかけての破片で，底部内面には指頭圧痕がみられる。209－12は径の小さい平底，209－13・14は丸底をなす。

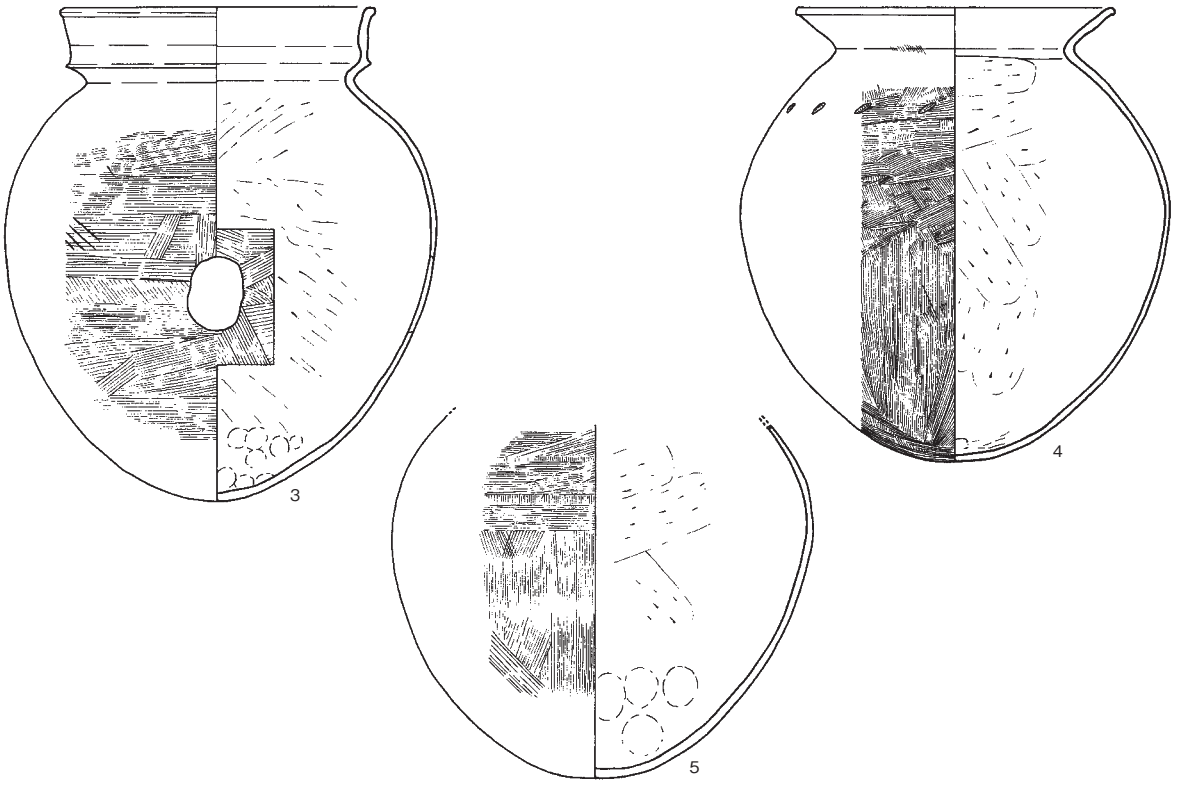
以上の遺物が遺構から出土した。中央ピットから出土した209－８・９が遺構の機能した時期あるいは廃絶期を示していると考えられる。よって，SX3104の時期は古墳時代初頭と考えられる。

大型土坑SX3270（209－15～210－７）

SX3270からは古墳時代初頭の土器が出土している。209－15・16は大型の複合口縁をなす甕である。209－15は口縁部が直立し，口縁端部は面をなす。胴部上半には櫛描直線文が巡る。209－16は胴部上半の破片で，２段の櫛描直線文が巡り，その直線文間に羽状文が巡る。

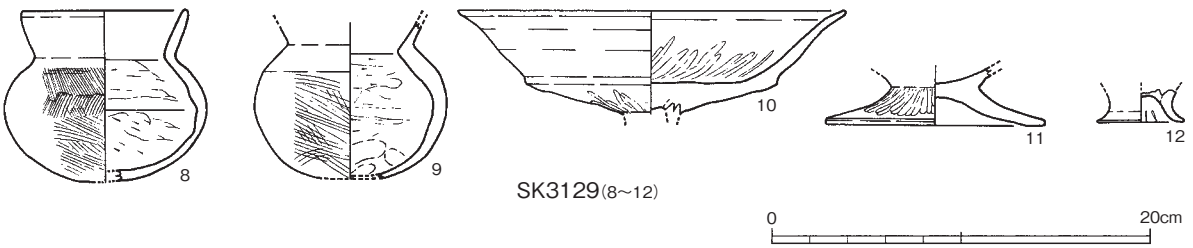


SX3280(1・2)



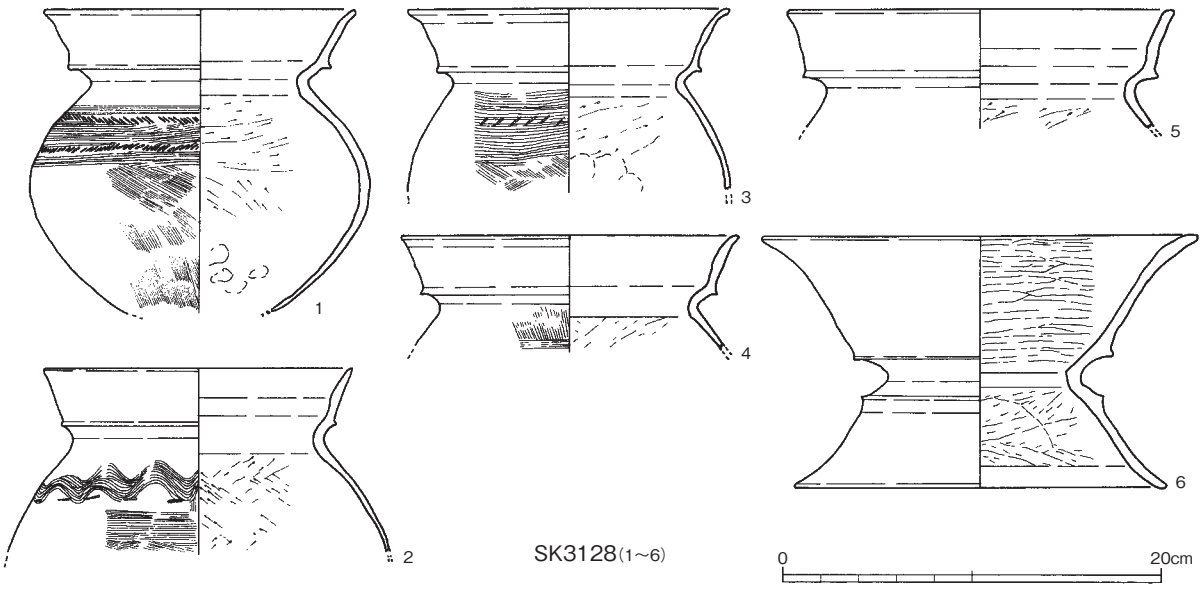
SE3101(3～5)

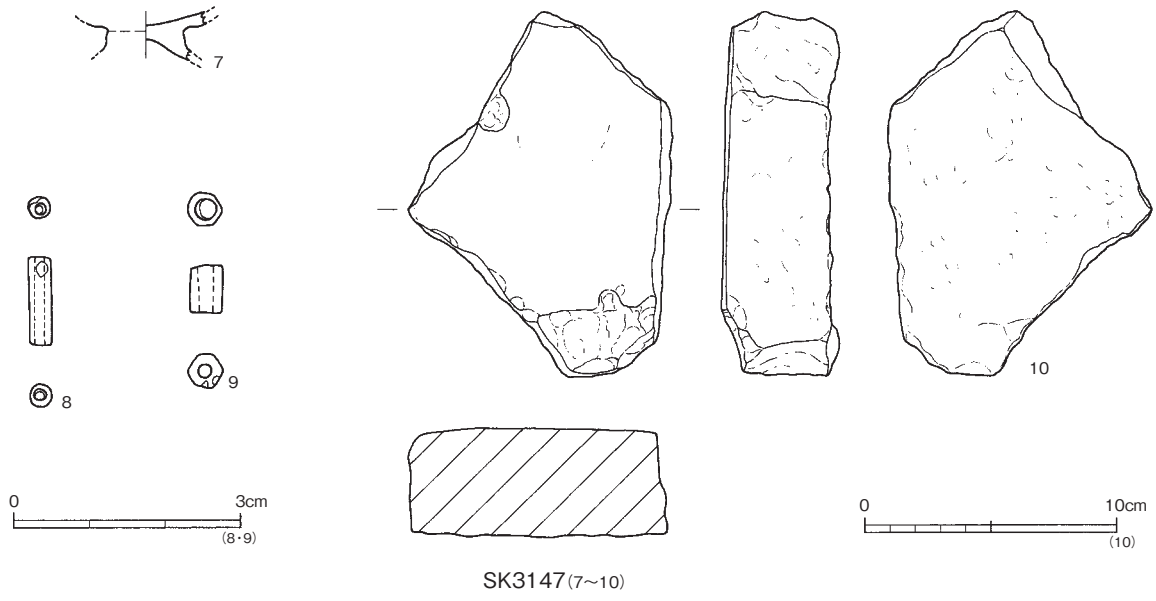
SK3110(6・7)

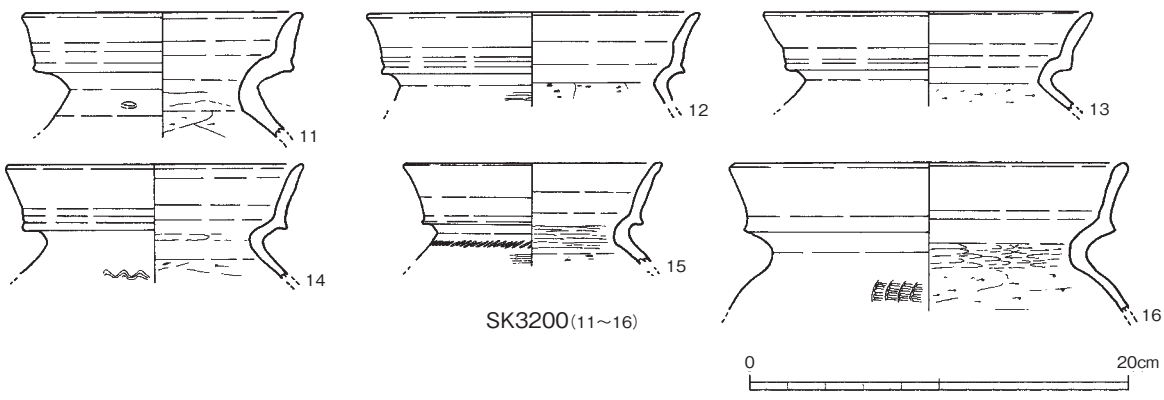


SK3129(8～12)

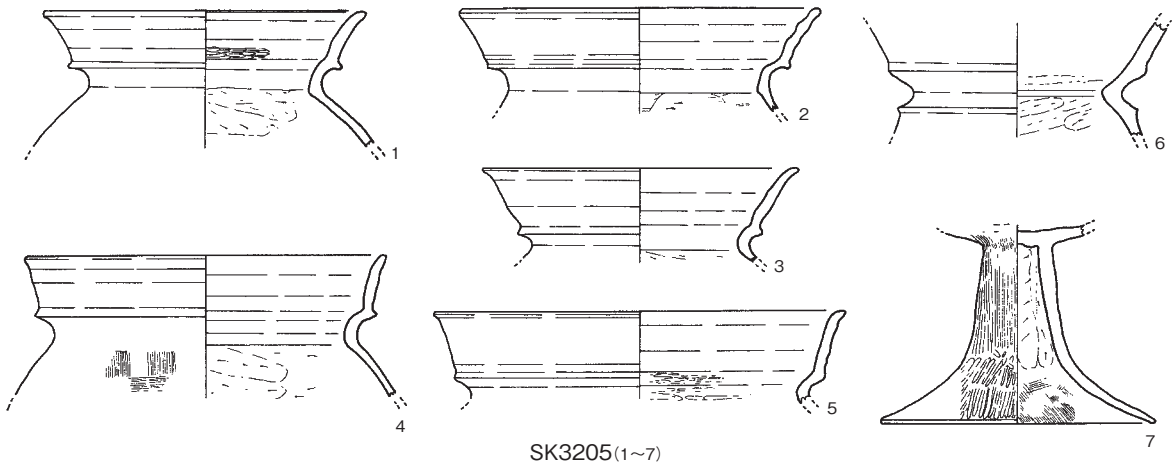
第198図　弥生時代終末～古墳時代前期　遺構出土遺物1（1：4）



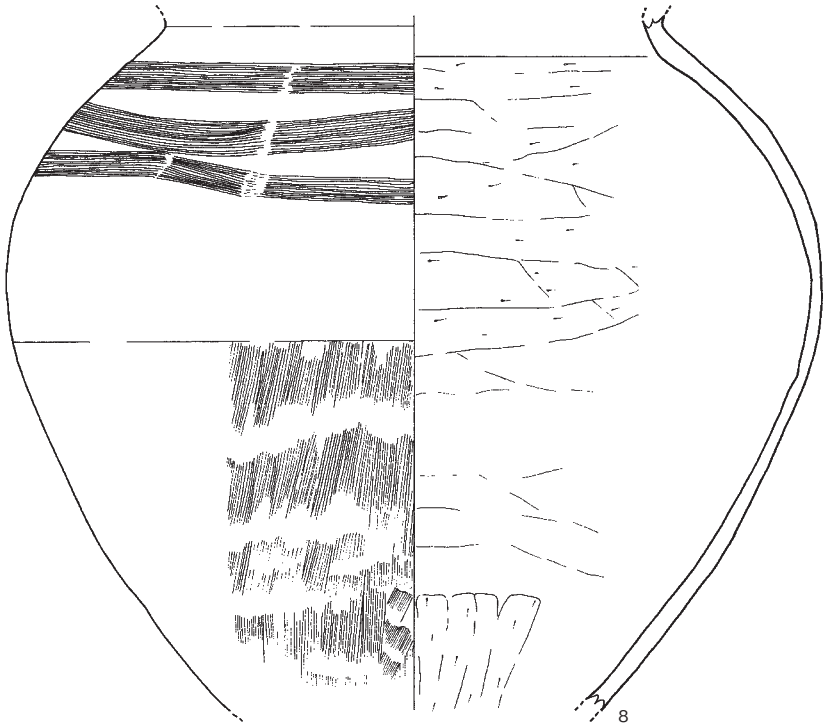




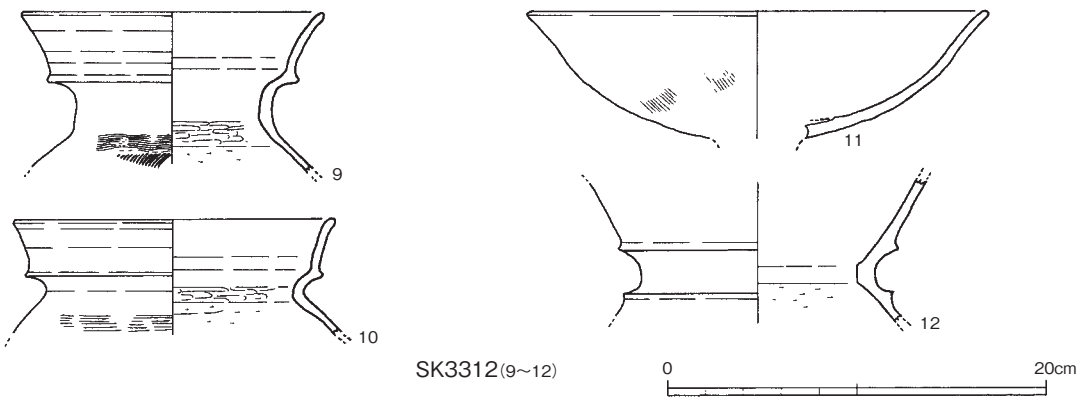
第199図　弥生時代終末～古墳時代前期　遺構出土遺物２（1：4，1：3，1：1）



SK3205(1～7)

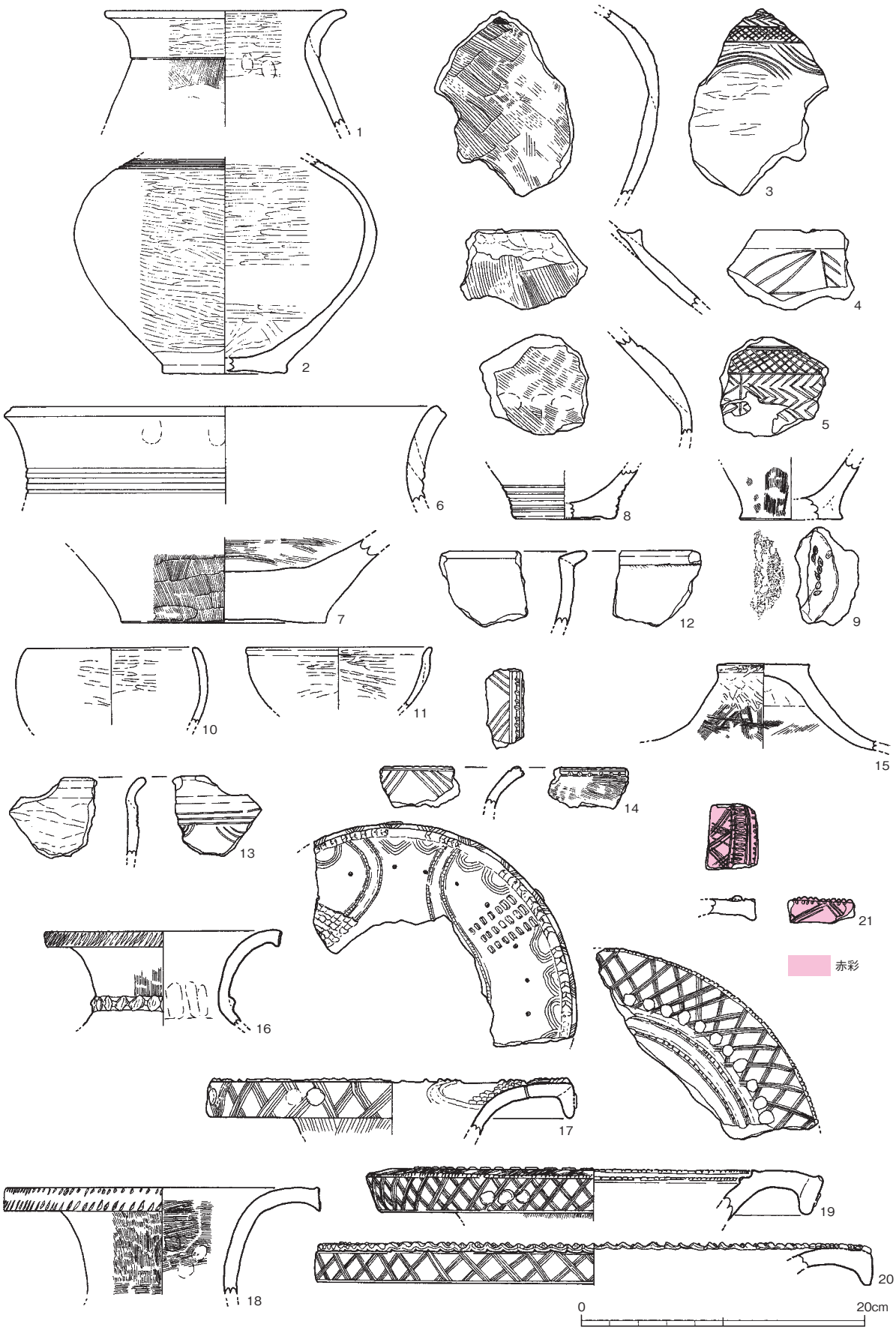


SK3232(8)

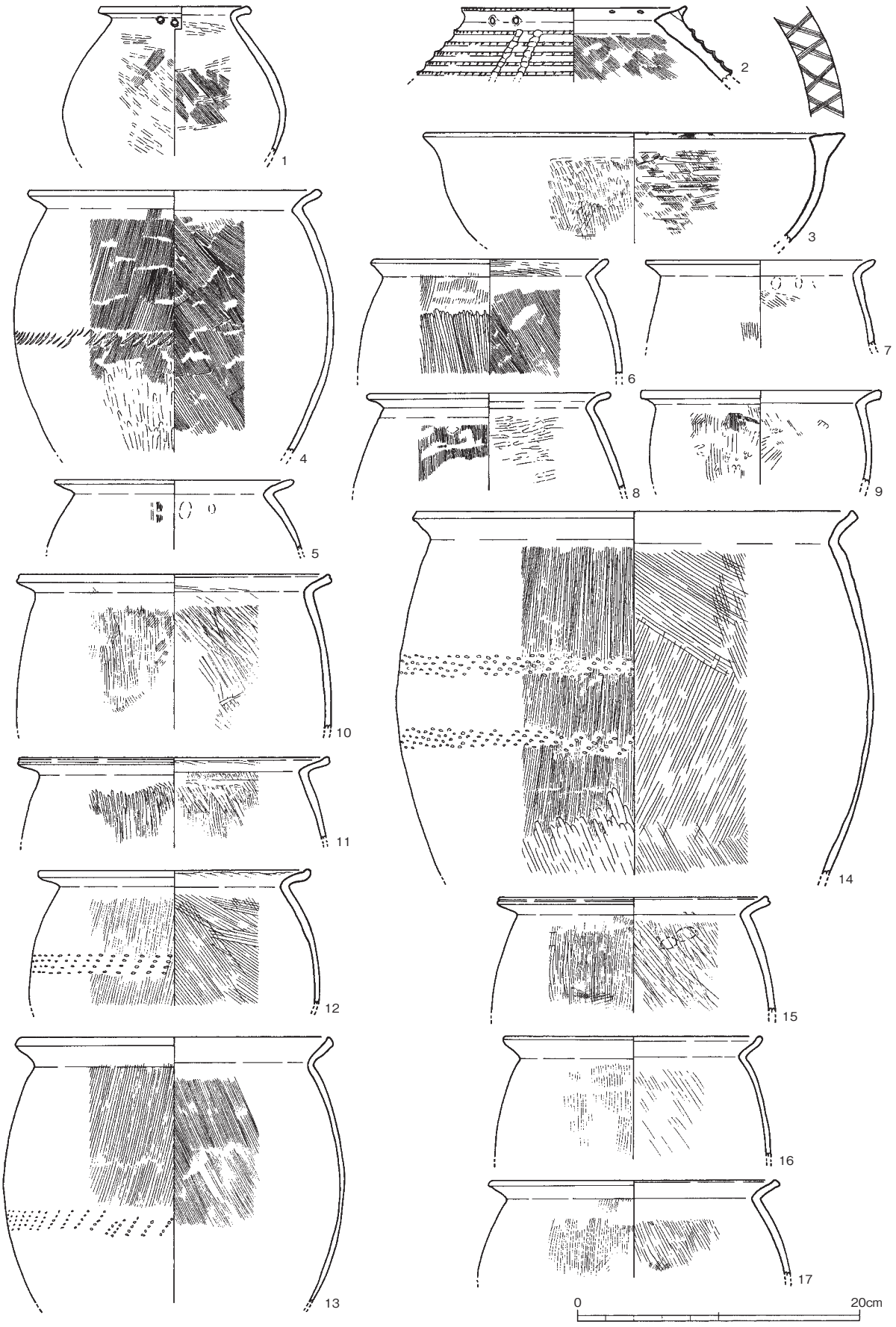


SK3312(9～12)

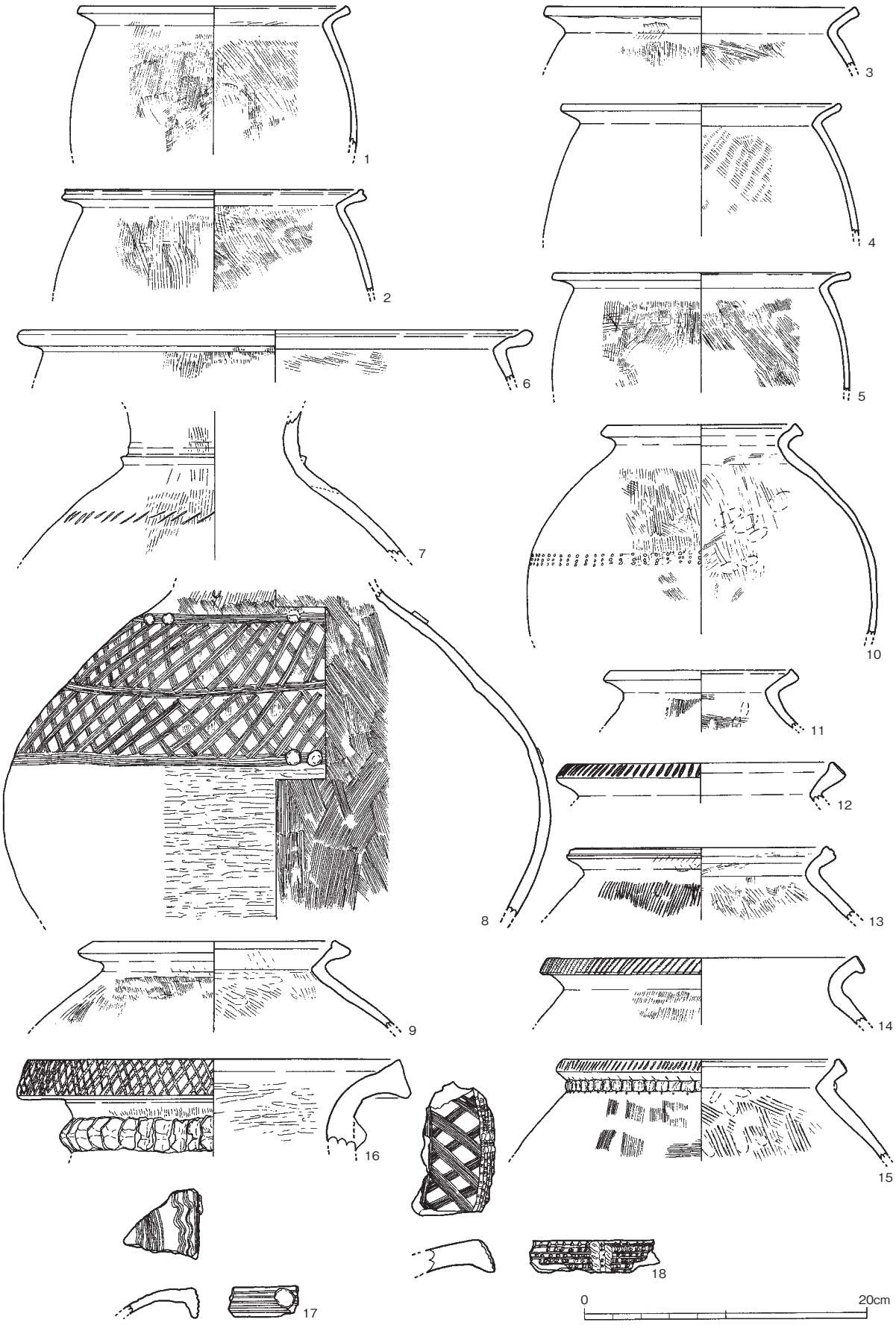
第200図　弥生時代終末～古墳時代前期　遺構出土遺物３（1：4）



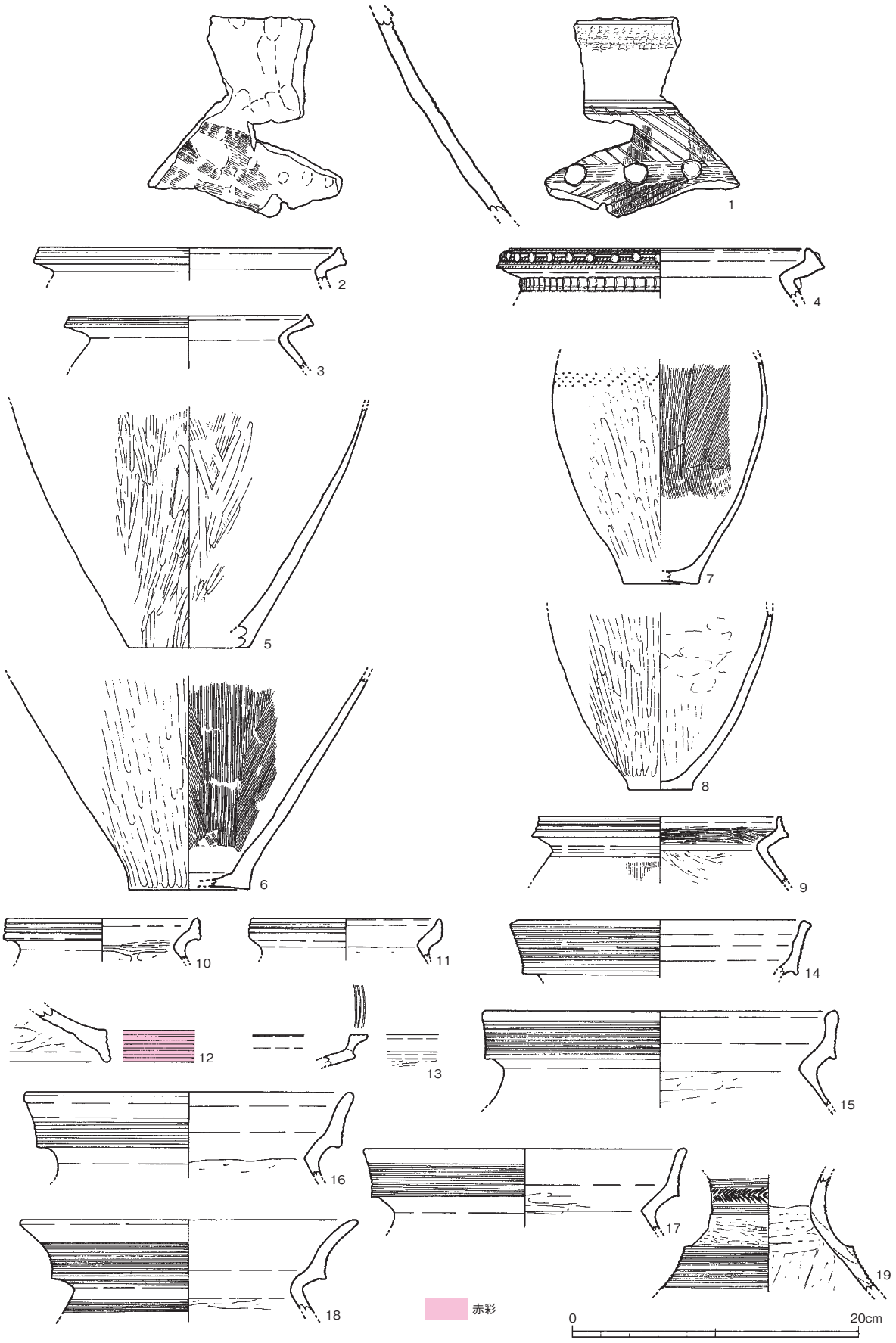
第201図　SD3094出土遺物１（1：4）



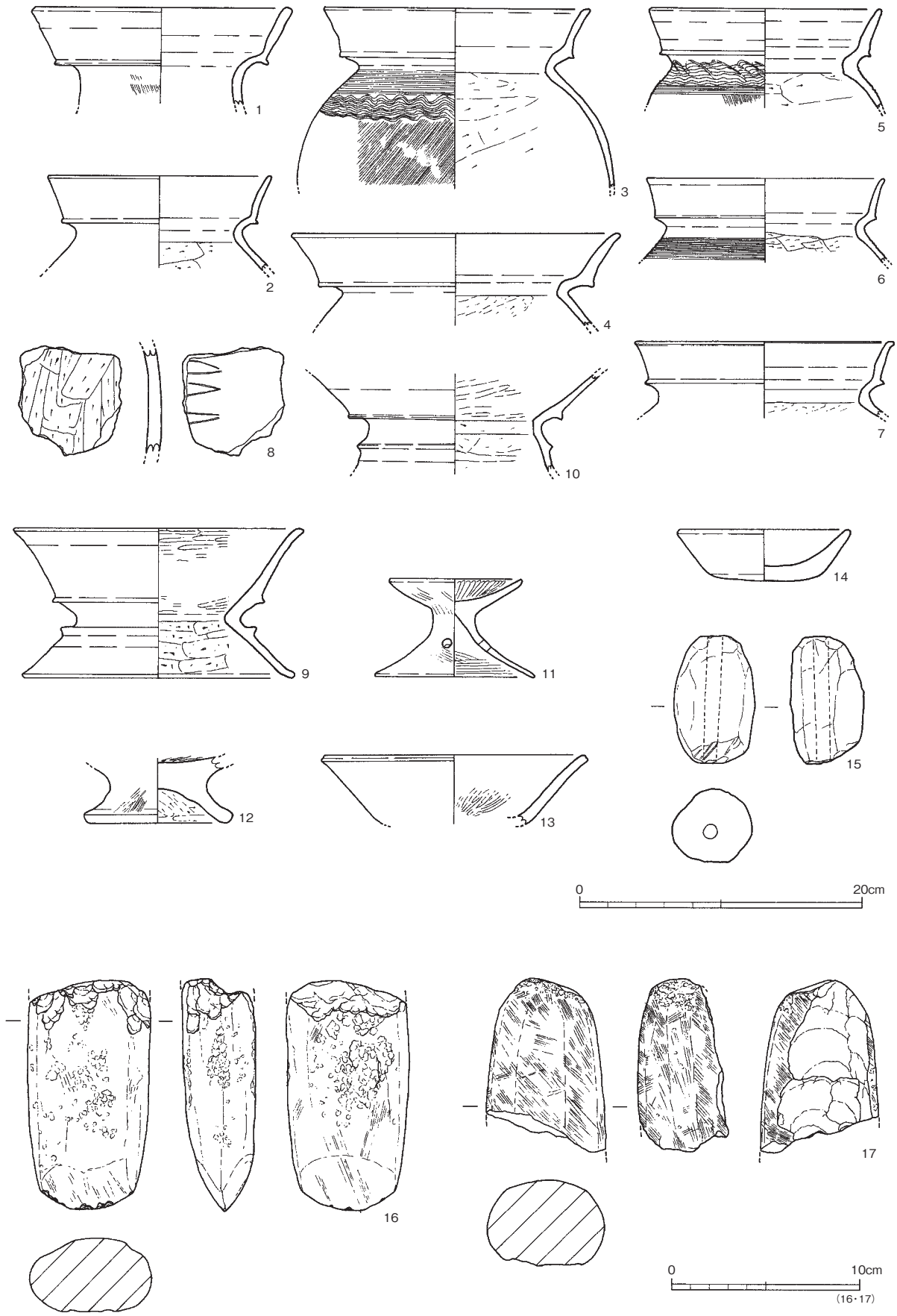
第202図　SD3094出土遺物２（1：4）



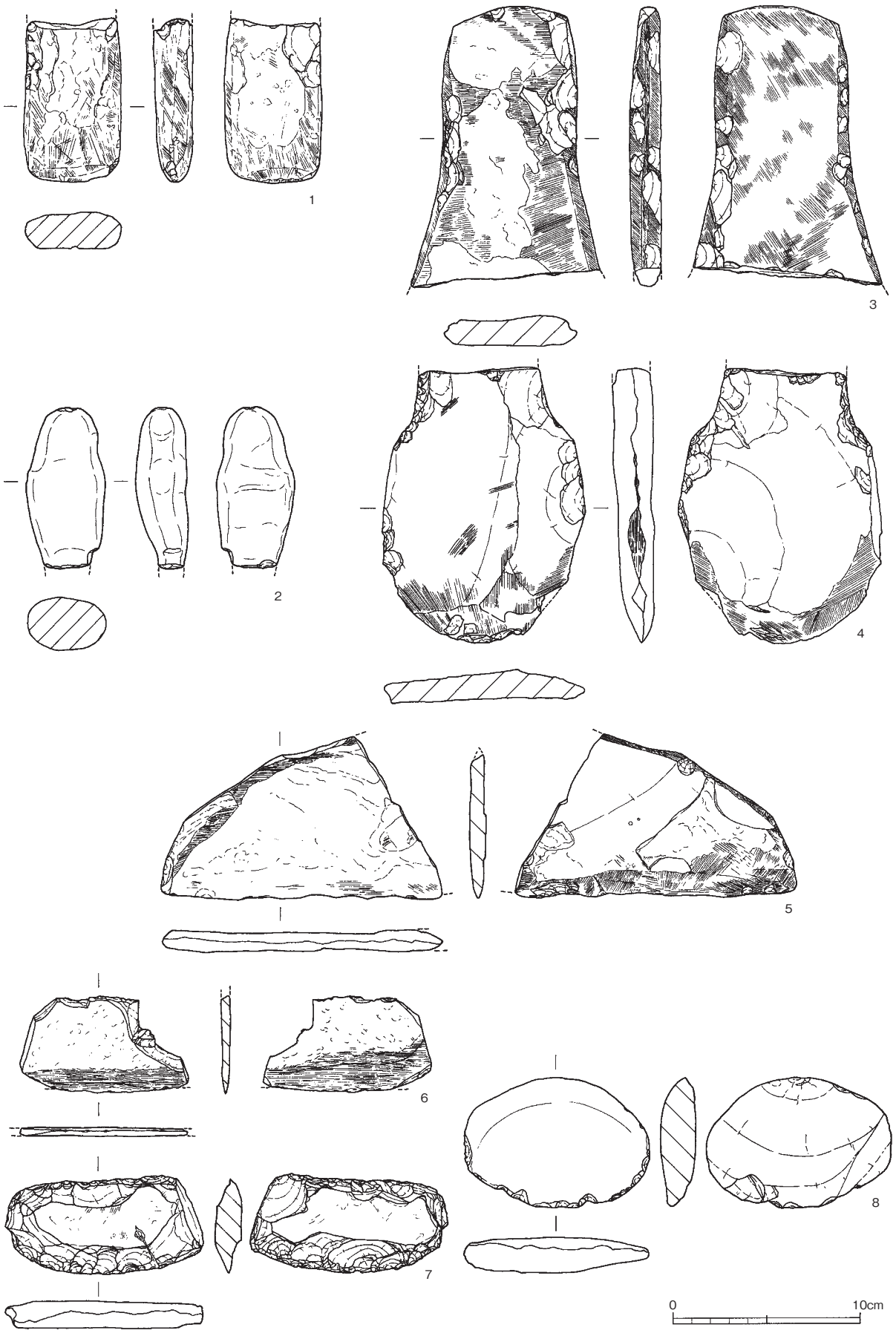
第203図　SD3094出土遺物３（1：4）



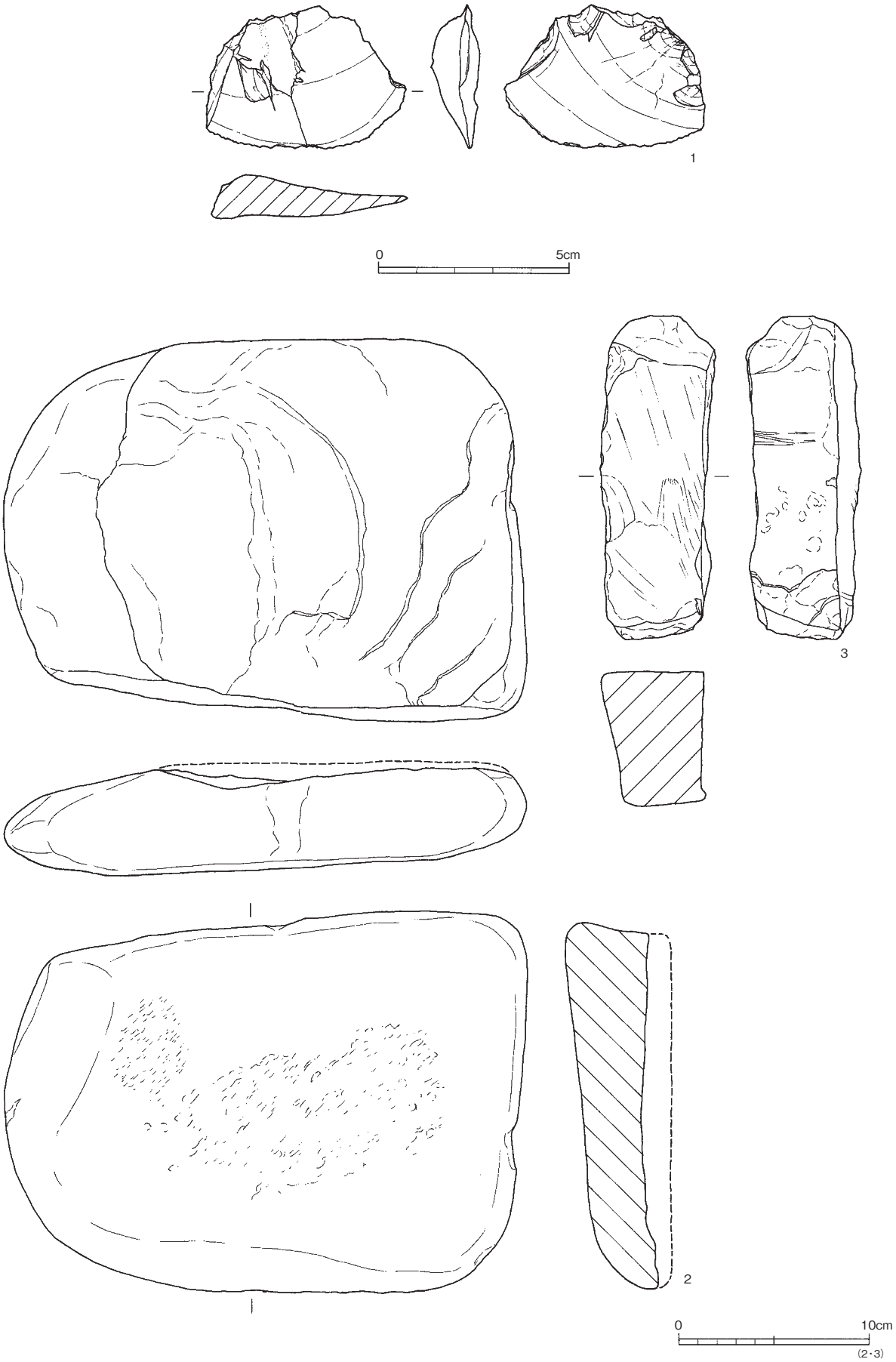
第204図　SD3094出土遺物４（1：4）



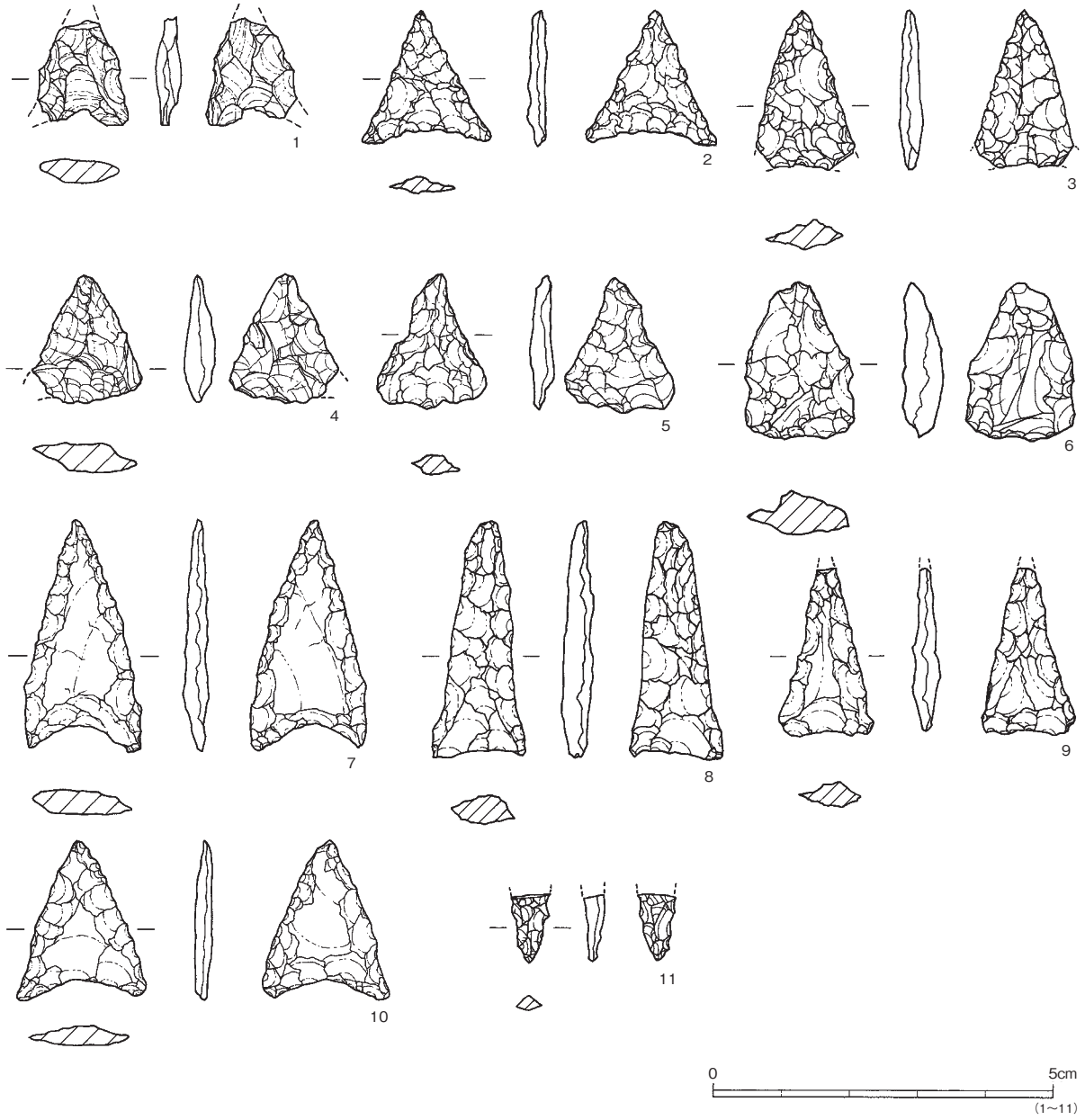
第205図　SD3094出土遺物５（1：4，1：3）

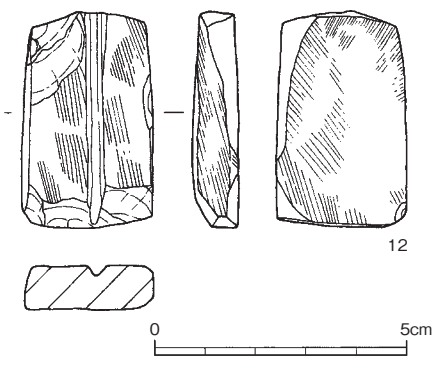


第206図　SD3094出土遺物６（1：3）

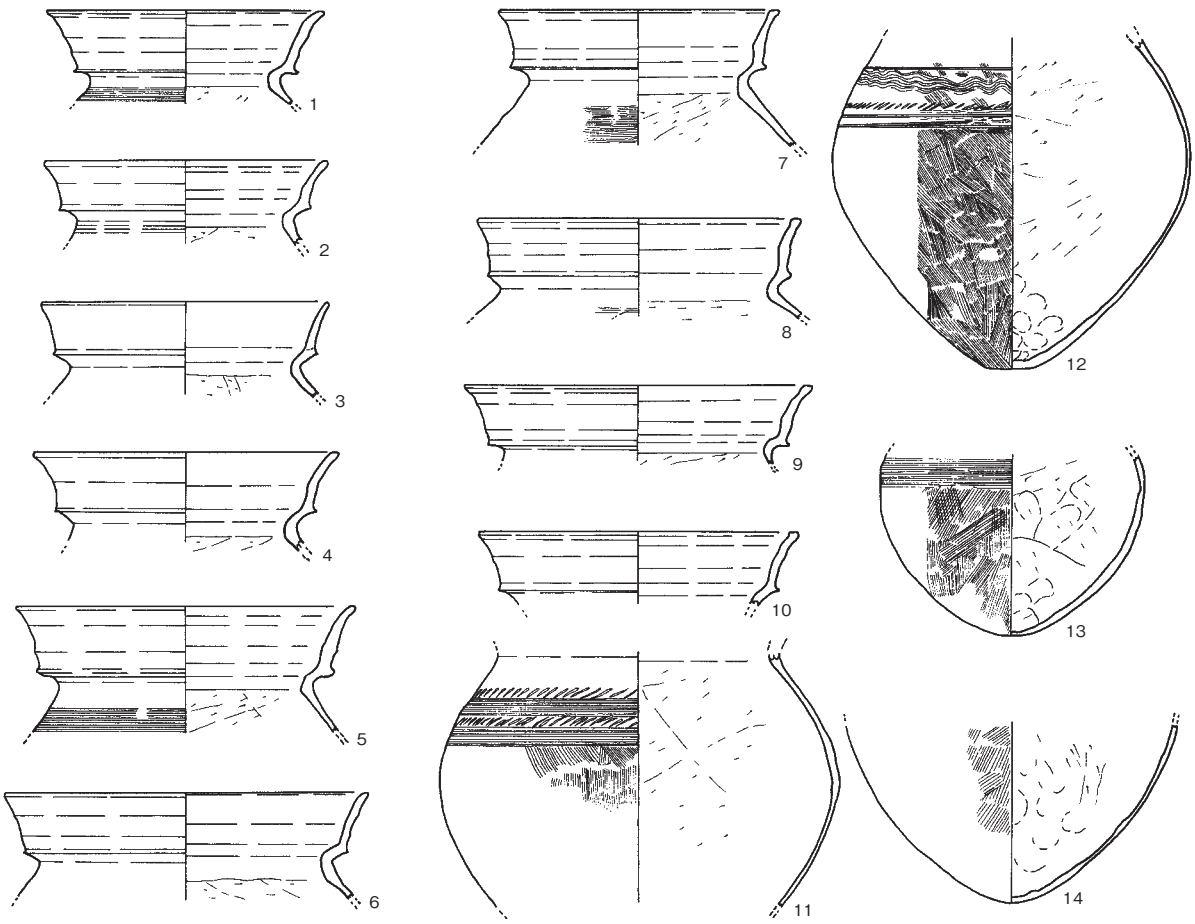


第207図　SD3094出土遺物７（1：3，2：3）

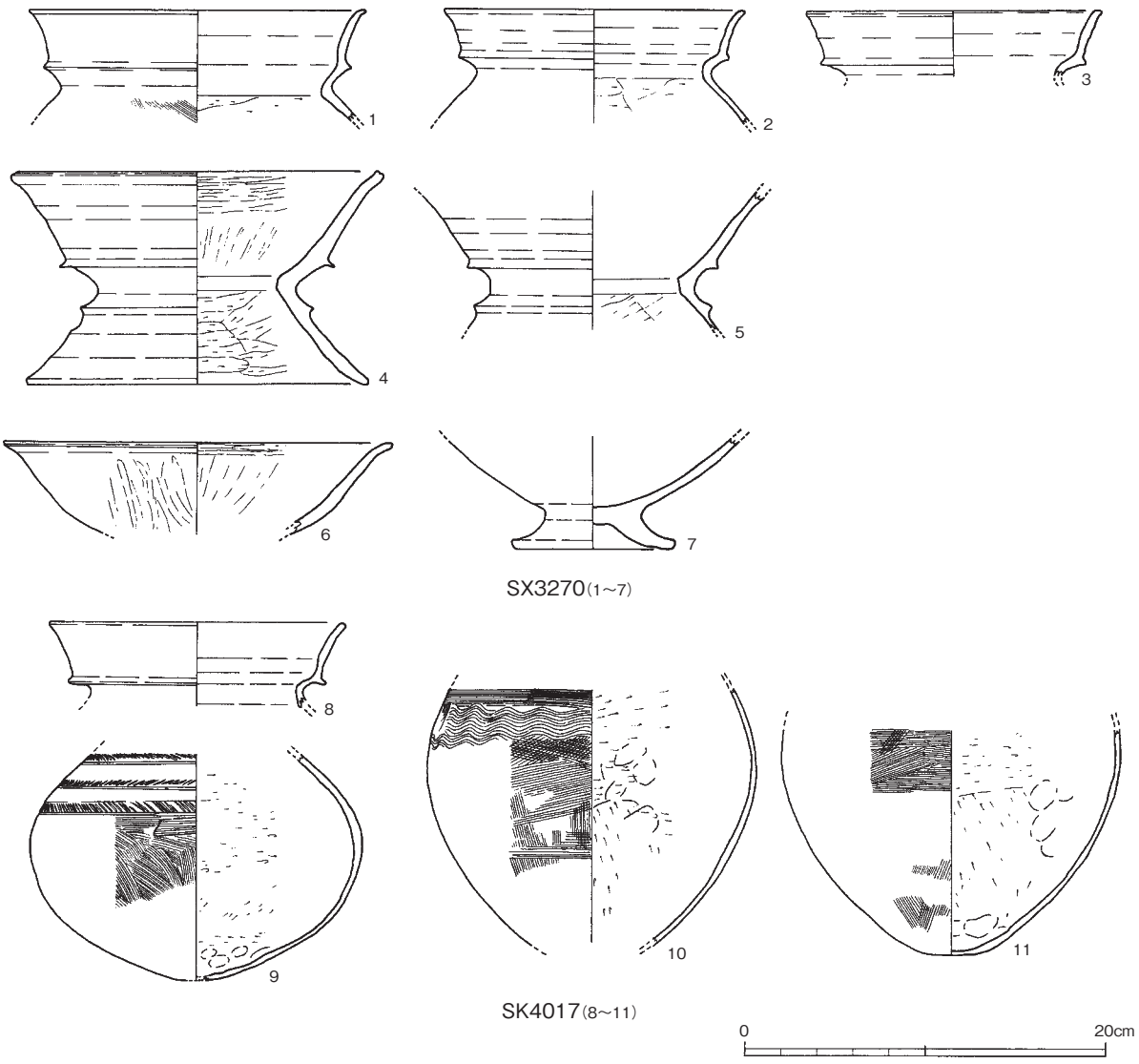




第208図　SD3094出土遺物８（2：3，1：1）



第209図　弥生時代終末～古墳時代前期　遺構出土遺物４（1：4）



第210図　弥生時代終末～古墳時代前期　遺構出土遺物５（1：4）

210－１～３は複合口縁をなす甕の口縁部片である。口縁部は外反して，口縁端部は面をなし外方に引き出される。

210－４・５は鼓形器台である。筒部は短く「Ｃ」字状になる。口縁端部は面をなす。210－６は高杯の杯部で，口縁部は外反して開く。210－７は低脚杯で，口縁部を欠く。

以上の遺物が遺構の1層から主に出土した。よって，SX3270は古墳時代初頭頃と考えられる。

２．Ｄ区の遺構出土遺物

土坑SK4017（210－８～11）

SK4017からは古墳時代初頭の土器が出土している。210－８～11は複合口縁をなす甕である。210－８は口縁部片で，外反して開き，口縁端部は面をなす。210－９～11は胴部から底部にかけての破片である。210－９は底部が丸底で，胴部上半に３段の刻目と沈線が巡る。底部内面に指頭圧痕がある。210－10は胴部上半に櫛描直線文と櫛描波状文が巡る。210－11は痕跡的な平底をなす。底部内面には指頭圧痕がある。

以上の遺物が土坑の床面上でまとまって出土した。よって，SK4017は古墳時代初頭と考えられる。

第５節　古墳時代中期～終末期の遺構出土遺物

古墳時代中期～終末期の遺構出土遺物は，実測可能であった23基の遺構を報告する。

１．Ａ区の遺構出土遺物

溝SD1097（211－１～11　図版91）

SD1097からは古墳時代の土師器と須恵器が出土した。211－１～５は土師器である。211－１～３は口縁部が「く」字状になる甕である。211－１・２は胴部が張らない。211－３は胴部が張る。

211－４は高杯である。杯部は椀状をなし，口縁部の外面が強く撫でられ凹み，口縁端部は先細る。筒部は短く，中実である。脚部内面を除く，内外面に赤彩が施されている。211－５は移動式竈の脚部片である。

211－６～11は須恵器である。211－６・７は杯身で，かえりは短い。211－６は口径約14.8㎝，211－７は口径10.8㎝を測る。211－８・９は低脚無蓋高杯の脚部である。脚部には切れ目がみられる。211－10は壺の脚部である。211－11は大甕の胴部から底部にかけての破片である。

以上の遺物が溝から散在して古墳時代後期～終末にかけての遺物が出土した。よって，SD1097は古墳時代終末期に埋没したと考えられる。

２．Ｂ区の遺構出土遺物

建物SB2156（212－１～３）

SB2156からは古墳時代の土師器と須恵器が出土した。212－１は土師器の杯である。212－２は須恵器の杯蓋，212－３は須恵器の高杯の脚部である。

以上の遺物が建物の柱穴から出土した。小片で時期決定は難しいが，SB2156の時期は古墳時代後半～終末頃と考えられる。

土坑SK2062（212－４～８）

SK2062からは古墳時代の土師器と須恵器が出土した。212－４は土師器の甕である。口縁部は「く」字状をなし，胴部が張る。212－５は移動式竈の胴部から脚部にかけての破片である。212－６は須恵器の杯蓋である。212－７・８は土師器の高杯の脚部で，脚部内面以外に赤彩が施される。

以上の遺物が土坑から散在して出土した。よって，SK2062は古墳時代後期に埋没したと考えられる。

井戸SE2145（212－９～14　図版90・91）

SE2145からは古墳時代の土師器と須恵器が出土した。212－９・10は土師器の甕である。212－９は口縁が「く」字状をなし，口縁端部は外方に引き出される。212－10は退化した複合口縁をなす。212－11は土師器の杯で，口縁は内湾して立ち上がる。内外面に赤彩が施され，内面には放射状の暗文がみられる。212－12は土師器の直口壺である。内外面に赤彩が施されている。212－13は須恵器の杯蓋の口縁部片である。かえりが長い。212－14は須恵器の杯身の破片である。

以上の遺物が井戸から散在して出土した。よって，SE2145は古墳時代中期後半に埋没したと考えられる。

井戸SE2197（213－１～11　図版77・92・94）

SE2197からは古墳時代の土師器と須恵器が出土した。213－１～６は土師器の甕である。213－１は退化した複合口縁をなす。胴部上半には刻目が巡る。213－２～５は口縁部が「く」字状をなし内湾して開く。213－７～10は土師器の高杯である。脚部内面以外は赤彩が施され，暗文もみられる。213－11は須恵器の大型甕である。口縁部を欠く。胴部中央に２条の沈線が巡り，その沈線間に波状文が施されている。また，その沈線間の１か所に円孔が穿たれている。胴部内面上半には指頭圧痕がみられる。底部内面には円棒によるあて具痕がある。

以上の遺物が井戸から出土した。213－３は13層から出土し，他は主に２層でまとまった状態で出土した。よって，SE2197は古墳時代中期後半に埋没したと考えられる。

土坑SK2175（214－１～５　図版96）

SK2175からは古墳時代の須恵器と土師器が出土した。214－１は須恵器の杯身である。短いかえりをもつ。214－２は須恵器の杯蓋である。つまみとかえりをもつ。214－３は須恵器の壺あるいは杯の底部で高台をもつ。214－４は土師器の高杯の接合部である。筒部は中空である。脚部内面以外に赤彩が施される。杯部内面には放射状の暗文が施されている。214－５は甑の把手である。

以上の遺物が土坑から散在して出土した。213－４のみ４層から出土し，他は１層から出土している。よって，SK2175は須恵器から古墳時代終末頃に埋没したと考えられる。

井戸SE2207（214－６～８　図版94）

SE2207からは土師器と須恵器が出土した。214－６は土師器の椀である。口縁部は内傾して立ち上る。214－７は土師器の高杯の脚部である。筒部は中実。内外面に赤彩が施されている。214－８は須恵器の杯身である。口径約13㎝を測り，かえりをもつ。

以上の遺物が土坑から出土した。よって，SE2207は古墳時代後期後半頃に埋没したと考えられる。

土坑SK2232（214－９・10　図版96）

SK2232からは須恵器が出土した。214－９は高杯の杯部で，杯部は浅い椀状をなす。214－10は杯蓋である。口径約10.8㎝を測り，器高は４㎝を測る。

以上の遺物が土坑から出土した。よって，SK2232は古墳時代終末頃と考えられる。

土坑SK2353（214－11～17　図版94・96）

SK2353からは土師器と須恵器が出土した。214－11・12は土師器の甕である。口縁部は「く」字状に屈曲する。214－13～17は須恵器である。214－13は高杯の杯部から脚部にかけての破片である。脚部には三角形の透かしがある。214－14～17は杯身である。口径は約13～14㎝を測り，かえりは短い。

以上の遺物が土坑から出土した。よって，SK2353の時期は古墳時代終末頃（７世紀）と考えられる。

土坑SK2570（214－18～22　図版95）

SK2570からは土師器が出土した。214－18は甕の胴部上半の破片で，胴部が強く張る。214－19は小型丸底壺である。214－20は杯の口縁部片である。口縁部は外反して立ち上る。内外面に赤彩が施される。214－21はミニチュアの壺である。内外面に赤彩が施され，胴部上半には放射状に暗文が施されている。214－22は高杯の脚部である。筒部は中空で，脚部は筒部から直角に開く。

以上の遺物が主に土坑の１層から出土した。よって，SK2570は古墳時代中期頃と考えられる。

土坑SK2747（214－23～25　図版94）

SK2747からは土師器が出土した。214－23は小型の甕である。214－24・25は高杯である。214－24は杯部の屈曲が強く，口縁部が外反する。214－25は椀状の杯部をなす。

以上の遺物が土坑の３層から出土した。よって，SK2747は古墳時代中期に埋没したと考えられる。

土坑SK2751（215－１・２）

SK2751からは土師器が出土した。215－１・２は口縁部が「く」字状をなす甕である。215－１は胴部が張らない。215－２は胴部が張る。

以上の遺物が土坑から出土した。よって，SK2751は古墳時代後期頃と考えられる。

土坑SK2781（215－３～７　図版95）

SK2781からは土師器が出土した。215－３・４は退化した複合口縁の甕である。215－５は高杯の杯部である。深い杯部で曖昧な段が巡る。内外面に赤彩が施され，外面には斜格子状の暗文，内面には放射状に暗文が施されている。215－６は退化した複合口縁をなす甕である。215－７は，甑の把手である。

以上の遺物が土坑から散在して出土した。よって，SK2781は古墳時代中期後半頃に短期間に埋没したと考えられる。

土坑SK2813（215－８・９　図版94・96）

SK2813からは土師器と須恵器が出土した。215－８は土師器の甕で，口縁部が「く」字状をなす。胴部は強く張る。215－９は須恵器の杯身である。口径は約15㎝を測る。

以上の遺物が土坑の１層（215－９），４層（215－８）から出土した。よって，SK2813は古墳時代

後期に埋没したと考えられる。

土坑SK2857（215－10　図版95）

SK2857からは須恵器の平瓶（215－10）が出土した。胴部の中心からずれた部分から直立する頸部が立ち上る。口縁部を欠く。胴部上半には２つのボタン状粘土が貼り付けてある。

以上の遺物が土坑の床面近くから出土した。よって，SK2857は古墳時代終末頃に機能したであろう。

井戸SE2022（216－１　図版95）

SE2022からは須恵器の直口壺（216－１）が出土した。直線的に開く口縁部をもち，胴部上半で最大径をなす。底部は凸レンズ状の平底をなす。

以上の遺物が井戸から出土した。よって，SE2022は古墳時代終末頃に機能したと考えられる。

井戸SE2677（216－２～４　図版96）

SE2677からは土師器と須恵器が出土した。216－２は土師器の高杯の杯部である。杯部は椀状をなし，口縁部は内湾している。内外面に赤彩が施され，内面には放射状の暗文がみられる。216－３は須恵器の杯蓋である。つまみは無く，内面に短いかえりがある。216－４は土製支脚である。上部は欠くが，２方向の突起がつき，背部には環状の突起がつく。

以上の遺物が井戸の床面付近で出土した。よって，SE2677は古墳時代終末頃に機能したであろう。

井戸SE2691（216－５～14　図版94・95）

SE2691からは土師器が出土した。216－５～８は「く」字状の口縁をなす甕である。216－９・10は退化した複合口縁をなす甕である。216－11は「く」字状の口縁をなす小型の甕である。216－12は高杯の接合部である。216－13・14は高杯の脚部である。216－13は３方向に円孔が穿たれる。外面には赤彩が施されている。216－14には非貫通の円孔が１か所みられる。これは焼成後に穿こうとしたものである。

以上の遺物が井戸の主に３層からまとまって出土した。よって，SE2691は古墳時代中期頃に埋没したと考えられる。

溝SD2265（217－１～８　図版96）

SD2265からは土師器と須恵器が出土した。217－１は土師器の甕で，「く」字状の口縁をなす。胴部は張らない。217－２は土師器の高杯の脚部で，筒部は中実である。内外面には赤彩が施されている。217－３・４は須恵器の杯蓋である。口径は約12～13㎝を測り，天井部は丸い。217－５・６は杯身である。口径は約14.6㎝を測る。217－７は須恵器の低脚高杯の脚部である。脚部には切れ目と三角形透かしがある。217－８は壺の胴部から底部にかけての破片である。底部には高台がつく。

以上の遺物が溝から散在して出土した。よって，SD2265は古墳時代終末期に埋没したと考えられる。

溝SD2754（217－９～11　図版95・96）

SD2754からは土師器と須恵器が出土した。217－９は土師器の甑である。口縁部は「く」字状をなし，胴部は張らない。脚部の裾には円孔が穿たれている。217－10は須恵器の長頸壺である。口縁部は内湾しながら開く。胴部は丸い。217－11は須恵器の鼈である。口縁部を欠く。

以上の遺物が溝から散在して出土した。よって，SD2754は古墳時代終末期頃に埋没したと考えら

れる。

３．Ｃ区の遺構出土遺物

井戸SE3135（217－12～16　図版95）

SE3135からは土師器と須恵器が出土した。217－12は口縁部が「く」字状をなす土師器の甕で，胴部は張らない。217－13は土師器の杯である。内外面に赤彩が施されている。217－14は土師器の高杯の脚部である。筒部は中空で，筒部と裾部の境に突帯が巡る。217－15・16は須恵器の提瓶である。217－15は胴部上半の２か所にボタン状の把手の痕跡がある。

以上の遺物が井戸から散在して出土した。よって，SE3135は古墳時代終末期に機能したであろう。

溝SD3039（218－１～５　図版93）

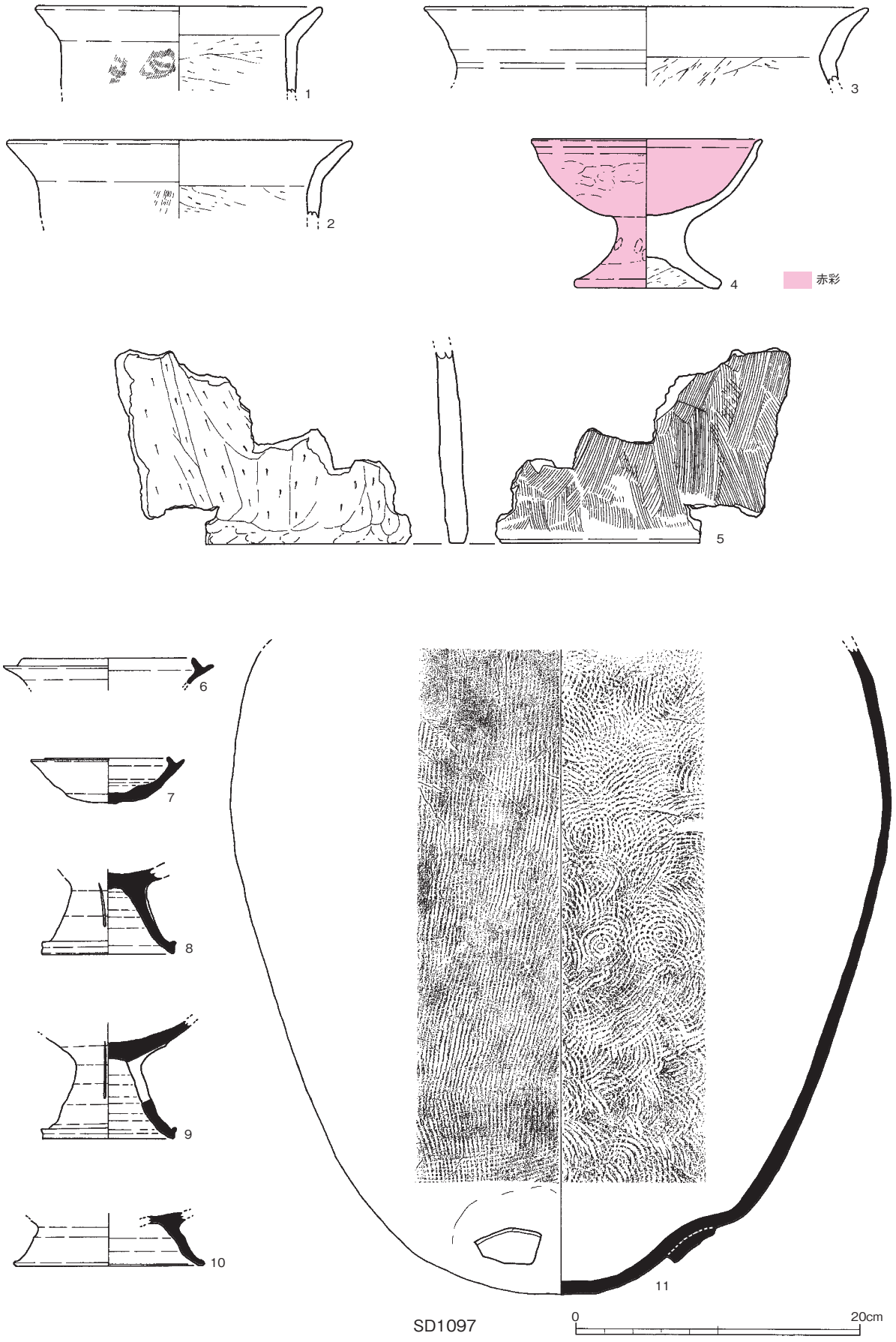
SD3039からは土師器が出土した。218－１は退化した複合口縁の甕である。218－２・３は口縁部が「く」字状をなす甕である。218－４は低脚杯である。218－５は高杯の脚部である。

以上の遺物が溝から散在して出土した。よって，SD3039は古墳時代中期頃に埋没したと考えられる。

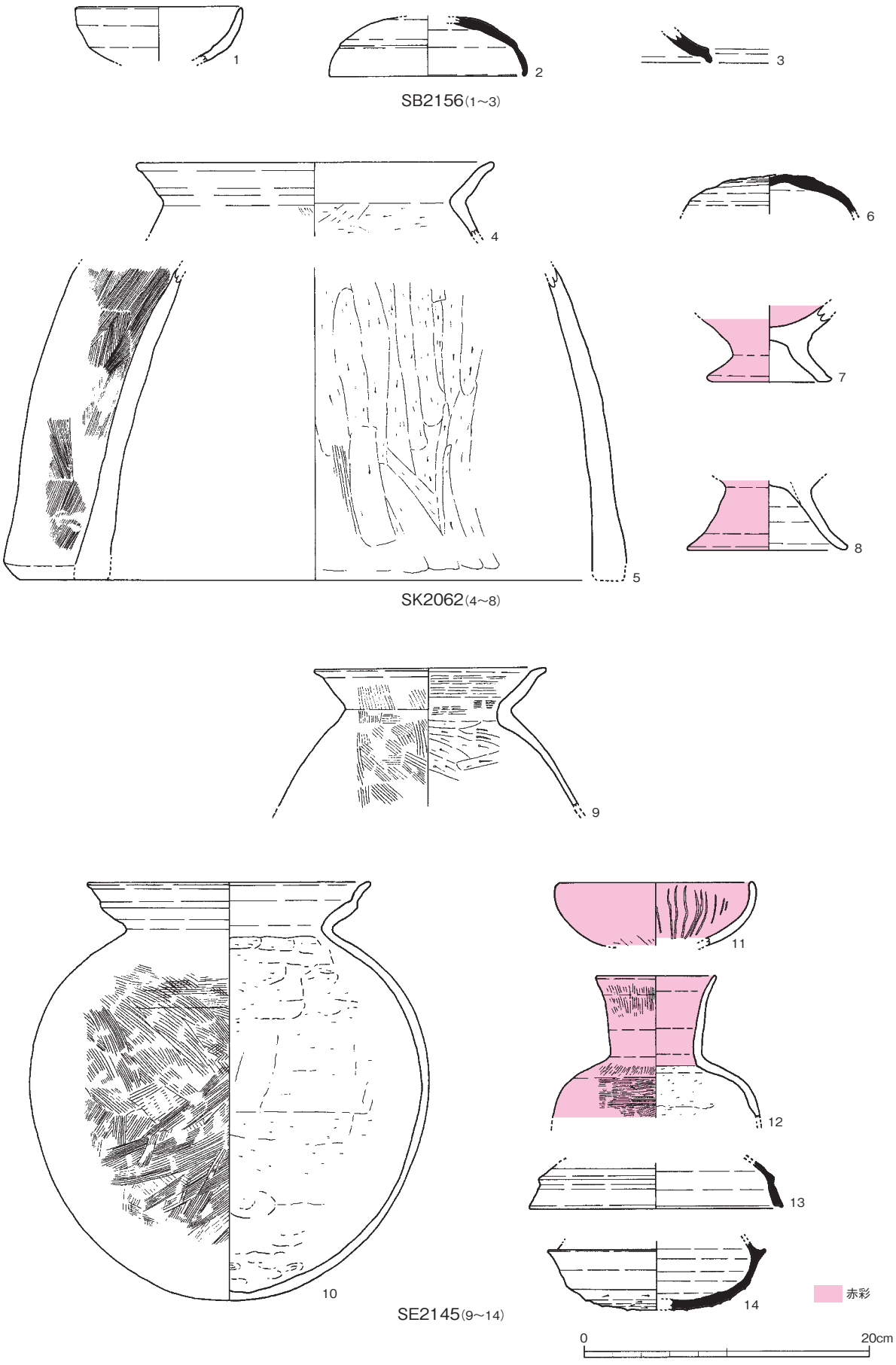
溝SD3042（218－６～13　図版77・93）

SD3042からは土師器と初期須恵器が出土した。218－６～８は口縁部が「く」字状をなす甕である。218－９は退化した複合口縁の甕である。218－10・11は小型丸底壺である。口縁部は「く」字状をなす。218－12はTK73の初期須恵器の高杯（第11章第５節参照）である。口縁部は外反して開き，口縁端部は先細る。脚部には３方向に円孔が穿たれている。218－13は棒状土錘で，紡錘形をなす。

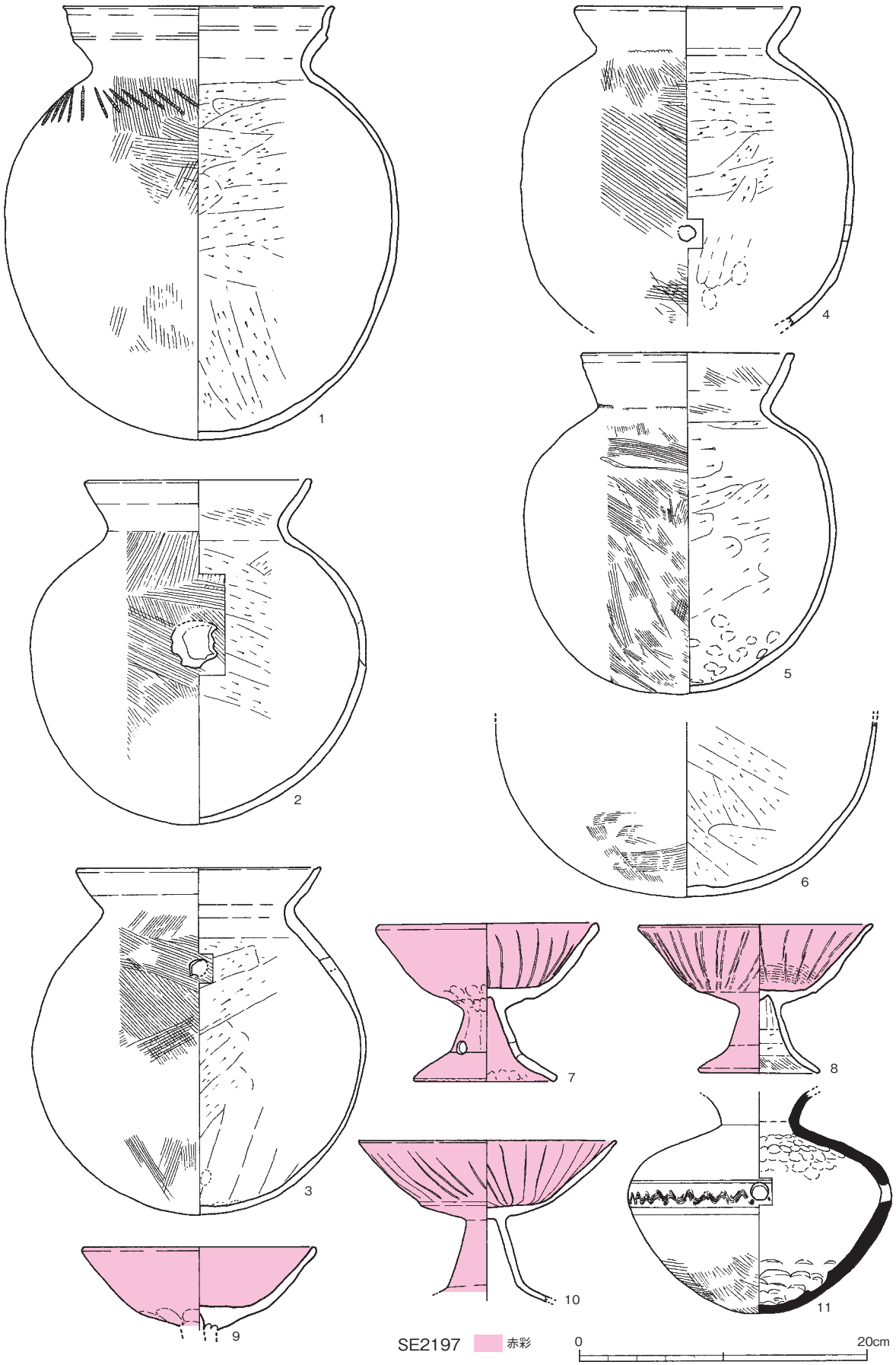
以上の遺物が溝から散在して出土した。よって，SD3042は古墳時代中期前半頃に埋没したと考えられる。



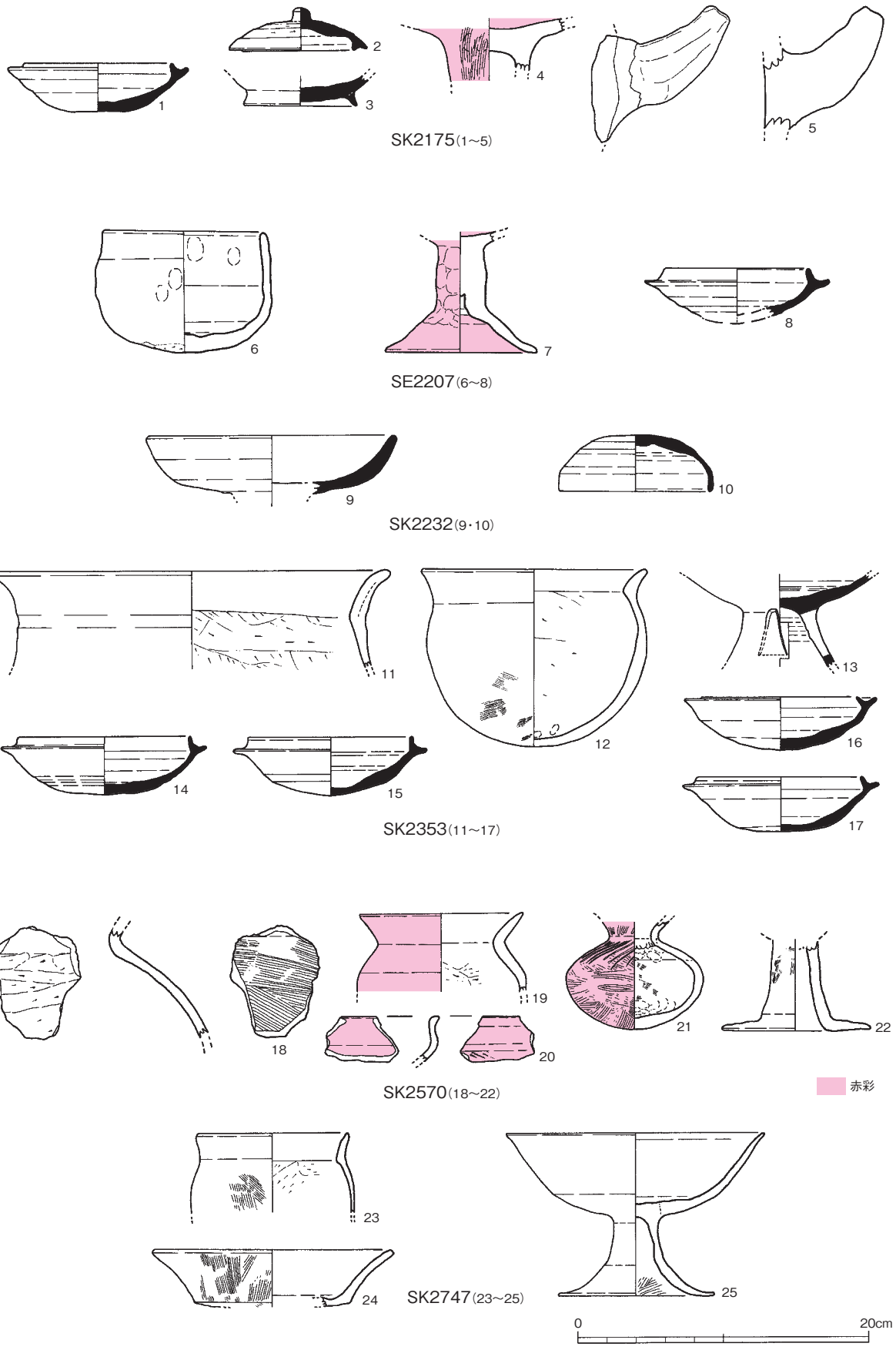
第211図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物１（1：4）



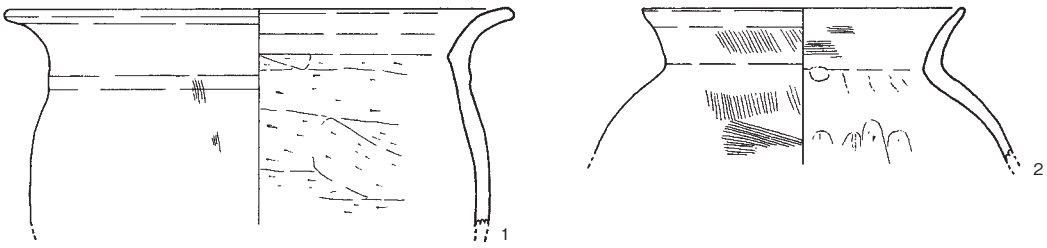
第212図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物２（1：4）



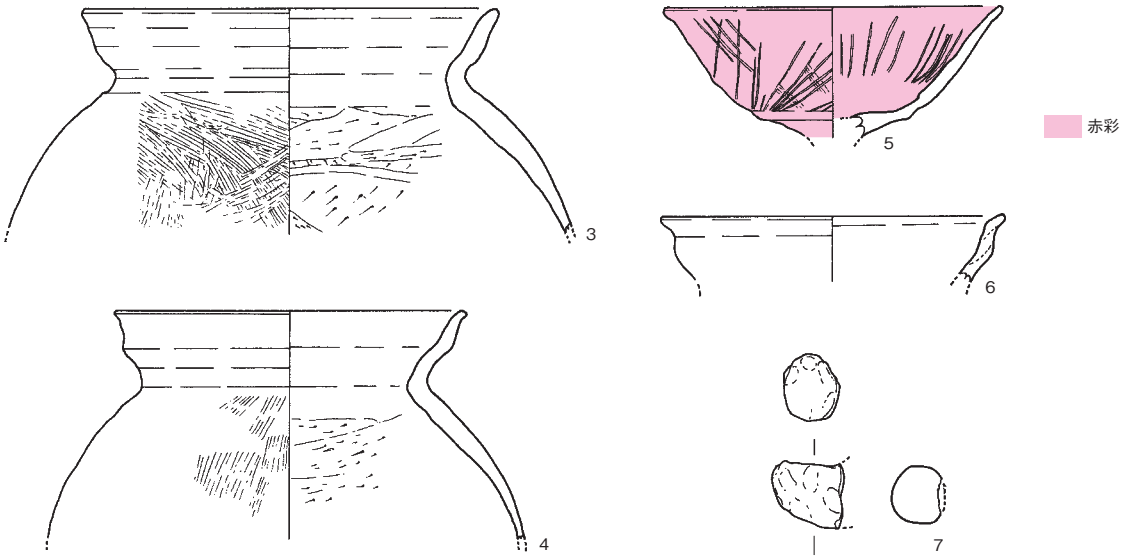
第213図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物３（1：4）



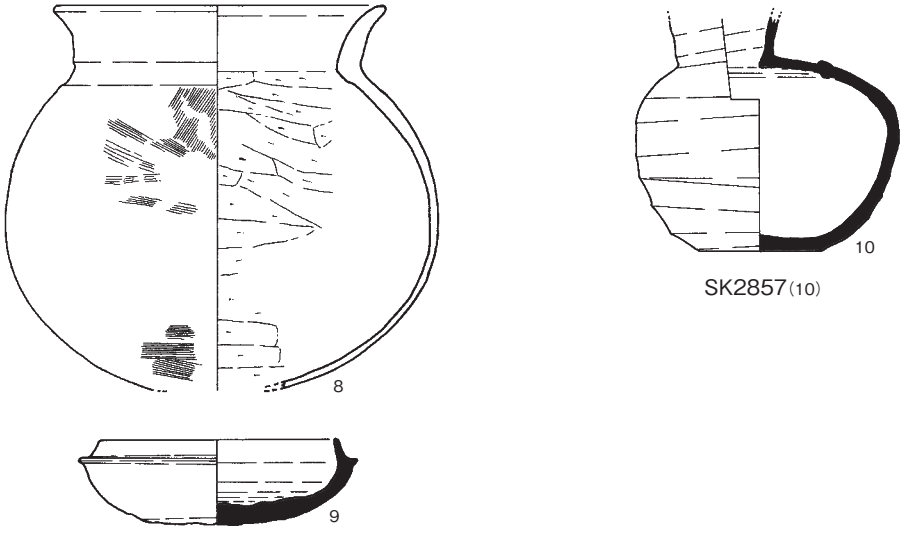
第214図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物４（1：4）



SK2751(1・2)



SK2781(3～7)

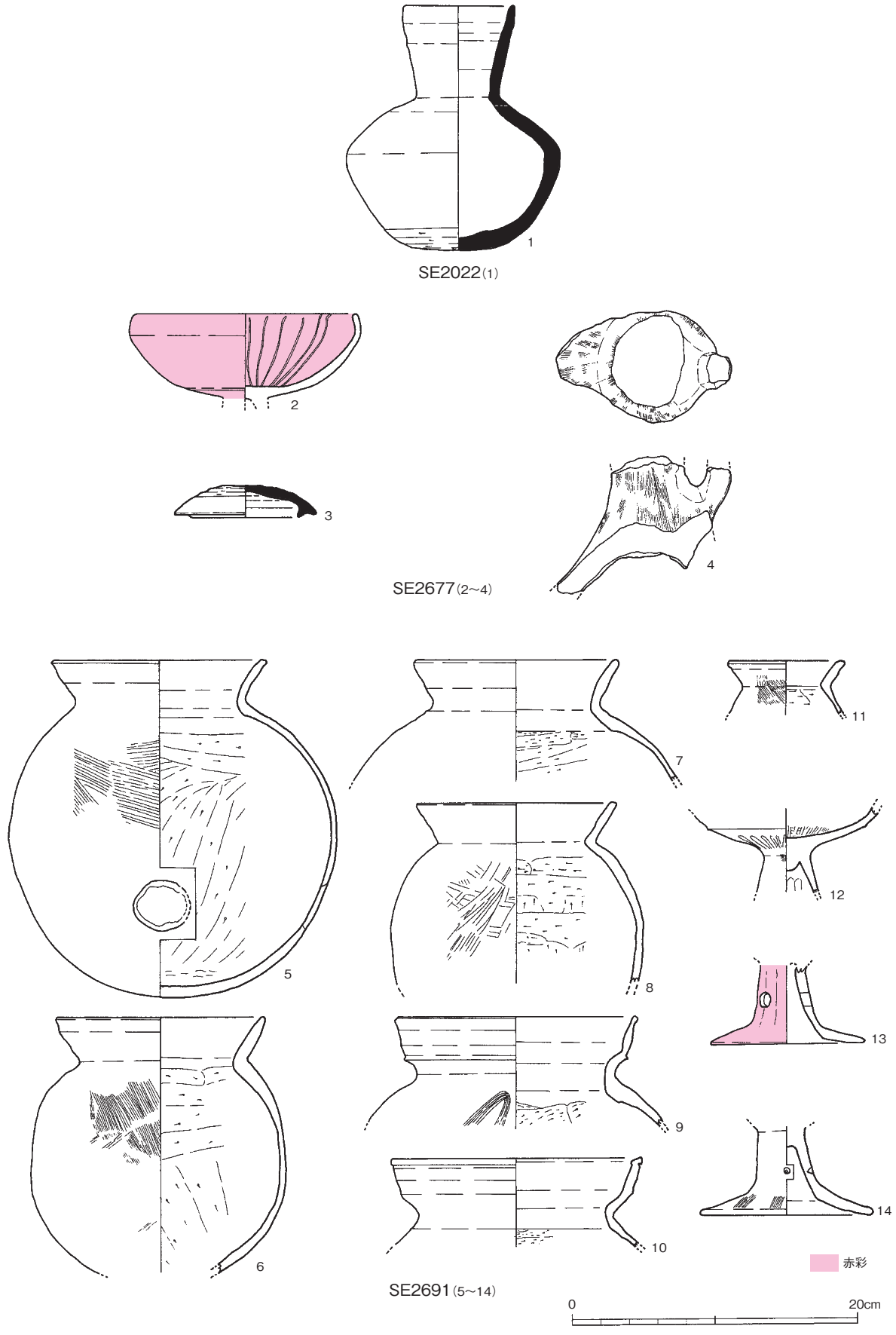


SK2857(10)

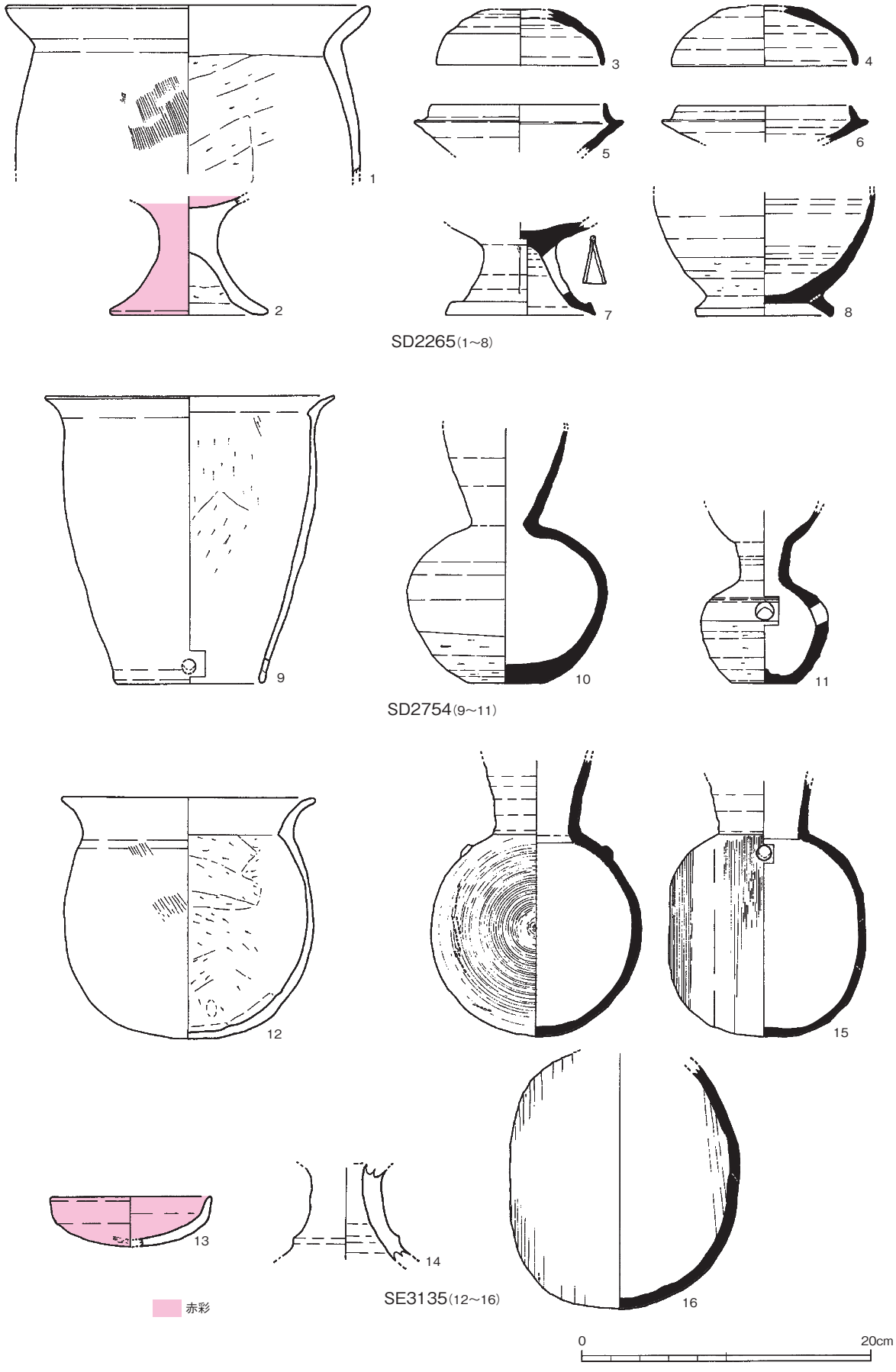
SK2813(8・9)

0　20cm

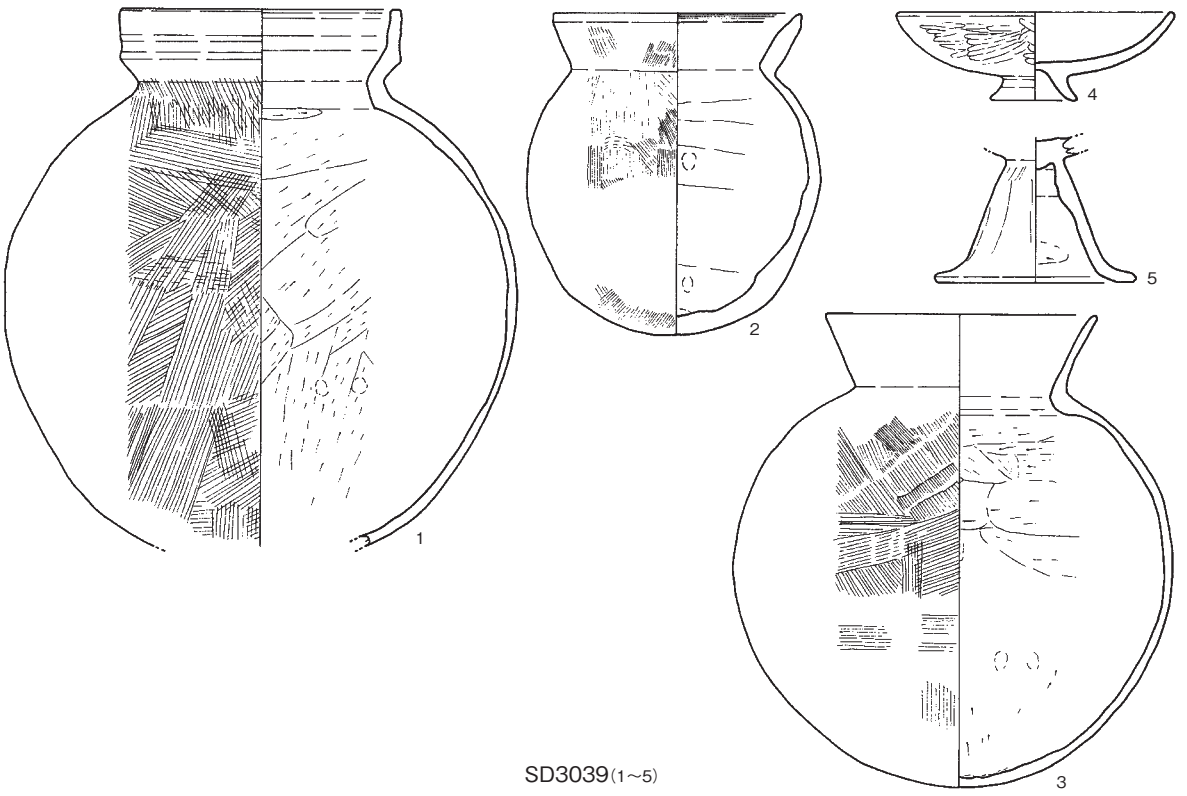
第215図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物５（1：4）

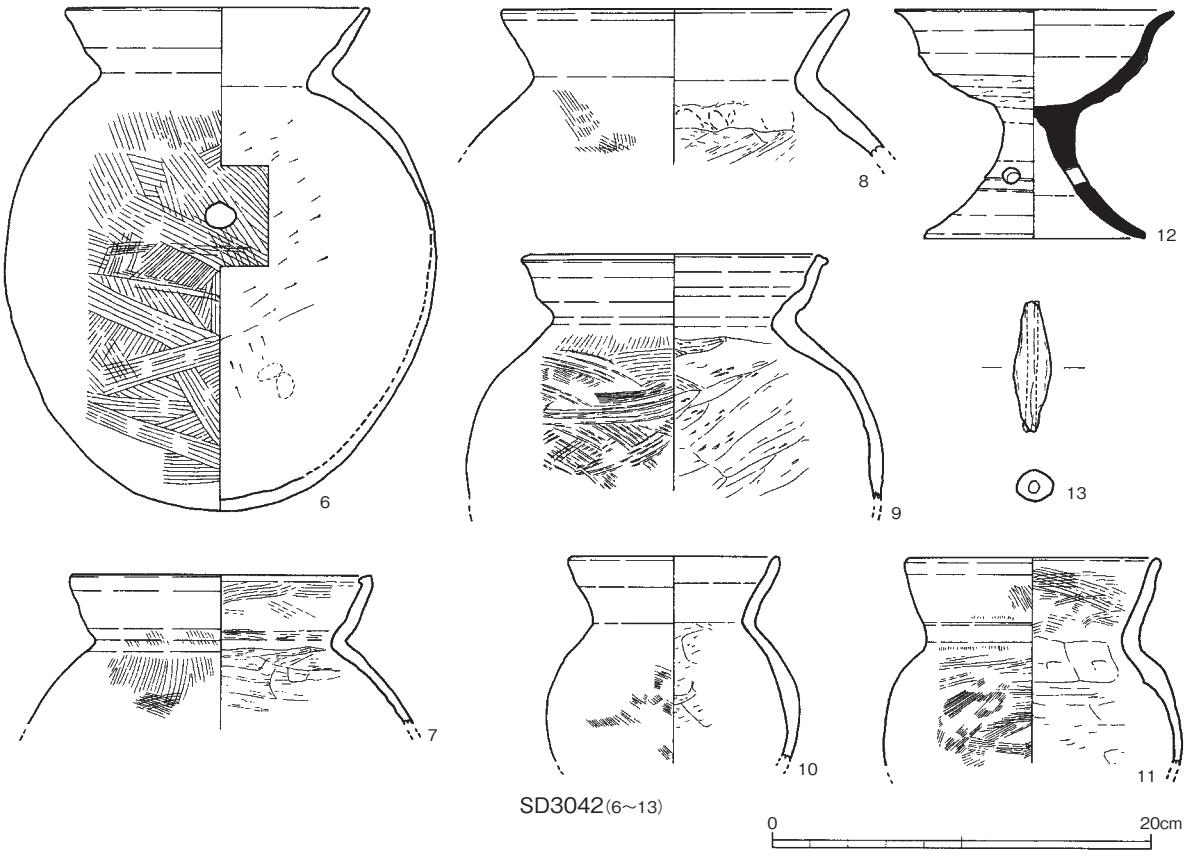


第216図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物６（1：4）



第217図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物７（1：4）





第218図　古墳時代中期～終末期　遺構出土遺物８（1：4）

第６節　古代の遺構出土遺物

１．Ａ区の遺構出土遺物

建物SB1031（219－１）

219－１は土師器の甕または甑の口縁部である。屈曲部の内面にハケ目を施し，体部内面はヘラケズリである。７～８世紀のものであろう。

土坑SK1021（219－２）

219－２は須恵器の長頸壺の胴部である。胴部上半にカキ目を施す。７～８世紀のものであろう。

土坑SK1047（219－３・４　図版101）

219－３は須恵器の杯である。体部は丸く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。底部は回転糸切りである。８世紀中頃～後葉（青木Ⅱ～Ⅲ期）。219－４は土師器の甕である。体部内面はヘラケズリ。

土坑SK1093（219－５）

219－５は須恵器の杯底部である。底部は回転ヘラ切りである。底部内面に「キ」状のヘラ記号がある。７～８世紀のものであろう。

井戸SE1136（219－６）

219－６は須恵器の高台付杯である。体部は丸く立ち上がり，口縁端部は丸い。高台は底部の外周に付く。回転糸切りである。８世紀中頃。

土坑SK1140（219－７　図版101）

219－７は土師器の杯である。体部はやや内湾しながら立ち上がり，端部は外反する。底部は回転糸切りである。９世紀のものである。

土坑SK1141（219－８～10）

219－８は須恵器の杯で，体部は丸く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。底部は回転糸切りである。219－９は土師器の杯で，体部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切りである。219－10は土師器の甕である。体部内面はヘラケズリ。219－８は８世紀中頃，219－９は９世紀のものである。

土坑SK1158（219－11～13　図版77・101）

219－11は須恵器の杯である。体部は丸く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。底部は回転糸切りである。219－12は赤彩土師器の杯である。底部外周はヘラケズリを施す。底部外面に「大山」の墨書がある。８世紀前半のものである。219－13は土師器の甕の口縁である。体部内面はヘラケズリである。

土坑SK1203（219－17）

219－17は土師器の杯である。体部外面に「家」の墨書がある。９世紀のものである。

井戸SE1026（219－14～16）

219－14は須恵器の杯である。体部は丸く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。219－15は須恵器の壺の底部である。底部は回転糸切りである。底部外面に墨が付着していることから，硯に転用されたと思われる。219－16は赤彩土師器の杯である。底部周辺はヘラケズリである。219－14・16は８世紀

中頃，219－15は８世紀後葉のものである。

溝SD1007（220－１　図版101）

220－１は須恵器の杯である。体部は丸く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。底部は回転糸切りである。８世紀中頃。

溝SD1089（220－２～９）

220－２～６は須恵器である。220－２は杯である。体部は丸く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。底部は回転糸切りである。８世紀後葉（青木Ⅲ期)。220－３は杯である。体部は強く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。220－４は杯蓋である。輪状つまみを持つ。天井部外面に「×」状のヘラ記号がある。８世紀前半(青木Ⅰ期)。220－５は高杯である。長方形透かしが２方向にあく。７世紀。220－６は長頸壺の口頸部である。７～８世紀。220－７は土師器の甕か甑である。体部はほぼまっすぐで，内面はヘラケズリ。口縁はゆるく外反し，内面はハケ目である。220－８は製塩土器である。220－９は棒状土錘である。孔があき，端部には溝状のくぼみがある。

溝SD1101（220－10～20　図版101）

220－10～18は須恵器である。220－10・11は杯である。220－10は，体部が丸く内湾し，口縁部は丸くおさめる。底部は回転糸切りである。220－11は，体部が強く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。底部は回転糸切りである。220－10・11は８世紀後葉。220－12・13は８世紀の高台付杯である。いずれも高台は底部外周に付き，底部は回転糸切りである。底部外面に220－12は「×」状の，220－13は一条のヘラ記号がある。220－14は杯蓋である。輪状つまみが付く。220－15は高杯である。切り込み状の透かしが２方向にあく。７世紀。220－16は壺の底部である。底部は回転糸切りである。220－17は壺の胴部である。カキ目と突帯が付く。220－18は浄瓶の頸部である。内面にしぼり目が残る。220－19は土師器の杯である。体部は直線的に立ち上がり，口縁部は屈曲する。９世紀前葉（青木Ⅳ期)。220－20は土製円盤である。重さは25gである。

溝SD1103（220－21～28）

220－21～26は須恵器である。220－21は杯身である。220－22は杯である。体部は丸く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。底部は回転糸切りである。220－23～25は高台付杯である。220－23は，体部は丸く内湾する。220－24は，体部は丸く内湾する。高台は外方に開く。底部は回転ヘラ切りである。220－25は，底部は静止糸切りである。220－26は杯蓋である。天井部に輪状つまみが付く。口縁端部は下方に折り曲げる。220－27・28は赤彩土師器である。220－27は皿である。底部はヘラケズリである。220－28は皿である。底部はナデ。220－22・23・25～28は８世紀中頃である。

溝SD1152（220－29～33）

220－29・30は須恵器の杯である。220－29は体部が丸く内湾し，口縁部は強く屈曲する。底部は回転糸切りである。220－30の底部も回転糸切りである。220－31は赤彩土師器の皿である。220－32・33は土師器の甕である。体部内面はケズリ。220－29・31は８世紀中頃～後葉。

溝SD1195（220－34）

220－34は須恵器の甕である。内面のあて具痕は扇状である。

２．Ｂ区の遺構出土遺物

建物SB2855（土坑SK2891）（221－１）

221－１は須恵器の高杯である。長脚２段透かしで，杯部と脚部の境に一条の沈線を施す。透かしは２方向に浅い切り込みを入れ，上段の透かしの下側に一条の沈線を施す。７世紀のものである。

土坑SK2059（221－２～４）

221－２は須恵器の杯である。体部は丸く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。底部は回転糸切りである。８世紀後葉（青木Ⅲ期）。221－３・４は土師器である。221－３は甕の口縁。体部内面はケズリ。221－４は甑。体部内面はケズリ。

土坑SK2139（221－５・６）

221－５・６は土師器である。221－５は甕である。体部内面はケズリ。221－６は甕である。口縁部は長く，強く外反する。体部は球形で，内面はケズリ。７～８世紀のものか。

土坑SK2189（221－７～11）

221－７・８は須恵器である。221－７は高台付杯である。体部は直線的に立ち上がる。高台は底面外周に付く。回転糸切りである。９世紀前葉（青木Ⅳ期）。221－８は長頸壺の頸部である。221－９～11は土師器の甕の口縁である。221－９は口縁内面の下半部はハケメを施す。体部内面はケズリ。外面に煤が付着する。221－10は体部内面はケズリ。口縁部内面に煤が付着する。221－11は体部内面はケズリ。外面に煤が付着する。

土坑SK2289（221－12）

221－12は須恵器の高杯の脚部である。透かしは３方向に浅い切れ目を入れる。７世紀のものであろう。

土坑SK2342（221－13～17　図版101）

221－13・14は須恵器である。221－13は杯身である。221－14は杯蓋で，口縁部にかえりをもつ。つまみは輪状つまみである。221－15・16は土師器の小型甕である。221－15は焦げ，煤が付着する。221－16は煤が付着する。221－17は石製の紡錘車である。表面に星形文と山形文を施す。221－13は７世紀初，221－14は７世紀末，221－15・16も７世紀末か。

土坑SK2352（222－１～９）

222－１～４は須恵器である。222－１～３は杯である。222－１は，体部は丸く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。222－２は，体部は丸く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。底部は回転糸切りである。222－３は，体部は丸く内湾し，口縁部は丸くおさめる。底部は回転糸切りである。222－４は高杯である。透かしは認められない。222－５～９は土師器である。222－５～８は赤彩土師器である。赤彩は底部にまで及ぶ。222－５は杯で体部は屈曲し，底部は押出しにより丸い。底部及び外周はケズリ。222－６は杯で体部は屈曲し，口縁は外反する，底部は平ら。底部及び外周はケズリ。222－７は杯で体部は屈曲し，口縁は外反する，底部は平ら。底部及び外周はケズリ。222－８は杯である。体部は丸く内湾し，口縁端部がわずかに屈曲する。底部から体部の下半分まではケズリ。222－９は甕の口縁である。頸部内面にはハケメを施す。８世紀中頃（青木Ⅱ期）。

土坑SK2402（222－10～13）

222－10～12は土師器の甕である。222－10は頸部が直立する。体部内面はケズリ。222－11は体部内面をケズル。222－12は体部内面はケズリ。222－13は土製支脚（岩橋分類Ⅱ類）である。

土坑SK2566（222－14～18）

222－14・15は須恵器である。222－14は杯蓋である。口縁部はかえりをもち，つまみは輪状つまみである。７世紀末から８世紀初。222－15は長頸壺の口頸部である。222－16は赤彩土師器の高杯の椀部である。222－17・18は土製支脚である。222－17は岩橋分類Ⅱ類。

井戸SE2798（223－１・２　図版104）

223－１は９世紀中～後葉（青木Ⅴ類）の赤彩土師器の高台付杯である。223－２は「大観通寶」（初鋳年1107年・北宋）である。

土坑SK2843（223－４～７）

223－４～６は須恵器である。223－４は杯である。体部は丸く内湾し，口縁部は丸くおさめる。底部は回転糸切りである。223－５は皿である。体部は外反する。223－４・５は８世紀中頃～後葉。223－６は高杯である。透かしは２方向にあき，一方は三角形で，もう一方は切り込みを入れる。７世紀。223－７は赤彩土師器の杯である。体部は直線的である。底部はナデである。８世紀中頃（青木Ⅱ期）。

土坑SK2860（223－３・８　図版104）

古銭が２枚出土している。223－３は「□□通寶」である。拓影は掲載していないが，もう１枚は「景徳元寶」（初鋳年1004年・北宋）である。223－８は赤彩土師器の高杯である。

土坑SK2890（223－10　図版77）

223－10は赤彩土師器の底部片である。底部外面に「社」を刻む。８世紀前半～中頃。

井戸SE2081（223－11）

223－11は管状土錘である。重さは39ｇ。

井戸SE2373（223－12～19）

223－12～14は須恵器である。223－12は杯である。体部は丸く内湾し，口縁部は丸くおさめる。底部は回転糸切りである。223－13は高台付皿である。体部は外反し，高台は底部のやや内側に付く。223－14は高台付杯である。高台は底部のやや内側に付く。底部は回転糸切りである。223－15～17は赤彩土師器である。223－15は杯である。体部は丸く内湾し，口縁端部がわずかに屈曲する。223－16は杯である。底部外面はナデのちハケである。一部指頭圧痕がある。223－17は皿である。223－18・19は製塩土器である。８世紀中頃～９世紀前葉。

井戸SE2848（223－20～25）

いずれも井戸枠埋土から出土した。223－20～24は須恵器である。223－20は杯身である。223－21は高台付杯である。体部は丸く内湾する。高台は底部外周に付く。223－22は高台付杯である。高台は底部外周に付く。223－23は甕である。223－24は取手付き甕である。223－25は土師器の甕である。223－20以外は８世紀前半であろう。

溝SD2030（224－１）

224－１は須恵器の壺底部である。高台が付く。８世紀。

溝SD2213（224－２～７）

224－２～４は須恵器である。224－２は杯である。体部は丸く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。底部は回転糸切りである。224－３は長頸壺の頸部である。頸部に２条の沈線を施す。224－４は杯の底部である。底部は回転糸切りである。224－５～７は土師器である。224－５は赤彩土師器の杯である。体部はゆるく内湾する。224－６は甕である。224－７は甕である。口縁は外反する。８世紀後葉（青木Ⅲ期）。

溝SD2217（224－８～22　図版101）

224－８～13は須恵器である。224－８は杯蓋である。口縁は垂下する。つまみは輪状つまみである。224－９は高台付杯である。体部は直線的に立ち上がり，口縁部はゆるく外反する。高台は底部周辺に付く。224－８・９は９世紀初であろう。224－10～12は７世紀代の無蓋高杯である。224－10は，透かしは２方向にあき，切り込みを入れる。224－11は，透かしは２方向にあき，切り込みを入れる。224－12は，透かしは２方向にあき，端部が丸みをもった切り込みを入れる。224－13は壺である。肩が張り，体部はゆるやかに屈曲する。224－14は土師器の高台付杯である。体部はゆるやかに内湾し，高台は「ハ」字状に開く。10世紀前半。224－15は赤彩土師器の高杯である。224－16は土師器の椀である。口縁端部は外反する。底部は丸底である。224－17は土師器の甕である。224－18は赤彩土師器の甕である。224－19・20は土師器の甕である。224－21は土師器の甑である。底部端に孔が２方向にあく。224－22は土製支脚である。貫通しない穴が背面にあく。岩橋分類Ⅰ類。

溝SD2221（224－23～28）

224－23～26は須恵器である。224－23・24は杯である。224－23は，体部は丸く内湾し，口縁部は強く屈曲する。底部は回転ヘラ切りである。224－24は，体部は丸く内湾し，口縁部は丸くおさめる。底部の切り離し方法は不明である。224－25は高台付杯である。224－26は高杯である。透かしは２方向に切り込みを入れる。224－27･28は赤彩土師器である。224－27は椀である。体部はゆるく外反し，口縁端部は内傾する。224－28は杯である。底部はナデ。８世紀。

溝SD2224（224－29　図版103）

224－29は須恵器の杯である。口縁部は外反する。底部は平底。８世紀前半。

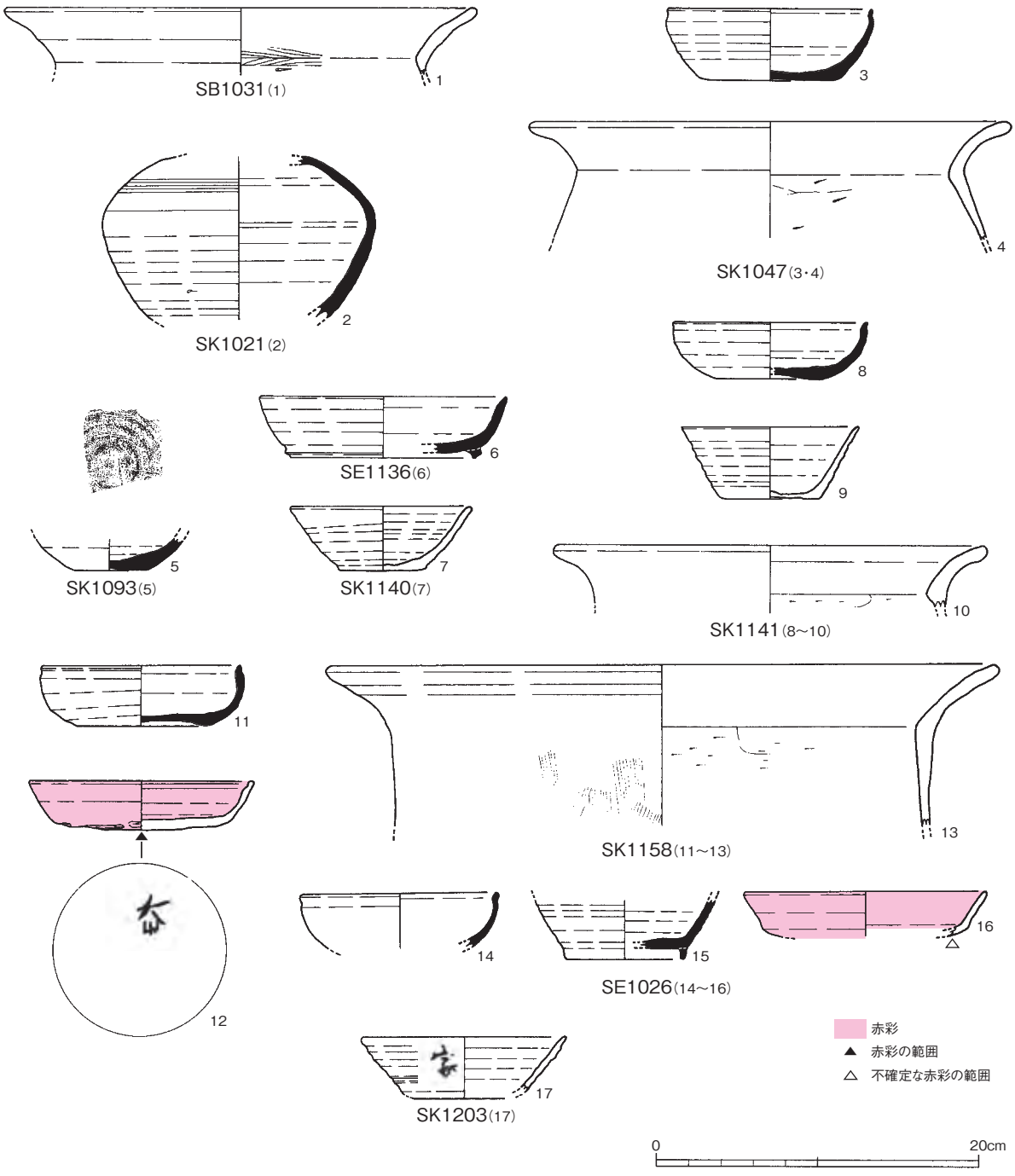
３．Ｃ区の遺構出土遺物

土坑SK3083（224－30）

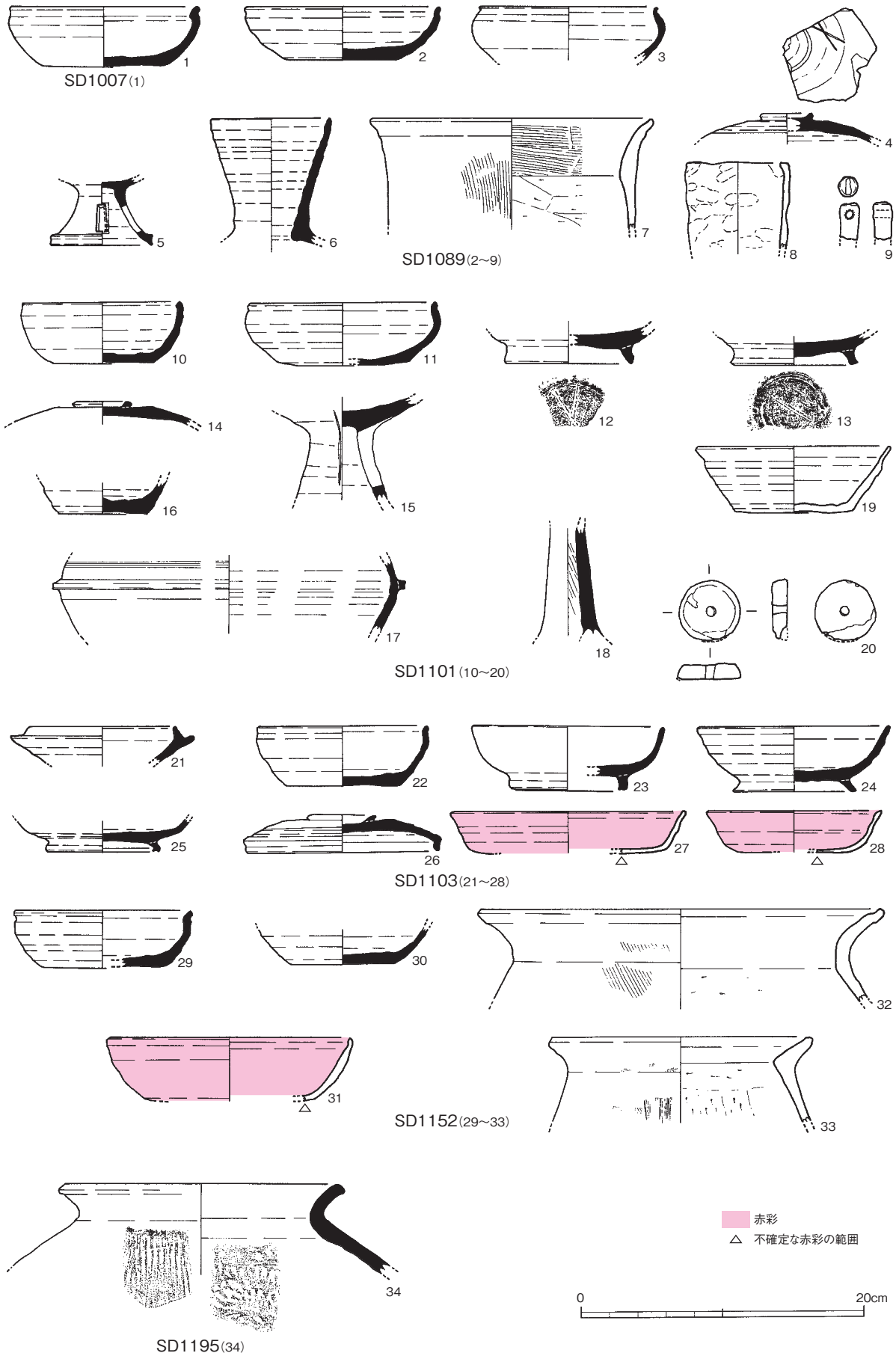
224－30は須恵器の提瓶の口頸部である。

井戸SE3169（224－31　図版101）

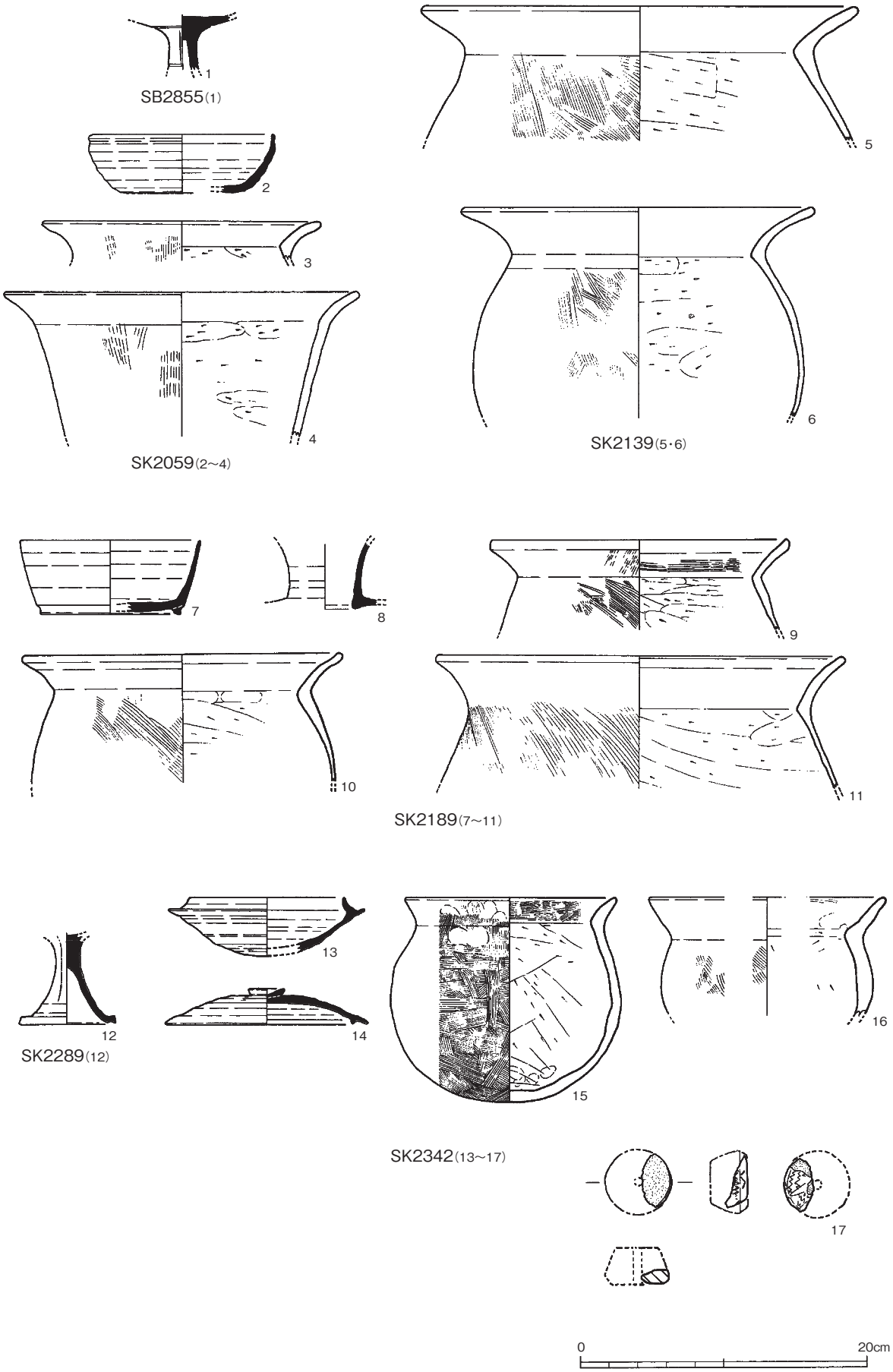
224－31は須恵器の長頸壺である。体部中央にカキ目を施す。



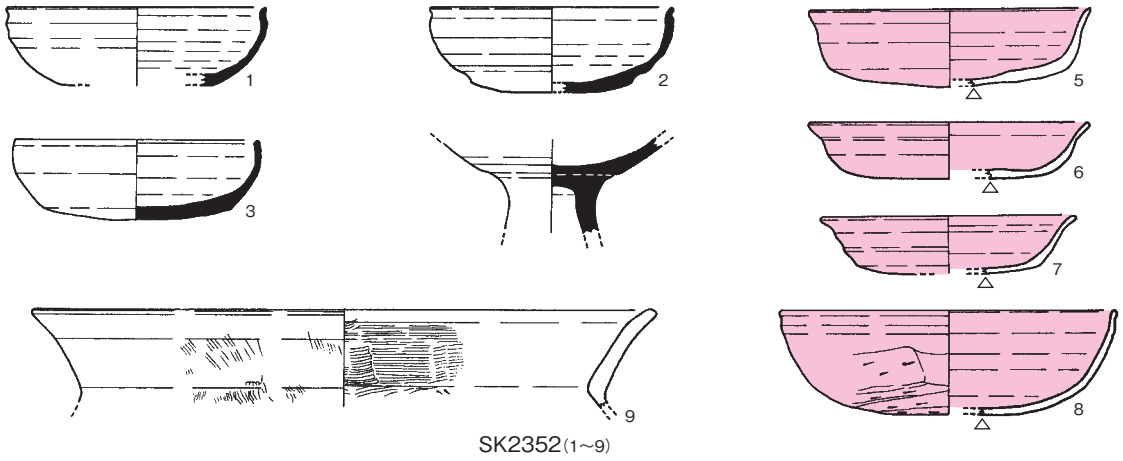
第219図　古代　遺構出土遺物１（1：4）



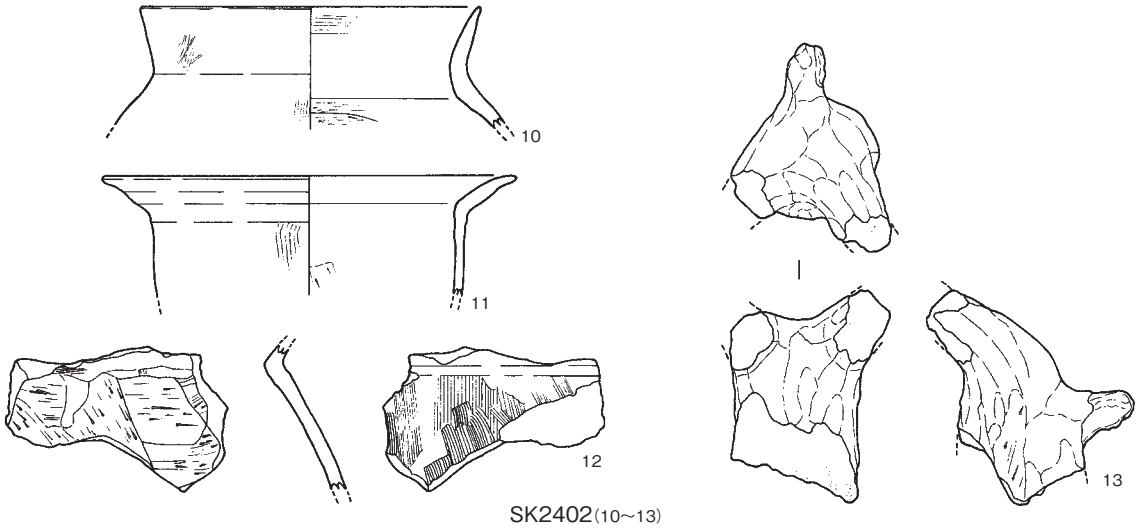
第220図　古代　遺構出土遺物２（1：4）



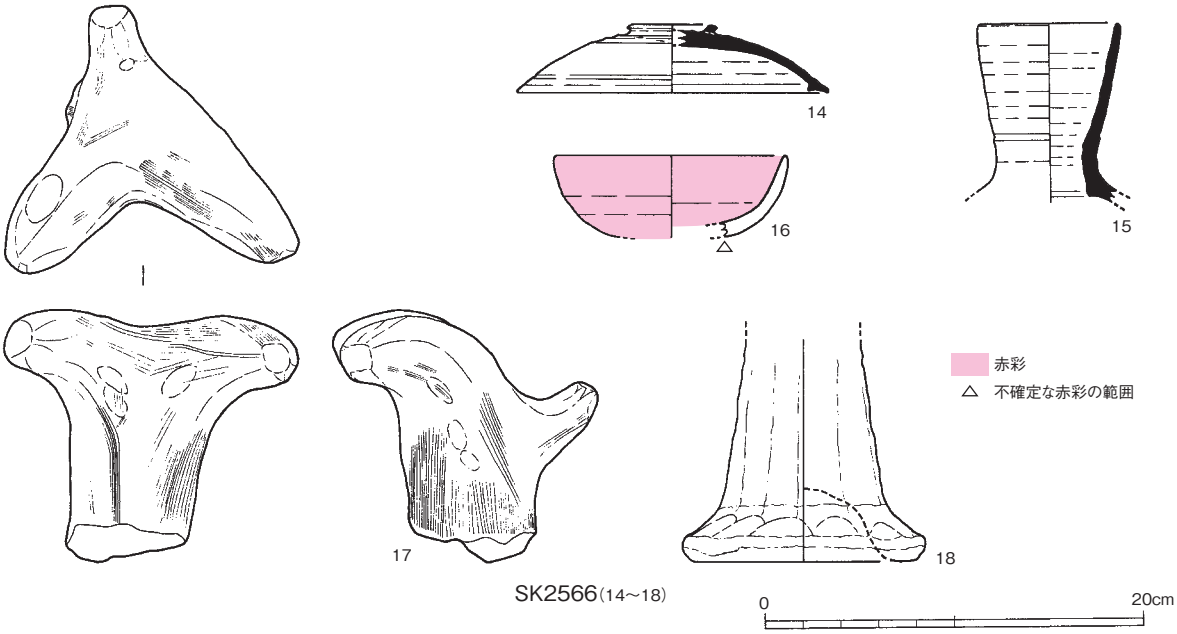
第221図　古代　遺構出土遺物３（1：4）



SK2352(1～9)

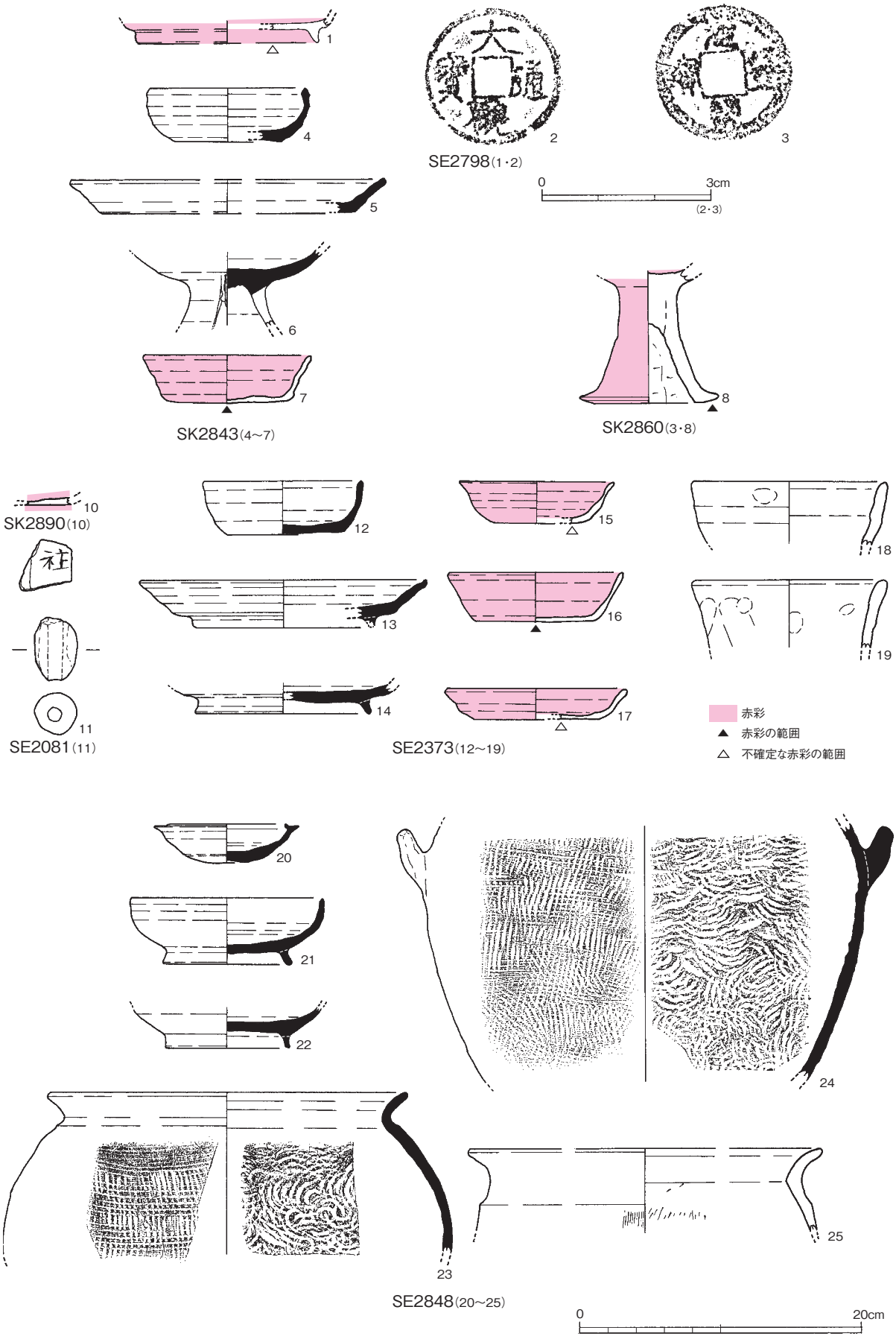


SK2402(10～13)

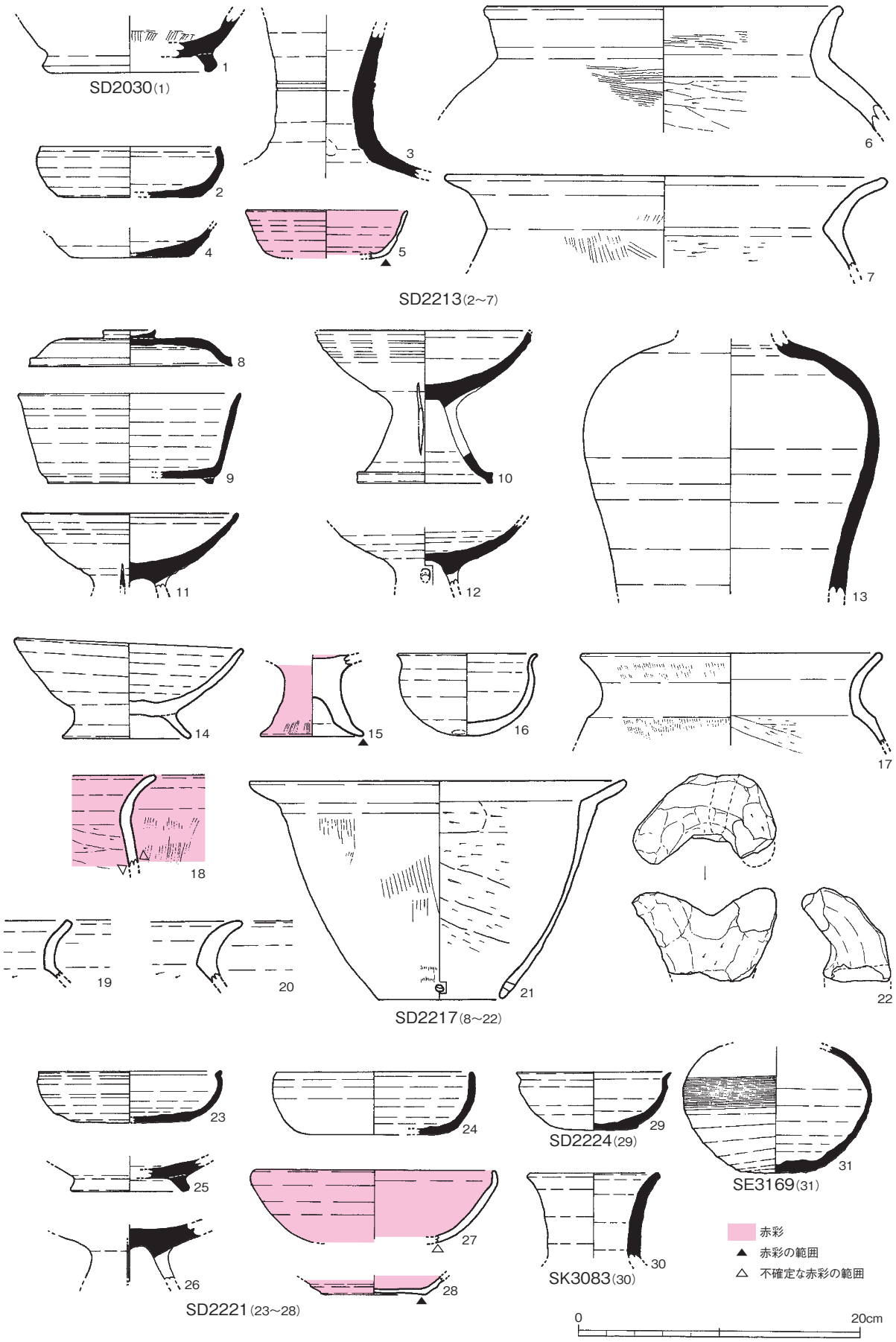


SK2566(14～18)

第222図　古代　遺構出土遺物４（1：4）



第223図　古代　遺構出土遺物５（1：4，1：1）



第224図　古代　遺構出土遺物６（1：4）

第７節　中世の遺構出土遺物

１．Ａ区の遺構出土遺物

土坑SK1104（225－２　図版102）

225－２は漆器椀である。赤漆で花を描く。

土坑SK1193（225－１　図版77・102）

225－１は柄杓である。漆器椀と角棒の柄を組み合わせる。出土時は組み合っていなかったが，図上復元した。椀体部の中ほどに一孔あけ，そこに角棒を差し込む。その反対側の口縁近くに二孔をあけ，角棒をヒモで結わえて固定する。底部外面に線刻状の傷がある。

土坑SK1198（225－３　図版102）

225－３は漆器椀である。外面底部に墨で渦巻きが描かれる。

溝SD1002（225－４～６）

225－４は須恵器の杯である。底部は回転糸切りである。225－５は土師器の柱状高台付杯である。底部は回転糸切りである。12～13世紀であろう。225－６は土師器の甕である。

２．Ｂ区の遺構出土遺物

建物SB2734（225－７・８）

225－７は白磁の皿。端反り皿（Ｅ群）である。16世紀。225－８は玉縁の白磁の椀（Ⅳ類）である。他に，龍泉窯の椀や青花皿（16世紀），時期不明の朝鮮王朝の皿がある。

土坑SK2002（226－１・２）

226－１は土師質土器の小皿（築山分類皿c類）である。226－２は土師器の柱状高台付杯である。ともに，底部は回転糸切りである。13～14世紀である。

土坑SK2003（226－３～19・22～26　図版77・102・105）

須恵器，土師器，漆器と木器が出土した。226－３は須恵器の高台付皿である。体部は外反する。高台は底部外周に付く。底部は回転糸切り。９世紀。226－４は土師質の擂鉢である。口縁は肥厚し，端部は平らである。擂り目は５条で一単位である。13～14世紀。226－５～８は，土師器である。226－５は杯である。体部は直線的にのびる。底部は回転糸切りである。内面に被熱痕がある。226－６は小皿（築山分類皿b－３類）である。底部は回転糸切り。13世紀。226－７は高台付杯である。高台は「ハ」字状に開く。底部は静止糸切り。226－８は柱状高台付杯である。底部は回転糸切り。13世紀。226－９～17は漆器椀である。226－９・11・12は内面見込みに赤漆で植物を描く。226－10は外面と内面見込みに赤漆で図を描く。226－13・15・17は外面に赤漆で植物を描く。226－14・16は無文である。底部に高台が付くものは226－９～12・15・17である。226－16は高台が付かない。226－13は底部欠損のため不明である。226－18・19は桧扇である。同形同大で，一か所孔があく。226－22は薄板。226－23･24は下駄である。一木造りの連歯下駄である。226－25はしゃもじ状木製品である。厚みは均一である。両面に焦げ痕がある。226－26は黒漆塗りの合子の蓋である。口縁は印籠口式で

ある。

土坑SK2004（227－１～３）

227－１は須恵器の高台付杯である。体部は直線的に立ち上がる。高台は底部周辺に付き，底部は回転糸切りである。９世紀。227－２・３は土師質土器である。227－２は杯である（築山分類杯B類）。体部はやや内湾しながら立ち上がる。底部は回転糸切りである。227－３は小皿である（築山分類皿b－２類）。底部は回転糸切りである。13世紀。

土坑SK2083（227－４）

227－４は土師質土器の杯である（築山分類杯A－２類）。体部はやや内湾しながら立ち上がる。底部は回転糸切りである。13世紀。

土坑SK2084（227－５・６）

227－５は須恵器の高杯である。透かしが二方向にあき，一方は三角形で，もう一方は切り込みである。７世紀。227－６は土師質の出雲焼の擂鉢である。擂り目は８条が一単位である。

土坑SK2116（227－７）

227－７は，折敷の底板と思われる薄板である。各辺の中央に孔が２つずつあく。

土坑SK2123（227－８～12）

227－８～12は土師質土器の小皿である（築山分類皿b－３，c類）。底部は回転糸切りである。227－12の口縁内面付近に煤が付着する。13世紀。

土坑SK2441（227－20）

227－20は底部に穴が穿たれた土師質土器の杯である。底部は回転糸切りである。

井戸SE2627（227－13・14　図版102）

227－13は土師質土器の小皿である（築山分類皿d類）。底部に穿孔がある。回転糸切りである。14～15世紀。227－14は須恵器の高杯である。透かしは二方向にあき，一方は三角形で，もう一方は切り込みである。７世紀。

道路状遺構SD2015（227－15～19）

227－15は須恵器の高杯である。透かしは三角形透かしが二方向にあくが，２つの透かしの間に平行する縦２本のキズ状痕がある。227－16は須恵器の耳付壺である。耳には孔があく。227－17は土師質土器の杯である（築山分類杯B類）。体部はゆるく屈曲する。底部は回転糸切りである。13～14世紀。227－18は土師器の甕である。227－19は管状土錘である。

道路状遺構SD2016（227－21～35　図版102）

227－21～23は８世紀の須恵器である。227－21は高台付杯である。体部は内湾する。高台は底部周辺に付く。底部は回転ヘラ切りである。227－22は皿である。底部は回転糸切りである。227－23は高台付皿である。底部は回転糸切りである。227－24～32は土師質土器である。227－24～26は杯である。いずれも，体部は内湾しながら立ち上がり，底部は回転糸切りである（築山分類杯B類）。227－27～31は小皿である（築山分類皿b－１類）。杯・小皿は13世紀。底部は回転糸切りである。227－32は杯である。底部は回転糸切りである。外面と底部に煤が付着する。227－33・34は土師質の擂鉢である。

227－34は口縁内面に一条の沈線を入れる。擂り目は，227－33は５条，227－34は４条で一単位である。227－35は薄板である。曲物などの底板と思われる。

墓SX2612（228－１～９　図版102・104）

228－１～３は土師質土器である。228－１は杯である（築山分類杯Ｆ－２類）。体部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切りである。228－２・３は小型の杯である（築山分類杯Ｅ－１類）。底部は回転糸切りである。これらはおおむね15世紀前後のものである。228－４～９は古銭。228－４・５は「皇宋通寶」（初鋳年は1038年・北宋）である。228－６・７は「熙寧元寶」（初鋳年は1068年・北宋）である。228－８・９は「元豊通寶」（初鋳年は1078年・北宋）である。

墓SX2685（228－10～14　図版104）

228－10～14は古銭である。228－10・11は「開元通寶」（初鋳年は621年・唐）である。228－12は「天聖元寶」（初鋳年は1023年・北宋）である。228－13は「紹聖元寶」（初鋳年は1094年・北宋）である。228－14は「政和通寶」（初鋳年は1111年・北宋）である。

３．Ｃ区の遺構出土遺物

土坑SK3091（229－１　図版102）

229－１は備前焼の擂鉢である。擂り目は７条で一単位である。乗岡編年Ⅳ期，15世紀。

土坑SK3285（229－２・３　図版102）

229－２は土師器の低脚杯である。229－３は備前焼の四耳壺である。口縁は玉縁で，肩部に耳を四か所に付ける。15～16世紀。

井戸SE3220（229－４～９）

229－４～６は須恵器である。229－４は杯である。体部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切りである。229－５は高杯である。杯部と脚の接合部に段が付く。脚部内面にしぼり目が残る。229－６は長頸壺の頸部である。これらの須恵器は８世紀前後のものである。229－７・８は瓦質土器の捏ね鉢である。229－７は片口。12世紀後半～13世紀。229－９は越前・常滑系の甕である。13世紀末～14世紀初。

井戸SE3238（229－10）

229－10は土師質土器の小皿である。底部は回転糸切りである。築山分類皿b－２類，13世紀。

溝SD3041（229－11～21）

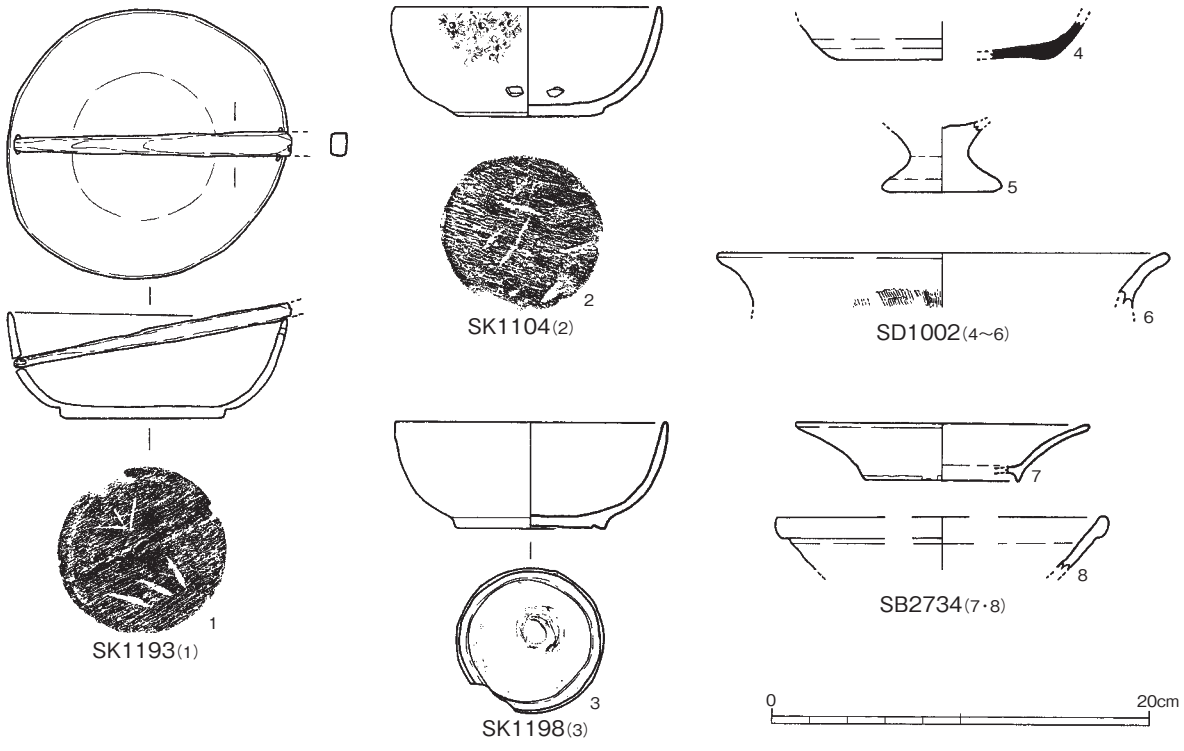
229－11は須恵器の短頸壺である。229－12～14は８世紀の赤彩土師器である。229－12は，杯である。体部は内湾し，底部はケズリ。229－13は，皿である。内面にミガキを施す。229－14は杯である。229－15は土師質土器の杯である（築山分類杯E－１類）。体部はゆるく内湾しながら立ち上がる。底部は回転糸切りである。内面に黒色の付着物がある。15世紀前半。229－16は土師質土器の小皿である。体部は外反する。底部は回転糸切りである。内面が黒変する。229－17は瓦質土器の擂鉢である。擂り目は６条を一単位とする。229－18は青磁の椀である。龍泉窯である。高台内面以外は釉薬がかかる。内面見込みに「天□」の文字が記される。15世紀。229－19・20は製塩土器である。229－21は管状土錘である。

溝SD3096（229－22）

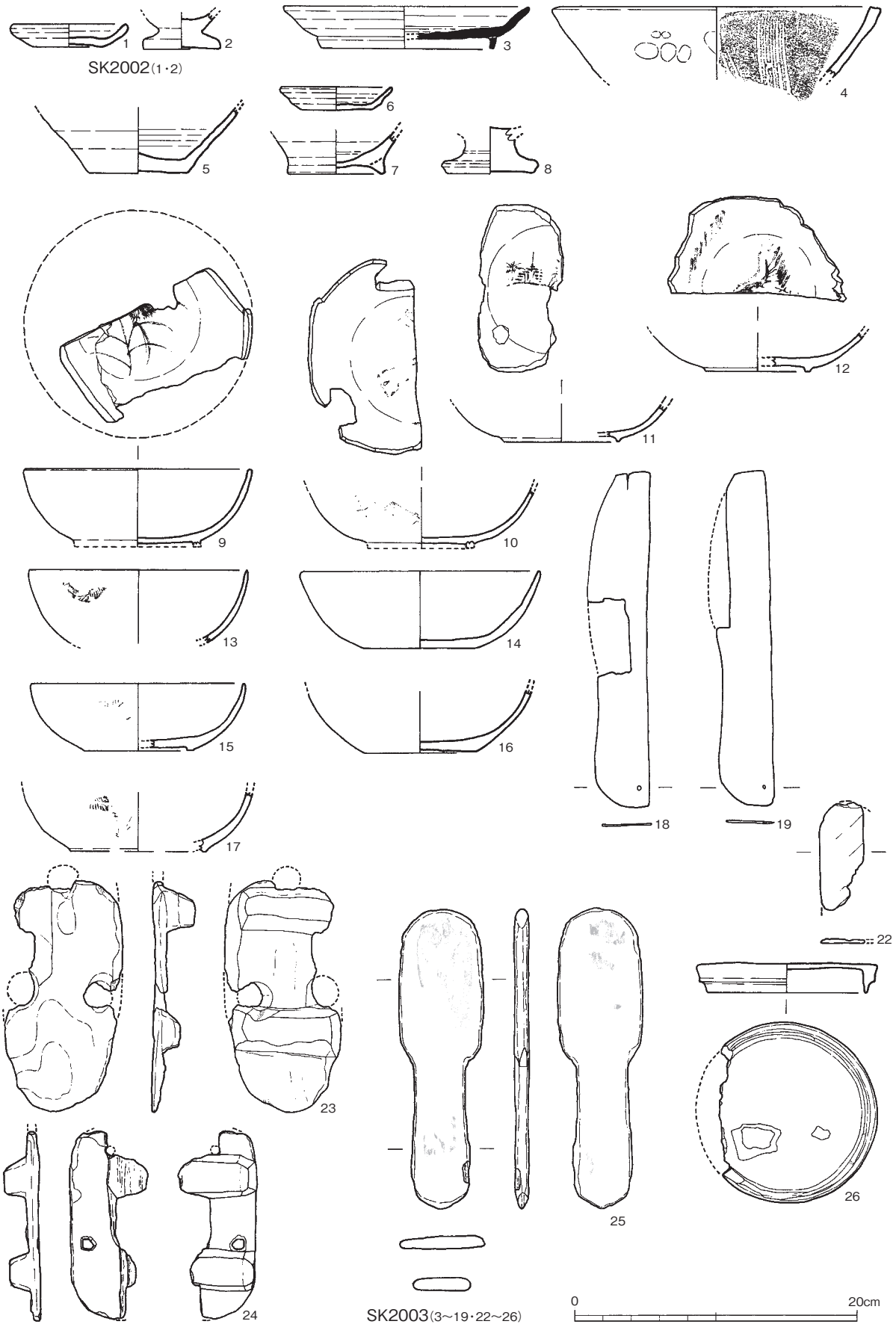
229－22は土製支脚である。後ろに突起が付く。８世紀。

墓SX3093（229－23・24　図版102）

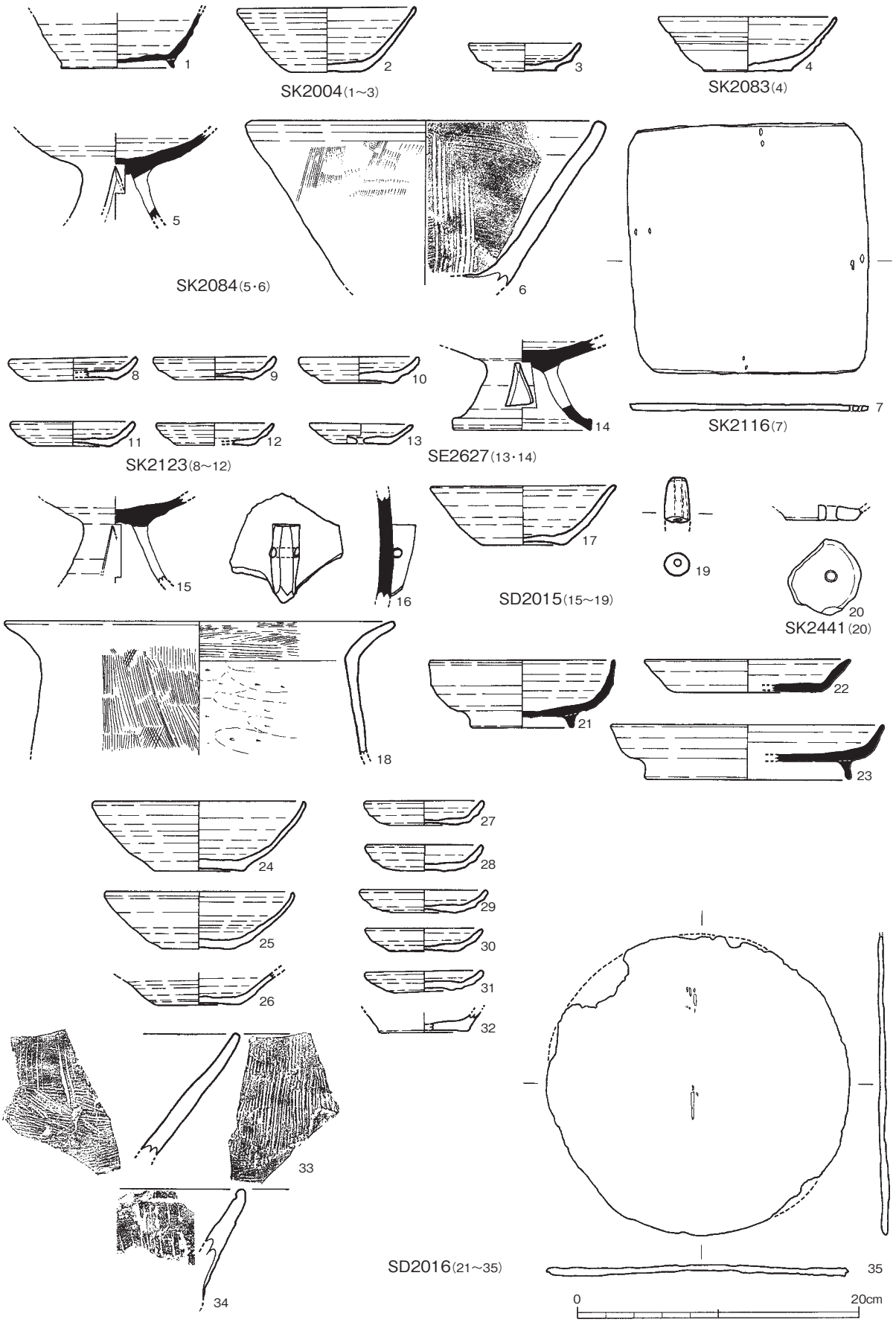
229－23は土師質土器の杯である。体部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切りである。229－24は土師質土器の杯である（築山分類杯Ｆ類）。体部は外反する。体部と底部の境をケズる。底部は回転糸切りである。15～16世紀。



第225図　中世　遺構出土遺物１（1：4）



第226図　中世　遺構出土遺物２（1：4）



第227図　中世　遺構出土遺物３（1：4）

４．Ｄ区の遺構出土遺物

土坑SK4003（230－１）

230－１は土師器の高台付杯である。高台は「ハ」字状に開く。底部は回転糸切り。10世紀。

土坑SK4016（230－３・４　図版103）

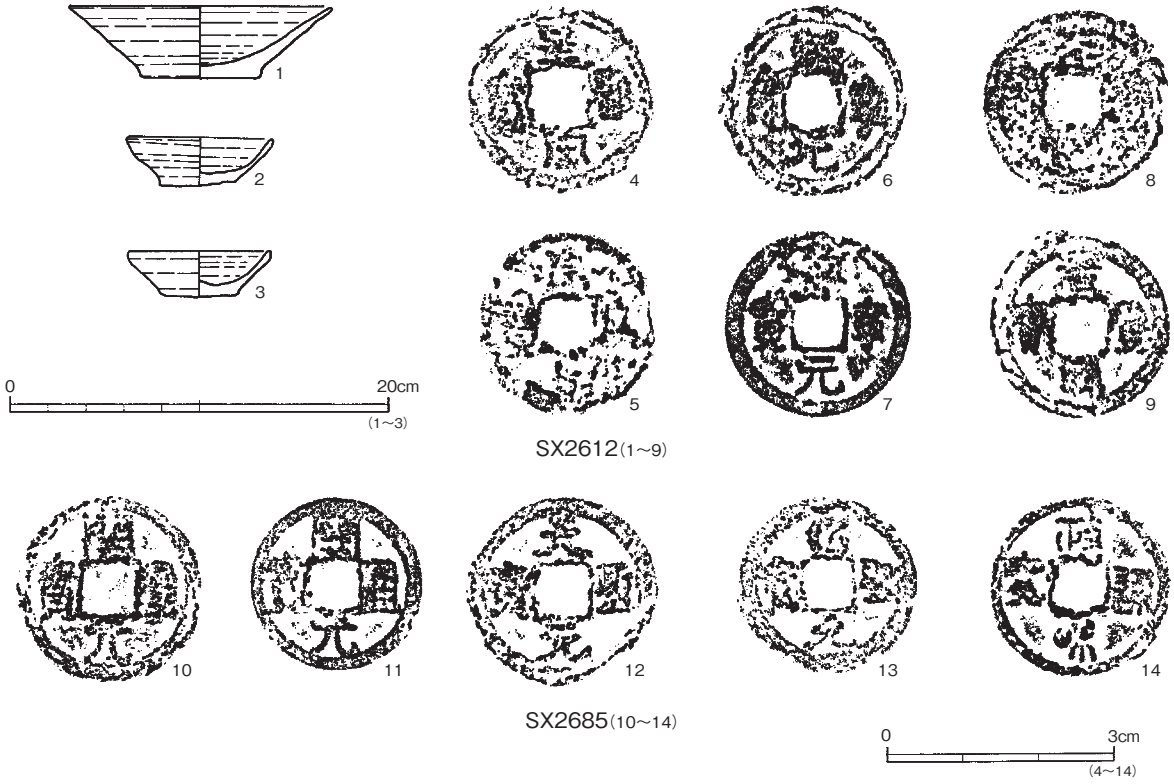
230－３は土師質土器の杯である（築山分類杯B類）。体部は内湾しながら立ち上がる。底部は回転糸切りである。13～14世紀。230－４は土師質の出雲焼の擂鉢である。擂り目は風化のため不明である。

土坑SK4031（230－２）

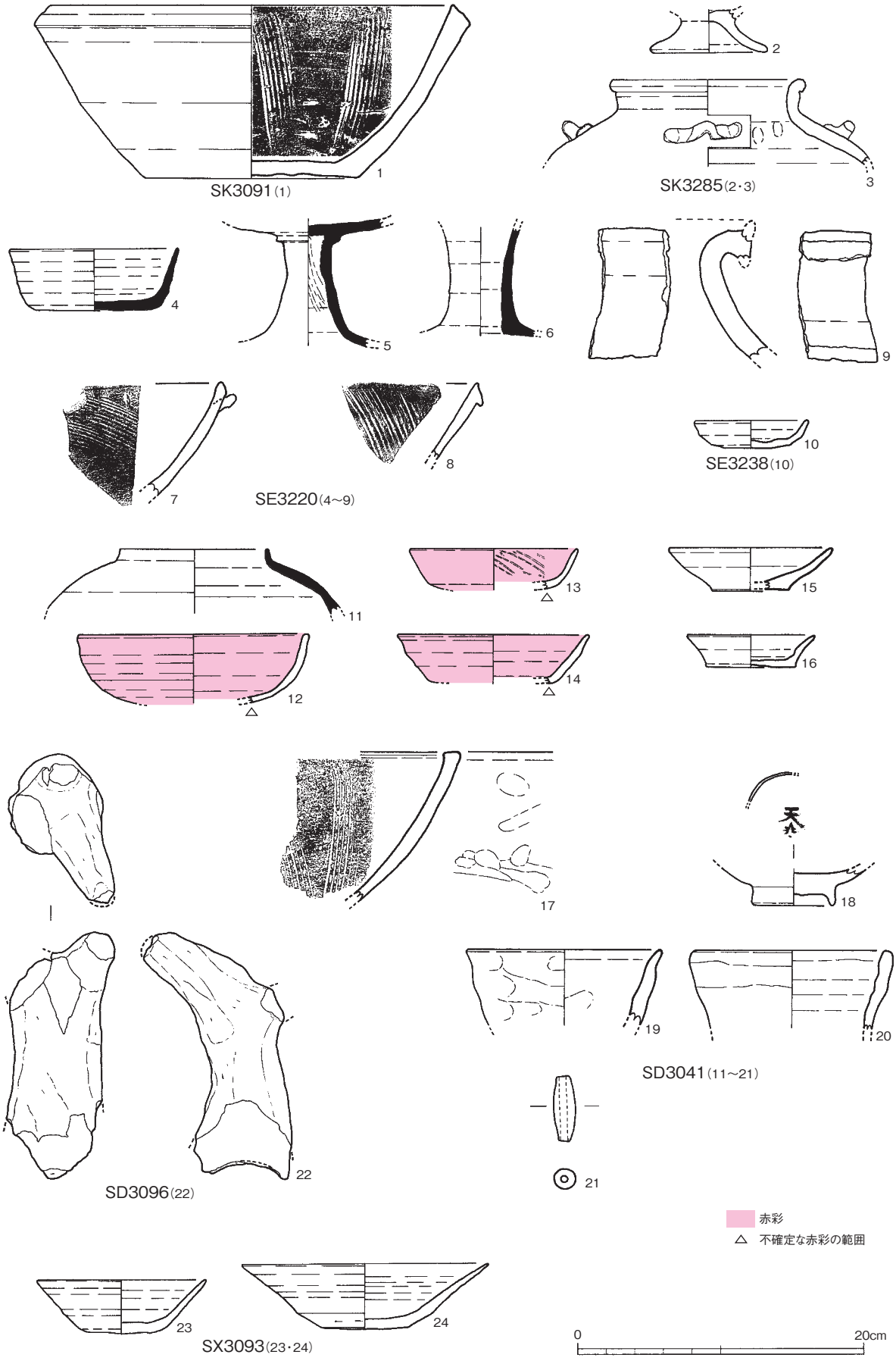
230－２は龍泉窯の青磁椀である。体部外面に粗略な蓮弁文が描かれる。龍泉窯系Ｂ２類である。13～15世紀。

土坑SK4066（230－５～７　図版103）

230－５～７は漆器椀である。230－５は体部外面に，230－６・７は体部外面と内面見込みに赤漆で植物状の文様を描く。



第228図　中世　遺構出土遺物４（1：4，1：1）

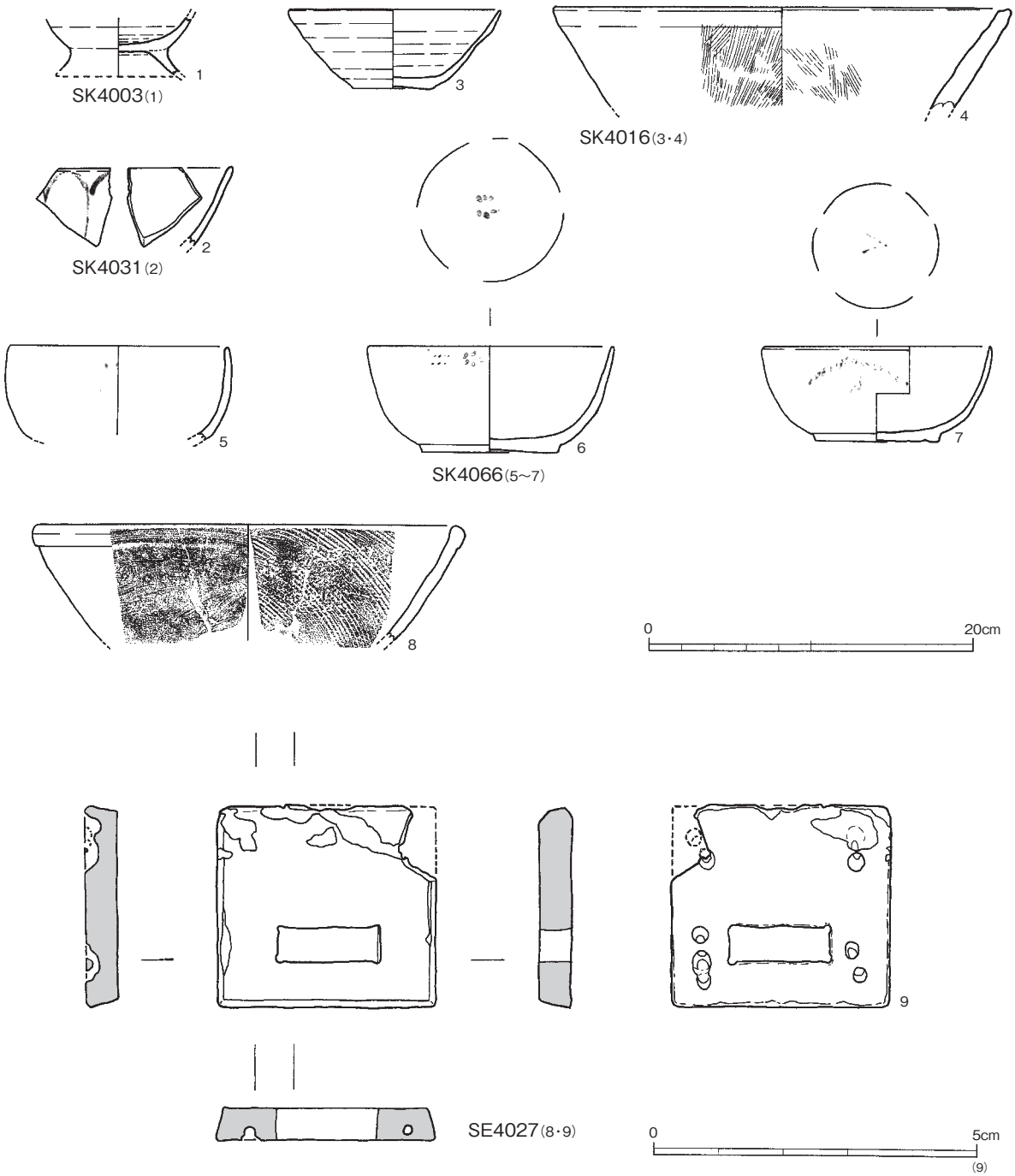


第229図　中世　遺構出土遺物５（1：4）

井戸SE4027（230－８・９　図版77・103）

230－８は瓦質土器の捏ね鉢である。口縁端部は玉縁である。230－９は腰帯具の石帯の巡方である。裏面に２孔一対の潜り孔が穿たれる。そのうちの一つは潜り孔が壊れたため孔を掘りなおしている。縦3.1㎝，横3.4㎝，厚さ0.5㎝である。重さは10gである。色調は表面と側面が濃緑色である。磨かれているため光沢がある。裏面は淡緑色，仕上げが粗い。石材は不明。

この他，12～13世紀の中国産陶器壺（？）の破片がある。



第230図　中世　遺構出土遺物６（1：4，1：1）

第８節　中世末～近世前半の遺構出土遺物

１．Ｂ区の遺構出土遺物

土坑SK2266（231－１・２　図版103）

231－１は８世紀の須恵器の杯である。体部は丸く内湾し，口縁部がわずかに屈曲する。底部の切り離し方法は不明である。231－２は漆器椀である。

土坑SK2822（231－３　図版103）

231－３は土師質土器の皿である。底部は回転糸切りである。

溝SD2625（231－４・５）

231－４は土師質土器の皿である（古志本郷分類皿C類）。底部は静止糸切り。18世紀。231－５は朝鮮王朝陶器の皿である。砂目積痕が見込みには５か所，高台の畳付には４か所ある。

溝SD2686（231－６～９　図版103）

231－６～９は下駄である。いずれも一木造りの連歯下駄である。大きさから231－８と231－９が一組と思われる。

溝SD2752（232－１・２）

232－１は白磁の端反り皿である。232－２は肥前系陶器の壺である。肩部外面に粘土紐を貼り付け，指で押しつぶした突帯が付く。肩部から体部内面は同心円文のあて具痕がある。17世紀。被熱している。

溝SD2841（232－３～９　図版78・103・104）

232－３は土師質土器の皿である。底部は回転糸切りである。232－４は肥前系陶器の呉器手椀である。体部外面下半は被熱している。232－５は瀬戸・美濃系の天目茶椀である。16世紀。232－６は肥前系陶器の皿である。溝縁皿で，見込みに目積み痕が輪状に残る。17世紀。232－７は肥前系陶器の絵唐津の皿である。見込みに植物が描かれる。232－８は肥前系陶器の鉄絵緑釉の大鉢である。17世紀。232－９は備前焼の壺である。口縁端部は外反し，肩部に波状文が施される。時期不明。この他に，12世紀の白磁椀や15世紀の龍泉窯系青磁椀，朝鮮王朝陶器などが出土した。

墓SX2806（232－10～13）

232－10～13は土師質土器である。いずれも底部は回転糸切りである。232－10は杯（築山分類杯E－１類）で，232－11～13は小皿（同・皿e－１類）である。16世紀。

２．Ｄ区の遺構出土遺物

土坑SK4053（232－14）

232－14は土師器の甕である。８世紀。

土坑SK4057（232－15　図版103）

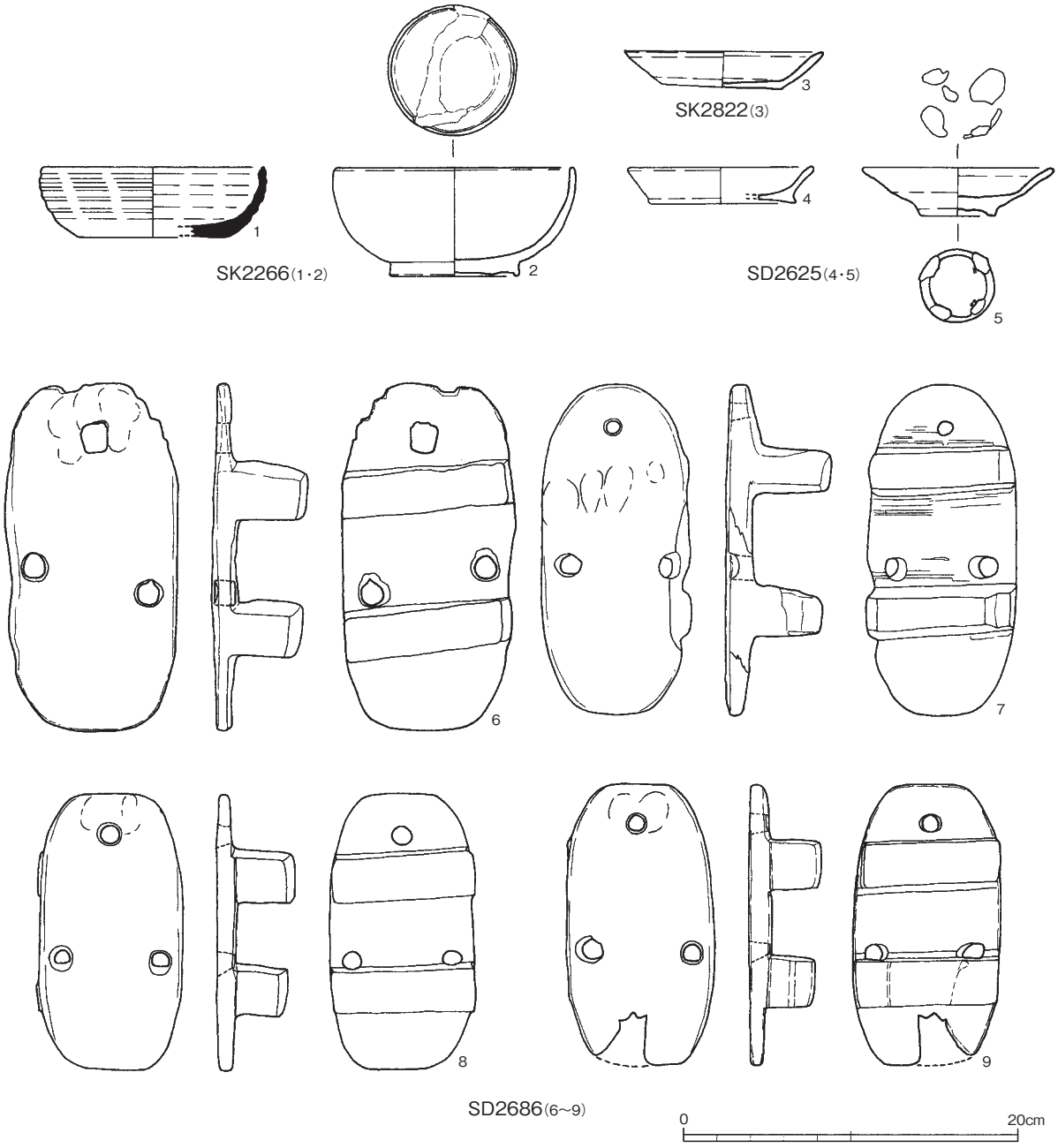
232－15は土師質土器の杯である（築山分類杯A類）。体部はやや外反する。底部は回転糸切り。13世紀。

土坑SK4078（232－16　図版104）

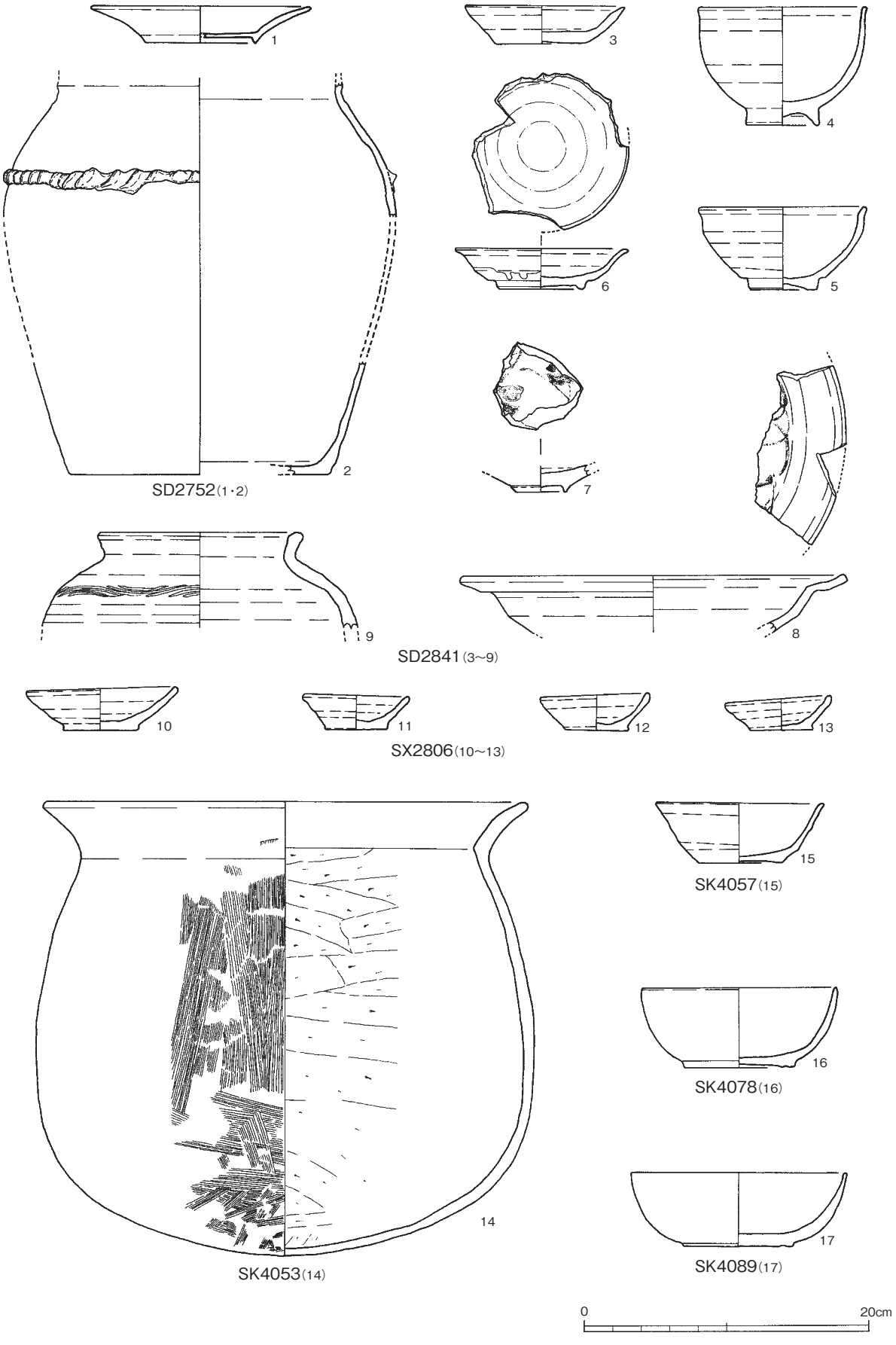
232－16は漆器椀である。

土坑SK4089（232－17　図版104）

232－17は漆器椀である。



第231図　中世末～近世前半　遺構出土遺物１（1：4）



第232図　中世末～近世前半　遺構出土遺物２（1：4）

第９節　近世以降の遺構出土遺物

１．Ｂ区の遺構出土遺物

建物SB2731（233－１～３　図版78）

233－１・２は青花である。233－１は皿である。内外面に文様を施す。碁笥底である。C群である。233－２は皿である。内外面に文様を施す。碁笥底である。C群である。233－３は肥前系陶器の皿である。銅緑釉である。高台の畳付から内側は露胎である。

土坑SK2883（233－４～14　図版78）

233－４は青磁の高台付椀である。233－５は青花の皿である。内外面に文様を施す。碁笥底である。C群である。233－６～９は朝鮮王朝陶器である。233－６は椀である。砂目積痕が，見込みに４箇所，高台に５箇所残る。233－７は椀である。砂目積痕が，見込みに４箇所，高台に４箇所残る。233－８は椀である。砂目積痕が，見込みと高台に５箇所残る。233－９は椀である。砂目積痕が，見込みと高台に４箇所残る。233－10は肥前系の灰釉皿である。砂目積痕が，高台内に輪状に，畳付に３箇所残る。削り出し高台である。233－11は瀬戸･美濃系の皿である。端反りである。削り出し高台である。砂目積痕が，底部外面に３箇所残る。233－12は備前焼と思われる壺である。口縁は玉縁である。233－13は土師質の香炉である。体部に菊のスタンプ文をめぐらす。脚は３足である。口縁端部内面に黒い付着物が認められる。内面と底部外面はハケメ，外面はナデ。233－14は備前焼の擂鉢である。擂り目は５条で一単位である。

井戸SE2372（233－15　図版104）

古銭が２枚出土。233－15は「寛永通寶」（初鋳年は1636年･日本）のうち，３期新寛永（1697～1747年，1767～1781年）である。拓影は掲載していないが，もう１枚も新寛永で，233－15とは書体が異なる。

井戸SE2633（233－16～19　図版78・104）

233－16は土師質土器の杯である（築山分類杯Ｆ－３類）。体部は外反する。底部は回転糸切り。16世紀。233－17は龍泉窯系D群の青磁皿である。15～16世紀前半。233－18は朝鮮王朝陶器の皿である。砂目積痕が見込みに２箇所と高台に３箇所のこる。15～16世紀前半。233－16～18は井戸枠掘形から出土した。233－19は須佐焼の陶器の擂鉢である。擂り目は８条で一単位。17世紀後半以降で，井戸埋土の最上層出土。古銭が１枚出土している。「熙寧元寶」（初鋳年は1068年・北宋）である。

溝SD2861（233－20～25　図版78）

233－20～22は土師質土器。233－20は杯である。体部が直線状に立ち上がる。底部は回転糸切りである。233－21は杯である。体部は直線状に立ち上がる。底部は回転糸切りである。233－22は小皿である。底部は回転糸切りである。17世紀。233－23は肥前系磁器である。233－23は小杯である。口縁端部は端反りである。233－24・25は肥前系陶器の皿である。233－24は砂目積痕が見込みに円形状に残り，高台内側にも痕跡がある。233－25は見込みに胎土目が４か所ある。17～18世紀。

溝SD2344（234－１～14　図版78）

234－１～３は土師質土器である。234－１は杯である。体部は強く外反する。底部は回転糸切り。

234－２・３も杯である。体部は外反する。底部は回転糸切り。234－１～３は16世紀であろう。234－４は肥前系陶器の椀である。高台の畳付に砂目積みの砂が付着する。17世紀後半以降。234－５は肥前系陶器の皿である。砂目積痕が見込みに３箇所あり，高台の内側に砂が付着する。234－６は瀬戸・美濃系磁器の皿である。底部に砂目積みの砂が１箇所付着する。砥石に転用されている。15～16世紀前半。234－７は肥前系陶器の灰釉皿である。見込みに重ね焼きの痕跡が残る。高台外面と底部には砂目積みの砂が付着する。234－８は瓦質土器の捏ね鉢である。12～13世紀。234－９は備前に似せた地元産の土師質の擂鉢である。擂り目は５条で一単位。234－10は瓦質土器の擂鉢である。15～16世紀。擂り目は９条で一単位である。

234－11は須佐焼の陶器の擂鉢である。擂り目は10条で一単位である。234－12は赤漆塗りの高台付皿である。見込み中央に穿孔がある。底部外面は赤漆は塗布されていない。底部には「大」の線刻がある。234－13・14は折敷の底板である。大きさが若干異なるが，縁に沿って２孔一対の穴があく。両者とも無数の傷が残る。

２．Ｃ区の遺構出土遺物

土坑SK3036（234－15～20　図版78・104）

234－15～18は肥前系陶器の皿である。234－15は底部外面が盛り上がる。17世紀後半以降。234－17は砂目積痕が見込みに４箇所あり，高台の畳付に４箇所ある。234－16・18は灰釉皿である。234－16は内面に文様がある。砂目積痕が見込みに輪状に残り，高台内外面に砂が広く付着する。234－18は口縁端部が屈曲する。234－19は瓦質土器の香炉である。体部に雷文帯が２段施される。それぞれ２条の沈線の間にスタンプで雷文が配されるが，上の段は密に，下の段は間隔をおく。スタンプは上の段と下の段では，天地を逆にしている。脚は３足である。内面と底部外面はナデ，体部外面はミガキである。234－20は凝灰岩製の方形火鉢である。四隅に足が付く。17世紀後半以降であろう。

土坑SK3066（234－21～23　図版104）

234－21･22は土師質土器の小皿である。口縁部の内外面に煤が付着する。底部は回転糸切り。18世紀。234－23は古銭。「紹□□寶」。

井戸SE3035（234－24・25　図版78）

234－24は土師質土器の小皿である（古志本郷分類皿C類）。底部は回転糸切り。18世紀。234－25は肥前系陶器の輪花形灰釉皿である。17世紀前半。

墓SX3076－１（234－26）

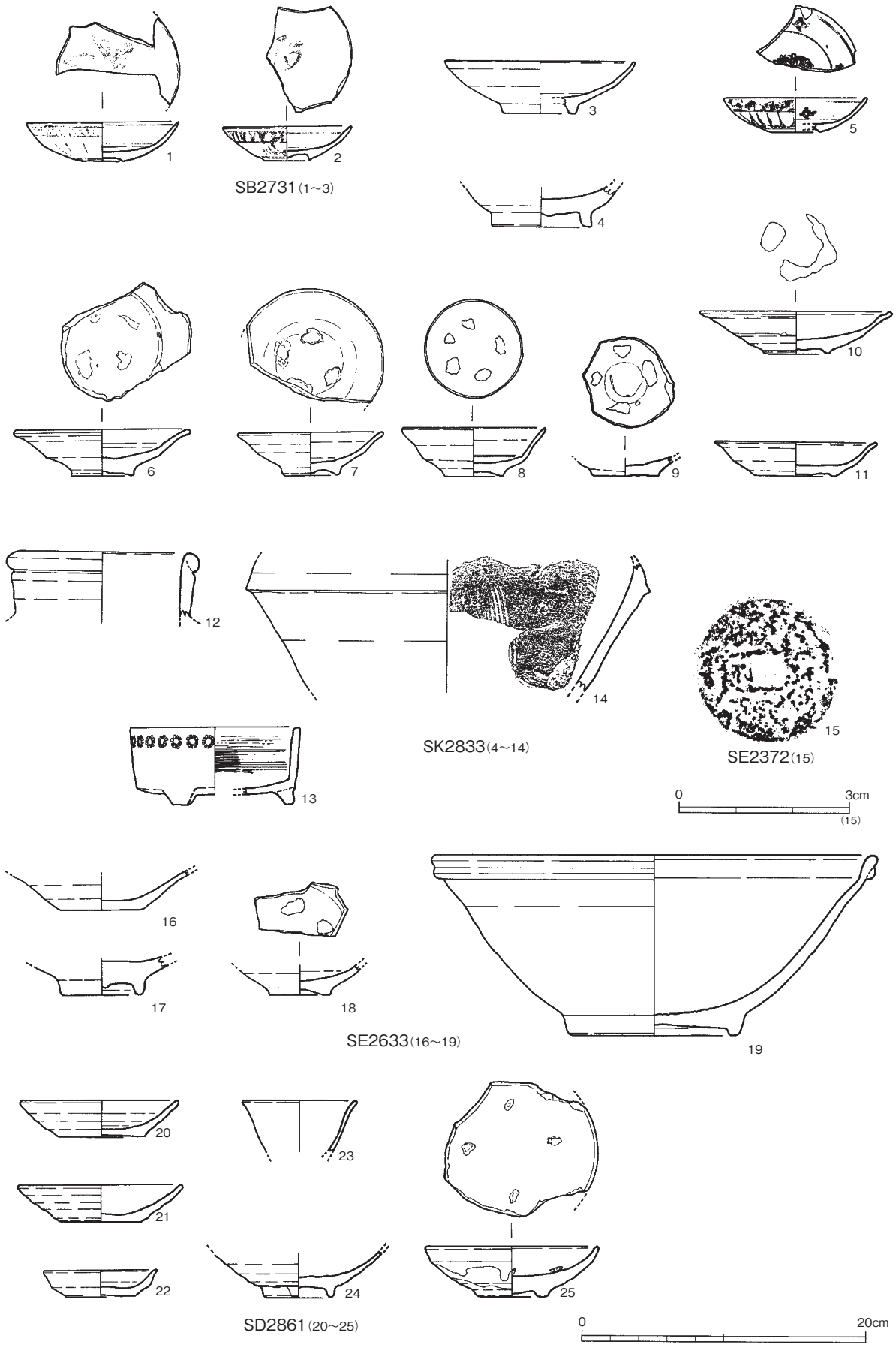
234－26は土師質土器の小皿である。ヘラ切りと思われる。17世紀。

墓SX3076－２（234－27～29　図版78・104）

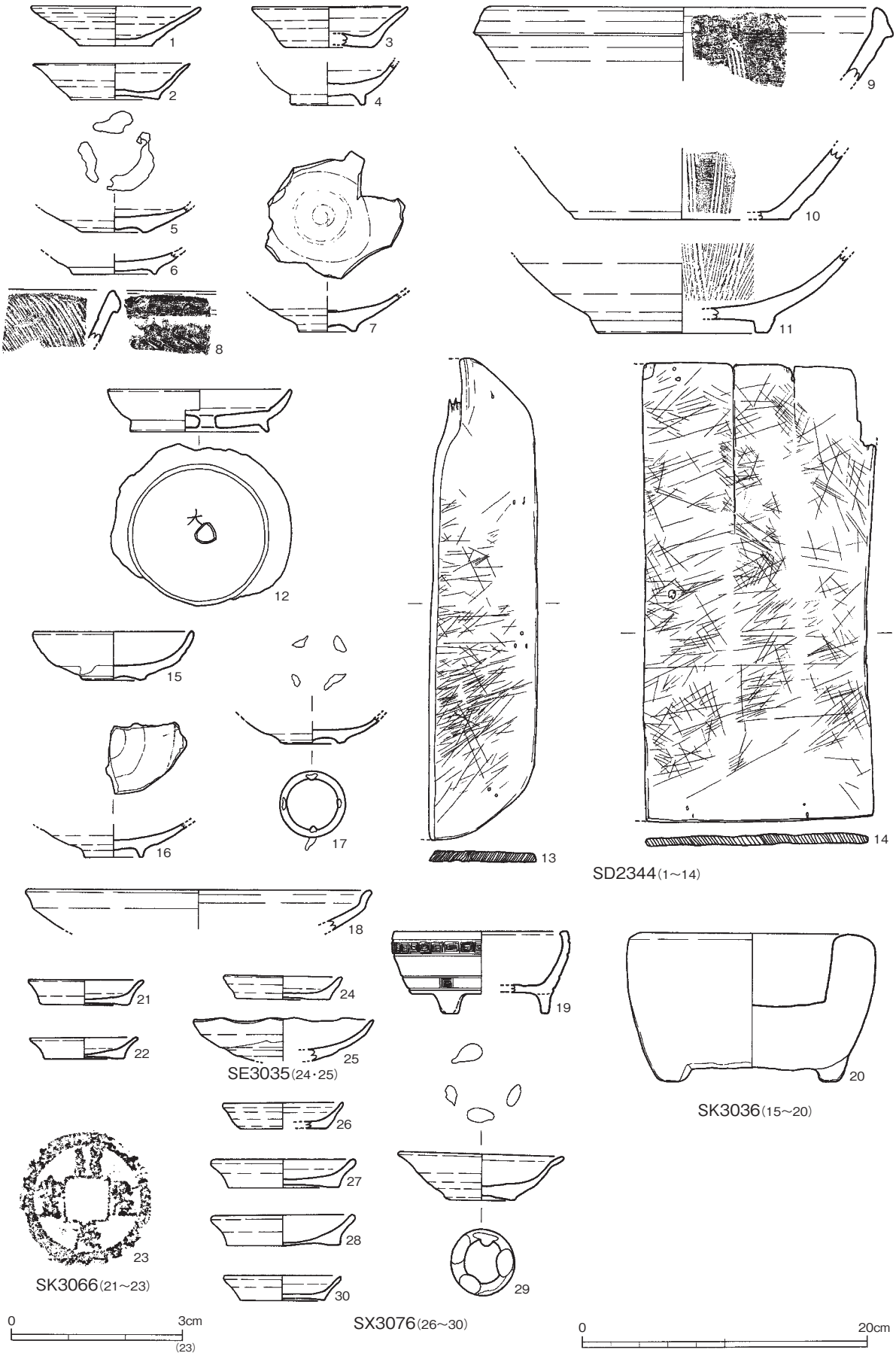
234－27・28は土師質土器の小皿である。静止糸切り。18世紀。234－29は肥前系陶器の灰釉皿である。砂目積痕が見込みに４か所あり，高台の畳付に４か所ある。17世紀前半。

墓SX3076－３（234－30）

234－30は土師質土器の小皿である。回転糸切り。18世紀。



第233図　近世以降　遺構出土遺物１（1：4，1：1）



第234図　近世以降　遺構出土遺物２（1：4，1：1）

出雲市の文化財報告10

矢野遺跡　遺構編（第１分冊）

新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年（2010）３月

編　　集：出雲市文化企画部　文化財課
〒693-0011 島根県出雲市大津町2760
ＴＥＬ（0853）21-6893

発　　行：出雲市教育委員会
〒693-8530 島根県出雲市今市町70
ＴＥＬ（0853）21-6874（代表）

印刷　製本：柏村印刷株式会社